

紀貫之の文芸に関する研究

水谷隆

目次

はじめに	1
第一部 紀貫之の和歌創作の態度	
第一章 万葉集の利用の方法	
第一節 自作の歌に用いうる古風な表現の素材集として	3
万葉歌の表現を求める方法	3
第二節 万葉歌の表現を自らの表現として使いこなし、 様々な歌を生み出す方法	19
第二章 漢詩文表現利用の態度	
第一節 実験的な漢詩文表現の摂取 — 「浮き沈む玉」を例に	34
第二節 万葉集との態度の違い — 「流るる雪」を例に	45
第二部 新撰和歌に関する研究	
第一章 新撰和歌の性格	
第一節 一首のみで鑑賞に堪える、完結した歌の集成	56
第二節 集の構成、歌の配列による鑑賞の指示	78
第三節 「相闘」・「対偶」という配列方法の意味するもの	92
第二章 新撰和歌の編纂の意図	
第一節 天皇の徳をたたえる意識 — 春秋巻冒頭の歌について	110
第二節 規範性を重んじる姿勢 — 夏冬巻冒頭の歌について	125
第三節 歌集としての完成度のこと — 恋の歌の配列について	138
第三部 土佐日記と新撰和歌からみる紀貫之の文芸観	
第一章 官人としての歌 — 人麻呂の私的感情を歌う表現	154
第二章 〈宮廷歌人〉の継承 — 土佐日記の態度と新撰和歌	162
第四部 新撰和歌注釈稿	173
初出および原題一覧	594

はじめに

紀貫之は、古今和歌集の編纂を主導し、また、後代の女流日記文学の先蹤となる土佐日記を創作するなど、平安時代以後の日本の文学史に大きな影響を与えた人物である。そして、それら作品の及ぼした影響は文芸の範疇にとどまらない。たとえば、古今集の四季の歌を収めた巻々によって提示された季節感が、やがて日本人の感性の一部に組み込まれていったことに象徴されるように、貫之の文芸は日本文化について考える上でも、重要な意味を持つと言えよう。

本研究の関心の中心は、そのような意義を持つ貫之の文芸が、どのようにして生み出されたのかということにある。古今和歌集にせよ土佐日記にせよ、それ以前の文芸とは大きく異なるところのある、いわば画期的な存在である。そのような作品が、なぜ、どのようにして創り出されたのか、少しでも解明したいと思う。そしてそのことは、前述のように、現代の日本の文化の一つの源流を明らかにする試みでもあるだろう。そこに本論文の意義を求めたいと思う。この目的のために、貫之の作品から彼の文芸に対する態度、そして彼が目指していたものをどれだけ見て取れるか、作品本文をあたう限り精密に読解するという方法で試みた。

第一部では、古今風の成立に大きな影響を及ぼしたとされる万葉集と漢詩文の表現を、貫之が、どのような態度で摂取していたのかについて考察した。そのことで、なぜ彼が古今風という新しい歌風を創り得たのかということの一端を明らかにできると思うからである。第二部では、新撰和歌の読解を中心に論を進めた。同書は古今集に比べて、後代への影響の乏しさに由来するのであろうが、あまり研究が進められているとは言えない。しかし新撰和歌は、貫之がその晩年に単独で「花実相兼」（同書序）と考える歌を厳選して編んだ歌集であり、これの読解作業は、貫之の文芸が最終的に目指していたものを知るための大きな手がかりになると考えられるからである。また、第三部では、土佐日記の制作意図に関して考察を加えた。それは、土佐日記が新撰和歌と同じ時期に執筆されたものであり、貫之の文芸活動の意図を探るためには、両者を総合的に考えなければならないと思うからである。

なお、本論文の第四部に新撰和歌の注釈を据えたことについては、少し私の考えを述べておきたい。たとえば古今集のように、詞書と作者名を有する歌を鑑賞すること、すなわち、ある歌を、詞書の記載を手がかりにそれが詠まれた場に置いて鑑賞するという

ことは、言語を通じて詠み手の経験を追体験しようという作業である。したがって、古今集の歌を読み解く作業ならば、それは古今集という歌集を理解する作業であると同時に、それぞれの歌一首ずつの詠まれた場に参入する営みでもある。一方、新撰和歌は詞書も作者名も記さない。それらの情報なしで歌を読み解くということは、一首に記された言葉を、読み手の経験と知識のみに基づき、読み手の有する文脈に置いて理解するというところに他ならない。新撰和歌はもとあつた詞書と作者を抹消したのだが、そのことで貫之は、彼の考える文脈でもって歌を理解し、位置づけ、新撰和歌を編纂したということである。ならば、新撰和歌の歌を読解する営みは、そのまま編者である紀貫之の意図を読み解く試みということになる。そのように考えて私は、新撰和歌の注釈を試み、また、貫之の文芸に関する研究の一部として位置づけた。

なお、論文中で引用した和歌本文は、特に断らない場合は『新編国歌大観』により、適宜漢字、仮名の表記を改めた。ただし万葉集については、第一部第一章では、本文と訓を西本願寺本によって示した。この章は貫之の万葉歌撰取の態度を明らかにすることが目的であるため、貫之が目にしていた万葉集に近いだろうものとして便宜的にこれを用いたのである。以後の章では、これも便宜として日本古典文学全集『万葉集』の訓を示した。歌番号は旧国歌大観のものである。その他の引用については、その都度注記した。引用の際、私に漢字をあてるなど、適宜改めたところがある。

## 第一部 紀貫之の和歌創作の態度

第一部では、紀貫之がどのような態度で和歌の創作に臨んでいたのか、万葉集と漢詩文の表現を利用する際の具体的方法を見ることで、その一端を明らかにしたい。

### 第一章 万葉集の利用の方法

本章では、貫之が万葉集をどのように利用していたのか、その実態と利用に際しての態度について考える。初の勅撰和歌集の編纂を任された紀貫之にとって、既存の和歌の集として最大の、そして、古今集の序文からもうかがえるように、彼が最も意識していたと思われる歌集が万葉集である。その一方で万葉集は、貫之の時代には、一般には顧みられることの少ない存在であつたらしい。

彼は、いわゆる万葉風とは隔絶するとも見られる古今風の歌風を創り上げた人物の主要な一人であるが、自身の和歌創作に当たっては、万葉歌（以下、万葉集に収められている歌の意で用いる。）を様々に利用していたようである。彼が万葉集を、どのように利用し、どのように自詠に生かしていったのかを明らかにすることは、彼の和歌創作の態度を考える上で重要なポイントになるだろう。

#### 第一節 自作の歌に用いうる古風な表現の素材集として万葉歌の表現を求める方法

##### 1 貫之の時代と万葉集

紀貫之が万葉歌を利用して詠んだと思われる歌は、既に契沖の『古今余材抄』等によって多くの例が指摘されている。そして安田喜代門氏が、古今集読み人知らず歌には万葉集の時代以来謡い伝えられたものがあるのではないかと指摘されて以来、貫之たち古今集の時代の歌人が万葉歌を受容していった、その媒の一つとして、これら詠人知らず歌などの伝承された歌が考えられてきた。一方、金子元臣氏が『古今和歌集評釈』で、貫之の

白雪のふりしく時はみよしのの山した風に花ぞちりける （古今集 賀 三六三）

の第四句「山した風」を、万葉歌の「山下風」(卷一 七四・卷八 一四三七等)の「訓み違へより起りて一つの詞とはなれるものならし」と注されたように、後世の人が漢字により表記された万葉歌を目にすることによって生じたと思われる歌語についても注意されてきた。この万葉歌の「訓み違へ」による歌語の成立の具体的な事例については、奥村恒哉氏にも御論考がある<sup>注2</sup>。このことから、貫之たちが書物としての万葉集を学んでいたという推測も成り立つだろう。また、受容の経路はともかく、古今集の時代の歌人たちが万葉歌の言葉を競って詠んでいたことが片桐洋一氏によって明らかにされている<sup>注3</sup>。また、中西進氏は、貫之に意図的に万葉歌を利用して和歌を詠むという手法のあることを述べておられる<sup>注4</sup>。では、貫之は何を意図してこのように積極的に、そしてどのような方法で万葉歌を撰取したのだろうか。以下、紀貫之の、万葉歌の影響を受けたと思われる歌を見ながら、この問題について考えてみたい。

## 2 万葉集歌の表現の自覚的利用

(延喜十四年十二月女四宮御屏風のれうのうた)

いかにしてかずをしらましおちたぎつ滝のみをよりぬくる白玉 (貫之集 三三)

この歌の第三句は、白い飛沫をあげて勢いよく流れる滝を表現しようとして、

山高三 白木綿花 落多芸追 滝之河内者 雖見飽香聞

(万葉集 卷六 九〇九 他に卷七 一一二七等に見られる。)

これらの多くの万葉歌に見られる「おちたぎつ」という言葉を利用したのである。次の例も同様である。

(延喜五年二月いづみの大将四十賀屏風の歌) 雪のふりたるどころ

しら雪のふりしく時はみよしの山した風に花ぞちりける (貫之集 二)

この歌の第四句「山した風」は、山裾の雪を舞いおどらせる風のことをいうのに、先に引用した金子元臣氏の御指摘のとおり、

見吉野乃 山下風之 寒久尔 为当也今夜毛 我独宿牟

(万葉集 卷一 七四・他、卷八 一四三七等)

などの言葉を利用したものでしょう。なお、この貫之歌の初・二句の表現も、

白雪能シラユキノ 布里之久山乎フリノキヤマヲ 越由加牟コユユカム 君乎曾母等奈キミヲソモトナ 伊吉能乎尔念イキノヲニオモフ

(万葉集 卷十九 四二八二)

このように万葉歌に見られるものである。今示した二首は貫之の作品では前半期の、各々四十三歳注、三十四歳頃の作である。そして、このような万葉歌の言葉を撰取しようとする試みは、彼の晩年に至るまで見られる。

(同じ年「天慶二年―私注」さいさうの中将屏風の歌 野やどりせるたび人)

いつとてもおもはざらめど君かけて家恋ひしきはたびにざりける (貫之集 四五六)

これは、貫之六十八歳の作である。この歌の第四句「家恋ひし」や、同じ天慶二年の詠、

(同年「天慶二年―私注」閏七月右衛門殿屏風のれう 一月初午いなりまうで)

うちむれてこえ行く人のおもひをば神にしまさば知りもしぬらん (貫之集 三九九)

の第四句「神にしまさば」は各々、

皇者スメロキハ 神二四座者カミニシヤセバ 天雲之アマクモノ 雷之上尔イカツチノウヘニ 廬為流鴨イホリスルカモ

(万葉集 卷三 一三二五・他、卷十九 四二六一等)

安可等伎能アカトキノ 伊敝胡悲之伎尔イヘコヒシキニ 宇良末欲理ウラマヨリ 可治乃於等須流波カヂノオトスルハ 安麻乎等女可母アマオトメカモ

(万葉集 卷十五 二六四一・他卷十 二二四五等)

など、万葉歌の特徴的な言葉を利用したものと見られる。貫之はこのような、いわば万葉的な言葉を古風なものとして他とは区別して意識的に用いていたと思われる。そのように考えるのは、一首全体を万葉的な言葉で統一した歌が見られることによる。自らの使用できる語彙のうちから万葉的な、古風な言葉を特に選び、使用するということは、万葉的な言葉と、そうでないものとの区別がなされていなくてはならないはずである。

(延喜十四年十二月女四宮御屏風のれうのうた 夏)

さはべなるまこもかりそけあやめ草袖さへひちてけふやくらさん (貫之集 三六)

この歌は、次にあげるような万葉歌の言葉によって詠まれたものと思われる。

真薦苺マホモカサ 大野川原之オホノガハラノ 水隠ミヅモリニ 恋来之妹之コヒコシイモガ 紐解吾者ヒモトクワレハ (万葉集 卷十一 二七〇三)

「まこも苺る」という言葉は三代集の時代にはほとんど例を見ないものである。また、

吾背子尔ワカセコニ 吾恋良久者ワカコラクハ 夏草之ナツクサノ 苺除十方カサノクドモ 生及如オシシクガゴト (万葉集 卷十一 二七六九)

の「苺りそく」も同様である。

風高カゼタカミ 辺者雖吹ヘニハフケドモ 為妹イモガタメ 袖左倍所沾而ソデサヘスレテ 苺流玉藻焉カサレタマモソ (万葉集 卷四 七八二)

の「袖さへぬる」も、万葉歌を除く貫之以前の歌には例の少い言葉である。その「ぬれて」を「ひちて」に改めて用い、また、

奥山之オクヤマノ 八峰乃海石榴ヤツフノツバキ 都婆良可尔ツバハラカニ 今日者久良佐祢ケフハククラサネ 大夫之徒マスラフノトモ

(万葉集 卷十九 四一五二)

の「今日を暮らす」も、同様に万葉歌の表現である。このように、貫之の「さはべなる」歌を構成する主要な言葉は万葉歌に見られるものである。もう一例示せば、

おもひかねいもがり行けば冬おもひかねいもがり行けばの夜冬の川風さむみ千鳥鳴くなり (貫之集 三三九)

この歌も、先の例と同様に、

珠衣乃タマキヌノ 狭藍左謂沈ササキサキシツミ 家妹尔イヘノイモニ 物不語来而モノイハズキテ 思金津裳オモヒヒメノ (万葉集 卷四 五〇三)  
露霜尔ツユシホニ 衣袖所沾而コソモテスレテ 今谷毛イマヅニモ 妹許行名イモガユカナ 夜者雖深ヨハハフアストモ (万葉集 卷十 二二五七)  
吾背子我ワカセコガ 古家乃里之イニヘノサトノ 明日香庭アスカニハ 乳鳥鳴成チドリナガカリ 孀待不得而ツマヤシガホニ (万葉集 卷三 二六八)

(万葉集 卷三 二六八)

これらの言葉と恋のイメージを自在に取り入れて構成したものと考えられる。さらに「冬の夜」という言葉を単なる叙景歌ではなく、恋の歌の場の設定として詠むことも、貫之が万葉歌から学んだことであるという指摘も三木雅博氏によってなされている<sup>注9</sup>。では、いったい彼は何を意図してこのように万葉歌の言葉を利用したのだろうか。一つは作歌の素材としての言葉の幅を拡張しようという試みであったことが考えられる。しかし、それだけではないと思われる。今あげた「おもひかね」歌について、片桐洋一氏が「用語、歌体が万葉的であることによつて、一時代前の、いわば物語世界の表現たることを示しており」<sup>注10</sup>



と述べておられるが、貫之は通常の和歌表現では使用されることのない古い言葉を使用することによって、この和歌の世界に非日常的イメージをもたせようとしたのではないだろうか。そうすることによって、恋の歌であれば物語の世界のごとき、叙景の歌であれば幻想的な世界のごときイメージを構築しようとしたのだと思われる。

### 3 万葉集の歌の利用の態度

古今集に収められた貫之の歌

三<sup>ミ</sup>輪<sup>リン</sup>山<sup>サン</sup>を<sup>ヲ</sup>しか<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>く<sup>ク</sup>す<sup>ス</sup>か<sup>カ</sup>春<sup>ハル</sup>霞<sup>カスミ</sup>人<sup>ヒト</sup>に<sup>ニ</sup>し<sup>シ</sup>ら<sup>ラ</sup>れ<sup>レ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>花<sup>ハナ</sup>や<sup>ヤ</sup>さ<sup>サ</sup>く<sup>ク</sup>ら<sup>ラ</sup>む (古今集 春下 九四)

は、額田王の、

三<sup>ミ</sup>輪<sup>リン</sup>山<sup>サン</sup>乎<sup>カ</sup> 然<sup>シカ</sup>毛<sup>モ</sup>隠<sup>カク</sup>賀<sup>カ</sup> 雲<sup>クモ</sup>谷<sup>タニ</sup>裳<sup>モ</sup> 情<sup>コト</sup>有<sup>アラ</sup>南<sup>ナミ</sup>畝<sup>ム</sup> 可<sup>カ</sup>苦<sup>ク</sup>佐<sup>サ</sup>布<sup>フ</sup>倍<sup>ベ</sup>思<sup>シ</sup>哉<sup>ヤ</sup> (万葉集 卷一 一七)

の初二句をそのまま利用して、万葉歌の故郷への哀惜の情を、山中に密かに咲く花への興味へと転換している。ところで、三輪山とは古今集の時代には、ふつう、

わが<sup>ワ</sup>い<sup>イ</sup>ほ<sup>ホ</sup>は<sup>ハ</sup>み<sup>ミ</sup>わ<sup>ワ</sup>の<sup>ノ</sup>山<sup>ヤマ</sup>も<sup>モ</sup>と<sup>ト</sup>こ<sup>コ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>し<sup>シ</sup>く<sup>ク</sup>は<sup>ハ</sup>と<sup>ト</sup>ぶ<sup>ブ</sup>ら<sup>ラ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>き<sup>キ</sup>ま<sup>マ</sup>せ<sup>セ</sup>ず<sup>ズ</sup>ぎ<sup>ギ</sup>た<sup>タ</sup>て<sup>テ</sup>る<sup>ル</sup>か<sup>カ</sup>ど

(古今集 雑下 九八二)

という著名な古歌によって、花ではなく杉と取り合わせて詠まれる山であった。また、貫之の第二句「しかも隠すか」の直截的で力強い響きは、三句以下の春霞に籠められた山中の桜という、古今集に好んで詠まれた優美な主題とは調和し難いようである。この場合、貫之の狙いは、詠もうとする歌の主題に似つかわしくないような万葉歌の言葉をそのまま使用することによる意外な言葉の取合わせの面白さにあると思われる。同様の例をもう一つ見てみよう。

世<sup>ヨ</sup>中<sup>チユ</sup>は<sup>ハ</sup>か<sup>カ</sup>く<sup>ク</sup>こ<sup>コ</sup>そ<sup>ソ</sup>有<sup>ユ</sup>り<sup>リ</sup>け<sup>ケ</sup>れ<sup>レ</sup>吹<sup>フ</sup>く<sup>ク</sup>風<sup>カゼ</sup>の<sup>ノ</sup>め<sup>メ</sup>に<sup>ニ</sup>見<sup>ミ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>人<sup>ヒト</sup>も<sup>モ</sup>こ<sup>コ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>し<sup>シ</sup>か<sup>カ</sup>り<sup>リ</sup>け<sup>ケ</sup>り

(古今集 恋一 四七五)

これは、大伴家持の「悲世間無常歌」、

天<sup>アマ</sup>地<sup>チ</sup>之<sup>ノ</sup> 遠<sup>トホ</sup> 始<sup>ハジ</sup>欲<sup>メ</sup> 俗<sup>ヨソ</sup>中<sup>チユ</sup>波<sup>ハ</sup> 常<sup>ツネ</sup>無<sup>ナキ</sup>毛<sup>モ</sup>能<sup>ノ</sup>等<sup>ト</sup> 語<sup>カタリ</sup>続<sup>ツギ</sup> 奈<sup>ナ</sup>我<sup>ガ</sup>良<sup>ラ</sup>倍<sup>ベ</sup>伎<sup>キ</sup>多<sup>タ</sup>礼<sup>レ</sup> …… 中略 ……  
奴<sup>ヌ</sup>婆<sup>バ</sup>多<sup>タ</sup>麻<sup>マ</sup>能<sup>ノ</sup> 黒<sup>クロ</sup>髪<sup>カミ</sup>変<sup>ハリ</sup> 朝<sup>アサ</sup>之<sup>ノ</sup>咲<sup>キ</sup> 暮<sup>ユフ</sup>加<sup>カ</sup>波<sup>ハ</sup>良<sup>ラ</sup>比<sup>ヒ</sup> 吹<sup>フク</sup>風<sup>カゼ</sup>能<sup>ノ</sup> 見<sup>ミ</sup>要<sup>ユ</sup>奴<sup>ヌ</sup>我<sup>ガ</sup>其<sup>キ</sup>登<sup>トク</sup>久<sup>ク</sup> 逝<sup>ユク</sup>水<sup>ミヅ</sup>能<sup>ノ</sup>

登麻良奴其等久 常毛奈久 宇都呂布見者 尔波多豆美 流 滌 等騰米可祢都母  
(万葉集 卷十九 四一六〇)

の言葉を学んだものと思われる。貫之歌の初句「世中は」で始まる形式の歌は、古今集の時代にも家持歌と同じく、

世中はなにかつねなるあすかがはきのふのふちぞけふはせになる

(古今集 雑下 九三三)

このように無常を主題としたものである。貫之歌第二句「かく」という漢文訓読調の言葉も恋の歌としては似つかわしくないようである。この歌や、先にあげた「三輪山」の歌などは、貫之歌の主題と利用された万葉歌の主題とに大きな差異があり、しかもその万葉歌の言葉は貫之歌の主題にはなじみにくいものである。このことは、貫之がこれらの歌を詠むに際して、その時詠もうとする主題に利用可能な歌や言葉をなんとかして得ようと努めてこれらの万葉歌を探し出したものなのか、あるいはこの万葉歌を利用して詠んでみたい、と思うものがあり、他から歌を求められた時、やや強引にでもそれを自分の歌に詠み込んでいったものであるのか、ともかくも貫之の万葉歌に対する非常に大きな興味と、利用しようという強い意欲を示していると考えられる。このような万葉歌利用の方法は、貫之の古今集編纂の頃にはしばしばその例が見られる。これは古今集序文に見える万葉集賞賛の態度と軌を一にするものである。あるいはこの頃、古今集編纂のために貫之は初めて万葉集という書物を目にしたということも想像できよう。

ところで、それ以後は万葉歌を利用する方法が異っていったように思われる。そのあり方の一つとしては、古今集編纂の頃のような方法によって利用した万葉歌の表現を記憶しており、それを繰り返し利用するということがあったようである。一例を示してみよう。

(延喜六年つきなみの屏風八帖がれうのうた) ゆみのけち

梓弓春の山べにいる時はかざしにのみぞ花は散りける (貫之集 五)

この歌の題である賭弓の手結は、通例は正月の行事である。しかし、萩谷朴氏の御指摘注1の通り、延喜六年には二月二十一日に行われている。従って、この貫之の歌に詠まれた落花は実景であったと考えられる。貫之は花の舞う中での異例の賭弓をいかに詠みこなそうかと思案し、古今集以後の歌人たちが古今集を懸命に学んだように、貫之の前にあった和歌

の最大の古典である万葉集の歌から想を得ようと模索したのだと思われる。そうして、

梓弓ハシヒコ 春山近ハルヤマチカ 家居之イヘノミ 続而聞良牟ツグニキクヨシム 鸞之音ウツクノネ (万葉集 卷十 一八二九)

を見つけ出し、この初二句を利用して詠んだものが、前掲の「梓弓」歌だったと考えられる。こうして花を詠み込んだこの貫之の歌は、二月下旬の賭弓にふさわしいものとなった。その三十年後に「山里にほととぎす鳴きたり」という屏風の題が与えられた時に、貫之はかつて見いだした、主題の類似する万葉歌を思い起こし、その三、四句を利用して詠んだものが、

(おなじとし〔天慶二年―私注〕さいさうの中将屏風の歌)

山里にほととぎす鳴きたり

此里にいかなる人か家イヘみして山郭公ヤマノカミ絶えず聞キくらん (貫之集 四四一)

であったのだと考えられる。同様に、

(延喜十九年東宮の御屏風の歌) 空になく鶴をきける

千とせふとわがきくなへに蘆たづの鳴わたるなる声のはるけさ (貫之集 一三三)

は、長寿の鶴を詠むことで東宮への賀の心を込めたものである。その鶴の鳴く様をいうのに、生い茂った梢で鳴く郭公の声を詠んだ万葉歌、

大伴家持霍公鳥歌

夏山ナツヤマ之 木末キノヘ乃繁ノシゲ尔 霍公ホトトギス鳥 鳴響ナギヒ奈流ナリ 声之遙コエノハルケサ佐 (万葉集 卷八 一四九四)

の下句を利用したのだろう。そして後に、

(同〔天慶―私注〕五年亭子院御屏風のれう)

はるかにも声のするかな時鳥トキトリこのくれたかくなければなりけり (貫之集 五〇八)

と、梢で鳴く郭公を詠んだ歌に、かつて利用した万葉歌を再び利用しているのである。

ところで、貫之の万葉歌利用にはこれら以外の方法もある。

延喜二十三年に亡くなった保明親王を悼んで彼は歌を二首詠んでいる。

東宮かくれ給へるころよめる

霞たつ山べを君によそへつつ春の宮人なほやたのまん  
君まさぬ春の宮には桜花涙の雨にぬれつつぞふる

(貫之集 七八一・七八二)

この第一首目の「春の宮人」は、現存する当時の歌ではこれ以外に例を見ない言葉である。これに近いものとして、草壁皇子が亡くなった時の人麻呂の長歌、

日並皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌

：前略： 何方尔 御念食可 由縁母無 真弓乃岡尔 宮柱 太布座 御在香乎  
高知座而 明言尔 御言不御問 日月之 数多成塗 其故 皇子之宮人 行方不知  
毛

(万葉集 卷二 一六七)

の「皇子の宮人」に注目したい。「皇子」は即ち保明親王である。そして皇子即ち東宮、さらに東、即ち春の連想も容易だろう。また、二首目の「君ます」という言葉もあまり例の見えない言葉であり、その一例が、同じく草壁皇子の死を悼む舎人の、次の歌に見える。

(皇子尊宮舎人等慟傷作歌)

外尔見之 檀乃岡毛 君座者 常都御門跡 侍宿為鴨 (万葉集 卷二 一七四)

貫之が東宮の死を哀傷するにあたって詠んだ歌と、この万葉集の同一歌群の二首に見られる言葉に類似した点の見えることは、単なる偶然とも思われない。人麻呂の歌の、日並皇子の殯宮が営まれた岡を皇子の宮と見なす、という表現と、貫之の「霞立つ」歌の、「山べ」を「君によそへ」て「たの」むという表現との連想も注意されよう。彼は保明親王の死を悼む歌を詠むに際して、同じく東宮である草壁皇子の死を悼んだ挽歌群に注目し、それらの内から利用できる言葉や趣向を得ようとしたのだと考えられるのである。

同様のことが土佐日記の表現についても見られる。

…ある人のたへずして、船の心やりによめる、

忘れ貝拾ひしもせじ白玉を恋ふるをだにもかたみと思はむ

となむいへる。女子のためには親幼くなりぬべし(土佐日記 承平五年二月四日条)

貫之は任地で亡くした幼い女兒のことを「白玉」と表現している。これは、同じく死んだ子供を詠んだ山上憶良の「恋男子名古日歌」にその例が見られる。

世人之 貴慕 七種之 宝毛我波 何為 和我中能 産礼出有 白玉之 吾子

古日者：

(万葉集 卷五 九〇四)

そして、これ以外には例が見られない。また「忘れ貝」というものも万葉歌に特徴的なものである。さらに、「浦戸より漕ぎ出て大湊をおふ」(承平四年十二月二十八日条)、「あかつきに舟を出だして室津をおふ」(承平五年一月十一日条)、「今日からくして和泉の灘より小津の泊をおふ」(承平五年二月五日条)等、土佐日記にしばしば見られる「くを目ざす」という意味の「おふ」という言葉が、石上乙麻呂が、他でもない土佐に配流された時の歌、

(石上乙麻呂卿配土左国之時歌)

父君チチギミ 吾者ワレハ真名マナ子叙ナゴソ 妣ハハ刀ト自ジ尔ニ 吾者ワレハ愛兒アヒゴソ叙ソ 参昇マウノボリ 八十ヤソウチ氏ウヂ人ヒト乃ノ 手タムケ向ケ為ス等ト 恐カシコ  
乃坂ノサカ尔ニ 幣奉ヒサマツリ 吾者ワレハ叙追ソコヘ 遠杵トホキ土左トサ道ヂ矣ヤ (万葉集 卷六 一〇二二)

にのみ見られることは、はやく香川景樹の指摘するところである。

ところでこのような、表現しようとする主題にふさわしい万葉歌を見つけ出して利用するという撰取の方法、しかも、あまり使用されることのない言葉などを見つけ出して利用することが可能であるためには、題詞なども備えており、かなり多数の万葉歌を収めた歌集——それは一つの「万葉集」と呼んでも良いだろう——が貫之の手元になくはならないだろう。あるいはそれが『八雲御抄』等に言う『貫之筆万葉五卷抄』のようなものだったかも知れない。ともかくも彼は、表現しようとする主題が与えられた時にその「万葉集」を検索して、使用可能な言葉や趣向を見つけ出して来たのだと考えるのである。

あるとき彼は、「元日人の家にまらうどあまた来り、あるはやのうちにいり、あるは庭におり立ちて梅花ををる」という主題を与えられて、それに適した言葉や趣向を求め、「万葉集」を練ったのであろう。そうしているうちに「正月：萃于帥老之宅、申宴会也」と記された歌群に出会う。その第一首目、

梅花歌卅二首并序

天平二年正月十三日萃于帥老之宅、申宴会也：

武都ムツ紀多キタ知チ 波流ハレ能吉ノキ多良タラ婆バ 可久カク斯許シコソ曾ソ 烏梅カメ乎乎ハハ利都リツ々々 多努タノ之岐シキ乎倍ハハ米メ

(万葉集 卷五 八一五)

を利用することを思いたって詠んだものが、

元日人の家にまらうどあまた来たり、あるはやのうちにいり、あるは  
庭におり立ちて梅花ををる

春たたばさかばとおもひし梅花めづらしびにや人のをるらん (貫之集 四五八)

という歌だったのではないだろうか。

また、「やむごとなき事によりてとほき所にまかりて、たたむ月ばかりになんまかりかへるべきといひてまかりくだりて、みちよりつかはしける」(後撰集 恋三 七四三詞書)という状況の下で、詠もうとする歌の趣向を得るために「万葉集」を利用するのである。そうしてそこには「羈旅発思」という歌群があり、彼がその内の一首、

月易而 君乎婆見登 念鴨 日毛不易為而 恋之重 (万葉集卷十二 三一三一)

を利用して詠んだものが

月かへて君をば見むといひしかど日だにへだてずこひしきものを

(後撰集 恋三 七四三)

なのではないだろうか。

さらに例を見てみよう。

(延喜御時内裏御屏風のうた)

さうぶとれる所、又かざせるもあり

あやめぐさねながきとれば沢水の深き心はしりぬべらなり

ほととぎす声ききしよりあやめぐさかざすさ月としりにしものを

女どものほととぎすまつ所

なぐさめてひといだにねん月影に山郭公啼きてゆかなん (貫之集 二二七〜二二九)

貫之は、第一首目を「菖蒲とれる所」を主題として詠み、二首目を「かざせる」を主題として詠んでいる。これらの歌を詠むに際して、「万葉集」の菖蒲やかざしを詠んだ歌を検索して見つけ出したのが、大伴家持の

詠霍公鳥

霍公鳥 今来喧曾無 菖蒲 可都良久麻泥尔 加流々日安良米也

(万葉集 卷十九 四一七五)

だったのだろう。この万葉歌の題詞は「詠霍公鳥」であるが、平安末期の『類聚古集』では、この歌を菖蒲の歌として分類している。従って、貫之がこの歌を菖蒲の歌として利用することもあり得るだろう。あるいは、第三首目（貫之集 二二九）の「女どもの郭公待つ所」を詠むために郭公の歌を見ていて、右の万葉歌を「菖蒲をかざす」という題にふさわしいものとして見つけたのかも知れない。なお、この郭公の歌も、

名草目而ナクサメ 今夜者寐南コノヨノシメナミ 従明日波アスヨリハ 恋鴨行武コヒカモユカム 從此間別者イマワカレナバ

（万葉集 卷九 一七二八）

を利用していると思われる。また、次にあげる屏風歌では月夜の海に浮ぶ舟が描いてあったのだろうか、貫之は、

（三条右大臣屏風のうた）

久方の月影みれば難波がたしほもたかくぞなりぬべらなる  
つなでとき今はと舟をこぎいでば我は波路をこえやわたらん

（貫之集 二二三・二一四）

という歌を詠んでいる。これは月夜の船出を詠んだ額田王の

熟田津尔ニキタツニ 船乗世武登フナノリセムト 月待者ツキマデバ 潮毛可奈比沼シホモカナヒヌ 今者許芸乞菜イマハコトギノヒナ注13

（万葉集 卷一 八）

を利用したものと思われる。同じ三条右大臣屏風歌に、高市黒人の、

倭尔者ヤマトニハ 鳴而歟来良武ナキテクミヤム 呼兒鳥コエトリ 象乃中山シロノケノナカ 呼曾越奈流コヒシロコヒナリ （万葉集 卷一 七〇）

を利用して詠んだと思われる歌

いつしかもこえてんとおもふ足曳の山に鳴なるよぶこ鳥かな （貫之集 二〇二）

このような例も見られる。さらに承平八年には、「人の家にはなたちばなある所」という題を与えられて、その「万葉集」の内から花橘を詠み込む次のような歌を見いだしたのであろう。

毎時尔トキトニ 伊夜目都良之久イヤメツラシク …中略… 菖蒲アヤメグサ 花橘乎ハナタチバナ 媿孀良我フトメラガ 珠貫麻泥尔タマスクマデニ 赤アカ

根刺<sup>ネサズ</sup> 昼波之壳<sup>ヒルハシメ</sup>良尔<sup>ラニ</sup> 安之比奇<sup>アシヒキノ</sup>乃<sup>ノ</sup> 八丘<sup>ヤツヲトビ</sup>飛超<sup>ヒコエ</sup> 夜千玉<sup>ヌバタマノ</sup>之<sup>ノ</sup> 夜者<sup>ヨルハス</sup>須我<sup>スガ</sup>良尔<sup>ラニ</sup> 晓<sup>アカツキノ</sup> 月<sup>ツキ</sup>  
尔<sup>ニムカヒテ</sup>向而<sup>ユキカヘリ</sup> 往還<sup>ナキトヨム</sup> 喧等<sup>イカガアキ</sup>余<sup>ケラ</sup>牟<sup>ム</sup>礼<sup>レ</sup>杼<sup>ド</sup> 何如<sup>イカガ</sup>将<sup>アキ</sup>飽<sup>ダ</sup>足<sup>ラム</sup>

反歌二首〔一首省略〕

毎年<sup>トシノトシニ</sup>尔<sup>ニ</sup> 来喧<sup>キトカケ</sup>毛能<sup>モネ</sup>由惠<sup>ヨヒ</sup> 雷公<sup>ホトトギス</sup>鳥<sup>トリ</sup> 聞婆<sup>キカバ</sup>之<sup>シ</sup>努波<sup>ノノ</sup>久<sup>ハク</sup> 不相<sup>アハヌ</sup>日<sup>ヒ</sup>乎<sup>ヲ</sup>於<sup>オ</sup>保美<sup>ホミ</sup> 每年<sup>トシノトシニ</sup>謂<sup>イフ</sup>之<sup>ノ</sup>等<sup>ト</sup>乃<sup>ノ</sup>波<sup>ハ</sup>

〔万葉集 卷十九 四一六六・四一六八〕

この反歌の上句を利用して詠んだと思われるのが、

人の家にはなたちばなある所

年<sup>トシ</sup>ごとにきつつ声<sup>コエ</sup>するほととぎす花<sup>ハナ</sup>橘<sup>キウ</sup>やつまにはあるらん (貫之集 三四四)

である。ところで、この万葉歌の反歌には西本願寺本をはじめ、現存する万葉集諸本の多くに、初句の「毎年」を「としのは」と訓むように注が付されている。従って、これを自詠で「年ごとに」とした貫之の手元にあった「万葉集」には、この注記がなかったのではないかという推定もあり得る。しかし、後にも述べるが、貫之は万葉歌の言葉をもとのまま利用することに拘ってはいないと思われる。彼は「年のは」と訓むよう指示した注があっても、「毎年」という漢字から「年ごと」という言葉を得て、そちらの方が、毎年繰り返す「きつつ」声を聞かせるほととぎすを詠む自分の歌にはふさわしいと判断して、「年ごとに」としたのだと思われる。また、貫之は「藤の花」という題を与えられて、

敷治<sup>フヂナミ</sup>奈美<sup>ナミノ</sup>能<sup>ネ</sup> 佐伎<sup>サキ</sup>由久<sup>ユクミ</sup>見礼<sup>ミレバ</sup>婆<sup>バ</sup> 保等<sup>ホトトギス</sup>登伎<sup>トギス</sup>須<sup>ス</sup> 奈久<sup>ナクベ</sup>倍伎<sup>ベキ</sup>登伎<sup>トギス</sup>尔<sup>ニ</sup> 知可<sup>チカツ</sup>豆伎<sup>ヅキ</sup>尔家<sup>ニケリ</sup>里<sup>リ</sup>

〔万葉集 卷十八 四〇四二〕

という万葉歌を得、

〔天慶二年四月右大将殿御屏風の歌〕

藤の花

郭公<sup>クワクミ</sup>なくべき時は藤花<sup>フジバナ</sup>さけるをみればちかづきにけり (貫之集 三八〇)

という歌を詠む。万葉集の歌がそのまま利用できるならば、ほとんどそのまま自分の歌として詠みかえるといったようなこともしているのである。

以上見てきたように、貫之は詠もうとする歌の主題に即した万葉歌をさがし出して、その趣向や言葉を自分の歌に詠み込んでいた。このような作業を効率的に行うために、貫之



の手元にあったのは、先に触れた『類聚古集』の如き、類題別に編み直した「万葉集」であったのかもしれない。そのように想像したくなるほどに、彼が万葉集の歌をよく見、わがものとしてしていることが、右に示したような歌々にうかがわれるのである。

#### 4 万葉集表現利用の目的

先に、貫之の万葉歌利用の目的の一つとして、万葉歌に見られる古い言葉を取り入れて詠むことによって、自らの和歌の世界を日常の世界から区別し、彼の考える和歌独自の古雅な世界を築こうとする意図があったことが考えられることを述べた。ただ、その時に利用される言葉は、当時の和歌一般に使われない古語であることに意味があるのであり、万葉歌に用いられていることは必ずしも重要ではない。その点から言えば、これは万葉歌の利用ではなく、古語の利用とでもいった方が良くも知れない。また、これまで万葉歌利用の方法とのかかわりで見えてきたのは、一首を構成するための趣向を万葉歌から得ることであった。貫之に与えられた歌の題には、屏風歌のことを考えれば直ちに了解できるように、同じようなものが数多く見られる。ところで、ほとんど同じ物を描いたいくつもの屏風に、各々新しい趣向を盛り込んで歌を詠んでいくことはなかなか困難なことと思われる。貫之はそこに万葉歌を利用したのである。さてここで注意しなければならないのは、彼が万葉歌を利用する時には、必ずしもその古い言葉のイメージのみ求めたのではないということである。というのは、彼の、万葉歌を学んで詠んだと認められる歌の中に、できあがった姿は万葉歌を抜け出して、全く新しいものになっている場合があるということである。例えば、

さ月山梢をたかみほととぎすなくね空なる恋もするかな  
(貫之集 五九四)

この歌は、

此山之 嶺尔近跡 吾見鶴 月之空有 恋毛為鴨  
(万葉集 卷十一 二六七二)

この万葉歌の上三句を序として、下句の「空なる恋」を導くという構造を利用しつつ、序の部分の峯の上の月から梢の上の郭公へと変えて、郭公が高い梢の上にいるのでその声は空に聞こえる、といった理論的な趣向を貫之は自分の歌の中に盛り込んだのである。また、

しのぶれど恋しき時は足曳の山より月の出でてこそくれ  
(貫之集 六三八)

は、次の万葉歌から想を得たものと考えられる。

足<sup>シヒキヤ</sup>日<sup>ヒ</sup>木<sup>キ</sup>乃<sup>ノ</sup> 従<sup>ヒトヨリシレ</sup>山<sup>ヤマ</sup>出<sup>イ</sup>流<sup>リ</sup> 月<sup>ツキ</sup>待<sup>マ</sup>登<sup>ト</sup> 人<sup>ヒト</sup>尔<sup>ニ</sup>波<sup>ハ</sup>言<sup>イ</sup>而<sup>テ</sup> 妹<sup>イモ</sup>待<sup>マ</sup>吾<sup>ウ</sup>乎<sup>マデ</sup> (マツワレヲ)

(万葉集 卷十二 三〇〇二)

この万葉歌は、路傍などで恋人を待つ姿をとがめられ、山から出てくる月を待っているのだと言いつくろう、人目を気にしながらの逢瀬という切実な恋を歌ったものである。それが、貫之歌では、恋しくてたまらない時には、山から月が出てくるように私も家を出てきましたと、機知的な、諧謔味を感じさせるものとなっている。さらに、

あふ坂の関のし水にかげみえて今やひくらんもち月の駒

(貫之集 一四)

これは、延喜六年に作られた月次の屏風に描かれた、八月の図柄である「駒迎へ」を詠んだ歌だが、

河<sup>カハ</sup>津<sup>ツナク</sup>鳴<sup>ナ</sup> 甘<sup>カミ</sup>南<sup>ナ</sup>備<sup>ビ</sup>河<sup>カハ</sup>尔<sup>ニ</sup> 陰<sup>カゲ</sup>所<sup>ト</sup>見<sup>ミ</sup> 今<sup>イマ</sup>香<sup>カ</sup> 注14 開<sup>ヒラ</sup>良<sup>ラ</sup>武<sup>ム</sup> 山<sup>ヤマ</sup>振<sup>フ</sup>乃<sup>ノ</sup>花<sup>ハナ</sup> (万葉集 卷八 一四三五)

という万葉歌の「くに影見えて今やくらん」という一首の構造を、語の位置もそのままに利用したものである。貫之は、神南備河という古色蒼然とした地名を詠み込んだ万葉歌の骨格を全面的に利用しながら、逢坂の関での駒迎えという、万葉集にまったく見られない、新しい題材を詠んだ歌を仕上げたのである。

もちろん、一首の趣向と言葉とを全く別のものとして分けてしまうことは不可能である。従って、貫之が万葉歌の趣向を利用する時には、多く万葉的な言葉が貫之の歌の中に持ち込まれることになる。むしろ積極的にその古い言葉のイメージを生かそうとする試みも当然なされるだろう。ことに、大岡信氏が指摘されるように、貫之の晩年に「調べに一種万葉ぶりともいふべき要素がそなわつて」注15来ることには注意を払わなければならないだろう。しかし、彼の目ざしたのは万葉歌の単なる模倣や再現ではなく、その言葉や趣向を利用して新しい歌を詠むことであつたのだと思う。

## 5 同時代の人々の意識と貫之の態度

以上、紀貫之の万葉歌利用のありさまについて述べてきた。しかし、当時彼独りが万葉歌を知り、利用していたのではない。貫之が活躍をする以前から、万葉集に対する興味は

相当に高まっていた。それは、

貞観御時、万葉集はいつばかりつくれるぞと

とはせ給ひければよみてたてまつりける

文屋ありすゑ

神な月時雨ふりおけるならのはのなにおふ宮のふることぞこれ

(古今集 雑下 九九七)

このように天皇自ら万葉集のことについて尋ねるといような出来事に端的に示されている。また、新撰万葉集の序文を見れば、菅原道真は万葉集を相当によく読んでいたことがわかる。それにもかかわらず、古今集の序文に「おほきみつのくらゐかきのもとの人まろ」等、万葉集の内容と矛盾するような記述が見られ、それが勅撰集の序文として認められているということなどから、当時の教養人の中でも、実際に万葉集を手にとることは少なく、さほど読まれてはいなかったのだと考えざるを得ない。また、先程言及した新撰万葉集の序文によれば、万葉集とは「文句錯乱、非詩非賦、字对雑糅、難入難悟」というものであり、読むには相応の知識と労力を要するものであったろう。このような状況の下で貫之が熱心に「万葉集」を読み、万葉歌の表現を自作の歌に積極的に取り入れていたということに、彼の、自己の作品を優れたものにしようとする意欲の大きさが見られるように思う。本稿では考察を及ぼすに至らないが、古今集撰者をはじめとする、貫之と同時代の歌人たちの歌の中にも万葉歌を利用したと思われるもののがかなりの数認められる。貫之を含め、これらの歌人たちの万葉歌に対する積極的な態度と、その結果詠まれた作品の数々が、万葉集そのものをさほど見ようとしなかった貴族社会一般の万葉集に対する興味、そして万葉集の歌をもっと知りたいという欲求を高めていき、その結果として、梨壺の五人に対する万葉集訓読作業の勅命があったのだという推測もできるのではないだろうか。

注

- 1 安田喜代門氏『古今集時代の研究』(六文館・一九三二年)
- 2 奥村恒哉氏「古今集における万葉集の流れ」(『古今集の研究』(臨川書店・一九八〇年))
- 3 片桐洋一氏「古今集歌壇と歌語」(和歌文学会編『論集古今和歌集』(笠間書院・

一九八一年)

- 4 中西進氏「貫之の方法」『文学』第五四卷第二号 一九八六年二月)
- 5 貫之の生年は厳密には不明であるが、ここでは仮に貞観十四年として起算した。
- 6 「袖ひつ」という言葉も万葉歌(巻四 六一四・卷十一 二五一八)に見られるものである。貫之が「ぬる」ではなく「ひつ」を選んだ理由としては、第一には語義の違いを考えねばならないだろう。しかし、「ひつ」という語が「ぬる」とは異り、和歌にはしばしば見られるのに対して、散文の作品にはその例が僅かであることなどから考えると、藤原俊成の時代にそうであったように(『古来風体抄』、貫之の当時「ひつ」が既に古語であり、そのためもあって彼が「ひつ」を選んだという可能性も考えられる。
- 7 結句底本「嶋待不得而」。通説に従い改めた。
- 8 ( )内は西本願寺本異訓を示す。
- 9 三木雅博氏「冬夜の詠―平安詩歌における「夜」の展開と貫之―(和漢比較文学会編・和漢比較文学叢書3『中古文学と漢文学I』(汲古書院・一九八六年))
- 10 片桐洋一氏「紀貫之論序説」(『文林』六号(一九七二年))
- 11 萩谷朴氏『日本古典全書』『新訂土左日記』(朝日新聞社・一九六九年)所収「貫之全歌集」一五六頁
- 12 香川景樹『土左日記創見』
- 13 結句現訓「こぎいでな」
- 14 四句、古葉略類聚鈔・神宮文庫本等「今哉」
- 15 大岡信氏『紀貫之』(筑摩書房・一九七一年)一九三頁

第二節 万葉歌の表現を自らの表現として使いこなし、様々な歌を生み出す方法

1 「恋の山にまどふ」という表現のこと

貫之集に次の歌がある。

かきくもり雨ふることもまだしらぬかさとり山にまどはるかな（貫之集 六五二）

この歌は、恋の部に収められていることから恋の歌と考えなければならない。しかし、この一首を貫之集から切り離し、単独の歌として鑑賞する時、何によってこれを恋の歌と判断できるだろうか。

それは、第一には下句「笠取山にまどはるかな」によっているだろう。たとえば、

いかばかりこひてふやまのふかければいりといりぬるひとまどふらむ

（古今和歌六帖 四 恋 一九八〇）

この歌では、恋にまどうことを、深い山中にまどうことにたとえている。また、時代は下るが、

たれとしらず、人どものたまふに、やりどをたてていりたまひぬれば

あぢきなやこひてふ山はしげくともひとのいるにやわがまどふべき

（一条撰政御集 九八）

この歌も、恋を山でたとえ、「まどふ」という側面を取り上げたものである。さらに、

たれをかほこひのやまへのほととぎすくさのまくらにたびたびはなく（家持集 六五）

よしさらばむかしのあとをたづね見よ我のみまどふこひのやまかと（狭衣物語<sup>註1</sup> 卷一）

などのように、〈恋の山—惑ふ〉という表現がしばしば和歌に用いられることから、十一世紀の初頭には、〈恋の山—惑ふ〉が、一つの歌語として確立していたものと見られる。遡って、貫之の時点でも、恋を「山」にたとえ、そこに「まどふ」という側面をとりあげた表現がすでにあり、したがって、貫之の歌の「山にまどはる」という表現が、恋にまどう心の象徴となり、それによって恋の歌として成立しているのであろう。

2 「恋の山」とはどのような山であるのか

では、この「恋の山」が貫之の歌において「笠取山」であることの理由は何なのだろうか。一つには、「笠取山」の「笠」と、二句の「雨」が、縁のある言葉として詠まれていることが指摘できよう。恋の歌において、「雨」が「涙」のたとえであるのは、常套的表現である。この歌でも、「雨」は涙の雨と取らなければなるまい。さらに、その「雨」と縁のある、初句の「かきくもり」という言葉も、

…心うくもすぎにけるひかずかなとおぼすに又かきくもりものみえぬ心ちし給へば…

(源氏物語<sup>注2</sup> 椎本)

この例のように、ある気象の状態を表すだけでなく、涙で目の前が暗くなる状態の表現にも用いられるものである。つまり、上三句は、辛さや悲しさといった心理状態のあらわれである「涙」を、自然現象である「雨」で表現したものである。この涙の「雨」から「笠取山」を呼び起こすことで、先に述べた、恋の「まどふ」という側面を「山」にたとえる表現へと繋げている。言い換えれば、「笠取山」は、上句の、ある心理の状態を示唆する涙の雨の表現と、恋にまどう心の象徴と考えられる、具体的な山にまどうという表現とを結合する機能を果たしているわけである。

このように、貫之のこの歌では、「笠取山」が重要な役割を果たしていると思われるのであるが、この「笠取山」は、一般にどのようなものとして和歌に詠まれるものなのだろうか。古今集における「笠取山」の例を見てみよう。

雨ふれどつゆももらじをかさとの山はいかでもみぢそめけむ

(古今集 秋下 二六一)

あめふればかさとりやまのみぢばはゆきかふ人のそでさへぞてる

(古今集 秋下 二六三)

これらの歌、ことに二首目の歌からは「笠取山」が、照り輝くまでに紅葉の美しい山であったことが窺われる<sup>注3</sup>。紅葉は雨によって色づくものとして歌に詠まれる。「笠取山」の場合、「笠」から「雨」が連想されるが、その雨が「笠取山」を紅葉させるのである。そうすると、当面の貫之の歌の「笠取山」も紅葉の山のイメージで考えられている可能性が高いのではないか。

以上のように考えて、しかしながら、雨が降ることもまだ知らない、というのと、笠を取るといふことはそのままでは結びつきがたい<sup>注4</sup>。実は、この貫之集の歌は陽明文庫本を底

本とする新編国歌大観によって示した（正保版本も同じ）のだが、西本願寺本、御所本では少し異なった本文を伝えている。

かきくもり雨ふることにみちしらぬ笠とり山にまどはるるかな

しばらく、こちらの本文で考えてみることにしたい。

### 3 道を知らぬ紅葉の山のイメージ

さて次には、貫之が恋の歌に、道を知らない紅葉の山を配したことで、そこに何を込めようとしたのかを考えなければならない。そのために、貫之の、道を知らない紅葉の山を詠んだ歌を見ようと思う。

（延喜十七年八月宣旨によりて）

紅葉ばの散りしく時は行きかよふ跡だにみえぬ山路なりけり（貫之集 八六）

この歌では、紅葉が散り敷いたために道の見えなくなったことが詠まれている。道を知らない紅葉の山に準ずるものと考えてよいだろう。落葉のために道が見えなくなるという趣向自体は、

ふみわけてさらにやとはむもみちばのふりかくしてしみちとみながら

（古今集 秋下 二八八 読人知らず）

や、また紅葉と桜花の違いはあるものの、

しひて行く人をとどめむ桜花いづれを道と迷ふまでちれ

（古今集 離別 四〇三 読人知らず）

など、古今集読人知らずの歌に見られることから、比較的早くからあったものと考えられる。これらの歌の詠み方を踏まえたうえで、貫之の「紅葉ばの」の歌では、見えなくなるものが「道」ではなく、「行かよふ跡」であることに注意したい。人間が行き通う跡さえも見えない、という表現は、そこが俗世間から隔絶した場所であることを示している。つまり、貫之の歌は、紅葉が盛んに散り敷く時の山路は、人間の営みの跡すら見えなくなり、あたり一面紅葉を敷き詰めた、俗世間とは別の世界のように感じられる、と言っているの

であろう。

また、別の例を見てみよう。

(延喜二年五月中宮の御屏風の和歌)

(九月きり山をこめたり)

(ちりぬべき山の紅葉を秋霧のやすくもみせず立ちかくすらん)

河のわたりに舟あるところ

山路にも人やまどはん川霧の立ちこぬさきにいざわたりなん

(貫之集 一五六・一五七)

この屏風には秋霧の濃くかかった山を遠景に、川を舟で渡ろうとする人物が描かれていたのである。この二首の歌は連続したものと<sup>注5</sup>して解すべきと考えられるので、一五七番の歌の「山路」は、紅葉の山路であり、そこで道を失っているのだと読み取れる。また、その山路は霧に閉ざされ、他から隔絶された世界として描かれている。そう理解した上で一五七番の歌を読むならば、下句の「いざわたりなん」という目的、方向性を持った人物の行動する姿を一層鮮やかに際立たせるため、上二句に、道を見失い、困惑のうちにさまざま人物のイメージを内包する、閉塞した世界としての山路を点じたのだと考えられるだろう。

以上の二例から、貫之の詠む、道を知らぬ紅葉の山とは、日常の生活空間とは隔絶した異空間であり、「紅葉」は、その空間の一種幻想的な性格を象徴する機能をはたしているのではないかと推測される。

もう一例見てみよう。

もみぢのいたく散りたる山をこえたる所

ひねもすにこえもやられず足曳の山の紅葉をみつつまどへば (貫之集 一二三七)

この歌では、詞書の「山を越えたる」という情景を詠むのに際して、「越えもやられず」といつている点に注目したい。先に推測した、紅葉の山を日常と隔絶した異空間として描き出す趣向が貫之にとって一つのパターンとして確立しており、この歌の場合も同じ趣向でもって「もみぢのいたく散りたる山」を描写しようとしているのではないだろうか。そう考えてよいならば、当初に示した「かきくらし」歌も次のように解釈できるだろう。すなわち、空がかきくもって雨が降ることもみじがますます照りまさってきて、日



常の世界とは隔絶しているがごとき）道を知らない笠取山に（出口もわからぬまま）迷われることですよ——恋の思いのために目の前が真つ暗になって涙が流れることに、恋の道を知らなくてこの先どうしたらよいかわからず、心がまどつてしまうことです。

#### 4 人麻呂の泣血哀慟歌と貫之歌の表現

この、道を知らぬ紅葉の山の詠みぶりは、特定の原拠を持っており、そのために貫之にとつて動かしがたい一つのパターンとして確立していったのではないか、というのが稿者の考えである。

その原拠として、稿者は万葉集巻二「柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血哀慟作歌」、ことに、次にあげる一首目の反歌第一首目を考えたい。<sup>注6。</sup>

秋山之 アキヤマノ 黄葉乎 キミチツランゲキ 茂 マヒトスル 迷流 イモヲ 妹乎 イモメム 将求 ヤマヂ 山道不知母 シラズモ 一云 ミチシラズシテ 路不知而

（万葉集 卷二 二〇八）

この歌では、紅葉の多い秋山は、亡くなった妻のいる、この世とは隔絶した別の世界として詠まれている。そして、紅葉のために道を見失い、何処かへ迷い込んでしまった妻を求め、道も知らぬ山中をさまよう人の姿がある。ここで「まとひぬる」主体であるのは、第一には「妹」であるけれども、残された男も山中をまどい、さまよっていると考えられる。その姿をも、貫之は思い浮かべていたのではないだろうか。以下しばらく、貫之がこの泣血哀慟歌を、万葉集中に目にしていたのではないかということについて考えてみたい。

貫之の詠んだ

道しらばつみにもゆかむすみみのえの岸におふてふこひわすれぐさ

（古今集 墨滅歌 一一一一）

の初句、「道しらば」という言葉は、古今集に収められた凡河内躬恒の次の歌にも見られる。

道しらばたづねもいなむもみぢばをぬさとたむけて秋はいにけり

（古今集 秋下 三一一三）

「道しらば」という表現は現存する平安朝の和歌にはほとんど見られないものである。<sup>注7。</sup>

その「道知らば」を貫之、躬恒のどちらもが初句に用いていること、さらに、二句「つみにも行かむ」「たづねもないむ」の類似からして、片桐洋一氏も指摘するとおり、どちらか一方が他の一方を意識して詠んだものと思われる。躬恒の歌の、紅葉が散るのを、秋が紅葉を幣として手向けているのだ、とする趣向は、古今集の歌にしばしば見られるものである。

では、躬恒の歌の、紅葉を幣として手向けて去ってしまった秋、その秋の去っていった道を知っているならば尋ねてもいこう、という発想はどこから得たものであろうか。この一首に用いられた「道知る」・「尋ぬ」・「もみぢ」・「秋」などの言葉からは、先程の泣血哀慟歌一首目の反歌一首目が想起されるが、そこに描かれた情景——もみぢがいっぱいなので秋の山へ迷い込んでしまった妻、もみぢが散るようにあの世へ去ってしまった妻を求めたい。けれどもその道を知らないことよ——の「妹」を「秋」に置き換えるならば、躬恒の歌の発想を得ることは比較的容易なのではないか。貫之の歌と躬恒の歌のどちらか一方が、他方を意識したものであろう事は右に述べた通りであり、どちらの歌も古今集に収められたものだから、詠作時期の近接している可能性が高い。また、この歌に限らず、貫之と躬恒が同じ素材を互いに意識しながら詠んだと思われる例がしばしば見られることも、既に指摘されている<sup>注10</sup>。そして、古今集撰進の準備のため二人とも万葉集を見たものと考えられる<sup>注11</sup>。従って、ここでも貫之と躬恒が、万葉集によって知った泣血哀慟歌を互いに共通の素材として、歌を競い詠んだという可能性が考えられる。このことから、貫之の歌は、躬恒の歌ほどには泣血哀慟歌の言葉と重なる表現がなくても、その初句が、泣血哀慟歌から想を得て詠まれたものと見て、考察を進めたい。

泣血哀慟歌において、知らない山路のどこかにある（はずの）ものは、この世を去ってしまった妻のいる死者の世界である。「山路知らずも」という表現は、死者の世界、即ち愛しいもののいるところへ行くことのできない嘆きの深さを表しているのと同時に、知らぬ山路のその先にあるものが、この世とは隔絶した、別の世界であるという事自体をも表示している。このことよって、紅葉の山という泣血哀慟歌の舞台が、日常の空間とは異なった空間としてイメージされ、紅葉で一杯の、一種幻想的な光景が目に見えぬのである。

貫之は、〈道を知らない〉という表現が、現実の世界から隔絶した異空間のイメージを表しうることを、泣血哀慟歌から学んだのではないか。そしてそれを「(恋)忘れ草」という空想的な効能を持つ植物の生える場としての住の江を提示することに用いたのではないだろうか。

5 万葉集における泣血哀慟歌的な表現とその利用

今問題にしている貫之の「道しらば」の歌の表現は、類似するものが大伴家持の作にも見られる。

出行イデテユク 道知末世波ミチシラマセバ 豫カナテヨリ 妹乎将留イモヲトドメム 塞毛置末思乎セキモオカマシラ (万葉集 卷三 四六八)

この歌は、四六二番の「天平）十一年己卯夏六月大伴宿祢家持悲傷亡妾作歌」に続く一連の作品のうちの一首であるが、この家持の挽歌を貫之は知っていたらしいことが、次の歌からうかがわれる。

出でて行く道としれれどあふ坂はかへらん時の名にこそ有りけれ（貫之集 七五八）

この歌は、初二句の表現の類似注13、また「あふ坂」、即ち「逢坂の関」と「妹をとどめむ関」と「関」の一致から、家持の歌に依つたものと思われ、貫之の「道しらば」という表現は、直接にはこの家持の歌に依つたものと考えられる。

この家持の「悲傷亡妾作歌」の一連の作については、『万葉集注釋』が、四六六番の長歌の「入り日なす隠りにしかば」は泣血哀慟歌二首目の長歌（二二〇番）の「入り日なす隠りにしかば」に依つたものであり、また、四六七番の歌の「若子みどりこ」も同じ泣血哀慟歌二首目の「若児みどりこ」に倣つたものであると指摘されるように、家持の挽歌が泣血哀慟歌を意識しながら作られたことはほぼ認めて良い。家持の歌の「若子」にかかる表現「いゆく我妹かみどり子を置きて」も、泣血哀慟歌の「我妹子が形見におけるみどり子の」に近似する。このような家持の「悲傷亡妾作歌」の表現を、人麻呂の「泣血哀慟歌」を原拠とする一連の泣血哀慟歌的表現として貫之が享受し、利用したのではないかと考えるのである。さて、このような（道を知らない）という表現については、万葉集に、さらにいくつかの例が見られる。

（十市皇女薨時高市皇子尊御作歌三首：一五六題詞）

山振之ヤマノキ 立儀足山サキヤタルヤマ 清水シメツラハ注15 酌尔シラキニユカマド 道之白鳴ミチノシラナク (万葉集 卷二 一五八)

山吹の咲いている山清水のある所は、そこへ行きたいけれど、道を知らないと表現することで、亡くなった十市皇女の居る、この世とは別の世界であることが示されている。

また、卷十三の詠歌年代不明の歌にも類似の表現が見られる。

：何所鹿イナクニカ 君之将座跡キミガマサムト 天雲乃アマクモノ 行乃随尔ユキノマニニ 所射完乃イルシシノ 行文将死跡ユキモシナムト 思友オモヘドモ 道之ミチシ  
不知者シラヌバ 独居而ヒトリキテ 君尔恋尔キミニコフルニ 哭耳思所泣ネノミシナカル (万葉集 卷十三 三三四四)

この歌は、行き倒れになろうとも君のいる場所を尋ねて行きたい。けれども道がわからないので、死者を恋うて泣くばかりだと言う。この歌の〈道を知らない〉は、君の居るところがどんなに尋ねても行き着けない死者の世界であることを示している。さて、次の人麻呂の歌、

讚岐狭岑嶋視石中死人柿本朝臣人麻呂作歌

：荒床アラトコ 自伏君之コロフスキミガ 家知者イハシラバ 往而毛将告ユキテモツゲム 妻知者ツマシラバ 来毛問益乎キテモトハマシラ 玉梓之タマボコノ 道太尔ミチダニ  
不知シラヌ 鬱悵久オホガシク 待加恋良武マチカコラム 愛伎妻等者イシキツメテハ (万葉集 卷二 二二〇)

では、死者の居る場所が狭岑嶋という実在の場所で、人麻呂は死者の居るところにいる。したがって人麻呂にとって狭岑嶋は現実の世界である。けれども、死人の妻にとっては、愛しい者が死者となっている場所に行きたくても、そこにたどり着くすがまったくありえない隔絶した場所である。このような事態を表すためにこの歌の〈道を知らない〉という表現は機能している。

〈道を知らない〉という表現をこのように考えるならば、先にあげた貫之の歌、

道しらばつみにもゆかむすみへの岸におふてふこひわすれぐさ

には、〈道を知らない〉によって、「こひわすれぐさ」を求める切実な気持ちや、恋忘れ草の生える「すみのえ」が幻想的な異空間であることが盛りこまれていることが見えてくる。

6 泣血哀慟歌の表現の態度

このように考えてくると、貫之の歌には泣血哀慟歌の表現を利用したのではないかと思われるものが、他にもあることに気付く。

わがこひはしらぬ山ぢにあらなくに迷ふこころぞわびしかりける

(古今集 恋二 五九七)

この歌では、恋のためにまどつていささまを言うのに、知らない山中を迷い、なすすべもなく途方にくれているという姿でもつて喩えている。これは、泣血哀慟歌に描かれた、どうしようもないままに愛しい妻の姿を求めて山中をさまよう人物のイメージと重なるものである。これをもう少し具体的に考えるための手掛かりとして、躬恒によく似た歌があるので比較してみよう。

わがこひはしらぬみちにもあらなくにまどひわたれどあふ人もなし

(躬恒集 二八六)

この二首の、ここまでの類似は偶然とは思われず、どちらかがどちらかを、先後関係はわからないが意識しているものと考えられる。前述の古今集秋部の「道しらは」歌のところで見たように、躬恒もまた、泣血哀慟歌を知っていたようであるから、貫之と躬恒が、泣血哀慟歌に想を得つつ、互いの歌を意識しながら、恋の歌を詠んだということになるだろう。これら二首を比較してまず目に付くのは、貫之が「知らぬ山路」と泣血哀慟歌の舞台そのままに詠んでいるのに対して、躬恒は、泣血哀慟歌を構成する重要な要素の一つである「山路」を、山とは限定しないただの「道」としている点である。<sup>注16</sup>さらに、下句についても両者を比較してみる。貫之の歌では、上句に恋に迷う心の比喩的な象徴として、泣血哀慟歌から得たのであろう「知らぬ山路」を配し、三句「あらなくに」という逆接の言葉で、下句「わびしかりける」という心情表現へと繋いでいる。この方法によって、恋に迷う心のわびしき、という下句の一般的な心情が、山中をまどつ、という上句の象徴的な光景のために、切なさ、やるせなさ、絶望感等を伴って印象的なものになるのである。これに対して躬恒の歌では、上句で「私の恋は知らない道ではないけれど」と言っておいて、「ずっと迷いつづけている」とし、「けれども逢う人もなし」と、論理上二度の屈折がある。この論理の展開の面白さが躬恒の歌の眼目なのであろう。上句は、知らない道をまどつ人物のイメージを喚起するというよりも、「まどひわたる」という言葉を引き出すために機能しているのであって、一首を統括する「あふひともなし」に直接繋がるものではない。貫之の歌の上句が「わびしかりける」の象徴として機能しているのとは異なるものである。

ところで、貫之の「わがこひは」の歌は、古今集本文としては大きな異文はないのだが、貫之集にはやや異なった幾種かの本文がある。

我恋は知らぬ山路にあらねども迷ふ心ぞわびしかりける

(正保版本)

我恋は知らぬ山路にあらなくに迷ふ心ぞまさる我身か

(定家筆切)<sup>注17</sup>

我恋は知らぬ山路にあらねどもたましひのまどひけぬべき

(陽明文庫本)<sup>注18</sup>

我恋は知らぬ山路にあらなくになどか心のまどひけぬべき (西本願寺本、御所本)

これを見ると、「まどふ心―わびし」の系統の本文に対立して、「まどひけぬべき」系の本文の存することがわかる。「まどふ心―わびし」系の本文は古今集本文としてまず認めてよい。したがって貫之自身の作品としてこの形があったことは間違ひなからう。一方、「まどひけぬべき」の本文については、このような本文の変化が単なる誤写によって生じるとは考え難いし、家集のこの歌の前後にも誤りを誘うようなものは認められない。また、「まどひけぬべき」系の本文を持つ陽明文庫本、西本願寺本、御所本は必ずしも正保版本の低位に当たる性格のものではない。<sup>注19</sup>したがって、「まどひけぬべき」の本文も、貫之自身の手になるものとの可能性が認められよう。そう考えるとどうなるのか。

「などか心の(などたましひの)まどひけぬべき」の本文からは、心が(あるいは魂が)消えてしまう、ということ、死が連想される。それはまさしく泣血哀慟歌に描かれた死のイメージと重なるものである。あるいは、この「消ぬ」という本文から受ける死の印象を嫌って貫之自身が改作したものが、決定稿として古今集に入ったものだったかもしれない。そのように考えられるとして、この二種の本文が、上句はそのままに、下句の、心情の表現の方を変えていることには注意を払わなければならない。このことは、貫之が、「知らぬ山路」のイメージを変更することなく、そのイメージに結びつく心情の方をあれこれと模索したということを意味している。つまり、彼がこの歌を詠んだ時には、貫之に泣血哀慟歌から得た「知らぬ山路」のイメージが詠むべき核になるものとしてあり、そのイメージを活用すべく、様々な個別の心情の表現と結び付けることによって、一首を構成するという方法を用いたのである。先ほど述べた、道を知らぬ紅葉の山の歌の詠みぶりが、貫之においては、一つのパターンとして確立していたということも、今述べた作歌の方法を、彼が用いたことによるものと考えられよう。即ち、泣血哀慟歌から得た「道を知らぬ紅葉の山」のイメージを、折々の要請——個別の状況、あるいは、屏風の図柄というような形で与えられたテーマ——に応じて具体的な景物や心情の表現と結び付けることによって、それぞれの歌を作り上げていたのだと考えるのである。

7 泣血哀慟歌の表現を利用することを可能にした環境

ところで、泣血哀慟歌や、今まで見てきた、貫之が参考にしたと思われる万葉集の歌々は人の死を詠んだ歌である。そうした、いわば不吉な歌の表現を用いたものが、どうして恋の歌や、屏風歌という祝儀の歌として受け入れられたのだろうか。このことの起こる条件の一つとしては、泣血哀慟歌をはじめとする、万葉集の挽歌が、一般の人々には知られないものだったのではないかとということが考えられる。たとえば次のような例がある。人麿集に泣血哀慟歌一首目の反歌一首目と類似した歌が見られるが、

めしにてのちによめる

秋山の紅葉をしけみまとひぬるいをもとむこの日くらしつ

(書陵部蔵 (五二一・二二) 人丸集 私家集大成 人麿Ⅰ 四七)

めにをくれて

秋山のもみちをしけみまとひぬるいをもとむと山ちくらしつ

(書陵部蔵 (五〇一・四七) 柿本集 私家集大成 人麿Ⅱ 二六六)

のように、結句が万葉集の本文「山道不知母」とは異なる「くくらしつ」となっている。人麿集は万葉集の人麻呂以外の歌も多く含み、また、人麻呂の歌にしても、どのようにしてこの集に収められたのか、詳しい経緯は不明であるが、このことは、泣血哀慟歌の「秋山の」という反歌が、万葉集を離れて伝承されていたこと、また、その過程で結句が「くらしつ」と形を変えられていた、ということを意味するだろう。人麿集の成立は貫之よりも遅れるので、憶測ではあるが、これは、貫之の時代には「万葉集」そのものに依らない限り、「山路しらずも」という本文を持った泣血哀慟歌を知ることができなかった可能性が大きいということを示しているのではないだろうか。

また、万葉集以外には、貫之以前の和歌に、泣血哀慟歌に詠まれたような、この世とは別の世界への道を知る、知らないと言った表現は、今のところ見つけられない。先に挙げた万葉集の挽歌についても、その伝承歌と思われる歌は見出せない。もちろん、ただ単に現存する資料に見つけられないだけかもしれない。そこで別の方向から考えてみたい。

次の歌は、おそらくは、貫之の「我が恋は知らぬ山路にあらなくに迷ふころぞわびしかりける」という歌の影響を受けていると思われる例である。

大輔がぎうしに、あつただの朝臣の物へつかはしける

ふみをもてたがへたりければつかはしける

大輔

道しらぬ物ならなくにあしひきの山ふみ迷ふ人もありけり(後撰集 雑三 一一〇五)

この歌に対する敦忠の返歌には、ある顕著な要素が現れる。

返し

敦忠朝臣

しらかしの雪もきえにし葦引の山ちを誰かふみ迷ふべき (同 一一〇六)

この「しらかしの雪」は、明らかに万葉集卷十の人麻呂歌集歌

足引アシヒキ 山道不知ヤマヂモシラズ 白牴牾シラカシノ 枝母等乎々尔エダモトヲラニ 雪落者ユキノフレバ (万葉集 卷十 一二二一五)

の表現に依ったものである。敦忠は、贈歌の「山ふみ迷ふ」という表現をそのまま自歌に取り込んだのであるが、彼にとつて「山道…迷ふ」という表現は、泣血哀慟歌ではなく、「足引きの」歌と結びつくものだったと考えられないだろうか。貫之集には敦忠の家の屏風歌も収められているし(四二五く四五七)、また、贈答歌(七八九・七九〇)も見えるから、敦忠と貫之の間には、相応に親密な関係があったものと思われる。したがって、敦忠が貫之の歌をよく知っており、大輔の歌を見て、貫之の、泣血哀慟歌をもとにしたと思われる、道知らぬ山を詠んだ歌々を想起した可能性は十分考えられる。その大輔の歌への返歌を詠むにあたって、敦忠は「足引きの」歌を選んでいるのである。

この「足引きの」歌は、古今和歌六帖、人麿集、拾遺集、枕草子などに見え、当時よく知られていたらしいから、敦忠がこの歌を利用することを思いつくことももつともである。しかし、それとともに、泣血哀慟歌が世に知られていなかったために、泣血哀慟歌の利用を思いつきえなかったという可能性をも示唆するものではないだろうか。

## 8 貫之の万葉集表現利用の態度

以上のことから、貫之の時代には、泣血哀慟歌が世に知られていなかったために、その表現を用いても不吉なものとは思われなかったのだと考える。しかし、さらに大きな問題は、貫之自身が、なぜこのような歌を詠み得たのかということである。

確かに、人の死を悼む歌も、恋の歌も人を恋しく思う点では共通しており、現に、同一の表現が挽歌にも恋の歌にも用いられることがある<sup>注20</sup>。したがって、貫之が泣血哀慟歌をヒ



ントにして恋の歌を詠もうと思いつくこともあり得るだろう。また、ことに、泣血哀慟歌の、幻想的な美しい紅葉のイメージをつくり出す表現は、屏風の歌を詠むに際して、利用してみたいと思わせる表現の一つであるだろう。しかし、それらの表現は、万葉集の泣血哀慟歌においては、妻の死という具体的なテーマと不即不離のものである。貫之がそれにもかかわらず、泣血哀慟歌の表現を用いたということは、泣血哀慟歌から妻の死という不吉な、具体的なテーマをひき剥がして、幻想的な美しい紅葉の山という抽象的なイメージ、その表現のみを利用しようとしていたことを意味するだろう。このことは、歌を詠む時に、具体的な状況や心情よりも、抽象的な美的イメージが優先される、そういう方法が用いられることを前提とする。それが、本稿「6 泣血哀慟歌の表現の利用の態度」で述べた方法だったのである。

以上、貫之の歌と人麻呂の泣血哀慟歌の表現との関係を例にとつて、貫之がそれを万葉集から直接に学んだこと、そこから、一つの、美的なイメージを得、それを具体的な状況に応じて一首に作り上げていたのではないかということ述べてきた。

従来指摘されてきたように、貫之の歌のうちには、似通った歌が多く見られる<sup>注21</sup>。その原因としては、貫之が多く作品を残している屏風歌の場合、与えられたテーマ(屏風の絵)が類似していれば、詠まれる歌も似通ったものになる可能性が高い、といった外的なものも当然あり得る。しかし、それだけではなく、今回述べてきたような、貫之の意図的な作歌方法の結果として捉え直すこともできるのではないだろうか。

#### 注

- 1 狭衣物語の本文は『日本古典文学大系』によった。
- 2 源氏物語の本文は『源氏物語大成』により、私に濁点・句読点等を付し、適宜漢字を当てた。
- 3 初句「かきくもり」の薄暗い色彩のイメージも、たとえば、足引の山かきくらししぐるれど紅葉は猶ぞ照りまさりける (貫之集 二七) のように紅葉の紅い色彩のイメージとの対比を前提としているのではないだろうか。
- 4 木村正中氏は笠取山を「笠を取る」に掛け、笠を取るので雨に濡れないと詠んだ。「とされ、「笠取山の雨に、初心な恋のとまどいを象徴させる。」と説明しておられるが(新潮日本古典集成『土佐日記 貫之集』)、まだ知らないのは「雨

降ること」であって、この解釈にもやや無理があるように思われる。

5 同じ屏風の四月の所でも、

四月おほみわのまつりのつかひ

いづれをかしるしと思はんみわの山見えとみゆるは杉にざりける (一四五)

むまにのりたる人おほくゆく

行がうへにはやくゆけ駒神垣の三室の山のやまかづらせん (一四六)

のように連続した場面を詠んだ歌が見られる。一五六、一五七番の歌でもそうと  
った方がよいと思う。

6 貫之が万葉集を見ていたのではないかということについては、第一部一章第一節  
に述べた。

7 管見に入る限りでは、ここにあげた二首以外、躬恒歌に依ったかと思われる「道  
しらば尋ねにゆかむうぐひすはいづれの花をねぐらにかする」(和歌一字抄、橘  
為義)が見られる程度である。

8 片桐洋一氏「古今集歌壇と歌語」(『論集古今和歌集』(和歌文学会編)所収)

9 竜田ひめたむくる神のあればこそ秋のこのはのぬさとちるらめ

(古今集 秋下 二九八 兼覽王)

神なびの山をすぎ行く秋なればたつた河にぞぬさはたむくる

(古今集 秋下 三〇〇 清原深養父)

10 片桐洋一氏前掲書など。

11 古今集はその序によれば、万葉集に入った歌は採らない方針であった。ならば、  
そのために当然、万葉集を見たはずである。もともと、現存の古今集に万葉集の  
歌と同歌と見なされる歌が存在する点は疑問として残る。しかし、これに関して  
は様々に理由が想定でき(例えば伊藤博氏「古今の万葉」〔萬葉六四号〕など)、  
これをもって直ちに古今の選者たちが万葉集を見ていなかったと考えることはで  
きない。なお、貫之の当時の万葉集が現在のものと同じであったという保証はな  
い。しかし、現存する多数の伝本がほぼ同一の形態を示していることから、そう  
考えておいて大きく誤ることはないだろう。また、そう考えたのでは全く説明が  
つかないといった現象も今のところ見られないので、一応、貫之の見たであろう  
万葉集と、我々の知る所のものとはほぼ同じものであるとして考察を進める。

12 住吉は、伊勢物語百十七段の例を挙げるまでもなく、古来、神の居ます神聖な

地とされていた。したがって住吉という地は、一種の異境として描かれることを許容するものだったと考える。

- 13 平安朝の和歌では「出てゆく人」（古今和歌六帖 三〇五四、猿丸集〔私家集大成、第Ⅱ類本〕一八）、「出てゆく君」（伊勢物語 四七段。古今和歌六帖、業平集にも同歌あり）の例はあっても、「出てゆく道」の例は見られないようである。

- 14 三、四句定訓なし。

- 15 現在の万葉集諸注釈では二、三句を「たちよそひたる やましみづ」と訓む。

- 16 古今和歌六帖に、貫之、躬恒の歌双方に類似した歌「こひてへばしらぬみちにもあらなくにあやしくまどふわがこころかな」（一九八七）が見られる。おそらくは躬恒の歌に依って作られたものである可能性が高いと思うが、この歌が、二人の歌に先行した可能性も否定はできない。ただ、そうであっても泣血哀慟歌の舞台を自詠に取り込もうとする貫之の態度を見るべきことに変わりはないし、そうはしない躬恒の対照的な姿勢を読み取るべきだろう。

- 17 日本古典全書『土佐日記』所収『紀貫之全歌集』による。

- 18 『校訂貫之集』による。

- 19 島田良二氏『平安前期私家集の研究』他

- 20 例えば、『日本古典文学全集 萬葉集三』に指摘された例だが、万葉集卷十三・三二七四〔相聞〕と卷十三・三三二九〔挽歌〕など。

- 21 その実例は、菊地靖彦氏『古今集以後の貫之』に多く指摘されている。

## 第二章 漢詩文表現利用の態度

貫之が自らの和歌のイメージを豊かにすべく、積極的に万葉集に学び、その表現を摂取していたことは、前章でも見たとおりであるが、彼の和歌のうちに、漢詩文の表現を学んだものも多く見られることは、既に指摘される<sup>註1</sup>ところである。本章では貫之が漢詩表現をいかにして自作に取り込んでいったのか、実例を示して、その過程と態度を明らかにしたいと思う。このような作業を積み重ねる事で、貫之の和歌がどのようにして作られていたのか考えていきたい。

### 第一節 実験的な漢詩文表現の摂取 — 「浮き沈む玉」を例に

#### 1 漢詩文の表現を和歌に用いるということ

古代和歌の表現形成においては、漢詩文表現の受容がその大きな要素として働いている。したがって、和歌の解釈を試みる際に、典拠となる漢詩文表現の指摘が重要である場合がしばしばある。また、作者の詠歌の意図を考える場合にも同様のことが言えるだろう。

それら和歌に利用された漢詩文表現は、多くの漢詩文表現の中から、さまざまな条件のもと、何らかの判断により和歌の作者が選んだものである。

したがって、ある漢詩文表現が和歌に利用されている場合には、その漢詩文表現を選んだということ自体にも和歌作者の制作意図が込められているはずである。ことに、過去に例のない漢詩文の表現を利用した場合には、その選択や詠みぶりに和歌作者の個性や嗜好の一端が現れやすいものと予想される。

ここで取り上げるのは、古今集の時代の和歌に、他には見られないけれども、それをあえて貫之が利用したと思われる漢詩表現である。彼がそうした漢詩表現をいかにして和歌に詠み込んでいったのか、その工夫の様子を見ることが、貫之の漢詩文表現摂取の態度について考える。

#### 2 「かには桜」の歌の解釈

かには桜

かづけども浪のなかにはさぐられて風吹くごとに浮き沈む玉

(古今集 物名 四二七)

この歌の解釈には未だ定説を見ていない。ことに、結句の「浮き沈む玉」の解釈は一定していない。以下にまずこの部分の解釈に関する諸説を示す。

①水の泡説 「うきしづむ玉とは、水のあはあはのつぶくと玉の様にうかぶをいふなり。」

『兩度聞書』他

②水しづき説 「海ニ浪ガ立テ水玉ノチツテキエルノハ玉ノヤウナガ…」

『古今和歌集遠鏡』他

③波説 「玉といへるも浪の事也。」

『古今余材抄』他

④花の影説 「水中に映つて波にゆれている花の影を玉にたとえたのである。」

『日本古典文学全集』

①の、水の泡説について考えてみると、水の泡のことを玉と言った例は、

みよしののよしののたきにかびいづるあわをかたまのきゆと見つらむ

(古今集 物名 四三二)

のように、「かづけども」の歌と同じ古今集物名の歌に見られる。しかし、

流れての世をもたのまず水のうへのあわにきえぬるうき身とおもへば

(後撰集 雑一 一一一五)

かくれゐてわがうきままを水のうへのあわともはやく思ひきえなん

(後撰集 雑二 一一五三)

これらの歌の傍線部のように、水の泡は生まれたかと思う間に消えてしまうものとして詠まれている。ここで、「かづけども」の歌に用いられている「浮き沈む」という表現について見ると、

あかずしてきみをこひつるなみだにはうきしづみつやせわたりつる

(古今和歌六帖 二〇九四)

きみこふとわれぞなかれていはるべきなみだのかはのうきしづみつ

(元真集 二八六)

みつしほの末はをあらふながれあしのきみをぞおもふうきしづみつつ

(康資王母集 四)

わたるらんかたししらねばうきしまのうきしづみたるこひもするかな(能宣集 五二)

傍線を付したように、動作の反復を示す「つつ」や継続を示す「たり」が下接したり、

たれにより世をうみ山に行めぐりたえぬなみだにうきしづむみぞ (源氏物語 濔標)

おきそふるつゆとともにほきえもせで涙にのみもうきしづむかな(大弐三位集 五九)

のように「絶えぬ」や、「消えもせで」という表現とともに用いられていることから、「浮き沈む」とは、相当の長い間持続するものであることがわかる。したがって、つかの間に消えてしまう水の泡を「浮き沈む」と言うことは、そぐわないように思われる。そもそも、水の泡は、水の上に浮くものであるから、「沈む」という言葉とはやはり相容れないであろう。

次に、②の水しぶき説の根拠となるのは、

浪のうつせみればたまぞみだれけるひろはばそでにはかなからむや

(古今集 物名 四二四)

いかにして数をしらまし落瀧つたきのみをよりぬくる白玉 (貫之集 三三三)

など、水が激しく流れる、あるいは、波が海岸に打ち寄せる際、しぶきが飛び散っている様を捉えて「玉」と表現した例が見られることと思われる。ところが、「浪のうつ」歌で「拾ったとしたら、袖の上ではかなく消えてしまうだろうか」と言っているように、これも①の水の泡と同じく一瞬にして消えてしまうものであり、持続する性格を持つ「浮き沈む」という表現とはそぐわない。

また、③の波説については、今のところ、波そのものを「玉」と喩えた例は管見には入らない。また、仮にこの説に従って一首を解釈しようとしても「浮き沈む」というのが具体的に波のどのような状態の喩えなのかわかりにくい。さらに、玉であるところの波自体を波の中で探ることができないというのも理解しにくい。

④の、水に映った花の影説については、この解釈には、桜の木が水辺に立っているという想定が必要である。しかし、題として示された「かには桜」には、そうした必然性は見いだせない。したがって、この説にもやはり不満が残る。

以上のように、「浮き沈む玉」の従来の解釈は、いずれも十分には納得しがたいものである。ただ、日本古典文学全集の、「玉」がしぶきや泡などではなく、「かには桜」の花に関わるものとする解釈は注目すべきものと思われる。なぜなら、古今集の物名歌では、

心から花のしづくにそほちつうくひずとのみ鳥のなくらむ

(古今集 物名 四二一 うぐひす 藤原敏行)

我はけさうひにぞ見つる花の色をあだなる物といふべかりけり

(古今集 物名 四三六 さうび 貫之)

などのように、題の言葉を歌に詠み込むと同時に、歌の内容も題に即して詠まれたものも見られるからである。当面の歌も、題の「かには桜」のことを詠んだものと考えたと、一首に詠まれたイメージが読み取れるように思われる。

さて、当該の歌の「玉」は「風吹くごとに浮き沈む」と詠まれているが、「風吹くことに」という表現は、水ではなく草や木にふさわしい表現であるらしい。以下に「風吹くことに」の例をあげる。

やよひばかりに物のたうびける人のもとに

又人まかりつつせうそこすとききてつかはしける

露ならぬ心をおきそめて風吹くごとに物思ひぞつく

(古今集 恋二 五八九 貫之)

これは、風が吹くごとに花が揺れて、花に置いた露が危うくも落ちそうになる、その様でもって、女の許に他の男がかよっているという話を聞かされた時に不安のつる気持ちを表わした歌である。また、

おもひつつふるやのつまのくさもきもかぜふくごとにものをこそおもへ

(好忠集 四七二)

この歌でも、物思いを繰り返して時を経る心の動揺を、風が吹くたびに揺れる草木に喩えている。また、時代は下るが、

なにと又風ふくごとにうらみても花にしられぬ物おもふらむ(新後撰集 春 一二六)  
さくらさくよしののおくにすむ人は風ふくごとにものやかなしき

(現存和歌六帖 五八八)

などは風が吹く毎に桜が散ってしまうことを詠む。これらの例からすると「風吹くごとく」という表現は、風が吹くたびに揺れたり散ったりする草木や花と結びつく表現だと考えられる。

一方、風と波との関係はどうであろうか。

風吹けば沖つ白波龍田山夜半にや君がひとり越ゆらむ

(伊勢物語<sup>注2</sup> 二十三段)

のように、風が吹いて波が立つという例は多い。しかし、風が吹いたり止んだりするその一々に反応して波が立ったり収まったりするという例や、何らかの反応を見せると表現した例は見られないようである。

以上のことから、問題の「かづけども」の歌は、実際の水の波について詠んだものではなくて、風が吹くごとに揺れ動く「かには桜」のことを詠んだものではないかと考えてみたい。

ここで、風と桜を詠む貫之の歌をあわせて考えてみる。

さくら花ちりぬる風のなごりには水なきそらに浪ぞたちける

(古今集 春下 八九 貫之)

この歌は、彼の代表的な秀歌として評価される歌であるが、彼には、

吹風にさくらのなみのよる時はくれ行春を空かとぞ思ふ

(貫之集 八五八)

のように「桜の波」と熟して用いた例もあることから、桜の花びらの風に舞う様を波と喩えることは、貫之にとって一つの完成された表現であったと思われる。そうすると、当面の歌においても、「波」は風に吹かれて空中を舞う「かには桜」の花びらのことだという可能性がある。

そのように考えて、「浮き沈む玉」を、「かには桜」についての何らかを喩えたものと想定してみたい。では「玉」は「かには桜」の、どのような様子の喩えであるのか。

この「かには桜」の实体は今のところよくわからない。<sup>注3</sup>ただ、

はるかすみ立ちみつをみてにはかにはさくらははなとおもひけるかな

はるかにはさくらははなとみゆれどもいりてのそきはひろくぞありける



では、「樺桜花」という題で「かにはさくらのほな」を詠み込んでおり、「樺桜」と同じものであること、また、

吹かれくるかには桜ぞそひて来る春をおくれるにほひなるべし

(延長八年以前春) 近江御息所歌合(廿卷本) 四)

ほかの花はひとへちりて八重さく花桜さかりすぎてかばさくらはひらけ、藤はをくれて色づきなどこそはすめる

(源氏物語 幻)

これらの例からは、比較的遅く開花するらしいこと、そして、『本草和名』の

櫻桃。一名…朱櫻…和名波々加乃美、一名加爾波佐久良乃美 (本草和名 菓部)

という記述からは、それが実のなる桜であったことなどがわかる。この実については、前掲の宇多院物名合の題で、単に「樺桜」と言わずに「樺桜花」という言葉が用いられていることから、「かには桜」と言えば、「花」だけではなく「実」も意識されていたことが考えられる。

この桜の実については、「楊柳花飄新白雪、櫻桃子綴小紅珠。」(千載佳句 暮春・白氏文集卷六十四「酬舒三員外見贈長句」)や、「如珠未穿孔、似火不燒人。」(白氏文集卷十九「與沈楊二舍人閣老、同食勅賜櫻桃、翫物感恩、因成十四韻」)などのように、漢詩ではしばしば「珠」に喩えられている。しかも、これらは白氏文集の詩句であったり、千載佳句に採られているものであったりするから、平安時代にはよく知られていた表現であったと考えられる。また、芸文類聚菓部櫻桃の項に「博物志、櫻桃者或如彈丸。」とあることも、あるいは貫之の脳裏にあったかもしれない。これらのことから想像するに、貫之は「かには桜」という題が与えられたとき、その桜は、その実において特徴的であることをまず想起し、その実を眼目として一首を詠むこととした。そして、漢詩においてしばしば桜の実のことを「たま」に喩えることに倣い、一首を「たま」の比喩で仕立てようとしたのではないだろうか。このように考えると、一首は桜の花びらが風に舞う様子を「波」と言い、その実が枝の先でゆらゆら揺れる様子を「浮き沈む玉」と言ったものとして、まずは理解できる。先に引用した芸文類聚櫻桃の項には「倒流映碧叢、點露擊朱実。花茂蝶争来、枝濃鳥相失。」(梁簡文帝「奉答南平王

賚朱桜詩」と、花と実を同時にうたう例も見られる。

ところで、前掲の宇多院物名合の歌が、かには桜には花も実もありながら花を題とし、源氏物語や近江御息所歌合の例が花を描写したものであったように、当時一般には、かには桜の歌として期待されるのは、実ではなくその花を詠むことであつたらう。平安時代の文学作品では、かには桜の実に着目した表現は、今のところ見出せない。平安和歌においては、かには桜に限らず、例えば梅のように実のなる木でも、詠まれるのはまず花である。そのような状況の中で、実と指定されていない「かには桜」の題を詠んだ歌は、やはり花を詠んだものと受け取られるだろう。貫之の歌のように、一首がすべて見立て・比喩で構成された歌では、なおさら実を詠んだものとは理解されないであろう。貫之は、かには桜の題に、他の桜にはない特徴的な実を眼目として、通常の桜（花）の題の場合には構想し得ない歌を詠もうとしたが、実をそのまま「たま」として、歌の眼目とするには無理があつたということではないだろうか。

そこで、「たま」について別の解を検討してみる。漢詩の例を探ると、花のことを「珠・玉」と言う例がある。「春樹花、珠顆、春塘水、麴塵。」（白氏文集卷六十四「洛中春遊呈諸親友」）、「花攢屋上紅珠、顆、笋、滿籬根紫玉、簪。」（千載佳句 暮春 無名）、「可憐金鏡轉庭上玉房馨。」（菅家文章一「月夜見梅花」）、「青絲繆出陶門、柳、白玉裝成、庾嶺梅。」（和漢朗詠集 梅 大江朝綱）など、貫之の時代にもよく知られていたであろう詩文の中に、このように多くの例を見ることが出来る。貫之がこのような詩文の表現に思い至って、かには桜の花を「たま」と見立てようとした、と考えてみよう。その場合、風に舞う花のことを「波」と言い、また、その花を「たま」と喩えた、ということになる。そのような表現はあり得るのだろうか。

花と散り玉と見えつつあざむけば雪ふる里ぞ夢に見えける

（新古今集 雑下 一六九五 菅原道真）

これは、雪が、散る「花」に喩えられ、また、「玉」とも見えると詠む。このように、一つのを二種のものに喩えるという例は他にも見られる。ただ、この場合は、ある時は「花」となったり、ある時は「玉」と見えたり、それが繰り返すと説明されているのであつて、貫之の歌のような何物かが同時に二種のものに見えるという表現の万全な証歌にはできない。

以上、様々に検討してきたが、「浮きしづむ玉」が「実」なのか「花」なのかは、現段

階ではどちらと決められない。彼の発想のもととなったのは、やはり、「かには桜」ならではの特徴である「実」であり、思い描いたイメージは、ゆらゆらと揺れる花びらの波の中をゆらゆらと浮き沈む実の玉であったのだろう。しかし、歌の表現の中に「実」のことを全く指示しない場合、「花」を詠むものと受け取られることに、当然、思い至っていたであろう。では、眼目が「実」だと受け取ってもらいたくないならば、その理解を導く説明を歌の表現に加えておくべきである。貫之にそれができなかったということは考えられない。そのように詠んでいないということは、「玉」が、漢詩文の表現の影響の下で「花」と見られることを容認していたと考えられる。

かくして一首を、風に舞うかには桜の花の波という幻の海の中に潜っても、それは、花が玉のように見えているのだから、本当の珠は手に触れることができない。風の吹く度に、ゆらゆらと揺れて浮き沈む、その美しい「たま」という幻想的なイメージを作り出したものとして理解したい。

### 3 和歌に利用されにくい漢詩文表現のあること

ここまで、貫之の「かには桜」の歌は、花や実のことを「たま」と喩える漢詩の表現を学んだものであると考えた。しかし、この表現は古今集の時代の和歌に他には見られないようである。これに限らず漢詩の表現として当時よく知られていたと思われるもので、和歌には見えないものがある。この時代の和歌は漢詩の表現をたいへん旺盛に摂取していたのだから、漢詩の表現としてよく知られているにもかかわらず和歌には利用されていないものは、単に思い付かれなかったのではなく、基本的には何らかの理由があつて使用が避けられたと考えるべきだろう。

例えば、今取り上げた、花を「たま」と喩える表現は、

ほととぎす棟の枝に行きて居ば花は散らむな珠と見るまで

(万葉集卷十七 三九一三 大伴家持)

のように、かつては和歌に用いられたものである。それが古今集の時代に引き継がれなかったのは、単に忘れられたというのではなく、何らか和歌への利用に不都合を感じる点があつたためだろう。

「たま」とは、漢詩文では、具体的にはヒスイやメノウなどの宝玉のことを意味する「玉」

と、真珠などを意味する「珠」とが考えられる。「玉」の場合、「一樹寒梅白玉條、迴臨村路傍溪橋。」(盛唐 張謂「早梅」)や「未許瓊華比、從將玉樹親。」(中唐 韓愈「春雪間早梅」)の「玉條」や「玉樹」のように、その質感や光沢、美しさに着目して「玉」と喩えるので、丸くはないものでも「玉」と言い得る。それに対して和語の「たま」は、前に示したように、水の泡やしぶき、また、

あさみどりいとよりかけてしらつゆをたまにもぬける春の柳か(古今集春上 二二)  
つつめども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬめの涙なりけり (古今集恋二 五五六)

など、しばしば露や涙の喩えに用いられる。これらの例からもわかるように、和語「たま」は、丸いという形を条件として含んでいるらしい。そうすると、漢詩で「花」を「玉」と喩えることに倣い、和歌で花のことを「たま」と言おうとしても、和語の「たま」という言葉の持つ丸いというイメージが花とはそぐわなかったために、「花」を「たま」とは言いにくかったのではないかと想像される。古今集の時代の和歌には、花のことを丸いと表現した例は見られないようであるから、そのように言ってよいだろう。次に「珠」の場合は、漢詩文においても丸いものを指す。ここで、花のことを「珠」と喩えた漢詩の例を見てみると、およそ二つの場合に分けられるようである。「春樹花珠顆、春塘水麴塵」(白氏文集卷六十四)が、池を隔てて花を望むというように、遠景として花を眺める場合と、「今日韜光珠顆綴、明朝被酒醉顏酣」(田氏家集)卷下「桜花欲發」のように花の蕾を表現する場合である。さて、和歌で花を遠景として見る場合、花の木々の全体を「霞」や「雲」に喩えるのが通例であり、花の一つ一つに注目して詠んだ例はなさそうである。また、蕾を歌う和歌は、平安時代の前、中期には見いだせない。従って、花を「珠」と喩える表現も古今集の時代に和歌には詠みにくかったものと考えられる。

#### 4 漢詩文表現の撰取と貫之の和歌創作の態度

ここまで、貫之は「かには桜」の歌において、和歌の通例になじまないために使われなかった漢詩表現を用いていると考えた。では、それはどのような意図によるものであったのだろうか。

この貫之の歌では、喩えるものと喩えられるものの関係は歌の言葉には明示されていない。歌の題の「かには桜」を考え合わせることによってはじめて、「たま」とは本当の玉ではなく、「かには桜」の実あるいは花のことを喩えたものだと思われるような詠み方がさ

れている。

このように、かには桜の実あるいは花が「たまのように見える」という直喩になっていないのは、彼もやはり「実（花）がたまのようだ」と詠むことに抵抗を感じたためと思われる。しかしながら彼はそのために、かには桜を玉と喩えることを捨て去ってしまったのではなく、「かには桜」と「たま」との関係を具体的に言わずに、かには桜を波と玉に見立てた幻想的な美しいイメージの一首をつくりあげたのである。

このことは、そのままでは利用しにくい表現であっても、そこから生じる美しいイメージを、なんとか自分の和歌に利用したいという姿勢が貫之には強かったことを示すものと考えられる。

本論文第一部第一章第二節で、貫之が万葉集においては人の死を悼む挽歌に用いられている「紅葉の多い山路に惑ふ」という表現を、そのイメージの美しさのために晴れの歌である屏風歌や、あるいは恋の歌に用いたのではないかと述べた。これも今述べたことと一連の作歌態度によるものと思われる。

また、貫之の歌に特徴的なこととして、美しいイメージをもった歌が多く見られることや、同一のイメージに基づく類型的な歌が繰り返し詠まれることが通説となっているが、それも今述べたような、彼の、美しいイメージに対する執着の強さによるものと思われる。このような、和歌を詠む際にそのイメージを重視する姿勢は、四季の移りかわりや恋の経過を順を追って描き出し、季節や恋の有様をある一定のイメージでもって作り上げた古今和歌集のありかたにも繋がるものであろう。

#### 注

- 1 渡辺秀夫氏「紀貫之の和歌と漢詩文」(『平安朝文学と漢詩文』)などにその実例の指摘がある。
- 2 伊勢物語の本文は角川文庫『伊勢物語』による。
- 3 風巻景次郎氏「桜桃攷」(『日本文学史の研究』下)、石田穰二氏「かばさくら私記」(『源氏物語論集』)などの論考があるが、いずれも具体的に実体を確定するに至ってはいない。なお、現在言う「樺桜」は、後世に生じた種で、平安期のものとは別である。
- 4 近江御息所歌合の本文は「平安朝歌合大成」による。
- 5 千載佳句の本文は、金子彦二郎氏『平安時代文学と白氏文集』句題和歌・千載佳句

研究篇による。

- 6 白氏文集の本文は『白氏文集歌詩索引』所載の那波道円本による。
- 7 芸文類聚の本文は宋の紹興刊本の影印により、私に訓点を施す。
- 8 菅家文章の本文は岩波書店日本古典文学大系による。
- 9 なお、この家持の歌が漢詩の表現によっているとの指摘は従来なされていないようである。しかし、花のことを「玉」と喩える表現は、七世紀後半の詩人王適などにも「忽見寒梅樹、開花漢水浜。不知春色早、疑是弄珠人。」（詠江浜梅）のように見える、そして先に示したように後代の日本の漢詩にも見られることからして、家持がこの漢詩の表現を知っていたと考えるほうが自然かと思う。
- 10 漢詩の本文はことわらない場合、中華書局版『全唐詩』による。
- 11 田氏家集の本文は本文は『田氏家集注』（和泉書院）による。

第二節 万葉集との態度の違い — 「流るる雪」を例に

1 「流雪」という表現が古今集の時代になって和歌に用いられなくなったこと

本節では、紀貫之の、

さくらははなの水にちるをみて

ゆくみづに風のふきいるゝさくら花きえずながるゝ雪かとぞみる

(古今集 元永本<sup>註1</sup> 春)

という歌をとりあげる。この歌は、古今集の元永本、清輔本系統の伝本には収められていないが、定家本系統の諸本には見えない。それについては後述するとして、ここではこの歌の第四句「ながるゝ雪」について検討し、彼の漢詩表現摂取の際の工夫の様相について考えてみたい。

さてこの「ながるゝ雪」という表現には、

卷向の檜原もいまだ雲居ねば子松が末ゆ沫雪流る

(万葉集 卷十 二二二四 人麻呂歌集)

我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも

(万葉集 卷五 八二二 大伴旅人)

など、万葉集にいくつか類例が見られる。右の大伴旅人の「我が園に」歌について小島憲之氏が「雪の流れくるかも」は、詩の「流風」「流霞」「流雪」などの「流何」の應用であり(その一例、文選洛神賦「飄飄兮若<sup>ゴトシ</sup>流風之廻<sup>レ</sup>雪」 宋 鮑照、代堂上歌行「朝光散<sup>ニ</sup>流霞<sup>一</sup>」、梁裴子野、上朝值<sup>レ</sup>雪詩「流雲飄<sup>ニ</sup>繡桂<sup>一</sup>」、隋 王衡、翫雪詩にも「皎潔隨<sup>レ</sup>處滿、流亂逐<sup>レ</sup>風廻<sup>一</sup>と見える。」と指摘されるとおり、雪について「流る」と言うのは漢詩に由来する表現である。

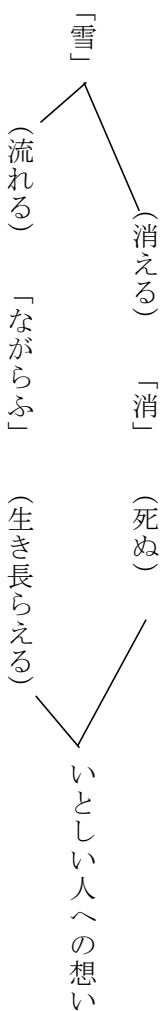
また、

あわ雪の消ぬべきものを今までに流<sup>ながらへぬるは</sup>経者妹に逢はむとぞ

(万葉集 卷八 一六六二 大伴田村大嬢)

天霧らひ降り来る雪の消なめども君に逢はむと流<sup>ながらへわたる</sup>経度

これらの歌に用いられた「ながらふ」は、命が「生き長らえる」という意味であるが、万葉集の諸注が言うように、雪の縁語として「流る」という語が持ち出されたものである。これら二首は、いとしい人への想いという一つの原因のために「消」(死ぬ)と「長らふ」(生き長らえる)という相反する二つの結果が生じる、あるいは生じそうになることを趣向として歌ったものであり、さらに、「消(ぬ)」と「ながらふ」という二つの言葉が「雪」という一つの言葉によって導き出されているという修辞上の面白さをねらったものと考えられる。これを図示すると、次のようになるだろう。



このような修辞が成立するということは、万葉集の時代には一般的に「雪」という言葉から「流る」という言葉が、連想されやすいものであったことを意味するだろう。つまり、この時代には「雪が流れる」という表現は相当程度一般的だったと推測されるのである。ところが、古今集の時代の和歌には、冒頭にあげた貫之の歌の他にこの表現を見つけないことができない。<sup>注3</sup>これはいったい何を意味するのだろうか。

「雪が流れる」という和歌表現のもととなったと思われる漢詩の一つとして、芸文類聚(歳事部 冬)の、

繁雲<sup>ハ</sup> 起<sup>コ</sup>重陰<sup>ヨ</sup>、廻飈<sup>ハ</sup>流<sup>ス</sup>輕雪<sup>フ</sup>。

(宋 謝惠連<sup>注4</sup>「詠冬」)

という例が指摘されている。<sup>注5</sup>この例などは、古今集の当時の人々にも当然知られていたものであろう。そうすると、万葉集の時代によく知られ、また利用もされており、漢詩文表現として親しく接していたであろう「雪が流れる」という表現が、古今集の時代になって、何らかの理由で使われなくなったのである。

このことについて、万葉集の伝承歌の例を見てみたい。

先にあげた人麻呂歌集の「巻向の」歌には、平安時代にまで伝承されたと見られる歌がある。

まきもくのひばらもいまだくもぬねばこまつが末にあは雪ぞ降る



(古今和歌六帖 七五四)

この歌では万葉集の「流る」という語が「降る」に変化している。<sup>注6</sup>他に、人麿集・家持集にも同じ伝承歌が見えるが、いずれも結句は「あは雪ぞ降る」である。これは、平安時代には〈雪が流れる〉という万葉歌の表現ではなく、〈雪が降る〉の方が受け入れられたことを意味するだろう。

また、よく似た例がある。

春霞流るるなへに青柳の枝くひ持ちて鶯鳴くも

(万葉集卷十 一八二一)

これは、先にあげた小島憲之氏の論で「流○」の応用として示された漢語表現のうちの一つ、「流霞」によるものである。この万葉歌の伝承歌とおぼしいものが、古今和歌六帖に、

打なびき春さりくれば青柳のえだくひもちてうぐひすなくも

(古今和歌六帖 四三八六)

という形で見えている。この歌は古今和歌六帖の他に、人麿集・赤人集・家持集にも見えるが、いずれも〈霞―流る〉という言葉を残していない。

このような歌の伝承の過程で起る語句の変化の要因としては、単なる誤りや記憶違いを除けば、一般に二つのことが考えられよう。一つにはわかりにくい形がよりわかりやすい形やなじみのある形に改められるもの、そしてもう一つは歌を再利用する場に適応させるためのものである。この「霞」や、「雪」が〈流る〉という万葉歌の表現が、伝承の過程で形を変えていることは、それらの表現が平安期の人々にとってわかりにくい、なじみにくいものだったことを示しているのだろう。

では、〈雪が流る〉の、どのような点がなじみにくいものであったのだろうか。

古今集中の〈流る〉という語について見ると、約三〇例のほとんどが川(水)・潮・川面に浮かんで移動するもの・そして涙について言う。他には、名、そして水(川)の縁語仕立ての表現で、月が流るといふ例があるが、〈流る〉のイメージは、ほぼ限定されている。では、その限定された〈流る〉のイメージはどのようなものであったのか。「流る」が比喩として用いられた例から考察してみる。

かはらけあまたたびながれ、みな酔ひになりて

(源氏物語 行幸)

これは、酒宴の席で、上位の者から順にまわされる盃が、身分の高い者から低い方へゆるやかに移動するさまを「流る」と言っている。また、

あなたうと仏法東にながれてさかりに我国にとゞまり、あとをたれる聖者おほくあらはれ  
(観智院本三宝絵 中序)<sup>注7</sup>

これも、天竺を源流とする仏の教えが、大きな川の流れるように蕩々と流れ、下流である我が国まで伝わってきたことを表現している。さらに、

南ならずは東の廂の、板の影見ゆばかりなるに、あざやかなる畳をうち置きて、三尺の几帳の帷、いと涼しげに見えたるを、押しやれば、ながれて、思ふほどよりも過ぎて立てるに…  
(枕草子 一八六段)<sup>注8</sup>

この例では、床がつるつるに磨かれていたために、狙った場所を通り過ぎて、几帳が緩やかに滑って行く様子が「流る」と表現されている。そして几帳は、何かに当たって跳ね返ったり、はじめから目標を逸れたりしたのではなく、押し手のところから、狙った目標の位置へ、さらにその延長線上へという一定の方向性を持って移動している。

これらの例から、「流る」という言葉の表す運動には、川の流れが上流から下流へと向かうように、高いところから低い方へと一定の方向性を持ち、間断なく、比較的緩やかに移動するという要素が抽出できると思われる。

ところが、中国で雪について「流」といった例は、先に挙げた小島憲之氏が引用された王衡の翫雪詩「皎潔隨處滿、流亂逐風廻」、また、芸文類聚に載せる宋謝惠連の「繁雲起重陰、廻飈流輕雪。」や、齊王融「遊仙詩」の「遠翔馳声響、流雪自飄飄。」(古文苑卷九)などの例を参照すると、いずれもつむじ風に吹かれて、高速度で舞い翻る雪の様子を表現しているようである。

なお、漢語の「流」には、  
千條弱柳垂青瑣、百轉流鶯繞建章。<sup>注9</sup>

(盛唐 賈至 早朝大明宮呈兩省僚友詩)

のように、枝を経巡る鶯のことを「流鶯」と言った例や、

昔者瓠巴鼓瑟、而流魚出聽、伯牙鼓琴、而六馬仰秣。  
(荀子 勸学)

のように、水中を自由に泳ぎ回る魚のことを「流魚」と言った例が見られる。これらはいずれも一定の方向性を持たない、ひらりひらりとした素早い動きである。

また、

白刃扞<sup>セバ</sup> 二乎胸<sup>ヲ</sup> 一、則目不<sup>レ</sup>見<sup>ニ</sup>流矢<sup>ヲ</sup> 一。

(荀子 彊国)

のように、空中を飛ぶ矢のように、相当な高速で移動するものについても「流」が用いられている。このような内実を持つ漢語「流」からなる「流雪」という漢詩の表現を、和語の「流るる雪」に、単純に置き換えることは、やはり難しいだろう。

では、そのような違和感の感じられるだろう(雪が流れる)という表現を、なぜ万葉集では用いたのであるうか。

そもそも、漢詩文の表現を和歌に用いるということは、従来の和歌にはない、新しい発想や表現を求めていることであつたと思われる。したがって、そのような意識の強い時には、多少の違和感を覚えるような発想や表現であつても、それは、漢詩文に由来する特別なもの<sup>注12</sup>として、和歌に試みられることがあつたのではないだろうか。

よく知られた例であるが、漢詩によまれる七夕の説話では、織女が彦星のもとを訪れるのにもかかわらず、それが和歌に詠まれる時には、およそ逆の形となる。これは、男性が女性のもとを訪れるという日本貴族の生活に合致するようにして和歌が詠まれたためと考<sup>注12</sup>えられている。ただ、万葉集では、

天の川棚橋渡せ織女はい渡らさむに棚橋渡せ

(万葉集 卷十 二〇八一)

たなばたし舟乗りすらしまそ鏡清き月夜に霧立ちわたる

(万葉集 卷一七 三九〇〇 大伴家持)

のように、女が男のもとへいく、漢詩表現と同じ形で詠まれた歌も見られる。七夕の会合を歌に詠もうとする時、漢詩文の表現のことを強く意識したならば、現実の習慣とは違うものであつても、女が男のもとへいくという形で歌を作ることがあつたわけである。そして、そのようにして詠まれた歌は、有名な中国の伝承を踏まえたものとして、特に違和感なく鑑賞されたのであろう。

今の例は、歌の素材・発想が日本の現実の習慣に合わない場合のものであるが、同様のことが語句のレベルにおいてもあると思われる。

例えば、前節で述べたように、

青絲締<sup>リ</sup> 出陶門<sup>ス</sup> 柳、 白玉装<sup>ヒ</sup> 成<sup>セザ</sup> 庚嶺<sup>ノ</sup> 梅。 (和漢朗詠集 梅 九〇 大江朝綱)

など、漢詩文においては「花」のことを、その美しい色艶から、美しい宝玉を意味する「玉」と喩えることがある。そのような漢詩の表現を撰取して詠んだものが、大伴家持の、

ほととぎす棟の枝に行きて居ば花は散らむな玉と見るまで

(万葉集 卷十七 三九一三)

の、棟の花の散るさまを「玉」と喩えた歌である。しかし、漢語の「玉」に置き換えられる和語の「たま」は、丸いというイメージを持っており、丸くはない花のことを「たま」になぞられることには違和感が感じられ、一般には受け入れられず、広く詠まれるようにはならなかった。右の家持の歌は、漢詩文表現の撰取を試みること自体を共有できる、限られた範囲の人々の中で享受されたのではないだろうか。そのような状況で漢詩文の表現が、そのまま和歌に利用される場合があったものと思われる。<sup>注13</sup>

今問題とする〈雪―流る〉という表現も、そのような状況の下、万葉集の和歌に用いられ、それが人々に受け入れられて、先に「ながらふ」の歌について確認したような広がり<sup>注13</sup>と応用を見せているのだろう。

ところが、一旦そのような状況になると、この〈雪が流れる〉という表現が本来漢詩文に由来するものであるということを意識されなのまま和歌に用いられ、また、享受されることも起こるだろう。そして、そのような目でこの表現を見た時には、漢詩文表現を利用したことへの評価がないのであるから、単に違和感のある言い方と受け取られる。そうすると、この表現を用いた歌は語句が改変されたり、一首全体がかえりみられなくなることが想像される。実際、先に見たように、雪が「流る」という表現を用いた万葉歌が平安時代に伝承されたと思われる例では、「流る」という部分が別の語に改変されていた。

## 2 貫之が「流雪」を和歌表現に用いた理由

以上、万葉集に見られる、漢詩文の表現に学んだ〈雪が流れる〉という表現が、古今集の時代には、和語「流る」の語義・語感と雪の降るさまとの違和感のために、和歌には用いられなくなったのだろうということを見てきた。

それでは、冒頭に示した、貫之の、

ゆく水に風の吹き入るる桜花消えず流るる雪かとぞ見る

の歌について、あらためて考えてみたい。

この歌には「流るる雪」という表現が用いられているが、これは比喻であり、示されるところの実体は川水に風で吹き入れられて水面に浮かんで流れていく桜の花びらであるとまずは了解される。「流るる雪」の部分には違和感が感じられるかもしれないが、一首全体として解釈すれば、流れるものは川水に浮かぶ桜の花びらで、これは和歌表現として見慣れた光景を描いたものである。つまり、「流るる雪」という新奇な言葉続きを、違和感のないなじんだ趣向のなかに、言わば包むように置いている。これは、貫之の工夫と思われる。このような工夫をしたのは、水面に浮かんで流れていく桜の花びらを雪に喩え、雪のようなのに水面に落ちても消えない、という趣向を一首に仕立てることとともに、やはり、〈雪が流れる〉という表現をなんとか活かしたいという意図があったためだろう。

ところで、花を雪に喩えることは古今集時代の和歌に常套的な表現であるが、風に舞う雪を散る花に喩えることも、

霞たちこのめもはるの雪ふれば花なきさとも花ぞ散りける (古今集 春上 九)

冬ごもり思ひかけぬをこのまより花と見るまで雪ぞふりける (古今集 冬 三三二)

など、古今集にしばしば見られ、貫之自身の詠も多い。このように、風に舞う雪と舞い散る桜の花びらは互いに見立てとなり、この時代の和歌において、雪と花の渾然として舞いひるがえる一つの美しいイメージとして確立しているのである。そして、漢詩の表現「流雪」の描き出す情景は、つむじ風に乱れ飛ぶ雪で、激しきの点で差異があるものの、この、風に舞う花びらと雪によって作り出されるイメージと近似する。

また、貫之には、風に舞う花びらを「波」に喩える、次のような歌もあった。

さくら花散りぬる風のなごりには水なき空に浪ぞたちける (古今集 春下 八九)

吹く風に桜の波のよるときは暮れゆく春をそらかとぞ思ふ (貫之集 八五八)

これらの表現は、貫之が完成した一つの美的世界を描いたものと思われるが、ここに描かれる、風にひるがえって舞い散る花びらが白い波のように見える情景は、水の縁で、漢語「流雪」を想起させるところがある。

貫之は、舞いひるがえる花びらを雪とも波とも見て、その情景から、「流雪」の利用を

考えついたのではないだろうか。

先に、「ゆく水の」の歌について、〈流るる雪〉という表現をなんとか活かしたいという意図があった、と述べたが、第二句の「風の吹き入るる」に注目すると、川水に吹き入れられて、水面に浮かび流れていく桜の花びらは、水面に届くまでの間は風に吹かれて舞いひるがえっている。この歌に描かれているのは、水面に浮かぶ花びらだけではなくて、風に舞いひるがえるものから水面に浮かび流れゆくものまで、とぎれなく続いて移動していく白い花びらなのである。これは、漢語「流雪」の描き出す情景から引き出されたイメージと見える。これは、貫之が〈雪が流れる〉という表現を和歌に用いようと考えた時、「流雪」のもつイメージを可能な限り活かす方向で工夫したことを意味するだろう。

この歌が、古今集の元永本・清輔本等には見えるが、定家本系の諸本には見られないことは先に触れた。何らかの理由で古今集の最終段階に残せなかったということが考えられるが、これまで述べたようにさまざまに工夫を重ねながらも、貫之には一つの完成形とは思われなかったということであろうか。あるいは、時代としての支持を得られなかったのであろうか。

この歌は、貫之が晩年に自ら編んだ秀歌選である新撰和歌に、やや歌句を変えて収められている。

ゆく水に乱れて散れるさくら花消えず流るる雪と見えつつ

(新撰和歌 八二)

まず、「流るる雪」がそのままにあることを確認したい。

二句目の「風の吹き入るる」は「乱れて散れる」に改められている。「風の吹き入るる」では、風が花を舞い散らせて川面に吹き入れ、落下した花びらは水面に浮かんで、まるで雪が消えないままに流れてゆくのかと見まがう、と言うことになり、一首の焦点は水面に浮かんだ花びらにむけて絞られる。それが「乱れて散れる」に改められると、花の木の枝から川水の方へ舞い落ちていく、空中の花びらのさまに焦点が移動する。「風・吹く」の語はなくなったが、花が「乱れて」散るとあれば、花びらを舞い踊らせる風がそこには描かれていることになる。この新撰和歌の形では、ゆく水に散り落ちて川水に浮かんで流れていく花びらの姿はやや薄れて、風に吹き乱されながら舞う花びらが「流るる雪」と見えると解されるのである。

また、結句を「雪かとぞ見る」から「雪と見えつつ」に改めたことにより、花びらが「消

えず流るる雪」に見まがうことに詠嘆があった、つまり落花を見る人の心を描いていたものが、花びらが「消えず流るる雪」と見まがうように「乱れて散れる」ことが断続する、その光景そのものを提示することになっている。貫之は、舞いひるがえる花びらのイメージを〈水なき空の浪〉、〈桜の波〉と表現する、一つのパターンを完成させていた。その、空中を舞う花びらのつくり出す幻の波に浮かんで流れていく雪というような光景が、この一首にも明確に描き出されたのである。

この歌のものと形では、「流るる雪」の部分に違和感があると考えて、流れるものの実体は川水に浮かぶ桜の花びらという常套的な趣向として、違和感を緩和しようとする貫之の工夫があった。しかし、改変後は、空中を乱れ舞う花びらを「流るる雪」と見るのである。これは、「流雪」のイメージを、より鮮明に活かす方向への、意図的な改変と思われる。「流るる雪」の、おそらく一般読者が抱くであろう違和感への配慮は押しやられ、貫之の創作意図が優先された形となっている。

古今集編纂の際よりは、まず間違いなく自身の意志を通しやすかった新撰和歌の編纂時に、彼はこの創作意図を優先した歌を収めたのである。両集の間の長い年月のどの時点でこの改作がなされたのかはわからないが、漢語「流雪」に導かれて抱いた美しいイメージを和歌に作るべく温存していた、そのような意図を抱き続けていたと想像するのである。

### 3 貫之の和歌創作の態度 ―第一部のまとめとして

古今集の時代に〈雪が流れる〉という表現は一般にはみられない。それは当時の人々が、雪を「流る」と表現することに違和感を感じて、万葉集にあった〈雪が流れる〉という表現を捨て、漢詩文に見られる「流雪」を和歌に利用することを避けたためであろう。そのような中で貫之は、「流雪」・〈雪が流れる〉という表現を目にした時、不自然であるとしてそれを避けるのではなく、〈雪が流れる〉という表現が作り出す幻想的な光景を想像の世界で作り上げようとしたのである。

このような歌の詠み方は、まず現実の光景が先にあり、それを表現する言葉を探すという方法ではなくて、言葉の力で現実を超越した光景を作り上げようとする試みと言えるだろう。そして、この試みは、言葉は現実世界を描写するための道具であるという考えではなくて、言葉そのものが一つの世界を構築するものであることに気がついていた者の仕業と思われる。

ここまで見てきたように、貫之は、万葉歌や漢詩文などの先行する文芸を意欲的に学び、そこから見いだした、ある美的なイメージを構築する表現を、一つずつ自らのものにしていく作業を続けていたものと想像される。そうして蓄えた文芸的表現を、屏風や歌合などの場で求められる、詠歌の主題に応じて適用し、使い分けて、自らの歌を創作していたのであろう。貫之の歌には、詠まれた主題に関する具体的、現実的な描写をしたものが少なく、美しいイメージで構築された、いわば観念的なものが多いが、それはこうした創作方法のあらわれであろう。また、彼の歌には、同じ主題を詠む場合、類似する表現が繰り返し用いられることも多いが、ある主題に適用する表現は、その主題に最もふさわしいイメージを構築するものでなければならない。貫之はそのように考えたのであろう。

貫之が主導した古今集の歌風の大きな特徴の一つとして、よく言われるように、現実には即さない固定的・観念的な詠みぶりの歌が多いことがあげられる。それは、このような彼の和歌創作の態度の結果として理解できるものと思われる。また、そのように理解する時、古今風の歌々を、言葉を操ることによって作り出された理知的な作として捉えるところにとどまらず、それまでの文芸表現の蓄積の中から抽出された、美しいイメージを現出したものとして、その練り上げられた美しさを味わうことも可能になると思う。

#### 注

- 1 古今集元永本の本文は久曾神昇氏『古今和歌集綜覧』による。
- 2 『上代日本文學と中國文學』中 第五章 萬葉集と中國文學との交流。
- 3 契沖の『萬葉代匠記』（精選本）に「此集ニハ、雪ヲモ花ノ散ヲモ、流ルトヨメリ。第八第十等ニアリ。」とあり、「此集ニハ」と限定していることから、既に契沖はこのことに気がついていたらしい。なお、このことは芳賀紀雄氏が「詩と歌の接点―大伴旅人の表記・表現をめぐって」（上代文学六十六号 一九九一年）で指摘されている。

4 紹興刊本芸文類聚では作者を謝靈運とするが、『詩紀』および、遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』の説に従い、作者名を改めた。

5 芳賀紀雄氏注3論文

6 万葉集では「泡雪」、すなわち泡のように消えやすい雪であったが、平安朝以後「淡



雪」となり、三代集の頃は、表記も語義も混同されるようになっていたようである。今引用した伝承歌に関わって、口頭発表をした際に、山本登朗氏より、「このあはゆき」は、泡か淡かどちらであるのか判断しがたいが、淡雪であるならば、雪が風に舞う様子を表現したと思われる「流る」とそぐわないために、「降る」と変化せざるを得なかったのではないか、との貴重な指摘をいただいた。

ただ、和歌の実例では、後撰集四七九番に「かつきえてそらにみだるるあはゆきは物思ふ人の心なりけり」と、風に舞う「淡雪」が見いだせるので、「流る」から「降る」への変化は、雪の性質の変化に伴うものではなく、「流る」という語自体にその要因があったものと考えたい。

なお、今あげた後撰集の歌について、片桐洋一氏が、新日本古典文学大系『後撰和歌集』で、定家仮名遣いでは「泡」も「あは」と表記することから、この歌の「あは雪」が「泡雪」である可能性もあると指摘している。もしそうであれば、風に舞う「淡雪」の確かな例はなくなる。このような状況で、判断は難しいのだが、〈雪が流れる〉という表現そのものが平安時代に見られなくなることから、その変化の要因はやはり「流る」の語にあると見て、論を進めたい。

- 7 三宝絵の本文は勉強社文庫版により、私に濁点、句読点を付した。
- 8 枕草子の本文は増田繁夫氏『枕草子』（和泉古典叢書1）による。

- 9 古文苑の本文は守山閣叢書本による。なお、これも芳賀紀雄氏注3論文に既に指摘されている例である。

- 10 賈至詩の本文は上海古籍出版社版により、私に訓点を施す。

- 11 荀子の本文は古逸叢書により、私に訓点を施す。

- 12 小島憲之氏『上代日本文学と中国文学』中第五篇第九章など。

- 13 古今集のころになると、万葉集の時代以上に漢詩文的な発想・素材が多く和歌に詠まれるようになることが既に指摘されている。しかし、今回取り上げたような、漢詩文に由来するということが既に指摘されている。しかし、今回取り上げたような、いられた表現は、万葉集の方に、より多いのではないかと私は予想している。このことについては、あらためて類例を集め、それがどのような意味をもつのか検討したい。

## 第二部 新撰和歌に関する研究

第二部では、新撰和歌の歌々を読み解くことで、新撰和歌という歌集がどのような性格を持っているのか、また、貫之はどのようなことを意図してこの歌集を編纂したのかについて考える。

### 第一章 新撰和歌の性格

新撰和歌は、その序文によれば、古今集から「其勝」を「抽」くことから編纂が始まったものであり、かなりの歌が古今集と重複するが、それらの中には、歌句の改変されたとおぼしいものも多数含まれる。また、新撰和歌は詞書を一切もたないことや、歌の配列に「相闘・対偶」という形式をとることなど、歌集としての姿にも古今集とは相当に異なる点がある。本章では、これら両集の相違点や、新撰和歌の独自の形態に着目することによって、新撰和歌において和歌というものがどのように扱われ意味づけられているのか、また、同集はどのように享受することが期待されているのか、ということについて考える。

#### 第一節 一首のみで鑑賞に堪える、完結した歌の集成

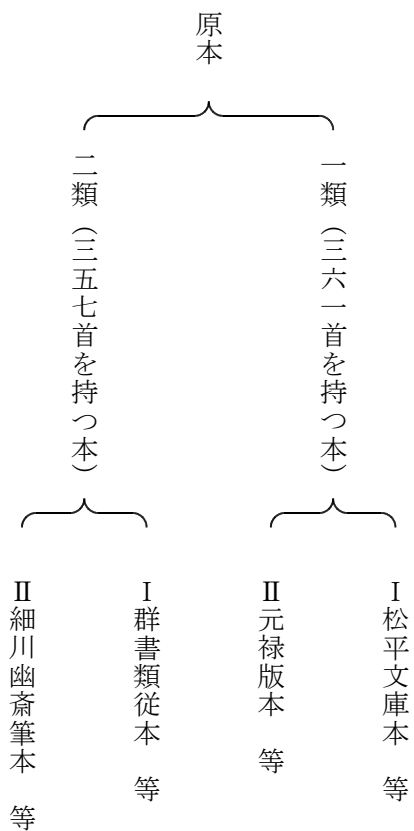
新撰和歌のうちには、古今集との重出歌が約二八〇首あるが、それらの重出歌を比較すると、古今集とは語句の異なるものが相当数見られる。本節では、これらの歌について検討することで、新撰和歌において、貫之が和歌をどのようなものとして扱おうとしているのか、見ていきたいと思う。

##### 1、和歌本文の扱い

#### 新撰和歌本文の認定

新撰和歌の現存伝本の本文については、既に<sup>注1</sup>迫徹朗氏や<sup>注2</sup>杉谷寿郎氏の研究があり、それらによれば、現存の新撰和歌諸本は二六一首を持つ本と三五七首の本との二種に分類され、

さらにその各々が二種に整理できる。今、その概略を杉谷氏の用語を借りて次に示す。



今回は右の四つの系統の代表として、従来の研究成果に従い、一類Ⅰは松平文庫本、一類Ⅱは元禄版本、二類Ⅰは群書類従本、二類Ⅱは細川幽斎筆本を選び、この四本のうち三本以上に共通する本文を、本章においては、新撰和歌の一応の定本として扱うこととした。ただし幽斎筆本は、新編国歌大観番号二〇〇番までしか現存しないので、以降は、杉谷氏の処置に倣い、書陵部本を中心にして、二類Ⅰに分類される諸本でほぼ一致するものをこの系統の本文として用いた。なお、それ以外の本文も参照し、代表とした本の本文が認めがたい理由のある場合は適宜改める。なお、掲出の際の仮名漢字等の表記は新編国歌大観に倣った。

#### 現存新撰和歌本文の問題点

右のように新撰和歌の本文を想定することとして、なお、考慮すべき問題がある。

新撰和歌の序文に「惣三百六十首、分爲四軸、蓋取三百六十日、開於四時耳」と、三六〇首の歌を選び、四巻の集に仕立てたのは、一年の日数、また、四季になぞらえたものであると記すことから、同集の原型は本来三六〇首からなっていたと考えられる<sup>註3</sup>。そうすると、現存の新撰和歌諸本はすべて、原型とは異なる本文を持つ二種の祖本——三六一首本と三五七首本——のいずれかに由来するわけである。

さらに、次のような例がある。

かはづなく井手の山ぶきさきにけりあはましもを花のさかりに (新撰和歌 九九)

この歌の三句目は、現存の新撰和歌諸本では、元禄版本等に「散りにけり」とある他は、松平文庫本・群書類従本・細川幽斎筆本等には「咲きにけり」とある。しかし、この「咲

きにけり」を新撰和歌の本文と認定するには、上句の「山吹咲きにけり」と下の句の「あはましものを花のさかりに」が内容的に整合しないように思われる。

この歌は、古今集諸本では、第三句「散りにけり」の形で見え、次に示すように、春部の山吹の歌群の末尾に配されている。

題しらず

よみ人しらず

今もかもさきにほふらむ橘のこじまのさきの山吹の花

春雨にほへる色もあかなくにかさへなつかし山吹の花

山ぶきはあやななさきそ花見むとうゑけむ君がこよひこなくに

よしの河のほとりに山ぶきのさけりけるをよめる 　つらゆき

吉野河岸の山吹ふくかぜにそのかげさへうつろひにけり

題しらず

よみ人しらず

かはづなくゐでの山吹ちりにけり花のさかりにあはましものを

(古今集 春下 一一一〜一二五)

古今集の本文では、「かはづなく」の歌は、山吹の落花を惜しみ、その盛りを見ることのできなかつたことを悔やむものとして理解される。この古今集の歌を貫之が新撰和歌に選ぶ際に、第三句を「ちりにけり」から「咲きにけり」へと改変したのでろうか。そのように考える場合、結句の「花」は桜など山吹の開く前に咲く花であり、山吹が咲き、春の終わりに至ったことで、春の花々の盛りに逢うことができなかつたことを歎く歌、と解釈することになるだろう。<sup>注5</sup>けれども、新撰和歌の配列を見ると、

かはづなくかみなび川にかげみえていまやさくらんやまぶきの花

はるさめにほへるいろもあかなくに香さへなつかし山吹の花

をりても見をらずともみむみなせ河みなそこかけてさける山吹

かはづなく井手の山ぶきさきにけりあはましものを花のさかりに

よし野がはきしの山ぶき吹くかぜにそのかげさへうつろひにけり

(新撰和歌 九三・九五・九七・九九・一〇一)

当該の歌を含む一連の歌は、他の花ではなく、山吹の花を主題として詠む歌群を構成していることがわかる。また、「かはづなくかみなび川に」の歌で山吹の開花を思いやり、「春雨に」の歌と「をりても見」の歌では咲く山吹の色香を愛で、「かはづなく」と「よし野

がは」の歌で散る山吹を惜しむ、というように、季節の推移の順に山吹の歌が配列されていると見るべきであろう。先に述べたように、「咲きにけり」の本文でも解釈は可能であり、だからこそ、不審な点のある本文であつても新撰和歌伝本の書写者たちもそのままの形を伝えたのであろうが、やはり、新撰和歌の本来の第三句は「散りにけり」だったのではないか。<sup>註</sup>

同様の例が他にも見られる。

なにはがたおのがたもとをかりそめのあまとぞわれはなりぬべらなる

(新撰和歌 二七七)

この歌の、二、三句目「たもとをかりそめの」という言い方は、このままでは解釈に苦しむ<sup>註</sup>ものである。この部分は古今集諸本では、

なにはがたおふるたまもをかりそめのあまとぞ我はなりぬべらなる

(古今集 雑上 九一六 貫之)

のように、二句が「生ふる玉藻」となっており、上の句は「難波瀉に生える玉藻を刈る、かりそめの海人」と素直に読むことができる。そうすると、かなで書写すれば「おふるたまも」と「おのがたもと」の字形が類似していることをあわせると、これも現存新撰和歌の伝える本文は誤写の結果である可能性が高いのではないか。

また、

足引の山したみづのうづもれてたぎつこころをせきぞかねぬる

(新撰和歌 二一〇)

は、古今集(四九一) 諸本では三句「木隠れて」とある。現存の新撰和歌のように「山下水」が「埋もれ」というのでは、

木葉ちる山下水のうづもれてながれもやらぬ物をこそおもへ(定家八代集抄 九七四)

のように、流れが滞ることになり、「たぎつ」の序とはならない。そうするとこの「うづもれて」にも誤写がある可能性<sup>註</sup>が考えられる。

右に見てきたとおり、新撰和歌原本のものとは考えにくい本文が、三六一首の歌を持つものと三五七首の歌を持つものという、明らかに系統を異にする伝本間に共通して見られ

ることから、現存する新撰和歌の諸本は原本とは異なる本文を持つ共通の祖本を持っていることが推測される。そうすると、現存伝本間に異文がなくても、ただちにそれが新撰和歌原本の形とは断定できないわけである。

### 古今集本文の扱い

一方、古今集諸本の間で大きく本文が対立する歌の場合は、ほとんどの場合、新撰和歌の諸本間でも同様の本文対立が見られること<sup>注1</sup>もあり、問題の複雑化を避けるため、さしあたり、以下の考察の対象からは除外した。このことについては、古今集の伝本の問題も含め、改めて考察したい。<sup>注1,2</sup>

以上のように考えて、新撰和歌諸本間でほぼ異文がなく、また古今集諸本間でもおよそ異文の見られない歌について語句の比較をしたところ、およそ三〇首に語句の違いが認められる。この歌の数は、古今集と新撰和歌の重出歌、約二八〇首の一割強であり、これらの歌の語句の違いに一定の傾向が認められるなら、それは新撰和歌編纂の際の意識的な改変の結果であると言えるのではないか。

もちろん、先に述べたように、現存の新撰和歌伝本は、原本とは異なる本文を持つ共通の祖本に帰するものと思われる。そうすると、以下の考察は貫之の意図ではなく、現存の新撰和歌諸本の祖本の筆写者の意図もしくは誤りを読み解こうとするものである可能性もある。しかし、結論を言えば、全体として、集のあり方そのものに関わる、つまり編纂者の意図によるものではないかと思われる一つの傾向が見て取れるように思う。

### 2、本文改変の諸相

#### 詞書の省略に関わる改変

周知のように、古今集とは異なり、新撰和歌には詞書が記されていないのであるが、詞書の省略と一体の改変として歌の語句が変えられたらしい例が見られる。

山のさくらを見てよめる

そせい法し

見てのみや人にかたらむさくら花てごとをりていへづとにせむ

(古今集 春上 五五)

という古今集の素性の歌が、新撰和歌では次に示す歌群の中に○印をつけた位置に置かれ、三句目が異なる形でおさめられている。

山ざくらわが見にくければはるがすみみねにも尾にもたちかくしつ

たがためのにしきなればか秋ぎりのさほの山辺をたちかくすらん

○見てのみや人にかたらむ山ざくら手ごとにをりていへづとにせん

やまのはにおれるにしきをたちながら見てゆきすぎんことぞくやしき

見る人もなき山里のさくら花ほかのちりなむのちぞさかまし(新撰和歌 四五〇四九)

既に指摘されるとおり、新撰和歌の四季の巻は、同じ主題の歌、あるいは同じ言葉の詠み込まれた歌が連続的に配列される傾向が強い。この例では前後に配された歌はいずれも山の景物を詠んだものである。そして、春の歌だけで見れば、四十五・七番の歌の「山桜」、四十九番の歌の「山里の桜花」と、同じ素材が連続して詠まれている。そうすると、これも既に諸先学が指摘する<sup>注15</sup>ように、この歌は新撰和歌編纂の際に古今集の歌の詞書を取り込む形で意図的に改変されたものと考えられる。

さらに付言すれば、これは単に配列のためだけの語句の改変ではないと思われる。

素性の歌の主題である山に咲く桜とは、たとえば、新撰和歌の四十九番の歌で、「見る人もなき」とされ、また、四十五番の歌で、見に来たところ霞が隠して見られないと歌われ、あるいは、

山たかみ人もすさめぬさくら花いたくなわびそ我見はやさむ

又は、さととほみ人もすさめぬ山ざくら (古今集 春上 五〇 読人知らず)

と、高い山に(あるいは遠い里に)咲くが故に、人も鑑賞することがないとされるように、平地で咲く桜に比して目にする機会の少ないものである。そのことが、このような山の中に見つけた美しい桜を折り取って「家包」にしようという一首の着想の基になっている。逆に言えば「家包」にしようという趣向は、それが平地に咲いた桜ではなく「山桜」であることよっていきるのであり、古今集の素性の歌から単に詞書をなくしただけでは、一首の趣向のおもしろさは失われてしまう。第三句の改変は、それを回避し、詞書に依存せず、古今集の詞書を含めた内容を歌だけで表現しおおす、完結した形とするためのものであったと考えられよう。

もう一つ同様の例をあげる。

北山に僧正へんぜうとたけがりにまかれりけるによめる

もみぢばは袖にこきいれてもていでなん秋は限りと見む人のため

(古今集 秋下 三〇九 索性)

の初句が、新撰和歌では、次のように見える。<sup>註10</sup>

もみぢ葉をそでにこきいれてもてでなん秋をかぎりで見む人のため

(新撰和歌 一一二)

古今集の歌は、詞書を併せると、本来の目的であった茸狩りをする一方で、この美しい「もみぢばは」袖にこきいれて山から持って出よう、と言っていると解される。この古今集の歌から単純に詞書を除いて歌のみを読むと、茸狩りのついでという要素がなくなるにもかかわらず、「もみぢばは」の「は」のために、紅葉以外のものが想定されて焦点が紅葉に定まらないことになる。そうした不都合をなくすために「もみぢばは」を「もみぢばを」に改めたのであろう。

先の「見てのみや」の歌の場合、その語句の改変は、省略された詞書の示していた内容を一首の内部に取り込むためのものであった。つまり、詞書を含めた古今集の歌が描き出している世界と、詞書を持たない新撰和歌の歌が描き出している世界は等質なのである。それに対して、この「もみぢばを」の歌の改変は、古今集の詞書に示されていた「茸狩り」という内容を捨象したものであり、一首の描き出している世界は、古今集の歌の描いている世界とは異なっている。詞書に依存しない完結した歌にするための語句の改変とは、詞書の示す内容を包括することを目的とするものだけではなく、「もみぢばを」歌のように、詞書によって示された歌の場を離れて、一首だけで独立した別の世界を創り出すことを志向したものである。

さらに別の例をあげよう。

人の家なりけるきくの花をうつしうゑたりけるをよめる

さきそめしやどしかはれば菊の花色さへにこそうつろひにけれ

(古今集 秋下 二八〇 貫之)

さきそめしやどしわかねば菊の花たびながらこそほふべらなれ



古今集の歌の下の句「色さへ」にこそうつろひにけれ」は、詞書に表された詠歌の事情と、「移し植ゑ」たという言葉を前提にしてこそいきる表現と思われる。この菊の花はよそからわが家に移ってきたが、それだけでなくその色までが美しく移ろっていることだ、というわけである。

この古今集の歌から詞書を除いても、上の句で事情は推察できるので、歌の内容の理解に差し支えるということはないだろう。しかし、そうすると詞書の、菊の花を「移し」という語と、歌の、花の色までも「移ろ」ってしまったという語の響きあいがなくなり、表現のおもしろさが薄れてしまうように思われる。つまり、詞書が除かれると、歌の中に「移ろふ」という語を用いることの必然性が失われてくるわけである。新撰和歌が序文に記すように「玄のまた玄」なる秀歌を選んだものであるならば、ここには下の句の改変の可能性が生じるのではないか。

このことに加えて、既に指摘註17されているように、新撰和歌の歌の下の句が、

ほかのきくをうつしうゑて

旧里をわかれてさける菊の花たびながらこそほふべらなれ

(後撰集 秋下 三九九 読人不知)

と同じであることが注目される。さらに、古今和歌六帖にはこの古今集の歌と後撰集の歌が隣り合って配列されている。

故郷をわかれてさける菊の花たひらかにこそほふべらなれ

さき初しやどのかはればきくの花いろさへにこそうつろひにけれ

(古今和歌六帖 三七三四・三七三五 貫之)

もしこれが逆の順に配列されていたなら、「咲きそめし」の歌の上の句から「故郷を」の歌の下の句へ目移りして書写され、その形の歌が流布するということも考えられようが、現状の配列ではそれは起こりにくいものと思われる。また、古今和歌六帖の他、同時代の歌集などにもこの新撰和歌のような形の本文は見られないようであるから、この形の歌が流布していたとも考えにくい。そうすると、これを混乱による偶然の作とする可能性はさほど多くはないのではないか。

ここで、仮に、古今集の歌の上の句と後撰集の歌の下の句とをつないだだけの形「さきそめしやどしかはれば菊の花たびながらこそほふべらなれ」を考えると、「宿しかはれば」という理由では、新しい宿があるのだから「旅ながらこそ句ふ」という結果と整合しないように思われる。ところが、新撰和歌の歌では二句目が「宿しわかねば」と、下の句になだらかに続く形になっている。このことから、これは貫之が「ふるさとを」の歌を利用して古今集の自作歌を改変したものと思われるのである。

このように、この歌では、詞書を除いたことによる情報の不足を補うのにとどまらない、新しい歌の創作とも言えるほどの積極的な改作が行われているものと考えられよう。

さて、今までの例とは少し性質の異なるものとして、次のような例がある。まず、古今集の歌を示す。

水のほとりに梅花さけりけるをよめる

春ごとにながるる河を花と見てをられぬ水に袖やぬれなん

(古今集 春上 四三 伊勢)

次に新撰和歌の方はこの歌をその前後の春の歌とを併せて示そう。

ゆく水にみだれてちれるさくら花きえずながるる雪とみえつつ

桜花ちりぬるかぜのなごりにはみづなきそらになみぞたちける

さくら花みかさの山のかげしあらばゆきとふるともいかにぬれめや

○春ごとにながるる川を花とみてをられぬ水に袖やぬれなん

としふればよはひはおいぬしかはあれど花をしみればもの思ひもなし

かはづなくかみなび川にかけみえていまやさくらんやまぶきの花

(新撰和歌 八三〇九三)

この例では、語句に改変はないけれども、歌の配される位置が変わっている。古今集では詞書のとおり、梅の花を詠んだ歌群に配されているのに対して、新撰和歌では桜の花の歌群の末尾、晩春の山吹の歌群の直前に配されている。古今集の伊勢の歌から詞書を除くと、第三句の「花」は、梅の花と特定できなくなり、おのずと桜の花と解されるのであるが、先ほどの「咲きそめし」の例からすると、川面に映る視覚的な美しさをテーマとするのは桜の方がふさわしいという積極的な判断があったと考えられよう。貫之は、古今集の「春

ごとに」の歌を、それが詠まれた場から切り離し、別の内容を持つ歌として独立させるために一首の解釈を改変したのである。

ここまで、詞書の捨象に伴って改変がなされた歌を見てきたが、それらは単に、詞書がなくなったことによって生ずる不都合を解消するためのものではなく、詞書で示された詠歌の場を離れ、一首だけで独立した世界を持つ歌にしたための改変であったのである。

#### 歌語の本意に沿った語句の改変

先にあげたものとは別の理由による改変と思われる例もある。たとえば、次に挙げる古今集の歌の、

相坂の嵐の風はさむけれど、ゆくへしらねばわびつつぞぬる

(古今集 雑下 九八八 読人不知 結句、高野切・元永本等「わびつつぞふる」)

が、新撰和歌では、

あふさかのあらしの風のさむければ、ゆくへもしらずわびつつぞゆく

(新撰和歌 三四三)

となっている例を見てみよう。

この歌に詠まれた逢坂とは、

中納言源ののぼるの朝臣のあふみのすけに侍りける時、よみてやれり  
ける

相坂のゆふつけ鳥にあらばこそ君がゆききをなくなくも見め

(古今集 恋四 七四〇 閑院)

相坂の関に庵室をつくりてすみ侍りけるに、ゆきかふ人を見て

これやこのゆくも帰るも別れつつしるもしらぬもあふさかの関

(後撰集 雑下 一〇八九 蝉丸)

のように、人が往来するところとして詠まれる歌枕であって、そこにとどまるところではない。貫之は「逢坂」という歌枕の詠み方として「寝る」あるいは「経る」は、あまり通常でないことから、これを逢坂の関のイメージにふさわしい「行く」に改めたのではない

か。それに伴い、「行方知らねば……行く」では内容に齟齬が生じるので、「行方も知らず」としたものと思われる。つまり、この改変は、旅人の行き交う逢坂の関という歌枕のイメージに適う表現への変更だったのではないだろうか。

また、その上で、古今集の「嵐の風はさむけれど」と新撰和歌の「嵐の風のさむければ」を比較すると、前者は「行く」にかかり、後者は「わぶ」にかかる。後者の場合、寒い嵐の風が、旅人のわびしさを増すものとして機能していることが明らかである。一方、前者の場合は、嵐の風が寒いことが、旅人にとってどのような意味を持つのか明確でない。これは、先に見た「もみぢばを」の例と同様に、歌の意味の曖昧さを捨象しようという意図の現れではないだろうか。

また別の例をあげよう。

わたの原よせくる浪のしばしばも見まくのほしき玉津島かも

(古今集 雑上 九二二 読人不知)

わたのはらよせくるなみのたちかへり見まくもほしきたまつしまかな

(新撰和歌 二二三)

古今集の歌の第三句目「浪のしばしば」という表現は、

住吉の岸の浦廻に布浪之しくなみの数しばしば妹を見むよしもがも (万葉集 卷十一 二七三五)

ほととぎす飛幡の浦に敷浪之しくなみの縷しばしば君を見むよしもがも (万葉集 卷十二 三一六五)

君が家の池之良奈美伊蘇爾与世之婆しちなみいそによせ見とも飽かむ君かも

(万葉集 卷二十 四五〇三 家持)

に示すように、万葉集に複数例の見られるものである。ところが、平安初期の和歌になると、この古今集の歌の他には類例が見られなくなる。また、波に限らず何度も何度も繰り返すものを序として「しばしば」を言い起こす表現もほとんど見られない。ようやく見られる次の例、

まきのうへにふりおける雪のしばしばもおもほゆるかもさよとわがせこ

(古今和歌六帖 六八九)

は、結句の意味が分かりにくいものの、「わがせこ」という古めかしい言葉から、古歌と認識されていたのではないかと思われる。

そうすると、この古今集の歌は、結句に「かも」という古い言葉が用いられていること、さらに、読人不知とあることも併せると、当時、万葉調の古めかしい歌と認識されていたのではないかと思われる。また、「しばしば」という語自体、平安期には和歌にほとんど用いられなくなることからして、歌語としてはあまりふさわしくないという意識もあつたのかもしれない。

一方、平安期では、「波」という言葉は、

住の江の岸による浪よるさへやゆめのかよひぢ人めよくらん

(古今集 恋二 五五九 藤原敏行)

風吹けばおきつ白波たつた山よはにや君がひとりこゆらむ

(古今集 雑下 九九四 読人不知)

あひだなくよする河なみ立ちかへりのりても猶あかさぞ有ける(貫之集 二八七)

のように、「立つ」や「寄る」などの言葉を言い起こす序として用いられた例が多く見られる。以上のことからすると、貫之は万葉調の、当時あまり一般的でなかった「波のしばしば」という古風な表現を、平安和歌的な表現に改めたのだと考えられよう。したがって、結句も「かも」から「かな」に改められているのだと思われる。

以下の例も同様である。

いく世しもあらしわが身をなぞもかくあまのかるもに思ひみだるる

(古今集 雑下 九三四)

いくばくもあらしわが身<sup>注18</sup>をなぞもかくあまのかるもにおもひみだるる

(新撰和歌 二二二)

ここでは、初句の「いくよしも」が「いくばくも」に改められている。「いくよ」という言葉は、

むかし、帝、住吉に行幸したまひけり。

われ見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松いく世経ぬらん

御神、現形し給ひて、

むつましと君はしらなみづがきの久しき世よりはひそめてき

(伊勢物語<sup>注19</sup> 一一七段)

かめやま

かめ山のこふをうつして行く水にこぎくる船はいく世へぬらん(貫之集 一六四)

などのように、人の一生を越えるような相当に長い時間を言うものである。そのような言葉を、我が身の命のはかなさを表現するのに使うのは相応しくないと考えたのではないだろうか。

また、

流れては妹背の山のなかにおつるよしよしのの河のよしや世中

(古今集 恋五 八二八 読人知らず)

ながれてはいもせのやまのなかにおつるよし野の滝たきのよしや世の中

(新撰和歌 三六一)

では、「吉野の河」が「吉野の滝」に注変わっている。これは、山の中に「落つ」という言葉のもたらすイメージには、「河」よりも「滝」の方がふさわしいとの判断があったためではないだろうか。

さらに、

ひさしくもなりにけるかなすみのえの松はくるしき物にぞありける

(古今集 恋五 七七八)

ひさしくもなりにけるかな住の江の松はちとせのものにぞ有ける

(新撰和歌 三五四)

では第四句が「まつはくるしき」から「松はちとせの」となっている。

「松」は平安期の和歌では

よろづ世を松にぞ君をいはひつるちとせのかげにすまむと思へば

(古今集 賀 三五六 素性)

おとにのみきぎ渡りつる住吉の松のちとせをけふ見つるかな

(拾遺集 雑上 四五六 貫之)

などのように「ちとせ」という言葉と取り合わせて詠まれることが多い。貫之はこの「松」と「ちとせ」のイメージの結びつきを重視した結果、古今集の歌を改変したのではないだ

ろうか。

以上の例からは、歌語の用いられ方を、その本意に適ったものにしようとする貫之の意図が読みとれるように思う。そのことについて今少し例を見て行きたい。

### 貫之の規範意識に基づく改変

寛平御時きさいの宮の歌合のうた      とものり

三吉野の山べにさけるさくら花雪かとのみぞあやまたれける（古今集 春上 六〇）

の四句目、「雪かとのみぞ」が、新撰和歌では、

さくらばなさきにけらしな足引の山のかひより見ゆる白雲

あきの露うつしなればやみづ鳥のあをばのやまのうつろひぬらん

○みよし野のやまべにたてるさくら花白雲とのみあやまたれつ

白雲のなかにまぎれて行く雁のこゑはとほくもかくれざりけ

山たかみくもゐに見ゆるさくら花ころのゆきてをらぬ日ぞなき

白雲にはねうちかはしとぶかりのかげさへ見ゆる秋の夜の月

（新撰和歌 三九〇四四）

のように、「白雲とのみ」となっている。ところで、この歌は古今和歌六帖には友則の作として、

みよしのの山べにさけるさくらばなしら雲とのみあやまたれつ

（古今和歌六帖 四二二八）

という、新撰和歌と同じ形の本文で見られる。このことからすると、古今集の友則の歌が「白雲とのみ」の形で流布することになり、そのために新撰和歌の原本には「雪かとのみぞ」とあったものが、ある時点で誤写された可能性も考えねばならない。しかし、右に挙げたように、新撰和歌の前後の一連の歌に「白雲」という言葉が連続していることから、この形の本文は、貫之が改作したものか、新撰和歌の編纂以前に友則の歌が「白雲とのみ」という形でも知られていたのを選択したものかはわからないものの、新撰和歌本来の形であったと思われる。

さて、この古今集の歌は、詞書がなければ、内容の理解に差し支えが生じるわけではない。

い。したがって、この語句の改変は、詞書を捨象したことによるものではなく、歌のよみぶりによるものと思われる。ところで、この古今集の「三吉野の」歌の、仲春の花である桜を雪に見立てる技法は、周知のように古今集選者の時代以降盛んに行われるものである。<sup>注22</sup>したがって、吉野の山辺の桜を雪に見立てたこの歌も、紀友則の、時の流行の表現を用いた詠作の一つと考えられる。そしてこの歌は、古今集に入っているということからして、古今集の当時、一定の評価を受けたものと考えられる。

さて、桜を雪や雲に見立てた歌について、新撰和歌の撰者である貫之自身の詠作を見ると、一つの傾向のあることが見て取れる。

桜花さきにけらしなあしひきの山のかひより見ゆる白雲（古今集 春上 五九）

山さくらさきぬるときは常よりも峰の白雲たちまさりけり（後撰集 春下 一一八）

山ざくらをみて

白雲と見えつるものをさくら花けふはちるとや色ことなる（後撰集 春下 一一九）

やまざくらさきぬるときはつねよりもみねのしらくもたちまさりけり

（亭子院歌合 四）

はるがすみたちみつをみてにはかにはさくらはなとおもひけるかな

（貫之集 三二 樺桜花）

のように、咲いている桜を白雲あるいは霞にたとえた例はあるけれども、雪にたとえた例は見られないのである。では、彼が雪にたとえているものは何かといえは、

春ふかくなりぬと思ふをさくら花ちるこのもとはまた雪ぞふる（拾遺集 春 六三）

さくらちるこのした風はさむからでそらにしられぬゆきぞふりける

（拾遺集 春 六四）

おなじ色に散りしまがへば桜花ふりにし雪のかたみとぞみる（貫之集 一一七）

ちりまがふ色をみつつぞなぐさむる雪のかたみの桜なりけり（貫之集 四一二）

青柳の色はかはらで桜花ちるもとにこそ雪はふりけれ（貫之集 四五八）

さくら花ふりにふるともみる人の衣ぬるべき雪ならなく（貫之集 五〇五）

のように、ことごとく、散る桜なのである。これは、貫之に、咲いている桜は白雲に、散る桜は雪にたとえるのがふさわしいという考えがあったことを示すのではないだろうか。貫之は、そうした自身の判断に基づき、「山辺にさけるさくら花」を詠んだ友則の歌を「白



雲」の形で新撰和歌におさめたのではないだろうか。

なお、今述べた、咲く桜は雲、散る桜は雪という使い分けは、新撰和歌と同時代の資料に、咲く桜を雪や雲にたとえた歌の例があまり多く見られないのはつきりしないのであるが、たとえば、新撰和歌から少し後の、作歌の手引き書たる古今和歌六帖の桜の項には、咲く桜を、

はるたてばさとにたなびくしらくもはさける桜のとほめなりけり

(古今和歌六帖 四一七七)

しら雲とみえつるものを桜ば今はちるとや色ことになる(古今和歌六帖 四一八一)

のように、白雲にたとえた例がみられる。その一方で拾遺集には、

吉野山きえせぬ雪と見えつるは峰つづきさくさくらなりけり

(拾遺集 春 四一 題、読人知らず)

山ざくらを見侍りて

平きむざね

み山木のふたばみつばにもゆるまできえせぬ雪と見えもするかな

(拾遺集 雑春 一〇五一)

など、咲く桜を雪にたとえた例が見られ、どちらが主流とは決しがたい。そのことから、咲いている桜は白雲にたとえ、散っている桜は雪にたとえる、という貫之の考えは、当時の一般的なものではない、彼独自の価値判断だった可能性が高いと思われる。

もう一例、同様の例を見たい。

みよしのの山のあなたにやど<sup>ま</sup>もがな世のうき時のかくれがにせむ

(古今集 雑下 九五〇 読人しらず)

足引の山のあなたにいへもがな世のうきときのかくれがにせん

(新撰和歌 三四五)

ここでは、古今集の吉野山という地名が「足引の山」という、場所を特定しない一般的な名詞に変えられている。

ここで、貫之の吉野山の詠作を見ると、

白雪のふりしく時はみよしのの山した風にはなぞちりける (古今集 冬 三六三)

こえぬまはよしのの山のさくら花人づてにのみききわたるかな

(古今集 恋二 五八八)

みよしのの山より雪のふりくればいつともわかずわがやどのたけ

(貫之集 五九 延喜十五年)

梅花咲くともしらずみよしのの山にともまつ雪のみゆらん

(貫之集 六〇 延喜十六年)

みよしののよしのの山は百年の雪のみつもる所なりけり(貫之集 一七二 延長二年)

春霞立ちよらねばやみよしのの山に今さへ雪のふるらむ

(貫之集 二〇一 延長年間?)

君まさばさむさもしらじみ吉野のよしのの山に雪はふるとも

(貫之集 二二七 延長年間?)

みよしののよしのの山に春霞立つをみるみる雪ぞまだふる

(貫之集 四九九 天慶五年)

のように、八例のうち、古今集に収められた一例が花を詠んだものであるけれども、それ以降、彼の晩年の作(四九九)に至る七例はみな雪を詠んだものである。このことに関しては、それらの歌の多くが屏風歌であることから、屏風の絵柄に規制されて、吉野と言えば雪というような表現におのずとなったこと、貫之には屏風歌でなくても屏風歌的発想で詠んだ歌が多いこと、そして「貫之にとつての吉野山とは畢竟、雪の吉野山であった」とことが指摘されている。<sup>注20</sup>

一方、周知のように、平安時代初期には吉野山とは、

世にふればうさこそまされみよしののいはのかけみちふみならしてむ

(古今集 雑下 九五 読人知らず)

女につかはしける

贈太政大臣

ひたすらにいとひはてぬる物ならばよしのの山にゆくへしられじ

(後撰集 恋四 八〇 時平)

などに見えるように隠棲の地としてもイメージされていた。そうすると、吉野山の彼方に隠棲するための家がほしいと歌う古今集九五〇番の歌の発想自体、この吉野山と隠棲の結びつきから生まれたのであり、「み吉野の山」から「足引の山」への改変は、もとの古今

集の歌の発想の根幹を断ち切ると言ってもいいほどの重大な変更だったのである。貫之がそのような変更をあえてしたのは、彼に、吉野という歌枕の持つイメージを、古くからの歌に見られる隠棲の地というイメージを含まない、雪や花の吉野という純粋なものとして典型化しようとする意識があったためではないだろうか。

以上のことからすると、さきほどまで見てきた語句の改変は、古くからの伝統的な、あるいは当時の一般的な歌いぶりに沿わせようとするものではなく、貫之の考えるところの規範的、典型的な歌の詠み方を示そうとするものだったと捉えられないだろうか。

### 3、歌句改変の意図

以上のように考えるならば、以下に挙げた例なども同様に説明できると思う。

なにはがたしほみちくらしあま衣たみのの島にたづ鳴きわたる

(古今集 雑上 九一三 読人知らず)

なにはがたしほみちくればあまごろもたみののしまにたづなきわたる

(新撰和歌 二一五)

では、第二句目が、「潮満ちくらし」から「満ち来れば」に変わっている。

この歌は神楽歌に、

難波潟 潮満ちくれば 海人衣 海人衣 田蓑の島に 鶴立ちわたる

(神楽歌 註大前張)

と見え、また万葉集に、

若の浦に潮満ち来れば潟をなみ葦辺をさして鶴鳴きわたる

(万葉集 卷六 九一九 赤人)

という類歌のあることからして、奈良時代にさかのぼる古歌に由来を持つと思われるものである。問題となる第二句目は、今あげた神楽歌や万葉集の例からして、元来は「潮満ち来れば」であったものと想像される。それが伝承の過程で変化したものか、古今集の撰者の手になる改作かはわからないけれども、古今集では「潮満ち来らし」の方を選択したわけである。

一方、新撰和歌の本文は古今集での選択を古来の形に戻そうとしたものとも見える。しかし、それが目的でこの改変は行われたのであるか。今、両者の歌を比較すると、古今集の歌が田蓑の島に向かって鶴が鳴きながら渡っていることを根拠として目に見ることのできない難波潟の様子を推定するという機知的な趣向のおもしろさに主眼をおいているのに対して、新撰和歌の方は難波潟に満ちてくる潮を背景に鶴が鳴きながら飛んでゆく美しい姿を、あたかも屏風の絵のように明確なイメージで描くことを目的としているといえるだろう。そうするとこれも、既に言われるような、貫之の屏風歌的な表現に対する嗜好の現れと捉えられないだろうか。

やはりこの例も、単に古今集の歌を継承するのではなく、古今集から一步進んで、自らが良しとする歌の様式を示そうとする貫之の姿勢の現れと言えるのではないか。

また、一首で独立し完結性を持つ歌への志向は、詞書を省略することに関わる例で見ただけでも、それ以外の例にもうかがえるように思う。

浦ちかくふりくる雪は白浪の末の松山こすかとぞ見る（古今集 冬 三二六 興風）

浦ちかくふりしく雪をしらなみのすゑのまつ山こすかとぞ見る（新撰和歌 一四二）

古今集の歌では、浦近くに降ってくる雪を末の松山を越す波に見立てた、その着想のおもしろさが一首の眼目となっている。ここに詠まれたような、末の松山を越えるほどの荒い波に見まがう雪であるならば相当に激しく降りしきっているはずである。しかし、古今集の歌では「降りくる」という言い方しかしておらず、雪の降る様子は言外の想像に任せている。それに対して、雪の降る様子を具体的な言葉で言いおせようとしたのが新撰和歌の「降り頻く」という本文だったのではないだろうか。

ここまで、古今集の歌を新撰和歌に選人する際の歌句の改変には、

○詞書なしで過不足なく鑑賞される、作歌状況等に依存しない、歌一首で完結性を持つ歌。

○歌枕や歌語の使い方、一首の歌いぶりなどについて、貫之の考える規範、典型となるような歌

を志向したものが見られることを述べてきた。古今集の歌を新撰和歌に選ぶ際に、人事に関わらないような、題詠的な歌が選ばれる傾向があるとの先学の指摘注26も、右の推測の援けになるだろう。

#### 4、新撰和歌において和歌はどのようなものと考えられているのか

ところで、右に述べたような貫之の歌句改変の意図が、古今集からの重出歌だけに当てはまると考えるのは不自然であろう。つまり、それらの意図は、そのまま新撰和歌に収める歌の基準でもあり、その基準に当てはまる、すぐれた歌の集成として新撰和歌は編纂されたのだ、と考えるのが自然なのである。

ただ、そのようにして、一首だけで完結しうる優れた歌が新撰和歌に収められているとしても、新撰和歌という歌集が、個々の歌を独立して鑑賞せよとの意図を持って編纂されているとは思われない。なぜならば、新撰和歌は歌を無作為に並べたのではなく、歌集としての意図を持って構成され、歌が配列されているものであり、一旦歌がある意図の元に配列されると、当然、その歌は、歌集の構成と配列という文脈の中において鑑賞されることになるからである。次節以下、しばらくそのことについて述べる。

#### 注

- 1 「新撰和歌の伝本と研究」(国語国文学論集 一九六五年)、「新撰和歌」(『王朝文学の考証的研究』第三章第二部 一九七三年)
- 2 「新撰和歌諸本の系統と性格」(語文(日大) 一九七二年)
- 3 これについては、野中春水氏が「清輔本古今集合点歌と新撰和歌集」(国語国文学第一卷第二号 一九五三年)で、三六一首本系の別旅の部、末尾に、  
したおびのみちはかたがたわかるともゆきめぐりてもあはんとぞ思ふ  
きたへゆくかりぞなくなるむれてこしかずはたらでぞかへるべらなる  
の如く、別の歌と目される歌が二首続くのは、別の歌、旅の歌と交互に配列する新撰和歌のあり方からして不審である。これは、三五七首本系には見られない「下の帯は」の歌は、古今集清輔本に見られる新撰和歌集歌の合点が附いていないことから、後世の混入であろう、とされるのに従いたい。
- 4 古今集では下句「花の盛りにあはましものを」とあるが、新撰和歌では掲出の形を伝える本と古今集と同じ形を伝える本とがあり、いずれが新撰和歌の形と決めがたいので、さしあたって問題にしない。
- 5 平成六年度和歌文学会第四〇回大会の席上における田中喜美春氏の教示による。

6 新撰和歌巻一は春秋の歌を交互に配しており、国歌大観番号で偶数の歌は秋の部の歌であるので省略する。以下でも、新撰和歌の歌を、配列を問題にして引用する際は、同様の処理をする場合がある。

7 新撰和歌の四季の部がおよそ季節の推移の順に歌を配列していることは、菊池靖彦氏『新撰和歌集』の構成について―その実態と意識―（一関工専紀要 一九六七年）や阪口和子氏『新撰和歌』考―四季の巻の構成について―（大谷女子大 国文二二号 一九九二年）などに詳しい。

8 「山吹」の「吹」の字を「咲」と見誤り、また目移りもあつて誤写が生じた可能性を考えている。

9 これを貫之が新撰和歌に撰入の際、自作を改訂したものと見るならば、「己が袂を仮染めの尼」と解釈する（注六、及び大会後、田中喜美春氏から直接にご教示を得た。）か、あるいは「難波潟で己が袂を（汐にぬらして藻を）刈るかりそめの海人」（増田繁夫氏直話）とでも解釈せざるをえない。しかし、そう解釈するとき、前者では初句の「難波潟」が二、三句に関わらないという難点があり、また後者も相当に難解な解釈であり、貫之の他の歌に、このように難解な言葉遣いをしたものは見られないように思う。

10 「うづもれて」と「こがくれて」も仮名書きの場合の字形は類似する。ただし、第四章「新撰和歌注釈稿」の当該歌の注に記したように、「うづもれて」で解釈する可能性もある。

11 その具体的様相は杉谷氏の注2にあげた論文に詳しい。

12 それらのいくつかについては、本稿第二部第三章「新撰和歌注釈稿」のそれぞれの歌の注に記した。

13 これは先に断つたとおり、古今集の諸本間で複数の本文のある場合は省いた数字であり、最低でも三〇首はという意味に考えている。

14 注7に同じ。

15 注7に同じ。

16 天理図書館本、私稿本等には初句「もみぢばを」とあるけれども、少数の本文のみであり、古今集の本来の形である可能性は低いものと考えられる。また仮に、古今集が、その成立の問題と関わって、両様の本文をもっていたのならば、「もみぢばを」は新撰和歌編纂時の意図的選択と考えられる。

- 17 野中春水氏注3論文
- 18 第二句は新撰和歌諸本のうちに「憂き身」という本文もあり、いづれとも決しがたいが、ここでは問題としない。
- 19 伊勢物語の本文は角川文庫『伊勢物語』による。
- 20 古今集諸本のうちには第四句を「吉野の滝」とするものもある。ただし、注16と同様に考える。
- 21 古今集の二句目は「山辺に咲ける」と「山辺に立てる」と両方の本文があるが、ここでは判断を保留する。また、結句が「あやまたれける」から「あやまたれつつ」となっていることについては、次のように推定している。すなわち、もとの歌の花を雪に見誤ることを発見した驚きを表す表現は、描かれた光景の美しさを強調するよりも、歌合の披講の際に聞くものの耳に印象づけることをねらったものと思われる。一方、新撰和歌の、繰り返し花が雲と見えてしまうという表現は、幻想的な風景の美しさを描こうとしたものではないか。
- 22 鈴木宏子氏「雪と花の見立て」考―万葉集から古今集へ―（国語と国文学第六四巻第九号 一九八七年）に詳しい。
- 23 第三句は古今集諸本に「家もがな」の本文もあり一定しないので、ここでは問題としない。
- 24 新編国歌大観（底本陽明文庫本、正保版本も同じ）では「みよしのの松の影をしそめたればあふぐ嵐のいつかつきせん」（七一五）という歌が見られるが、萩谷朴氏（日本古典全書『土佐日記』所収「貫之全歌集」）の処置の通り、西本願寺本等により初句は「すみよしの」と改めるべきであると考ええる。
- 25 田中登氏「古今集歌人の歌枕表現」（『歌枕を学ぶ人のために』所収 一九九四年）
- 26 菊池靖彦氏『新撰和歌集』（『古今集以後における貫之』第二章 一九八〇年）、佐藤和喜氏「新撰和歌の構成とその表現」（宇都宮大学教育学部紀要 一九八七年一月）、阪口和子氏注8論文等。

## 第二節 集の構成、歌の配列による鑑賞の指示

本節では、新撰和歌が詞書を有しないことが、歌集としてどのような意味を持ち、また、収められた個々の歌の鑑賞に際して、どのようなことをもたらすのかについて考察する。

### 1 古今集の詞書について

新撰和歌は古今集について紀貫之が編纂したものである。見方を変えると、新撰和歌の前提として、詞書を有する古今集があったのである。したがって、新撰和歌が詞書を有しないのは、同集は単に詞書を記さなかったからというのではなく、あえて詞書を排除した結果として考えなければならない。このような考えにもとづき、新撰和歌に詞書がないことがどのような意味をもつのか考察するための準備として、古今集が詞書を有することの意味から確認しておきたい。

古今集は全ての歌の前に、原則として

ふるとしに春たちける日よめる

在原元方

としのうちに春はきにけりひととせをこぞとやいはむことしとやいはむ

(古今集 春上一)

という形式で、詞書<sup>注1</sup>と作者名を記す。古今集以後、これが勅撰和歌集の詞書の標準的な形式となり、我々の目にもなじんでいるが、古今集以前の和歌集にこの形式の詞書きはなかなか見いだせない。

たとえば、古今集の撰者たちは万葉集を目にしていたと考えられるが、万葉の詞書<sup>注3</sup>は、ごくおおざっぱに言えば、次のような二種類の形式である。

高市岡本宮御宇天皇代 息長足日広額天皇

天皇登香具山望国之時御製歌

大和には群山あれどとりよろふ 天の香具山…

(万葉集 卷一 一二)

や、



柿本朝臣人麻呂從石見国別妻上来時歌二首并短歌

石見の海 角の浦廻を 浦なしと 人こそ見らめ 漕なしと 人こそ見らめ…

(万葉集 卷二 一三二)

等の、作者名を含んで作歌事情を比較的詳しく一首ずつに記す形式のものと、

#### 春雑歌

ひさかたの天の香具山この夕霞たなびく春立つらしも

卷向の松原に立てる春霞凡にし思はばなづみ来めやも

古の人の植ゑけむ杉が枝に霞たなびく春は来ぬらし

児らが手を卷向山に春されば木の葉しのぎて霞たなびく

玉かざる夕さり来れば獵人の弓月が岳に霞たなびく

今朝行きて明日は来むと云子鹿丹朝妻山に霞たなびく

児らが名にかけの宜しき朝妻の片山岸に霞たなびく

右柿本朝臣人麻呂歌集出

#### 詠鳥

うちなびく春立ちぬらし我が門の柳の末にうぐひす鳴きつ

(万葉集 卷十 一八一〜一二)

や、

#### 正述心緒

たらちねの母が手離れかくばかりすべなきことはいまだせなくに

人の寝る甘睡は寝ずてはしきやし君が目すらを欲りし嘆かふ

(万葉集 卷十一 二二六〜八)

などのように、あるまとまった歌群の第一首目に、それ以下の歌群全体の内容を説明する短い詞書を記し、いちいちの歌には詞書を記さない形式のものである(こちらの形式の場合、卷十 一八一〜九番歌の「詠鳥」のように、下位項目的な詞書が付されることもある)。

またこれも古今集編纂時に参照されたとおぼしい新撰万葉は、各巻のはじめに「春歌廿一首」等の言葉を記すだけで、歌のそれぞれは詞書をもたない。

このように、古今集の詞書の形式は、和歌集として先例のない、すなわち、撰者たちが

新たに創り出したものであった。ならば、古今集編纂時の資料である「家集」や「古来旧歌」（古今集真名序）に、詞書が付されていた場合でも、それらは古今集のものとは形式が異なっていた可能性が高い。では、古今集編纂時には、これら原資料の詞書の形式を単に古今集の形式に整えただけであったのか。むろん、そのような例も一定の割合で存したかとは思われるが、そうではない編纂作業の窺われる例もある。たとえば、

七日の日の夜よめる

凡河内みつね

年ごとにあふとはすれどたなばたの寝る夜の数ぞすくなかりける

（古今集 秋上 一七九）

は、寛平御時后宮歌合（一一八）に見えるものであるが、古今集の詞書にはその旨を記さない。古今集には、

寛平御時后宮歌合の歌

源まさずみ

谷風にとくるこほりのひまごとにうちいづる浪や春のはつ花（古今集 春上 一二）

をはじめ、この歌合の歌である旨を記した詞書きを有する歌が二十余例あることから、古今集が同歌合を撰集の資料にしていたと見るのが妥当と思われる。従って、躬恒の「年ごとに」の歌も、同歌合の記録に基づいて、「寛平御時…」という詞書を付して収めることもできたはずである。そして、この歌の作者である凡河内躬恒は古今集の撰者であるから、この歌が寛平御時后宮歌合に出詠されたものだったのを、編纂の際に見落としたということとは考えにくい。ならば、「七日の日の夜よめる」という詞書が、寛平御時后宮歌合以外の資料に基づくものか、あるいは古今集の撰集にあたって新たに創作したものかはわからないが、ともあれこの歌に関しては「寛平御時后宮歌合の歌」ではなく、「七日の日の夜よめる」という詞書の方を、何らかの意図を持って選び取ったということになる。

また別の例を見よう。

あるじ身まかりにける人の家の梅花を見てよめる 　つらゆき

色も香も昔のこさにほへども植多けむ人の影ぞこひしき（古今集 哀傷 八五一）

は、貫之集では「あるじうせたる家に桜の花をみてよめる」（七七〇）と、梅ではなく、桜の花を見て詠んだ歌であるとする詞書が付されている。さてこの、古今集と貫之集の間に梅と桜という相違が生じたいきさつは、およそ次のように推測できよう。すなわち、貫

之が亡き人の家を訪れ、そこに咲いていた桜を見て詠んだのが当該の哀傷歌であり、貫之集はそうした事情をそのままま記した。一方、古今集は歌句の「香」「にほへ」に、よりふさわしい花として「梅」を選び、それに合わせて詞書を改変したのだと。そして、その逆の可能性、すなわち、もともと古今集の詞書通り梅の花を見て詠んだ歌であったものを、貫之集が「桜」と改変したという可能性はきわめて低いだろう。梅を桜にわざわざ換える理由がほとんど考えられないからである。このように、古今集の詞書のうちには、もとの資料<sup>注12</sup>に記されていた内容を改変した上でつくりだされたものも含まれるのである。

またこれも従来から指摘されていることだが、古今集恋部に収められた撰者たちの歌のうち、その多くが「題知らず」となっていることについても注意をしておきたい。これらの歌を詠んだ本人に作歌の事情や背景がわからないはずはないので、これは、撰者があえて元の事情を伏せ、意図的に「題知らず」という詞書にした、という他はない。

以上のように、古今和歌集の詞書のうちには、撰者によって複数の候補のうちから選択された可能性のあるものや、改変あるいは創作されたものが確認できる。そしてこのことは、撰者たちが詞書の形式だけでなく、その内容も、古今集の歌としてのそれぞれの歌にふさわしくなるよう仕立てようとしていたことを意味するのではないか。

右のように考えられるとして、では、そのことはどのような意味を持つのだろうか。

詞書とは「撰者による読者への歌の解釈と鑑賞の指示」<sup>注13</sup>であるという井上宗雄氏の言がある。本稿は全面的にこの見解に賛同するし、古今集の撰者たちもこうした詞書の働きを知っていたと考えられる。たとえば先に「桜」を「梅」に改変した例を見たが、これはまさに、一首を桜ではなく梅の花を詠んだ歌として鑑賞せよ、という指示に他ならない。そのような営みを繰り返していた撰者たちが、このことに気づかないはずがないからである。

そうすると今問いに対する答えは、次のようになるだろう。

ある歌を古今和歌集に採るかどうか、撰者たちは、一首一首を深く吟味して判断したはずである。ところで、歌は——これは歌に限らないことであるが——、どのような文脈に置いて受け取るかによって、読み取ることのできる意味が異なってくる。すなわち、どのような詞書を付すかによって、和歌の解釈も左右されるのである。ならば、詞書を無造作に付してしまうと、せっかく慎重に選んだ歌が、享受者によって撰者の意図とは違う形で受け取られる可能性が高くなる。それを好ましくないと考えて、すなわち、その歌をどのように解釈し鑑賞すべきかを享受者に示すために、撰者たちは詞書をしかるべく仕立てていたのではないか。

このことに関して、もう一点確認しておきたいことがある。それは、はじめに述べたように、古今集では全ての歌に詞書が付されているが、このことも古今集撰者たちが選び取った撰集の方法だということである。このように言えるのは、古今集以前の歌集が、必ずしも全ての歌に詞書を付していないことによる。古今集以前の歌集で現存するものは少なく、断定的なことは言えないが、撰者たちは編纂作業時に万葉集や新撰万葉等の先行する歌集を参考にしながら、初の勅撰和歌集である古今集にふさわしい体裁を模索したはずである。ところで、たとえば、万葉集においては巻十や巻十一の作者未詳の歌群など、詞書を有しない歌がしばしば見られるし、新撰万葉——漢詩と和歌を交互に配した作品であり、それを歌集と言ってよいかどうか、またそれゆえに古今集撰者たちが和歌集としての先例に含めていたかどうか、安易には言えないもの——の歌も一首ずつの詞書をもたない。つまり全ての歌に詞書を付すことは、和歌集の編纂において所与の条件ではなかったのである。

では、全ての歌に詞書を付すという方法が古今集の創始になるものかと言えば、むしろ、それも正しくない。そうした編纂方法の先例となりうる作品も、確かに存在するからである。たとえば、古今集編纂の際に参考にしたと目されるものとして、凌雲集・文華秀麗集・経国集の勅撰漢詩集が考えられるが、それらはいずれも全ての詩に詩題を付している。

ことに文華秀麗集と経国集は、「奉和春日江亭閑望 一首 仲雄王」「春日對雨 探得情字 一首 王孝廉」（以上、文華秀麗集より）のように、古今集と同様、作者名を詩題の末尾に記す形式であり、その類似性からも、これら漢詩集の詩題のありようを古今集撰者たちが参考とした可能性も想定される。また先に、万葉集には詞書を持たない歌があると述べたが、しかし、周知のように万葉集は二十巻すべてが一貫した編纂方針のもとに整えられたものではない。たとえば、巻一と巻二は天武天皇と持統天皇を中心とする皇室に関わる歌を集成したものととして一つのまとまりをなしていることが通説となっているが、この両巻では全ての歌に詞書が付されているのである。したがって、古今の撰者たちが万葉集の一、二巻を目にして、これを天皇に関わる歌を逐一詞書を付しながら整えたものと判断し、天皇の下命による勅撰和歌集の編纂方法を定める際の際のよりどころの一つとした、という可能性も否定はできない。ただし、そうだとすると、それら先行作品と古今集では編纂のありように相違点——目録の有無、個々の詩歌の配列の様相や巻の構成など——も多い。やはり、古今集の撰者たちが初の勅撰和歌集にふさわしいものとして、全ての歌に詞書を付す形式をそれら先行作品のうちから自覚的に選び取ったと考えるべきであろう。

さて、今述べたように、古今集はすべての歌に詞書を付すという方法を自覚的に選んだとおぼしいが、これは、とりもなおさず、古今集に収める全ての歌について、撰者がその解釈と鑑賞を指示することを欲したということでもある。また、そのような自覚のあったことは、「題知らず」という詞書を古今集が使用したことによっても確認できる。先ほど恋部において撰者たちの歌の多くが「題知らず」とされていたことに言及したが、それは、撰者自身が詠んだ歌を、特定の事情や背景を踏まえて受け取るのではなく、そのような個別の事情抜きに鑑賞せよという意図があったことを示している。つまり、これらの「題知らず」という詞書は、——「題」という語そのものの意味についても諸説あり、判然としないところがあるが、ともあれ——一首の詠まれた事情がわからないから記せない、ということではなく、その歌の背後にあるものを想定せずに一首を解釈・鑑賞せよ、という積極的な指示を表すものとして理解すべきなのである。また、撰者たちの恋部の歌以外の「題知らず」の歌の中に、一首の詠まれた事情を知るすべのなかったものが含まれている可能性も、もちろんある。しかしそのような「題知らず」歌があるとしても、それも「この歌は「題」を考えずに解釈せよ」という撰者の指示として理解すべきものと考える。なぜなら、「題知らず」という詞書は、古今集以前には見いだせない、撰者たちが新しく創ったものであり、このような前例のない言葉を創ってまで、すべての歌に詞書を付したということが、すべての歌に解釈と鑑賞の指示をするという意図のあらわれだと見られるからである。

ここまで、古今集の詞書とは、集内に収められたすべての歌の解釈と鑑賞を指示するという目的のために撰者たちが選び取り、創り出した、勅撰集としての歌の提示方法だったことを見てきた。

## 2 新撰和歌が詞書を取り去ったことの意味

さて、このようにして古今集が選び取り、すべての歌に付した詞書が、新撰和歌では皆取り去られている。このことはそのまま、新撰和歌が収められた歌を詞書なしで鑑賞するように指示していることを意味するだろう。言い換えれば、同集において和歌は、それが詠まれた状況や背景を踏まえて理解するものではなく、歌の本文だけで鑑賞するものとして提示されているのである。だからこそ、たとえば、前節にあげたような、詞書きを抹消する際に、

見てのみや人にかたらむ桜花てごとに折りていへづとにせむ（古今集 春上 五五）  
を、

見てのみや人にかたらむ山の桜手ごとに折りていへづとにせん（新撰和歌 四七）

と改めたように、詞書で示された内容を和歌の中に取り込むようにして語句を改変したとみられる例も存在するのである。

### 3 新撰和歌における解釈と鑑賞の指示

次に留意すべきと思われるのは、新撰和歌は収めた歌のそれぞれを、一首で完結したものととしてそれぞれ個別に鑑賞せよ、としているわけではないらしいことである。詳細は次節で述べるが、新撰和歌冒頭の春秋二首の歌を見てみよう。

袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらん（新撰和歌 一）

秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる（同 二）

これらは、古今集の春部と秋部にも収められており、「袖ひちて」の歌は、古今集の諸注が一致して礼記月令の「孟春月：東風解氷」を踏まえて詠んだものと指摘する。その指摘は妥当であると思うが、一つ確認しておきたいのは、この歌を鑑賞する際に月令の記述が不可欠ではない、ということである。次に、「秋きぬと」の歌について言えば、これも礼記月令の「孟秋之月：涼風至」という記述との関係が気になるところである。ただし、古今集諸注に月令との関係を明確に指摘したものが見られないことが端的に示すように、この歌の鑑賞に際して月令を想起する必要はない。ところが新撰和歌で、この二首が対にされたことで、双方の歌の発想に関わるところに礼記月令があることが浮かび上がる。貫之の時代の貴族たちにとって礼記は、基本的な教養の範囲であったと考えられるから、これら二首を対にして提示された場合、月令の記述が自ずと想起されたことだろう。ということは、新撰和歌のこの配列は、両歌を、礼記を踏まえた歌として鑑賞せよ、という指示として機能しているし、この指示によって、両歌は、それぞれを個別に鑑賞した時とは別の意味を添加されることになる。

別の例も見てみよう。

古今集賀部に、「内侍のかみの右大将藤原朝臣の四十賀しける時に、四季の絵かけるうしろの屏風にかきたりける歌」という詞書のもと、七首の歌が収められている。新撰和歌ではその第二首目、

山高み雲居に見ゆる桜花心の行きて折らぬ日ぞなき  
（古今集 賀 三五八）

が、春秋の巻に春歌（四三）として収められ、白雲に見まがう山の桜を詠んだ歌の一群の中に配されている。古今集は一首の詠まれた状況を前提として、これを賀の歌として提示したのであるが、新撰和歌は一首をそれが詠まれた場から解き放ち、春の歌として鑑賞するよう提示しているのである。これは、一首を歌の表現だけで鑑賞させようという意図の現れであることはもちろんであるが、それと同時に、一首を白雲に見まがう山桜を詠んだ春の歌として鑑賞せよと、配列によって指示しているものでもあるだろう。<sup>注15</sup>

同様の例を示せば、新撰和歌で雑の歌とされる、

ほのぼのとあかしのうらの朝ぎりに島がくれゆく船をしぞ思ふ（新撰和歌 三四一）

は、古今集では羈旅（四〇九）の歌とされていたものである。古今集を鑑賞する場合は、この歌を羈旅の歌として、明石の地での旅情を詠んだものと見るようになるが、新撰和歌では、

道しらばつみにもゆかんすみの江の岸におふといふ恋わすれ草（新撰和歌 三四〇）

という、都に居て住の江の恋忘れ草に思いを馳せる恋の歌と対にされた雑の歌として、つまり、都に居て明石の風景を思いやった歌として鑑賞するよう指示されているというわけである。

またたとえば、古今集春部において桜の落花を詠んだ歌は、春下巻の冒頭、すなわち春上巻の満開の桜に続く部分（六九〜八九）と、一〇六番以降の晩春の景を詠んだ歌が配されるあたりとの二カ所に配されているが、そのうち前者に属する七五番の歌、

雲林院にて桜の花の散りけるを見てよめる 承均法師

桜散る花の所は春ながら雪ぞふりつつ消えがてにする

が、新撰和歌春秋巻一二〇首のうちの一一三首目に収められている。今、当該の歌の前後に配された春の歌を含めて示せば、

咲くがうへに散りもまがふか桜花かくてぞこども春は暮れにし（新撰和歌 一一一）

桜散る春の心は春ながら雪ぞふりつつきえがてにする（同 一一三）

花もみな散りぬるのちはゆく春の古郷とこそなりぬべらなれ（同 一一五）

とあり、古今集が、桜の落花を詠んだ歌として鑑賞することを求めた歌を、新撰和歌は、行く春を惜しむ心を詠んだものとして鑑賞するよう指示しているものと受け取ることになる。これも、新撰和歌が歌の「解釈と鑑賞の指示」を歌の配列によって示したものである。なお、この歌の第二句「花の所」が「春の心」と変え<sup>注16</sup>られているのも、「春の心」は桜の花が散りつつも「消えがて」にしている、と、惜春の心情を表現する歌としてこれを位置づけ直すための操作だったと考えられるだろう。

これらの例からは、新撰和歌が、配列によってそれぞれの歌の解釈と鑑賞を指示していること、言い換えると、新撰和歌の歌としての意味を付与していることがうかがわれるのである。

#### 4 新撰和歌の目指したところ

以上、新撰和歌に詞書がないことに着目し、撰者紀貫之が、歌をそれが詠まれた場から切り離し、歌に用いられた言葉だけで鑑賞させようとしていたことと、それと同時に、歌の配列によってそれぞれの歌に新撰和歌の歌としての意味を付与しながら、歌集を編纂しているということを見てきた。

ところで、古今集、そして新撰和歌の編纂された時代には、伊勢物語などの歌物語や、伊勢集や篁集などのような歌物語風の歌集が作られたことから、和歌をそれが詠まれた事情——それは必ずしも事実と考えられていたのではなく、フィクションとして受け取られていたであろうことについては後述する——とともに享受するありかたの存していたことが見て取れる。こうした享受のありかたは、少し後に、これも歌物語的な詞書を有する歌を多く収めた後撰集が編纂されたこと、また、さらに時代が下って、源氏物語でも

古歌とても、をかしきやうに選り出で、題をも読人もあらはし心得たるこそ見どころもありけれ、うるはしき紙屋紙、陸奥紙などのふくだめたるに、古言どもの目馴れたるなどは、いとすさまじげなるを、せめてながめたまふをりをりは、ひろげたまふ

（蓬生）



という記述がなされることから、平安時代を通じて一般的な和歌鑑賞の態度であったとも考えられる。

また、古今集は、その詞書の敬語の用い方から、歌と、それが詠まれた場のありさまを、天皇に対して奏上する体のものであったことが明らかにされているが、それは、こうした、当時一般の和歌鑑賞の態度を反映したものであるという説明もできるだろう。

それに対して新撰和歌は、和歌を、それが詠まれた場に依存・付属しない、一首の表現だけで鑑賞すべきものとして提示し、同時に、そのような独立した歌を配列することで、単なる歌の羅列ではない、一つの有機的な構造（注18）を持つ歌集を目論んだものと思われる。これは、相当に自覚的・意欲的な営為だったと考えるべきであろう。

なお、右のことに關して付言しておきたいことがある。今述べた、新撰和歌の、歌を一首の表現だけで鑑賞するという態度は、貫之の時代一般の、和歌を作歌事情とともに享受するというありようの根底をなす思考と共通（注19）するものであるということである。たとえば次の伊勢物語の例を見てみたい。

昔、おとろへたる家に、藤の花植へたる人ありけり。三月のつごもりに、その日雨そほふるに、人のもとへ折りて奉らすとてよめる。

濡れつつぞしみておりつる年の内に春はいくかもあらじと思へば

（伊勢物語 八十段）

には、「衰へたる家」の主人である歌主がある人のもとへ藤の花を贈ったことが記されるが、花を贈られた相手が相当に高位の人物であることが、「人のもとへ折りて奉らす」という表現によって明示されている。そのことから、「衰運在原氏の業平が権門の藤原氏に、官位の昇進を乞うた、という状況が浮かんでくる」（日本古典集成『伊勢物語』）という理解も、自ずと導かれる。この伊勢物語の歌と同じ歌が、古今集では

やよひのつごもりの日、雨の降りけるに藤の花を折りて

人につかはしける

なりひらの朝臣

濡れつつぞしひて折りつる年の内に春はいくかもあらじと思へば

（古今集 春下 一三三）

という形で見える。こちらの場合は、歌主が「おとろへた」家の主人であることも示され

ないし、「つかはしける」という表現からは、贈る相手との身分差を読み取ることもできない。つまり、藤の花を贈る動機は「官位の昇進」であったというような詠歌事情を、古今集の歌から読み取ることはありにくい。

この伊勢物語八十段と古今集一三三番の歌との先後関係・影響関係は不明であるが、今確認しておきたいのは、このような、同一の歌に異なる内容の文脈を付したものが同時に存在し得た、ということである。言い換えれば、当時の人は、同じ歌を、異なる文脈の中でもそれぞれに享受できたのである。このように、歌に付された背後の文脈が交換可能だということとは、すなわち、歌の背後の文脈は、歌と分離不能な一体のものではなく、あかたも人体と衣装の関係のごとく、場合に依じて着せ替え可能であったこと、つまり、歌は元々それ自体、人体のようにそれだけで存在するものであり、人体にいろいろな衣装を着せ替えるように、歌にも様々なストーリーを付して楽しむものだ、無自覚にせよ、考えていたことを示唆する。そして、そのような考え・意識があったのだと想定して初めて、既に存在した著名な歌に、後人がストーリーを付して物語に作り上げる歌物語という文芸が、この時代に盛んに作られたということにも得心がいく。

このような時代一般の意識を自覚化し、先鋭化させたのが、新撰和歌の態度だったのであろう。

#### 注

- 1 古今集の当時、和歌に付された説明の文章をさして「詞書」と言った用例は確認できない。このことも問題ではあるが、今はそれについて検討するための材料が得られないので、やむを得ずこれを保留とし、便宜的に「詞書」と呼ぶこととする。
- 2 本稿第一部第一章参照
- 3 万葉集の場合「題詞」という用語を用いるのが通例であるが、本稿では便宜的に「詞書」と言う。
- 4 たとえば大伴家持の「歌日記」とも言われる巻々などには、作者名を含まない詞書も見られるが、これは作者名の記載を予定していなかったのではなく、省略したものと考えることができると思われる。
- 5 二、三句定訓なし。
- 6 断言はできないが、古今集に大きな影響を与えたような散逸歌集の存在は想定しに

く。そのような歌集があったならば、万葉集や新撰万葉のように、古今和歌集内  
部あるいは周辺の文献にその名が残ったであろうからである。

- 7 ただし、全くの創作というわけではない。たとえば、後でも述べるように、古今集  
が文華秀麗集や経国集の詩題の形式を参考にした可能性は高い。また、古今集では  
天皇・皇后等の歌の場合は、「二条のきさきのはるのはじめの御うた」（春上二）  
のように、詞書中に人名を記すが、これは万葉集の巻一、二あたりの形式と同じで  
ある。古今の撰者たちが、これを天皇皇后の歌の詞書の形式を定める際の参考にし  
た可能性もあるだろう。なお、紀貫之ら古今集撰者たちの目にしたであろう万葉集  
が、現在知られているものと等しいという保証はないが、現存諸伝本間にさほどの  
差異が見られないことからして、我々の知る万葉集と古今撰者たちの見た万葉集は  
大きく異なるものではなかったと想定されよう。

- 8 古今集と同じ形式の詞書を有する資料があった可能性を否定するわけではないが、  
そうしたものは存したとしても一部に過ぎなかったと想像される。

- 9 建久本・雅俗山莊本等には「七日の夜よめる」。筋切・元永本等には「七日詠める」  
とある。しかし、歌合の歌であることを記す古今集伝本は確認できない。

- 10 一二・二四・四六・六〇・九二・一〇一・一一六・一一八・一三一・一五三・二  
一二・二四三・二六四・二七一・三〇一・三二六・三四〇・五五八・六三九・六六  
一・六八八・七一五・八〇九・九〇二・一〇二〇・一〇三一

- 11 この歌は、貫之集諸本のうち所謂第I類にだけ存するものであるが、同歌を伝え  
る諸本の詞書には、みな「桜」と記すようである。一方、古今集諸本の詞書には、  
確認できる限り「梅」とあり、「桜」とするものは見られない。

- 12 もちろん、この例の場合は、貫之集がもとの資料というわけではない。貫之集の、  
さらにもとになった資料の記載を古今集が改変したと考えるのである。

- 13 井上宗雄氏「短歌用語の基礎知識」「詞書き」の項（『短歌』昭和六十二年八月  
号）

- 14 「題知らず」という詞書は自由な解釈を許容するものだと見ることもできるが、  
自由な解釈を許容するということも、一つの鑑賞の指示である。さて、ここまでの  
ことを踏まえると、次の事象も説明が可能である。すなわち、古今和歌集の詞書の  
うちに、「春の歌とてよめる」（春下九一）「秋の歌とてよめる」（秋下二六一）な  
ど、「それぞれが春や秋や冬の歌であることが明らかであるにもかかわらず、各首

にわざわざ「春の歌とてよめる」といった詞書が付されたのはなぜか：いったいこれらの詞書の必要性は、どこにもとめられるのであろうか」（川村晃生氏「詞書の意味するもの」（国文学四十巻十号 一九九五年）。同氏は、もと「歌合詠や屏風歌などの机上の詠作」であった歌を「歌は人々が折節の感動を言葉に託して詠出するもの」と述べる仮名序の理念に寄り添う形で「現実の生活での実体験に基づく詠歌として装っていく」ためのものであったとの見解を示された。一部の歌には当てはまるかも知れないが、氏自らも、全てを覆う原理とは認めにくい点もある。と述べておられる。実際に説明しきれないものが散見するように思う。

繰り返しになるが、古今集の詞書は一首ずつに解釈と鑑賞を指示するものであると考える。ならば、「春の歌とてよめる」といった類の詞書も、それが付された歌を、ほかでもない「春の歌とてよめる」歌として、それ以外の要素を考慮せずには鑑賞せよとの、撰者の意図を示すものと了解できるのである。

15 新撰和歌夏部の、「めづらしき声ならなくに時鳥そこらのとしをあかずもあるかな」（新撰和歌夏 一三九）も、この「山たかみ」の歌と同じ屏風のために詠まれた歌として古今集賀部（三五九）に収められたものを、新撰和歌が詠まれた場から切り離して、一首の言葉から、夏の歌として位置づけ直したのである。

16 二句、新撰和歌諸伝本は「花の所は」のもの（群書類従本・永青文庫本等）と「春の心は」のもの（元禄版本・松平文庫本等）とがある。古今集の本文が「花の所は」であることを踏まえるならば、それとは異なる「春の心は」が新撰和歌の本文である可能性の方が高いと考える。古今集と異なる本文が、人口に膾炙した古今集歌の本文に影響されて誤写あるいは改変される可能性が相当程度ありやすいのに対して、古今集と同じ本文であるものを誤写する誘因、あるいは意図的に改変する動機は比較的想定しにくいからである。

17 片桐洋一氏「古今和歌集の場」（『古今和歌集の研究』一九九一年）

18 歌集全体の歌数が一年の日数と等しいことなど、単に秀歌を集積したものではなく、歌集自体を一つの作品として仕上げようとしていることは、既に多くの論者が指摘するところである。

19 新撰和歌が詞書を持たないことに関して「同時代の歌壇・文壇に対抗し和歌の本来在り得べく姿マタここに在りとする貫之の主張なのではなからうか」（小林義明氏「新撰和歌」の配列について―巻第一を中心に―）（専修国文三七号一九八五年）と

見る意見もあるが、本文に述べたように、「貫之の主張」は、「歌壇・文壇に対抗」しようとするものではなく、「歌壇・文壇」の思想をさらに推し進めようとするところにあるものと考える。また、貫之が、歌をまさにストーリーの中で存分に活かした土佐日記を新撰和歌と同時期に著したことも、彼が、歌はそれ自体で独立するものであり、だからこそ、様々なストーリーを付与して楽しむことができるのだ、という意識を持っていたためであると考える。

### 第三節 「相闘」・「対偶」という配列方法の意味するもの

前節まで、新撰和歌には、一首だけで完結し、独立し得る秀歌が収められていることと、貫之がそれらの歌を詞書なしで配列することで、新撰和歌の文脈の中で鑑賞するよう指示しているのを見てきた。次には、その具体例として、「相闘」・「対偶」という方法での配列が、どのように歌の鑑賞を指示しているのか、見てみよう。

新撰和歌はその序文に「爰に春篇を以て秋篇に配し、夏什を以て冬什に敵し、各文を相ひ闘はしめて、両両双べ書す。慶賀哀傷、離別羈旅、恋歌雑歌の流は、各おの又た対偶す。惣て三百六十首、分けて四軸と為す。蓋し三百六十日、四時に関わるを取るのみ。」<sup>注1</sup>とあるとおり、一年の日数を摸したとおぼしい三六〇首の歌を、春秋・夏冬・賀哀・別旅・恋雑の五つの部に分け、それぞれ、春秋の部であれば春と秋の歌を、恋雑の部であれば恋と雑の歌を一首ずつ交互に配列している。このような配列は新撰和歌以前には例が見られず、<sup>注2</sup>そして以降においても受け継がれることのなかった、和歌史的には特異とも言い得るものである。このような配列に関しては、<sup>注3</sup>語句が共通すること、あるいは立春と立秋といった主題の共通性<sup>注4</sup>によって、二首が一对にされているとの指摘がある。同時に、こういった共通性は新撰和歌の全編において緊密にみられるのではなく、組み合わせられた二首の間に主題や語句の対応関係を見いだしたがたい例も多いとの言及もある。<sup>注5</sup>さらに、一对の歌の間に語句や主題の対応関係が見いたしたがたい例の多いことから、貫之の当初の意図は、春秋や恋雑の部の歌を交互に並べるといっただけのものであり、交互に並んだ二首の間の関係は一つの原理で一貫しているのではなく、その場その場での思いつきで対にされたものもあるとする見解もある。<sup>注6</sup>また、近年は、「いくつかの歌によって集の構成、歌の流れを作り、共通語句によって春歌どうしまた春歌と秋歌を組み合わせ、歌の配列によってそれぞれの主題を際立たせるといっように、縦横に歌同士の結びつきを作りながら、限られた材料を用いて集全体の構成をさまざまに工夫している」<sup>注7</sup>といっように、対にされた二首だけではなく、前後に配列された歌を視野に入れた研究もなされている。

ここではそれらの指摘をふまえた上で、交互に配列された一对の歌に、従来言われてきた語句や主題以外の要素による対応関係の見られることを確認した上で、対にされた歌を比較対照しながら歌の表現を鑑賞するよう仕組まれていることを述べていく。

## 1 対にされた歌の諸相

まず、新撰和歌で対にされた歌の間に見られる共通点や対照的な点にはどのようなものがあるのか、具体例を示しておきたい。

### 序詞

あづさ弓押してはるさめけふ降りぬ明日さへ降らば若菜つみてん

夜を寒み衣かりがね鳴くなへに萩の下葉も色づきにけり

(注。春秋 二七・二八)

二七番の歌は「あづさ弓押して」が「張る」を導く序であり、「はる」には「春(雨)」が掛けられている。また二八番の歌でも同様に、「夜を寒み衣」が「借り」を導く序であり、「かり」には「雁(がね)」が掛けられている。さらに、序詞が第二句目の三文字目までであるという語調の面での共通性も指摘できる。

次の例も同様である。

あし鴨のさわぐ入り江のしらなみのしらずや人をかく恋ひんとは

わたつうみの沖つ潮あひに浮かぶ泡のきえぬものからよるかたもなし

(恋雑 二五〇・二五一)

ここでも、上三句の序詞で一首を仕立てていることが共通点としてあげられる。また、語調の面でも、初句末と第三句末で「くの」と繰り返す点が共通している。さらに、双方とも「入り江のしらなみ」、「わたつうみ」、「沖つ潮あひ」と、序詞の部分に描かれた景物が海に関わるものであることも指摘できよう。

以上の二例は、ともに序詞を用いている点、語調の類似する点に着目して対にされたものと思われる。

同様の例は他にも指摘できる。

ほととぎすなくやさ月のあやめぐさあやめもしらぬ恋もするかな

たがみそぎゆふつけ鳥かから衣たつたの山におりはへてなく

(恋雑 二二二・二二三)

この例も、双方の歌に序詞が用いられていることと、鳥が詠まれていることによって対にされている。さらに、次に示す例でも、並べられた歌の双方に序詞が用いられている。

木のまよりかけのみ見ゆる月くさのうつし心は染めてしものを  
かりのくる峰の朝霧はれずのみ思ひつきせぬ世のなかのうさ

(恋雑 二五二・二五三)

むすぶ手のしづくににごる山の井のあかでも人にわかれぬるかな  
から衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ

(別旅 一九七・一九八)

加えて言うならば、前者の一组には、ともに「月」、「霧」という天象にかかわるものが序の中に見られる点、後者の一组はともに序の部分と主文脈との結びつきの強いこと、つまり、「むすぶ手の」の歌はいわゆる有心の序であり、「から衣」の歌は縁語の技法によって序と主文脈が強く結びついているところも意識されているかも知れない。

以上に示した例は、<sup>注</sup>いわゆる序詞という修辞技法に着目して対にされたと思われるものであるが、このような、修辞技法によって組み合わせられたと思われる例が他にも指摘できる。

#### 縁語

たとえば次の例、

青柳のいとよりかくる春しもぞ乱れて花のほころびにける

妹がひもとくとむすぶとたつた山いまぞもみちの色まさりける

(春秋 六一・六一)

傍線を記したように、「青柳の」の歌では「糸」に縁のある「縊る」、「縣く」、「乱る」、「綻ぶ」、「そして」妹がひも」の歌では「紐」に縁のある「解く」、「結ぶ」、「裁つ」と、どちらの歌も縁語を多く配して一首を仕立てていることがわかる。この二首は、春秋の代表的景物である花や紅葉の盛りを歌ったものであり、主題の面での共通性も認められるのであるが、特に、双方共に縁語が効果的に用いられた歌であることにも注意したい。

また、



おとは山<sup>おと</sup>こだくな<sup>な</sup>きて郭公君がよはひを惜しむべらなり

ゆふづくよおぼつかなきをたまくしげふたみの浦は<sup>あ</sup>けてこそ見ぬ

(別旅 一八三・一八四)

この組み合わせは、「おとは山」や「ふたみの浦」といった歌枕を詠み込み、それぞれ「音羽山」の「おと」に掛かっている「音」に縁のある「鳴く」と、「ふたみの浦」の「ふたみ」に掛かっている「蓋身」に縁のある「開け」という言葉を導くという趣向が共通している。

#### 同音、同語の反復

次のような例がある。

はる<sup>○</sup>や<sup>□</sup>ときは<sup>△</sup>な<sup>○</sup>やお<sup>□</sup>そ<sup>△</sup>き<sup>△</sup>とき<sup>△</sup>き<sup>△</sup>わか<sup>△</sup>む<sup>●</sup>鶯<sup>●</sup>だ<sup>●</sup>にも<sup>●</sup>な<sup>●</sup>かず<sup>●</sup>も<sup>●</sup>有<sup>●</sup>る<sup>●</sup>かな

こ<sup>×</sup>ひ<sup>×</sup>こ<sup>×</sup>ひ<sup>×</sup>て<sup>×</sup>あ<sup>×</sup>ふ<sup>×</sup>夜<sup>×</sup>は<sup>×</sup>こ<sup>×</sup>よ<sup>×</sup>ひ<sup>×</sup>あ<sup>×</sup>ま<sup>×</sup>の<sup>×</sup>川<sup>×</sup>き<sup>×</sup>り<sup>×</sup>立<sup>×</sup>ち<sup>×</sup>わ<sup>×</sup>た<sup>×</sup>り<sup>×</sup>あ<sup>×</sup>け<sup>×</sup>ず<sup>×</sup>も<sup>×</sup>あ<sup>×</sup>ら<sup>×</sup>な<sup>×</sup>ん

(春秋 一三・一四)

この二首の歌は、結句の語調が類似するために対にされたのではないかと指摘されるものである。それに加えて、声に出して読んでみればすぐさま了解できるように、いずれの歌もマークを付した部分が同音の繰り返しとなっているところを特徴とする歌である。結句の語調が類似するというのも、「も」や「あ」の繰り返しに拠るところが大きい。このことに着目して貫之は右の二首を対にしたのではないか。そのように考えれば、

春日野のとぶひののもりい<sup>○</sup>でて見<sup>○</sup>よ<sup>○</sup>い<sup>○</sup>ま<sup>○</sup>い<sup>○</sup>く<sup>○</sup>か<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>り<sup>○</sup>て若菜<sup>△</sup>つみてん

うつろはむことだに<sup>△注1</sup>をし<sup>△注2</sup>き秋萩<sup>△</sup>にをれぬ<sup>△</sup>ばかりも<sup>△</sup>おける白露

(春秋 二五・二六)

この二首も、春や秋の野にめぐる植物として代表的な「若菜」と「秋萩」を詠むという共通点を持つと同時に、同音の繰り返しが見られることから対にされたものと考えることができる。また、

さくら花<sup>○</sup>ちらば<sup>○</sup>ちら<sup>○</sup>なん<sup>○</sup>ち<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>ず<sup>○</sup>とて古郷人<sup>△</sup>のきても見<sup>△</sup>なく<sup>△</sup>に

を<sup>○</sup>みな<sup>○</sup>へしお<sup>○</sup>ほ<sup>○</sup>かる野<sup>○</sup>辺<sup>○</sup>に宿<sup>○</sup>り<sup>○</sup>せば<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>や<sup>○</sup>なく<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>だ<sup>○</sup>の名<sup>○</sup>を<sup>○</sup>や<sup>○</sup>立<sup>○</sup>ち<sup>○</sup>な<sup>○</sup>ん

(春秋 七一・七二)

この「をみなへし」の歌も同音の反復の印象的な歌である。一方、「さくら花」の歌は、同音の繰り返しでもあるが、「散る」という語の繰り返しと言うべきであろう。同様に、語の反復が意識されたものとして、次の例があげられる。

おもひいづるときはの山の郭公からくれなるのふりいでてぞなく

冬さむみこほらぬ夜半はなけれどもよし野のたきはたゆるよぞなき

(恋雑 一三三・一三四)

特に、「冬さむみ」の歌は、「なけれどもなき」という構成、また、「夜」と「世」の対応する点と、同語・同音異義語の反復が一首の眼目となつていられると思われ<sup>注13</sup>。

#### 古風さ

次にあげるのは、和歌の技法とは言えないけれども、組み合わせられた二首に共通して、一種の修辭が見て取れる例である。

春がすみ立たるやいづこみ吉野の吉野の山に雪は降りつつ

我妹子が衣のすそを吹きかへしうらめづらしき秋の初かぜ

(春秋 三・四)

これらの歌には、立春や立秋からわずかばかり時が経った、初春、あるいは初秋の景を歌うという、主題の対応が見られる。さて、「春がすみ」の歌は古今集春部(三)にもおさめられており、『古今和歌集打聴』が「み吉野の吉野とかさぬるは「ささのくま桜の隈河」とよめるに同じくいにしへの風流なつづげがらなり」と、この歌には古風な点があるとの指摘をしている。また、春の到来にもかかわらず、目に映る光景は冬のままの雪景色であると歌う、この「春がすみ」の歌のような発想は、

梅の花散らくはいづくしかすがにこの城の山に雪は降りつつ

(万葉集 卷五 八二三 大伴百代)

のように、万葉集以来のものであり、このことも「春がすみ」の歌が新撰和歌の当時、古風なものであったことを思わせる。さらに、同歌の二句目「立たる」に注意したい。これは新撰和歌の伝本、古今集の諸伝本においても、「立たる」という形と「立てる」という形を伝えるものがあり、にわかにはどちらとは決しがたいものである。この「立たる」に関

して、時代は下るが『古来風体抄』に「この歌は「立てるや」と書きたる本も侍れど、よき本には皆「立たる」と書けるなり。歌のたけ、姿などいみじく侍るを、今の世には「たたる」の詞ふりにたるべし」と、古今集の「よき本」には「立たる」とあること、そして、「立たる」は古い言葉であるとの言及がある。「立たる」は、

松の木の並みたる見れば家人の我を見送ると立たりしもころ

(万葉集 卷二十 四三七五)

という万葉集の東歌に見られるだけで、当面の「春霞」の歌を除けば平安朝の和歌には今のところ確認できない。これらことからすると、新撰和歌本来の本文は古風な「立たる」であり、それが書写の過程でわかりにくくなるなどして、一般的な「立てる」に改変された可能性が高いものと思われる。本来の形が一般的な「立てる」であった場合、それが特殊な語に変わることはいくとも思われるからである。あるいは、この「春がすみ」の歌が古風なものと考えられていたために、それに相応しく「立てる」が古風な語に変えられたという可能性も考えられるが、いずれにしても、「春がすみ」の歌は古風な歌だったものと考えられよう。

一方「我妹子が」の歌も、「我妹子」は万葉集に特徴的な言葉であるし、衣を吹き返す風で初秋を歌うという趣向も、

天地と別れし時ゆ ひさかたの 天つしるしと定めてし 天の川原に あらたまの月  
重なりて 妹に逢ふ 時さもらふと 立待つに 我が衣手に 秋風の 吹き反らへば 立ち  
て居て たどきを知らに むら肝の 心いさよひ… (万葉集 卷十 二〇九二)

のように、万葉集に見られるものである。

以上のことから、「春がすみ」の歌と「我妹子が」の歌は、主題の対応だけではなく、どちらも古風なイメージの歌であることにも意を払って対にされたものではないかと考える。

また、次の例も類似の要素を持つものと考ええる。

さ月まつはな立花の香をかげば昔の人の袖のかぞする

みやまには霰降るらしとやまなるまさきのかづら色付きにけり

(夏冬 一二七・一二八)

「さ月まつ」の歌は周知のように、古今集（一三九）に読人知らずの歌として見え、いわゆる古歌として愛誦されていたものである。一方、「みやまには」の歌は古今集神遊の歌（二〇七七）に収められる神樂歌である。そうすると、この二首も、古く懐かしいイメージの共通性によって対にされたのではないだろうか。

なお、この二首に続いて、一二九番の歌では「佐保の河原に来鳴きとよもす」郭公が詠まれ、一三〇番では「かみなびの森」、更に一三一番には「石上古き都」、一三二に「ならの都」が詠まれていて、古さや懐かしさのイメージを醸し出す歌群として意識的に並べられているように思われる。

#### 発想

ここまで、主として修辞技法が共通する組み合わせの例を見てきたが、歌をどのように構想するかという発想が共通するものも指摘できる。例えば次のようなものである。

つれなきを今は恋ひじと思へども心よわくも落つる涙か

世の中のうきもつらきも告げなくにまづ知るものは涙なりけり

（恋雑 一三六・二三七）

は、教えられもしないのに、あるいは、意志に反して、涙が本心を表してしまうという発想が共通する。また、

恋ひしきも心よりあることなればわれよりほかにつらき人なし

あまのかるもにすむ虫のわれからとねをこそなかめよをばうらみじ

（恋雑 三五〇・三五二）

これらはいずれも、人の恋しさも世の憂さも、自らの心が原因だ、恨むのなら自分を恨むしかない、という発想である。

見てのみや人にかたらむ山ざくら手ごとにをりていへづとにせん

山のはにおれるにしきをたちながら見てゆきすぎんことぞくやしき

（春秋 四七・四八）

この「見てのみや」の歌は、美しい山桜は目に見て語るだけでは不十分だから、花の枝を

手折って手みやげとして持って帰ろうと詠むものである。また、「山のはに」の歌は、美しい紅葉を立って見るだけで行き過ぎることが残念だと歌う。いずれも桜や紅葉という春の代表的な美しい植物を、山にあつて目にするだけでは不十分だという類似の発想で詠まれたものである。

いざけふは春の山辺にまじりなん暮れなばなげの花のかげかは  
かみなびのみむろの山を秋ゆけばにしきたちきる心ちこそすれ

(春秋 五七・五八)

これらも先の例と同様に桜や紅葉を歌ったものである。ここでは桜や紅葉の美しさを、山中に入り込んで、心ゆくまで味わうという発想が共通する。また、

さくら色に衣は深く染めて着ん花の散りなむのちのかたみに  
雨ふればかさとり山のみぢ葉はゆきかふ人の袖さへぞてる

(春秋 六五・六六)

も、桜や紅葉の美しい色が衣服にうつり、照り映えるという共通の趣向の歌が対にされている。

花もみな散りぬるのちはゆく春の古郷とこそなりぬべらなれ  
道しらばたづねもいなん紅葉ばをぬさとたむけて秋はいにけり

(春秋 一一五・一一六)

この二首は、晩春あるいは晩秋を主題とする点で対応している。そのことに加えて、これらの歌では、春秋があたかも人間のように、ふるさとを持ったたり、幣を手向けたりすると詠まれている。この擬人法的な趣向の共通することも読みとってよいのではないか。

## 2 二首一組の対応の意図

ここまで新撰和歌で対にされた二首のうちには、語句や主題ばかりではなく、修辞技法や発想、趣向が共通するものも相当数存することを見てきた。このことは、貫之が二首を一組にする配列を構想したときに、歌の修辞や趣向を、歌を鑑賞する際の観点の一つとしていたことを意味する。そのように考えると、従来共通語句によって対にされていると言われてきたものうちにも異なる要因を見いだせる例がある。

例えば冒頭の二首、

袖ひちてむすびしみづのこほれるを春たつけふの風やとくらん  
秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

(春秋 一・二)

は、立春と立秋という主題で対応し、「風」という語が共通しているのだが、春秋という季節の訪れを、まず風に感じるという趣向が共通していることも指摘でき、また次節で詳しく述べるが、ともに礼記月令に基づく発想で詠まれたものでもある。また、

ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まきりけり

紅葉せぬときはの山は吹く風の音にや秋をききわたるらん (春秋 一一・一二)

これも「ときは」という語句の共通性が指摘されているものであるが、語句の共通性だけではなく、色を変えぬ不変の「ときは」の松や山でも、春や秋の訪れは感知されるという共通した趣向を読みとることができる。次に、

わかれをば山の桜にまかせてむとめんとめじははなのまにまに

このたびはぬさもとりあえずたむけ山紅葉のにしきかみのまにまに

(別旅 一九一・一九二)

ここでは、「山」、「まにまに」という語が共通している。主題はそれぞれ別離や旅立ちなのだが、山の桜や紅葉を賞美する気持ちが多分に込められている。その気持ちは「まにまに」という語によって効果的に表現されているのだから、ここでは、言葉が共通することと趣向が共通することは裏表のものなのである。

ここまで、新撰和歌で隣り合わせに配列された歌のうちには、修辞技法や趣向・発想が共通している場合の多いことを見てきた。ではそのことは何を意味するのだろうか。

読者の前に歌一首だけが示された場合、読者は各自それぞれに享受するだろう。ところが、類似・共通するところのある二首を並べられると、読者の注意はおのずとその点に引きつけられるのではなからうか。つまり、貫之の意図の一つに、読者の目を歌の修辞や趣向へ向けさせることがあったのではないかと想像されるのである。

むろん、新撰和歌の全ての歌が趣向の共通性によって対にされていると断言するのはない。

たとえば、

足引の山郭公けふとてやあやめの草のねにたててなく

梅のはな雪にまじりて見えずとも香をだににほへ人の知るべく

(夏冬 一三五・一三六)

ふして思ひおきてかぞふるよろづ代を神ぞ知るらむ我が君のため

花よりも人こそあだになりにつれいづれをさきに恋ひんとか見し

(賀哀 一七一・一七二)

などは、対にされた二首の間に主題や語句、趣向等について、一見してわかるような共通点・類似点は見いだしがたい。むしろ稿者の理解不足のためにそれが読みとれない場合もあるだろう。しかし、対にされた歌の全てが、新撰和歌の当時の人にとって疑いなく理解できる明確な共通点を持つているとも言いがたい。つまり、新撰和歌には主題や語句、修辞や趣向に着目して二首ずつ組み合わせられた歌が多いのであるけれども、その対応の度合いには濃淡があるということである。

このことは、新撰和歌の編纂の際に、主題や趣向等の共通する歌を組み合わせる歌集を作り上げようとしたものの、なんらかの事情で編纂作業が杜撰なものに終わってしまったために生じた現象だという可能性もある。しかし、新撰和歌は、その序文の記述に拠れば、古今集他の作品から「玄のまた玄」なる優れた歌を選ぶことを第一の目的とする秀歌選なのである。そうであれば、対にするために適当な歌を集めるのではなく、まず第一に優れた歌が集められたであろう。それらを配列する際に編者の意図にかなう組み合わせのできそうな歌を対にしたために、必ずしもはっきりとした共通項の見いだしがたい組み合わせがあるのだという可能性の方が高いだろう。

ただ、ともかくも随所に主題や趣向等の共通する歌が並べられることで、新撰和歌を読む者の注意が歌の表現へと向けられることはかわりないし、そのことで、容易には共通性が見いだせない対についても、それを求めて注意深く読む、という鑑賞の態度が要請される。それも彼のもくろみだったのではないだろうか。

### 3 部立てによる配列の違いをめぐって

もう一点考えておきたいことは、従来、四季の部に比べ、それ以外の部では隣り合う二

首一对の歌の間の関係は希薄なのではないかといわれていること<sup>注14</sup>である。そのことについて付け加えておきたい。

#### 四季の部の場合

新撰和歌で交互に配された春秋・夏冬の部の歌を一首おきに抜き出し、春ならば春、秋ならば秋の歌だけを取り出してその配列を見た場合、おおよそ季節の推移に従って歌が並べられている。そのために、たとえば春秋の部の場合、立春と立秋から始まり、暮春と暮秋の歌の対で春秋の部をしめくくるまで、一首ずつ並べられた歌の間には主題の対応が生じやすくなることが考えられる。<sup>注15</sup>夏冬の部も同様である。

一例として春秋の部の冒頭二十首を見てみよう。

袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらん

秋きぬと目にはさやかに見えねどもかぜの音にぞおどろかれぬる

主題：立春・立秋 趣向：季節の推移を風によって知る。礼記月令。

春がすみ立たるやいづこみよしの吉野の山に雪は降りつつ

我妹子が衣のすそを吹きかへしうらめづらしき秋の初かぜ

主題：初春・初秋 趣向：古風な表現。

春ごとにかずへこしまに人ともに老いぞしにける峰の若松

きのふこそ早苗とりしかいつのまに稲葉もそよと秋風の吹く

語句：「くまに」 趣向：思わぬ時の流れの早さに気づく。

とふ人もなきやどなれど来る春は八重むぐらにもさはらざりけり

萩の葉のそよぐ音こそ秋風の人に知らるるはじめなりけれ

主題：季節の訪れ 素材：植物「八重葎」と「萩」

梅の花にほふはるべはくらぶ山やみにこゆれどしるくぞ有りける

いづれとも時はわかねど秋の夜ぞ物思ふことのかぎりなりける

素材：「闇」と「夜」 趣向：「くど」を用いた逆接表現

ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり



紅葉せぬときはの山は吹く風の音にや秋をききわたらん

主題：初春・初秋 趣向：「ときは」のものに感知される季節。

春やとき花やおそきとききわかむ鶯だにも鳴かずもあるかな

こひこひてあふ夜はこよひ天の川霧立ちわたり明けずもあらなん

修辞：同音・同語反復

花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる

こよひ来む人にはあはじたなばたのひさしきほどにあへもこそすれ

語句：「たぐふ」と「肖〔あ〕ゆ」（類義語）

雪のうちに春はきにけり鶯のこほれる涙いまやとくらん

秋風に夜のふけゆけば天の川かは瀬になみのたちるこそまて

趣向：目に見えぬものを描き出す。

梅が枝にきある鶯はるかけてなけどもいまだ雪は降りつつ

ちぎりけむ心ぞつちき七夕のとしにひとたびあふはあふかは

語句：「かく」と「契る」（類義語）

この十組二十首のうち、主題については約半数に対応が想定できる。また、語句、修辞、趣向等については、かなりのものに共通点が認められるように思う。

#### 四季以外の部の場合

一方、四季以外の部ではどうかであろうか。恋の歌に関しては、古今集と同じく恋の進展の順に歌が配列されていると<sup>注16</sup>考えられるが、その他の雑部や賀部などでは、本来的に時間の推移やものごとの終始のような一貫した配列の原則自体が考えにくい。そのことから、四季以外の部では、四季の部の歌で見たような主題の対応・対応関係はあまり見出せないのではないかと予想される。では、実際にはどのようなものであるか、恋雑の部の冒頭二十首を例としてあげてみよう。

しのぶればくるしきものを人しれず思ふてふことたれにかたらむ

人しれずおもふ心は春がすみたちいでてきみが目にも見えなん

人知れぬ思いを表出しようとする趣向が共通する。主題としてもかなり近い内容であると思われる。

久かたのあまつそらにもあらくに人はよそにぞ思ふべらなる  
たれをかもしる人にせんたかきこの松も昔の友ならなくに

「くにあらくに」の句が共通し、それに関わって歌の構造が類似する

おとにのみきくのしらつゆ夜はおきて昼はおもひにけぬべきものを  
わが上につゆぞおくなる天の川とわたる舟のかいのしづくに

「露―置く」という語句が共通する。

吉野川いはなみたかく行く水のはやくぞ人をおもひそめてし  
世の中にふりぬるものは津の国のながらの橋と我となりけり

歌枕を詠み込むことで共通する。「吉野川」の歌の上三句は「はやく」を導く序である。自分があの人を思いそめたことの早さが、吉野河の流れと同じくらい早いというのである。「世の中に」の歌は、自分の年寄り方と、有名な長柄の橋の古び方が同じくらいだというのであるから、現在の修辞技法では特定の用語で説明できないけれども、表現技法として共通性を認められる。

足引の山した水のうづもれてたぎつ心をせきぞかねぬる

ぬきみだす人こそあるらし白玉注17のまなくも散るか袖のせばきに

二首ともに押さえきれない激しい心を詠む点で共通する。また、「ぬきみだす」の歌の「まなく」は万葉集に多く例の見られるものであり（巻一 二五他、多数）、「あしひきの」の歌の「あしひきの山下水」も、万葉集に類例の見える（「あしひきの山下とよみゆく水の」巻十一 二七〇四等）ものである。古風な詠みぶりとしても共通する。

ほととぎすなくやさ月のあやめぐさあやめも知らぬ恋もするかな

たがみそぎゆふつけ鳥かから衣たつたの山におりはへてなく

既に述べたように、序詞の技法が共通し、ともに鳥が詠み込まれる。

津の国のむろのはやわせひてずとも綱をばやはく守るとしるべく

難波潟潮みちくればあまごろもたみの島にたづ鳴きわたる

歌枕、「津の国」・「難波」を詠み込む点で共通し、いずれも、田にかかわる語句が詠まれていることがあげられる。また、「津の国の」の歌は、新撰和歌の作者名を記す系統の伝本では「ひとまる」の作とあり、「難波潟」の歌は、

わかぬ浦に潮みちくれば潟をなみ葦辺をさしてたづなきわたる

(万葉集 卷六 九一九 山部赤人)

との類似によっていずれも古風な歌いぶりの歌としても意識されたのではないかと思われる。

夕されば雲のはたてに物ぞ思ふあまつそらなる人をこふとて

あまつ風雲のかよひぢふきとぢよ乙女のすがたしばしとどめん

「あまつそらなる人」と、天人とも思われる乙女とに類想がある。

たちかへりあはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつ白波

こきちらし滝の白玉ひろひおきて世のうきときのなみだにぞかる

白く泡立つ波と飛び散る瀧の飛沫のイメージが類似する。さらに、傍線を付したように、双方に字余りの句が見られる。

川の瀬になびくたまものみがくれて人にしられぬ恋もするかな

いくばくもあらじうき身をなぞもかくあまのかるもに思ひみだる

序詞の技法が共通し、さらにその序が「藻」である。

ここまで見てきたように、「しのぶれば」と「人知れず」、「あしひきの」と「ぬきみだす」の歌などは、押さえきれない激しい思いと広く捉えれば主題の共通性があるとも考えられそうであるが、春秋の部における立春と立秋の場合ほどに明確な主題の一致とはやはり言えないだろう。

このように、主題の面では、はっきりとした共通点を見出しがたいのであるが、修辞技法や趣向については、多くの組み合わせについて共通点、類似性を指摘できる。賀良、別旅についても同様に言えるもの<sup>注1</sup>と考える。

以上のように、主題の面から見ると、四季の部では一定程度読みとることのできた対応関係が、四季以外ではあまり見出せなくなる。しかしこのことは、部立の性格の違いに由来することであって、編集方針の変更や編纂作業の粗密に起因するものではないと考えるべきだろう。

そして、同じく対にされた歌といっても、四季とそれ以外の部では性格の異なることについて編者である紀貫之自身も意識していたように思われる。

新撰和歌の序文をもう一度見てみよう。

爰に春篇を以て秋篇に配し、夏什を以て冬什に敵へ、各各文を相闘注20させ、両両双べ書す、慶賀と哀傷、離別と羈旅、恋歌と雑歌の流は、各又対偶す

ここには明らかに、四季の部とそれ以外の部が分けて記述されている。もちろんこの文章は対句的な表現で綴られてあり、それぞれの部立てを二つのグループに分けて記述すること自体は言葉のあやであるかもしれない。しかし、分けられた部立てが四季とそれ以外であることは偶然ではないだろう。本来的に同じ主題の歌が並びやすい四季の部では、共通・類似する主題の歌を対にし、その、対にされた歌の「文」あやすなわち表現を「相闘」させ、また同じ主題の歌が考えにくい部では、修辞技法などが共通する歌を「対偶」し、ともに鑑賞を促す。そのような意図を示すものとして、この序文の意味を考えておきたい。

#### 4 「相闘」「対偶」という配列が指示するもの

以上、新撰和歌では、部立ての異なる歌が交互に配されているために、対にされた二首に共通する修辞や趣向に、享受者の注意が一層払われることが期待されるさまを見てきた。これはすなわち、貫之が、対にした二首を注意深く見比べながら鑑賞するよう指示していることを意味するのではないか。また、そのような態度で新撰和歌の歌々を鑑賞する時、多くのことに気づかされる。その具体例を次章で示すこととする。

#### 注

1 原文「爰に春篇配秋篇、以夏什敵冬什、各各相闘文、両両双書焉、慶賀哀傷、離別

羈旅、恋歌雑歌之流、各又対偶、惣三百六十首、分爲四軸、蓋取三百六十日、関於四時耳。」

2 春秋を対立するものとして表現することは、額田王の「天皇詔内大臣藤原朝臣競憐春山萬花之艶秋山千葉之彩時額田王以歌判之歌」（万葉集 卷一 一六）や、応神記の春山霞壯夫と秋山下氷壯夫の説話など、早くから例が見られる。

3 今井優氏「新撰和歌の歌の排列について」（語文（大阪大学）十二号 一九五四年）等。

4 菊池靖彦氏『新撰和歌集』の構成について——その実態と意識——一関工業高等専門学校研究室紀要一号 一九六七年）等

5 注3の菊池氏の論文、および山口博氏「新撰和歌の主張」（『王朝歌壇の研究宇多醍醐朱雀朝篇』第六章 一九七三年）等

6 小林義昭氏「新撰和歌」の配列について——卷第一を中心に——（専修国文第三七号 一九八五年）

7 鈴木隆司氏「新撰和歌の構造——卷一春秋を中心に——」（高知大国文三五号 二〇〇四年）

8 以後、この節では、新撰和歌からの引用に関しては書名を省き、何の部であるかと、歌番号のみを記す。

9 すみの江のなみにはあらねどよとともにこころをきみがよせわたるかな

わたのはらよせくるなみのたちかへり見まくもほしきたまつしまかな

（恋雑 二二二・二二三）

の「すみの江の」の歌の上句はふつう序詞とは考えない。しかし、序詞で仕立てた「わたのはら」の歌と対にされていることから、貫之が「すみの江の」の歌の表現も、今言う序詞と同範疇のものとして捉えていた可能性がある。「すみの江の」の歌の初二句に詠まれた、主題と直接には関わらない景物である「波」が、第三句以下の心情を詠んだ部分の「寄す」という言葉を導き出し、ひびきあうという点においては、いわゆる序詞の機能と変わらないのである。そうすると貫之はこれらの歌を、現在一般にいう序詞の概念よりも広い、ある景物をあげ、その景物の属性に喩えて心情を描くという一つの表現形式を用いたものとして捉えていたのではないかと思われる。ただしこのことについてはさらに検討する必要がある。本論では現行の序詞の範囲で考えておく。

10 「妹が紐」の歌は解釈が難しいのであるが、万葉集（卷十 二二一一）に「妹がひも解登結而（とくとむすびて）竜田山今こそ紅葉そめてありけれ」とあり、上句は「いとしい娘の下紐をきつとまた解こうとしつかり結んで発つ」という竜田山（青木生子氏・井手至氏・伊藤博氏・清水克彦氏・橋本四郎氏『万葉集』（新潮日本古典集成）の現代語訳）と解釈されている。新撰和歌の歌もこれと同様に「解くと約束して結ぶと（引き続いて）発つ」と解釈したい。そして、「発つ」に「紐」の縁語である「裁つ」が掛けられているのだと考える。

なお、同歌は後撰和歌集（秋下 三七六）にも「いもがひもとくとむすぶとたつた山今ぞ紅葉の錦おりける」と、さらに「錦」「織る」という「紐」に縁のある語の見られる形で見え、同歌が一首全体縁語仕立ての歌として享受されていたことも推測される。

11 注6の小林氏の論文、および阪口和子氏『新撰和歌』考——四季の巻の構成について——（大谷女子大國文第二二号 一九九二年）

12 「お」と「を」を区別せずにマークしているのは、この二つの文字は平安時代の写本でもしばしば入れ替わることから、音声として近かったものと考え、そのように処置した。

13 このように、一首のうちに同音や同語が重なるのは、歌経標式、喜撰式、孫姫式等では歌病とされるが、貫之は和歌の修辞の一つとして積極的に認めていたものと思われる。

14 注4の菊池氏の論文等

15 四季の部の歌の主題の対応するものが多いことに関しては、注11の阪口氏の論文に詳しい。

16 佐藤和喜氏「新撰和歌の構成とその表現」（宇都宮大学教育学部紀要三七号 一九八七）など、新撰和歌では必ずしも恋の進展の順に歌を配列してはいないとする説がある。それらの説の根拠は、古今集と重複する歌を見ると、新撰和歌では配列の順が大きく異なる例がしばしば見られることによっている。たとえば、古今集恋一に収められた「ちはやぶるかもやしろのゆふだすきひとひもきみをかけぬ日ぞなき（四八七）」は、新撰和歌では恋も終わりの三五二番に配されている類の例である。しかし、この歌にしても、歌句だけ見れば、恋の終わりの歌としても十分に理解ができるのであり、新撰和歌は新撰和歌として、恋の歌を進展の順に配列

していると考えるべきであろう。詳しくは本論文第二部第二章第二節参照。

17 この歌の第三、四句は国歌大観本では、「したひものまたくもあるか」とあるが、これでは意味が通じないので、群書類従本・元禄版本等によって改めた。

18 「ぬきみだす」の歌は、伊勢物語布引の瀧の章段に見えるものであり、その文脈において考えるならば、激しく流れる瀧の様子を歌ったものとなる。しかし、伊勢物語を離れてこの歌のみを見たとき、袖に散る白玉は涙の比喩と考えられる。

19 第四章 新撰和歌注釈稿参照。

20 この部分、群書類従本に「各各相闘之」とあるほかは、諸本ともに「各各相闘文」とある。「之」であれば、次の句の「両両双書焉」と整った対句になる。一方、「文」の場合は、「文華秀麗集」などの「文」と同じく「文章のあや」すなわち修辭と見て、それぞれの歌の表現を闘わせたという意と考えられる。そして四季の部では主題が対応する歌が多いので、その表現の妙を「相闘」させ、四季以外では、主題の異なるものを表現に着目して「対偶」させたといっているものと思う。このことの詳細については、稿を改めて述べたい。

## 第二章 新撰和歌の編纂の意図

前章で、新撰和歌において、歌は、その配列という文脈の中で鑑賞することが指示されていることを述べた。ことに、「相闘」・「対偶」という配列の方法には、編者貫之の強い指示が込められているのだろうことも見てきた。そのような観点で同集を読み解く時、新撰和歌の歌としてのそれぞれの歌の解釈が深まるのと同時に、貫之の編纂意図の一端も明らかになってくるように思われる。

### 第一節 天皇の徳をたたえる意識 —春秋卷冒頭の歌について

「相闘」・「対偶」という配列の方法に留意しながら読解する対象として、まず、新撰和歌冒頭の一对である、

袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらん

秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

を取り上げたい。この二首は、いずれも古今集にも収められた歌であるが、二首を対にして鑑賞する時、古今集の歌として見るのとは、少しばかり異なる解釈が要求されるように思われるのである。そのことを明らかにするために、まずは、古今集の和歌として「袖ひちて」の歌を解釈するところから始めたい。

#### 1 「袖ひちて」の歌の同時代的解釈

古今集春部第二首目の歌である、

春立ちける日よめる

紀貫之

袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ

に詠まれている、立春の日の風が氷をとかす、という趣向については、古今集の諸注一致して、礼記月令の

孟春之月、日在<sub>ニ</sub>宮室<sub>一</sub>、昏<sub>ニ</sub>参中<sub>一</sub>、且<sub>ニ</sub>尾中<sub>一</sub>。…東風解<sub>レ</sub>凍<sub>一</sub>、蟄<sub>ニ</sub>蟲始<sub>一</sub>振<sub>レ</sub>、魚上<sub>レ</sub>冰<sub>一</sub>、  
瀬祭<sub>レ</sub>魚<sub>一</sub>、鴻鴈来<sub>一</sub>。…<sup>注1</sup>



という記述をそれと関連あるものとして指摘する。なるほど、この歌の作者である紀貫之が四書五経のひとつである礼記を知らなかったとは考えにくく、したがって詠作時について言えば、彼が何らかのきっかけ、あるいは影響を礼記月令から与えられた可能性は十分に認められる。ただ、この歌は、月令の記述をそのまま日本語に翻訳したというような単純なものではないし、また月令の内容を知らなければ一首の解釈ができないという性質のものでもない。ということは、この歌を受け取る立場の者から言えば、一首をかならず礼記月令と結びつけて理解するとは限らないわけである。たとえば頭注密勘がことさらにこの歌と礼記月令との関連を指摘している。ということは、すくなくとも平安末から鎌倉期においては、この歌が月令と関わりなく受け取られてもいたことを示しているのではないか。両者の関連がまったく自明のことであったのなら、わざわざ注に記すことはなかっただろう。

では、古今集の時代、この歌はどのように受け取られていたのか。

そもそも「袖ひちて」の歌が礼記月令と関連あるものとされるのは、「春」「風」「凍」という要素が詠み込まれているからであるが、これらの要素を詠み込んだ歌は、古今集の時代、他になかったわけではない。

#### 寛平御時后宮の歌合の歌

源まさずみ

谷風にとくるこほりのひまごとのうちいづる浪や春のはつ花（古今集 春上 一一）

や、

#### 初春の歌とて

紀友則

水のおもにあや吹きみだる春風や池の水をけふはとくらむ（後撰集 春上 一一）

春霞たつ日の風の糸なれや滝のをとけて玉とみだるる（寛平御時中宮歌合 一一）

など、春の風によつて氷がとけることを詠んだ同時代の歌を他にもいくつか確認することができるが、これらの歌は、月令に依拠して詠まれたものではなさそうである。たとえば、右に示したもののうち、紀友則の歌は、後撰集の諸注が指摘するとおり、和漢朗詠集にも収載される、

柳無<sup>クシテ</sup>「<sup>ス</sup>氣力<sup>キ</sup>」枝<sup>エ</sup>先<sup>マ</sup>動<sup>ウ</sup>、池<sup>イ</sup>有<sup>リテ</sup>「<sup>ス</sup>波<sup>ハ</sup>」文<sup>フ</sup>氷<sup>ヒ</sup>尽<sup>ツ</sup>開<sup>ク</sup>。

今日不<sup>レ</sup>知<sup>ラ</sup>誰<sup>カ</sup>計<sup>カ</sup>会<sup>スルヲ</sup>、春風春水一時来<sup>ル</sup>。（白氏文集 卷二十八 府西池）

を利用して詠まれたとおぼしいし、また、源当純の歌も、今の「府西池」の詩句や、「風翻白浪花千片」（白氏文集卷二十、「江楼晚眺景物鲜奇、吟翫成篇、寄水部张员外」）という表現からヒントを得た可能性が指摘されている。<sup>注4</sup>そしてこれら、友則や当純の歌の直接の典拠と目されるもののほかにも、漢詩には春の風による解凍をうたった作を比較的容易に見い出すことができる。<sup>注5</sup>古今集の表現にも大きな影響を与えている白楽天の作品から例を示せば、次のようなものがある。

南山雪未<sub>レ</sub>尽<sub>キ</sub>、陰嶺留<sub>二</sub>残白<sub>一</sub>。  
西澗氷已<sub>レ</sub>銷<sub>エ</sub>、春溜含<sub>二</sub>新碧<sub>一</sub>。  
東風来<sub>レ</sub>幾日、蟄動萌草拆<sub>一</sub>。

（白氏文集 卷十 溪中早春）

風起池東暖、雲開山北晴。  
氷銷泉脈動、雪尽草牙生。  
露杏紅初坼、煙楊綠未成。  
影遲新度雁、声洪欲啼鶯。

（同 卷十三 早春独遊曲江）

西日雪全銷、東風氷尽泮。  
篔簹魚尾掉、瞥瞥鷺毛換。

（同 卷六十二 南池早春有懷）

このように、早春の詩に「東風」によって「氷」が銷えるところたわれるが、波線を施した部分の措辞から、それが月令に拠っていることは明らかである。また、日本人の漢詩にも東風解凍をうたったものがある。

屈身探得<sub>一</sub>銀魚、手自緘封意豈疎。  
隨我多年鱗半落、贈君遠路淚猶餘。  
不潛南海重波下、將躍東風解凍初。

（菅家文章 卷第三 在州以銀魚袋贈吏部第一郎中）

この詩の「一銀魚」は、「銀魚袋」を指すが、日本古典文学大系『菅家文章』に「銀魚を生ける魚に見立てて」と注されるように、「魚：躍」の表現から、月令に拠っていることがわかる。漢詩では、このように月令に拠っているのだが、それらはすでに常套的な表現となっており、古今集の時代の歌人たちの多くも、そうした漢詩の表現を知っていたら

う。ならば、古今集のころの「春」「風」「解凍」を詠み込んだ和歌のうちには、先の友則の歌と同様、礼記月令の記述に直接拠って創作されたのではなく、前掲のような漢詩の表現に依拠して作られたものが一定の割合で存したであろうし、そうであればまた、古今集の時代の人々が春風による解凍を詠み込んだ和歌を目にしたとき、それを、漢詩にしばしば用いられる表現を利用したもの、と受け取った可能性もあるだろう。さらに、春風による解凍の歌が古今集の時代に複数確認できることからすれば、既にその表現が和歌になじんでおり、初春の歌によく詠まれる表現として、漢詩の詩句を思い起こすこともなく受け取られた可能性も皆無ではない。

そこで次に、そういった可能性がどの程度のものなのか、考えたい。

古今集には、

雪の内に春はきにけりうぐひすのこほれる涙今やとくらむ (古今集 春上 四)

春たてばきゆる氷ののこりなく君が心は我にとけなむ (古今集 恋一 五四二)

のように、「風」が関わらず、春になって氷がとけることを詠み込んだ歌がある。この、春の解凍は、一々の例示は省略するが、古今集以後も途絶えることなく歌に詠まれているし、現代の日本人にもなじんでいる表現である。ところが古今集から時代をさかのぼってみると、万葉集には解凍を歌った例が一首も見いだせないのである。そして実はそのことが今の問い——古今集の時代の人々が春風による解凍を詠み込んだ和歌を目にしたとき、それを、礼記月令を意識しないままに受け取った可能性はどれほどか——について考える手がかりとなるものと思われる。

まずは、万葉集に解凍の歌が見られない、ということの意味を確かめておきたい。

次に示すように、古今集春部冒頭部分には、巻頭から十五番の歌まで春の到来に関わって詠まれた歌が配列されている。

としのうちに春はきにけりひととせをこぞとやいはむことしとやいはむ

袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ

春霞立てるやいづこみよしの吉野の山に雪はふりつつ

雪の内に春はきにけりうぐひすのこほれる涙今やとくらむ

梅がえにきあるうぐひす春かけてなけどもいまだ雪はふりつつ

春たてば花とや見らむ白雪のかかれる枝にうぐひすぞなく

心ざしふかくそめてし折りければ消えあへぬ雪の花と見ゆらむ  
春の日の光にあたる我なれどかしらの雪となるぞわびしき  
霞たちこのめもはるの雪ふれば花なきさとも花ぞちりける  
春やとき花やおそきとききわかむ鶯だにもなかずもあるかな  
春きぬと人はいへどもうぐひすのなかぬかぎりはあらじとぞ思ふ  
谷風にとくるこほりのひまごとにうちいづる浪や春のはつ花  
花のかを風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる  
うぐひすの谷よりいづる声なくは春くることをたれかしらまし  
春たてど花にもほはぬ山里はものうかるねに鶯ぞなく

傍線を付したように、古今集では春の到来を知らせる自然の景物として、今問題として  
る解凍の他に、梅（花）・鶯・霞が詠まれている。これらはみな、万葉集においても、

うちなびく春立ちぬらし我が門の柳の末にうぐひす鳴きつ

（万葉集 卷十 一八一九）

春さればまづ咲くやどの梅の花ひとり見つつや春日暮らさむ（同 卷五 八一八）

ひさかたの天の香具山この夕霞たなびく春立つらしも（同 卷十 一八一二）

など、まっさきに春を知らせるものとして歌に詠まれた例が見える。また、古今集巻頭の  
歌に取り上げられている年内立春も、

月数めばいまだ冬なりしかすがに霞たなびく春立ちぬとか（同 卷二十 四四九二）

などの形で例が見える。また、古今集八首目の「春の日の」の歌では、季節の到来と推移  
の中に位置づけられるものとして、春の雪が詠まれている。これも、

峰の上に降り置ける雪し風のむたここに散るらし春にはあれども

（同 卷十 一八三八）

のように、万葉集に既に例の見られるものである。

右のように、古今和歌集で春の初めの歌の素材として取り上げられているものは、解凍  
を除いてみな万葉集にも確認できるものであった。そのなかで、解凍だけが万葉集に見ら  
れないことは、やはり偶然として片付けることはできない。もちろん万葉集の時代の歌を  
伝える資料は多くない。したがって、万葉集の時代にも春の解凍は歌に詠まれていたもの

の、たまたまそれらが万葉集という歌集には残されなかったのだという可能性を完全に否定することはできない。けれども、仮にその可能性を認めたとしても、万葉集に存する多くの初春の歌のうちに解凍の歌が一首も見られないのは、そのような歌があまり詠まれなかったこと、すなわち万葉集の時代には、解凍を詠むことが春の歌の表現として一般には認知されていなかったことを意味すると考えてよいだろう。

ではなぜ、古今集の前には解凍の歌を詠むことがなかったのか。

まず、当時のみやこの気候が今と大きく隔たったものではなかったようであるから、奈良にせよ京都にせよ、谷川や池などの水が冬の間ずっと凍り続けていたのではなかったろう。たとえば少し後のものになるが、枕草子（三二八段）にも「冬も、氷したる朝などは、いふべきにもあらず。」とある。「このように氷の張った朝をとりたてて表現するからには、氷の張らない朝も少なからず存在しなければならぬ。むしろ、氷らない方が多かったかも知れない。また、冬の朝に凍っていた水が日が高くなるにつれてとけてしまうということも当然あつたらう。そうして、春が近づいて気温が上がるにつれ氷を目にする機会はなくなっていく。つまり、春が来れば氷がとけるのではなく、春が来れば氷ができなくなるというのが実際の関西地方のありかたである。春になって氷がとけるといふ表現は、本来、自然界の観察からおのずと生まれてくる性格のものであるはずだが——そのような性格のもの、すなわち梅の開花や鶯の初音などは万葉でも古今でも等しく初春の景物として詠まれていた——東風解凍は、そうではなかったのである。だから、万葉集の時代に春の解凍が歌に詠まれないのは、実は自然なことだったと考えられる。このように見てくると、古今集の前になぜ解凍の歌がなかったのかという疑問は、古今集の時代になぜ春の解凍が歌に詠まれるようになったのか、というふうにあらためなければならぬ。

そこでそのように見かたを変えて考察を進めよう。春の解凍を和歌にうたうという着想は、自然発生的には生まれにくいものであった。とすれば、そのような和歌表現が生まれたいきっかけは、やはり礼記月令、もしくは月令に由来する漢詩文などの東風解凍の表現に求めなければならない。先に見たように、古今集の時代の人々は礼記月令や漢詩の東風解凍の表現に親しんでいたと考えられるし、何よりも、東風解凍の表現をそのまま利用した和歌を読むこともしているのだから、その延長線上に春の解凍の歌はある、と判断すべきだ、ということである。

さて次に、東風解凍から風という要素を捨象し、春が来て氷がとけることだけをうたう歌が古今集の時代に複数見られ、また古今以後も広く受け継がれたことは既に見たが、そ

のこのの意味を考えておきたい。

春の解凍は、今述べたように、古今集の時代の人々に受け入れられた和歌表現であった。つまり、春の解凍は、初春の歌の表現として、古今集のころの人々の心に適うものであった。ただし、春の解凍の表現が古今集の歌人の心に適ったのは、それが月令に由来するからではないと思われる。そのように判断する理由を以下に述べよう。

それは、この表現が古今集以後も受け継がれたということからの判断である。この問題の解決のため、春の解凍とは対照的な運命を辿った表現を例に示したい。源氏物語夕顔巻に「虫の声々みだりがはしく、壁の中の蟋蟀だに間遠に聞きならひたまへる御耳に：」という叙述がある。この、「壁に鳴く蟋蟀」の表現に関して、「これは『礼記』（月令）の「季夏の月：蟋蟀壁に居る」の句に基づく：中略：漢風賛美時代の終焉のころ、承和以降になると、歌の中にも『礼記』の「月令」的な「壁」になく虫を脳中に描くことが常識的になっていたことがわかる。：中略：直接には、白居易：中略：によるとみるべきであろう。しかしその源はやはり「月令」の句に基づく。この句を熟知していたために白居易の詩句がたやすく享受できたのである。」との小島憲之氏の指摘がある。<sup>註6</sup>この「壁に鳴く蟋蟀」の表現はしかし、和歌のうちに例が多いわけでもなく、とりわけ平安以後はほとんど例が見えなくなっていく。そのこの原因を考えるならば、それはまさに小島氏の指摘のとおり、「壁に鳴く蟋蟀」が月令に由来するが故に日本人の表現に受け入れられたため、ということになるだろう。月令を念頭に置くまでもなく「壁に鳴く蟋蟀」という表現自体がおもしろかったのであれば、そしてそのおもしろさによって和歌表現にも受け入れられたのであれば、もう少しいろいろな作品に類似の表現が残されていてもよいだろう。繰り返しになるが「壁に鳴く蟋蟀」は、礼記月令に由来することで平安貴族の文章に取り入れられた表現だったために、時代が下り政治体制が変わり、儒教、そして礼記への関心が失われていくに従って、この表現への興味も失われていったものと思われる。<sup>註9</sup>それに対して解凍は初春の表現として、現代にいたるまでしっかりと受け継がれている。ということはつまり、この春の解凍は礼記月令への関心からではなく、ひとつの表現として興味深いかゆえに和歌に採り入れられたのである。そうであれば、春の解凍は、月令を意識せずに詠まれ、享受されていくようになるだろう。そして実際のところ、風の関わらない春の解凍を詠んだ古今集時代の歌で、礼記月令との関係を云々されるものはないようである。つまり、古今集のころまでには、春の解凍は月令に由来するというものを離れて、一つの文芸的表現として和歌に受け入れられていたのである。

以上のように考えてくると、春風による解凍を詠んだ歌であっても、たとえば、

こち風に氷とけなば鶯のたかきにうつる声とつげなん（貫之集 八七二 三統元夏）

などのように、あきらかに礼記月令との関連を意識させる表現<sup>註10</sup>になつていなければ、月令の記述とは離れた「春の解凍」のバリエーションとして受け取られる可能性——もちろん、そのようなことがあったときに、当時の人に問い質したならば、ほとんどの人は、春の解凍の表現は礼記月令に由来する、と答えただろう。当時の貴族たちの多くが月令の文言を知らないということは考えにくいからである。つまりここで「月令の記述とは離れた」と言うのは、月令の知識が歌の解釈や鑑賞に影響をあたえない、という意味でのことである。——が十分にあつたものと想像される。

さて、貫之の「袖ひちて」の歌はどうか。この歌は、今の三統元夏の歌のように、あからさまに礼記月令を意識させる表現になつていとは思われない。そしてまた、古来より言及されるように、一首のうちに複数の季節を詠み込む意外性や、孟春の月の景である解凍を立春のまさにその日の光景に凝縮して表現した点<sup>註12</sup>がこの歌の見どころであると思われる。ならば、この歌は礼記月令を意識しないままで受け取られた可能性を、多分に有する性質のものであったと考えられよう。

初めの方で述べたことと重複するが、「袖ひちて」の歌と礼記月令との関係は、早く古今和歌集の古注の時点から言及されていた。そして、それらのうちに、「春たつけふの風やとくらんとは月令に立春の日、東風解凍といへるころ也」とする顕注密勘や「月令云。立春日東風解凍といへる心也」とする栄華抄など、「東風解凍」を立春の日のできごととして示すものが存する。礼記の「月令」は、いうまでもなく一年の記事を月次で記したものであり、東風解凍は「孟春之月」の項目の一つである。そうすると古今集の古注に見られる「立春日東風解凍」という記述は、このような説を最初にと考えた人物が、「袖ひちて」歌の下の句は礼記月令に依っているのだということ、より説得性のあるものとして呈示するために意図的に礼記の本文を改変した<sup>註12</sup>ものか、もしくは、貫之の歌の内容にひかれて「立春之日」であると誤ったものかのどちらかということになる。前者であれば、そうすることで礼記月令とこの歌との関係が明快なものとして受け取られることを期待するがゆえの作為であり、これを逆に言えば、この注を施した人物は、両者の関係が疑いもなく確かなものとは言い切れないと判断していた、ということになる。いずれにしても、これら古注釈のありようは、早くから、礼記月令との関係があまり意識されないうまに、こ

の歌が一般には享受されていたことを示している。

以上、古今和歌集春部第二首目の歌、

袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ

は、礼記月令に由来する「東風解凍」の表現を利用して詠まれたものであるが、古今集の当時から、礼記月令との関係を意識せずに受け取られることもしばしばあったであろう性質のものであることを述べた。

## 2 「秋きぬと」歌と礼記月令の関係

次には、古今和歌集秋部巻頭の歌、

秋立つ日よめる

藤原敏行朝臣

秋きぬと目にはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる

(古今集 秋上 一六九)

と礼記月令との関連について見ておきたい。

従来、この歌と礼記との関連が取り沙汰されることはさほどなかったようである。たとえば、新日本古典文学大系『古今和歌集』は、この歌についての「参考事項」として

孟秋之月：涼風至<sup>リ</sup>、白露降<sup>リ</sup>、寒蟬鳴<sup>キ</sup>、鷹乃祭<sup>チル</sup>鳥<sup>ヲ</sup>：

という礼記月令の孟秋之月の記述を挙げるが、両者の関係がどのようなものであったかについての説明はない。たしかに、月令には秋のはじめの月の自然現象として涼風が吹き始めることが記されており、藤原敏行の歌が秋の訪れを知らせる風を詠んでいることと共通する。したがってこの両者を横に並べて見たときには、実際に作者が月令の記述を意識していたかどうかはさておき、この歌を、礼記月令の記述と関係あるものとして受け取ることも可能である。では、古今集の時代に「秋きぬと」の歌は、月令との関係をどの程度のものとして意識しながら受け取られる性質のものだったのか。先の「袖ひちて」の場合と同様、確認をしておきたい。

さて、月令の記述自体が古今集時代の歌びとたちにとって周知のものであったかどうかは、繰り返すまでもない。また、



西風飄<sup>シ</sup>一葉<sup>ハ</sup>、庭前颯<sup>キテ</sup>已涼<sup>ニ</sup>。

風池明月水、衰蓮白露房。 ……

(白氏文集 卷九 新秋)

晚叢白露<sup>ル</sup>夕、衰葉涼風朝。 ……

(同 卷九 秋題牡丹叢)

沙草新雨地、岸柳涼風枝。

三年感秋意、併在曲江池。

早蟬已嘹唳、晚荷複離披。 ……

(同 卷九 曲江感秋)

涼風冷露蕭索天、黃蒿紫菊荒涼田。 ……

(同 卷十二 東墟晚歇、時退居渭村)

のように、白樂天の詩にもこの礼記月令の記述に基づく表現が見られ、日本人の手になる詩にも、

蟬息涼風暮、雁飛明月秋。 ……

(懷風藻 安倍朝臣広庭 五言 秋日於長王宅宴新羅客)

寒蟬驚爽序、晚虎嘯涼風。 ……

(菅家文章 卷一 秋風詞)

寒露曉霑葉、晚風涼動枝。

殘声蟬嘒嘒、列影鴈離離。

(本朝文粹 橘在列 廻文詩)

など、はっきりと月令に基づいていることがわかるかたちで秋の風を表現した例がしばしば見られる。つまり、秋の詩に、礼記月令の記述に依拠しつつ涼風を表現することは、一つのパターンとして古今集のころの人々にも認められていたと考えられる。

では和歌の表現としてはどうか。秋風は先の「東風解凍」の場合とは異なり、万葉集から数多く歌に詠まれているものである。同集を一瞥しただけで、

十一年己卯夏六月、大伴宿祢家持悲傷亡妾作歌一首

今よりは秋風寒く吹きなむをいかにかひとり長き夜を寝む (万葉集 卷三 四六二)

のように、夏の終わりの月にきたるべき秋の日に吹く風の寒さを予感したり、

秋立ちて幾日もあらねばこの寝ぬる朝明の風は手元寒しも（同 卷八 一五五五）

と、秋になった途端に一変する風の寒さを嘆じ、また、

初秋風涼しき夕解かむとそ紐は結びし妹に逢はむため（同 卷二十 四三〇六）

のように、心待ちにするものとして初秋の風をうたうなど、さまざまな形で秋の訪れを告げる風が、既に古今集の前の時代から歌に詠まれていることがわかる。つまり、初秋の風の歌は古今集の歌人にとって、月令や漢詩表現から学ばずとも、和歌表現として充分なじみのあるものだったと思われる。

ここで敏行の歌を振り返ってみよう。この歌には礼記月令の表現と重なる言葉は少なく、その他両者の関連を示唆する要素もあまり感じられない。たとえば古今和歌集で敏行の歌の前後に配されている、

夏と秋と行きかふ空のかよひぢはかたへすずしき風やふくらむ

（古今集 夏 一六八 躬恒）

河風のすずしくもあるかうちよする浪とともにや秋は立つらむ

（同 秋 一七〇 貫之）

などであれば、秋風のことを「すずし」と表現していて、月令の「孟秋之月：涼風至」との関連もある程度感じられるが、「秋きぬと」の歌には、そのような点が少ないということである。そしてもちろん、古今和歌集の注釈書類にそのような指摘が見られぬように、月令を下敷きにしなければ意味がうまく読みとれないということもない。

以上のことからすると、古今集和歌の当時、礼記月令に「孟秋之月：涼風至」という記述があり、またそれに基づいた漢詩の表現が多いことも十分に知られてはいた。けれども、敏行の「秋きぬと」の歌について言えば、それをわざわざ月令と関連づけて受け取るという可能性はさほどなかった、と考えることができる。

なお、初学記に「茲辰戒<sub>ル</sub>流火<sub>ニ</sub>」 商飈<sub>早</sub> 已<sub>驚</sub> 雲天<sub>改</sub> 夏色<sub>ヲ</sub> 木葉<sub>動</sub> 秋声<sub>ニ</sub>（陳周弘讓「立秋詩」）という詩が見える。あるいはこういった類の詩をヒントとして「秋きぬと」の歌は作られたのかも知れないし、当時の人々もこの歌を、このような漢詩の表現を利用して詠まれたものと受け取っていたかもしれない。ただ、仮にそうだとしても礼記月令からの距離は、やはり遠い。いずれにせよ、「秋きぬと」の歌と月令の記述との関係は、

古今集の時代の人々にとっては、「参考事項」というほどのものであったといえよう。

### 3 新撰和歌冒頭の歌としての解釈

ここまで、古今和歌集の「袖ひちて」と「秋きぬと」の両歌に関して、それらは礼記月令に由来する表現と共通するところを持つ表現を用いたものであるが、古今集の当時、月令の内容をふまえた上でこれらの歌が理解されるということは、あまり多くなかったであろう<sup>注14</sup>ということを述べてきた。ところで、これらの歌は新撰和歌に収められ、同集の巻頭を飾っているのだが、新撰和歌巻頭の詠として両歌を見たときには事情がいささか異なってくる。以下にそのことを述べる。

前節で述べたとおり、新撰和歌は、対にされた二首を見比べながら鑑賞し、その共通点に注意することを求めている。

袖ひちてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらん

秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

この二首を並置して眺めたとき、どちらの歌にも風が詠み込まれていることにまず気が付くだろう。そうして風という語に意が注がれたとき、「袖ひちて」の歌を見る目が変わってくる。すなわち、先に「袖ひちて」の歌は、「月令の記述とは離れた「春の解凍」のバリエーションとして」受け取られる可能性の高いものであったことを述べた。ところが、そこに「風」という要素がはつきりと立ち現れることで、この歌が「東風解凍」の表現であること、つまり礼記月令に由来する表現であることがあらためて意識にのぼるだろう、ということである。そのようにして、一旦「袖ひちて」の歌と月令との関連が意識されたなら、当然、それと対にされた「秋きぬと」の秋風も、月令の「孟秋之月：涼風至」と縁のあるものだとすることに思い至ることがあり得る。つまり、この二首を一对のものとして見れば、それぞれ個別の歌として鑑賞する際には意識にのぼらせることのほとんどない礼記月令との関係が、おのずと浮かび上がってくるというわけである。

さて、新撰和歌の序には「惣<sup>テ</sup>三百六十首、分<sup>テ</sup>為<sup>ス</sup>四<sup>ト</sup>軸<sup>ト</sup>、蓋<sup>シ</sup>取<sup>ル</sup>三百六十日、開<sup>ル</sup>於<sup>ニ</sup>四<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>耳」と、三百六十日が四季にわけられるのにならって三百六十首の歌を四つの巻に編纂したと述べられている。つまり、新撰和歌は一年間の暦にならって編纂したものだというのである。一方、礼記月令は、暦に従ってうつりゆく季節のありさまと、そのおりおり到天

子が主催すべき年中行事を記したものである。そうするとやはり、新撰和歌の巻頭に月令に関わる歌を配するのが、編者のもとよりの意図であつたと了解してよいのではないか。またさらに次のことをも付言しておきたい。たとえば、

賦得春之徳風。題中取韻、卅字成篇。

和風期<sup>ニ</sup>五日<sup>一</sup>、徳化在<sup>ニ</sup>三春<sup>一</sup>。

遠近吹<sup>キテ</sup>無<sup>シ</sup>頗、高低至<sup>リテ</sup>有<sup>リ</sup>隣。

開<sup>カシメテ</sup>花驚<sup>ラ</sup>老樹<sup>一</sup>、解<sup>シメテ</sup>凍放<sup>ラ</sup>潜鱗<sup>一</sup>。

号令今如<sup>シ</sup>此<sup>一</sup>、應<sup>シ</sup>知<sup>ル</sup>養<sup>ヒ</sup>長<sup>シ</sup>仁<sup>一</sup>。

（菅家文章 卷第三 賦得春之徳風）

と、菅原道真是春風の徳を説く詩のなかで月令の表現を用いているが、末尾の句は日本古典文学大系『菅家文章』が指摘するように、君の仁徳をたたえたものと思われる。このように、礼記のことはを用いながら律令制下での君主である天皇をたたえる方法のあることは、古今集の時代の歌びとたちも知っていたはずである。新撰和歌は、その編纂の当初、勅撰集として企図された<sup>注15</sup>。そのような新撰和歌が礼記をその巻頭に戴いているのは、歌集の構成としていかにもふさわしい配慮だといえることができるのである。

ここまで、新撰和歌冒頭に配された「袖ひちて」と「秋きぬと」の二首を、両者を対として鑑賞することで、そこに新撰和歌編纂に際しての貫之の意図が読み取れるだろうことを指摘した。次節でも引き続き、対にされた歌の解釈を通じて、同集編纂の意図の考察を深めたい。

#### 注

- 1 礼記の本文は『新釈漢文大系』による。
- 2 当該の貫之の歌が、礼記の表現と必ずしも強く結びついているわけではないことについては、既に滝川幸司氏の「貫之歌には月令的「東風解凍」の重い意味はなかった。」という指摘がある。（「古今和歌集の勅撰性について ―二番貫之歌の位置をめぐる―」（和歌文学研究七十号 一九九五年））

- 3 寛平御時中宮歌合（寛平八年六月以前后宮胤子歌合）の本文にはやや問題があると

のことであるが、引用した歌は「明らかに和歌合抄成立当時の第一種甲類の筆跡を模したものと判断される」断簡（『平安朝歌合大成』）に記されたものである。

- 4 金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集 句題和歌 千載佳句 研究篇』一三四頁。および、太田青丘『日本詩学と中国詩学』一〇二頁。

5 唐詩類苑など参照。

- 6 山本武夫『気候の語る日本の歴史』（そしえて 一九七九年）など。

7 冬の寒さの象徴としての氷が春の暖かさによってとけるといふことは、当時のみやこの気象現象とは異なるものの、心情としては腑に落ちるところがあると思われる。つまり新春の解凍は当時の人々にとって現実とは異なる、しかし心には納得しやすい観念的な表現であったと考えられるのである。そこが、観念的な表現の多い古今和歌集の時代の歌びとたちの興味をひく点だったのではないか。一方、万葉集の時代の人々も、礼記月令の「東風解凍」を知っていて不思議ではない。けれどもその観念的という同じ理由で、万葉集の歌びとはそれを和歌に積極的に取り入れていくことにならなかったのではないかと思う。

- 8 『古今集以前』（塙書房一九七六年二月）第二章の四。

9 周知のように、コオロギとキリギリスの名称と実体は現代のそれと入れ違っているという説がある。その説に基づいて、「壁」とふさわしいものはどちらか一方の昆虫であり、その名称が平安時代以後に交替したため、歌の表現と虫の名とがそぐわなくなった。そのため、この表現も廃れてしまった、という説明もあるいは可能かも知れない。また単に、この表現が早くに古くさくなってしまったから、という説明もできる。けれども、壁に鳴く蟋蟀という表現が所謂漢風謳歌の時代にも古今集の時代にもそれほどには広まらなかったということを重視して、やはりこの表現は、表現自体の面白さのためではなく、礼記にある由緒正しい表現だからという理由で和文にも用いることがあった類のもの、という可能性の方が高いと考える。

10 この歌では「東風」という語をわざわざ使い、月令の「党風」を明示する。またさらに、詩経伐木の「伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶。出自幽谷、遷于喬木」を基にしており、儒学の聖典を踏まえた歌であることが明白である。また作者の三統元夏が後に文章博士になるような人物であることも、この歌と礼記月令との関連を印象づけている。

- 11 この発想も、「…流水初銷凍、潜魚欲振鱗。…」（中唐 冷朝陽立

春)など、既に漢詩に例がある。ひよっとすると貫之はこのような詩の表現をも参考にしつつ「袖ひちて」の歌の想を練ったのかもしれないし、また古今集時代の人々がこの歌を目にしたときには、(月令ではなく)漢詩の表現を用いたな、と感じたかもしれない。いずれにせよ、この歌が礼記月令とは少し距離を置いたものである可能性を示している。

12 中世の貴族たちにしても、そのおおかたが礼記の内容に疎かったとは考えにくい。にもかかわらず「立春日東風解凍」という、本来の礼記月令にはありにくい記述を引用した古今和歌の注が複数見られるのである。これは、およそ荒唐無稽と思われる説をも含んで多様に展開していた中世古今集注釈の世界を支える思考と同種の考えによるものと今は推測している。

14 「貫之歌には月令的「東風解凍」の重い意味はなかった。しかし配列する側の意識にその重みがあったのである。」「また、このことは、古今集秋部の冒頭歌群が「風」であることも関連する。秋の最初の景物が「風」であるのも、『礼記』月令「孟秋之月」条の最初の景が「涼風」であるのと対応するのである。」と、古今集においても当該の二首の対応が意識されている、という言葉及もある(滝川幸司氏注1論文)。しかし、新撰和歌の配列ほどにそれを強く意識させるものではなかったことは明らかである。

15 新撰和歌の序「昔延喜之御宇、属<sub>二</sub>世之無為<sub>一</sub>、因<sub>二</sub>人之有<sub>レ</sub>慶<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>撰<sub>二</sub>進万葉集外、古今和歌一千篇<sub>一</sub>、更降<sub>二</sub>勅命<sub>一</sub>、抽<sub>二</sub>其勝<sub>レ</sub>矣<sub>一</sub>」による。

## 第二節 規範性を重んじる姿勢 ―夏冬巻冒頭の歌について

前節で、新撰和歌春秋巻の冒頭二首を一对のものとして読み解くことで、同集に律令制下での天皇の仁徳を讃えようとする意図のあることが浮かび上がることを指摘したが、同様のことが夏冬巻冒頭の二首、

我がやどの池の藤なみさきにけり山郭公いまやきなかむ

たつた山にしきおりかく神なづきしぐれの雨をたてぬきにして

にも認められそうである。そのことを説明するために、まずは、第二首目「たつた山」の歌に見える「しぐれ」の詠み方について考えるとそこから始めたい。

### 1 新撰和歌における時雨の歌の特殊性

紀貫之の時代において時雨とは、

季語としては現在は冬に属するが、「万葉集」では晩秋にも初冬にも詠まれ、季節は一定していなかった。「古今集」でも、秋部に三首、冬部に一首あり、このように二季にわたって詠まれる傾向は、「金葉集」の時代あたりまで続く。…中略…初冬の景物として固定されるのは、「古今六帖」「和漢朗詠集」で初冬に採られていることもあるが、「堀川百首」に冬題のひとつとして立てられてからと思われる

（『日本国語大辞典第二版』）

『万葉集』『古今集』共に、秋のものとも冬のものとも定まっていけないが、平安中期ころから、主に初冬十月の景物として定着した。（『古典基礎語辞典』）

と辞書類に記載されるように、一般に秋から冬にかけて降るものとして歌に詠まれていた。念のために勅撰集の四季部に見られる時雨の歌を一覧するならば、

古今集 秋下三首（二五三・二六〇・二八四） 冬一首（三一四）

後撰集 秋中一首（二九七） 秋下三首（三五一・三七五・三九三） 冬十六首（四四三・

四四四・四四五・四四七・四四八・四五〇・四五一・四五二・四五三・四五四・四五五・

四五七・四五九・四六一・四六五・四六九）

拾遺集 秋二首（一三八・一九八） 冬五首（二一五・二一七・二一八・二一九・二二二）  
後拾遺集 秋下三首（三四二・三六七・三七二） 冬四首（三八〇・三八一・三八二・三八

三）

金葉集（三奏本） 冬六首（二五九・二六〇・二六二・二六三・二六四・二六五）

詞華集 秋一首（二三五） 冬五首（一四三・一四四・一四九・一五〇・一五五）

千載集 秋下五首（三五三・三五四・三五五・三六八・三七九） 冬十七首（四〇一・四〇

二・四〇三・四〇四・四〇五・四〇六・四〇七・四〇八・四〇九・四一〇・四一一・四一

二・四一三・四一四・四一五・四一六・四一七）

新古今集 秋下八首（四三七・四五八・五二五・五二六・五二七・五三七・五四四・五四五）

冬三十一首（五六〇・五六二・五六三・五六七・五七〇・五七二・五七三・五七四・五

七五・五七六・五七七・五七八・五七九・五八〇・五八一・五八二・五八三・五八四・五

八五・五八六・五八七・五八八・五八九・五九〇・五九五・五九六・五九七・五九八・五

九九・六〇〇・六二一）

のように、古今集で時雨の歌は秋部と冬部に配されるが、秋部の方が歌数の多いこと、また、後撰集以後は冬部の歌数の方が秋部の数を凌ぐようになるもの、金葉集（二度本・初奏本も同じく冬部のみに時雨の歌が見える）を除いて、秋の終わりの時雨の歌もそれぞれの歌集に位置づけられていることが確認できる。

ところが、新撰和歌中の時雨を詠んだ歌はすべて冬部のはじめに配されており、古今集、そして以後の勅撰集のありようとは異なっている。これは、新撰和歌編纂の過程でたまたま秋の時雨の歌が選ばれなかったためなのか、それとも編者紀貫之の意図的な操作の結果なのであろうか。

## 2 時雨を冬のものとして定位していること

新撰和歌は、その序文によるならば、古今集から「其勝」を抜き出すところから編纂を始めたものと見られる。ではなぜ、古今集に三首見られる秋部の時雨の歌が、新撰和歌の秋部には収められていないのか。

先ほど示したとおり、古今集の四季の部で時雨を詠んだ歌は、秋部に三首、冬部に一首見える。<sup>注1</sup>これらのうち、冬部の時雨の歌、



竜田河錦おりかく神な月しぐれの雨をたてぬきにして

(古今集 冬 三一四)

は、そのまま新撰和歌の冬部に収められている。一方、今問題にしている古今集秋部に見える時雨の歌、

神な月時雨もいまだふらなくにかねてうつろふ神なびのもり(古今集 秋下 二五三)

白露も時雨もいたくもる山はしたばのこらず色づきにけり (同 二六〇)

たつた河もみぢば流る神なびのみむろの山に時雨ふるらし (同 二八四)

のうち、二六〇番と二八四番の歌は、新撰和歌に収められない。なお、この二首が新撰和歌に選ばれなかった理由は、今はわからない。これらの歌が新撰和歌に入れるのには不十分なレベルの作だと見られたのか、それともそれ以外の理由によって排除されたのかが判断できないからである。そして、残る二五三番の歌は新撰和歌の冬部に収められている。これに関しては秋の歌から冬の歌に変えられた理由について、ある程度推測が可能と思われる。以下にその事について述べる。

古今集二五三番の歌は、秋部に収められながら、冬十月の異称である「神無月」という言葉を初句に据えていることが早くから問題にされてきたものである。この問題に関しては、本稿でも明快な見解を示すだけの用意はない。ただ、このことを保留したままでも、この歌の第二句目以下に「時雨もいまだ降らなくに」という言い方をしている以上、時雨の降ることを詠んだ歌(二六〇番)よりも以前か直後に置かざるを得ないだろうことは指摘できる。なお、最近の古今集の注釈書では、この歌の初句を「神無月の」というように考え、「木々を染める十月の時雨もまだ降らないのに」(日本古典集成『古今和歌集』)という解釈をするものが多いようである。そのように理解した場合でも、当該の歌を時雨の降ることを詠んだ二六〇番の歌よりも時間をおいた後に置きにくいことは変わらない。秋の時雨であっても、それが木の葉を色づかせる点においては同じなので、時雨が降り、そのために木々の木の葉が色づいてから時間の経った後に当該の歌を置いたのでは、「かねてうつろふ」ということと矛盾してしまうからである。

このように考えれば、「時雨もいまだ降らなくに」と言う古今集二五三番の歌が秋部に置かれるのは、古今集の四季の部では時雨の降り始めるのを秋としているためであるといえることがわかる。

さて、新撰和歌では、この古今集二五三番の歌が、冬の部に収められる。今述べたよう

に、時雨の降り始めるのが秋とされているのであれば、当該の歌も、その時雨が降り始める前もしくは降り始めたころの、秋の歌とされなければならない。けれどもこの歌が冬の部に収められているということは、すなわち、新撰和歌においては時雨が冬になってから降るものとして位置づけられているということの意味するだろう。

### 3 時雨の降る時期についての貫之の認識

ではなぜ、古今集四季部で秋から降り始めるとされた時雨を、新撰和歌は初冬に降り始めるものとして位置づけ直したのか。

ここで、古今集を振り返ってみると、次のような歌があることに気づく。

冬のがうた

凡河内躬恒

ちはやぶる 神な月とや けさよりはくもりもあへず 初時雨 紅葉とともに ふるさとの…  
(古今集 雑体 一〇〇五)

この歌では、時雨は神無月になって初めて降るものとされている。

先に見たように、古今集の四季部では、時雨の降り始めるのは秋のこととされていた。一方、このように、冬である神無月になってから「初時雨」が降るとする歌もある。つまり、古今集においては、時雨の降り始めるのは秋であったり、冬であったりするということである。言い換えると、古今集では、時雨とは、まさに晩秋から初冬にかけて降るものであり、初時雨にしても、それが秋のものとも冬のものとも特定できない、季節の位置づけが曖昧なものだったのである。それを、新撰和歌では、冬に限定しようとした。つまり、曖昧さを排除し、時雨の降る季節を明確に定めようとした、と考えられるのではないか。実は、右の推定は、貫之個人の作歌における時雨のありようとも符合する。今、貫之<sup>註4</sup>集で詠歌年代の確認できる屏風の歌を見るのに、時雨を詠んだ歌が十二首確認できる。それらのうち、延喜十三年の

山の紅葉しぐれたる所

足曳の山かきくらししぐるれど紅葉は猶ぞ照りまさりける

(貫之集 二七)

および、延喜十五年の、

うつろはぬときはの山にふる時は時雨の雨ぞかひなかりける

(同 五四)

は、その詞書から秋の時雨を詠んだものであることがわかるが、延喜十九年には

みちすらに時雨にあひぬいとどしくほしあへぬ袖のぬれにけるかな

(同一三六 月ごとに一首を詠んだ屏風歌で、九月と十一月の歌の間に配されていることから、この歌が十月の詠とわかる。)

と、冬の時雨が詠まれている。そして、延長四年に詠まれた

女どもの紅葉ひろふ所

散るがうへに散りしつもればもみぢばを拾ふかずこそしぐれなりけれ (同 一八五)

は、秋の時雨とおぼしい。つまり、古今集のありようと同様、時雨は秋から冬にかけてふるものと、この時期までの貫之は考えていたものと思われる。

ところが、それ以後、延長五年以後の詠<sup>註</sup>である、

もみぢばは照りてみゆれど足曳の山はくもりて時雨こそふれ (同 二六四)

は、詞書きに「冬」と記す。また、右の歌と年代が前後する可能性はあるが、「延喜の末よりこなた延長七年よりあなた」の間に詠まれた、

紅のしぐれなればやいそのかみふるたびごとにのべのそむらん (同 三一六)

も「冬」の歌。また、天慶二年の屏風には、「九月」として、時雨の歌が見えるが、

時雨ふる神無月こそ近からし山のおしなべ色付きにけり (同 三九一)

と、内実は、冬十月の時雨を歌ったものである。そして、同じ折の屏風の歌の「十月」に、

雨なれどしぐれといへば紅にこのはのしみて散らぬ日はなし (同 三九二)

ふる時は猶雨なれど神無月時雨ぞ山の色は染めける (同 三九三)

という二首が見える。次いで天慶四年の屏風には、「九月暮るる日」の歌に続けて、

秋さける菊にはあれや神無月時雨ぞ花の色はそめける (同 四九二)

と、冬十月の時雨を詠む。天慶五年には、

さとめてぞみるべかりける花薄まねくかたにや秋はいぬらん (同 五一六)

という歌の次に、

神無月時雨にそめて紅葉ばを錦におれるかみなびの森 (同 五一七)

と、やはり十月の時雨の歌が見られる。また同じ年の月次の屏風でも十月の位置に、

もみぢ葉はてりて見ゆれど神無月しぐれのみふるやまちなりけり (同 五三三)

とあり、延長年間以後の貫之は冬の時雨しか歌に詠まない。これを、偶然と見るよりは、彼が、時雨の詠を冬のものとして考えるようになった結果と見るべきかと思われるがどうだろうか。こうした考えに基づき、かれは、新撰和歌において時雨の歌を冬に限定した、と見るのである。

#### 4 時鳥の鳴き始めの時期の定位

ここまで、新撰和歌では、古今集で曖昧だった時雨の季節を初冬に定めようとしたのではないかということ述べてきた。そのような貫之の意図的な編纂の結果、新撰和歌冬部冒頭に、時雨の「歌群」が形作られることになったと考えるのである。

さて実は、このようにして新撰和歌冬部の冒頭に置かれたと思われる時雨の歌群と「相闘」させられた夏部冒頭の、時鳥の歌についても同じような事が言える。以下にそのことを述べたい。

今、取り上げようとする新撰和歌夏部冒頭の歌、

我がやどの池の藤なみさきにけり山郭公いまやきなかむ (新撰和歌 一一二)

は、

藤波の咲き行く見ればほととぎす鳴くべき時に近付きにけり

(万葉集 卷十八 四〇四二)

藤波の茂りは過ぎぬあしひきの山ほととぎすなどか来鳴かぬ

(万葉集 卷十九 四二一〇)

など、万葉集に見られる、藤の花の咲くころに時鳥がやってきて鳴く、という発想を踏ま

えて詠まれたものである。さて、この「我がやどの」の歌は、古今集においても夏部の冒頭（一二三五）に据えられているが、結句は古今集の諸本ともに「いつか来鳴かむ」とあり、新撰和歌の「今や来鳴かむ」とは異なっている。古今集の本文であると、一首は、池のほとりの藤の開花を確認したのち、まだ鳴かぬ時鳥に思いを致し、「いつ来て鳴くのだろうか」と、疑問の表現を用いつつ、少しでも早い飛来を待ち望む心を詠んだものということになる。ここであらためて注意しておきたいのは、古今集の歌が「いつか」という疑問の表現を用いていることである。この疑問表現は、時鳥が早く来てほしい、という気持ちを背後に含みながら、しかし実際に時鳥が来るのはいつのことかわからないし、しばらく先である可能性も高いという認識を示している。そして、このような歌が夏部の冒頭に据えられていることによって、古今集において、時鳥の鳴き始めるのは夏になってからのことであるが、それがいつのことかはつきり<sup>注7</sup>としない、ということになっている。

一方、新撰和歌の結句「今や来鳴かむ」は、

秋はきぬいまやまがきのきりぎりすよなよななかむ風の寒さに

（古今集 物名 四三二）

のように、今からある事態——この歌においては、山時鳥が池のほとりの藤の花のところにやってきて声を聞かせるということ——が起きることを、相当程度の実現の可能性を考えた上で推測する表現である。つまりこの表現の背後には、時鳥は今すぐにも来て鳴くのが通常<sup>注8</sup>のありよう、という認識があるのである。

さて、こうした歌が夏部の第一首目に置かれることで、新撰和歌では、時鳥の鳴き始めるのは、夏のはじめからということになっている。つまり、新撰和歌は、夏部冒頭に古今集と同じ歌を置きながら、その結句を<sup>注9</sup>変えることによって、時鳥と季節の関係を変更したのである。

では、なぜこのような歌句の変更を新撰和歌はしたのであるうか。先ほど「古今集において、時鳥の鳴き始めるのは夏になってからのことであるが、それがいつのことかはつきり<sup>注10</sup>としない」ということを確認したが、たとえば、後撰集においては、夏部の第二首目に

卯花のさけるかきねの月清みいねずきけとやなくほととぎす（後撰集 夏 一四八）

という歌が見え、ほぼ夏の到来と同時に時鳥が鳴き始めていることになっている。また、

拾遺集では、夏部の十七首目になって

春かけてきかむともこそ思ひしか山郭公おそくなくらん

(拾遺集 夏 九五)

と、時鳥がなかなか鳴かぬことを歌い、その後、初声を切望する歌が続いた後、夏部の歌がすべて五八首あるうちの二十二首目で

髣髴にぞ鳴渡るなる郭公み山をいづるけさの初声

(拾遺集 夏 一〇〇)

と、ようやく初声が聞こえている。このように、古今集以後も時鳥の鳴き始める時期は、歌集により様々であり、そのことはつまり、この当時の和歌表現において時鳥が鳴き始める時期は、孟夏から仲夏という程度の緩やかなものであったということの意味する。そのような一般的な認識の中で、新撰和歌が夏部の冒頭に時鳥の来鳴くことを当然視するかのとき歌を据えたのは、先に、新撰和歌は時雨の降り始める季節が晩秋から初冬という幅を持ったものだったのを冬の初めという一点に定めたのではないかと推定したと合わせる。時鳥の場合も時雨と同じく、一般には漠然と考えられているその鳴き始めの時期を、立夏の日へと明確に位置づけようとしていたためではないかと推測させられるのである。そしてその推測は、古今集において時鳥の初音を五月と明示する歌、

さ月まつ山郭公うちはぶき今もなかなむこぞのふるごゑ

(古今集 夏 一三七)

いつのまにさ月きぬらむあしひきの山郭公今ぞなくなる

(同 一四〇)

が新撰和歌に取られないことによつてより確度を増すといえるのではないか。

なお、このような、時鳥の鳴き始めを立夏の日に定めようとする考え方も、時雨の歌と同様、新撰和歌編纂当時の貫之の自作歌中に見いだすことができそうである。貫之集に見える時鳥の歌に、鳴き始めの時期がわかるものは多くないが、「延喜御時内裏御屏風のうた」として詠まれた、五月五日の菖蒲を「かざせる」人の姿を題材に詠んだ、

ほととぎす声ききしよりあやめぐさかさすさ月と知りにしものを(貫之集 二二八)

では、時鳥の初声を五月の訪れとともに聞いたことになっている。また、延長年間の作と見られる、

さ月くる道もしらねど郭公なく声のみぞしるべなりける

(同 二五六)

と、これと類想の、承平五年九月の

時鳥きつつこだかく鳴く声は千世のさ月のしるべなりけり

(同 三二〇)

も五月の到来と時鳥の鳴き声が同時のものとして詠んでいると思われる。それが、天慶四年三月には

あけくるる月日あれども郭公なく声にこそ夏はきにけれ

(同 四七九)

と、夏の到来を告げる時鳥の鳴き声が詠まれる。また、翌天慶五年四月の「内侍の屏風の歌」には、四月の歌として、

夏衣たちてし日より時鳥とくきかんとぞ待ちわたりつる

(同 五二七)

が見られる。おそらくは、時鳥の声を待つ人が描かれていたのであるが、その人物は立夏の日から時鳥の初音を待っていた、とする。この歌では立夏の日に時鳥が鳴いたわけではないが、立夏の日から時鳥の声が取りざたされるという点で、承平五年の作以前の歌が、五月に鳴き始めるとすることとは相違する。やはり、時雨の歌と同様、時鳥についても、初音と立夏と関連づけて詠むことが、新撰和歌の編纂ころの貫之には意識されていたと言えるのではないだろうか。

#### 5 夏冬巻冒頭二首から読み取れる新撰和歌編纂の意図

以上、新撰和歌夏冬巻冒頭の二首は、それぞれ、古今集においては時期が曖昧だった時鳥の鳴き始めを立夏の日の歌に詠み、また、晩秋から初冬にかけて降る物とされていた時雨を初冬に定めようとするものであったことを見てきた。

ところで、これらの歌を、一首ずつ別個に鑑賞する場合、このことを理解するのは難しい。立夏の日に鳴き始める時鳥の歌を目にしても、そもそも時鳥の鳴き始めは、曖昧なままで和歌に詠まれるのだから、別段変わったところがあるとは思われないのである。時雨にしても同様である。しかし、この二首が夏冬巻の冒頭に並置されることで、ここには、古今集で曖昧なところがあつた時鳥と時雨の季節を整理し、夏と冬のはじめに位置づけようという貫之の意思が見えてくるのではないか。

前節で述べた、春秋巻冒頭の二首に、新撰和歌が四季の順行を描き出すことで、天皇の

徳をたたえようとしていたことが読み取れることと併せて考えるならば、これは、季節の推移を、古今集以上に規範的で整った姿で描き出そうとする、貫之の意図的なものだったと思われる。

#### 注

1 『新撰和歌』一四三番歌は、国歌大観本に「ほととぎすまつに夜ふけぬこのくれのしづぐれにおほみ道や行くらん」とあるが、元禄版本等の「しづぐを」でなければ意味が通じない。

2 時雨は「降ったりやんだりする小雨」（日本国語大辞典第二版）であり、あるところではその年初めての時雨が降っても、別の所ではまだ降っていない、という事はごくありふれた自然現象である。したがって、その自然現象のままに、「未だ降らなくに」という歌を、初めての時雨の歌の直後に置くことは可能と考えられる。

3 新撰和歌の諸本の多くは、第四句を「まだきうつろふ」とする。元禄版本などは古今集と同じ「かねてうつろふ」という本文を伝えるが、こちらは、古今集の本文に惹かれて生じた誤写という可能性が高いだろう。同様に第二句も、古今集の「時雨もいまだ」とは異なる「時雨はいまだ」（松平文庫本、内閣文庫本等）の方が新撰和歌の本来の形かと思われる。さて、古今集の歌「神な月時雨もいまだふらなくにかねてうつろふ神なびのもり」は、（初句の解釈を保留しつつ）秋の歌として、「まだ秋であり、神無月の時雨にしてもまだ降らないⅡまだ紅葉の季節でもないのに、前もって色づく神なびの森よ」と一応の理解ができる。一方、新撰和歌の歌「神な月時雨はいまだふらなくにまだきうつろふ神なびのもり」は、「神無月になったとはいえ、木の葉を色づかせる時雨はまだ降らないのに、時雨の降る神無月になったとたんに、早くも色づく神なびの森よ」と、神無月のはじめころの歌として、ふさわしいものと思われる。すなわち、この歌を秋から冬に位置づけ直すに際して、新撰和歌撰者である紀貫之が本文を改めたものと考えたい。

4 ここでは陽明文庫本を底本とする新編国歌大観三卷所収の本文で示すが、他の本でも同様のことが認められる。

5 この歌の詞書に「京極の権中納言の屏風の料」とあるが、京極権中納言藤原兼輔が権中納言に任ぜられたのは延長五年であることから「この屏風の歌は、延長六七年



のことであらう」(萩谷朴氏 日本古典全書『新訂土佐日記』と判断される。

6

阪口和子氏『新撰和歌』と公任―『拾遺抄』四季部を中心に―(『王朝の文学とその系譜』一九九一年一〇月)・『新撰和歌』考―四季の巻の構成について―(大谷女子大國文二二号 一九九二年三月)

7

このことに関しては既に片桐洋一氏の『新撰和歌』『人麿集』『古今六帖』は、末句を「いまやきなかむ」としている。続く「五月待つ山郭公く」(一三七)、「五月来ば鳴きもふりなん郭公く」(一三八)、「何時の間に五月来ぬらん葦引の山郭公今ぞ鳴くなる」(一四〇)のように、ほととぎすは四月(引用者注：五月の誤りか)になって来鳴くものであり、夏の始めの四月に「今や来鳴かむ」というのはふさわしくない。この夏部の巻頭にある限りは「何時か来鳴かむ」でなくてはならないのである。」「(『古今和歌集全評釈』一三五番歌「鑑賞と評論」の項)という指摘がある。但し、氏が引かれている古今集一三八番歌「五月こばなきもふりなむ郭公まだしきほどのこゑをきかばや」は、五月が来たらそのときには時鳥の声が古びているだろう、ということ、つまり五月になる以前の四月中から時鳥が鳴いていることを前提とした歌である。従って、古今集において時鳥の来鳴くのは五月ではなく、夏になってしばらくしてからのこと、と見るべきであろう。

8

古今集の歌「わがやどの池の藤波さきにけり山郭公いつかきなかむ」の結句は、

神奈備の磐瀬の社のほととぎす毛無の岡にいつか来鳴かむ

(万葉集 卷八 一四六六)

朝霞たなびく野辺にあしひきの山ほととぎすいつか来鳴かむ

(万葉集 卷十 一九四〇)

など、時鳥の飛来を心待ちにする表現として、万葉集に見られる、古くからの表現である。古今集の左注に柿本人麻呂の歌とする伝承が記されることと合わせて、この歌が古今集の時代以前の古い作であったことをうかがわせるものである。そのような古歌を古今集は選んだものと推測される。一方、新撰和歌の結句「今やくん」という表現は、万葉集には見られず、

秋はきぬいまやまがきのきりぎりすよなよななかむ風のさむさに

(古今集 物名 四三二)

の他、

雪の内に春はきにけりうぐひすのこほれる涙今やとくらむ

(古今集 春上 四 二条后)

あきはぎの花さきにけり高砂のをののしかは今やなくくらむ

(古今集 秋上 二一八 藤原敏行)

など、類似したものを含めて、古今集の時代になって詠まれるようになった、まさに当世風の表現であったことがうかがわれる。このことから、当該の歌に関しては、もと「いつか来鳴かむ」とあったものが、古今集の時代ころになって「今や」と改められた可能性が高い。

そして、当該の歌は、古今集・新撰和歌以外にも、古今和歌六帖(四二三六)、人麿集(一七一)にも見え、結句は「今や」とある(人麿集について言えば、私歌集大成に収められた書陵部蔵「歌仙集」(五一・二)本など「いつか」とするものも見える)。古今集に「いつか」とあったものを、新撰和歌が「今や」に改変し、それを古今和歌六帖や人麿集が収めた、という可能性は、新撰和歌の普及の程度を考えると、あまり考えるべきではないだろう。したがって、稿者は、当該の歌の結句を「変える」ということの内実は、新撰和歌編纂以前に結句を「今や」とする形の歌が既に存在して、そちらの方を新撰和歌が選択した結果によるものと考えている。

9 和歌の世界において、時鳥の鳴き始めるのを立夏の日ととらえる考え方は、早く万葉集にうかがわれる(「集中の時鳥詠は一五五首。それを通観するに、時鳥は立夏の日に鳴くものとされ、また、卯の花の咲く四月一日になれば鳴くはずと期待されていたけれども、里では実際にはその声を耳にすることはできず、ほとんどの時鳥詠が、声に対する期待、願望、怨恨、または、その佳き声を聞いたとする幻想の歌になっている。)(伊藤博『万葉集釈注』巻十七 三九〇九／三九一〇番歌注)とされる。)貫之は万葉集からこうした考え方を学んだのかもしれないし、あるいは、大伴家持の「霍公鳥者立夏之日来鳴必定」(巻十七 三九八四番歌左注)という記述のもととなっただろう漢籍(青木正児氏によって『漢書』楊雄伝の「反離騷」につけられた顔師古の注が指摘されている)の類を知っていて、新撰和歌の編纂に生かしたという可能性もあるだろう。

10 貫之集には延喜年間に詠まれたとおぼしい

延喜御時やまとうたしれる人を召して、昔今の人の歌奉らせ給  
ひしに、承香殿の東なる所にて歌えらせ給ふ、夜の更くるまで

とかういふほどに、仁寿殿のものと桜の木に時鳥の鳴くをきこ

しめして、四月六日の夜なりければめづらしがりをかしがらせ

給ひて、めし出でてよませ給ふに奉る

こと夏はいかかなきけん時鳥こよひばかりはあらじとぞきく(貫之集 819)

という歌も見られる。この歌は四月に鳴く時鳥を詠んだものであるが、それを「今宵ばかり」の例外として表現している。つまり、和歌表現上は、時鳥を五月の鳥として認識しているものと判断した。なお当然のことではあるが、時鳥の鳴き始めの時期を、和歌においてどのように定位するのかということと、実生活においてどのように認識しているのか、ということは別のものである。

### 第三節 歌集としての完成度のこと ―恋の歌の配列について

前節まで、新撰和歌の歌を、その配列を手がかりにして読み解くことで、同集編纂時の貫之の意図が読み取れるのではないかということを書いてきた。そのように考える時、気になるのは、新撰和歌の恋の歌の配列がさほど緊密にはなされていないという指摘のあることである。もしもそれらの指摘が当たっているのなら、新撰和歌に込められた編者の意図も、さほどのものではない、ということになるからである。

#### 1 恋の歌の配列に関する先行研究

新撰和歌は「春秋」「夏冬」「賀哀・別旅」「恋雑」の四巻で構成されている。このうち「春秋」「夏冬」の四季の歌を収めた巻は、古今集と同じく、およそ時間の推移の順に歌が配列されている。「賀哀」の部は、古今集と重複している歌を見ると、慶賀の歌の配列順が古今集と同一であり、哀傷の歌も末尾の一首（一八〇番）を除いては古今集の歌の順に配列されている。また「別旅」の部はそのすべてが古今集と重複する歌であるが、離別の歌は、その末尾から二首目（一九九番）以外は古今集と同じ歌順。羈旅の歌は、十首中三首（一八四・一九〇・一九二番）の位置が古今集の順とは異なっているが、これは、おそらくは対になる離別の歌とそろえるための操作と考えられる。このように、ここまで記した新撰和歌の巻々の配列が、古今集とおよそ同じ基準でなされている事に関しては、従来から見解が一致しているように思われる。しかし、第四巻「恋雑」については、

はじめの方に恋歌一からの歌が多く、やがて恋歌三からの歌が散見されてくる。次いで恋歌五からの歌がまとまって出、終わりに行くに従ってそれに恋歌一からの歌が加わってくる。終わりの方では恋歌一と恋歌五とが混交しているわけであるが、「恋愛成就以前の不会恋」と、「不成立に終わった恋愛」とは、個々の歌についてみれば必ずしも区別しきれるものではない。こゝでは、恋歌三・恋歌四からの歌が頭尾におかれず、比較的中ごろに置かれていることに注目すれば足りるであろう。

こうしてみると、恋の場合もやはり『古今集』に大体添った構成であると言える。

と、およそ古今集と同じく、時間の推移に従った恋の進展の順に配列されているという見<sup>註2</sup>

方もあるが、

305と307との間に一線が引きうるのではないかと思われる。つまり、305までは前半に古今集恋一の歌が多く、中央になるにつれ恋三恋四の歌が増え、終わりのほうには恋五の歌が集中している。これに対して、307以降は以前の持つ傾向性がなくなり、他からの補入歌や古今雑歌が連続するとともに、恋一と恋五の歌が交互に置かれるという傾向が見られる。このことから、少なくとも305までは古今集の恋一から恋五への展開が意識されていたと見ることができる。一方、307以降は、恋の初期乃至中期の頃の歌と恋の終わりの歌とを対照しようとする意図があったと思われる。

のように、別の原理を認めようとする意見<sup>注3</sup>もある。ただ、いずれにしても、従来の論の多くは、

この巻（恋雑）には対偶に疑問があったり、杜撰としか思えない点がある。四季歌におけるような編者の熱意が感じられないのである。<sup>注4</sup>

などのように、この巻の構成に、さほどの緊密性を認めないようである。

なお、この巻に緊密な構成を読み取ろうとする論もないわけではないが、それは「恋と雑を一体として、縦糸と横糸で綾を織りなすように、心情の世界を描きあげようとした」として、

「新撰和歌集」巻四「恋雑」は、「恋」の世界から「無情」の世界へと流出してきた心模様を、水の流れと山里の風物という下地の上へ描き出したものであった。<sup>注5</sup>

と言うように、恋だけで完結した構成がなされているとは見ない。

しかしはたして、新撰和歌の巻四は、さほど緊密な構成を持たないものであり、また、恋の歌の配列も、それだけではどのような原則でなされているのか一定の見解が定めがたいほどに古今集とは異なるものなのであろうか。

## 2 恋の歌の配列の具体像

結論から言えば、新撰和歌巻四の恋の歌は、古今集と同じく恋の進展の順に編纂され、

しかも恋だけで一貫したストーリーすら読み取りうるような、緊密な構成がなされていると思われる。

以下、その事を説明するために、新撰和歌の恋の歌をすべて示し、それぞれの歌の間の関連を見ていきたいと思う。

以下、新撰和歌の本文は本論文第四部「新撰和歌注釈稿」のものを用い、歌の上部に国歌大観番号を、下部に古今集での巻名と国歌大観番号（当該の歌が古今集に見えぬものである場合は「ナシ」と記した）を記す。また一首ずつに、新撰和歌の恋の歌として、前後の配列を考慮に入れながら、読み取れる要点をゴチック体で記した。なお、それぞれの歌の詳しい理解については、「新撰和歌注釈稿」の注釈を参照されたい。

- 202 忍ぶればくるしきものを人しれず思ふてふことたれにかたらん 恋一 五一九  
人知れず思う苦しさを語る人もいません。
- 204 久かたのあまつ空にもあらなくに人はよそにぞ思ふべらなる 恋五 七五一  
あの人はまったく他人事のように、私の心には何も気づいていません。
- 206 をとにのみきくのしら露よるはをきて昼は思ひにけぬべきものを 恋一 四七〇  
あの人のことを噂にだけ聞いては消え入りそうな思いをしています。
- 208 吉野河岩浪たかく行水のはやくぞ人を思ひそめてし 恋一 四七一  
ずいぶんと激しくあの人のことを思ってしまったことです。
- 210 足引の山下水のうづもれて瀧つ心をせきぞかねつる 恋一 四九一  
胸のうちのこの激しい思いをせき止めることができません。
- 212 時鳥なくや五月のあめやぐさあやめもしらぬ恋もする哉 恋一 四六九  
道理にあわぬ恋をすることです。
- 214 津の国のむろの早わせひでず共つなをはやはへもるとしるべく ナシ  
まだその時ではないと思っても、早く気持ちを伝えてしまいなさい。
- 216 夕されは雲のはたてに物ぞ思ふ天津空なる人をこふとて 恋一 四八四  
恋人たちの逢う時間になると、手の届かない人のことを恋いしく思うのです。
- 218 立かへりあはれとぞ思ふよそにても人に心をきつ白波 恋一 四七四  
離れていてもあの人のことを繰り返し思っては、ため息ばかりをつけています。
- 220 河の瀬になびく玉ものみかくれて人に知られぬ恋もする哉 恋二 五六五  
人に知られぬ恋をしています。

- 222 住江の浪にはあらねどよとよもに心を君によせわたる哉  
いつまでも心をあの人に寄せています。 ナシ
- 224 あさき瀬ぞ浪は立らんよしの河深き心を君はしらずや  
あの人は私のことを浮気者だと思っているのでしょうか。 ナシ
- 226 心かへするものにもがた恋はくるしきものと人にしらせん  
私の苦しい気持ちをどうかしてあの人に伝えたいものです。 恋一 五四〇
- 228 みちのくの浅香の沼の花かつみかつみる人を恋やわたらん  
あの人のことを目にしながらも、恋しく思い続けるのでしょうか。 恋四 六七七
- 230 我恋は空しき床にみちぬらし思ひやれども行かたもなし  
私の苦しい恋心はやり場ありません。 恋一 四八八
- 232 なぬかゆく浜の真砂と我恋といづれまされり沖つ白波  
私の恋はどうしようもないほど増さっています。 ナシ
- 234 わたつうみの底の心はしらねども人をみるめはからんとぞ思ふ  
あなたの気持ちはどうであれ、私はあなたに逢いたいです。 ナシ
- 236 つれなきを今は恋じとおもへども心よはくもおつる泪か  
振り向いてくれないあなたを忘れようと思いますが、不覚にも涙がこぼれます。 恋五 八〇九
- 238 わか恋を忍びかねては足曳の山橋の色にいでぬべし  
恋心をもう我慢できないので、この気持ちを表に出してしましましょう。 恋三 六六八
- 240 おきもせずねもせでよるをあかしては春の物とてながめくらしつ  
夜な夜な眠れぬままに悶々とあなたの事を思っています。 恋三 六一六
- 242 あはれてふことだになくは何をかも恋のみだれのつかねをにせむ  
ため息だけをつくことで、ようやく思い乱れないでいます。 恋一 五〇二
- 244 わが恋は人しるらめや敷妙の枕ばかりぞしらばしるらめ  
あの人に知られないまま、夜な夜な涙で枕を濡らしています。 恋一 五〇九
- 246 恋しきに命をかふる物ならばしにはやすくぞあるべかりける  
この恋心の苦しさに比べれば、死ぬことの方が簡単でしょう。 恋一 五一七
- 248 こむよにもはや成なゝむめのまへにつれなき人を昔と思はむ  
いっそ死んでしまいたい。あの人に現世で逢えないなら。 恋一 五二〇
- 250 あし鴨のさはぐ入江の白浪のしらずや人をかく恋むとは  
私がここまでの思いをしているとはあの人は知らないでしょう。 恋一 五三三

- 252 そこひなき洲やはさわぐ山河の浅き瀬にこそうは波はたて 恋四 七二二
- あなたの心が浅いので、あなたはあだめいた心を抱いたのでしょうか。
- 254 このまより影のみみゆる月草のうつし心は染てしものを どうして(そんなことを言う) あなたに心惹かれたりしたのでしよう。 ナシ
- 256 夕されば宿にふすぶる蚊遣火のいつまで我身下もえにせむ 恋一 五〇〇
- いつまで恋の火をふすぶらせていなければならぬのでしょうか。
- 258 君といへばみまれみずまれふじのねの珍らしげなくもゆる我恋 恋四 六八〇
- 逢えようが逢えまいがいつもあなたを思っているのですよ。
- 260 あやなくてまだきうき名の立田川わたらでやまむものならなくに 恋三 六二九
- 逢う前から浮き名が立った。だからといって逢わずにすませることはできないのに。
- 262 つなでひくひゞきのなだのりそのなりのりそめてもあはでやまめや ナシ
- 私の名が噂に流れようと、あなたに逢わずには居られません。
- 264 あふことのなぎさにしよる浪なればうらみてのみぞ立かへりける 恋三 六二六
- 逢ってくれないので、あなたのことを恨んで帰ります。
- 266 人しれぬおもひのみこそ侘しけれ我歎をば我のみぞしる 恋二 六〇六
- あなたにこの嘆きは通じないのでしょうか。
- 268 石上ふるともあめにさはらめやはむといもにいひてしものを ナシ
- どのような障害があっても彼女に逢いに行きます。
- 270 あなこひし今もみてしか山賤のかきほに生る大和なてしこ 恋四 六九五
- あの撫子のような美しい娘に今すぐ再び逢いたいことよ。
- 272 むら鳥の立にし我名今更に事なしぶともしるしあらめや 恋三 六七四
- 広まった噂は、今更なかったことにはできません。
- 274 人しれずやみなましかは侘つゝもなき名ぞとだにいはましものを 恋五 八一〇
- 噂を恐れてこの恋がやむことはないでしょう。
- 276 ひとしれず物をおもへば秋の田のいなばのそよといふ人もなし 恋二 五八四
- 今はだれにも知られていないので、だれも同情してはくれません。
- 278 それをだに思ふことゝて我宿をみきとないひそ人のきかくに 恋五 八一一
- 二人の仲を秘密にしておいてください。
- 280 しほみてばいりぬる磯の草なれやみらくすくなくこふらくの多き ナシ
- なぜこんなにも逢うことが少ないのでしょうか。



- 282 人はいさ我はなき名のおしければ昔も今もしらずとをいはん 恋三 六三〇
- 私はやはり「名」が惜しいので、二人の仲を秘密にしておきます。
- 284 あま雲のよそにも人のなり行かさすがに目にはみゆる物から 恋五 七八四
- はつきりとはしません、だんだんあの人から離れてゆくことです。
- 286 月夜にはこぬ人またるかきくもり雨もふらんわびつゝもねむ 恋五 七七五
- それでも月の美しい夜にはあの人を待ってしまいます。
- 288 露だにもなからましかば秋のよを誰とおきいて人をまたまし 恋五 ナシ
- 露だけがあの人を待つ私の友です。(涙を流して待っています。)
- 290 今はとてかれなん人をいかにせむあかず散ぬる花とこそみめ 恋五 七九九
- 離れていったあの人を散る花とも思ひましょう。
- 292 色見えでうつろふものは世中の人の心の花にぞありける 恋五 七九七
- 人の心という花は、目に見えぬうちに移ろうものなのですね。
- 294 色もなき心を人にそめしかばうつろはんとはおもはざりしを 恋四 七二九
- 移ろうなんて思いもしなかったのに。
- 296 有磯海の浜の真砂とたのめしは忘るゝことの数にぞ有ける 恋五 八一八
- あなたへの信頼はむなしものだったのですね。
- 298 行かへり千鳥鳴なる浜ゆふの心へだてゝおもふものは 恋五 ナシ
- 浮気ではなく、あなたのことも分け隔てなく思っていますよ。
- 300 思ひつゝぬればや人のみえつらんゆめとしりせばさめざらましを 恋二 五五二
- 私のことを思ってもいないあの人夢に見えるなんて。
- 302 わすらるゝ身をうち橋の中絶てこなたかなたに人もかよはず 恋五 八二五
- 忘れ去られた身が辛いことです。
- 304 忘草何をか種と思ひしをつれなき人の心なりけり 恋五 八〇二
- あの人のはじめから冷たかったですね。
- 306 秋の田のいねてふこともかけなくにおらじとなどか人のいふらん 恋五 八〇三
- どうしてあの人もう来ないなんて言うのでしょうか。
- 308 いそのかみふるのゝ道も恋しきに清水汲にはまづも帰らん 恋五 ナシ
- 昔なじみのあなたのことが恋しいので、ふたたびあなたの所に戻りましょう。
- 310 またばなをよりつかねども玉の緒の絶てたえてはくるしかりけり 恋五 ナシ
- 実らないとはわかっています、あなたの事を待っています。

- 312 世の中にたえていつはりなかりせば頼ぬべくもみゆる玉章  
あなたの手紙を信じることはできません。 ナシ
- 314 いま更にとふべき人もおもほえず八重葎して門させりてへ 雑下 九七五  
今更誰も私を訪れはしますまい。いつそ閉じこもってしましましょう。
- 316 我やどは三輪の山もと恋しくはとぶらひきませ杉たてるかど 雑下 九八二  
私の宿はここです。もし恋しく思ってくれるならばいらしてください。
- 318 秋くれば野にも山にもひとへたつたつとあるとや人の恋しき ナシ  
あなたに飽きられてしまつて、そのせいで私はあなたが恋しいのでしょうか。
- 320 おく霜にねさへかれにし玉かづらいつくらんとか我は頼まむ ナシ  
すっかり離れてしまつた人をいまさら信用することはできません。
- 322 我やどの一むらすゝきかりかはむ君か手馴の駒もこぬかな ナシ  
それでもあなたのおいでを待っています。
- 324 あはれてふことにしるしはなけれ共いはではえこそあらぬものなれ ナシ  
「あはれ」というため息をつかずにはいられません。
- 326 浅芽生ののをゝしのはら忍ぶとも人しるらめやいふ人なしに 恋一 五〇五  
あなたは私の思いを知らないでしょう。だれも伝えてくれないから。
- 328 侘はつる時さへものゝかなしきはいづれをしのぶ心なるらん 恋五 八一三  
この悲しさはいったい何に対する未練なのでしょう。
- 330 伊せのうみのあまのたくなは打はへてくるしとのみや思わたらむ 恋一 五一〇  
私はこれからもずっとずっと苦しみ続けるのでしょうか。
- 332 おもふともこふともあはむ物なれやゆふてもたゆくどくる下ひも 恋一 五〇七  
逢えるはずもないのにどうして下紐が解けるのでしょうか。
- 334 おもひやる心やゆきて人しれず君か下紐ときわたるらん ナシ  
私の心があなたのもとに赴いているからです。
- 336 あひみぬもうきも我身のから衣おもひしらずもとくる紐哉 恋五 八〇八  
あなたの嘘はわかっている。それなのに下紐が解けて悲しい期待をさせることよ。
- 338 おもひ出る常槃の山のいはつゝじいはねばこそあれ恋しきものを 恋一 四九五  
口にしなければ良いのでしょうか、恋しいことです。
- 340 道しらばつみにも行む住の江の岸に生てふ恋忘ぐさ 墨滅歌 一一一  
忘れ草の所在がわかればこの恋しさを忘れてしまいたい。それほどに苦しい。

- 342 岩のうへにたてる小松の名をよしみことにはいはず恋こそわたれ  
忘れられずに、言葉に出さぬままに恋しく思い続けるのでしょうか。 ナシ
- 344 あはれてふことこそうけれ世中におもひはなれぬほだし也けり  
あなたのことを忘れられなくて、出家することもできません。 雑下 九三九
- 346 恋くぐて枕さだめむかたもなしいかにねしよか夢にみえけむ  
せめて夢だけでも見たいのにそれもかなわない。 恋一 五一六
- 348 つゝめども袖にたまらぬしら玉は人をみぬめの泪也けり  
逢えぬ悲しみの涙は袖でおおいきれないものなのです。 恋二 五五六
- 350 恋しきも心よりあることなれば我より外につらき人なし  
恋しいのは私の心がそうさせるのですから、自分だけが悪いのです。 ナシ
- 352 千早ふるかものやしろの夕たすきひとひも君をかけぬ日ぞなき  
これからも毎日あなたのことを思い続けるのです。 恋一 四八七
- 354 久しくも成にける哉住の江の松は千とせの物にぞ有ける  
「待つ」ということは、いつまでも続くものだったのです。 恋五 七七八
- 356 恋せじと御手洗河にせし御祓神はうけずも成にける哉  
神もこの苦しきから救ってはくれません。 恋一 五〇一
- 358 三輪の山いかにまちみむ年ふ共尋る人もあらじと思へば  
私はあなたの事をどうやって待ったらいいのかわかりません。 恋五 七八〇
- 360 白玉か何ぞと人の問ひし時露とこたへてきえなまし物を  
あなたといっしょにいたときに死んでしまっていたら良かったのに。 ナシ

右に見るように、新撰和歌の恋の歌は、「人知れず思ふ」(二〇二)ことから始まり、片恋の苦しさが次第に高まって、「色に出でぬべし」(二三八)と思ひ詰め、「死には易く」とさえ苦しんでいるうちに、「まだきうき名のたつ」(二六〇)という状態になり、ようやく逢えた(二六八と二七〇の間)ものの、「見らく少なく」(二八〇)なり、「よそにも人の」(二八二)なっていて、ついには、「かれなん人」(二九〇)ということになる。こうして一旦去っていた男が「古野の道も恋し」(三〇八)とばかりによりを戻そうとするが、その言葉も「たえていつはりなかりせば」(三一二)としか思えない。「うちはへて苦しとのみ」(三三〇)思い続けることになるだろう悲しみに暮れ、愛しい人を待ち続け待ち続けて「久しくもなりにけるかな」(三五四)、もうこれ以上は「恋せじ」と神に願

い(三五六)、いっそ、幸せな時に死んでしまったらよかったのに(三六〇)と、終わつた恋を総括する。このような、恋の進展の順に配列されているものと理解することができ<sup>注6</sup>る。

加えてもう一点指摘しておきたいのは、逢瀬までの歌々は男の立場から、その後の歌々は女の立場から見た恋のありようとして構成されていると理解できることである。

まず、逢瀬までの部分を確認しておきたい。二〇二番の恋のはじめの歌から、二一二番の歌までは、詠歌主体を男とも女とも定めることはできないが、二一四番の

津の国のむろの早わせひです共つなをはやはへもるとしるべく

は、第三者が、恋する男に対して、娘を他の男に横取りされないよう「綱を早延へ」と、はやした体の歌である。続く二一六番から二三二番は、男の歌としても女の歌としても受け取ることが可能である。そして二三四番の歌、

わたつうみの底の心はしらねども人をみるめはからんとぞ思ふ

は、「人をみるめはからんとぞ思ふ」という表現から、逢いに行きたい、という男の立場の歌と思われる。また再び、二三六番から二四八番は性別が読み取りがたい。さてその次の二五〇～二五四番の三首は、どうであろうか。

あし鴨のさはぐ入江の白浪のしらずや人をかく恋むとは

と、相手に自分の恋心の激しさをわかってもらえないことを嘆いている歌の次に、

そこひなき渕やはさわぐ山河の浅き瀬にこそうは波はたて

が配されると、二五〇番の歌の「白波」を引き受ける形で、あなたは心が浅いからこそ、簡単に波立つ＝激しい恋心を抱くのでしょうか、と二五〇番の歌の詠歌主体に対して嫌みを言った体の歌として理解できるようになる。そして、続く

このまより影のみみゆる月草のうつし心は染てしものを

は、一首だけ見た場合には「しっかりとした心を保っていたはずなのに。どうしてあなたなどに心惹かれたのでしょうか。」という趣旨であるが、二五二番の歌を受けての感慨として見れば「私の心が浅いだなんて、そのような冷たいことを言うあの人のために、どう

して心乱れるのでしようか。」と受け取ることができよう。このように二五〇番からの三首は、男の女に対する恨み言・恨み言を言われた女から男への皮肉・皮肉な歌を受け取った男の嘆き、として読むことが可能である。さてまた二五六・二五八番の性別不詳の歌二首を挟んで、二六〇番からの三首、

あやなくてまだきうき名の立田川わたらでやまむものならなくに

つなでひくひゞきのなだののりそののりそめてもあはでやまめや

あふことのなぎさにしよる浪なればうらみてのみぞ立かへりける

は、いずれも男性の立場の歌である。そしてまた二六六番の一首をおいて二六八番では、

石上ふるともあめにさはらめやあはむといもにいひてしものを

必ず女の元に行く、という男の決意を述べた物であり、続く二七〇番、

あなこひし今もみてしか山賤のかきほに生る大和なでしこ

は、既に逢ったことのある女への恋着を歌った男の立場で詠まれたものである。従って、二六八番と二七〇番の歌の間に二人の逢瀬があった、ということになる。

さて、恋のはじめからここまでの一連の歌は、詠歌主体の性別が定められぬ歌を男の詠としてみるならば、第三者からの教唆と女からの冷たい反応の歌をアクセントのようにして置きながら、男の視点から逢瀬までを構成したものと見ることができるとはならないだろうか。

次に逢瀬以後の歌を見てみたい。

二七二番、

むら鳥の立にし我名今更に事なしぶともしるしあらめや

は、立ってしまった噂を気に病む心情を背景にしたものであるが、こうした心情はどちらかといえば、女性の詠としてふさわしいようにも思われる。そして、二七四・二七六番をおいて二七八番、

それをだに思ふことゝて我宿をみきとないひそ人のきかくに

は、「我が宿」という言葉から、女から男へ向けての懇願の歌と読み取れる。また二八四

番、

あま雲のよそにも人のなり行かすがに目にはみゆる物から

も、「よそにも人のなりゆくか」という、恋人が自分から離れていくことを悲しむ表現から、女の歌とおぼしいし、二八六・二八八番、

月夜にはこぬ人またるかきくもり雨もふらなんわびつゝもねむ

露だにもなからましかば秋のよを誰とおきいて人をまたまし

は、あきらかに男の来訪を待ちわびる女の歌である。その後、恋人の心変わりを嘆く歌が続いた後、二九六番に

有磯海の浜の真砂とたのめしは忘るゝことの数にぞ有ける

相手の冷たさを嘆いた歌が置かれるが、その次の二九八番、

行かへり千鳥鳴なる浜ゆふの心へだてゝおもふものかは

は、私のことを冷たい人間だと思っているようだが、妻妾のひとりとして、おまえのことも分け隔てなくおもっているよ、と言いつつ、男の歌とおぼしい。続く三〇〇番、

思ひつゝぬればや人のみえつらんゆめとしりせばさめざらましを

は、二九八番の歌を受けて理解するならば、口先だけのあなたが私のことを思っていると考えられない。だからあなたの夢を見たのも、私のあなたへの思いゆえでしょう。そんな滅多にない夢であれば冷めずにいたものを、と、「心隔てて思ふものかは」と言った男に対する皮肉を言ったものとして読み解くことが可能であろう。そうすると、この歌に続く三〇二番は、

わすらるゝ身をうち橋の中絶てこなたかなたに人もかよはず

と、男のいいわけもむなし、全く忘れ去られた女の悲しみの歌と見える。また、一首置いた三〇六番、

秋の田のいねてふこともかけなくにおらじとなどか人のいふらん

も、「おらじとなどか人のいふらん」から、別れを告げられた女の歌と判断される。そこに、三〇八番の歌、

いそのかみふるのゝ道も恋しきに清水汲にはまづも帰らん

が置かれると、昔の女のことを思い出した男が久しぶりによこしてきた文と見ることができ。そして三一〇番の歌、

またばなをよりつかねども玉の緒の絶てたえてはくるしかりけり

を、それに対しての返答であると受け取るならば、やや舌足らずな表現ではあるが、すっかり絶え果てるのは苦しいことですね。ならば、望みが無いにせよ、待つ方がましでしょうか、というほどの意味に理解でき、三〇八番の男の歌に対する、悲しい当てつけの歌と見ることができよう。続く三一二番の

世の中にたえていつはりなかりせば頼ぬべくもみゆる玉章

も、三〇八番の男の文に対する皮肉と見え、また、三一四番、

いま更にとふべき人もおもほえず八重葎して門させりてへ

は、男の文を受けての女の感慨と読める。そして、続く三一六番、

我やどは三輪の山もと恋しくはとぶらひきませ杉たてるかど

は、結局訪れのなかった男に対してのメッセージの歌と読むことができる。その後も三二

〇・三二二番、

おく霜にねさへかれにし玉かづらいつくらんとか我は頼まむ

我やどの一むらすゝきかりかはむ君か手馴の駒もこぬかな

に、男に忘れ去られた絶望感の中でそれでも待つ女の歌が配される。その後、

おもふともこふともあはむ物なれやゆふてもたゆくとくる下ひも

と、三三二番に、あの人に逢えるはずもないのに、下紐が解けて逢瀬を思わせることをいぶかしむ歌が置かれると、続く三三四番、

おもひやる心やゆきて人しれず君か下紐ときわたるらん

は、それに対してすかさず男が返した歌と読める歌が続けられる。そうしておいて、三三六番には、

あひみぬもうきも我身のから衣おもひしらずもとくる紐哉

と、男の言葉を打ち消す女の歌が配置される。その後、恋の辛さを嘆く歌が続くのであるが、それは、三五四番

久しくも成にける哉住の江の松は千とせの物にぞ有ける

や、三五八番、

三輪の山いかにまちみむ年ふ共尋る人もあらじと思へば

など、「待つ」身である女の歌と受け取ることが自然であると思われる。そして、恋の歌の最後には、

白玉か何ぞと人の問ひし時露とこたへてきえなまし物を

という三六〇番の歌が置かれるが、これは、かつて男が女の涙を見て「白玉か何ぞ」と尋ねてくれた、その時に死んでしまえば良かったと後悔する女の歌として読むべきであると思われる。

ここまで説明してきた、新撰和歌の恋の歌が、初恋から逢瀬までが男の視点、逢瀬以後恋の終わりまでが女の視点で配置されていることは、逢瀬を希求する段階の恋は男のものとして、逢瀬の後、逢えぬ辛さをかこつ姿は女のものとして詠むのが規範的で整った歌の望ましい姿である、という理念が貫之にあったことを示唆する。さて、こうした考えは、古今集の恋の歌からは、明確には見いだせないようである。これも古今集から一層磨き上げられ、整った歌集として新撰和歌が編纂されていることの証しとなるものと考えられる。やはり、新撰和歌は、編者貫之が隅々まで目を配り、完成させた歌集なのである。



ここまで、新撰和歌の恋の歌を、その配列の順に従って読めば、相当に緊密な構成が読み取れるということを書いてきた。ところで、それらの歌のうちには、たとえば、第二首目の歌、

久かたのあまつ空にもあらなくに人はよそにぞ思ふべらなる（新撰和歌 二〇四）

が、古今集では、恋も終わりの巻五（七五一）に位置するものであったり、新撰和歌では恋の終盤に近い歌とされていた、

恋くくて枕さだめむかたもなしいかねしよか夢にみえけむ（新撰和歌 三四六）

が、古今集では恋一（五一六）に配されている、というような例がしばしば見られる。前者の例であれば、新撰和歌では、思い始めた人が手の届かない人であり、私のことなどまったく無関係に思っている、という状況を詠んだものとして理解できるが、古今集の場合は、冷たくなってしまった恋人のことを、どうしてこんなによそよそしく振る舞えるのか、という憤りの歌として見ることになるだろう。また後者の例では、忘れ去られて、もはや夢にも現れてくれない恋人の事を思う歌、というのが新撰和歌での解釈であるが、まだ思いの通じぬ人がたまさか夢に見えた、そのことを、悲しくも嬉しく思う気持ちを表した歌として古今集では解釈されるものであったのだろう。

このように、同じ歌であるが、古今集と新撰和歌では位置づけが異なり、解釈も異なる例がしばしば見えるのである。このことは、新撰和歌編者の紀貫之が、歌は、一首の置かれた文脈次第で解釈が変わりうることを自覚していたことと、新撰和歌においては、配列によって文脈をつくりだし、歌だけで一つの世界を構築しようとしていたことを再確認させるものである。

古今集は、すべての歌に詞書が付されていた。すなわち、収められたすべての歌がそれぞれに背景となる「場」を持っているのである。そして、古今集という歌集は、それぞれの歌をそれが詠まれた「場」とともに、天皇に向けて奏上するという性格のものと考えられる。<sup>注7</sup> 言い換えると、天皇に対して、われらはこのように歌を詠んでおりますと申し上げたものと考えられる。それは、古今集の仮名序の「いにしへの世世のみかど春の花のあした秋の月の夜ごとにさぶらふ人人をめしことにつけつつたをたてまつらしめたまふ、あるは花をそふとてたよりなき所にまどひあるは月をおもふとてしるべなきやみにたどれ

る心を見給ひて、さかしおろかなりとしろしめしけむ」という、臣下の「さかしおろかなり」を見定める材料として歌を用いた、という記述内容に添うものであろう。また、同じく仮名序に「そのはじめ」の理想的な歌のありようとして、「さざれいしにたとへつくば山にかけてきみをねがひ、……今はふじの山も煙たたずなりながらのはしもつくるなりときく人はうたにのみぞ心をなぐさめける」と記した部分で、ある現実の場面において歌が詠まれていたとする考えと軌を一にするものといえるだろう。

一方、新撰和歌では、その序に、収めた歌の意義として「皆是以動天地感神祇、厚人倫成孝敬、上以風化下、下以諷刺上、雖誠假名於綺靡之下、然復取義於教誡之中者也、」と言う。下の者を「風化（教化）」し、上の者を「風刺」する。また「教誡」をその意義とするのが歌ということであれば、歌は、個別の文脈に限定されるものではなく、一般的な真理を表したものである方が都合はよいだろう。そのような序に記された思想を具現化する一つの方法として、貫之は新撰和歌に収める歌々から詞書を削除し、つまり、歌の詠まれた個別の場から歌を置き放ち、歌だけで完結し、調和した世界（世）を創り出そうとしたのではないだろうか。

#### 注

- 1 菊池靖彦氏 『新撰和歌集』の構成について―その実態と意識― 一関工業高等専門学校研究室紀要一号（一九六七年）に詳しい。
- 2 菊池靖彦氏 注1論文。
- 3 佐藤和喜氏 「新撰和歌の構成とその表現」（宇都宮大学教育学部紀要三十七号 一九八七年）
- 4 菊池靖彦氏 『新撰和歌集』（『古今集以後における紀貫之』第二章 一九八〇年）
- 5 塚本洋子氏 「新撰和歌」についての一考察―巻四「恋雑」をめぐる―」（国文学六十三号 一九八五年）
- 6 従来の諸研究がこのような簡単なことを指摘しなかったのは、それぞれの歌を古今集における解釈を適用しながら理解していったためと思われる。後で述べるように、古今集の歌は、古今集の配列の中でそれぞれの歌の読みが定められるのであるが、それは歌の絶対的な意味ではない。新撰和歌であらたな編纂がなされることで、新撰和歌の歌としての理解がなされるものなのである。新撰和歌の配列に従い、それ

その歌を読み取るならば、上のような理解が容易にできるのである。

なお、はじめに引用した菊池氏の、新撰和歌恋歌の構成に関する見解における、「恋愛成就以前の不会恋」と、「不成立に終わった恋愛」とは、個々の歌についてみれば必ずしも区別しきれるものではない」との言は、それぞれの歌を古今集における解釈を一旦保留して読解しようとした結果と思われるが、これを更に推し進めて、

7 片桐洋一氏「古今和歌集の場」(『古今和歌集の研究』一九九一年)

8 新撰和歌の恋の歌は、本節で見たように、時間の進展の順で整然と配列されていて、その末尾には、

白玉か何ぞと人の問ひし時露とこたへてきえなまし物を

という、恋のすべてが終わった後に、その様を総括する歌が置かれる。こうした恋の歌と対にされた雑の歌は、老いを嘆く歌を随所に挟み込みつつ、生活の中で遭遇しうる様々な出来事や感慨を詠んだものが並べられ、最後は、

ながれてはいもせの山の中におつる吉野の瀧のよしや世間

という、諦念とも祝言ともつかぬ歌で閉じられる。これも老いの末に得た境地を描いたものだろう。恋の歌も雑の歌も、再び戻ることのない、無情な時間の流れのなかに位置づけられているのである。

新撰和歌の全体は、このような、直線的な時間軸で整理される人事の歌と、循環し永遠に続く時間軸上に配される自然の歌とを対立的に構成したものであったと考えられる。

### 第三部 土佐日記と新撰和歌からみる紀貫之の文芸観

第三部は、新撰和歌とほぼ同時期に作られた土佐日記の創作意図について考えることで、貫之晩年の文芸観の一端を明らかにすることを目的とする。

#### 第一章 官人としての歌 ―人麻呂の私的感情を歌う表現

本章では、土佐日記の創作意図を探るための準備段階として、貫之が学んだであろう、柿本人麻呂の、くつろいだ宴席の場で披露されたものと見られる「石見相聞歌」や「泣血哀慟歌」に見られる特徴について指摘する。

##### 1 石見相聞歌が描いているもの

人麻呂が宫廷歌人と称されるのは、まずは、彼が天皇行幸時の賛歌や皇子・皇女たちへの挽歌など、公的な宫廷儀礼歌を多く歌っていることによる。加うるに、石見相聞歌や泣血哀慟歌等、妻との別離という私的なテーマを扱った歌々も、「その叙述ぶりからは宫廷サロン風の歌の場で公表されたものと見られ<sup>註1</sup>」ている。さて、前者の宫廷における儀礼の歌は形式・内容の両面で、人麻呂が朝廷に奉仕し、まさに古今集仮名序に言う、「君も人も身をあはせ」た状態を表したものと見えよう。そして、後者についても、人麻呂がまさに宫廷歌人としての責務を果たすために工夫し、創作した歌であると認められる。

まず、石見相聞歌の第一首目を見てみよう。

石見の海 角の浦みを 浦なしと 人こそ見らめ 鴻なしと一に云ふ、磯なしと 人こそ見らめ よしゑやし 浦はなくとも よしゑやし 鴻は一に云ふ、磯は なくとも  
いさなとり 海へをさして きたたづの 荒磯の上に か青く生ふる 玉藻沖つ藻  
朝はふる 風こそ寄せめ 夕はふる 波こそ来寄れ 波のむた か寄りかく寄る 玉藻  
藻なす 寄りねし妹を二に云ふ、はしきよし妹が手本を 露霜の 置きてし来れば この  
道 の八十隈ごとに 万たび かへりみすれど いや遠に 里は離りぬ いや高に

山も越え来ぬ 夏草の 思ひしなえて 偲ふらむ 妹が門見む なびけこの山  
(万葉集 卷二 一三一 反歌省略)

では、妻との別れという主題へ到るまでの部分が「当事者間だけのものであるなら、二十句もの句を使って、石見の角の地の様を長々と述べる必要はない。この前奏は、あきらかに石見のことを知らぬ人々の目を意識した語りである<sup>註2</sup>」と考えられ、そのことから、この歌は宮廷で披露されたものであろうと想定されている。このことに加えて今、語りの方法だけでなく、主題そのものも宮廷で披露されるにふさわしいものであることを確認しておきたい。

石見相聞歌は都へ帰る男と石見にとどまる女との別れの場面を描いたものである。このような情景、すなわち、中央の官吏が地方に赴任し、現地の女性と親しみ、そして別れることは、人麻呂の当時として特別な出来事ではなかったと推測される。時代は下るものの、天平十六年十月十四日に「比季国司多娶所部女子為妻妾。自今以後。悉皆禁断。」<sup>註3</sup>と、国司が任地の女性を娶ることが多く、これを禁ずという勅令が出されていることがなにより証左である。ならば、石見相聞歌に描かれた主題は人麻呂の個人的な体験としてだけではなく、ありうべき悲恋物語として、あるいは自己や近親の実体験と重ね合わせて、都の人士に共感され、享受されたものと見てよからう。また、人麻呂も当然それを期待して歌を披露したということになるだろう。また、このことを別の面から捉えなおすと、石見相聞歌は、単に私的な感情を描いたものではなく、宮廷によって定められた決まりと私的な感情との間で生じうる齟齬を狙って題材にしたものであったと言える。

## 2 宮廷歌人の歌としての「泣血哀慟歌」

また次にあげる、泣血哀慟歌についても同様のことが言える。

柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血哀慟作歌二首并短歌

天飛ぶや 軽の道は 我妹子が 里にしあれば ねもころに 見まく欲しけど やま  
ず行かば 人目を多み まねく行かば 人知りぬべみ さね葛 後も逢はむと 大舟  
の 思ひ頼みて 玉かぎる 磐垣淵の 隠りのみ 恋ひつつあるに 渡る日の 暮れ  
ぬるがごと 照る月の 雲隠るごと 沖つ藻の なびきし妹は 黄葉の 過ぎて去に  
きと 玉梓の 使ひの言へば 梓弓 音に聞きて一に云ふ、音のみ聞きて 言はむすべ

せむすべ知らに 音のみを 聞きてありえねば 我が恋ふる 千重の一重も 慰もる  
心もありやと 我妹子が やまず出で見し 軽の市に 我が立ち聞けば 玉たすき  
畝傍の山に 鳴く鳥の 声も聞こえず 玉鉾の 道行く人も ひとりだに 似てし  
行かねば すべをなみ 妹が名呼びて 袖ぞふりつる或る本には、名のみを 聞きてありえ  
ねば、といふ句あり

#### 短歌二首

秋山の黄葉をしげみ惑ひぬる妹を求めむ山道知らずも一に云ふ、道知らずして  
黄葉の散り行くなへに玉梓の使ひをみれば逢ひし日思ほゆ

うつせみと 思ひし時に一に云ふ、うつせみと思ひし 取り持ちて 我が二人見し 走り  
出の 堤に立てる 榎の木の こちごちの枝の 春の葉の しげきがごとく 思へり  
し 妹にはあれど 頼めりし 児らにはあれど 世の中を 背きしえねば かぎろひ  
の もゆる荒野に 白たへの 天領巾隠り 鳥じもの 朝立ちいまして 入り日なす 隠  
りにしかば 我妹子が 形見に置ける みどり子の 乞ひ泣くごとに 取り与ふる  
ものしなれば 男じもの わきばさみ持ち 我妹子と 二人我が寝し 枕づく 妻  
屋のうちに 昼はも うらさび暮らし 夜はも 息つき明かし 嘆けども せむすべ  
知らに 恋ふれども 逢ふよしをなみ 大鳥の はがひの山に 我が恋ふる 妹はい  
ますと 人の言へば 岩根さくみて なづみ来し 良けくもぞなき うつせみと 思  
ひし妹が 玉かぎる ほのかにだにも 見えなく思へば

#### 短歌二首

去年見てし秋の月夜は照らせども相見し妹はいや年離る

衾道を引手の山に妹を置きて山道を行けば生けりともなし

(万葉集 卷二 二〇七〜二一二)

右の長歌の一首目(傍線部)には、女性との仲が秘すべきものであったことが歌われて  
いる。このことから、以前は、ここに描かれている女性は妾<sup>注4</sup>であり、よって、長歌二首目  
に描かれた、子供もあり二人の「妻屋」もある定まった妻とは別人であろう、とも考<sup>注5</sup>  
れてきた。それに対して近年は二首の間に表現の関連の強いことを根拠に同一の妻のこと  
を歌った連作であるとする見解<sup>注6</sup>が定着しつつある。そして、二人の仲を秘密にしているこ  
とに関しては、「さだまれる妻なれども、まなくかよふと人のおもはん事を遠慮するなり<sup>注7</sup>」  
の如く説明する。

なるほど、

内大臣藤原卿娉鏡王女時鏡王女贈内大臣歌一首

玉くしげ覆ふをやすみ明けていなば君が名はあれど我が名し惜しも

(万葉集 卷二 九三)

のように、夜が明けるまで帰ろうとしない男に対して、二人の噂が立つことを「私の名が惜しい」となじる歌がみられたり、大伴家持が妻である坂上大嬢に、

かくばかり面影にのみ思ほえばいかにかもせむ人目繁くて(万葉集 卷四 七五二)

と、逢えぬ恋しさを人目の多さにかこつけて嘆く歌を贈っていることなどから、正式にめとつた妻との関係においても他人の目を気にすることがあったことは理解できる。しかし、それらの歌はみな当事者間のやりとりであって、他人に向けて人目をはばかることを説明するものではない。そもそも、正妻との関係であつても人目をはばかるのが通常の習慣であるならば、特別な理由もないのにそのことをくぐと述べする必要はあるまい。にもかかわらず泣血哀慟歌に十句以上もの言葉をついやしてこのことを表現している以上、ここには何らかの表現意図を読みとるべきであろう。それがどのような意図であるのか論証は難しいが、伊藤博氏の「(人目を気にしていたという表現は)支障があつて何日か通わなんでいるあいだに妻が死んでしまったことに対する自責の念を遣るための切ない気持ちから発しているものと考えられる。ならば、人麻呂はどのような支障によって何日か妻を無視したのか。妻が病床に臥していたからであろう。(中略)ぼつぼつ軽の里にと思つていた矢先、事もあろうに妻の死を玉梓の使いが持つて来た。悔恨と呵責の念が堰を切つて溢れ、愛情は倍加して泣血哀慟することになったのであろう。その裏返しに、一四句にもわたるくだくだしいほどの理由づけだったのだと思われ<sup>註8</sup>」との言が、当を得ているものと稿者も考える。そこで、氏の驥尾に付して仮説をつけ加えたいと思う。すなわち、軽の里の妻は産褥のさなかに亡くなったのではないか、という推定である。そう考える根拠は二つある。第一は、出産間近の妊婦と会うことは廷臣としては憚らねばならないものであつたらしいことである。第二には、そのように受け取ることで、長歌二首目の、妻の形見のみどり子を抱いて悲しみに暮れるという情景と整合することである。

出産が当時の律令官人たちにとってどのようなものであつたのか、時代は下るけれども、延喜式にそれが窺われる。

凡弔凡觸穢惡事忌者。人死限卅日。〔自葬日始計。産七日。〕六畜死五日。産三日。  
〔鶏非忌限。〕其喫六三日。〔此官尋常忌之。但當祭時。余司皆忌。〕

凡弔喪。問病。及到山作所。遭三七日法事者。雖身不穢。而當日不可參入内裏。  
凡改葬及四月已上傷胎。並忌卅日。其三月以下傷胎忌七日。

凡祈年。賀茂。月次。神嘗。新嘗等祭前後散齋之日。僧尼及重服奪情從公之輩。不得參入内裏。雖輕服人。致齋并散齋之日。不得參入。自余諸祭齋日。皆同此例。

凡縁無服殤請暇者。限日未滿。被召參入者。不得預祭事。

凡宮女懷妊者。散齋日之前退出。有月事者。祭日之前。退下宿廬。不得上殿。其三月。九月潔齋。預前退出宫外。

凡甲処有穢。乙入其処〔謂著座。下亦同。〕乙及同処人皆為穢。丙入乙処。只丙一身為穢。同処人不為穢。乙入丙処。人皆為穢。丁入丙処不為穢。其触死葬之人。雖非神事月。不得參著諸司并諸衛陣及侍從所等。

凡宮城内一司有穢。不可停廢祭事。

凡触失火所者。當神事時忌七日。〔延喜式 卷三 神祇三 臨時祭 〔内は割り注〕

傍線部2に、宮中で神事が行われる前に妊婦は退出すべき旨が記されている。これは、傍線部1にあるように、出産自体が「穢」とされること、あるいは、当時は一定数の女性が出産に伴って死亡したと思われるが、その死穢に触れて宮中の行事が滞ることを防ぐための措置であろう。また穢は、傍線部3、穢のあるところに着座した者もまた穢であると規定されるように、感染するとされていた。穢に触れたり感染した者は傍線部4にあるように、宮中への出仕が制限される。後の資料であるが、

去七日少将惟章令産男子、其穢引来、仍奉二全日仮文

〔小右記 天元五年正月十二日条〕

の如く、産穢に感染した官人が休暇届を出した例も見られる。ならば、勤務に忠実であるべき官人にとって、出産間際の妻と会うことは控えるべきことが、業務の遅滞を防止するために要求されるのではないか。

以上のことを前提に、泣血哀慟歌二首を、同じ人を喪った悲しみを詠んだ連作として見るならば、一首目は、何らかの事情でしばらく逢うことを避けていた妻が突然亡くなった男の茫然たる心境が描かれており、歌の享受者もいまだ事情のよくわからない困惑の中に



悲しみを共感するというものであるだろう。そして二首目の冒頭で在りし日の妻の姿と、形見の嬰児が描かれることで、享受者は悲劇の全貌——官人としての職務に忠実たらんとすることで、愛しい妻との別れの場にも立ち会えなかった男の悲しみ——を理解する。このような仕組みになっているものと解釈されるのではないか。

ここまでの推定が妥当であるならば、泣血哀慟歌の表現もまた、先に見た石見相聞歌と同じく、宮廷の定めと個人的な思いとの間に生じる齟齬を捉え、そこに起こりうる悲劇に対する哀切な感情をドラマチックに歌い上げたものであるといえよう。なお付言するならば、官人の職務は

凡在京諸司。毎六日。並給休暇一日。中務。宮内。供奉諸司。及五衛府。別給假五日。  
不依百官之例。…  
(仮寧令 第廿五)

職分によって多少の違いはあるものの、原則として六日ごとに与えられる一日の休暇以外は、職務に精励すべききまりとなっている。このことが人々の意識にあったことは、万葉集中に、

もししきの大宮人は今日もかも暇をなみと里にいでざらむ(万葉集 卷六 一〇二六)

もししきの大宮人は暇あれや梅をかざしてここにつどへる(万葉集 卷十 一八八三)

と、「大宮人」と暇の有無が問題にされる歌のあることから窺われる。したがってそもそも、頻繁に妻の里を訪れること自体、忠実な律令官人には憚られるものであったと想像される。

以上、人麻呂の歌は、私的なテーマを詠んだものであっても、実は、そのテーマは律令制度に基づいて生活する官人たちの生活に根ざした、すなわち、律令の定めを強く意識していることを前提とした表現がなされているものであったことを確認してきた。まさにこの点でも人麻呂は「宮廷歌人」と呼ばれるにふさわしい歌人だったのである。

### 3 補説 人麻呂の継承者

さて、人麻呂の歌の性格を受け継いだ人として、宮廷の公式な行事に関わる歌の面では赤人や田辺福麻呂たちの名を挙げることに異論はないであろう。一方、石見相聞歌のような、「宮廷歌人」として、私的な題材を詠む類の歌を継承した人としては、現在のところ定まった説はないようであるが、私はその一人として高橋虫麻呂を考えている。

虫麻呂の歌には、地方に伝わる伝説や珍しい習俗を素材としたものが目に立つ。そのことは、彼の歌が都の人に向けて披露されたものであることを意味しよう。経歴などから彼の活躍の場が藤原宇合のサロンであったと目される<sup>注</sup>のも領かれる所以である。それに加えておきたいのは、虫麻呂の歌に律令の定めを意識した表現が見られることである。例えば、筑波嶺のカガヒの様を描く、

登筑波嶺為耀歌会日作歌一首并短歌

驚の住む 筑波の山の 裳羽服津の その津の上に あどもひて をとめをとこの  
行き集ひ かがふかがひに 人妻に 我も交はらむ 我が妻に 人もこととへ この  
山を うしはく神の 昔より いさめぬわざぞ 今日のみは めぐしもなみそ 事も  
とがむな

反歌

男神に雲立ち上り時雨降り濡れ通るとも我帰らめや

(万葉集 卷九 一七五九〜一七六〇)

で、傍線部、人妻と交わることを繰り返し口にし、また、神の許しもあるのだから今日だけはとがめてくれるなど、くどいほどに弁解している。当時、一夫多妻的な夫婦関係を保ち、また、祭礼に於いては性的解放が行われることが希ではなかったらしいことからすると、このしつこいまでの弁解は生活上の実感からくる発想とは考えにくい。これは、

凡犯奸。(謂。奸他妻妾。及与和者。)：免官。(名例律 第一 〓内は割り注)

のような規定によって、人妻との情交を禁じられている律令官人という立場を前提とした表現なのではないだろうか。周知のように、日本律では人妻と通じたときだけを問題とするが、中国の律では婚姻外の情交を全て禁ずる。このことから、当時の日本の習俗としては婚姻外の性交渉に寛容であったことが窺われる。そのような実状を背景としながら、しかし、いざ人妻と交わろうという段になると、思わず律の規定を気にして弁解をしてみよう小心な官人の姿を描き出すことで、虫麻呂の歌は性的な興味と明るい笑いをもって律令官人・貴族たちの宴に供されたものと想像するのである。

ほかにもたとえば、「見菟原処女墓歌」

蘆屋の 菟原処女の 八歳子の 片生の時ゆ 小放りに 髪たくまでに 並びをる

家にも見えず 虚木綿の 隠りてをれば 見てしかと いぶせむ時の 垣ほなす 人  
のとふ時：以下略： (萬葉集 卷九 一八〇九)

で、処女の描写が八歳になったときからはじまるのも、

凡無服<sup>注10</sup>之殤、(生自三月至七歳) 本服三月。給假三日、一月服、二日。七日服一日。

(假寧令 ◁内は割り注)

と、七歳以下の幼児が亡くなった場合大人と同じ葬礼はしないという規定があり、律令制では七歳以前の子供を通常の人あつかいしなかつたらしいことが窺<sup>注11</sup>われる、それが虫麻呂の歌の表現に現れているものと見られる。これも律令官人としての意識に基づいた表現といえないだろうか。すなわち、虫麻呂もその活躍の場が宮廷ではないとしても、人麻呂と同様、律令の決まりを前提として、私的な感情を歌い上げる「宮廷歌人」の一人だったとの想定が可能ではないか。

#### 注

- 1 『日本古典文学大辞典』「柿本人麻呂」の項。
- 2 伊藤博氏『万葉集釋注』当該歌の注
- 3 類聚三代格 卷七
- 4 賀茂真淵『万葉考』
- 5 代表的なものとしては、澤瀉久孝『万葉集注釈』などがある。
- 6 渡辺護氏「泣血哀慟歌二首——柿本人麻呂の文芸性——」(万葉七七号 一九七一年)等
- 7 契沖『万葉代匠記』
- 8 注2に同じ。
- 9 大久保正氏「高橋虫麿」(『万葉の諸相』明治書院一九八〇年)
- 10 『儀礼』服喪に、「不滿八歳以下、為無服之殤」とある。
- 11 詳細は本論文の次章参照。

## 第二章 〈宮廷歌人〉の継承 ―土佐日記の態度と新撰和歌

本章は、まず、土佐日記に見える、亡き幼子を悼む歌が、律令制の規範からは逸脱するものであることを指摘する。そしてそのことを手がかりに、土佐日記執筆の動機について推測し、律令的規範の範疇で精緻に作り上げられた和歌集である新撰和歌と、律令の規範を外れる土佐日記の双方を、晩年の紀貫之がほぼ同時期に作り上げたことの意味を考える。

### 1 おさな子の死を悼む文芸表現

土佐日記には土佐でにわかになくなった幼子への哀惜の情を表す記述が繰り返されていく。そしてそこに記された内容をめぐって、それらが作者の実体験にもとづくものであるのか否か等、はやくよりさまざまな議論が行われてきた。それらの議論に加わるだけの用意は本稿にはないのであるが、今は、記された内容ではなく、土佐日記に亡き子への思いが記されているということ自体について考えてみたい。

土佐日記中、亡き幼子を悼む場面には多く和歌が詠まれている。それにつけて想起されるものに、土佐日記の作者である紀貫之が編纂に関わった古今和歌集がある。そして、周知のように、古今集には哀傷歌として三十首あまりの歌がまとめられているのだけれど、幼児の死に関連して詠まれた歌は一首も含まれない。それは、この程度の歌数なのだから、偶然によるものかもしれないが、しばらくこのことにこだわってみたい。というのは、古今集と同時代の歌についてみても、幼児を悼む歌は、伊勢集に

…このみかどにつかうまつりてうみたりしみこは五註といひし年うせたまひにければ、  
かなしみいみじとはよのつねなり、なげく物からかみなければ、よにあらじとおもふ  
も心にかなはず、夜ひるこふるほどに、このみつとついたりし人のもとより

おもふよりいふはおろかになりぬればたとへていはむことのはぞなき

さらに物もおぼえねばかへりごともせず、又のとしの五月五日郭公のなくをきゝて

しでのやまこえてきつらんほととぎすこひしき人のうへかたらなむ

いまはみを心うがりて、たゞ宮づかへをのみなむしける…

(西本願寺本伊勢集 二六・二七)

という例が見られる程度であり、さらに、搜索の範囲を万葉集まで遡らせてみても、万葉

集には数多くの挽歌が残る中で、幼児を悼んだ歌は、山上憶良の作に擬せられる「恋男子名古日歌」(巻五・九〇四)が確認できるところとどまるからである。

一方、上代以来、和歌に新しい表現や発想を提供してきた漢詩においては、幼子を悼む作品を比較的容易に見つけることができる。その一例を示す。

思子詩 晋潘岳

造化甄<sub>二</sub>品物<sub>一</sub> 天命代<sub>二</sub>虚盈<sub>一</sub>  
奈何念<sub>二</sub>稚子<sub>一</sub> 懷<sub>レ</sub>奇隕<sub>二</sub>幼齡<sub>一</sub>  
追想存<sub>二</sub>髣髴<sub>一</sub> 感道傷<sub>二</sub>中情<sub>一</sub>  
一往何時還 千載不<sub>二</sub>復生<sub>一</sub> (芸文類聚 卷三十四)

悼孤子 中唐于鵠

年長始一男 心亦頗自娛  
生来歳末周 奄然却<sub>二</sub>歸無<sub>一</sub>  
裸送不以衣 瘞<sub>二</sub>埋於中衢<sub>一</sub>  
乳母抱出門 所生亦随呼  
嬰孩無<sub>二</sub>啼儀<sub>一</sub> 禮經不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>踰  
親戚相問時 抑悲空歎吁  
襁褓在<sub>二</sub>舊牀<sub>一</sub> 每<sub>レ</sub>見立<sub>二</sub>踟躕<sub>一</sub>  
静思益傷惜 畏老為<sub>二</sub>獨夫<sub>一</sub> (文苑英華 卷三〇三)

ここに挙げた、たとえば潘岳の詩は芸文類聚に見えるものであり、当時の教養ある人たちにとって親しいものであつたらうし、日本人の手になる詩としても菅原道真の

夢阿滿

阿滿亡来夜不<sub>レ</sub>眠 偶眠夢遇涕漣々  
身長去夏余<sub>二</sub>三尺<sub>一</sub> 齒立今春可<sub>二</sub>七年<sub>一</sub>  
従<sub>レ</sub>事請<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>人子道<sub>一</sub> 読<sub>レ</sub>書諳<sub>二</sub>誦帝京篇<sub>一</sub>  
初読<sub>二</sub>賓王古意篇<sub>一</sub>

藥治<sub>二</sub>沈痛<sub>一</sub>纔旬日 風引<sub>二</sub>遊魂<sub>一</sub>是九泉  
爾後怨<sub>レ</sub>神兼怨<sub>レ</sub>仏 当初無<sub>レ</sub>地又無<sub>レ</sub>天  
看<sub>二</sub>吾両膝<sub>一</sub>多<sub>二</sub>嘲弄<sub>一</sub> 悼汝同胞共<sub>レ</sub>葬<sub>レ</sub>鮮

…以下略…

(菅家文章 第二)

が挙げられる。であるから、幼児の死を悲しむ気持ちをうたいあげることが、古今集の時代以前の人たちにとって、なかなか思いもつかないというようなものではなかったはずである。

また、当時の食糧事情や医療水準などを思うならば、乳幼児の死亡率がきわめて高かったであろうことは容易に想像される。このように、幼児の死に遭遇する機会が多く、その悲しみをうたいあげるすべのあることを知っていながら、また現に幼児の死を悲しんだ歌も皆無ではないのに、なおも、先に述べたようにこの種の歌がごく少ないことは、貫之の時代以前、幼児を悼む歌を詠むこと、もしくは残すことは、あまりなされるべきことではないという認識があつたことを推測させる。

## 2 貫之の時代におけるおさな子の死

ではいったい、土佐日記の書かれた当時において幼児の死はどのように扱われていたのであろうか。

これに関する公的な見解を記したものととして假寧令の次の記事が挙げられる。

凡職事官、遭<sub>二</sub>父母喪<sub>一</sub>、並解官。…自余(謂、非<sub>二</sub>重喪<sub>一</sub>者、)皆給<sub>レ</sub>假。夫及祖父母、義父母、外祖父母、卅日。三月服<sub>二</sub>二十日<sub>一</sub>。一月服、十日、七日服、三日。

凡無服之殤、(謂、未成人死曰<sub>レ</sub>殤也、)生三月至<sub>二</sub>七歲<sub>一</sub>、本服<sub>二</sub>三月<sub>一</sub>(謂、其於<sub>二</sub>五月以上服親<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>無服之殤<sub>一</sub>、故唯云<sub>二</sub>本服三月<sub>一</sub>、若不<sub>レ</sub>帶<sub>レ</sub>官人遭<sub>二</sub>此喪<sub>一</sub>者、准<sub>二</sub>假日數<sub>一</sub>、心喪居<sub>レ</sub>憂、但文云<sub>二</sub>無服<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>著<sub>レ</sub>服、)給<sub>二</sub>假三日<sub>一</sub>、一月服、二日。七日期、一日。

(令義解 九 假寧 へ)内は割り注 以下同じ)

まず注目したいのは傍線を付した部分で、生後三ヶ月から七歳までの者が死んだときには「無服」であること、すなわち、喪服を着用しないということである。つまり、七歳以下の幼児が死んだ場合、公式には、その哀しみを表立たせないことになっていたわけである。同時に、成人の死であれば、たとえば波線部1に見えるように、三ヶ月の喪に服すべき場合は二十日の給假があるものが、「無服之殤」の場合、波線部2のとおり、三日というように、假の期間も短く限定されており、令の規定において幼児の死は成人の死と区別して

軽く扱われていたことがわかる。

また、延喜式神祇三臨時祭には、各種の穢に触れた場合、神事に参加するのをどれだけの間忌まねばならないかという規定の記された箇所がある。その中に、「凡縁無服殤請暇者。限日未滿。被召參入者。不得預祭事。」という記述がある。無服の殤のために假を申請した者が假の期間中に召し出された場合は祭事に関わることができないというのだが、このことから逆に、假の期間以外、無服の殤は神事に関わることが妨げないとも理解されていたようである。次に挙げる小野宮年中行事（雑穢事）の記事もその一例。

勘申、七歳以下遭<sub>レ</sub>服<sub>レ</sub>親喪<sub>一</sub>。并件親遭<sub>二</sub>七歳以下人喪<sub>一</sub>之間、各行<sub>二</sub>神事<sub>一</sub>哉否事。右檢<sub>二</sub>假寧令<sub>一</sub>云、無服之殤、本服三月假三日、一月服二日、七日服一日。注云生三月至<sub>二</sub>七歳<sub>一</sub>、式云、縁<sub>二</sub>無服之殤<sub>一</sub>謂<sub>レ</sub>假者、限日未<sub>レ</sub>滿被<sub>レ</sub>召參入、不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>預<sub>レ</sub>祭者、據<sub>二</sub>此等文<sub>一</sub>、除<sub>レ</sub>假之外、無<sub>レ</sub>礙<sub>二</sub>神事<sub>一</sub>、又七歳以下之人、無<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>着服<sub>レ</sub>之由、然則於<sub>二</sub>神事<sub>一</sub>有<sub>二</sub>何妨<sub>一</sub>哉。仍勘申。

延長四年十一月廿五日 明法博士兼左衛門大志惟宗公方

七歳以下の子供が親の喪中であるときと親が七歳以下の子供の喪中であるときに神事を行って良いかどうかという疑問に対する、明法博士兼左衛門大志惟宗公方の勘申である。公方は先ほど引用した假寧令と延喜式の記述を根拠に、七歳以下の子供の喪中の場合、假の期間以外、神事にあずかることに差し支えはないと判断している。つまり、幼児の死は神事を妨げる穢にはならぬというわけである。続く記述に、七歳以下の人は着服することがない、とあることも併せると、当時、七歳以下の幼児は、生死に関して人並みの規定には当てはまらぬ存在として扱われていたらしいことが見て取れよう。

また、延長三年三月、藤原時平の孫である慶頼王が五歳で亡くなり、神樂岡のふもとに葬られた。その時の事情を西宮記の引用する吏部王記は次のように記している。

延長三、六、一八、太子薨、<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>職御曹子<sub>一</sub>、時年五歳云々<sub>レ</sub>廿二日、未、葬<sub>二</sub>神樂岡下<sub>一</sub>、未發、常陸太守代明親王誦<sub>二</sub>哀冊宣命<sub>一</sub>、太子幼少、人疑<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>服、伝聞、右中辨淳茂、以為君父無殤、彼官司及祇候人皆可<sub>レ</sub>服、唯兼<sub>二</sub>公官<sub>一</sub>者、公事即吉、<sub>レ</sub>依<sub>二</sub>江都集礼文<sub>一</sub>也、<sub>レ</sub>大学助教秦惟興、以為服<sub>二</sub>公事<sub>一</sub>者無服、兼<sub>二</sub>公官<sub>一</sub>者不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>服云々、後有<sub>レ</sub>勅、服法一如<sub>二</sub>文献太子例<sub>一</sub>、<sub>レ</sub>其例坊司及殿上并陣頭諸祇候者皆服、又公卿服事者、同服期<sub>レ</sub>年也

（西宮記 卷十二 太子薨事条裏書）

太子の亡くなったのが五歳という幼齡であつたために、人々は喪服を着すことに疑念を感じた。それに関して、右中弁淳茂は江都集礼の記載によつて、君主や父は哀しむこと<sup>注4</sup>はないが、東宮にお仕えした人々はみな喪服を着けるべきである。ただ、そのうち公に仕える者は公の仕事に従事してかまわない、とし、大学助教秦惟興は公の仕事に従事する者は喪服を着ない。また、東宮だけでなく公にも仕える者は喪服を着てはいけない、とした。結局この問題については、東宮の亡父である文献彦太子（保明親王）の例の如くにせよとの勅令が出されるのであるが、五歳で亡くなった皇子の為に着服すべきかどうか、かくも大仰に取りざたされるということは、先に見た令の規定——七歳以下は無服——が通常には守られていたことを意味するだろう。

同じ西宮記卷十二凶事薨奏の条に、「寛平三年十月廿五日、依<sup>ニ</sup>七歳親王喪<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>奏事」という記事が見える。通常、親王が亡くなったときには行われる薨奏が七歳の親王であつたために行われなかつたという<sup>注5</sup>ことで、これも、この時代、七歳以下の死を表だつて悼むことは通常ではなかつたことを示している。

さらに時代は下るが、永祚二年七月十一日、藤原実資は幼い娘を亡くしている。翌十二日の出来事を実資は次のように記している。

：召<sup>ニ</sup>陳泰朝臣<sup>一</sup>問<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>兒之事<sup>一</sup>、七歳以下更不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>嚴重<sup>一</sup>、今日欠日、重所忌、明日戊日、指無<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>忌、如<sup>レ</sup>此之兒、惣不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>経<sup>レ</sup>日、須明日寅時可<sup>レ</sup>出送<sup>一</sup>者、以<sup>レ</sup>穀<sup>一</sup>（随<sup>レ</sup>有<sup>一</sup>）為<sup>レ</sup>衣、又納<sup>ニ</sup>手作褌<sup>一</sup>、又納<sup>レ</sup>桶云々、（小右記 永祚二年七月十一日条）

娘のなきがらを家から送り出す方法を陳泰朝臣に尋ねたところ、七歳以下の場合<sup>注6</sup>は嚴重にしてはいけない、日にちを過ごすことは許されないから早く家より送り出すべきである、との返答であつた。実資は泣く泣くその言に従い、翌十三日には娘の亡骸を袋に入れて「八坂東方平山」に捨て置かせたとある。ここに至つても令の規定を遵守する人がいたわけである。

ここまで、土佐日記の書かれた当時、七歳以下の幼児の死は律令制度の下、表だつて<sup>注6</sup>悼むものではないとされていたことを見てきた。

既に言われるように古今和歌集は勅撰集として、律令制の理念に基づいて編纂された歌集である。今述べたように、律令で深く悼まぬ事を規定された幼児の死を主題とした歌が古今集に収められていないのも、同集が律令的規範の範囲内で作り上げられたものであることを示す一左証として捉えられるだろう。また、一旦古今集が完成した後は、周知のよ



うに、古今集が和歌集の規範となり、古今集的な歌以外は残されにくい状況があった。加うるに、この時代は延喜式の制定に象徴されるように、醍醐天皇の意向により、貴族社会全体に律令制の浸透拡充が図られた時代であった。そのために、幼児の死を悼む歌は、古今集に収められないだけでなく、一般的にもあまり残されるものではなかったのだと考えられよう。

### 3 土佐日記中に亡児哀悼の歌を記すことと、土佐日記執筆の意図について

ここまでのことを踏まえて、次に、土佐日記中に亡き女子を悼む和歌が繰り返し見えることの意味について考えてみたい。

まず、土佐日記の亡き子が何歳として描かれているのかということから確認しておこう。作者は亡児の年齢を記すことはないのであるが、作中には、亡児の年齢好を読者に想像させる描写がいくつも見られる。たとえば承平四年十二月二十七日条に「京にて生まれたりし女子、国にてはかに亡せにしかば…」とある。この書きようからは、萩谷朴氏が「赴任前の在京中に生まれていたと、特にことわるほどであるから、生まれて間もなく同伴下向したことが想像される」(『土佐日記全注釈』)と言われる通りの印象を受ける。つまり、問題の女子は土佐守としての四年間の任期を終える前に亡くなったのであるから、数え年で五歳を大きくは越えない程度の年齢だったのではないかと感じさせられるのである。

またたとえば翌年二月九日条

かく上る人々の中に、京より下りし時に、みな人、子どもなかりき、いたれりし国にてぞ子生める者ども、ありあへる。人みな、船のとまるところに、子を抱きつつおり乗りす。これを見て、昔の子の母、悲しきに堪へずして、

なかりしもありつつ帰る人の子をありしもなくて来るが悲しき

といひてぞ泣きける。

この場面では、土佐で生まれた、つまり、五歳以下の子供たちを見て、あのような子供が私にもいたのという悲しみの心のあまりに歌をうたっている。そうすると、この条を読んだ者にイメージされる亡き子は、やはり、眼前の子供と似通う範囲の年齢好であるのが自然であろう。以下、一々の検討は省くが、全編を通じて、土佐日記の表現は亡児の年齢を七歳以下と想定して反するものではないと思われる。<sup>注8</sup>

ところで、先程述べたように、七歳以下の子供を悼む歌は、この時代の律令的な規範の下では、公には出しにくいものであったらしい。それゆえに、紀貫之は古今集にも、幼児を悼む歌を収めなかった可能性が高い。しかし、そのような亡児哀悼の歌が、土佐日記には繰り返し見られるのである。そこにはやはり、作者貫之の相応の意図を読み取るべきであろう。つまり、土佐日記において幼児の死を悼む文芸を記すことは、彼が自覚的な意図の元に敢えてしたものであったということである。

さて、このように想定したところで、右のことを土佐日記の大きな特徴である女性仮託の問題と併せて考えてみたい。貫之が女性仮託という方法を取った理由については、「公的身分から解放されて私的感情を開陳するため」(『日本古典文学大辞典』「土佐日記」の項)という方向で考えるのが通説であると思われる。この、女性仮託という方法を取ることによって、土佐日記が自由に「私的」な、つまり、律令の定めを守ろうとする官人であれば表に出すことが憚られる類の感情を記しえたのだということに、本稿でも異論は無い。ただ、今少し踏み込んでおきたいことがある。それは、貫之が土佐日記に「私的」感情を描いたのは、彼の本心を誰かに伝えることを目的としたこととは考えにくいということである。もしも作者の本心を記して近親の者に伝え、その感情を共有したいというのが土佐日記の目的なのであれば、女性仮託というような回りくどい方法を取る必要はないだろう。そもそも、そうした目的のために、大きな労力を費やしてまで自らの感情を一つの文芸作品に仕立てることは考えにくいのではないか。また、土佐日記が、その享受者として作者と親しいとは限らぬ人を想定し、そうした人たちに本心を伝えるためのものだったと想定してみても、貫之が何のためにそのようなことをしたのか、説明に苦しむ。ならば、やはり土佐日記執筆の目的は、自らの本心・感情を述べるところにあったと考えない方がよいだろう。

繰り返しになるが、土佐日記は女性仮託という方法を取ることで、「私的」感情を自由に開陳することが可能となっている。そうして、実際、土佐日記には亡児哀悼という「私的」感情が描かれている。そのため、土佐日記の享受者は、ここには貫之が土佐からの旅の道中で感じた「私的」感情、すなわち、官人には表に出しにくいはずの亡児哀悼の念、が述べられているのだ、と理解することになるだろう。

そのような、亡児哀悼という「私的」で哀切・悲痛な感情が描かれている一方で、多くの論者が指摘するように、土佐日記中には諧謔を主とした、つまり、享受者の笑いを目的としたと思われる表現も多い。これは、娯楽、あるいはエンターテイメント的ものとして

享受者に届けようとする性格がこの作品に強くみられることを意味する。

ここで右の二つのことを併せるならば、土佐日記に描かれている亡児哀悼の念も、享受者にとって、一種の娯楽となるものだったと考えることができるのではないか。言い換えると、貫之はエンターテイメントとして、亡児を哀悼する「私的」感情を描き出した可能性（註）があるのではないか、ということである。

さて、ここまで考えると、前章で述べた、柿本人麻呂の石見相聞歌や泣血哀慟歌と土佐日記との間に次のような共通性が浮かび上がってくる。人麻呂歌は、赴任先で作った妻との別れや、出産に際しての妻の死といった、男性官人たちが身近に経験する可能性が高いことでありながら、それに対する「私的」感情を表向きにはしにくいことがらを、感動的なドラマのように仕立ててうたいあげ、宮廷の官人たちに披露したものであった。土佐日記もそれと同じく、幼子の死を悼むという「私的」感情を、まさにドラマのようなエンターテイメントに仕立てて、官人たちに供しようとしたものと考えることができるのである。

#### 4 人麻呂を継承しようとする意識 ― 第三部のまとめとして

古今集の仮名序に、人麻呂への高い評価が記される。

いにしへよりかく伝はるうちにもならの御時よりぞ広まりにける。かの御世や歌の心をしろしめしたりけむ。かの御時に正三位柿本人麿なむ歌のひじりなりける。これは君も人も身をあはせたりといふなるべし。秋の夕、竜田河に流るる紅葉をば帝の御目に錦と見たまひ、春の朝、吉野の山の桜は人麿が心には雲かとのみなむ覚えける。又山辺赤人といふ人ありけり。歌にあやしくたへなりけり。人麿は赤人がかみに立たむことかたく赤人は人まるがしもに立たむことかたくなむありける。この人々をおきて又すぐれたる人もくれ竹の世々に聞こえ、かたいとのよりよりに絶えずぞありける。これよりさきの歌を集めてなむ万葉集となづけられたりける。

ここには、万葉集の時代にすぐれた歌人として、柿本人麻呂と山部赤人の二人の名があげられている。以後の記述に、この人たちを否定、あるいは革新するという類の発言は見られないので、古今集は人麻呂・赤人の歌を肯定し、受け継ぐと態度表明しているものと考えられる。では、二人はどのような点で評価されるのか。これについては「人麿は赤人がかみに立たむことかたく赤人は人まるがしもに立たむことかたくなむありける」という

記述が手がかりになる。ここにはあきらかに赤人が人麻呂以上だと記されている<sup>註10</sup>。しかし同時に、一番に人麻呂の名を挙げ、「また山辺赤人といふ人ありけり」と、追加する形で赤人の名が示されていることや、壬生忠岑の長歌（一〇〇三）に、古き世の代表として人麻呂だけを取り上げることからすると、古今集は人麻呂の方がすぐれていると判断していた面があるとも思われる。

ここで、古今集仮名序の人麻呂に関する記述には、歌そのものへの評価よりも、人麻呂とならぬ帝が「君も人も身をあはせ」た状態であったことを言うのに多くの言葉がついやされていることに注意したい。一方、赤人は「歌にあやしくたへなりけり」と、歌の技量のみ言及される。この点を重視するならば、「人麿は赤人がかみに立たむこと」が難しいとあるのは、歌の技量の面に限つての言辭であり、また、人麻呂が、表現のうまさでは赤人を越えることは難しいと言われながらも第一等の歌人とされるのは、君臣合体の境地を具現した点に於いてであると考えられないだろうか。つまり、古今集は歌の技量に加えて、天皇の意図をまさしく酌み取つているという点を重視して人麻呂を高く評価しているのである。

このような人麻呂の、天皇の命を受けて公的な場で披露する歌の伝統を継承しようと宣言するのが、仮名序の記述であり、古今集の姿勢なのである。さて、土佐日記は、先に述べたように、人麻呂の、くつろいだ宴席の場で披露される歌と共通する性格を強くもつものであった。右のことを考え合わせると、貫之は、土佐日記によつて、宮廷歌人、人麻呂の宴席での歌を継承しようとしていた<sup>註11</sup>のではないかと想像される。

土佐赴任以降の貫之は、奏上するあても明確ではないままに新撰和歌の編纂を進め、完成させたらしい（同書の序文による）。そのような行為を最後まで成し遂げさせた原動力の一つには、初の勅撰和歌集である古今集の撰者としての矜持、もしくは、和歌への愛着があるだろう。そして、彼が古今集の序文で称揚した〈宮廷歌人〉柿本人麻呂の事跡を意識し、そこに連なろうとした結果のものとして、新撰和歌ならびに土佐日記の二つの創作活動は位置づけられるのではないか。むろん、彼が新撰和歌や土佐日記を作つた直接の動機は、ある貴紳の求めに応ずるためか、あるいは、何らかの目的のために自ら進んで献呈するということにあつたと考えるべきではあろう。ただ、そのような、実利的な目的のために貫之が文芸作品を作ろうとした時、古今集のもつ律令的性格をさらに推し進めた新撰和歌と、それまでの文学史上に存在しなかつた日記文学である土佐日記との二つを創出

しえた抛り所の一つに、人麻呂の文芸を学び、継承しようという意思があったのではないかと思う。

注

- 1 島田本・正保本は御子の年齢を「八つ」とする。後で述べるように、子供は八歳以上から大人なみの扱いをされるようになる。そうすると、あるいはこの部分、本来は「八つ」とあったものが「いっ」と見誤られ、「五」と誤写されたのかもしれない。つまり、大切な御子が八歳になり、ようやく人として生い立とうとした矢先に亡くなってしまったことのつらさを「八つといひし年」とわざわざ年齢を取り立てる表現で強調したものが本来の形だったのでなからうかと想像するのである。
- 2 三ヶ月に満たぬ場合は、給假がないため、假の規定の条であるここには記載がない。
- 3 名例律によれば、七歳以下の者はたとえ死罪にあたる罪を犯しても、罰せられることがない。これも七歳以下のものは法律上通常の人間とは異なる存在として考えられていたためではなからうか。
- 4 「君父無殤」という部分に関して、「殤」の字は通常、若死の意を表すようであるが、ここでは積名（積喪制第二十七）に「未<sub>二</sub>二十<sub>一</sub>而死曰殤、傷也、可<sub>二</sub>哀傷<sub>一</sub>也」とあるのに依って故人をかなしむ、の意に解釈した。あるいは、西宮記の本文は本来「君父無服殤」とあったのかもしれない。
- 5 続日本紀聖武天皇神龜五年九月条にも「九月丙午、皇太子薨。壬子、葬<sub>二</sub>於那富山<sub>一</sub>。時年二。∴為<sub>二</sub>太子幼弱<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>具<sub>二</sub>喪礼<sub>一</sub>。」と、年若いために葬送の儀礼が簡略にされた例が見える。これらのことから奈良時代も状況はあまり変わらず、従って万葉集にも幼児の死を悼んだ歌が少ないものと思われる。
- 6 律令制の埒外では、七歳以下の幼児の死も一人前に扱われていたようである。たとえば、日本霊異記上巻「嬰兒、鷲に擒られ、他国に父に逢ふことを得る縁第九」には、「癸卯の年の春三月の頃、但馬の国七美の郡の山里の人の家に、嬰兒の女あり。中庭に匍匐ふを、鷲擒りて空に騰りて東を指して翥りぬ。父母懇ひて、惻み哭き悲しみ、追ひ求むれども、到る所を知らざるが故に、為に福を修す。」とあり、鷲に捉えられるほどの「嬰兒」であっても、そのために「福を修」している。

7 増田繁夫氏「古今集の勅撰性―和歌と政治・社会・倫理―」（梅花女子大学文学部紀要第四号一九六七年）他

8 今昔物語・古本説話集に、貫之が土佐で子供を亡くした話を載せ、その年齢を七、八歳とする。これらの作品の成立した平安後期には律令制が次第に形骸化し衰退していくこと、周知の如くである。また、実際、幼児を葬る際に年齢が問題にされることも記録に見えなくなっていくようである。律令制では大きく扱いの異なる七歳と八歳をひとまとめにして記載しているのもそのことと一連の変化として考えられよう。

9 土佐日記に描かれた子供の死は事実ではなく創作であるという説（長谷川政春氏『紀貫之論』（一九八四年有精堂）等）もあるが、本稿は、それが事実か事実でないかは問題にしない。どちらであったとしても、子供の死に対する「私的」感情をエンターテイメントに仕立てたのが土佐日記ではないかと考えるのである。

10 仮名序のこの部分に関して、諸説の多くは、人麻呂と赤人は甲乙付けがたいことを述べている、と説明する。しかし、表現自体は、明らかに赤人が人麻呂と同等以上であるというものである。この記述をそう受け取った上で、仮名序全体の意図を讀みとらなければならないだろう。

11 土佐日記の本義を「旅」と見て、同書を「旅空間の文学」とする説がある（木村正中氏 日本古典集成『土佐日記 貫之集』解説 一九八八年）。これは土佐日記の本質の一つを言い当てた卓見と思われるが、そもそもなぜ彼が旅を描こうとしたのか、と問うた時、石見相聞歌の情景、あるいは前章で述べた虫麻呂の歌々をその契機の一つとして指摘することができだろうし、また、旅の途上で人の死を悼む、という趣向を考える上で、大伴旅人の亡妻挽歌の影響についても検討が必要だろう。さらに、幼児の死を悼む和歌の先例は、山上憶良の「恋男子名古日歌」に見られた。これら万葉歌の表現と発想を取り入れながら、土佐日記は創り上げられたのだと考える。

#### 第四部 新撰和歌注釈稿

##### 凡例

- 新撰和歌の底本には架蔵の、山岸徳平氏旧蔵本を書写したものを用いた。およそ元禄版本と近いが、一部に語句の違いも見られる。
- 翻刻に際しては、文字を現行の字体に統一し、私に濁点を付した。また、序については、私に句読点を付した。
- 底本に記された作者名は、通説の通り、新撰和歌本来のものとは考えない。本稿は新撰和歌本来の意図を探ることを目的とするので、これを削除する。なお、底本に記された作者名はすべて元禄版本のものと同一である。また、底本には朱書による出典等の注記が各所に存するが、これも翻刻はしない。
- それぞれの歌には新編国歌大観の歌番号を付す。
- 和歌の引用は原則として国歌大観によるが漢字仮名の表記は適宜改めた。なお、万葉集は日本古典文学全集本の訓読により、必要に応じて原文を示す。
- 現行の古今集諸注でほぼ異論がなく、本稿でもそれに従うべきと考える場合は、原則として注釈を施さない。
- 新撰和歌諸伝本間で異文があるとき、原則として、古今集とは異なる方の本文を採用する。古今集と同じ形であったものが他の形に誤写、改変される可能性よりも、古今集の本文に惹かれて誤写、改変された可能性の方が、一般的に高いと思われるからである。
- 【他出文献】の項には、古今集と重複しない歌に関しては、重出する他文献を示すが、古今集との重出歌については、古今集の歌番号のみを記す。
- 序は、内容により適宜区切り、表題を私に付した。なお、勘物は訓読を示すにとどめ、注釈はしない。
- 二首ずつ対にされた歌に、それぞれの対になっている、あるいは対として理解できる要素を「」番との対応関係について」として注記した。

編集の由来

【本文】

昔延喜之御宇、属世之無為、因人之有慶、令撰進<sup>1</sup>万葉集外、古今和歌一千篇。更降勅命、抽其勝矣。伝勅者執金吾藤納言、奉詔者草莽臣紀貫之。々々<sup>2</sup>未及抽撰、分憂赴任。政務之餘景、漸以撰定。

【校訂】

- 1 底本「集」。新撰和歌諸本により改める。
- 2 底本「云云」。新撰和歌諸本により改める。

【訓読】

昔延喜の御宇、世の無為に属き、人の慶有るに因り、万葉集の外、古今の和歌一千篇を撰進せしむ。更に勅命を降し、其の勝れたるを抽かしむ。勅を伝ふるは執金吾藤納言、詔を奉ずるは草莽の臣紀貫之。貫之未だ抽き撰ぶに及ばざるに、分憂して赴任し、政務の餘景に、漸く以て撰定す。

【訳文】

昔、醍醐天皇の御代に、世の中がよく治まっていることにつけ、人々が天皇のお慶びにお仕えする気持ちにちなんで、万葉集の他の古今の和歌千首を選び集めさせなされた。更に勅命を下して、さらに優れた歌を選ばせなされた。勅命を伝えたのは執金吾藤原兼輔、詔を承ったのはわたくしめ紀貫之である。わたくし貫之は、まだ秀歌を選ばないうちに、国司として土佐に赴任して、日々の政務を終えた後、少しずつ選定した。

【注】

〔世之無為、人之有慶〕

天子（天皇）が何もしないでもよく世の中が治まっている好ましい状態であり、人々が天子（天皇）によきことあるを願うこと。「無為」は、論語（衛霊公第十五）に「子曰ク、無為<sup>ニシテ</sup>而治<sup>マレル</sup>者ハ、其<sup>レ</sup>舜<sup>ノ</sup>與<sup>カ</sup>。夫<sup>レ</sup>何<sup>ヲ</sup>カ<sup>ク</sup>為<sup>ス</sup>哉<sup>ヤ</sup>。恭<sup>シクシ</sup>己<sup>ヲ</sup>、正<sup>シク</sup>南<sup>面</sup>而<sup>レ</sup>已<sup>ミ</sup>矣<sup>ノ</sup>」とあるのによれば、醍醐天皇の治世を舜のそれになぞらえて賞賛した語である。また、この語は和漢朗詠集・千載佳句所引の白楽天の詩句「幸<sup>ヒニ</sup>逢<sup>ヒテ</sup>堯<sup>舜</sup>無<sup>為</sup>ノ化<sup>ニ</sup>、得<sup>タリ</sup>作<sup>ル</sup>コトヲ<sup>ニ</sup>義皇向上<sup>ノ</sup>人<sup>ニ</sup>」（池上閑吟）等にも見られ、平安朝の人々に親しいものであったと考えら



れる。「有慶」は、書経(呂刑)に「王曰ク、…爾尚クハ敬ニ逆シテ天命ヲ、以テ奉ケヨニ我一  
人ヲ。雖ドモ畏ト勿ク、レ畏ルル、雖ドモ休ト勿ク、レ休フ、惟レ敬シニ五刑ヲ、以テ成セニ三徳ヲ。」  
人有レバ慶、兆民頼リ之、其レ寧キコト惟レ永カラシ。』と見え、君主に幸いあることで、万民  
の頼みとなるのだから、民は君主の幸いを願わねばならないという意であることが知ら  
れる。菅家文章(卷一、九日侍宴、同賦喜晴、応製)には「重陽資ヘタマフニ飲宴ヲ、四望  
喜ビタリニ秋晴ヲ、不ニ是レ金飈ノ払フニテラ、レ応シレ縁ルニ玉燭ノ明ナルニ、無為ナリナリ玄聖ノ化、有慶兆  
民ノ情、猷ルニ寿ヲ黄華ノ酒、争ヒ呼フ万歳ノ声」と、無為の治世を讃え、帝によきことあるを  
願う万民の情が謳われる。

〔令撰集万葉集外、古今和歌一千篇〕

「万葉集にいらぬ古き歌みづからのをも奉らしめたまひて…すべて千うたはたまき、名  
づけて古今和歌集といふ」(古今集仮名序)

〔更降勅命、抽其勝矣〕

この記載は、古今和歌集から優れた歌を抽出せよ、との意である。しかし、新撰和歌に  
は古今集に見えない歌も少なからず見られる。つまり醍醐天皇からの命は古今集の精選で  
あったが、天皇亡き後、貫之が方針を変更した、としか考えられない。

〔執金吾藤納言〕

執金吾は衛門府の唐名。中納言兼右衛門督藤原兼輔のこと。

〔草莽臣〕

在野の臣下。官職に就いていないのを卑下している。ここでは、貞節な志を保持してい  
ることを暗に含めるか。孟子(萬章下)「在ルハ國ニヒニ市政之臣ト、在ルハ野ニヒニ草莽之  
臣ト、皆謂フナリニ庶人ヲ。」。儀礼(士相見礼)「在ルハ邦ニ則チ曰ヒニ市井之臣ト、在ルハ野ニ則  
チ曰フニ草茅之臣ト」。菅家文章(卷二、小松)「小松経タルニ幾日ヲカ、不レ変ヘニ旧ノ青々タルヲ、  
本是レ山中ノ種、移シ来タル水上ノ庭、同シウスレ声ヲ沙石ノ浪、假レ蔭ヲ草茅ノ亭、将デレ  
効サムトニ貞心ヲ遠キニ、大夫此ノ地ニ停マレリ」は、自邸の松をその異名たる「大夫」になぞらえ、  
現在は仮に草茅(莽)の亭(＝野)にとどまっているが、いずれ貞心をあきらかにし、おおよ  
けに仕えんと欲していると述べている。

〔分憂〕

国司の任に当たること。貫之延長八年土佐守。職源抄(下、諸国)「凡ソ国司之撰、和漢  
重之、此ヲ云フニ烹鮮之職ト、又云フニ分憂之官ト」。また、菅家文章(卷三、北堂餞宴)では、  
讃岐国司として赴任するに際し、「我将ニ南海ニ飽ラムニ風煙ニ、更ニ妬ム他人ノ道ハムコトヲニ左遷ナリ

ト、情憶<sup>ツ</sup>分憂<sup>ハ</sup>非<sup>ヌ</sup>コトヲ<sup>ニ</sup>祖業<sup>ニ</sup>、徘徊<sup>ス</sup>孔聖廟門ノ前<sup>一</sup>と歎いている。

#### 〔餘景〕

残りの光・夕日。白氏文集(卷七、小池)「昼<sup>ハ</sup>倦<sup>ミ</sup>前齋ノ熱<sup>キ</sup>ニ、晩<sup>ハ</sup>愛<sup>ツ</sup>小池ノ清<sup>ヲ</sup>、映林<sup>ニ</sup>餘景<sup>没シ</sup>、近水<sup>ニ</sup>微涼生<sup>ズ</sup>、坐<sup>シテ</sup>把<sup>リ</sup>蒲葵扇<sup>ヲ</sup>、閑吟<sup>フ</sup>三兩声<sup>一</sup>」など。ここでは日々の政務を終えた後、日没までの僅かな時間をいうか。なお検討を要する。

#### 撰集の方針

#### 【本文】

抑夫上代之篇、義漸幽而文猶質、下流之作、文偏巧而義漸疎。故抽始自弘仁、至于延長、詞人之作、花実相兼而已。今之所選、玄之又玄也。非唯春霞秋月、潤艶流於言泉、華色鳥声、鮮浮藻於詞露。皆是以動天地感神祇、厚人倫成孝敬、上以風化下、下以諷刺上。雖誠仮文於綺靡之下、然後取義教誠之中者也。爰以春篇配秋篇、以夏什敵冬什、各相闡文、兩両双書焉。慶賀哀傷、離別羈旅、恋歌雜歌之流、各又對偶。惣三百六十首、分為四軸、蓋取三百六十日、關於四時耳。

#### 【訓読】

抑も夫れ上代の篇は、義漸く幽にして文猶ほ質なり、下流の作は、文偏に巧にして義漸く疎し。故に弘仁より始めて延長に至る詞人の作の、花実相兼するを抽くのみ。今の選ぶ所は、玄の又玄なり。唯だ春霞秋月、艶流を言泉に潤し、華色鳥声、浮藻を詞露に鮮にせるのみにあらず。皆是れ以て天地を動かし、神祇を感ぜしめ、人倫を厚くし、孝敬を成し、上は以て下を風化し、下は以て上を諷刺す。誠に文を綺靡の下に仮ると雖も、然も復た義を教誠の中に取り取る者なり。爰に春篇を以て秋篇に配し、夏什を以て冬什に敵し、各文を相ひ闡はしめて、兩両双べ書す。慶賀哀傷、離別羈旅、恋歌雜歌の流は、各おの又た對偶す。惣て三百六十首、分けて四軸と為す。蓋し三百六十日、四時に関するを取るのみ。

#### 【訳文】

そもそも上代の歌は、内容は次第に奥深いものになったが、表現はなお飾り気がなかった。時代が下ってしまつてからの作は、表現ばかりが巧みであつて、内容がだんだんおろそかになっている。ゆえに、弘仁から延長までの歌人の作品で、花実をともにそなえたものだけを選んだ。今選んだものは、おくふかい上にもおくふかい歌である。単に 春の霞秋の月や花の色鳥の声を美しい言葉でえがき飾つただけではない。すべて天地を動かし、天地の神々を感動させ、人倫を厚くして孝行や礼儀をなさしめ、上の者は下を教化し、下の者

は上の者を諷刺するものである。まことに文辞を華やかにしているとはいっても、それだけではなく内容は教化をも目指したものである。そこで、春の歌を秋の歌に配し、夏の歌を冬の歌にあわせて、おのおの文辞を闘わせて並べて記した。慶賀哀傷、離別羈旅、恋歌雑歌の類の歌は、おのおのまた対にした。全部で三百六十首、それを分けて四巻とした。というのは三百六十日が四季になるのをまねたからである。

【注】

〔上代之篇、義漸幽而文猶質、下流之作、文偏巧而義漸疎〕

「上代」は、古今和歌集真名序に「至<sup>リテ</sup>如<sup>キニ</sup>難波津之什<sup>ヲ</sup>献<sup>ジ</sup>天皇<sup>ニ</sup>、富緒川之篇<sup>ヲ</sup>報<sup>ゼシガ</sup>中<sup>ニ</sup>太子<sup>ニ</sup>、或<sup>ハ</sup>事<sup>ヲ</sup>関<sup>リ</sup>神<sup>異</sup>、或<sup>興</sup>入<sup>ル</sup>幽<sup>玄</sup>、但<sup>シ</sup>見<sup>ル</sup>上古<sup>ノ</sup>歌<sup>ヲ</sup>、多<sup>ク</sup>存<sup>ス</sup>古質<sup>之</sup>語<sup>ヲ</sup>。未<sup>ダ</sup>為<sup>サ</sup>耳目<sup>之</sup>翫<sup>ト</sup>、徒<sup>ダ</sup>為<sup>セル</sup>ノミ<sup>ニ</sup>教戒<sup>之</sup>端<sup>ト</sup>」という、仁徳天皇や聖徳太子の時代を念頭に置いたものか。また「下流」は単に時代の下ったことを言うのではなく、論語（陽貨）「惡<sup>ム</sup>居<sup>テ</sup>下<sup>流</sup>而<sup>レ</sup>訕<sup>レ</sup>上<sup>者</sup>」のごとく、劣ったという意を含むのである。いにしえは人の心は素直であるが歌の表現は素朴であり、時代と共に表現ばかりが巧みになり内実が失われていくという把握は、古今集仮名序に「ちはやぶる神世にはうたの心花になりけるよりあだなるうたはかなきことのみいでくれば」というのと同種のものである。なお、これに類する見解は新撰万葉の序にも「以<sup>テ</sup>今<sup>ヲ</sup>比<sup>スル</sup>古<sup>ニ</sup>、新作<sup>ハ</sup>花也。旧製<sup>ハ</sup>実也。以<sup>テ</sup>花<sup>ヲ</sup>比<sup>スル</sup>実<sup>ニ</sup>、今<sup>ノ</sup>人<sup>ハ</sup>情彩<sup>剪</sup>錦<sup>ヲ</sup>多<sup>ク</sup>述<sup>ブ</sup>可<sup>憐</sup>之<sup>句</sup>」。古<sup>ノ</sup>人<sup>ハ</sup>心緒<sup>織</sup>素<sup>ヲ</sup>少<sup>シキ</sup>綴<sup>ル</sup>不<sup>愁</sup>之<sup>艶</sup>」と見え、貫之独自の見解というよりは、一般に古代を優れた時代とし、その美風が時と共に失われていくという尚古的な考えに基づいたものと思われる。

〔弘仁〕

嵯峨天皇の御代。万葉集の撰集を平城帝とする古今集両序の記載に随えば、新撰和歌に収める歌の範囲を、万葉集編纂より後、醍醐天皇の勅命のくだった時までとしたというのである。なお、集中には万葉集との重複歌とも考えられる歌が見られる(23 40 60 62 93 129 232 268 280 301)が、この記述に依る限り、これらは万葉集の歌としてではなく、弘仁以後の歌として認知されていたものということになる。

〔詞人〕

詩人。ここでは歌人。文選序「詞人才子、則<sup>チ</sup>名<sup>ハ</sup>溢<sup>レ</sup>於<sup>ニ</sup>縹囊<sup>ニ</sup>、飛文染翰、則<sup>チ</sup>卷<sup>ハ</sup>盈<sup>テ</sup>乎<sup>ニ</sup>細帙<sup>ニ</sup>」。古今集真名序では詩人を指して「自<sup>リ</sup>大津皇子之初<sup>メ</sup>作<sup>リテ</sup>詩賦<sup>ヲ</sup>、詞人

才子慕<sup>レ</sup>風<sup>ヲ</sup>繼<sup>グ</sup>塵<sup>ニ</sup>と用い、歌人には「和歌之人」の語を用いる。新撰和歌で歌人を指して「詞人」というのは、あるいは和歌を漢詩に比肩するものとして言う意図があるか。

〔玄之又玄〕

すべての根元。もつとも奥深いもの。老子(体道第一)に「此ノ両者(天地と万物)同<sup>ジ</sup>キヨリ出<sup>デ</sup>テ而異<sup>ニ</sup>ス名<sup>ヲ</sup>。同<sup>ジ</sup>キモ謂<sup>フ</sup>ニ之<sup>ヲ</sup>玄<sup>ト</sup>。玄之又玄、衆妙之門。」と、様々な微妙な現象を生み出す根元を「玄之又玄」と称している。

〔艶流〕

うつくしい流れ。言葉のうつくしい詩文を指す。古今集真名序「及<sup>ビ</sup>テ彼ノ時変<sup>ジ</sup>ニ澆<sup>ニ</sup>離<sup>ニ</sup>一人貴<sup>フ</sup>ニ奢<sup>ヲ</sup>淫<sup>ヲ</sup>上、浮<sup>ト</sup>詞<sup>ト</sup>雲<sup>ト</sup>興<sup>ト</sup>、艶<sup>ト</sup>流<sup>ト</sup>泉<sup>ト</sup>湧<sup>ク</sup>。其ノ実皆落<sup>チ</sup>テ、其ノ華孤<sup>リ</sup>榮<sup>ユ</sup>。」と同様、和歌の内実がないがしろにされる時代風潮を否定的に言うのにこの語を用いている。なお、文華秀麗集序が、漢詩文の盛んな様を肯定的に言うのに「或<sup>ハ</sup>氣骨弥高<sup>ク</sup>、諧<sup>ヘ</sup>ニ風騷<sup>ヲ</sup>於声律<sup>ニ</sup>、或<sup>ハ</sup>輕清漸<sup>ク</sup>ニ長<sup>ク</sup>、映<sup>ス</sup>ニ綺靡<sup>ヲ</sup>於艶流<sup>ニ</sup>。」とこの語を用いていることを意識しているかとも思われる。

〔言泉〕

ことばの泉。陸機、文賦(文選)「思風<sup>ハ</sup>発<sup>シ</sup>ニ於胸臆<sup>ニ</sup>、言泉<sup>ハ</sup>流<sup>ル</sup>ニ於唇齒<sup>ニ</sup>」に拠ったものか。

〔浮藻〕

文飾に意を凝らした結果得られるあやのある文章。陸機、文賦(文選)「(文を磨かんと沈思すれば)於<sup>テ</sup>是<sup>ニ</sup>沈辞佛悦<sup>ト</sup>シテ若<sup>ク</sup>三遊魚銜<sup>シ</sup>レ鉤<sup>ヲ</sup>而出<sup>ツ</sup>ルガニ重淵之深<sup>キ</sup>ヲ、浮藻聯翻<sup>ト</sup>シテ若<sup>シ</sup>三翰鳥<sup>ノ</sup>纓<sup>リ</sup>テ繳<sup>ニ</sup>而墜<sup>ツ</sup>ルガニ曾雲之峻<sup>キ</sup>ヨリ」。「藻」は、あやのある文章。陸機、文賦「以<sup>テ</sup>述<sup>ブ</sup>ニ先士之盛藻<sup>ヲ</sup>」李善注「藻、水草之有<sup>ル</sup>文者、故<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>喻<sup>レ</sup>文<sup>ヲ</sup>焉」

〔詞露〕

言葉の露。表現をかざる文飾の喩えとして用いている。用例未見。

〔動天地感神祇、厚人倫成孝敬、上以風化下、下以諷刺上〕

毛詩序「正<sup>シ</sup>得失<sup>ヲ</sup>、動<sup>カシ</sup>ニ天地<sup>ヲ</sup>、感<sup>セシムル</sup>ニ鬼神<sup>ヲ</sup>、莫<sup>シ</sup>レ近<sup>キ</sup>ハ於詩<sup>ヨリ</sup>。先王以<sup>テ</sup>是<sup>ヲ</sup>經<sup>シ</sup>ニ夫婦<sup>ヲ</sup>、成<sup>シ</sup>ニ孝敬<sup>ヲ</sup>、厚<sup>クシ</sup>ニ人倫<sup>ヲ</sup>、美<sup>ニシ</sup>ニ教化<sup>ヲ</sup>、移<sup>シ</sup>レ風<sup>ヲ</sup>易<sup>フ</sup>レ俗<sup>ヲ</sup>。上<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>風<sup>ニ</sup>化<sup>シ</sup>下<sup>ヲ</sup>、下<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>風<sup>ニ</sup>刺<sup>ス</sup>上<sup>ヲ</sup>」に拠るか。古今集両序にも「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の仲をもやはらげ、たけきもののふの心をもなぐさむるは歌なり」、「動<sup>カシ</sup>ニ天地<sup>ヲ</sup>、感<sup>セシメ</sup>ニ鬼神<sup>ヲ</sup>、化<sup>シ</sup>ニ人倫<sup>ヲ</sup>、和<sup>グル</sup>ハニ夫婦<sup>ヲ</sup>、莫<sup>シ</sup>レ宜<sup>シ</sup>キハニ於和歌<sup>ヨリ</sup>」と類似の言及が見える。古今集の序には見られ

なかった「風化、諷刺」云々の条は、詩を政治と結びつけて考える中国の思想を和歌に当てはめることで、和歌を漢詩と同様、士大夫のものすべきものとして位置づけようとする態度の表出と思われる。このような古今集以上に強い主張をなす点に、新撰和歌の律令的な性格の強さを見て取れるだろう。

〔綺靡〕

美しく精緻な表現。文賦に「詩<sup>ハ</sup>縁<sup>リテ</sup>情<sup>ニ</sup>而綺靡<sup>ナリ</sup>、賦<sup>ハ</sup>體<sup>シテ</sup>物<sup>ヲ</sup>而瀏亮<sup>ケリ</sup>」（李善注「綺靡、精妙之言」とあり、詩の特性とする。

〔爰〕

この「爰」は、古今集真名序に

陛下の宇御すこと今に九載なり。仁は秋津洲の外に流れ、恵は筑波山の陰よりも茂し。淵変じて瀬と為るの声寂寂として口を閉じ、砂長じて敵と為るの頌洋洋として耳に満つ。既に絶えし風を継がむと思ひ、久しく廃れにし道を興さんと欲す。爰に大内記紀友則、御書所預紀貫之、前甲斐少目凡河内躬恒、右衛門府生壬生忠峰等に詔して、各家の集並びに古来の旧歌を献ぜしめ、続万葉集と曰ふ。

と、天皇が和歌の道の衰えたことを歎き、遺風を継ごうと欲し、そこで、五人の者たちに命じて続万葉集を作らせた、と言うのと同様、事情や由来を示す前文を承け、その帰結を表す文を言い起こすための語と思われる。

〔篇・什〕

いづれも詩を数える語。古今集真名序にも「難波津之什<sup>ヲ</sup>献<sup>ジ</sup>天皇<sup>ニ</sup>、富緒川之篇<sup>ヲ</sup>報<sup>ス</sup>太子<sup>ニ</sup>」の如く用いる。「什」はもと毛詩の雅・頌各十篇をいう語。

〔文〕

ここでは「文辞・表現」の意。新撰和歌序に「下流之作、文偏巧而義漸疎」とあった。四季の歌については、それぞれが季節の推移の順に配列されるので、たとえば、立春と立秋等、類似する主題の歌が対にされることしばしばある。そうした主題の類似する歌の「文」を「相闘」させることで、この集の享受者へ、歌の表現を味わい比べるよう促す意図が込められていると考える。なお、四季以外の部に関しては、「対偶」とだけあって、「文」についての言及がない。これは、四季以外の部においては、その主題でもって歌を対にすることが難しいので、さまざまな観点から、二首を「対偶」させたので、それを読み取ってほしい、というメッセージであると考える。

〔蓋〕

ここでは、理由を示す。「というのはくだからである」。韓非子(五蠹)「非<sup>レ</sup>用<sup>ラ</sup>レ<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>秦<sup>一</sup>者<sup>ハ</sup>必<sup>ズ</sup>智、用<sup>ラ</sup>ル<sup>ル</sup>ニ<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>燕<sup>一</sup>者<sup>ハ</sup>必<sup>ズ</sup>愚也。蓋<sup>シ</sup>治<sup>ル</sup>乱<sup>ル</sup>之<sup>ノ</sup>資<sup>ハ</sup>異<sup>ル</sup>ガ<sup>ユ</sup>也」史記(外戚世家)「孔子罕<sup>ニ</sup>稱<sup>フ</sup>命<sup>ラ</sup>、蓋<sup>シ</sup>難<sup>シ</sup>キ<sup>ガ</sup>ユ<sup>エ</sup>言<sup>ニ</sup>之<sup>也</sup>」

〔開〕

ここでは「わかれる」の意。古事記序文「混元既<sup>ニ</sup>凝<sup>リ</sup>テ、氣象未<sup>ダ</sup>レ<sup>効</sup>シ。無<sup>ク</sup>レ<sup>名</sup>無<sup>シ</sup>レ<sup>為</sup>モ。誰<sup>カ</sup>知<sup>ラム</sup>ニ<sup>其</sup>ノ<sup>形</sup>ヲ。然<sup>レドモ</sup>、乾坤初<sup>メテ</sup>分<sup>レテ</sup>、參神作<sup>リ</sup>ニ造化之首<sup>ト</sup>、陰陽斯<sup>ニ</sup>開<sup>ケテ</sup>、二靈為<sup>リ</sup>ニ群品之祖<sup>ト</sup>」に「分」と対にして用いられている。

### 編纂後の事情

【本文】

貫之秩罷<sup>1</sup>帰日、将以上献之、橋山晚松、愁雲之影已結、湘浜秋竹、悲風之声忽幽、伝勅納言、亦已薨逝。空貯妙辞於箱中、独屑落涙於襟上。若貫之逝去、歌亦散逸、恨使絶艶之草、復混鄙野之篇。故聊記本源、以伝末代云爾。

【更訂】

1 底本「誥」。新撰和歌諸本により改める。

【訓読】

貫之秩罷はり帰る日、将に以て上り、之を献ぜんとするに、橋山の晚松、愁雲の影已に結び、湘浜の秋竹、悲風の声忽に幽なり、勅を伝へし納言、亦た已に薨逝す。空しく妙辞を箱中に貯へ、独り落涙を襟上に屑く。若し貫之の逝去せば、歌も亦た散逸せん、恨くは絶艶の草をして復た鄙野の篇に混ぜしめんことを。故に聊かに本源を記し、以て末代に伝ふと云ふのみ。

【訳文】

貫之の任が終わり帰京する日、上洛してこの集を献上しようとする、帝はすでにおかくれになり、后様は悲しみに暮れていらつしやつた。勅命を伝えた納言もまたすでにお亡くなりであった。むなしく妙なる言葉、すなわちこの集を箱の中に収め、独り涙を胸にそそいでいる。もし貫之が死んだなら、歌もまた散逸することだろう。悲しいのは絶美の歌々をいやしい歌の中に帰してしまうだろうこと。ゆえに、いささか由来を記して、末代に伝えるというばかりである。

【注】

〔秩〕

官職。増韻「秩、職也官也」

〔橋山〕

黄帝を葬つたところ。史記(五帝本紀)「黄帝崩<sup>ズ</sup>。葬<sup>ス</sup>橋山<sup>ニ</sup>」

〔湘浜秋竹〕

舜の後の湘夫人が夫亡き後泣いた涙のために竹が斑になったことを云う。博物志(史補)

「堯之二女、舜之二妃、曰<sup>ニ</sup>湘夫人<sup>ト</sup>。舜崩<sup>ズ</sup>。二妃以<sup>テ</sup>涕<sup>ヲ</sup>揮<sup>ヘ</sup>竹<sup>ヲ</sup>、竹尽<sup>ク</sup>斑<sup>ト</sup>ナル」。述

異記「湘水、…昔舜南巡<sup>シテ</sup>而葬<sup>ラル</sup>於蒼梧之野<sup>ニ</sup>。堯之二女娥皇女英、追<sup>ヒテ</sup>之<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>及<sup>バ</sup>、

相與<sup>ニ</sup>慟哭<sup>シ</sup>、淚下<sup>リテ</sup>沾<sup>レ</sup>竹<sup>ヲ</sup>、竹文<sup>ノ</sup>上<sup>ヲ</sup>為<sup>ス</sup>斑<sup>タリ</sup>然<sup>リ</sup>」。和漢朗詠集(下卷、雲403)

「竹斑<sup>ニ</sup>湘浦<sup>ニ</sup>、雲凝<sup>ル</sup>鼓瑟之蹤<sup>ニ</sup>、鳳去<sup>ル</sup>秦台<sup>ヲ</sup>、月老<sup>イタリ</sup>吹簫之地<sup>ニ</sup>」

〔屑〕ここでは涙を流すの意。南史(侯景伝)「軍人莫<sup>シ</sup>不<sup>レ</sup>屑<sup>カ</sup>涕<sup>ヲ</sup>」

〔絶艶〕

この上なく美しい。文心雕龍(弁騷)に楚辞を評して「能<sup>ク</sup>気往<sup>キテ</sup>轢<sup>ギ</sup>古<sup>ヲ</sup>、辞来<sup>テ</sup>切<sup>ナリ</sup>今<sup>ニ</sup>、驚采絶艶、難<sup>シ</sup>與<sup>ニ</sup>並<sup>ビ</sup>能<sup>ク</sup>矣」と言う。

勸物

【本文】

中納言兼右衛門督藤兼輔 承平三二十八薨五十七

西西帝 延長八九十九崩四十六

黄帝崩葬橋山

舜崩蒼梧之野、葬於江南九疑、是為零陵

【訓読】

中納言兼右衛門督藤兼輔 承平三年二月十八日薨ず。五十七。

醍醐帝 延長八年九月十九日崩ず。四十六。

黄帝崩ず。橋山に葬る。

舜蒼梧の野に崩ず。江南九疑に葬る。是を零陵と為す。

【訳文】

中納言兼右衛門督藤兼輔 承平三年二月十八日に亡くなった。齢五十七。

醍醐帝 延長八年九月十九日にお隠れになった。御年四十六。

黄帝がお隠れになり、橋山に葬る。

舜が蒼梧の野でお隠れになり、江南九疑に葬る。これを零陵とする。

新撰和歌集巻第一

春秋 百二十首

1 袖ひちて結ひし水のこほれるを春たつけふの風やとくらむ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春上 二

【注】

〔立春と氷〕

万葉集において、春の訪れを知らせてくれるものは、霞と鶯であった。

昨日こそ年ははてしか春霞かすがの山にはやたちにはり（万葉集 巻十 一八四三）

み雪降る古冬は今日のみ鶯の鳴かむ春へは明日にしあるらし

（万葉集 巻二十 四四八八）

など、春のはじめの日に霞が立ち、鶯の声を待ちわびる気持ちをつたいあげた歌からは、霞や鶯が真つ先に春の到来を知らせてくれるものであったことがわかる。ただし、新撰和歌巻頭の歌のように、春の歌で氷について言及したものは見いだすことができない。

一方、古今集の時代では、

谷風にとくるこほりのひまごとうちいづる浪や春のはつ花（古今集 春上 一一二）

春たてばきゆる氷ののこりなく君が心は我にとけなむ（古今集 恋一 五四二）

みづなかにありこそしけれ春立ちて氷とくればおつる白玉（貫之集 四九八）

のように、恋の心の比喩に用いられるほどに、春になって氷のとけることが歌の表現として定着していることがわかる。少し下って、和漢朗詠集には「解氷」の項もたてられており、春の解氷は、平安時代の歌人たちに広く普及した表現であったことがわかる。つまり、春の訪れを解氷でうたうことは、万葉の時代より後、古今集の時代までの間に普及し、一般化した、新しい趣向であったわけである。

さて、この表現の出所については、はやくから礼記月令の「孟春之月、東風解凍」という記載が指摘されている。けれども、礼記に直接によらずとも、たとえば、芸文類聚に引く王僧孺の「春思絶句」に「雪罷枝即青、氷開水便緑」とあり、同じく芸文類聚所引の傅玄陽の春賦に「素氷解而泰液洽」とある。また平安時代の和歌表現に大きな影響を与えたとされる白楽天の作にも「雪消氷又釋、景和風復暄」（早春）、「西澗氷已銷、春溜含新碧」（溪中早春）という表現が見える。さらに、類似の表現は漢詩の世界ではありふれた



ものと見えて、我が国の詩人、菅原道真も、立春をうたう詩に「浅深何水氷猶結、高卑無山雪不消」（菅家文章 四九二）と、氷のことをとりあげている。したがって、当該の歌を読み解く際に、礼記月令の記載を念頭に置かねばならないと断言はできないのである。つまり、一首の表現に礼記を背景にしなければ理解しづらいところがないのであるから、詠作者の意図はさておき、これを漢詩文によくある表現をふまえたもの、と理解しても差し支えはない。当該の歌を、一首だけとりだして、解釈する場合は、そのように考えられるのである。ただし、新撰和歌では、この歌が置かれた位置を踏まえて受け取ることで別の文脈が浮かび上がる。そのことは、二番の歌の【注】で述べる。

「むすびし水」

第二句の「むすぶ」は第一義としては、両手を組み合わせる水を掬うことを意味する。ただ、新撰和歌の編者である貫之に、

春くれば瀧のしら糸いかなればむすべども猶あはにとくらん

（貫之集 四四）

のように、滝の水が冬の間凍っていたのが、春になってとけたことを滝の糸にことよせて「むすんで」も「とける」といった歌や、

ほのぼのとみねのひのまづさしつれば結ばぬ春の雪ぞとける

（貫之集 九三二「子日」）

と、春先の雪のおぼろで固まらないさまを「むすばぬ」とあらわし、それが「とける」とした歌など、氷や雪の凝結することを「むすぶ」と言った上で、「とく」という言葉と同時に詠み込む表現が繰り返し見られることが注目される。新撰和歌の編纂にあたって、貫之が、自作に繰り返された表現を用いた歌を選び、また、そうでない歌の場合、歌句の改編をする場合も見られることは既に本論文第二部第一章第一節で述べたとおりである。このことから、当該の歌の「結ぶ」にも、水を掬うという意味だけではなく、水が凝結するという意味も重ね合わせられていることが考えられる。

【歌意】

袖がすっかり濡れるのもかまわず両手を結んで掬った水が結晶となって凍ったのを、立春の今日の風がとがしているのでしょうかねえ。

2 秋きぬと目にはさやかに見えぬ共風の音にぞ驚かれぬる

【校訂】底本四句「風の音にも」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】古今集 秋上 一六九

【注】

〔秋きぬと：風〕

秋の景物として風を取り上げる表現は、漢詩に多く見られ、また、万葉集以来の和歌や漢詩にも多く詠まれている。当該の歌のような、秋の訪れと共に吹く秋風についても、

秋風の吹きにし日よりいつしかとあが待ちこひし君ぞきませる

（万葉集 卷八 一五二三 憶良）

のように、早くから歌に詠まれるものである。当該の歌も、このような伝統的な表現を踏まえたものとして理解することが可能である。ただ、この歌が先の「袖ひちて」の歌と対にされていることに着目するとき、異なる文脈が浮かび上がる。

礼記月令に「孟秋之月、涼風至」という記述がある。当該の歌一首だけを享受する際にこれが意識される必然性はないと思われるが、同じく、礼記の「孟春之月、東風解凍」と関わる「袖ひちて」の歌と対にされることで、両首を結びつける共通項として礼記月令の記述が自ずと浮かび上がってくる。かくして新撰和歌の歌として当該の歌をみるとき、その背後に礼記のあることが意識されることになるだろう。

古今集は律令的な規範の枠内という制約のもとで選定されたものであると考えられるが、新撰和歌の冒頭二首は、礼記に基づくと取れる歌を春秋に並置することで一層律令的な色調を鮮明にあらわしているといえるのではないか。

〔おどろかれぬる〕

結句の「おどろく」という表現については、従来から、漢詩文の表現に学んだものと指摘されているが、さらに、「茲辰戒流火 商飈早已驚 雲天改夏色 木葉動秋声」（初学記所収 陳周弘讓「立秋詩」）のように、一首全体の発想に類似する表現を持つ漢詩も見いだすことができる。

〔1番の歌との対応関係について〕

注でも述べたように、新撰和歌の冒頭を飾る春秋の初めの歌として、いずれも礼記月令の記述に基づいた歌が配置されている。

【歌意】

秋がやってきたと目にははっきりと見えなくても、風の音にはとさせられたことです。すよ。

3 春霞たたるやいづこみよしのゝ吉野の山に雪はふりつゝ

【校訂】底本二句「たてるやいつこ」。松平文庫本、内閣文庫本により改める。

【他出文献】古今集 春上 三

【注】

〔春霞〕

1番の歌の注に記したように、霞は古来、春の訪れを知らせるものとして歌に詠まれてきた。新撰和歌は春の第一首に解氷という新しい素材を配しておいて、春の二首目には古くからの素材を詠んだ歌を置いているのである。後で記すように、秋の歌の第一首目と二首目にも同様に素材に新旧の対立が見て取れるが、このことは、新撰和歌が、その序に「古今和歌一千篇。更降勅命、抽其勝矣」とあるように、古今集から優れた歌を抜き出しただけではなく、古今集の編集方針をも引き継ぎ、いつそう純化させようと考えていたことを推測させる。

〔たたる〕

底本の第二句は、松平文庫本、内閣文庫本の伝える「たたる」という本文に校訂した。周知のように、第二句に関しては古今集でも「たてる」と「たたる」という本文が対立しているが、古来風体抄に「この歌はたてるやとかきたる本も侍れど、よき本には皆たたるとかけるなり。歌のたけ姿などいみじく侍るを、今の世にはたたるの詞ふりにたるなるべし」とあることに象徴されるように、「たたる」は、平安時代には古めかしいことばとして理解されていた（増田繁夫「古今集の歌語と本文」（大阪市立大学文学部創立五十周年記念国語国文学論集））。後述するように、この歌の趣向は古めかしい素材のおもしろさを強調するところにあると思われることから、新撰和歌本来の形は「たたる」であったものと考えられる。

〔みよしのの吉野の山〕

吉野山は、古くから文献にあらわれ、歌にも詠み継がれてきた名所である。ただ、注意したいのは、万葉集の時代には、いわゆる第四期に属する大伴家持の頃であっても、「為幸行芳野離宮之時儲作歌一首」（卷十八 四〇九八 題詞）などのように、吉野は現に天皇も行き来し、決して古びた地ではないことである。それが、平安朝になると、「古里の吉野」（古今集 雑体 一〇〇五）のように、みやこが大和から山城に移されたこともあるのだろうが、いにしえへの思いと共に歌に詠まれるようになってくる。

〔一首の古さと新しさ〕

うたわれた舞台が吉野であることや、春の訪れを知らせるものとして霞を持ち出してい

る点、さらに「たたる」という古語を用いたのであることから、一首の趣向の第一は、古めかしいことばや素材を詠み込んでいるところにあると考えられる。ただし、それらの素材の詠みこなし方は、きわめて古今集的な新しい発想と言える。当該の歌は立春を知った後、春になれば立つはずの霞を求め、という暦の上での知識を自然の景物に先立てて詠んでいるのだが、これは古今集の時代になって顕著な発想なのである。念のために確認するならば、万葉集において春霞と立春を関わらせて詠んだ歌は、

久方のあめのかぐやまこのゆふへ霞たなびく春立つらしも

(万葉集 卷十 一八一二)

月よめばいまだ冬なりしかすがに霞たなびく春立ちぬとか

(万葉集 卷二十 四四九二)

など、霞をみて、しかる後に春の到来に気づく、という順序で述べられており、その違いは明らかである。

【歌意】

(立春になって)春霞が立っているというのはどこなんだろうかねえ。みよしのの吉野の山に雪は相変わらず降ってますよ。

4 わきも子が衣のすそを吹返しうら珍らしき秋の初風

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋上 一七一

【注】

〔わきもこが衣の裾を吹き返し〕

古今集は初句を「わがせこが」とする。男性貴族は通常袴をはいているためか、古今集の古注類では、夫の衣の裾が風に吹き返されるのは不審だとして、「せこ」が女性の側を指す可能性について言及したものがあつた。そうした違和感をなくすために、新撰和歌編者が「我妹子」へ改変したものかと思われる。あるいは古今和歌六帖や躬恒集は「わきもこが」であるから、新撰和歌編纂時に既に「わきもこ」の本文が存在し、そちらを選んだ可能性もある。なお、貴族の女性が風に吹かれるような形で野外に立つことは、日常通常の光景とは考えにくい。したがって、当該の歌は、たとえば伊勢物語の芥川の段のような物語の世界を連想させるか、あるいは絵に描かれた女性をイメージさせるものであつたのではないか。

「めづらし」

たとえば、

待つ人にあらぬものから初雁の今朝なく声のめづらしきかな

(古今集 秋上 二〇六)

は、初雁の声の「めづらし」さを愛しい人の「めづらし」さと比すことで強調したものである。また、

春霞たちぬる時の今日見ればやどの梅さへめづらしきかな

(貫之集 二四八)

は、春の美しい景色の中に置いてみれば、見慣れた梅でさえ、新鮮ですばらしいものを感じることを表現したものである。これらのように、「めづらし」とは、普段目にしない新鮮さに対する感動と、さらに感動の対象を愛している、あるいは、すばらしいと思う、という気持ちを含んでいる。

なお、当該の歌の上の句は、第四句の「うらめづしき」を引き起こす序詞として機能している。こうした修辞技法も万葉集に多用された古くからのものであり、初句の「我妹子」という言葉と相まって一首に古風なイメージを与える。一方、衣の裾が風に吹き返されたために裏がみえてうら、珍しい、という掛詞の発想は、新奇な、いかにも古今風のものと思われ、この歌の鑑賞者は、上の句までの、古風で絵画のような美しいイメージと、それを一気に言葉のおもしろさに転換する古今集的な機知を味わうことになるだろう。

〔3番の歌との対応関係について〕

万葉集以来の古風な素材を扱いながら、古今風の新しい趣向の歌に仕立てられている点で両首は共通すると思われる。

### 【歌意】

好きなあの子の衣の裾を吹き返して、あれ、裏を見せている、いとおしくもよろこばしい気持ちにさせる、一年ぶりの秋の初風よ。

5 春ごとにかずへこしまにひとゝもにおいぞしにける峰の若松

【校訂】 底本上句「春とのみ風はこしまはひとゝもに」。結句「峰きしの若松ひめ」。初句

の本文は新撰和歌諸本により改め、また、傍記された異文はとらない。なお、第二句は、群書類従本の系統の本は「かぞへこしまに」とするが、その他の諸本には「かずへこしまに」とある。いずれがもとの本文と判断しかねるが、もと「かぞへ」とあったものを、あまり一般的ではない「かずへ」というかたち書き改める可能性は低いものと考えて「か

ずへこしまに」の方を一応採用しておく。

この歌は、素性集 I（冷泉家旧蔵本）に、

はるとのみかすへこしまに人ともにおいそしにけるきしのひめまつ

の本文で見えるが、冷泉家旧蔵本のこのあたりの歌は、かなり後になって増補された部分らしい（私家集大成解題等参照）。あるいは、新撰和歌の作者名を有する系統の本文によって補われたのかもしれない。

【他出文献】素性集（冷泉家旧蔵本）六七

【注】

〔春ごとに数へこしまに〕

初、二句は、

としごとにあひくるとしをかぞふれば我はおきなに成りぞしにける

（兼輔集 一二四）

と同様の発想で、春が来るたびに、すなわち新年になるたびに、その数を数えて年月を過ごす間に、の意。当該の歌のように、季節の数を数えることで自らの老いを確認するという趣向の歌は、

秋はぎの色づく秋を徒にあまたかぞへて老いぞしにける

（後撰集 秋中 三〇一 貫之）

のように、貫之自身にも見られる。

〔人ともにおいぞしにける〕

「ひとともに」は、あまり類例のない表現であるが、「人とともに」もしくは「人もともに」という意としか考えられないだろう。前者の場合は「若松が、人と共に老いる」ということになり、後者の場合は「人も、若松と共に老いる」ということになるが、当該の歌は雑ではなく春の歌とされていることから、松を主題に据えたことになる前者の解釈のほうがふさわしいと思われる。

次に、「老いぞしにける」は、右にあげた兼輔集や後撰集の例、また

かぞふればとまらぬ物を年といひてことしはいたくおいぞしにける

（古今集 雑上 八九三）

としごとに鳴きつる雁と聞きしまにわれはひたすら老いぞしにける

（兼輔集 一二五）

などと同じく、いつの間にか年老いたことを軽い驚きと共に嘆く表現と理解される。

〔峰の若松〕

「若松」は、通常「樹齡の若い松。また、生えて間もない松。」（日本国語大辞典第二版）という意味である。それを踏まえるならば、当該の歌の「老いぞしにける峰の若松」は、「年老いてしまったことよ。峰に生えているかつての若松は。」と、言葉を補って理解することになる。なお、後の例であるが、

水無瀬殿にあたらしくたきおとされ、石たてられてのちまゐりてあし

たに、清範朝臣のもとへ、地形勝絶のよし申しし中に

ありへけむもの千とせにふりもせで我が君ちぎる峰のわか松

（拾遺愚草 二五一八）

と、年月を経た松のことを「若松」と称したものが見られる。「峰の若松」という当該の歌と同じ表現になっていることから、定家が当該の歌を踏まえて新しい表現を作り出した可能性をまずは想定したいが、年を経たものであっても若松とすることが、あるいは有ったのかもしれない。その場合、当該の歌は、「年老いてしまったことよ。峰に生えている、若いという名を持つ若松も」というほどの意味になるだろう。ただ、同様の例が他に見いだせないのも、今は可能性を指摘するに留めておく。

【歌意】

春が来るたびその数を数えてきた、そのあいだに、いつのまにか人とともに年老いてしまったのだなあ、あの峰に生えているかつての若松は。

6きのふこそさなへとりしかいつのまに稲葉もそよと秋風の吹

【校訂】底本四句「稲葉そよきて」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】古今集 秋上 一七二

【注】

〔昨日こそ早苗とりしか〕

早苗を取ったのを「昨日」と言うのは、時の推移の早さへのおどろきを大げさに表現したものである。

〔いつのまに〕

「いつのまに」は、もっぱら

いつのまにさ月きぬらむあしひきの山郭公今ぞなくなる （古今集 夏 一四〇）

いつのまに霞立つらんかすがの雪だにとけぬ冬とみしまに（後撰集 春上 一五）

いつのまにちりはてぬらん桜花おもかげにのみ色を見せつつ

(後撰集 春下 一三二)

などのように、時の推移に伴う環境等の劇的な変化に気づいて「いったいいつのまにこのようになったのだ」という文脈で用いられる。該当の歌でも同様である。

〔5番の歌との対応関係について〕

両歌ともに、いつのまにか時間が経ってしまったことへの感慨を詠んだものである。その点に着目して対にされたのだろう。

【歌意】

昨日早苗をとって田植えをしたという気がするのに……いったいいつの間に稲葉もそよそよと秋風が吹く季節になったのか。

7とふ人もなき宿なれどくる春は八重葎にもさはらざりけり

【校訂】なし

【他出文献】貫之集 二〇七・古今和歌六帖 一三〇六

【注】

〔八重葎〕

平安朝の和歌で八重葎は、

今更にとふべき人もおもほえずやへむぐらしてかどさせりてへ

(古今集 雑下 九七五)

やへむぐらしげきやどには夏虫の声より外に問ふ人もなし (後撰集 夏 一九四)

などのように、人の訪れの途絶えた寂れた家に生い茂るものとして詠まれることが多い。ところが、時代をさかのぼって、万葉集で葎の生えた宿という言い方は、

いかならむ時にか妹を葎生のきたなき宿にいりいませてむ (万葉集 卷四 七五九)

思ふ人来むと知りせば八重葎おほへる庭に玉敷かましを

玉敷ける家も何せむ八重葎おほへる小屋も妹とをりてば

(万葉集 卷十一 二八二四・二八二五)

などのように、粗末な家、あるいはその卑称として用いられたものであり、そこに人の訪れが途絶えた、というニュアンスは含まれないようである。つまり、当該の歌のような、訪れる人のない葎の宿という詠み方は、古今集の時代に生まれた、新しい趣向だったのである。



【歌意】

訪れてくる人もいない宿であるけれども、来る春は八重葎にも妨げられることはないのだなあ。（気が付けばいつのまにか春が来ていたのだなあ）

8 萩のはのそよぐ音こそ秋風の人にしらるゝ初也けれ

【校訂】底本初句「萩のはに」、結句「初也けり」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】拾遺集 秋 一三九・貫之集 一〇〇・古今和歌六帖 三七一六

【注】

〔萩の葉のそよぐ音〕

萩の葉を鳴らす秋風が秋の光景として詠まれることは、はやく万葉集の時代より

葦辺なる萩の葉さやぎ秋風の吹き来るなへに雁鳴き渡る（万葉集 卷十 二一三四）のように、その例を確認することができる。ところが、古今集にはそのような趣向だけでなく、萩を詠んだ歌自体が一首もみられない。つまり、古今集に於いて萩は秋の素材として認定されなかったのである。

ところで、当該の歌は貫之集によると延喜十八年の詠であり、作者の紀貫之は、以後、秋の訪れを萩の葉擦れの音で気づく、という同じ趣向の歌を

いつもきく風をばきけど萩のはのそよぐ音にぞ秋はきにける

（貫之集 三八五 天慶二年）

吹く風のしるくもあるかな萩のはのそよぐなかにぞ秋はきにける

（同 五一 天慶五年）

のように、繰り返し詠んでいる。また詠作年代は分からないものの、貫之と共に古今集の編者であった凡河内躬恒も、

萩の葉のそよとつげずは秋風を今日からふくとたれかいはまし（躬恒集 七〇）

萩の葉のふきいづる風に秋きぬとひとにしらるるしるべなりける（同 四四八）

と、まったく同趣と言ってよいような歌を残している。ここまでの類似は、単によくあるテーマを詠んだ結果というよりは、貫之と躬恒の二人が、この趣向での詠作を互いに競った結果と考えるべきであろう。ここに、秋風にさやぐ萩の葉が万葉の時代で詠まれていながら古今集には採られなかったことを考え合わせると、萩の歌は古今集撰者によって一旦捨てられながら、後に再評価されたということになる。そして以後、

いとどしく物思ふやどの萩の葉に秋とつげつる風のわびしさ

山里の物さびしきは萩のはのなびくことにぞ思ひやらるる

(後撰集 秋上 二二〇 よみ人知らず)  
(同 秋上 二六六 藤原実頼)

秋風の吹くにつけてもとはぬかな萩の葉ならばおとはしてまし

(同 恋四 八四六 中務)

秋風のふくにつけてもとはぬかなをぎのはならばおとはしてまし

ことわりやうらむることも秋かぜのそよそよをぎのはにぞおどろく

いとどしく物おもふやどのをぎのはに秋とつげつる風のわびしき

秋風のをぎのはをふくおときけばいよいよ我も物をこそ思へ

(古今和歌六帖 二七一八・三七二〇～二二二 萩)

のように、萩を歌うことが多くの人々に受け入れられたようである。

〔7番の歌との対応関係について〕

8番の歌に詠まれた萩も7番の歌の葎も、当時の人にとってごく身近な植物であり、またはやくから歌に詠まれてもいた、平凡な、あるいは古めかしい素材であったと考えられる。それらが季節の到来を察知することを主題とした新しい趣向の歌に仕立てられている、という共通性によって二首は対にされたと思われる。

【歌意】

萩の葉のそよ音こそが秋風の人に知られる初めなのだなあ

9 梅の花にほふ春べはくらぶ山やみにこゆれどしるくぞ有ける

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春上 三九

【注】

〔にほふ〕

周知のように、「にほふ」という語の意味するところは、万葉集以前の時代において視覚を主としたものであったが、時代が下ると共に次第に嗅覚の方へと重心を移していく。古今集の時代の「にほふ」には、視覚が主であるものと嗅覚が主であるものとの双方が存在するが、花に関して「にほふ」という語を用いたときは、視覚を主とするものである場合が多かったようである。それは、

春雨ににほへる色もあかなくにかさへなつかし山吹の花 (古今集 春下 一二二)

と、色に関して「にほふ」と言っておいて、香に関してはそのように言わない例のあることや、

人はいさ心もしらずふるさは花ぞ昔のかにほひける (古今集 春上 四二)  
ぬししらぬかこそにはへれ秋ののたがぬぎかけしふぢばかまども

(古今集 秋上 二四一)  
のように、「にほふ」が嗅覚を中心とする場合には「香」などの語を示して、それとわかるように表現するのに対して、

秋の菊にほふかぎりはかざしてむ花よりさきとしらぬわが身を (古今集 秋下 二七六)

のように、視覚が中心と思われる場合には、必ずしも「色」という言葉を示さない、つまり、示さなくともよかつたらしいことから見て取れる。このことは、平安時代にその香を詠むことが一般的になった梅の花についても当てはまる。たとえば、

あひしりて侍りける人の家にまかれりけるに、梅の木侍りけり、この  
花さきなん時、かならずせうそこせむといひ侍りけるを、おとなく侍  
りければ 朱雀院の兵部卿のみこ

梅花今はさかりになりぬらんだのめし人のおとづれもせぬ  
返し 紀長谷雄朝臣

春雨にいかにぞ梅やにほふらんわが見る枝は色もかはらず (後撰集 春上 三八・三九)

式部のせうみむねのもとなつがにしなるとなりに住みはじめて、かく  
ちかどなりなることをいひおこせたるついでによみておくれる

梅花にほひのちかくみえつるは春の隣のちかきなりけり (貫之集 八六九)  
のように、視覚を主とする「にほふ」が梅について用いられた例も見られるのである。

さて、右のことを踏まえて、梅の花の香りについて「にほふ」という語を用いた和歌に  
ついて見る時、

梅花にゆきのふれるをよめる 小野たかむらの朝臣  
花の色は雪にまじりて見えずともかをだにほへ人のしるべく (古今集 冬 三三五)

あるじ身まかりにける人の家の梅花を見てよめる  
色もかも昔のこさにほへどもうゑけむ人の影ぞこひしき

紅梅の花を見て

みつね

(古今集 哀傷 八五一 貫之)

紅に色をばかへて梅花かぞことごとくにほはざりける

(後撰集 春上 四四)

などのように、色と香りの双方を意識したものがあつたことに注意したい。これらの歌は、梅の花が、色も香りも「にほふ」ことをおもしろがり、そのことから発想されたものなのである。つまり、もっぱら視覚的に「にほふ」多くの花に対して、梅の花は視覚的にも嗅覚的にも「にほふ」ことに、この時代の歌人たちは興味を抱いていたと思われるのである。さて、当該の歌を、梅の花の「にほふ」には、視覚と嗅覚の両面があることに興味の中心があつた、という前提で読み解けば、梅の花が「にほふ」時には、くらぶ山の闇の中で視覚の点ではわからなくなるが嗅覚の点ではつきりわかる、そうしたところが他の花とは異なる梅の特性をおもしろがったもの、と理解されるだろう。

〔はるべ〕

春べという語は、はやくから春とほぼ同義と見る説と、春の辺すなわち春先と見る説とがあり、いずれとも決しがたいが、

なにはづにさくやこの花ふゆごもりいまはるべとさくやこのはな

(古今集 仮名序)

いまさらに雪ふらめやもかげろふのもゆる春べとなりにしものを

(古今和歌六帖 一一 むつき)

のごとく、春先と解することが似つかわしいと思われる例が存するのに対して、春先と理解してはどうにも不都合な例は見いだしたがたいので、さしあたり春先と解しておく。当該の歌では、初春の花である梅と似つかわしい語として「春べ」を用い、難波津の歌のように、春の到来と美しい梅の花盛りに浮き立つ心を表現したものと考える。

〔くらぶ山〕

くらぶ山は、

梅花にほふ春べはくらぶ山やみにこゆれどしるくぞ有りける (古今集 春上 三九)

秋の夜の月のひかりしあかければくらぶの山もこえぬべらなり

(古今集 秋上 一九五)

などのように、その名に由来して「暗い」という意味を込めて詠まれることの多い山であるが、当該の歌も同様に考えられる。

〔しるく〕

古今集の諸注では、何のことを「しるし」と言っているのか、という点でいくつかの見解が出されているが、一首の関心が、先に述べたように、視覚でも嗅覚でも「にほふ」梅の花の特性にあると考えられるならば、梅の花の香りが「しるく」ある、と言っているのだと理解できる。

【歌意】

梅の花が美しく咲き「にほふ」春先は、ただでさえ暗いくらぶ山を闇の中で越えても、その香りの「にほふ」ことはつきりとわかる。

10 いづれとも時はわかねど秋のよぞ物思ふことの限り成ける

【校訂】底本初句「いつれとも」<sup>は</sup>。新撰和歌諸本で「いつれとも」と「いつはとは」が混在するが、本稿の原則に従って、古今集とは異なる方の本文をとる。

【他出文献】古今集 秋上 一八九

【注】

「ときはわかねど…かぎり」

「時をわかず」とは

ももちどりなく時あれどきみのみこふるわがねはいつとわかれず

(古今和歌六帖 二〇一四)

から知られるように、いつと区別することなく、ずっと、という意味である。一方「かぎり」は、ものごとを限って他と区別することであり、それはすなわち「時をわく」ことと共通する内容を持つ。そして、

限なき君がためにとをる花はときしもわかぬ物にぞ有りける

(古今集 雑上 八六六)

を、遠鏡が「御命ノカギリモナイ君ニ御目ニカケウト存ジテ折リマスル花ハ カヤウニイツト云時節ノワカチモナシニ咲クモノデサゴザリマスワイ 君ノ御命ガ限リモナイユエニ花モ時節ノ限リナシニイツデモ咲クデゴザリマス」と訳すことからわかるように、「時をわく」と「かぎる」の意味の共通点に着目して機知的な表現を構成した歌が古今集に見られる。また同様の趣向はこのほかにも、

時わかぬ松の緑も限なきおもひには猶色やもゆらん

(後撰集 恋 八三五)

我ひとりおもへばくるしかぎりなきころばかりをわけてしらせん

(西宮左大臣集 一八)

人よりも心のかぎりながめつるつきはたれともわかじものゆゑ

(入道右大臣集 三八)

のように、しばしばみられるものである。すなわち当該の歌でも「どれが、とも時は限定しないけれども秋の夜は物思いの極限である」というように、相容れぬ内容を持つ言葉が、接続助詞の「ど」を夾んで旨く結びつくという機知的なおもしろさを眼目としているものと考えられる。

〔9番の歌との対応関係について〕

9番の歌の「闇に越ゆれど」と、10番の歌の「時はわかねど」の「ど」に着目して、まずは対にされたものと思われる。さらに、双方ともに夜の歌であるという点でも共通する。

【歌意】

どれがそうだと時を限定したりもしないけれども、秋の夜が物を思うことの極限であるのだなあ。

11ときはなる松の緑も春くれば今一しほの色増りける

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春上 二四

【注】

〔ときはなる〕

ときはの松は、しばしば歌に取り上げられる素材であるが、

八千種の花はうつろふ常磐なる松のさ枝を我は結ばな(万葉集 卷二十 四五〇一)

ふか緑ときはの松の影にゐてうつろふ花をよそにこそ見れ

(後撰集 春上 四二 坂上是則)

などのごとく、けっして色の変わらないことを取り上げて歌に詠むのが常套的な表現であった。そのような中、ときわの松でも色が変わる時があることを発想した点が新しい。

〔松の緑〕

「松の緑」と言ったときの「緑」は色彩を表すと同時に、みずみずしい緑色の若々しい枝をも意味するようである。

たとえば、

したもみぢするをばしらで松の木のうちへ緑をたのみけるかな

(拾遺集 恋三 八四四)

は、恋人の心変わりを象徴する「したもみぢする(枝もしくは葉)」と対になるものとして、恋人のうわべの振る舞いをあらわす「松の木の上の緑」を提示したものである。「したもみぢする」の、「もみぢする」は格助詞「を」に続くことから、連体形で、下に「枝」もしくは「葉」という名詞を補って考えるべきものである。それと対になるのであるから、「松の木の上の緑」の「緑」は、色彩という抽象的なものではなく、みずみずしい緑色の枝、という具体的なものでなくてはならない。また、

みよしのに千代のはるはるおひそはる小松のみどりひきつくさめや(能宣集 七五)  
も、「緑色」を「引き尽くす」、という抽象的な意味としては考えにくい。やはり「引き尽くす」対象は、若々しい緑色をした芽生えたばかりの小松そのものでなくてはならない。このように考えるとき、

むらさきの色しこければ藤の花松のみどりもうつろひにけり

(拾遺集 雑春 一〇七〇)

も、松の緑色があせてしまった、ではなく、松の緑の枝が色あせてしまった、と見ることができる。また、

わざとにはあらず時時ものいひ侍りける女、ほどひさしうとはず侍り

ければ よみ人しらず

高砂の松を緑と見し事はしたのもみぢをしらぬなりけり

返し

時わかぬ松の緑も限なきおもひには猶色やもゆらん

(後撰集 恋四 八三四・八三五)

などにしても、松の緑色が「色もえる」のではなく、松の緑の枝が「色もえる」と見る方が妥当だと思われる。

なお、

(松のもとにこれかれ侍りて花をみやりて) 藤原雅正

花の色はちらぬまばかりふるさにつねには松のみどりなりけり

(後撰集 春上 四三)

おもひをば松のみどりにそめしかど花のがりのみゆく心かな (躬恒集 一四四)

などの、「みどり」は色彩を意味するが、いづれも「松のような緑色」の意であり、「松の緑色」と取る必然はない。

しかして、当該の歌でも、松の緑色が「色まさった」のではなく、松のみずみずしい緑色をした枝が一層「色まさった」と考えることができるし、そのように考えた方が、一年中新緑のようにみずみずしい緑の松の木が、春を迎えていつそう美しくなった、と、新春にふさわしいめでたい歌になると思われる。

〔ひとしほ〕

染汁に一度浸けること。更に染めを施したように緑の色が美しくなるという意。

【歌意】

いつも変わらぬときわの松のみずみずしい緑の枝であっても、春が来るともう一染めしたように色が美しくなるのだなあ。

12紅葉せぬときはの山は吹風のをとにや秋をきゝわたるらん

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋下 二五一

【注】

〔紅葉せぬときはの山〕

ときは山が紅葉しない、ということに歌に詠むときには

なべてしもいろかはらねばときはなる山には秋もしられざりけり

（古今和歌六帖 九一〇）

うつろふをいとふとおもひてときはなる山には秋もこえずぞ有りける

（貫之集 二二一）

のように、ここでは秋が感知されない、あるいは秋が来ないという定型的な詠みぶりがあった。それに対して、この歌では、

秋きぬとめにはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる

（古今集 秋上 一六九）

に代表される、秋を知らせる「風の音」を持ち出し、ときはの山でも秋を感知しているのではないか、としたのである。これは、やはり先の歌と同様、「ときはの山」の詠みぶりとしては斬新なものであつたらう。

〔11番の歌との対応関係について〕

両歌ともに、一年中色を変えぬ常緑の松や山に、新しい季節が訪れたことを詠んだ新しい読みぶりの歌である点が共通する。



【歌意】

紅葉することがないときわの山は、吹く風の音で秋のことを聞き続けているのだろうか。

13 春やとき花やをそきと聞わかむ鶯だにも鳴ずも有哉

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春上 一〇

【注】

〔春やとき花や遅きと聞きわかむ〕

立春になったばかりで花はまだ咲いていない状況の中で、花を待望する心をこのように表現している。

〔うぐいすだにも鳴かずもあるかな〕

春を告げる鳥である鶯がまだ鳴かないことを「鳴かずもあるかな」と大仰に嘆息している。またこの表現は、鶯を待つ気持ちの切実さをいうだけではなく、上の句に「はるやときはなやおそきとききわかむ」と印象的な同音の繰り返しが行なわれていることを考えると、「だにも」と「なかずも」の「も」の重なりをも意図したものと思われる。

【歌意】

春が早く来すぎたのか花が咲くのが遅いのか、聞いて判断しようと思う、その時鳥さえも鳴かないことであるよ。

14 恋くゝてあふよは今宵天の河霧立わたりあけずもあらなん

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋上 一七六

【注】

〔こひこひてあふ〕

「こひこひて…あふ」という表現は、

恋ひ恋ひて逢へる時だに愛しき言尽くしてよ長くと思はば（万葉集 卷四 六六一）

恋ひ恋ひて後も逢はむと慰もる心しなくは生きてあらめやも

（万葉集 卷十二 二九〇四）

こひこひてまれにこよひぞ相坂のゆふつけ鳥はなかずもあらなむ

（古今集 恋三 六三四）

こひこひてのちあふ物と思はずはいまはけぬべき秋風の声（古今和歌六帖 四一八）  
などのように、早くから一つのパターンとして存在していたようである。このように既成のパターンを用いた歌の場合、どのように工夫して見所のある歌にするかが問われるのであるが、当該の歌の場合、「こひこひ」という同語、そして同音の繰り返しに着目して一首を仕立てているものと見られる。第二句に「夜」と「今宵」という類義語をわざわざ重複させているのも「待ちに待ったその夜が、今、到来したという喜びの感情を強調している」（松田武夫『新釈古今和歌集』）だけではなく、同音が繰り返されることを意図したものと思われる。かくして一首は、

こひこひてあふよはこよひあまのはきりたちわたりあけずもあらなむ

と、同音の繰り返しが印象的な歌になっている。付言すれば、「こひこひて」の同音の繰り返しが当時の人々にも意識されていたことは、

こひこひにひとこひこひにこひしなほもえんほのほもこひのかやせん

（古今和歌六帖 一九九三）

という、あからさまに「こひ」という音の繰り返しを楽しんだ歌のあることから確認できる。

〔13番の歌との対応関係について〕

両歌共に、同音の繰り返しが印象的である。こうした同音の繰り返しも、歌の技法のひとつとして貫之は考えていたのだろう。

【歌意】

恋しく思い続けて、ついに逢う夜は今宵である。天の川では霧が立ちこめて夜が明けないでいてほしい。

15花の香を風の便にたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春上 一三

【注】

〔風の便りにたぐへてぞ〕

「風の便り」という言葉は、貫之の時代には、

すみ侍りける女、宮づかへし侍りけるを、ともだちなりける女、おな

じくるまにてつらゆきが家にまうできたりけり、つらゆきがめ、まら

うどにあるじせんとてまかりおりて侍りけるほどに、かの女を思ひか  
けて侍りければ、しのびてくるまにいれ侍りける づらゆき

浪にのみぬれつるものを吹く風のたよりうれしきあまのつり舟

(後撰集 雑三 一一二四)

むめの花おもしろかりけるをみにとてびはどのにおはしたりけるに

宿近くにほはざりせば梅花風のたよりに君をみましや

(兼輔集 五)

のように、風という便宜、という程の意味で用いられていたようである。当該の歌もそのように理解して問題ないものと思われる。また、「たぐふ」は、

やよひのつごもりの日、花つみよりかへりける女どもを見てよめる

みつね

とどむべき物とはなしにはかなくもちる花ごとにとたぐふころか

(古今集 春下 一三二)

あづまの方へまかりける人によみてつかはしける いかごのあつゆき

おもへども身をしわけねばめに見えぬ心を君にたぐへてぞやる

(古今集 離別 三七三)

松にさける藤の花

藤の花あだにちりなばときはなる松にたぐへるかひやなからん (貫之集 一二四)

のように、あるものを別の何ものかに添わせたり載せたりすることを言う。当該の歌に当てはめて考えた場合、風という便宜になるものに添わせて花の香りを鶯に送る、と理解できる。

「しるべにはやる」

結句については、「には」の「は」を強意と説明して「しるべとして遣るのだ」とする説と、とりたてと解釈して「外にはやりたくないこのすばらしい花の香であるが、鶯を誘うしるべとしてだけは遣るのである」とする説とがある。両説は、この歌一首だけを見る場合、どちらと決することは難しい。けれども新撰和歌においては、次に配された16番の「今宵来ん人には逢はじ」の「は」があきらかに今宵来る人だけを取り立てて用いられたものであり、それと対にされていることで、この歌の「は」も同様に取り立てて解釈すべきものと思われる。

なお、歌の言葉が表す意味は「外の事には決して遣られぬ大切の花の香だけれど、鶯誘ふしるべには惜まず遣るといふ余意が生じてくる。鶯を待ち恋ふる心の切なさが、そこに

見える」（金子元臣『古今和歌集評釈』）ということであるが、無論、実際に花の香を風に託すということができるわけではない。つまり、ほのかに花の香のする風が吹き抜けていくことをこのような歌に仕立てた機知が、この歌の作者の工夫であり一首の眼目でもある。

【歌意】

このすばらしい花の香を、おりよく吹いてきた風に添わせて、鶯を誘うしるべにということならば送ってやろう。

16こよひこん人にはあはじ七夕の久しきほどにあえもこそすれ

【校訂】底本結句「待もこそすれ」。新撰和歌諸本で「待ちもこそすれ」と「あへ（え）もこそすれ」が混在するが、本稿の原則に従って、古今集とは異なる方の本文をとる

【他出文献】古今集 秋上 一八一

【注】

「あえもこそすれ」

「あゆ」は、「似る」「あやかる」の意。七夕が年に一度の逢瀬を待つて恋しく思いながら過ぐす時間の長さにあやかってしまい、相手となかなか会えない状態になってしまうことを恐れているのである。なおこれは、秋の部に収められていることから、恋の相手に対して、今日は会いたくないと言っている歌とは見られない。七夕の年に一度の逢瀬の話を利用した機知的な発想を楽しんだ季節の歌なのである。

〔15番の歌との対応関係について〕

15番の歌は、花の香りが風に乗って漂うことを、添わせる、一緒にさせる、という意味の「たぐふ」という言葉でもって解釈した視点のおもしろさが眼目であった。一方、16番の歌の趣向は、七夕の日に会いに来る恋人を、七夕と同じことになっては困る、と言った発想にあるのだが、これを一緒にする、という意味の「あゆ」という言葉で表現している。このような類似する言葉が一首の趣向の中心になっているところに着目して対にされたものと思われる。

【歌意】

今宵やって来るような人には会いますまい。七夕が久しく逢瀬を待つ時間にあやかっつて、なかなか会えぬ仲になってしまうといやだから。

17 雪のうちに春はきにけり鶯のこほれるなみだいまやとくらん

【校訂】底本結句「けふやとくらん」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】古今集 春上 四

【注】

〔雪のうちに〕

雪のうちにみゆるときはみわの山道のしるべの杉にやあるらん（新撰和歌152）

よのなかにひさしきものはゆきのうちにもと色かへぬ松にざりける（貫之集279）

からわかるように、この語は「雪の降っている時期に」というような抽象的な意味を表すのではなくて、白い雪が降り積もって、あるいは降っているその中で、という具体的な情景を表している。雪景色の中で春がやってきた、というわけである。

〔こほれる涙今やとくらん〕

鶯が「なく」ことに掛けて「涙」を持ち出したものである。さて、涙というものは、冬の間でも泣き続け流し続けるならば、

世とともに流れてぞ行く涙河冬もこほらぬみなわなりけり（古今集 恋二 五七三）

のように凍らないものとして詠まれる。ところが当該の歌では鶯の鳴き声は春になるまで聞こえない。つまり冬の鶯の涙は凍っているのである。そして、春になったのだから涙も解けてまた「なき」始めるだろう、というのである。

【歌意】

雪景色の中に春がやってきた。冬の間凍について、鳴き声も立てなかった鶯の涙も今は解けているだろう。もうじき鳴き声も聞こえることだろう。

18 あき風に夜のふけゆけばあまの川かは瀬に浪の立るこそまで

【校訂】なし

【他出文献】拾遺集 秋 一四三・貫之集 一三・古今和歌六帖 一五〇・赤人集 二〇

八

【注】

〔秋風に〕

初句の格助詞「に」の解釈が難しいが、

秋風に今か今かと紐解きてうら待ち居るに月傾きぬ（万葉集 卷二十 四三二一）

秋風にかきなすことのこゑにさへはかなく人のこひしかるらむ

などと同様、秋風の中で、くらしい意で用いられたものだろう。

〔夜の更けゆけば〕

男女が会うのは

わがせこがくべきよひなりささがにのくものふるまひかねてしるしも

(古今集 墨滅歌)

のように、「宵」である。したがって当該の歌が「夜の更けゆけば」というのは、男の訪問が遅れていることを意味する。

〔風と川波〕

七夕の歌の中に、

秋風に川波立ちぬしましくは八十の舟津つに御舟留めよ (万葉集 卷十 二〇四六)

秋風に浪やたつらん天河わたるせもなく月のながるる (後撰集 秋中 三三〇)

のように、秋風のために立つ川波で恋人の来訪が遅くなることを詠った例がしばしば見られる。この歌でも同様の意味を読み取ることができる。

〔17番の歌との対応関係について〕

季節の到来を受けて、鶯の涙が解けることや、織女が彦星を待つことなど、目には見えない想像の事物に思いを馳せるといふ趣向が共通している。なお、両歌の上二句、「秋風に夜の更けゆけば」、「雪のうちに春はきにけり」が、いずれも季節の景物十「に」十時間間の推移を表す言葉、という構造で、その語調が似ていることも、意識されていたかもしれない。

【歌意】

秋風の吹く中、あの人の姿が見えぬのに夜が更けていくので、天の川の川瀬に波が立つように、立ったり座ったりして待っています。

19うめがえにきゐる鶯春かけてなけどもいまだ雪はふりつゝ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春上 五

【注】

〔梅…鶯…雪〕

初春の景として、梅と鶯に雪を取り合わせて詠むのは、

梅が枝に鳴きて移ろふうぐひすの羽白たへに沫雪ぞ降る（万葉集 卷十 一八四〇）  
など、六朝、初唐詩の影響を受けた万葉集に既に例のあることである（新潮古典集成『万葉集』一八四〇番の歌の頭注）。そして、古今集の時代には、

春たてば花とや見らむ白雪のかかれる枝にうぐひすぞなく（古今集 春上 六）

鶯は鳴き初めぬるを梅花色まがへとや雪のふるらむ（貫之集 二九六）

梅がえになくうぐひすの声きけばよしのの山にふれるしらゆき（躬恒集 九六）

などのように、見立ての技法や歌枕を用いつつ梅・鶯・雪を詠んだ例が確認できる。このことは、この三種の素材を取り合わせて歌に詠むことが万葉以後も広く受け継がれたことを意味するだろう。広く受け入れられたがゆえに、同じ素材を用いつつ、表現に様々な工夫を凝らしたバリエーションが作られたというわけである。ならば、当該の歌も、単に雪の中で鳴く鶯という情景のみを詠んだのではなく、何らか技巧的な趣向が凝らされているものと予測される。

〔来居る〕

この歌での「来居る」は鶯がやって来て梅の枝にとまっていることの表現として、まずは受け取るべきであるが、この語は、鶯に関わる表現として万葉集以来しばしば和歌に用いられる「こづたふ」などとは異なり、

：（防人が）いや遠に 国を来離れ いや高に 山を越え過ぎ 葦が散る 難波に来

居て：（万葉集 卷二十 四三九八 為防人情陳思作歌）

など、鳥だけではなく、人間の動作を表す場合にも用いることができるものである。そして、

う月ばかり、友だちのすみ侍りける所ちかく侍りて、かならずせうそ

こつかはしてむとまちけるに、おとなく侍りければ

郭公きゐるかきねはちかながらまちどほにのみ声のきこえぬ（後撰集 夏 一四九）

など、表面的には鳥のことを叙しつつ、背後に人事を重ね合わせた使い方もされる。詳細は後述するが、当該の歌も同様の表現意図を持ってこの語を用いたものと思われる。

〔春かけて〕

時を表す言葉に「かけて」が下接する場合、

み山いでて夜はにやきつる郭公眺かけてこゑのきこゆる

（拾遺集 夏 一〇一 平兼盛）

のように、現代語と同様「（それ以前から）くにかけて」と解釈できそうなものもあるが、

むかし、おとこありけり。女をとかくいふこと月日経にけり。石木にしあらねば、心苦しとや思ひけむ、やうやうあはれと思ひけり。そのころ、水無月の望ばかりなりければ、女、身にかき一つ二ついできにけり。女言ひをこせたる。「今はなにの心もなし。身に、かさも一つ二ついでたり。時もいと暑し。すこし秋風吹き立ちなむ時、かならずあはむ」と言へりけり。秋待つころほひに、ここかしこより、その人のもとへいなむずなりとて、口舌いできにけり。さりければ、女の兄人、にはかに迎へに來たり。されば、この女、かえでの初紅葉をひろはせて、歌をよみて、書きつけてをこせたり。

秋かけて言ひしながらもあらなくに木の葉ふりしくえにこそありけれ

と書きをきて、「かしこより人をこせば、これをやれ」とていぬ。：

(伊勢物語 九六段)

や、

わすらるる身をあきかけてくるかりのあまたつらげにみゆる君かな

(古今和歌六帖 二八六九)

のように、「くを(思いに)かけて」あるいは「くと思ひ決めて」というほどの意味で用いられたと思われるものも多い。さて、「梅が枝に」の歌はいずれの意味で「かけて」を用いているのだろうか。前者のように考えると「(鶯は冬の終わりから)春にかけて鳴くけれども」と、「春かけて」の示す時が春の直前である冬の終わりを含むことになる。ところが、一首に提示されている時が、春だけではなく冬の終わり、すなわち雪の降るべき季節を含むのであれば、それは「いまだ雪は降りつつ」という表現とはあまり整合しない。一方、「(鶯はもう)春と思ひ決めて鳴くけれども」と見れば、春告鳥たる鶯の思い入れにもかかわらずいまだに雪は降る、と「いまだ」の語が腑に落ちて了解される。つまり、鶯の声は通常、

春やとき花やおそきとききわかむ鶯だにもなかずもあるかな

(古今集 春上 一〇)

のように春を知らせるものであるが、その鶯が「春かけて」鳴いているのに、いまだに雪が降る、すなわち春になっていない、と機知的な趣向を凝らして詠んでいるものと考えるのである。

〔一首の寓意に関して〕

鶯が鳴いているのにもかかわらずいまだ春がやってこないとうたう歌は、古今集の時代、



他に類例の見だしがたいものである。また、梅が枝の鶯が「きゐる」すなわち「来てじつとしてゐる」というところにも、花の蜜を求めてせわしなく動き回るこの鳥の特徴的な生態をうつしたのであろう。「こぶたふ」などと比べる時、なにがしか落ち着きのなさを覚える。すなわち、ここには新春の鶯のさまを表現しただけではない、何らかの意が込められていると感じられるのである。さて、その意図がどのようなものであるのか考えるのに、春されば妻を求むとうぐひすの木末を伝ひ鳴きつつもとな

(万葉集 卷十 一八二六、古今和歌六帖 四四〇七にも)

むらさきのねはふよしのの春の野は君をこひつつ鶯ぞなく

(古今和歌六帖 三五〇二)

などのように、鶯は恋しい相手を求めて鳴くのだとする歌があるのを手がかりにしたい。このような詠み方をした歌はさほど多く残されているわけではない。だがたとえば、からくしておもひわするるこひしさをうたてなきつるうぐひすのこゑ

(大和物語 一〇五段)

のように、鶯の声がおさえていた恋心を掻き立てる、という表現が成り立っているのであるから、鶯が鳴くのは思う相手を求めていることだ、という了解が、当時の和歌の表現のひとつとしてたしかにあったものと考えられる。さて「梅が枝に」の歌にもこのような鶯の鳴き声に関する恋のイメージが重ねられていると考えてみてはどうだろうか。先に述べたように「来居る」は人間の動作をも表しうる語であった。そうするとそこには、女の家にやつて来ては居座っている(＝来居る)男が、思う人へのことばを尽くすのだが(＝鳴けども)、なかなか女はうち解けてくれないでいる(＝いまだ雪は降りつつ)、という図が浮かび上がるのではないだろうか。付言するならば、公任に、

忽に梅の木に鶯のなきてすのこにことひくをとこある所にすの中にて

鶯のさきにか君がきゐつるをかつうち出でむ梅がえのこゑ (公任集 三二二)

という歌がある。「鶯」「来居る」「梅が枝の声」という言葉遣いからして、明らかに「梅が枝に来居る鶯」の歌を踏まえている。そのためか言葉続きにやや無理があるが、一首はおよそ「鶯の先にいとしいお方が来て座り込んで(琴を弾いて)いるものを、鶯はそれでも「梅が枝の声」を出そうとするのですね」というほどの意であろう。この歌では、簀の子で琴を弾いている人物を「人」などとは言わず「男」と明示していることからしても、簾の内にいるのは女とみて間違いない。その女に対して男は琴を聞かせている。そうして鶯の「梅が枝の声」はその琴の音と競おうとしているのだから、男が女に呼びかける

声、という意を含んでいなければならない。つまり、この公任の歌は、当面する新撰和歌一九番の歌が、今まで述べたような、恋のイメージを読み取りうるものとして享受されていたことを示している。

【歌意】

梅の枝に来てとまっている鶯が、春と思ひ決めて鳴くけれども、いまだに雪は降り降りしている。(女の所に来て居座っている男が、思う人への言葉を尽くすのだが、いまだに女はうち解けてくれないでいる。)

20 契りけむ心ぞつらき七夕の年に一たびあふは逢かは

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋上 一七八

【注】

〔ちぎりけむ心〕

「けむ」は過去推量の助動詞。「ちぎりけむ心」は「(その昔彦星と織女が) 契ったという(その)心」と、まずは解釈される。このことの詳細については「部立てに関して」の項に記した。

〔詠歌の主体に関して〕

この歌については、はやくから、彦星の立場で詠んだものか、あるいは地上の人間の立場で詠んだものかをめぐって議論がなされてきた。本稿は後者の考えに従うのであるが、この考えに対しては、従来二つの難点が指摘されてきた。第一は、地上の人間、すなわち牽牛織女たちからすれば第三者であるものが、なぜ二星の逢瀬の少ないことを「つらし」と言わねばならないのかということである。なるほど、通常言われるように「つらし」は、あはずしてこよひあけなば春の日の長くや人をつらしと思はむ

(古今集 恋三 六二四)

など、みずからと直接交渉のある相手の態度・言動が耐え難くつらいものであることを意味する文脈で用いられることがほとんどである。ただ、少数ながら、

「(賀茂参詣の途中、田植えをする女たちが郭公を馬鹿にしたような歌を歌うのを聞いて) 心憂き。…中略…仲忠が童生ひいひおとすと、郭公、鶯に劣るといふ人こそ、いとつらうにくけれ。」(枕草子「賀茂へ参る道に」)

というように、直接交渉のない人物の言動が原因で心苦しくつらい気分になることを「つ

らし」といった例も見られる。したがってこの歌の「つらし」も、七夕の年に一度の契りに同情する、切なくつらい気持ちを表現したものと考えることができるのではないか。

また第二の難点として、地上の人間から見れば七月七日に逢うのは彦星と織女の二星であるのに、この歌では「年に一たびあふ」ことの主体として、織女のみ意味する「七夕」の語を用いているのはなぜか、と言われることがある。けれどもこれは、地上の人が織女に視点を集中して「織女が（彦星と）年に一度逢う」と表現したものと解釈して、問題はない。むしろそのように、一首を、織女へ心をよせた詠とみれば、愛しい人を待つしかない立場である女性、すなわち織女が年に一度しか夫に逢えないことに同情し、「つらき」と感じることに納得がいくのである。

なお、この歌を彦星の立場から詠んだものだとするには、第三句の「たなばたの」という言い方が難点となる。すなわち、彦星が愛しい妻である織女のことを「君」等の二人称でなく「七夕」という三人称で呼ぶのはやはり不自然であろう。

〔部立てに関して〕

この歌を秋部の歌として見る限りにおいては、右に述べた立場でひとおりの解釈は可能と思うが、なお言及しておきたいことがある。それは、この歌が新撰万葉集で恋部に収められ、また寛平御時后宮歌合でも秋部と恋部に重出していることである。一般に七夕の歌は、必然的に恋の要素を含むのだけれども、それが地上の人ならぬ星々の恋であるためか、通常恋の歌と分類されない。また、七夕の説話に託した地上の恋人たちのやりとりの歌であつても、たとえば、

こよひこむ人にはあはじたなばたのひさしきほどにまちもこそすれ

（古今集 秋上 一八一）

円融院御屏風に、たなばたまつりしたる所にまがきのもとにをとこと

てり

たなばたのあかぬ別もゆゆしきをけふしもなか君がきませる

（拾遺集 雑秋 一〇八三）

などがそうであるが、秋部に収められることが多い。それにもかかわらずこの歌が恋の歌としても認識されうるものであつた、という点には留意すべきであろう。

さて、そのようにこの歌が扱われた所以はどこにあるのだろうか。本稿では、この歌が七夕を詠んだ歌として完結していながら、同時に、恋人に対するメッセージとしても用いることができるためと考える。そこで以下に、この歌がどのような恋のメッセージたり得

るか、私案を示す。

「ちぎりけむ」に注目して考えよう。「けむ」はいわゆる過去推量の助動詞であり、言い換えれば、言語主体が直接には経験しなかった事象を推量して表現する言葉である。であるから、先に示したように「ちぎりけむ心」は「(その昔二星が) 契ったという(その)心」を地上の人間が推量して表現したものと、まずは解釈される。ところで、このような推量の表現は、言語主体が直接に経験した事象であってもそれを婉曲的に表したいときに用いることができる。「ちぎりけむ心」だと、かつての契りはどこへやら、年月と共に冷淡になっていった相手の不実さをなじるために「あなたが昔契ったとかいうその心」と表現する、そのような場合が想定されよう。ちなみに、

契りけん事のは今は返してむ年のわたりによりぬるものを(後撰集 秋上 二三六)

は、今の想定に該当する例である。さて、このような文脈を想定した上で問題の歌を見るならば、次のような解釈が成り立つ。すなわち、ほとんど一年ぶりに会いに来た男に対して「(あなたが変わらぬ愛情を) 契ったとかいうその心こそ薄情なことです。あの七夕のように年に一度逢うなんて逢うといえるでしょうか」と責めているのである。

〔19番の歌との対応関係について〕

ここまで述べたように、20番の歌は七夕の歌として完結はしているが、恋のメッセージとしても用いるものであった。同様に19番の歌も、第一義としては早春の梅と鶯の歌とすべきだが、恋の文脈を読み取ることが充分に可能な作りとなっていた。このような季節の歌として完成したものの背後に恋の文脈を潜ませるといふ詠みようを一つの表現技法と認めて、貫之はこれら二首をつがえたものと考ええる。なお、19番の歌に用いられた「かく」と20番の歌の「ちぎる」は、難く約束する、という点で語義が類似する。これも気になるところである。

【歌意】

(年に一度と) 約束したという心がせつないことです。織女が(彦星と) 年に一度逢うなんて逢うと言えるでしょうか。(あなたが変わらぬ愛情を契ったとかいうその心こそ薄情なことです。あの七夕のように年に一度逢うなんて逢うと言えるでしょうか。)

21春の夜のやみはあやなし梅の花色こそ見えねかやはかくるゝ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春上 四一

【注】

「あやなし」

「あやなし」は、「理にかなわない」の意。「甲斐がない」「実効がない」とする考え方もあるが、それらは、理にかなわぬことの結果としてそうなるのである。そのため「あやなし」を「実効がない」というふうに訳して不都合の感じられない例は多いが、

人の家より物見にいづるくるまを見て、心づきにおぼえ侍りければ、

たそとたづねとひければ、いでける家のあるじとききてつかはしける

人づまに心あやなくかけはしのあやふき道はこひにぞ有りける

(後撰集 恋二 六八八)

院のやまとにあふぎつかはすとて

おもひには我こそいりてまどはるれあやなく君や涼しかるべき

(後撰集 恋三 七八二)

のように、「理にかなわない」と解釈しなければ理解の行き届かない例があるのである。したがって、「あやなし」は「理にかなわない」と解釈すべきで、そのように訳さなければ、やはりこの語の持つニュアンスが失われてしまう。

では、春の夜の闇にはどのような「理」があるのだろうか。やや理屈にすぎる嫌いもあるが、確認しておきたい。闇は、単に暗いだけではなく、

かきくらす心のやみに迷ひにき夢うつつとは世人さだめよ(古今集 恋三 六四六)

人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな

(後撰集 雑一 一一〇二)

春の夜のやみのなかにてなくかりはかへる道にぞまどふべらなる (敦忠集 二〇) などに見られるように、人の心を惑わせるという属性を併せ持つものであった。それなのに、春の夜は真っ暗な中でも梅の香がはっきりとわかり、惑うことがない。つまり、春の夜の闇は、人を惑わせるという闇の「理」にかなわないものなのだ、というわけである。この21番の歌には、かように機知的な趣向が凝らされている。

〔夜の梅を詠むことに關して〕

この歌は、古今集では次のように排列されている。

くらぶ山にてよめる

つらゆき

梅花にほふ春べはくらぶ山やみにこゆれどしるくぞ有りける

月夜に梅花ををりてと人のいひければ、をるとてよめる

みつね

月夜にはそれとも見えぬ梅花かをたづねてぞしるべかりける  
はるのよ梅花をよめる

春の夜のやみはあやなし梅花色こそ見えぬかやはかくるる

(古今集 春上 三九〇四一)

夜の花の香を詠むことが古今集時代の歌人たちが唐代の詩から学んだものであることは、すでに多くの指摘がある。ここに同じテーマの歌が三首並べられているということは、古今集の撰者たちもこのテーマに興味を覚え、様々に詠み合い、また賞翫していたことを示している。この歌は、そういう最新流行の新しいテーマを、機知的な趣向を凝らして詠んだものだったと言えよう。

【歌意】

春の夜の闇は（闇は人を惑わせるものだという）理にかなわないものだ。だって、梅の花の色はなるほど見えないけれども、香は隠れるだろうか。いやちつとも隠れずはつきりとわかるもの。

22としごとにあふとはすれど七夕のぬるよの数ぞすくなくかりける

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋上 一七九

【注】

〔あふとはすれど〕

「…とす」の「す」は、やや訳しにくいが、

我はもや安見児得たり皆人の得かてにすといふ安見児得たり（万葉集 卷二 九五）

夏の夜のふすかとすれば郭公なくひとこゑにあくるしのめ（古今集 夏 一五六）

などの「す」と同様、「思う」「考える」「感じる」というほどの意ととるべきであろう。当該の歌の場合は「…とす」に「は」が添加されているので、「逢うとは思うけれども」となる。

〔七夕のぬるよの数ぞすくなくかりける〕

この当時、

一年に一夜とおもへど七夕のあひみん秋の限りなきかな

（貫之集 四〇四）

まれにあふときく七夕も天河わたらぬ年もあらじとぞ思ふ

（同 六七〇）

など、七夕の逢瀬を永遠のものと見る歌いぶりがあった。それに対してこの22番の歌は

それとは逆の物言いをしたものであり、相当に機知的な新しい趣向の歌として認められたものと思われる。また、この歌の結句「すくなかりける」が係り結びの使用とも相俟つて、相当に大仰な表現になっている——おどけているという方が適切かもしれないが——のも機知的な印象を強くしている。

〔21番の歌との対応関係について〕

古今集風の機知的な作りになっているという共通点に着目して両首は対にされたか。

【歌意】

毎年逢うとは思うけれども、七夕が共寝をする夜の数といたら少ないよねえ。

23はるたてば若なつまむとしめし墅にきのふもけふも雪はふりつゝ

【校訂】底本初句「はるたては」。新撰和歌諸本では「春たてば」と「あすからは」が混在するが、24番の歌との関係から、新撰和歌の本文としては「春たてば」がもとの形であつたと考える。

【他出文献】万葉集 卷八 一四二七・新古今集 春上 一一・古今和歌六帖 第一 四三・赤人集 二・和漢朗詠集 三六など。

【注】

〔万葉集歌との関係〕

当該の歌とほぼ同じ歌が万葉集卷八（一四二七）に見える。

従明日者 春菜将採跡 標之野尔 昨日毛今日母 雪波布利管

初句は「あすよりは」あるいは「あすからは」としか訓めないかと思われるが、古今和歌六帖・赤人集・和漢朗詠集等、この歌を収める平安期の諸歌集では、初句は伝本により「はるたたば」と「あすからは」が混在する。

「はるたたば」の歌は、万葉集一四二七番の歌が万葉集を離れて伝承されるうちに初句が改変されたものか、この歌が万葉集に収められた時点で既に存在した、初句を異にする歌がそのまま伝承されたものかのいずれかの可能性が高い。これらはいずれにしても、当該の歌が万葉集を離れて平安時代に歌い継がれていたことを示している。新撰和歌は当該の歌を万葉集の歌としてではなく、そうした平安時代の歌として収めたということになるう。

なお、「明日からは」の歌は、万葉集時代の歌がそのまま形を変えずに平安時代まで歌い継がれたものか、平安時代以降に万葉集本文を見て、万葉集の歌として広まったものか

のいずれかということになる。

「はるたてば」

新撰和歌諸本で初句を「はるたてば」とするものの多くは、「たたば」の異文を傍記する。これについてどのように考えれば良いだろうか。

先に記したように、当該の歌とほぼ同じ歌が平安期の歌集類にいくつか見られるが、それら諸本には「あすからは」もしくは「春たたば」とあり、初句を「春たてば」とするものは、新撰和歌以外には見られない。ならば、この歌は平安期以降「春たたば」という形で知られていた可能性が高いと思われる。そうすると、新撰和歌のもとの本文に「春たたば」とあったものが、書写の過程でわざわざ耳慣れない「春たてば」に改められるということは考えにくい。勘違い等で異伝が発生する可能性も低いし、仮に「た」が「多」の草書体で、「天」の草書体と紛らわしい字形になっていたとしても、むしろ紛らわしければ紛らわしいほど、耳に慣れている「春たたば」と認識するはずだからある。したがって、新撰和歌のもとの形は「春たてば」である可能性が高いものと考えられる。言い換えれば、「春たたば」という形で知られていた歌を、新撰和歌が「春たてば」に改めた上で収載した、というのが最もありうる推測だということである。

そこで次には、新撰和歌が「春たたば」を「春たてば」に改めた意味を考えておきたい。「春たたば」だと、野を「標め」た時点は明らかに冬である。そうして春を待ちこがれる心とはうらはらに雪が降り続き、なかなか若菜を摘む春にならない、という意に、一首は受け取られる。一方「春たてば」であると、立春になったので野を「しめ」たのにもかかわらず連日雪が降り続く、ということになる。つまり、前者だと詠歌主体ははまだ冬と感じているのであり、後者ではもう春なのにと感じている、という違いが生じるのである。さて、若菜摘みも待ち遠しいのに雪が降り続いてまだ春にならないとうう前者は、自然界の様子を観察して春の到来を判断しているといえる。それに対して、もう春は来ているのに雪が降っているとすると後者は、自然ではなく立春という暦をもって季節を判断しているわけである。そのような季節の到来に対する態度の違いとは、三番の歌の注でも述べたように、万葉集と古今集の自然観の違いであった。以上のことからすなわち、新撰和歌はこの23番の歌を選ぶにあたって、古今集的な季節感と合致する形に本文を改変したのだと考える。

「しめしのに」

「しむ」は占有し目印を付けること。万葉集では名詞の「標」を含め、多数用いられる



が、平安期以後の歌には類型的な表現を除き、あまり用いられることはない。すなわち平安期において既に古風なことばであつたらしい。

【歌意】

春になったので若菜を摘もうと目印しめをつけた野に、昨日も今日も雪は降り続けている。

24木の間よりおちくる月の影見れば心づくしの秋はきにけり

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋上 一八四

【注】

〔おちくる月の影〕

第二句目は、新撰和歌の諸伝本では、永青文庫本・岩瀬文庫本等が「もりくる」とする。古今集でも「落つ」と「漏る」の本文が対立する。いずれとも決しがたいので、底本のままとした。なお、「落つ」であると、月の入りを意味するのでここにはそぐわないとする。僻案抄等の説がある。しかしそれは「月」に対して「落つ」が用いられた場合のことであり、該当の歌に詠まれた「月影」であれば、

あきのよのつきのかげこそこのまよりおつればきぬとみえわたりけれ

（新撰万葉 三六一）

八月十五夜、人の家に蓮あり、木のはうかぶ、つきかげおちたり、男をんなこころごころにあそぶ、すだれのとに居て、ものがたりするもあり（順集 二八八詞書）

等の和文の他に、

銀漢雪晴褰翠幕、清淮月影落金卮。

（劉禹錫「罷郡歸洛途次山陽、留辭郭中丞使君」）

などの漢籍にも類似の表現が見られるもので、疑とするにあたらぬ。

〔こころづくしの秋〕

秋は悲しいという観念は、通説の通り中国詩文より学んだもの。この歌で問題となるのは、木の葉の間から落ちてくる月影を見ることがなぜ「こころづくしの秋」の到来を感じる契機となるのか、ということである。この点については目下成案を持たないが、あるいは、夏の間生い茂っていた葉からみずみずしさが失われ落葉が始まることで木の間に隙間が生じ、そこから落ちてくる月の光に気づいたとき秋の到来を感じたのではないか、と今は想像しておく。時代は下るが、

夏くればしげき木のまにかくろへてしるき小倉の山のはの月（為家集 四一一）

夏やまのしげき木のまをもる月の心づくしぞあきにまされる（拾藻鈔 八五）

のように、夏の生い茂った木の間を通りかねている月の光を詠む歌があり、また

喬木托危岫、積翠遶連岡。葉疏猶漏影、花少未流芳。：

（許敬宗 送劉散員同賦得陳思王詩山樹鬱蒼蒼）

など、葉が少ないことで影が透けて見える、という発想が中国詩などに見えるからである。

〔23番の歌との対応関係について〕

新撰和歌の配列からすれば、24番の歌は立秋の後しばらくしてから詠と見受けられる。そのような、「秋は来にけり」という表現を立秋から遠ざかった時期に用いている点に、この歌の特徴を考えたい。そしてそのように考えられるならば、立春のしばらく後に配された23番の歌の初句に、「春立」つという表現を選び取り、二首を対にしたのが、貫之の意図的な編纂によるものと考えられるではかろうか。

【歌意】

木の間から落ちてくる月の光を見ると、心をさまざまに尽くさせる秋は来たのだなあ。

25春日野の飛火の墅守いでゝみよ今いく日ありて若なつみてん

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春上 一八

【注】

〔飛火〕

当該の歌の辞句通りに受け取れば、春日野のうちに「とぶひ」という地名があったということになる。おそらくその地名は、古今集の諸注が指摘するように、「廢河内国高安<sup>とぶひ</sup>烽、始置高見烽及大倭国春日烽、以通平城也」（続日本紀元明天皇和銅五年正月二十三日条）という出来事に由来するものであろう。なお、後の時代には、おそらくは同じ土地を指して「とぶひの」と称した例が確認できる（枕草子「野は」など）が、十世紀半ば以前には「とぶひ」と呼ばれていたものと考え、この歌の第二句を「とぶひののもり」の縮約とは見ない。

〔野守〕

「野守」は野の番人。野守がいるということは、新撰和歌23番の歌のように、若菜を他人に摘まれないための標しめがしてあることを意味している。その標をした人物が、警備を

任せてある野守に「いでてみよ」と命じているのである。

〔いでてみよ〕

「いでてみよ」とあるからには、野守は現在「家にばかり引き籠もつてゐる」（金子元臣『古今和歌集評釈』）と考えるべきであろう。さて、野の番人が家に籠もつていてもよいということは、いまだ野に若菜はなく、見張るべきものはない、ということの意味する。すなわちこの歌は若菜の生うるはるか以前から標をして、春を待望する人の心を詠んでいるのである。

〔若菜摘みてむ〕

結句の「摘みてむ」を日本古典文学大系『古今和歌集』が「つむだろう」という言い方で、つめるだろうという気持ちを表す」「結果的表現」として以来、この歌の下句を「見よ」の目的部分と見て「あと何日したら若菜を摘めるのか判断せよ」と命じているのだとする注釈が多い。けれども、「てむ」は、

梓弓おしてはるさめけふふりぬあすさへふらばわかみつみてむ

（古今集 春上 二〇）

ありと見てたのむぞかたきうつせみの世をばなしとや思ひなしてむ

（古今集 物名 四四三）

よそにしてこふればくるしいれひものおなじ心にいざむすびてむ

（古今集 恋一 五四一）

世にふればうさこそまされみよしのいはのかけみちふみならしてむ

（古今集雑下 951）

など、いずれも、現代語の「だろう」に相当する単純な推量ではなく、遂行にはいささかの思い切りが必要であるが、それを押し切ってやろう、という詠歌主体の強い意志を表すものとして用いられている。ならばこの歌の「てむ」も同様に、「一日でも早く若菜を摘みたい、少し早いかも知れないが摘んでしまおう」という詠歌主体の意志を表しているのが見るのが適当ではないか。そうであれば、下句は「出でて見よ」の目的なのではなく、野守に対して、早く若菜を摘みたいと早く気持ちを投げかけたものと考えられよう。すなわち本居宣長が「此春日野ノ飛火野ノ番人ヨ 出テヤウスヲ見テクレイ ソチハ此野ニ住デ居レバ タイガイ知レルデアラウガ マウイクカバカリアツテカラ 若菜ヲツミニハ来ウゾ」（古今集遠鏡）と訳したように考えるのである。そのように考えた方が、「出でて見よ」の項で述べた、春を待望する人の心とも整合する。

【歌意】

春日野の飛火の番人よ、（野に）出て（若菜の状態を）見よ。（野守よ）あと何日たつて若菜を摘もうか。

26うつろはむことだにおしき秋萩におれぬ斗ぬイもをける白露

【校訂】底本三・四句「秋萩のおれる斗ぬイに」。新撰和歌諸本で「おれぬばかりも」と「おれぬばかりに」が混在するが、「秋萩におれぬばかりに」では、格助詞「に」の重複が不適切と見て、「ばかりも」の方をとる。

【他出文献】拾遺和歌集 秋 一八三・古今和歌六帖 三六五七・和漢朗詠集 二八四・

伊勢集 九六・三十六人撰 三八・和歌体十種 四四 など。

【注】

〔秋萩〕

万葉集以来、「秋萩」といえば葉ではなく花のことを想起したことは、次に示す通りである。

明日香川行き見る岡の秋萩は今日降る雨に散りか過ぎなむ

（万葉集 卷八 一五五七）

春されば霞隠りて見えざりし秋萩咲きぬ折りてかざさむ （同 卷十 二一〇五）

当該の歌の「秋萩」も葉ではなく花の方を指すものとして受け取りたい。

〔折れぬばかりも置ける白露〕

秋萩と露との取り合わせは、

秋萩に置ける白露朝な朝な玉としそ見る置ける白露 （万葉集 卷十 二一六八）

秋萩の上に白露置くごとに見つつそ偲ふ君が姿を （同 卷十 二二五九）

など、万葉集以来愛好された素材であった。また、秋萩に露がおいて枝もたわんでしまう、ということも、

秋萩の枝もとををに置く露の消なば消ぬとも色に出でめやも

（万葉集 卷八 一五九五）

秋萩の枝もとををに露霜置き寒くも時はなりにけるかも （同 卷十 二一七〇）

など、早くから歌に詠まれている。ただしそれらは、露の属性——美しさや冷たさ、はかなさなど——に焦点を合わせて詠むものである。それに対してこの新撰和歌の歌は、萩の枝が折れそうなくらいに置いた、露の多さそのものを描いたものであり、そうした例は万

葉集には確認できない。つまりこの歌は、古くからの素材をそれまでになかった新しい趣向で歌ったものであったと考えられる。

〔25番の歌との対応関係について〕

26番の歌は、第四句と第五句の句頭に「お」の音が繰り返されて印象的である。そのことは25番の歌が、

かすがののどぶひのもりいでてみよいまいくかありてわかなくつみてん

と「い」の音を繰り返していることと類似している。新撰和歌13・14番の歌と同様、その点でこの二首は対偶にされたものと思われる。なお、25番の歌は「の」音も重なるが、「の」が語頭にないために、さほど印象的ではない。

なお、25番の歌の若菜と、26番の歌の秋萩の対応も意識されている可能性があるだろう。

### 【歌意】

(花の色が)かわってしまふことさえ残念な秋萩なのに、(それが)折れてしまいそうなほどに白露であるよ。

27 梓弓おして春雨けふふりぬあすさへふらば若なつみてん

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春上 二〇

【注】

〔梓弓おして春雨〕

「梓弓押してはる(弓をぐつと押して弦をぴんと張る)」「までは、掛詞を用いて「はる、さめ」を起こす序。「おして」が「降る」を副詞的に修飾していると解する説もあるが、「おして…降る」という言葉続きの例は他に確認できない。そして、そのように解釈する場合は「おして」を「押して」の意ではなく、およそ「おしなべて」のように理解する。その根拠として、

春日山おしててらせるこの月は妹が庭にもさやくありけり

(万葉集 卷七 一〇七四)

の「おして」が「おしなべて・あまねく」と解釈できるのに倣うという説明がなされる。なるほど、月の光に関しては、

我がやどに月おし照れりほととぎす心あらば今夜来鳴きとよもせ

(万葉集 卷八 一四八〇)

窓越しに月おし照りてあしひきのあらし吹く夜は君をしそ思ふ

(万葉集 卷十一 二六七九)

のように、「おし照る」という類似の表現も見られ、それらを含めて「おす」を「おしなべて」と解することも可能だろう。けれども、このような、月光が照ることに関わるもの以外の「おす」・「おして」で、「おしなべて」と解する可能性のある例は、今のところ管見に入らない。そうすると、「おして」が、一般的に「おしなべて」という意味でもって使用し得る語ではなく、「おし照る」「おして照る」という言い方が、一つの語として「あまねく照る」というほどの意味で用いられていた、というふうに見えるべきではないか。また、当該の一首の文脈からも「おしなべて」ととる必然性は考えにくい。以上のことから本稿では、「おして」を「降る」に関わらぬものとして解釈する。

〔春雨と若菜摘み〕

春の雨は、

はるさめのいろはあをくもみえなくにのべのみどりをいかでそむらむ

(新撰万葉 下巻 二五五)

わがせこが衣はるさめふるごとにのべのみどりぞいろまさりける

(古今集 春上 二五 貫之)

のように、それが降るたびに野辺のみどり、すなわち若芽の成長が促されていくものもある。ここではそのような春雨の属性が歌われているものと考ええる。なお、「てむ」に関しては25番歌【注】参照

【歌意】

梓弓を(ぐっと)押して(弦をぴんと)張る、(ということばと同じ音を持つ)春雨が今日降った。(これで若菜も芽吹くはずだ。)明日も降ったなら(さらに芽吹いた若菜が成長するだろうから、そしたらその)若菜を摘んでやろう。

28よをさむみ衣かりがね鳴なへに萩の下葉も色づきにけり

【校訂】底本結句「うつろひにけり」。新撰和歌諸本で底本と同じ形の本文は作者名の記載を有する、すなわち古今集等の影響を受けた可能性の高い元禄版本の系統のみである。

既に指摘されているように古今集の多数の諸本は「色づきにけり」であるが、俊成本・定家本の系統の本が「うつろひにけり」とする。これに影響されて底本のような異文が生じ

たものと思われる。

【他出文献】古今集 秋上 二二一

【注】

〔夜を寒み衣かりがね〕

本稿では「夜を寒み衣かり、（夜が寒いので衣を借り）」までを、掛詞を用いて「かりがね」を起こす序と考える。これに関して古今集の諸注では、「かり」のみを掛詞とするものと「かりかね」までを掛詞とするものがあり、いずれともいまだ決していないようである。ただ、「かりかね」までを掛詞と解した場合、「かね」が「寒み」と直接の呼応関係にないことから「夜が寒いので衣を借りようとして、借りることができず」というように、「かり」と「かね」の間に意味的な区切れがあることになる。序詞を成立させるために用いられた掛詞の中途部分に、このような区切れを含んでしまうのは他に例のない、やや不自然なものであるように思う。また、序の文脈を「なく」まで及ぼして、「夜が寒いので衣を借りようとして借りかねて泣く」と解する説もあるが、

都いでて今日みかの原いづみ河かは風さむし衣かせ山（古今集 羈旅 四〇八）

秋風をさむみにはあらずかへしきてこひなぐさめんころもかせきみ

（古今和歌六帖 三二九七）

などのように、衣を借りるといふ行為の原因として寒さが歌われるのが通常であり、この歌に限って、わざわざ句を隔てた「泣く」ことの原因として寒さを捉えることには無理があるように思われる。

〔寒さと雁の声と紅葉〕

今朝の朝明雁が音寒く聞きしなへ野辺の浅茅そ色付きにける

（万葉集 卷八 一五四〇）

雲の上に鳴きつる雁の寒きなへ萩の下葉はもみちぬるかも

（万葉集 卷八 一五七五）

など、寒さと雁の鳴き声と、色づく紅葉とを「なへ（に）」という語で接続するパターンの歌がはやくから存した。この歌もその一つのバリエーションであり、「くをくみ」や「なへに」という古くからの表現と相まって、古風な歌と感ぜられていたらしい。（ちなみに古今集の左注には、ある人の説としてこの歌を人麻呂の詠と記す。）

〔27番の歌との対応関係について〕

両歌とも掛詞を用いた序詞で仕立てられた詠である。さらに、前項で述べた通り28番

の歌の掛詞が「かり」のみであるならば、二句目の四、五音目が掛詞になっているという点で言葉のリズムも共通することになる——逆にこの点を重視するならば、新撰和歌編者紀貫之は、28番歌の掛詞を「かり」のみと理解していた、といえるのではないか——。また加うるに、28番歌は古風な歌であることを述べたが、27番の歌も、ゆつたりとした序詞の調べがやはり古風なものとして感じられていたという可能性があるだろう。

【歌意】

夜が寒いので衣を借り、（ということばと同じ音を持つ）雁がねが鳴くのとともに、萩の下葉も色づいたよ。

29君がため春の墅にいでゝ若菜つむ我衣手に雪はふりつゝ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春上 二一

【注】

〔君がため春の野に出でて若菜摘む〕

「君がため」に、ある場所であるものを摘む自分の衣服がある状態になる、という構造の歌は、

君がため浮沼の池の菱摘むと我が染めし袖濡れにけるかも

（万葉集 卷七 一二四九）

君がため山田の沢にゑぐ摘むと雪消の水に裳の裾濡れぬ （同 卷十 一八三九）

のごとく、はやく万葉集の時代からしばしば見られるものである。この歌はそれらの発想をそのまま利用したものと考えられる。

〔雪は降りつつ〕

結句の「雪はふりつつ」は、

梅の花散らくはいづくしかすがにこの城の山に雪は降りつつ

（万葉集 卷五 八二三）

み園生の竹の林にうぐひすはしば鳴きにしを雪は降りつつ（同 卷十九 四二八六）

など万葉集に七例が見られる。いずれも春先の、冬の名残としての雪を表現したものである。古今集でも、

春霞たてるやいづこみよしののよしのの山に雪はふりつつ （古今集 春上 三）

梅がえにきあまるうぐひすはるかけてなけどもいまだ雪はふりつつ （同 五）



のように、同じ表現を用いた和歌が見られ、結句を「雪はふりつつ」とする和歌は、万葉以来の伝統的なものであり、古今集の時代にもそのまま引き継がれたものであったことがわかる。

【歌意】

あなたのために春の野に出かけて若菜を摘む私の袖に（冬の名残の）雪が降りしきっている。

30わがために来る秋にしもあらなくに虫の音きけばまづぞ悲しき

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋上 一八六

【注】

「我がために来る秋にしもあらなくに」

「ために」は、ここでは前歌「君がため」と同様、「」を目的として」の意。

物ごとに秋ぞかなしきもみぢつつうつろひゆくをかぎりと思へば

（古今集 秋上 一八七）

のように、秋は悲しい季節として歌われる。そのような秋が「我」を目的としてやって来るのならば、なるほど悲しい気持ちになっても不思議はない、けれど、秋は「我」を目的として来るのではない。だからそんなに悲しくならないはずなのに、の意。

「まづぞ悲しき」

「まづ」は真つ先に。「まづ」に続いて心情を表す形容詞が用いられた場合、

忘れなむと思ふ心のつくからに有りしよりけにまづぞこひしき

（古今集 恋四 七一八）

ふすからにまづぞわびしき郭公なきもはてぬにあくるよなれば

（後撰集 夏 一八一）

などのように、他の感情よりも先に、というほどの意味で用いられる。

「29番の歌との対応関係について」

両首は初句の「君がため」と「我がために」との類似で対にされているものと思われる。

なお、29番の歌は『古今和歌集打聴』以来、漢詩の表現との関連が取りざたされてきたものである。また、「我がために」季節がやってくる、という表現も、たとえば「春風先発苑中梅、桜杏桃梨次第開。薺花榆莢深村裏、亦道春風為我来。」（白楽天「春風」）

など漢詩に例がある。そもそも「秋は悲しい」という発想自体、中国文学に由来するものであった。このようにこの歌は、一首全体が漢詩風の詩想で仕立てられている。一方、29番の歌は【注】の項に記したように、万葉風の歌として認められる。こうした万葉と漢詩の風を意識してこの二首は配列されたという可能性もある。（同様の対応関係はたとえば93・94番にも見られる。）

【歌意】

（悲しい秋は）私を目的として来る秋というわけでもないのに、虫の声を聞くと（どんな気持ちを感じるよりも）真っ先に悲しい気持ちになる。

31春日野の若なつみにや白妙の袖ふりはへて人の行らむ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春上 二二二

【注】

〔春日野の若菜〕

春日野での若菜摘みは、

内侍のかみの右大将ふぢはらの朝臣の四十賀しける時に、四季のゑか

けるうしろの屏風にかきたりけるうた

かすがのにわかになつみつよろづ世をいはふ心は神ぞしるらむ

（古今集 賀 三五七）

東三条の宮す所の御賀を中務宮したまふに、屏風にわかになつみたるところ

かすがののわかなたねはのこしてむちとせのはるもわれぞつむべき

（伊勢集 二〇四）

など、屏風の題材にも好んで取り上げられたものである。この歌も「白妙の」袖を振る人の姿と相まって、一幅の絵の場面ともとりうる情景を詠んでいる。

〔白妙の袖〕

この句は「ふりはへて」を引き起こす序であるが、通説のように、いわゆる有心の序として真っ白な袖を振る人の姿を彷彿させるものと思われる。なお「白妙の」は白栲の材料である「藤」と同音の藤江にかかる場合（万葉集 卷十五 三六〇七等）を除けば、波、雲等白いものにかかる枕詞として用いられている。したがってこの枕詞を用いたときには、白という映像的なイメージを意識していたものと考えられる。

「ふりはへて」

「ふりはへて」は、

師氏朝臣のかりして家のまへよりまかりけるをききて

白雪のふりはへてこそとはざらめとくるたよりをすぐさざらん

(後撰集 冬 四八〇)

のように、(それを目的に)わざわざ、の意で用いられる。この歌では、若菜を摘むということのために、京都からわざわざ奈良の春日野まで出かけることをいう。

【歌意】

春日野の若菜を摘みに、真っ白な袖を振りながら、わざわざ人は(古里である奈良まで)でかけているのであろうか。

32秋の墅に道もまどひぬ松むしの声するかたに宿やかからまし

【校訂】底本二句「道もまかひぬ」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】古今集 秋上 二〇一

【注】

〔秋の野〕

秋の野で野遊びをし、そのまま宿をするといった趣向の歌は、

是貞のみこの家の歌合のうた

秋ののにやどりはすべしをみなへし名をむつまじみたびならなくに

(古今集 秋上 二二八)

など、歌合に詠まれることもあるが、屏風の歌として詠まれることも多い。ことに新撰和

歌の編者紀貫之には、

おなじ八年二月うちの御屏風のれう廿首(こたかがり

かりにくるわれとはしらで秋ののになく松虫の声をきくかな (貫之集 五四一)

(延喜六年つきなみの屏風八帖がれうのうた四十五首、せ

じにてこれをたてまつる廿首) こたかがり

秋の野にかりぞ暮れぬる女郎花今夜ばかりの宿はかさなん (貫之集 一五)

など、月次屏風の小鷹狩りの絵につけるために、この趣向で詠んだ例が複数確認できる。

〔松虫〕

松虫は単なる秋の景物としてではなく、

秋ののに人松虫のこゑすなり我かとゆきていざとぶらはむ（古今集 秋上 二〇二）  
のように、人を待つ女の姿を思わせるものとして詠まれることが多い。この歌も同様である。

〔31番の歌との対応関係について〕

31番の歌は、屏風に描かれた絵を歌にしたことを思わせるものであった。その歌と対にされていることから、この32番の歌も屏風の絵をイメージしながら鑑賞することを要求しているのではないかと仮定してみたい。そのように見るとき、両歌とも野を行く人の姿が描きだされており、想像される屏風絵の図柄が類似していることに気づく。このように、ほぼ同じ図柄の絵に添えられる類の春秋の歌としてこの二首は対にされているのではないだろうか。

なお、32番の歌に描かれた人物は、（人を待つ）松虫の宿を借ろう、というところから明らかに男性であることがわかるが、31番の歌の人物については、これを女性と想定する説が有る（窪田空穂『古今和歌集評釈』・西下経一『古今和歌集新解』等）。そうであれば、男女の対もここには意識されていることになるだろう。

【歌意】

秋の野で道も迷ってしまった。（人を待つという）松虫の声がするところで宿を借りようかしら。

33わがせこか衣はる雨ふるごとに墅べの緑ぞいる増りける

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春上 二五

【注】

〔我が背子が衣はる〕

私の夫の衣を洗って張る、の張ると、春雨の春との掛詞を用いた有心の序。なお「我が背子」と言う歌主は、自らの夫の着物の洗い張りをしているのだから、高級貴族の妻とは思われない。すなわち、一首は賤の暮らしを描いた、絵画的な趣向（この一首が絵画的な趣向をたたえているという点に関しては、片桐洋一氏（「紀貫之論序説」（文林六号））などの指摘がある。なお、次項に挙げた例を見れば、この歌ばかりでなく「色まさりけり」を結句においた春の歌は、屏風の詠として盛んに制作されたものであることも推測される。）と思われる。

〔色まさりける〕

当該の歌のように、結句に「色まさりけり」と置いて新緑の美しさを詠んだ例は、

寛平御時きさいの宮の歌合によめる 源むねゆきの朝臣

ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり（古今集 春上 二四）

延喜御時屏風に 凡河内躬恒

春雨のふりそめしより青柳の糸のみどりぞいるまさりける（新古今集 春上 六八）

屏風に

青柳のまゆにこまれる糸なれば春のくるにぞ色まさりける （兼輔集 一〇）

人の春の野にあそぶ所

春ふかく成りぬる時の野べみれば草の緑も色まさりけり （貫之集 一一六）

など、同時代に多く見いだすことができる。つまりこれも、この時代にしばしば見られる、同様の趣向を意識的に競って詠みあうたぐいの歌であったと考えられる。では、この歌は競い合いの中で何を工夫したのか。第一は、春の景を詠むのに、洗い張りという人事を取り合わせたところと思われるが、さらに、「わがせこ」という古風な言葉を用いることで、人事といってもなまなましい生活感のにじむ歌ではなく、まさに一幅の絵のようなイメージの歌となっている。そこが春の歌としての工夫なのであろう。

【歌意】

私の夫の衣を洗い張りする季節である春の雨が降るごとに、野辺の緑はますます鮮やかになっていくよ。

34日ぐらしの鳴山ざとの夕暮は風より外にとふ人もなし

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋上 二〇五

【注】

〔とふ人もなし〕

結句に「とふ人もなし」を置いて詠まれた歌は、

解き衣の思ひ乱れて恋ふれども何の故ぞととふ人もなし

（万葉集 卷十二 二一九六九 古今和歌六帖 三〇一六にも）

のように、万葉集の時代から確認ができる。（右の万葉の例は、現代語であれば「問ふ」と訳すべき」とふ」であり、当該の歌の「訪ねる」と訳すべき」とふ」とは異なっている

ような印象を受ける。しかし、古代語においてはいずれも「とふ」という一つの語であること、また、これが散文とは異なり、語の意味だけではなく口調をも重視していたはずの和歌に用いられたものであることを考えれば、両者は同一視してかまわないであろう。

これが、それ以後も、

くさもきもかれぬるふゆのやどなればゆきふみわけてとふひともなし

(新撰万葉 四二四)

おしなべて雪のふればわがやどのすぎを尋ねて問ふ人もなし

(後撰集 冬 四八九)

あさごとに見し宮こぢのたえぬれば事あやまりにとふ人もなし

(後撰集 雑四 一二五四)

などのように、とぎれることなく歌い継がれている。したがって当該の歌もこうした伝統の中で詠まれた一首ということになる。では、当該の歌の一首としての工夫はどこにあるのか。右に挙げた新撰万葉と後撰集の例では、いずれも「くば」という形で「とふ人も」ない原因を示している。これが「とふ人もなし」の歌を詠むときの一つのパターンとして存していたのだろう。それに対して当該の歌では、同じく「とふ人もなし」という句を用いながら、訪問する人のない原因を述べるのではなく、訪問する人のない寂しさそのものを「風よりほかに」ということで描き出しているところが新しかったものと思われる。なお、この工夫は優れたものとして広く受け入れられたようで、

やへむぐらしげきやどには夏虫の声より外に問ふ人もなし

(後撰集 夏 一九四 読人知らず)

春霞はかなくたちてわかるとも風より外に誰かとふべき

(後撰集 恋五 九二九 読人知らず)

など、類似の表現を用いた歌が詠まれることになる。

〔33番の歌との対応関係について〕

いずれも結句にパターン化した句を置きながら詠んだ歌である。このような歌の作り方が一つの詠みようとして新撰和歌の編者にも意識されていたことを示すのだろう。

#### 【歌意】

ひぐらしが鳴く山里の夕暮れは、風以外に訪れる人もない。

35 春霞たつをみすてゝ行雁は花なきさとに住やならへる

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春上 三一

【注】

〔春霞立つ〕

1番の歌の注に記したように、春霞の立つことは春の訪れを真つ先に知らせるものであった。したがって、その春霞が立つのを見捨てて北へ帰ると歌うことには、待ち望んでいた春がようやくやってきたところなのに、なぜまた、という驚きの気持ちを含んでいることになろう。

〔花なき里に住みやならへる〕

春の到来を知らせた霞は、その後、

やまざくらわが見にくれば春霞峰にもをにもたちかくしつ（古今集 春上 五一）

たれしかもとめてをりつる春霞たちかくすらむ山のさくらを（古今集 春上 五八）

のように、花を隠すものとなる。したがって、そのことを知っている者からすれば、早春の春霞は、そのまま美しい花を予想させるものということになる。ところが、雁はその春霞を見ながら、捨て置いて去っていく。それは、花のない里に住むのがならいになっているために、霞から美しい花を想起できないということなのだろうか、という内容を、あえて説明すれば、この歌は含んでいるものと思われる。なお、平安時代の人々は「花なき里」に中国北部辺塞の地をイメージしていたと言われる（小島憲之氏ほか）。なるほど、雁の帰って行く先にそのような土地をイメージしていたことは首肯すべきと思う。ただ、霞たちこのめもはるの雪ふれば花なきさとも花ぞちりける（古今集春上9）

のように、日本であっても花のない時期、あるいは場所のことを「花なき里」と言いうる。それをも含めて「花なき里」と表現しているのだと、この歌の場合は捉えることができるかもしれない。つまり、中国北方の辺土に住み慣れ、日本に来る時もわざわざ花のない時期を選んでばかりいて、それが習慣になっている雁、ということである。

【歌意】

（待ち望んでいた春にようやくなくなったことを知らせる）春霞が立つのを（目にしたのにもかわらずそれを）見捨てて（早くも北へ）行く雁は、（一年中）花のない里に住んで、それが習慣になっているのだろうか。（それで、もうじき美しい花の咲くこともしらずに去って行くのだろうか。）

36はるがすみ霞ていにしかりがねは今ぞ鳴なる秋霧のうへに

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋上 二一〇

【注】

「かすみていにし雁がね」

北へ帰る雁の姿が春霞にかすんだ状態で去っていった様子を言う。時代の下る例ではあるが、

山ざくらそらさへにほふ雲まよりかすみてのこるありあけの月

（新統後撰集 春中 一〇五）

が、春霞にかすんだ状態で空に浮かんでいる有明の月を描くのに「かすみて」という表現を用いるのと同じ。

「鳴くなる」

「なる」はいわゆる伝聞・推定。雁の声だけが聞こえる状態であって、その姿は霧のために見えないのである。つまり、一首は上の句で視覚にうったえ、下の句で聴覚にうったえる構成になっている。

「35番の歌との対偶について」

35番と36番の歌には、いずれも春霞と雁が詠まれている。つまり、素材の共通性をもって対にされたものと思われる。

【歌意】

春霞にかすんで去っていった（あの）雁は、今まさに（帰ってきて）鳴いている。秋霧の上。

37ことしより春しりそむる桜花ちるといふ事はならはざらん

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春上 四九

【注】

「散るといふことはならはざらん」

「ならふ」は、ほかの桜が散ることを常にしているのに倣う、の意。これと同じ発想で詠まれた歌に、

桜花ちらぬ松にもならはなむ色ことごとみにみつつ世をへん

（貫之集 一七四）



がある。

【歌意】

今年から春を知り始めた桜花よ。散るということは（他の桜に）倣わないでほしい。

38 秋萩の下葉色づく今日よりやひとりある人のいねがてにする

【校訂】底本三句「いまよりや」。新撰和歌諸本で「今よりや」と「今日よりや」が混在するが、本稿の原則に従って、古今集とは異なる方の本文をとる。また底本四句「ひとりぬる人の」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】古今集 秋上 二二〇

【注】

〔秋萩の下葉色づく〕

拾遺集所収の歌、

躬恒忠岑等にとひはべりける

伊衡朝臣

白露はうへよりおくをいかなればはぎのした葉のまづもみづらん

（拾遺集 秋 四〇八）

を引くまでもなく、萩は下葉から紅葉を始める、とされるものである。したがって「下葉が色づく」ということは、萩の葉が色づき始めたことをも意味する。

〔下葉色づく今日〕

この歌の三句が「今よりや」である古今集の形の場合、通説の通り、平安朝の和歌では「今」に連体修飾の語は上接しないようであるから、「色づく」は連体形ではなく終止形、すなわち、一首は二句切れの歌と考えられる。ところが、「今日」であれば、

袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ（古今集 春上 二）

など、連体修飾語を伴う例はいくらでも見いだせる。またそもそも『余材抄』が「下葉色づくといふを、句としてもよみ、又、今よりやとつづけても読べき歟」と疑問を呈したことは、語調の上から言えば、二句で切らずに下へ続くような印象を、この歌が本来持っていることを意味する。したがって、新撰和歌の「今日よりや」の形の歌は、句切れを持たないものとして理解される。あるいはこのような語調を優先する意味合いで、新撰和歌の編者はこの歌の句を改変したのかもしれない。

〔ひとりある人のいねがてにする〕

下句は、秋はただでさえ寂しい季節として歌われる。そのような秋の本格的な訪れを萩

の紅葉が知らせる。その日から秋と共に寂しさもいつそう深まり、独り寝を託つ人は冷たい秋の長夜を眠ることもできなくなると言っているものと理解される。また、

妻恋ふる鹿の涙や秋萩の下葉もみづる露となるらん  
(貫之集 四一七)

のように、萩には妻を恋うて鳴く鹿が取り合わされることが多い。そのような片恋のイメージもここに重ね合わせられる。つまり、萩の下葉が紅葉した、ということは、今日からは夜な夜な悲しい鹿の声が聞こえる、ということの意味するということである。だからこそ、ほかの木々の紅葉ではなく萩の紅葉こそが眠れぬ夜を予感させることになるというわけである。そのような意図が重ね合わされていると見てはじめて、「今日より」と歌った意が十全に生きてくるように思われる。

〔37番の歌との対応関係について〕

37番の歌の初句「今年より」と38番の歌の第三句「今日より」との類似に着目して対にされたものと思われる。

なお、【校訂】の項に記したように、38番の第三句は、もと古今集に「今」とあったものを新撰和歌で「今日」とあらためたものらしい。したがって、古今集を読み慣れた者であれば、三句を「今」と見誤ってしまう可能性がある（可能性、というよりも、そのよくな人が実際にいたからこそ新撰和歌に「今」という異文が発生したのである）。しかし、新撰和歌の編者としては、「今日」の方が「玄之又玄」（新撰和歌序）なのであるから、やはり「今日」として味わってもらいたい。そこで類似の「今年」という語を持つ歌と対にすることで「今日」に着目させる。そのような編纂上の意図も考えられるのではないか。

【歌意】

秋萩の下葉が色づく今日から、（妻を恋う鹿の鳴き声のために）独りでいる人は眠りがた  
い夜を過ごすのか。

39 桜花さきにけらしも足曳の山のかひよりみゆる白くも

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春上 五九

【注】

〔咲きにけらしも〕

底本は「けらしも」であるが、新撰和歌諸本で「けらしな」との異同が対立的に見られる。古今集では昭和切等が「けらしも」を伝えるが、おおかたの伝本は「けらしな」であ

る。したがってこれは、古今集で「けらしな」であったものを、新撰和歌が「けらしも」と改めたものという可能性が高い。さて、「けらしも」は周知のように万葉集で多用され、平安時代には「けらしな」と形を変えていった表現である。当該の歌には、「あしひきの」という古風な枕詞が用いられているが、これと雰囲気を整合させるために「けらしも」という古い形に改編したということであろうか。

〔白雲〕

当該の歌の作者である貫之には、

山の甲斐たなびきわたる白雲は遠き桜のみゆるなりけり

（貫之集 三二）

白雲と見えつるものをさくら花けふはちるとや色ことになる

（後撰集 春下 一一九 貫之）

のように、桜の遠望を白雲にたとえた歌がいくつか見られるが、同時代以前の作に類似の例は見いだしがたい。このことから、この表現は貫之の作り出した、新しい趣向と思われる。つまり、当該の歌は、新しい趣向を古い表現で仕立てたものなのである。

【歌意】

桜花が咲いたらしい。（その証拠に）アシヒキノ山峡から見える白雲であるよ。

40 秋の露うつしなればや水鳥の青葉の山もうつるひぬらん

【校訂】底本二句「うへしなればや」。新撰和歌諸本により改める。また底本四句は「青葉の山の」。新撰和歌諸本において四句には「の」と「も」の対立があるが、語法的に「の」は不自然と思われるので「も」の方をとる。なお、底本には「紅葉する秋はきけり水鳥の青葉の山の色付くみれば」という、古今和歌六帖 一四六八番の歌と同歌を傍記する。

【他出文献】万葉集 卷八 一五四三。ただし後述するように、当該の歌は、この万葉集歌（秋露者 移尔有家里 水鳥乃 青羽乃山能 色付見者）が伝承されたものではなく、あらたな発想を加えて改作されたものと思われる。古今和歌六帖にも、

しら露はうつしなりける水鳥のあをばの山の色づくみれば（古今和歌六帖 一六八）

しらつゆはうつしなりけりみづとりの青羽の山の色づくみれば（同 九二一）

の二首が見られる。

【注】

〔秋の露〕

秋の露は

白露の色はひとつをいかにして秋のこのはをちぢにそむらむ

(古今集 秋下 二五七)

あきのつゆいろいろごとにおけばこそ山のこのはのちくさなるらめ

(同 秋下 二五九)

などにみられるように、木々の葉を色づかせるものとして和歌に詠まれる。当該の歌でも同じ。ただし、新撰和歌の配列からすれば、当該の歌は、青葉の山がすっかり紅葉した様を描いているのではなく、秋になって色を変え始めた山を詠んだものであると理解される。

〔移し〕

「移し」は移し染めに用いる染料。露が木の葉を色づかせる、という和歌的表現を踏まえて、ならば、露は木々の木の葉を染める「移し」なのではないか、と言ったものである。

〔移しなればやくらん〕

古今集の時代の「…なればやくらん」という表現は、

梅花さきてののちの身なればやすき物とのみ人のいふらむ

(古今集 誹諧歌 一〇六六)

紅のしぐれなればやいそのかみふるたびごとにのべのそむらん (貫之集 三一六)

草のはにかかれる露の身なればや心うごくに涙おつらむ (大和物語 一三二段)

のように、「くらん」という現象が起きていることの理由を推測し「…なればや」という形で提示するものであるが、その理由はいずれも、梅が咲いた後の実のような身だから、とか、紅色の時雨だから、とか、草の葉にかかった露のような身だから、といった、言葉の上だけで成り立つ非現実的なものである。つまりこれは、言葉の上でだけなりたつ論理のおもしろさを狙った表現なのである。そのおもしろさ、興味のありかをあえて現代語訳に補って示すならば、「梅の花が咲いた後の実だともいうのか」「時雨が紅色をしているとでもいうのか」「我が身が草の葉にかかった露だともいうのか」というほどのことになろうか。当該の歌でも同様に、青葉の山という色を変えぬはずの山の色が移ろった原因を「秋の露が移し染めの染料だともいうのか」と示したものと思われる。

〔水鳥の〕

青にかかる枕詞。「水鳥の鳴の羽色の青馬を…」(万葉集 卷二十 四四九四)から、

その羽の色によって青にかけられていると考えられている。

〔青葉の山〕

もともと万葉集の時代に「青葉の山」が、どのような意味を持つ山として見られていたのかはわからないが、

(秋歌とてよみ侍りける)

前大僧正覚忠

ときはなるあをばの山も秋くれば色こそかへねさびしかりけり

(千載集 秋上 二七三)

ならの歌合に人にかはりて

雪ふればあをばの山もこがくれてときはのなをやけさはをるらん

(散木奇歌集 六七〇)

水とりのあをばの山も神無月しぐれにあへず色かはるらん

(堀河百首 九〇三 藤原仲実)

という後代の例を参考にすれば、平安時代には常緑の山と考えられていた可能性が高い。当該の歌もそのように見た方が一首のおもしろさが際立つ。

〔39番の歌との対応関係について〕

39番の歌は、桜のために山が雲がかかっているように見えると言い、40番の歌では青葉の山が色づいたことを言う。いずれも山を遠望して季節を感じる歌である。また、39番の歌は、「けらしも」や枕詞などの古い言葉を用いながら新しい趣向を詠んだ歌であった。そして40番の歌も、もと万葉集に由来する古歌を古今風の機知的な発想で作り替えたものと考えられる。その言葉のふるさと趣向の新しさという共通性も意識されたか。

【歌意】

秋の露は木々の木の葉を染める移し染めの染料だともいうのか、それで常緑の青葉の山も色を変えたのだろうか。

41みよしのゝ山辺にたてる桜花しら雲とのみあやまたれつつ

【校訂】底本二句「山辺にさける」、四句「雪かとのみそ」、結句「あやまたれける」。

いずれも新撰和歌諸本により改める。なお、古今集の本文は、「み吉野の山辺に咲ける桜花雪かとのみそあやまたれける」である(寛平御時后宮歌合は第二句「山に咲きたる」。

あとは古今に同じ)。これを新撰和歌が改変したものである。なお、後撰集詠人知らずの歌(一一七)に、「み吉野のよしの山の桜花白雲とのみ見えまがひつつ」がある。

この本文が新撰和歌の伝本に影響を与えたという可能性も否定しきれないが、古今の歌を、いわばさしおいて、後撰の歌の本文が混入したという可能性よりも、「よしのの山のさく

らは人まろが心にはくもかとのみなむおぼえける」(古今集仮名序)のような美意識でもって、吉野山の桜と雲との歌を詠んだ結果、後撰集歌と近い表現になったという可能性の方が高いと思われる。また、結句の「つつ」の類似に関しても、後で述べるように、山の桜を「白雲」にたとえた場合「つつ」が用いられることにはそれなりの必然がある。よって後撰集歌が新撰和歌伝本の書写に影響を及ぼしたとは考えなくてもよいだろう。

【他出文献】古今集 春上 六〇

【注】

〔古今集との歌句の相違について〕

この歌の第三句「桜花」について、古今集六〇番の歌のように「咲く」と言ったならばごくありふれた表現であるが、「立つ」と言うのは、類例のあまり見られない、やや特殊な表現である。ならば次には、新撰和歌がこの特殊な表現を用いた意図を求めなければならぬが、それについては、第四句の改変に伴うものとして説明ができるように思う。まず四句の「雪」を「白雲」にあらためたことについては、本論文の第二部第一章第一節にも述べたように、咲いている桜に見立てるものは雪ではなく雲であるべき、という編者紀貫之の規範意識によるものと考えられる。さて、そのようにして採用された「白雲」について見てみると、遠景の桜を比喻するものとして用いられるほかに、

人のむまのはなむけにてよめる　　きのつらゆき

をしむからこひしきものを白雲のたちなむのちはなに心地せむ

(古今集 離別 三七一)

友のあづまへまかりける時によめる　　よしみねのひでをか

白雲のこなたかなたに立ちわかれ心をぬさとくだくたびかな　　(同 三七九)

のなど、「たつ」という言葉を引き起こすための修辞としてもしばしば用いられていることがわかる。つまり「白雲」と「立つ」との結びつきは、この時代、相当に強固なものとして認識されていたわけである。ならば、次のような想定が成り立つ。すなわち、当該の歌で桜花についてわざわざ「咲く」を「立つ」にあらためたのは、山辺に立っている桜花だからこそ、立っている白雲に見間違えるのだ、との言葉遊びを成立させるための作為であったのではないかと。そのように考えた上で、結句を「つつ」への改変したことの意味を推測したい。もともとの歌で用いられていた「けり」であれば、桜の花を雪と見誤ったのは一度きりということになる。吉野山の桜があたかも雪であるかのように見えることに気づいたときの感動を表現したものといえよう。それが「つつ」となると、「あやまつ」

ということが何度も繰り返されることになる。山の眺望のあちこちに目を移すたびになんども同じ見誤りをするのである。なぜそのような表現をするのか。これも「雪」を「白雲」に改めたことに由来するのではないか。つまり、「白雲」は、

白雲のやへにかさなるをちにてもおもはむ人に心へだつな（古今集 離別 三八〇）  
などのように、「八重」という表現をされることがしばしばある。そのように幾重にも重なる白いかたまりが山にいくつも見えることで、その一つごとに桜と白雲とを見誤る、ということ表現しようとしたものと考えてはいかがか、ということである。後の例になるが、

白雲のやへたつ峰とみえつるはたかまの山の花ざかりかも（風雅集 春中 一五六）

山ざくら匂ふさかりはしら雲の八重たつみねと人やみるらん（堀川百首 一五八）

などのように、山桜が山のあちこちで花盛りになっている様子を白雲の八重に立つ様子にたとえた歌がある。そのような情景を表現しようとしての、貫之の作為と考えるわけである。

「やまへ」

万葉集においては「やまへ」という場所は、山のほとり、と理解してよいものと思われる。たとえば、万葉集で「越ゆ」という動詞の目的語となるのはあくまで「山」であり、「やまへ」を「越ゆ」と表すものは一例もないことからそれが肯われよう。ところが平安時代になると「山辺」は、

あづさゆみはるの山辺をこえくれば道もさりあへず花ぞちりける

（古今集 春下 一一五）

などのように、「越ゆ」の目的語となりうるものとなる。他にも

やまとのくににまかりける時、さほ山にきりのたてりけるを見てよめ  
る  
きのともり

たがための錦なればか秋ぎりのさほの山辺をたちかくすらむ

（古今集 秋下 二六五）

のように、明らかに山そのものと同じ場所を示して「山辺」と表現した例も見られる。つまり平安期になって「山辺」という言葉は、山そのものを含んで「山のあたり」とでも訳せる範囲を示すように変化したわけである。

【歌意】

吉野の山のあたりに立っている桜花は、（立っているというだけあって、山に立ちのぼ

る) 白雲じゃないかとばかり、あちらでもこちらでも見間違えるよ。

42しら雲の中にまぎれて行雁の声はとくもかくれざりけり

【校訂】 底本初句「白雪の」。新撰和歌諸本により改める。二句以降「中にまぎれて行雁の声はとくもかくれざりけり」。この傍記は、兼輔集(四八)の本文を注記したものである。

【他出文献】兼輔集 四八。二句以降にかなりの違いも見られるので、本文を提示する。

こないしのかみの賀みかどのせさせ給ふに、屏風のゑに雲ゐにかりのとべる所

白雲の中にまがひてゆく雁もこゑはかくれぬ物にざりける

【注】

「遠くもかくれざりけり」

「遠く隠れることもないのだなあ」の意。後の例であるが、

なつふかき山里なれどほととぎす声はしげくもきこえざりけり

(新続後撰集 夏 一九〇)

と同じ。

「二首の趣向について」

万葉集に

秋風に山飛び越ゆる雁がねの声遠ざかる雲隠るらし (万葉集 卷十 二一三六)

秋風に大和へ越ゆる雁がねはいや遠ざかる雲隠りつつ (同 卷十 二二二八)

という歌がある。このように類似した二首が確認できるということは、この類の歌が人口に膾炙していたことを示しているだろう。たとえば、

巫部麻蘇娘子の雁がねの歌一首

誰聞きつこゆ鳴き渡る雁がねの妻呼ぶ声のともしくもあるを

大伴家持の和ふる歌一首

聞きつやと妹が問はせる雁がねはまことも遠く雲隠るなり

(万葉集 卷八 一五六二・一五六三)

という贈答で家持の返歌に雁の声が「まことも遠く」と言っているのは、娘子の歌の「羨し」を「乏し」と意図的にずらした結果の表現であろうが、結句を「雲隠るなり」としたのは、今示した類の歌をふまえたものと思われる。そもそもこの贈答は万葉集 卷十一



九七六・一九七七番の贈答をふまえたものであるが、それも含めて、周知の歌々を縦横に取り込むことで成立させたやりとりなのである。このように、万葉集二一三六番の類の歌は、万葉第四期に、人々に知られていたと思われるのであるが、平安時代でも事情は同様である。

あき風に山とびこゆるかりがねのいやとほざかる雲がくれつつ

(古今和歌六帖 一〇八)

あきかぜにやまとびこゆるかりがねのこゑとほざかるくもかくるらし

(家持集 一〇七)

秋かぜに山とびこゆるかりがねのいやとほざかり雲がくれつつ

(古今和歌六帖 四三七六 新古今集 四九八にも人丸として入集)

というように、広く伝承されている様子が確認できる。さて、これらの歌は、雲の中へ遠く飛び去る雁と、遠ざかっていく鳴き声とを詠んだものである。このような歌の、いわばもじりとして、雲の中へ飛び去っていく雁と、それに反して明瞭に聞こえる鳴き声とを歌ったのが、当該の新撰和歌の歌なのではないか。またこの歌に、白雲に「まぎれて」行く雁の声が「隠れ」ない、という言葉遊びがなされていることもいうまでもない。

なお、新撰和歌の歌は、兼輔集の歌を改変したものと思われるが、改変の結果、兼輔集の本文では薄かった万葉伝承歌のもじりという性質が、「遠く」という言葉が加えられたことで浮かび上がってくる。そのような諧謔味を増すための改変であったのではなからうか。

〔41番の歌との対応関係について〕

この二首のいずれにも「白雲」という共通の素材が詠み込まれていること。また、どちらも言葉の語義の類字や両義性を利用した言葉遊び、すなわち諧謔を意図して詠まれた歌になっていることが共通する。

【歌意】

白雲の中に紛れて（飛んで）行く雁の声は、（はっきりと聞こえて、「紛れる」という見た目とは裏腹に）遠く隠れたりもしないのだなあ。

43 山高み雲井にみゆる桜花心のゆきておらぬ日ぞなき

【校訂】なし

【他出文献】古今集 賀 三五八

【注】  
〔山高み雲居にみゆる桜花〕

初句はいわゆるミ語法を用いた句であるが、周知のようにミ語法は万葉集において盛んに用いられたものであり、また「山高み」という句自体、万葉集中に十一例見られる、いわば古くからの常套的表現であったことが知られる。また、「雲居にみゆ」も万葉集に八例用いられることから、これも同様に伝統的な和歌表現であったことがわかる。

〔下の句の趣向について〕

この歌の眼目は、遙か高い山の、容易には近づけぬ桜の花を提示し、しかし心はそこに出かけていって毎日のように手折っている、というところにある。このような、心だけが花のもとに出かける、という趣向は、他にあまり例のない、相当に斬新なものであったと思われる。この歌は家集に収められていることから躬恒の作と考えられるが、あるいは躬恒が貫之の、

ひえにのぼりてかへりまうできてよめる

山たかみみつわがこしさくら花風は心にまかすべらなり（古今集 春下 八七）  
を意識し、これをもじる形で詠作した、ということなのかもしれない。

【歌意】

山が高く雲のあたりにみえる桜花（であるが）心が出かけて（その花を）折らない日はない。

44 しら雲にはね打かはし飛雁の影さへみゆる秋のよの月

【校訂】 底本四句「数さへみゆる」。松平文庫本、内閣文庫本等により改める。詳細は

【注】の項に述べる。

【他出文献】 古今集 秋上 一九一

【注】

〔白雲に羽打ちかはし〕

古今集の諸注で、上の句は、雁の羽が雲と交わるほどの高みで飛んでいる様子と言うとする説と、雁行しながら飛ぶ雁たちの羽が互いに重なって見える様子を言うとする説とがある。さて、当該の歌は、

天雲に羽打ち付けて飛ぶたづのたづたづしかも君しまさねば

（万葉集 卷十一 二四九〇 古今和歌六帖 四三五〇にも）

と上の句が類似しており、あるいはこの万葉集歌を意識したものとも思われるが、この万葉集の歌では明らかに雲と鶴の羽が交わる様を歌っている。このことを重視するならば、前者の説にも幾分かの説得性は認められる。しかし、「かはす」という動詞は、「袖をかはす」「もの言ひかはす」などのように、本来同質のものを交差させることを言うのであって、雁の羽と白雲という異質のものが交わることを表現しているにとるのには、やはり躊躇がある。またたとえば、源氏物語横笛巻に、「月さし出でて曇りなき空に、羽うちかはす雁がねも、列を離れぬ、うらやましく聞きたまふらむかし。」という表現があり、また、兵部卿宮が髭黒の妻となつてしまった玉鬘に寄せた歌にも、

深山木に羽うちかはしひる鳥のまたなくねたき春にもあるかな（源氏物語 真木柱）と、ぴったりと寄り添う鳥の表現として「羽うちかはす」を用いた例が見られる。横笛の例などは当該の歌を引いたものと思われ、少なくとも源氏物語の作者は「羽うちかはす」を、並んで飛ぶ雁の羽の交差と考えていたようである。こうしたことからも、当該の歌の上の句は、「白雲の高さで羽をさし交わしながら飛ぶ雁」という意味で理解すべきかと思われる。

〔下の句の趣向について〕

飛ぶ雁と雲とを取り合わせて歌を詠む場合、万葉集以来、

ひさかたの雨間も置かず雲隠り鳴きそ行くなる早稲田雁がね

（万葉集 卷八 一五六六）

我がやどに鳴きし雁がね雲の上に今夜鳴くなり国へかも行く

（万葉集 卷十 二二一三〇）

のごとく、雲に隠れて姿は見えないけれども、その声ははっきりと聞こえる、という趣向で一首を仕立てるのが通常であった。古今集の時代になつても、たとえば新撰和歌42番の歌のように、同じ趣旨の歌が詠まれる。また、雲のない、月のある夜空の場合であつても、

さ夜中と夜はふけぬらし雁が音の聞こゆる空を月渡る見ゆ

（万葉集 卷九 一七〇一・古今集 秋上 一九二にも）

この夜らはさ夜ふけぬらし雁が音の聞こゆる空ゆ月立ち渡る

（万葉集 卷十 二二二四）

のように、雁はやはりその声が歌に取り上げられるものであった。したがって、当該の歌の場合、上の句までを目に（耳に）した者は、かなりの確率で雁の声を予想したものと想

像される。その予想を裏切る形で、雁の姿がくつきりと見える、という光景を歌う点でこの歌は享受者に新鮮な驚きをもたらしたものと想像される。

〔影さへ見ゆる〕

「影さへ見ゆ」という言い方は、古今集の仮名序に注記されていることで知られる万葉集の、

安積香山影さへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はなくに

(万葉集 卷十六 三八〇七)

との関連を思わせるのであるが、この安積香山の歌の場合「影さへみゆる」というのは、その水の澄み切っていることを表現する、というのが通説のようである。そう思ってみれば、

延喜御時、秋歌めしありければたてまつりける 　つらゆき

秋の月ひかりさやけみもみぢばのおつる影さへ見えわたるかな

(後撰集 秋 四三四)

にしても、月光が澄み切ってさやかであるからこそ、落葉の「影さへ」見えるのである。また、「さへ」は用いられぬものの、

あふさかの関のし水に影見えて今やひくらんもち月のこま (拾遺集 秋 一七〇)

も、関の「清水」の清らかなさまを読み取るべきことはいうまでもない。すなわち、当該の歌の四、五句は雁の姿よりもむしろ秋の夜の月の光の清らかさを強調した表現なのではないか(『俊頼髓脳』はこの歌について「月はあくよむをめできことにすれば、此歌こそよき歌なめれ」と言う)。ところで、当該の歌の第四句には、新撰和歌諸本間で「影さへ」と「数さへ」の対立が見られる。古今集でも、定家本の系統は「数」であるが、元永本・筋切・基俊本・六条家系統の諸本は「影」を伝える。さて、「影」が見える、とするのに比較して「数」とした場合は、微細なところまでくつきりと見えること、つまり月光の澄み切った明るさをより強調した言い方となるのではないか。では、「影」と「数」とではいずれが本来の形なのか。一般的に言って人は次第に過激な表現に傾きがちであること、および、「数」が「見ゆ」という言い方の確かな例が新撰和歌以前に確認しがたいことを考慮すれば、もと「影」とあったものが、書写の過程でいつしか「数」に改められた、という可能性の方がいくぶんか高いように思われる。

〔43番の歌との対応関係について〕

双方に「雲」「見ゆ」という共通の単語、また「日」と「月」という対になる言葉が用

いられていることが、まずは指摘できる。さらに、それぞれの歌の【注】の項で述べたように、いずれも古くからしばしば使われてきた常套的表現を用いて歌を始めながら、下の句で意外な展開をみせる、やや奇をてらったところのある作風になっている。そのような歌作りの趣味の共通性も、ここに読み取ってよいのではないか。

【歌意】

白雲（のいるような高み）に（おいて）羽を互いに打ち交わしながら飛ぶ雁の姿までが（はつきりと）見える（ほどに明るくさやかな）秋の夜の月よ。

45やま桜わがみにくれば春霞みねにも尾にも立かくしつゝ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春上 五一

【注】

〔立ち隠しつゝ〕

「つゝ」は同じ動作が時間の流れの中で何度も繰り返されることを示す場合と、あちこちで同時に同じ動作がなされることを示す場合とがあるが、この歌の場合は後者と考えられる。

【歌意】

山桜を私が見に来ると、春霞が峯にも尾根にも立って（桜を）隠している。

46たが為のにしきなればか秋ぎりのさほの山辺を立かくすらん

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋下 二六五

【注】

〔立ちかくすらん〕

「たち隠す」の「たち」は「錦」との縁で「裁つ」の意をおわせる。ただし、たとえば

秋ぎりの峯にもをにもたつ山はもみぢの錦たまらざりけり

（拾遺集 秋 二一一 能宣）

ほどには「錦」と「裁つ」の関係はあからさまでなく、かすかにおわせるほどのものである。

〔45番の歌との対応関係について〕

この二首は、山の桜や紅葉を、霞や霧がたち隠すために目にする事ができない、という同趣向の歌の対である。

【歌意】

誰のための錦だというので、（私に見せることなく）秋霧が佐保の山のあたりをたち隠しているのだろうか。

47みてのみや人にかたらむ桜花手ごとに折て家づとにせん

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春上 五五

【注】

〔みてのみや人にかたらむ〕

古今集の諸注のうちに「のみ」が、「見て」だけではなく「かたらむ」にまでかかって、「見て人に語るだけでよいだろうか」とする説がある。たしかに「のみ」が、その前後の語の双方をまとめて限定するととるべき例も多い。しかし一方で、

しるしなきねをもなくかなうぐひすのことしのみちる花ならなくに

（古今集 春下 一一〇）

延喜御時、賀茂臨時祭の日、御前にてさかづきとりて 三条右大臣

かくてのみやむべきものかはやぶるかも社のよろづ世を見む

（後撰集 雑二 一一三二）

などのように、「のみ」が上接する語句の内容だけを限定しているとはとるべき例もある。では、当該の歌の場合はどうであろうか。一首は後述のように、山に咲く桜の花の下に幾人かの人々がいて、その桜を愛でている、という状況設定で詠まれたものである。そうすると「見て」は現在のこと、「人にかた」るのは未来のことになる。つまり、「のみ」の前後の動詞は一連の動作を表すものではない。「て」という接続助詞が間に挟まれていることも、この二つの動詞が一連のものとして提示されていないことを示している。すなわちこの二つの動詞をひとまとめにして考えることには無理があるだろう。

〔家づとにせん〕

新撰和歌の春の歌を取り出して見ると、当該の歌の前の39番から45番、そして直後の49番の歌が山の桜を詠んだものである。したがって、当該の歌も山の桜を詠んだもの

と、まずは受け取ることができ。そうした山の桜を愛でている人々が、この桜を都人への「家づと」にしよう、と言っているのである。なお、当該の歌は、古今集では、「山のさくらを見てよめる」という詞書を持つ。この詞書に示された内容が、新撰和歌では歌の配列によって示されている、というわけである。

【歌意】

見てそれだけで人に懇ろに話をしようか。（いや、そんなことでは足りない。この美しい）桜花を（めいめいがその）手ごとに折ってみやげにしようではないか。

48山のはにをれる錦をたちなから見て行過んことぞ悔しき

【校訂】なし

【他出文献】不明

【注】

〔山の端に織れる錦〕

「山の端」は、山の稜線。そこが空との境であることが強く意識されていたと見え、和歌に詠まれるときには「日」「月」「雲」「霞」などの、空にあるものと共に詠まれ、当該の歌のように、山の端の紅葉（錦）を詠んだ例は他には見えない。

屏風のゑに

つらゆき

つねよりもてりまさるかな山のはの紅葉をわけていづる月影

（拾遺集 雑上 四三九）

紅葉のちり残りたる山の峰に、月の入りたるころ

ちりぬべき紅葉の色も月影も山のはにこそとまらざりけれ （信明集 三九）

などの例は見いだせるが、これらは、山の端の月影に照らされた紅葉を歌っているであり、山の端の紅葉そのものを詠もうとした物ではない。このように、山の端の紅葉を詠むことは異例のことであり、ならば、当該の歌にはそれなりの意図が籠められていると見るべきであろう。

では、それはどのような意図なのか。他に例のない表現なので、一首の文脈から推測するしかないのであるが、第三句の「たちながら」と関わりがあると見たい。この「たちながら」は「立ちながら」と「裁ちながら」を掛けた表現と思われ、後者の「裁ちながら」は、「錦」との縁語として読み取れるものであるが、それに加えて山の紅葉が山の端（稜線）のところですっぱりと断ち切られている、という具体的なイメージがここには浮かび

上がるのではないか。「山の端に織れる錦」は、そうしたイメージのおもしろさを狙った表現であると、一応考えておく。

「たちながら」

「たちながら」は、立ったままで、という意味であるが、「立ちながら」何かをすることは、

平中、にくからずおもふ若き女を、妻のもとに率てきて置きたりけり。にくげなることどもをいひて、妻つゝをいひだしけり。この妻にしたがふにやありけむ、らうたしとおもひながらえとゞめず。いちはやくいひければ、近くだにえよらで、四尺の屏風によりかゝりて立てりていひける、「世の中のかくおもひのほかにあること、世界にものしたまふとも、忘れて消息したまへ。己もさなむおもふ」といひけり。この女、つゝみにもなど包みて、車とりやりて待つほどなり。いとあはれと思ひけり。さて女いにけり。とばかりありてをこせたりける、

わすらるなわすれやしぬるはるがすみ今朝たちながら契りつること

(大和物語 六十四段)

にみられるように、接する対象と深い関わりを持たない状態で何かをするという意味を含んでいる。夕顔の死後、病に伏せる光源氏が、見舞いに来た頭中将に対して、自らの穢が感染しないよう「立ちながら、こなたに入りたまへ」(源氏物語・夕顔)と言うのも、その端的な表れである。当該の歌では、山の端の紅葉を「立ちながら」見て行き過ぎる、と言うのであるから、まさに、紅葉と深い関わりを持たないままに、つまり、ゆつくりと鑑賞をしないままに行き過ぎる、という意味を表していると理解できる。

このことと同時に、先にも記したように、当該の歌には「錦」という語が用いられているので、「たちながら」は、錦と縁語である「裁ちながら」の意も掛けられている。

「47番の歌との対応関係について」

双方の歌ともに、山中の美しい花や紅葉をただ目にしただけで行き過ぎることを惜しむ心情を詠む点で共通する。

【歌意】

山の端に織りなされ、稜線ですっぱりと断ち切られた錦のような美しい紅葉なのに、じつくりと見ないままで見に行き過ぎることが悔しいのです。

49 みる人もなき山ざとのさくら花外のちりなん後ぞさかまし



【校訂】底本結句「後のかたまし」。新撰和歌諸本により傍書をとる。

【他出文献】古今集 春上 六八

【注】

〔ほかの散りなむ後ぞ咲かまし〕

この句は、他の桜と同じ時期に咲いている山里の桜を見て、後で咲けばよいのといっているのである。なおこれは、桜を見る人の感慨としてではなく、桜に対して呼びかける体の歌として享受されていたらしい。たとえば、源氏物語に、

弥生の二十余日、右の大殿の弓の結に、上達部、親王たち多くつどへたまひて、やがて藤の宴したまふ。花ざかりは過ぎにたるを、「ほかの散りなむ」とや教へられたりけむ、おくれて咲く桜二木ぞ、いとおもしろき。  
（源氏物語 花宴）

とあるのも、その証左である。また、古今集の古注（「桜に対していひをしふる様也」（両度聞書）など。）でも同様の説明をなしているものがしばしば見られる。

【歌意】

見る人もない山里の桜花よ。他の（場所の桜が）散ってしまった後で咲けばよいのに。（そうすれば多くの人が見て、もてはやしてくれるのに。）

50 玉かづらかづらき山の紅葉ははおもかげにこそ見えわたりけれ

【校訂】なし

【他出文献】後撰集 秋下 三九一・古今和歌六帖 三八七六

【注】

〔玉かづら葛城山〕

この歌で「玉鬘」は、一首の文脈と直接には関わらず、「葛城山」という語を導くための役割を果たしている。ところで、「玉鬘」は枕詞として用いられることの多い語であるが、「葛城山」を飾るものとして用いられた例は、同時代以前に確認しがたい。ならば、この歌の「玉鬘」は、一首の詠者が新しく創作した（あるいは創作されたばかりのものを利用した）枕詞として理解すべきであろう。では、どのような関連をもって「玉鬘」は「葛城山」を導くのであろうか。まずは「たまかづら」と「かづらきやま」との同音の繰り返しが指摘されようが、それだけにはとどまらないと思う。「かづらき」といえば、動詞「かづらく」が想起されるからである。この動詞は、万葉集にしばしば見られるけれども、平安時代になるとあまり用例の見られなくなるものであるが、たとえば、

あしひきの山下日影かづらける上にや更に梅をしのはむ

(万葉集 卷十九 四二七八 家持、古今和歌六帖 三九三〇にも)

のように、万葉集に由来する伝承の歌の形などで、新撰和歌の当時の人にも十分に知られていたものと思われる。また葛城山は一言主の説話でも知られる、古代より著名な山であった。そこに古風な「かづらく」という動詞を用いることは、歌の風としても似つかわしいものと思われる。以上のことから「玉鬘葛城山」という修飾関係は、玉かづらく(＝美しい蔓草)をかづらく(＝頭にかざす)という名を持つかづらき山、という、音の相似と、動詞とその目的語という関係に支えられたものと考ええる。

〔玉かづら…面影〕

玉かづらは、「鬘にするつる草のひがけのかづらを、カヅラともカゲともいうところから、カゲの同音語影にかかる」(時代別国語大辞典上代編)のだが、当該の歌は、さらにその応用的な表現として、

人はいさ思ひやすらん玉かづら面影にのみいとど見えつつ (伊勢物語 二一段)

かけておもふ人もなければゆふさればおもかげたえぬ玉かづらかな

(新古今集 恋三 一二一九 貫之)

と同じく「面影」と結びつけて用いたものである。

〔後撰和歌集歌との歌句の違いについて〕

当該の歌は、後撰和歌集にも収載されるのであるが、下二句に本文の違いが見られる。次の通りである。

玉かづら葛木山のみぢばはおもかげにのみみえわたるかな

古今和歌六帖にも後撰和歌集と同じ本文で同歌がみえるから、もとは後撰和歌集の本文の形であったものを、新撰和歌に採録するに際してこの歌の作者でもある、新撰和歌編者紀貫之が語句を改めた可能性が高い。では、この改編にはどのような意図が読み取りうるのか。実は、前項で挙げた伊勢物語二十一一段の歌の他にも、

こし時とこひつつをればゆふぐれのおもかげにのみ見えわたるかな

(古今集墨滅歌 一一〇三 貫之「くれのおも」)

いつのまにちりはてぬらん桜花おもかげにのみ色を見せつつ

(後撰集 春 一二二一 躬恒 躬恒集 三七八・古今和歌六帖 四一八七にも)

さかざらむ物とはなしにさくら花おもかげにのみまだき見ゆらん

(拾遺集 雑春 一〇三六 躬恒、古今和歌六帖 二〇六八にも)

のように、「面影にのみ」という語句を用いた歌が、躬恒、貫之を中心に何例かが確認でき、互いに競い合ってこの語句を詠み込んだ歌を制作していたことが想像される。その一連の作として、当該の歌も詠まれたのであろう。さて「面影にのみ見えわたるかな」であれば、ただただ面影にだけ見えるばかりだ、というほどの意味であるが、これを「面影にこそ見えわたりけれ」と改めた、すなわち助動詞「けり」を用いたことで「面影に見える」ということに気づいた体の歌とした。さらにそれが「こそ」で強められることで、気づいた事への驚きや感動も表されることになるだろう。では、なぜ驚きをもって気づかねばならないのか。それは、初二句に込めた「美しい蔓草を頭にかざした葛城山」という意味をどれほど重く捉えるか、によっている。つまり、人ならぬ山であるのに人のごとく蔓草を頭にかざした山、ということを重ねれば、そこに、なるほどそのような山の紅葉であるから、人の顔を意味する「面」の影がみえるのだなあ、という機知が生じる。そのようなおもしろさをねらった改変をしたのが新撰和歌の本文であったのではないか。

〔49番の歌との対応関係について〕

双方ともに、人を見る機会の少ない山中の花や紅葉、という素材の点での共通性がある。さらに、49番の歌では、人ならぬ桜に呼びかけ、教えを授けていた。また50番の歌では人ならぬ葛城山に蔓をかざした人の姿をイメージしていた。このような擬人的な表現の共通性も意識されていたか。

#### 【歌意】

玉鬘をかづらく、という名を持つ葛城山の紅葉であるから、なるほど（人のごとく）面影に見え続けるのだなあ。

51見渡せば柳さくらをこきまぜて都ぞ春の錦也ける

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春上 五六

#### 【注】

〔こきまぜて〕

動詞「こく」が単独で用いられる場合は、「稲といふものを…五六人してこかせ」（枕草子 五月の御精進のほど）のように、何かをむしろしたりしごいたりして掻き落とすという具体的な動作を意味する。それが、当該歌のような「こきまぜ」という形で用いられた場合に、「こく」の持つ具体的な意味がどの程度保持されているのかが問題となる。

この「こきませ」には同時代の用例が乏しいので判断はやや難しいけれども、たとえば、  
法皇六条の御息所、かすがにまうづるときに、大和守忠房朝臣あひか  
たらひて、このくにのなるところを、倭歌八首よむべきよしかたらふ

によりて二首おくる、于時延喜廿一年三月七日(三二二詞書)

ちはやぶる春日の原にこきませて花ともみゆる神のきねかな (躬恒集 三二七)

は、春日大社の社頭で神楽を舞う巫女たちの白衣を着た姿を花とたとえているものと思われ、ここでの「こきませて」は、巫女たちが入れ替わり立ち替わりしている様を表しているものと考えられる。つまりここに、むしろたりしごいたりして掻き落とす、という意味は読み取りがたい。また多少時代の下るものであるが、

(二条院に引き取られた若紫は) 立ち出でて、庭の木立、池の方などのぞきたまへば、霜枯れの前栽、繪に描けるやうにおもしろくて、見も知らぬ四位五位こきませに、隙なう出で入りつつ、げにをかしき所かなとおぼす。(源氏物語 若紫)

であれば、四位、五位の者が入れ替わり立ち替わり忙しげに行き来するその様が、田舎育ちの若紫の目には、それらの人々の袍の黒と緋色が入り交じりうち乱れる様子として映った、ということを表すと考えられる。つまりこの「こきませ」にも、しごいて掻き落とすという動作は意識されない。同じ源氏物語の「花をこきませたる錦」(胡蝶)も、実際にしごき落とした花を錦に混ぜているとは考えがたい。すなわち、錦の模様が花の入り乱れた様子であることを示していると解釈すべきである。逆に「こく」の表していた具体的な動作を含んでいるとらなければ解釈できない。「こきませ」の例は、管見に入らない。そうすると、『古今和歌集正義』が「こきませでは、もとは手してこきおろすより出たるならめど、しか手してこく物は木葉にまれ、玉にまれ、うち乱るるものなれば、只乱れ合たるをこきませといひなれたる也」というように、当該の歌の「こきませて」も今の例と同様、柳と桜が入り乱れた様子を表現するのであり、しごいて落とす、という意を読み取る必然性はないのではないか。

〔都ぞ春の錦なりける〕

「春の錦」という表現はこの歌以前に見いだがたい。では、これはいったいどのような経路を経て発想されたものなのか。従来、古今集の諸注ではこのことに関して二様の説明がなされている。ひとつは「都ぞといふは、山のにしきよりおこる也。心は都をほめたる義なり」(『両度聞書』)。「大方花紅葉を錦と見なすは山辺にいふ事にてまことに山こそはしか見ゆめれ集中にもたか為の錦なれはかあき霧のさほの山辺を立かくすらん霜のた

て露のぬきこそよわからし山のにしきのおれはかつちるの類ひ多しさるを今は山より都の方を見なして錦といへるか面白くめつらしき也さるは都は春のといはて都そ春のといへるに反ての意ありて打かへし新らしき錦を見出たるしらへ有を思ふべし」(『古今和歌集正義』)などのように、山の紅葉を「秋の錦」ととらえることからの発想である、とする説明である。今一方は、「漢書云松花交枝錦都陰不尽雲水双<sup>テ</sup>色玉宮ノ光新<sup>ナリ</sup>ト云文ノ心ナリ此他本文ノ中ニ都<sup>ラ</sup>錦<sup>ト</sup>云事多ク侍レハ不及注文集云花柳色深<sup>シ</sup>都錦興<sup>トイ</sup>ヘリ文選<sup>ニハ</sup>人家穿<sup>レ</sup>錦松花<sup>ノ</sup>都<sup>トイ</sup>ヘリ此等ノ文ノ心也」(『毘沙門堂旧蔵本古今集注』)などのように、漢籍にその典拠をもとめる説明である。なお、既に指摘されているように、毘沙門堂旧蔵本の引くところの漢籍の本文自体は現行の漢書等に確認のできないものではあるが、このような言説が現れるということは、はやくより「春の錦」を漢籍由来の表現とみる考えが相当程度強くあつたことを示している。その他にも『古今和歌集全注釈』(竹岡正夫)の示す千載佳句の詩句などが類似の表現としてあげられているし、また「春錦」という語そのものも、たとえば「桐落<sup>チテ</sup>秋蛙散<sup>レ</sup>、桃舒<sup>ベテ</sup>春錦芳<sup>シ</sup>。」(初唐蘇味道「詠井」)などの漢詩に見られるものである。

さて、これら二説ともに「春の錦」という表現の依つて来たところを言い得たものと思われる。ただ、新撰和歌においては、例によって、対にされた歌とともに当該の歌を見た場合、この「春の錦」は漢籍由来の表現として強く意識されているものと思われる。なお、このことの詳細については、52番の歌の【注】に述べる。

#### 【歌意】

みわたすと柳と桜をとりどりにとりませて、(あたかも錦のように見える。なるほどこのように美しい春の)都が(漢詩文にうたわれているあの)春の錦なのだなあ。

52おなじえをわきて木のはのうつろふは西こそ秋の初めなりけれ

【校訂】底本結句「初め<sup>イ</sup>なりけれ」。「イ」は何からの誤入と見る。

【他出文献】古今集 秋下 二五五

#### 【注】

「わきて」

古今集の諸注ではこの語を「特に・特別に」という方向で、つまり副詞的に解釈するものと、「区別して」などと動詞のままに訳すものが混在している。なるほど「わきて」の主語は人間ならざる「木」であるから、「区別して」と現代語訳するのに違和感はある。

おそらくはそのために副詞的な訳語が用いられることも多いのだと斟酌される。ただ、この時代には、

ひともとのきくにはあれどつゆじもぞわきてことごといろはそむらし

(躬恒集 二〇四)

うすくこく色もみえける菊の花露や心をわきておくらん (貫之集 一五八)

などのように、無生物たる露が菊の花を「わきて」様々な色に染め分ける、という擬人法的な趣向の歌がいくつか見られる。ならばこれらと同様に、当該の歌もむしろ積極的に擬人法的な解釈をすることが可能なのではないか。後でも述べるが、一首は西と秋との関連にたった今気づいた体の歌である。そうすると、人間の方は今まで西と秋との関連を意識していなかったものを、木の方は十分にわきまえてふるまっていたのだ、というおもしろさをここに読み取ることができる。

〔西こそ秋のはじめなりけれ〕

周知のように、中国の五行思想では西方を秋とする。その思想に従えば、礼記月令が「立秋之日、天子親ヲ帥帥ヲ三三公九卿諸侯大夫ヲ、以テ迎フ秋ヲ於西郊ニ」と記すごとく、秋は西からやって来るわけである。ただし、これはあくまで概念的なものである。現実の秋——紅葉に象徴されるような——は、京都の気候を考えれば、北からやってくると感じることはありえたであろうが、西からとは考えにくかったはずだからである。したがって、西に張り出した木の枝から紅葉しているのを目にしたとき、ああこれはおもしろい、これこそが漢籍に言う「西が秋の初め」ということなのだ、という感興が生まれることになる。そのような、漢籍の表現としてのみ理解していた概念を、現実世界の中に発見した、という驚きの表現を「西こそ秋のはじめなりけれ」という係り結びに読み取ることができるろう。

〔51番の歌との対応関係について〕

いま、この二首を併記すれば、

見渡せは柳さくらをこきませて都そ春の錦也ける

おなしえをわきて木のはのうつろふは西こそ秋の初めなりけれ

のように、「ぞ」と「こそ」の違いはあるものの、双方とも同じ位置に係助詞を配置し、文末が「なりけれ」で結ばれている。また係助詞の直下には「春の」「秋の」と対になる語が配され、下の句に形式上の類似がみられる。ところで、この二首に用いられた、係助詞を「なりけれ」でうける表現は、51番の歌の注で挙げた『古今和歌集正義』が「都は

春のといはて都そ春のといへるに反ての意ありて打かへし新らしき錦を見出たるしらへ有」と記していたように、何かを発見した感興を表していると考えられる。ではそれぞれの歌では何が発見されているのか。52番の歌は、先に述べたように、漢籍に記されていることとして知っていた事項——秋は西からやって来る——を眼前の自然の中に発見したものであった。一方、51番の歌は二通りの解釈が成り立つものであった。すなわち、山に見られる秋の錦に対して春の錦を都に発見したという解釈と、漢籍に言う春の錦を都に発見したという解釈とである。51番の歌を単独で見るときには、この二つの可能性をどちらが一方に決することはできない。けれども52番の歌と対にされたものとして見たときには、同じ位置に係り結びを用いるという形式の類似と相まって、後者の解釈が強く指示されるものと思われる。つまり、新撰和歌には、この二首を、漢籍の上での知識を日本の風土の中に発見したおもしろさを表した歌の対として提示しようとする意図があったものと思われるのである。

【歌意】

同じ（一本の木の）枝なのに（位置を）区別して木の葉が色づいているのは（いったいなぜなんだろう……。そうか、なるほど漢籍に言うように、木の葉の色づいている方角である）西こそが秋の始めだったんだなあ。

53さくら花しづくに我身いざぬれむかごめにさそふ風のこぬまに

【校訂】底本四句「さかふ」。新撰和歌諸本により傍記をとる。

【他出文献】後撰集 春上 五六

【注】

〔しづくに我が身いざ濡れむ〕

花に関して雫が歌われる場合は、まずは雨の雫と考えられる。さて、そのような雨の雫に「いざ：濡れむ」という表現がなされているのであるから、

さくらがり雨はふりきぬおなじくはぬるとも花の影にかくれむ（拾遺集 春 五〇）  
のような、桜狩りなどで郊外に出かけたところに雨が降ってきたので、やむを得ず桜の雫に濡れるという体ではなくて、濡れずとも過ごせるものをわざわざ濡れようという意志を読み取る必要がある。また「我が身」といういい方は、

おほかたの秋くるからにわが身こそかなしき物と思ひしりぬれ

（古今集 秋上 一八五）

月見ればちちに物こそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど (同 一九三)  
のように、他の人から孤立した存在であることを強調するものである。つまり、たった一人で雨の中、桜の雫に濡れようというのである。しかし、そのような場面が、現実の生活の中でそうあるものとは思われない。(この歌は後撰集にも収められるが、「貞観御時、ゆみのわざつかうまつりけるに」という詞書を伴う。そうであれば、弓の行事の場に降ってきた雨を避けるのに、自分は軒下や幔の下に入るのではなくあえて桜の下を選ぶという詠者の座興を歌ったものとして理解できる。)ならば、やはりここには雨中の桜の下にたえずむ一人の人物を描いた絵などが想像されやすかったのではないか。つまり、この歌は屏風歌的な表現となっているものと思われるのである。

〔かごめに〕

「かごめに」といういい方は、他に例を見ないが、類似の表現、

朝忠朝臣となり侍りけるに、さくらのいたうちりければいひつかは

しける

伊勢

かきごしにちりくる花を見るよりはねごめに風の吹きもこさなん

(後撰集 春 八五)

(方弘が) 人間に寄り来て、「わが君こそ、物聞えん。『まづ』と人の宣たまひつることぞ」いへば、「何事ぞ」とて、几帳のもとにさし寄りたれば、「むくるごめに寄り給へ」と言ひたるを、「五体ごめ」となん言ひつるとて、また笑はる。

(枕草子 一〇四段「方弘は」)

などと同様に考えて、「香りごと」「香りもろとも」という程の意と推測される。

【歌意】

桜花(から滴る)雫に我が身は、さあ、濡れよう。香りごと誘う(そして散らしてしま  
う)風が来ない間に。

54千早振神なび山の紅葉に思ひはかけじうつるふ物を

【校訂】底本三句「紅葉は」。新撰和歌諸本により傍記をとる。

【他出文献】古今集 秋下 二五四

【注】

〔神なび山〕

「神なび山」は、紅葉と取り合わせて詠むことが多い山であるが、



神なびの山をすぎて竜田河をわたりける時に、もみぢのながれけるを  
よめる  
きよはらのふかやぶ

神なびの山をすぎ行く秋なればたつた河にぞぬさはたむくる

(古今集 秋下 三〇〇)

で竜田川と共に詠まれていることから「ふるさと」である大和の地名とわかる。当該の歌では「ちはやぶる」という枕詞が用いられていることと相まって、古風な、言い換えると一幅の絵のようなイメージとして提示されているものと思われる。

〔五十三番の歌との対応関係について〕

双方とも「いざぬれむ」「かけじ」という意志の表現、そして倒置法を用いる点、落花や落葉を歌う点で共通している。また、どちらも絵に描かれたような景物を題材に詠んだ体の歌という趣向も共通する。

【歌意】

神なび山の紅葉に思いをかけたたりはすまい。(この山の紅葉は美しいといっても、紅葉はいずれ) 移ろってしまふものなのに。

55花の色は霞にこめてみせず共香をだにぬすめ春の山風

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春下 九一

【注】

〔霞にこめて見せずとも〕

古今集の諸注で、「霞にこめて見せ」ないのは何者なのかという問題について、佐保姫とするもの、花自身とするもの、山風とするものがある。まず、山風が主語と考える場合、風が花を「霞に込めて見せ」ていないのに、花を隠している張本人である風に対して、香を「盗め」というのでは、やはり矛盾を感じざるを得ない。また、佐保姫とする説は、それを否定する根拠はないが、一方で当該の歌をそのようにとらねばならない理由もないので、今ひとつ説得性には欠ける。花自身が「こめて見せず」といつているのだという説については

心地そこなひてわづらひける時に、風にあたらじとておろしこめての

み侍りけるあひだに、をれるさくらのちりがたになれりけるを見てよ

める

藤原よるかの朝臣

たれこめて春のゆくへもしらぬまにまちし桜もうつろひにけり

(古今集 春下 八〇)

のように、自身が引きこもることを「こめて」という表現があるので、これと同様のものと見て、当該の歌の上の句を「花自身が引きこもって姿を見せなくても」と考えることができるだろう。

ただ、このように理解したのではやはり、すっきりとはしないところが残る。それは、「見す」が他動詞であることである。花が見えない状況を詠むにあたっては、古今集のいくつかの注釈が指摘することであるが、

花の色は雪にまじりて見えずともかをだににほへ人のしるべく

(古今集 冬 三三五)

のように、自動詞「みゆ」を用いるのが通常の表現と思われる。そうすると「見せず」という他動詞を用いる当該の歌には、金子元臣『古今集評釈』などが言うように、娘を「花」に譬え、その娘を守っている親などが娘を「見せず」にいるのだ、という寓意が込められているというように考えたくなるのが自然である。当該の歌は、恋ではなく春の部に配されているのであることを前提にすれば、そのような寓意が、におわされている歌だ、ということである。

#### 【歌意】

花の色は霞に籠もって見せないとしても、香りだけでも盗んで（持ってきて）おくれ。春の山風よ。

56 恋しくはみてもしのばむ紅葉ばを吹なちらしそ山おろしのかぜ

#### 【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋下 二八五

#### 【注】

〔恋しくは〕

当該の歌は秋の歌として新撰和歌には配されるので、初句の「恋しくは」は、美しい紅葉が恋しい時には、と解釈することになる。ただ、「恋し」という言葉には、やはり、人を恋しく思う、という意味を考えたくなることも事実であろう。それゆえに、たとえば両度聞書が「此こひしくとは、もみぢの事也」と注しなければならなかったものと考えられる。

〔55番の歌との対応関係について〕

双方とも上の句に「見せず」「見て」が、そして結句に「山風」「山おろしの風」という類似の語が配されていることが、共通点としてあげられる。さらに、どちらの歌も花や紅葉といった自然の景物を詠みながら、その背後に恋のイメージを浮かび上がらせる表現となっていることも指摘できるだろう。なお、56番の歌を単独で見るときには恋のイメージはさほど強いものとは言えないが、55番の歌と対にされていることによって、その恋のイメージが確かなものとして提示されることになる。そのような意図もこの配列にはあるのではないか。

【歌意】

(美しい紅葉が) 恋しい時には、(この残りの葉を) 見て偲ぼうと思う。(その) 紅葉の葉を吹き散らしてくれるな。山おろしの風よ。

57いざけふは春の山べにまじりなん暮なばなげの花の陰かは

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春下 九五

【注】

〔まじる〕

「まじる」は、もともと

花の色は雪にまじりて見えずともかをだににほへ人のしるべく(古今集冬335)のように、あるものが別のものと渾然一体となって区別しがたい状態になること、あるいはそのような状態であることを表す。さて、では当該の歌のように、人間が「山辺」と渾然一体となる、とはどのような状態のことなのか。「山辺にまじる」という同一の表現は管見に入らないので、今、二、三の類例を示してみる。

いまは昔、竹取の翁といふもの有りけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづの事に使ひけり。  
(竹取物語)

の「野山にまじり」は、竹取の翁が野山の中にどっぷりと入り込んで、そのような中で生計を立てていることを表していると考えられる。また、

(源氏の没後、生前彼にお仕えていた下働きの女房たちは)「心をさめむかたなくおぼえけるままに、ものおぼえぬ心にまかせつつ、山林に入りまじり、すずろなる田舎人になりなど、あはれにまどひ散るこそ多く侍りけれ。  
(源氏物語 宿木)

の「山林に入りまじり」や、

(主人である宇治の八の宮に先立たれた宿直人が言う) 「世の中に頼むよるべもはべらぬ身にて、一所の御蔭に隠れて、三十余年を過ぐしはべりにければ、今はまして、野山にまじりはべらむも、いかなる木のもとをかは頼むべくはべらむ」

(源氏物語 権本)

の「野山にまじり」は、人里離れた場所に隠棲し、あたかも自然と一体化したような暮らしを示すこと示すのだろう。これらの用例はいずれも、単にそこへ入り込む、というよな動作だけを表すのではなく、そこに入り込んで生活をする、という意味を含んでいると考えられる。ならば、当該の歌の「春の山辺にまじりなん」も、単に「春の山辺に入り込む」というだけではなく、「この美しい花の咲く山辺に入り込み、腰を据えてしまおう」という気持ちを表現していると考えてよいのではないか。また、次の歌の注で述べるが、新撰和歌においては、この歌に着飾った人々の美しい姿が花の色に混じるという、やや幻想的なイメージも読み取って良いものと思われる。

〔なげ〕

形容詞「なし」に接尾辞「げ」のついたもの。「無いような様子」というほどの意。つまり、実際には存在するのだが、それが見えなくてあたかも無いような様子になる、ということ。さて、この歌の第四句にあるように、日が暮れてしまうと、

春の夜のやみはあやなし梅花色こそ見えねかやはかくる (古今集 春上 四一)  
のように、花の色は見えなくなってしまうことがあるのだが、眼前の「花の蔭」はとても美しく輝いているので、たとえ暗くならうとも闇に紛れたりはしない、というのである。

〔花の蔭〕

この語は、

春霞色のちくさに見えつるはたなびく山の花のかげかも (古今集 春下 一〇二)  
のように、遠望する花の姿を表す場合もあれば、「たきぎおへる山びとの花のかげにやすめる」(古今集仮名序)のように、その下で人々が立ち止まることのできる場所を表す場合もある。当該の歌の場合は、第三句の「まじりなん」といういい方から見て、遠望するのではなく、その下で桜狩りをするようなものとして提示されていると考えられる。

【歌意】

さあ、今日は春の山辺に入り込んで腰を据え(花を愛で)よう。(そのまま) 日が暮れたら、(闇に紛れて見え)なくなるような(貧相な)花の蔭だというのか。(そんなことは

けっしてないのだから、さあ行こう。」

58 神なびのみむろの山を秋ゆけば錦たちきる心地こそすれ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋下 二九六

【注】

〔神なびの三室の山〕

「神なびの三室の山」は、神のいますみむろの山、の意。この語はもともと普通名詞であったのが、次第に固有名詞化していくようであるが、少なくとも新撰和歌の時代までは飛鳥や菟田など複数の山に用いられた例があり、まだ特定の山を指すものではなかったらしい。この歌の場合、紅葉とともに読まれていることから龍田にある山を示すかとも思われるが、断定はできない。

〔錦たちきる〕

この時代の和歌で「錦」に「裁つ」という語が配されるのは、

かくばかりもみづる色のこければや錦たつたの山といふらん

（後撰集 秋下 三八二）

もみぢばのふりしく秋の山べこそたちてくやしきにしきなりけれ

いくきともみこそしられねあきやまのみぢのにしきよそにたてれば（忠岑集 八）

夏衣たちきるものをあふさかのせきのし水の寒くも有るかな

（古今和歌六帖 七二「更衣」）

さほひめのおりかけさらすうすはたの霞たちきる春ののべかな

のように、「龍田山」「発つ」「（木・夏・霞が）立つ」などの語との掛詞として用いら

れた場合のみのものである。ならば、当該の歌も何らかの掛詞を用いたものと想定するの  
がやはり順当であろう。さて、では、どのような掛詞が考えられるのか。『余材抄』が

「たちきるは裁ちて着る也。裁剪にはあらず」と否定したものはあるが、本稿では「裁  
ち着る」（上一段活用）に「裁ち切る」（四段活用）が掛けられているものと見たい。

まず「裁ち着る」の文脈は、古今集の諸注が言うように「錦を裁断し衣に仕立てて着  
る」と考えることができる。次に「裁ち切る」であるが、これにも、

夏冬の御装束、朝夕さりのおものに多くのものを尽くして、頭より足末までに、綾、  
錦を裁ち切りて、見たまはむ草木まで着せ飾らむ、（宇津保物語 忠こそ）

のように、裁断して仕立てる、という程の意味あいでも用いられたらしい例が見られる。けれども、このような隣接した意味あいの語を「掛詞」としたのは、歌の技法としてさして意味をなさないだろう。そこで一案を提示したい。つまり、全山錦のごときみむろの山をずんずん進み行くことで、その錦を裁ち切っていくように感じられる、という文脈を考えられないであろうか。このような、紅葉の中を人が通過することで「錦」が切れてしまふ、という発想のあることは、

竜田河もみぢみだれて流るめりわたらば錦なかやたえなむ（古今集 秋下 二八三）  
のように、確かに認めることができるから、これはあながち無理な想定ではないだろう。むしろこの歌だけに掛詞が用いられていないとする方にこそ無理があるのではないか。

〔57番の歌との対応関係について〕

58番の歌は紅葉の山を人が進む様を「錦裁ち切る」心地がする、と幻想的なイメージで捉えたものと考えた。そうであれば、57番の歌にも、山辺の花を愛でる人々の着飾った姿が美しい花と「混じり」あつた幻想的な光景を思い浮かべることができるだろう。そのような歌の対として、この二首を考えておきたい。

【歌意】

神のいますこのみむろの山を秋に行くと、（満山の紅葉をつききつていくことで、まるで）錦を裁ち切るような気持ちがある。そしてまた（紅葉の色が服にまで照り映えて）錦を衣に仕立てて身につけるような心地がする。

59 浅みどりいとよりかけて白露を玉にもぬける春の柳か

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春上 二七

【注】

〔浅緑〕

「浅緑」は新緑の意。

浅緑そめかけたりとみるまでに春の柳はもえにけるかも（万葉集 卷十一 一八四七）  
のように、万葉集の時代から使われてきた表現である。この万葉集歌は赤人集・家持集などにも伝承歌の形で見え、相応に愛好されたものと思われるが、初句の「浅緑」という表現は、古今集頃の歌にはさほど多くない。

浅緑野辺の霞はつつめどもこぼれてにほふ花桜かな

（新撰万葉 五）

という新撰万葉の歌と、これら二首の歌の表現を用いて詠まれた、

わかなつむ我を人みばあさ緑野への霞も立ちかくさなん

(貫之集 六八 延喜十七年)

あさみどりそめてみだれるあをやぎの糸をば春の風やとくらん (伊勢集 一〇二) などが見られる程度である。このことから「浅緑」という語が、日常一般の表現ではなく、万葉集と新撰万葉の歌を典拠とする、いわば古典的な表現として意識されていたことが想像される。

〔糸〕

柳の枝を糸にたとえるのは、漢籍にも万葉集にも見られる、古くからの常套的な表現である。

〔春の白露〕

平安時代の和歌では「白露」は秋のものとして扱われるのが一般で、この歌のように春のものとして用いた例はきわめて珍しい。また、「白」の語の冠せられない「露」にしても、秋のものとして歌に詠まれることがほとんどである。

自然現象としての露は、平安時代文学の主たる舞台となった関西では、秋に限らず観察されるものである。それにも関わらずこのような現象が起きているということは、平安時代には「露」が秋の歌語として、一般的に認知されていたことを示している。更に「白露」について言えば、別の事情も存する。そもそも白露しろつゆという言葉は万葉集の時代に漢語の「白露」を歌語化したものである(橋本達雄「白露の美」『大伴家持作品論攷』一九八五年)が、漢語の「白露」は専ら秋のものとしてのみ扱われる。平安の歌人たちもこのことを知っていたはずであるし、「白」が五行説で秋に結びつけられていることも周知していたはずであるから、それらを意識しながら「白露」を秋の歌に用いていた可能性が高いということである。

ただし「春の白露」が、全くもって歌の常識から外れた奇異な表現であったというわけではない。もしそうであったのなら、古今集、そして新撰和歌に入集することはなかったであろうから。

確かに平安時代の和歌では「白露」も「露」も一般的に秋のものとして読まれるが、万葉集の時代には春のものとして読まれた例もしばしば見られる(「春の白露」も万葉集巻十三の巻頭歌にある)。つまりこの歌の「春の白露」は、平安時代のものとしては珍しい、万葉調の表現だったわけである。あるいは、歌語としての「露」の属性が固定される以前

の六歌仙の時代の人であり、鷹揚な詠みぶりの高位の人物、遍昭ならではの表現だったということなのかもしれない。

〔玉にも抜ける〕

美しい露のことを玉に見立てる表現も、万葉集の時代から用いられてきた漢詩由来のもののである。ただし「春の白露」の項で見たように、当該の歌が、漢籍を意識させない、万葉調の歌であつたらしいことからすれば、平安時代には、和歌の世界に馴染んでおり、漢籍に由来することが意識されない類の表現であつたことが窺える。

なお、この、露と玉の見立てに限らず、「柳の糸」「白露」と、漢籍由来であり、かつ、早くから和歌に用いられて平安時代にはすっかり馴染んでいた表現がこの歌には多く用いられている。そのことからすると、「浅緑」も、あるいは同様に、漢籍に由来するものなのかもしれない。（「薄紅梅色冷、浅緑柳軽春。」（初唐李治「守夢」）等、多くはないものの、中国でも「浅緑」は早くから見られる。）

【歌意】

浅緑色の糸を縫って（その枝に）かけて、白露を（なんとまあ）玉でもあるかのように貫いている春の柳であることよ。

60さを鹿の朝たつをのゝ秋萩に玉とみるまでをける白つゆ

【校訂】底本初句「さほ鹿の」。新撰和歌諸本により改める。底本三句「秋萩は」。底本のままでは意味が取りにくいので、群書類従本、松平文庫本等により改める。

【他出文献】万葉集 卷八 一五九八・新古今集 秋上 三三四・和漢朗詠集 三四〇  
万葉集一五九八番の歌は、

棹壯鹿之 朝立野辺乃 秋芽子尔 玉跡見左右 置有白露

であり、第二句が当該の新撰和歌の歌とは異なる。「野辺」を「をの」とは訓めないだろうから、当該の歌は万葉集歌そのものとは考えられない。また、

さをしかのあさふすをのの秋はぎををれぬばかりもおける露かな

（古今和歌六帖 九四七）

という類歌が見られることから、万葉集一五九八番の歌の伝承されたものが平安時代に存していたことがわかる。これらのことから、当該の歌は万葉集の歌ではなく、序に言うように「弘仁」より後の歌として認められると考えられる。なお和漢朗詠集（三四〇）には



さをしかのあさたつをののあきはぎにたまとみるまでおけるしらつゆ〈家持〉

と見え、第二句を「をの」としながら、作者を家持としている。三十六人撰も同じであるから、藤原公任は「をの」の本文の歌を万葉集の歌と考えていたものと思われる。彼が新撰和歌と異なる認識をした理由はわからない。

【注】

〔鹿：露〕

下の句に詠まれた美しい露に関して、万葉集のいくつかの注釈書では、「上三句は秋萩の位置を示す表現であるが、鹿が萩を妻どいした後朝の情趣をにおわす。」とし、「朝の別れの鹿の涙をも暗示する。」（新潮日本古典文学集成『万葉集』当該歌頭注）という説明をする。露が鹿の涙であるということは、

秋萩にみだるる玉はなく鹿の声よりおつる涙なりけり（貫之集 三五四）

のように、新撰和歌の编者自身も認めていた修辞であるから、新撰和歌の歌としての当該の歌も同様に解釈すべきものと思われる。ただし、涙の原因は、後朝の別れを惜しむことにあるのではなく、当該の歌を平安朝の歌として見た場合には、

妻恋ふる鹿の涙や秋萩の下葉もみづる露となるらん（貫之集 四一七）

誰きけと声高砂にさをしかのながしよをひとりなくらん

（後撰集 秋下 三七三）

のように、愛しい妻に逢うことができず、夜もすがら悲しんでいる涙とする方が妥当であろう。

〔玉とみるまで置ける白露〕

下の句を直訳すれば「玉と見まがうばかりに置いている白露」（日本古典文学全集『万葉集』）「まるで玉かと見るほどに置いている白露」（新日本古典大系『万葉集』）という事になるだろう。ただ、それにしても、露がどのように置けば玉のように見えるというのか。

この「とみるまで」は、散文には例の少ない、専ら和歌に用いられる表現のようである。やや意味がとりにくいのであるが、歌に用いるためにやや無理をして字数を整えたものかとも思われる。さて、この表現は万葉集の時代からしばしば見られるのであるが、まずはその歌いようを確認しておこう。たとえば、

春の野に霧立ち渡り降る雪と人の見るまで梅の花散る（万葉集 卷五 八三九）

は、梅の花の散りようが甚だしくて、その甚だしさは、まるで霧が立ち雪が降っているよ

うに見えるほどである、ということを行い、

海人小舟帆かも張れると見るまでに鞆の浦廻に波立てり見ゆ

(万葉集 卷七 一一八二)

では、波の立ちようが甚だしくて、その甚だしさは、まるで白波が小舟の帆のように見えるほどであるということ表現している。つまり「く」と見るまで…する」という表現は、…の度合いが非常に甚だしくてくかと思われるほどである、という意味合いで用いられているものと思われるのである。

では、当該の歌ではどうだろうか。右の解釈を当てはめると、露の置きようが甚だしくて、その甚だしさは、玉のように見えるほどである、ということになる。つまり、露がたつぷりと置くことで、ぽつてりとしたしずくが表面張力で丸くふくらむ。そうした露がたくさん葉の上に見える。その、丸い露のつぶつぶが、あたかも玉のように見えるほどであるということになるだろうか。

うつろはんことだにをしき秋はぎに玉と見るまでおけるしらつゆ

(拾遺抄 秋 一二二 伊勢)

は、秋萩の色を移ろわせる露が、いつそうその変色を促すように多量に置いていることを言ったものであるが、多くの露が置くことを「玉と見るまで置ける」という表現をしている。この歌からも、多くの露がたつぷりと置いている情景を「玉」ととらえる発想があったことが確認できる。

〔59番の歌との対応関係について〕

双方共に、美しい白露のことを玉とたとえた歌である。また、喚起されるイメージにおいても、遍昭の歌が柳の新緑と白、この歌が萩の色と白、と色彩のコントラストが鮮やかであることが指摘できよう。また、58番の歌は万葉調であることを指摘したが、そうした、万葉調の歌と、万葉風の伝承歌が対にされているのも、偶然ではあるまい。

【歌意】

(一晚中なきあかした) 雄鹿が、朝立っている野の秋萩に、(その鹿が流した涙の玉なのであろうか。美しい) 玉かと見えるほどに(たつぷりと)置いた白露よ。

61 青柳のいとよりかくる春しもぞみだれて花のほころびにける

【校訂】底本三句「春<sup>とよ</sup>」。新撰和歌諸本により本文の方をとる。

【他出文献】古今集 春上 二六

【注】

〔しもぞ〕

「しもぞ」は、「すなのに、却って」というほどの意で用いられる。

十月ばかりに物へまかりける人　　ただみ

露にだにあてじと思ひし人しもぞ時雨ふるころたびにゆきける（拾遺集別310）

は、露にさえあてないようにと思つて大切にしていた人なのに、却つて冷たい時雨が降る頃に旅に出るのですね、ということであるし、

ひともとぎく　　すけみ

あだなりとひともどきくるのべしもぞ花のあたりをすぎがてにする

（拾遺集 物名 三七三 新勅撰集に作者躬恒として重出）

は、あの人のことを浮気者だ、と悪口を言いながら来たこの野辺なのに、却つて私も花に目移りして行き過ぎがたいことよ、というほどの意味である。

当該の歌も、「糸ヲヨツテハホコロビモ ヌフコトヂヤニ青イ柳ノ糸ヲヨリカケル春ノコロハケツクサ花ガ咲ミダレテ ホコロビルワイ」（『遠鏡』）のように、縫い付ける糸が燃つて掛けられる春なのに、却つて花がほころびるよ、という言葉のおもしろさを趣向とした、理知的なものと考えられる。

〔乱れて〕

第四句の「乱れて」については、従来、「乱れ」る主体が「青柳の糸」だけなのか、「花」も「（咲き）乱れて」いるのかということが問題とされている。「乱れ」る主体は青柳の糸だけであり、「花」には関わらないとする説の根拠は、もっぱら古今集における当該歌の位置にある。つまり、この歌は、古今集では未だ花の咲いていない頃合いに排列されているのだから、繚乱して咲くというのはそぐわない、というわけである。なるほど古今集の歌として見たときには、一定の説得力を持つ解釈であり、稿者もそのように解釈すべきかと思う。しかし、新撰和歌においては、

いざけふははるの山辺にまじりなんくれなばなげの花のかげかは（五七）

あさみどりいとよりかけてしら露をたまにもぬける春のやなぎか（五九）

青柳のいとよりかくるはるしもぞみだれてはなのほころびにける（六一）

古郷となりにしならのみやこにもいろはかはらはなぞさきける（六三）

さくら色にころもはふかくそめてきはなのちりなむのちのかたみに（六五）

と、前後の和歌を見れば明らかかなように、当該の歌は、花の盛りの位置に配されている。

したがって、「乱れて」は、花の咲き乱れる様を言う、と考えても差し支えない。むしろ、一首は「く春しもぞ、乱れて花が綻」ぶ、というように、「しもぞ」で一旦文章の流れが切れて、「乱れて」は、花の方に直接つながるいい方になっており、この歌だけを見る場合は、花が咲き乱れる、ととるべきものと感じられる。貫之はこのことに鑑みて、当該の歌を新撰和歌のこの位置に配したのではないだろうか。

〔ほころぶ〕

花について「綻ぶ」というのは、新潮日本古典集成『古今和歌集』が指摘するように、万葉集の時代には見られない、平安期の新しい表現である。縁語の多用と相俟って、いかにもこの歌が古今集風の新しいものであるとの印象を与えている。

【歌意】

青柳が（その）糸を撚ってかける、まさにそうした春であるのに、却って（糸が乱れるように）咲き乱れて花がほころんだのだなあ。

62 いもが紐とくとむすぶと立田山今ぞ紅葉の色増りける

【校訂】なし

【他出文献】万葉集 卷十 二二二一・後撰集 秋下 三七六

万葉集二二二一番の歌は、

妹之紐 解登結而 立田山 今許曾黄葉 始而有家礼

で、下の句の歌句が異なる。また後撰集の歌は、

いもがひもとくとむすぶとたつた山今ぞ紅葉の錦おりける

と、これも結句が異なる。平安期に、この類の歌が様々に読み継がれており、その一つを新撰和歌が選んだものと考えられよう。

【注】

〔妹が紐解くと結ぶとたつ〕

舌足らずでわかりにくい表現であるが、「いとしい子の下紐をいずれまた解くのだと結んで発つ」（『万葉集釋注』）というように解すべきと考える。加えて、新撰和歌においては、

青柳のいとよりかくる春しもそみたれて花のほころひにける（新撰和歌 六一）

という、「糸」の縁語「撚る」「掛く」「乱る」「綻ぶ」が印象的な歌と対にされていることにも留意したい。この「青柳の」の歌と対にされていることで、「立田山」の「た

つ」に、「紐」の縁語「裁つ」も意識されるかもしれない。

〔61番の歌との対応関係について〕

前項にも記したように、61番の歌とこの歌は、「糸」と「紐」それぞれの縁語が多用されていることが印象的な対をなしている。また、61番の歌が理知的な趣向の古今風の歌であるのに対して、古風な万葉調の62番の歌を対にしたということも考えられよう。

【歌意】

いとしいあの子の下紐を（いずれまた）解くのだという（思いで）結んで、（出で立つという名を持つ）竜田山は、今こそ紅葉の色が深まっているよ。

63 古郷となりにしならの都にも色はかはらず花ぞ咲ける

【校訂】 底本結句「花は咲きけり」新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】 古今集 春下 九〇

【注】

〔ふるさと〕

「ふるさと」は古くなってしまった里、の意。この語は、

人はいさ心もしらずふるさとは花ぞ昔のかにほひける （古今集 春上 四二）

などのように、「昔なじみの里」の意でも用いられるが、この歌と対にされている64番の歌が永遠不変の月の都を詠んだものであることと対照的に、移ろいはて、寂れてしまった古都をうたったものと、新撰和歌ではとるべきと思われる。

【歌意】

古びた里になりはててしまった奈良の都にも、色は変わらずに花は咲いたことよ。

64 久かたの月のかつらも秋は猶紅葉すればやてりまさるらん

【校訂】 なし

【他出文献】 古今集 秋上 一九四

【注】

〔ひさかたの〕

この枕詞の本来の語義は早くから失われていたらしいが、万葉集に「久堅乃」「久方」という表記で表される例が多いので、上代人にとっては「ひさかたの」という語は、永久不変というニュアンスを感じさせるものであったことが窺える。そして、そうした感覚が平安時代に至っても一般的なものだったのかどうかはわからないが、63番の歌と対にされ

ていることを踏まえるならば、当該の歌の「ひさかたの」は、永久不変という意味でとらえられていたように思われる。

〔63番の歌との対応関係について〕

63番の歌は、時間の経過とともに古びた里になってしまった、かつての都である奈良の地にも、以前と変わらぬ美しさで花が咲いたことを歌う。つまり変化と不変の相が同居しているおもしろさを眼目としたものであった。一方、62番の歌は、「ひさかたの」、つまり永久不変のものである月に生えている桂でさえ、秋になれば色を変えろということ、同じく変化と不変の相の同居を歌いながら、その土地と植物の変化・不変化の関係がちょうど逆になっている。そのようなおもしろみを含んだ一対の歌として、この二首は捉えられるのではないか。

【歌意】

(ひさかたの、すなわちいつまでも変わらない) 月(に生えた) 桂も、秋はやはり(変わらないではいられず) 紅葉するからというので、(こんなにも美しく) いっそう照り輝いているのだろうか。

65 桜色に衣はふかく染てきん花の散なむ後の記念に

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春下 六六

【注】

〔桜色に衣はふかく染めてきん〕

この歌の第二句が「衣を」ではなく「衣は」であることに注意したい。この言い方は一般論として「衣を染める」というものではなく、話題として取り立てるべき特定の「衣」、その「衣は染める」ということを意味する。そのように強い意味を持つ表現であるから、たとえば、次のような歌に用いられることがある。

月草に衣は摺らむ朝露に濡れての後はうつろひぬとも

(万葉集 卷七 一三五「寄草」 古今集 秋上 二四七に重出)

この歌は、「衣摺る」に相手の申し込みに応じて妻になることを、「朝露に濡る」に契りを結ぶ意を、「うつろふ」に男の心変わりを譬えた歌で、将来に不安を感じながらも結婚に踏み切ろうとする女の心を述べているものと見える。」(伊藤博『万葉集釋注』) というもので、この場合の「衣」は、他でもなく今現在自ら身につけている衣を特定して

指し示す（この歌の訳に「この衣は」とする場合が多いのもこうした理由による）。自分の着ている衣でなければ、そこに色をつけることが相手の意に染むことを意味することにならないのである。

では、当該の歌の「衣」はどのような「衣」を提示しているのか。一首の背景としては、およそ「花の中で遊ぶことから、その色に染色することを連想したもので、野山で花見をした時の思い出だろう。」（日本古典文学全集『古今和歌集』）ということが想像される。つまりこれは、目下桜の下にいる、あるいはいた人物の歌とみるのが穏当であると思われる。では、その人物が特に取り立てる「衣」とは何だったのか。本稿ではこれを、花見をしている詠歌主体がそのとき身につけていた桜襲の衣と想像する。その理由については、次項で述べる。

〔かたみ〕

「かたみ」という語の使用例を見ると、たとえば万葉集では、

：入り日なす 隠りにしかば 我妹子が 形見に置ける みどり子の 乞ひ泣くことに：

（万葉集 巻二 二一〇 柿本人麻呂「泣血哀慟歌」）

湯原王亦贈歌二首（一首省略）

我が衣形見に奉るしきたへの枕を放けずまきてさ寝ませ

娘子復報贈歌一首

我が背子が形見の衣妻問ひに我が身は放けじ言問はずとも

（同 巻四 六三六・六三七）

など、亡くなった人や様々な事情で逢うことのできぬ愛しい人を、せめて思い起こすためのよすがとして用いられるものが「かたみ」と表現されている。そして、そのことと深く関係するのだろうが、「かたみ」の語が用いられた歌にはきわめて悲痛な心情が込められていることが多い。それが、新撰万葉のころになると、

梅がかをそでにうつしてとどめてば春はすぐともかたみならまし

（古今集 春上 四六 読人知らず 新撰万葉 二二）

いろふかくみゆるのべだにつねならばはるはゆくともかたみならまし

（新撰万葉 二五九）

のように、人間以外のものを対象に「かたみ」と言った例が見られるようになる。

さてでは、これらの歌や、そもそも問題としている当該の歌で、行く春や散る桜を思い出すためのよすがとして「かたみ」という語を用いたとき、どのようなニュアンスで受け

取られたのであろうか。

右には、平安期の和歌になると人間以外のものに関して「かたみ」と言う例が現れることを述べたが、そうした例は決して多いわけではない。古今集、そして新撰和歌の時代でも、おおかたは、

わすれがひひろひしもせじしらたまをこふるをだにもかたみとおもはむ

(土佐日記 承平五年二月四日条)

かたみこそ今はあたなれこれなくはわするる時もあらましものを

(古今集 恋四 七四六)

のように、亡き人を偲び、愛しい人を思う哀切な文脈で用いられることが多いことに変わりはない。ならばやはり「かたみ」という語には亡き人のことを思う、哀切なニュアンスが伴っていたと考えられよう。そうした「かたみ」を、行く春や散る桜という、本来、さして悲痛でもなく哀切でもない対象に用いているのである。

このような表現をするのには、論理的に言って二通りの場合が考えられよう。ひとつは、春や桜に対して深く感情移入し、それらが過ぎ去ったり散ったりすることを大切な人との離別のごとく思い、悲嘆している場合。しかし、そのような感情はやはり特殊に過ぎ、そうした感情が歌を受け取る側に素直に受け入れられるには何らかの事情説明等が必要だと思われる。しかし歌本文にそれに関する説明がないのであるから、この可能性はさほど考えられない。さて今ひとつは、通常は用いない大げさな表現をわざとらしく口にすることで明るい笑いを誘おうとする場合である。こちらの可能性を当該の歌に当てはめるならば、たとえばこの歌を、花見の席上で披露された明るい行楽の歌だったと想定することも容易である。そのように想定した上で、今少し憶測を重ねる。

花見の場に、様々に着飾った人々が集っている。その中に桜襲の衣、すなわち桜色の衣を着た人物がいる。桜色は「華麗な映発するような情感を得られる服色のよう」(井原昭『古典文学における色彩』)で、そうした衣であれば一同の中でも目立つことであろう。

その美しい衣を着た人物が一座の注目を浴びながら、「実は、この深い桜色の衣は」(と、「衣を」ではなく「衣は」)と持ち出し、「亡き人の形見として衣を見ることがよくあるように、自分は桜の散った後の形見とするために、桜色にこの衣は深く染めて着ようと思うのです」と、大げさな口ぶりで宴席に供した。——たとえば以上のような場で詠まれたものとして、ふさわしい表現に、当該の歌はなっているように思われる。

【歌意】



桜色に（この）衣は深く染めて着よう。（この美しい）花が散った後の形見に（なるように）。

66 あめふればかさとり山の紅葉ゞは行かふ人の袖さへぞてる

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋下 二六三

【注】

〔あめふれば〕

「あめふれば」は、雨が降ると笠を手に取る、という言葉続きで「笠取山」の枕詞として文法的には機能している。また「雨降る」という言葉と対照的な意味を持つ「照る」という言葉が結句に配されていることの、いわば文字面のおもしろさを醸し出すことにもなっている。

〔笠取山〕

「笠取山」は『醍醐寺要書』に引用する『貞真公記』延長八年十月十日条（醍醐天皇崩御条）に「亥四剋奉葬於醍醐寺北笠取山西方…」と記される醍醐寺近辺の山のことかと思われる。そしてこの山が和歌に詠まれるときには、

雨ふれどつゆももらじをかさとり山はいかでもみぢそめけむ

（古今集 秋下 二六一）

宗于朝臣のむすめ、みちのくにへくだりけるに

いかで猶かさとり山に身をなしてつゆけきたびにそはんとぞ思ふ

返し

かさとり山とたのみし君をおきて涙の雨にぬれつつぞゆく

（後撰集 離別 一三二五・一三二六）

などのように、当該の歌と同じく、雨具の笠と掛詞的に用いられることが常である。

〔袖さへぞ照る〕

前項でも述べたが、初句の「雨降る」は、結句の「照る」と反意語であり、「アメフレバ、クモルベキニ、モミヂノ色テルトヨメリ」（寂恵本古今集勘物）という意外な言葉続きのおもしろさをもたらしている。

〔65番の歌との対応関係について〕

65番の歌が「衣：染む」、66番の歌は「袖：照る」と、いずれも美しい自然物の色

が着物にうつることをいう点で共通する。さらに、66番の歌が「雨降る」と「照る」という反意語が並ぶおもしろさを持つものであることを意識したとき、65番の歌でも「さくら」と「ちる」という反意語の並びが含まれていることに気づく。なお、「桜」の語に「咲く」が意識されるということは、

さくらの花のもとにて年のおいぬることをなげきてよめる  
いろもかもおなじむかしにさくらめど年ふる人ぞあらたまりける

(古今集 春上 五七)

う月にさけるさくらを見てよめる

あはれてふ事をあまたにやらじとや春におくれてひとりさくらむ

(古今集 夏 一三六)

などのように、決して珍しいものではなかった。

### 【歌意】

(アメフレバ) 笠取山の紅葉は行き交う人の袖までが照る(ほどにすばらしい)。

67 桜いろにまさる色なき花なればあたら草木も物ならなくに

【校訂】 底本初句「桜いろ」<sup>より家</sup>、四、五句「あたら<sup>あたらしきをはをれとやはみる</sup>草木も物ならなくに」。新撰和歌諸本

により本文の方をとる。また、底本第三句「花なれば」<sup>春</sup>。新撰和歌諸本「花」とするものと「春」とするものが混在する。仮に本文の方を採るが、「春」の可能性も否定はできない。

【他出文献】貫之集 二七〇。但し、伝本により語句にいささかの違いが見られる。仮に国歌大観の本文で示せば「桜よりまさる花なき春なればあたらしきをばものとははみる」。同集には延喜十年の屏風歌とあり、新撰和歌に先行する作であることがわかるので、歌句の差異は新撰和歌に採る際に貫之が改めたものと、一応考えたい。

### 【注】

〔桜色〕

桜の花の色。この歌では所謂、桜襲という意味合いは考えにくい。なお、そうした、衣の色に関わらない「桜色」の例はきわめて珍しい。

〔勝る色なき花なれば〕

この部分、わかりにくいのが、あえて意味を取るならば「桜色に勝る色はない、(それが)花(の道理)なので」というほどのものとなる。あるいは底本傍書や貫之集に見られ

る「春なれば」に改めるべき、という可能性も捨てきれない。その場合は「桜色に勝っている色はない（＝あらゆる花の中で桜が最高の）春なので」となる。

「ものならぬに」

「ものならぬに」は、

あやなくてまだきなきななたつた河わたらでやまむ物ならぬに

（古今集 恋二 六二九）

などのように、通常、「ものではないのに」という意を表し、逆接の文脈で用いられるが、

人の家の竹

千世もたる竹の生ひたる宿なれば千種の花はものならぬに（貫之集 三五〇）

のように、「物の数ではないのにねえ」というほどの、詠嘆的な用法もみられる。当該歌はこうした用法であろう。

【歌意】

桜色に勝る色はない、（それが）花（の道理）であるので、（その桜の前では）もったいない（＝惜しいような）草木（の花）も物の数ではないのにねえ。

68しら露の色はひとつをいかなれば秋の木の葉をぢぢに染らん

【校訂】底本三句「いかないかなればイにして」。四句「秋の千種木の葉イを」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】古今集 秋下 二五七。

【注】

〔白露〕

59番歌【注】参照。秋の景物の一つ。この歌では、

いとはやもなきぬるかりか白露のいろどる木木もみぢあへなくに

（古今集 秋上 二〇九）

と同様、露の「白」という言葉のイメージと紅葉の鮮やかな色彩のイメージとが対比される、そのおもしろさに着目した表現である。

「いかなれば」

第三句は、古今集の諸本では「いかにして」とあるが、新撰和歌の大多数の伝本は「いかなれば」である。新撰和歌に収める際に、編者が改変したものであるろう。

さて、「いかにして」は、方法や手段への疑問を表現する言葉であり、古今集の歌は、たった一色の白露が「どのようにして」秋の木の葉を様々な色に染め上げたのか、という

疑問や好奇心を表したものとなる。一方、新撰和歌の「いかなれば」は、対象のあり方そのものに対する疑問を表す。ただしこの表現の場合、

みつねただみねにとひ侍りける 参議伊衡

白露はうへよりおくをいかなれば萩のしたばのまづもみづらん

(拾遺集 雑下 五一三)

のように、疑問に対する解答を求める文脈で用いられた例もあるが、

九月つごもりの日、をとこ女野にあそびてもみちを見る 源したかふ

いかなればもみぢにもまだあかなくに秋はてぬとはけふをいふらん

(拾遺集 雑秋 一一三六)

延喜十五年の春齋院の御屏風のわか、うちの仰によりてたてまつる

をんなどもたきのほとりにいたりて、あるはながれおつる花をみ、あ

るは手をひたして水にあそべる、

春

春くれば滝の白糸いかなればむすべども猶泡にとくらん (貫之集 四四)

などのように、疑問の形でもって、強い詠嘆を表していると考えられるものが多い。当該の歌もこれらと同様に、答えを求めているというよりも、あの一色の白露がこんなにも多様な紅葉の色を生み出すとは、という美的な詠嘆を表しているものと考えたほうが良いと思われる。すなわち、古今集から新撰和歌への語句の改編は、知的な好奇心を前面に出した歌から、美的鑑賞に比重を移した歌へと作り替える意図によるものであったと思われる。なお、そうだとした場合「一つ」と「千ぢ」の対比など、言葉の技巧を凝らしたものであることに違いはない。

〔67番の歌との対応関係について〕

それぞれ、桜と紅葉という季節を代表する景物の「色」について思索を巡らした体の歌の対と考えられよう。

【歌意】

白露の色は一つなのに、どうしてまた秋の木の葉を様々(な色)に染めるのだろうか。

69世中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春上 五三

【注】

〔たえて〕

まったく、の意。「なし」を強調する。

〔春の心〕

古今集の諸注では、「春の人の心」と説明することがほとんどである（新日本古典文学大系『古今和歌集』は「春の心 春そのものの心、その本性、そして、春の人の心」とする）が、そのように「人の心」と解すべき例は同時代の和歌には見いだしがたい。一方、

吹く風に深きたのみのむなしくは秋の心をあさしとおもはむ

（後撰集 秋中 三三三）

などのように、季節を擬人化して、その心、という意で用いたものや、

ひととせに二たびにほふ梅花春の心にあかぬなるべし （貫之集 二六七）

のように、「春の風情」あるいは「春の気分」（日本古典集成『土佐日記 貫之集』）というほどの意味の「春（秋）の心」という例であれば、他にいくつか見いだすことができる。また後の例ではあるが、散文でも、

：あらたまの年よりも若宮の御有様こそ、いみじうつくしうおはしませ。若水して  
いつしか御湯殿参る。よろづ皆春の心つきて、空のけしきもひきかえ、さまざまに物  
けざやかにめでたきに： （栄華物語 卷二十八 若水）

と、「春そのものの心」、あるいは「春の気配・雰囲気」というほどの意で用いられた例が見られる。さらに、新撰和歌でこの歌と対にされている70番の歌が、後述するように擬人法的な表現を用いた和歌であることから、少なくとも新撰和歌編者の紀貫之自身はこの歌の「春の心」を、まずは「春そのものの心・風情」と理解していたと思われる。

但し、漢詩文に見られる「春心」という言葉は、「春の人の心」を意味するもののごとくであり、平安時代の歌人たちもそうした漢語を知っていたと思われる。そのことと重ね合わせて考えるならば、おおかたの説のように「春の人の心」という理解でこの歌が受け取られる契機は十分にあるし、また、一首全体からは、桜を愛でる人の心があわただしい、ということが読み取れるのも事実である。なお、「春そのものの心」という意味での「春の心」は、「禁苑残鶯三四声 景遅風慢暮春情（禁苑の残鶯三四の声 景遅くして風慢るなり暮春の情）」（白居易「残春曲」）などの漢語「春情」によりながらつくられた歌語という可能性も考えられるように思う。

「のどけからまし」

この時代、桜の花の散る様のせわしなさを詠む場合には、

久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ (古今集 春下 八四)

うちはへてはるはさばかりのどけきを花の心やなにいそぐらん

(後撰集 春下 九二)

などのように、そのせわしなさを、春という季節全体の醸し出すのどかな雰囲気と対照的なものとして強調する、一つのパターンがあったようである。そうしたパターンのあることを前提としたとき、桜のために本来はのどかであるべき春そのものまでもせわしなく感じられるという「世の中に」の歌の趣向は、新奇で大仰なものとして受け取られていたものと想像される。

【歌意】

世の中にまったく桜がなかったならば、春の心(風情)は(額面通り)のどかだったろうに。(そして桜を愛でる人の心も穏やかだったろうに)

70さほ山のはゝその紅葉ちりぬべみよるさへ見よとてらす月かげ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋下 二八一

【注】

〔佐保山のははその紅葉〕

佐保山は万葉集の時代から歌に詠まれてきた地名であるが、平安朝にいたって紅葉とともに詠まれるようになる。古今集では、この歌と、

秋ぎりはけさはなたちそさほ山のははそのもみぢよそにても見む

(古今集 秋下 二六六)

佐保山のははその色はうすけれど秋は深くもなりにけるかな

(古今集 秋下 二六七)

の、都合三首「佐保山のははその紅葉」を詠んだ歌が見られ、これが古今集の当時、ある程度流行した、比較的新しい歌の素材であったものと思われる。

〔紅葉と月影〕

夜の紅葉を詠んだ歌は、この時代にあまり多くはない。ところがその中で、

秋の月山辺さやかにてらせるはおつるもみぢのかずを見よとか

(古今集 秋下 二八九)

てる月の秋しもことにさやけきはちるもみぢばをよるもみよとか

(後撰集 秋下 四二八 読み人知らず)

ちるもみぢよるも見よとや月影の梢のこらずてりわたるらん

(古今和歌六帖 二九五)

など、当該の歌と類似する趣向の歌が、いくつか見いだせる。このことから、こうした、月を擬人的に詠む表現が、一つの流行のパターンとしてあったと想像される。

〔69番の歌との対応関係について〕

いずれの歌も擬人法的な手法を用いていたことが指摘できる。また、69番の歌の落花と70番の歌の落葉も対照的な素材である

【歌意】

佐保山のははその紅葉が散つてしまいそうだから、(昼だけではなく)夜までも見なさい、と(ばかりに)照らしている月の光よ。

71桜ばなちらばちらなんちらずとてふる郷人のきてもみなくに

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春下 七四

【注】

〔散らば散らなん〕

この表現は、語義としては、桜に対して散ることを望んだものである。ただし、一首の趣旨は、古今集諸注の多くが説くとおり、「ふるさと人」と共に桜を愛でたいという気持ちを表したものと解すべきであろう。

〔ふるさと人〕

「ふるさと」はなじみの土地。「ふるさと人」はかつてそこに住んでいた人という意味であるが、

人はいさ心もしらずふるさとは花ぞ昔のかにほひける

(古今集 春上 四二 貫之)

のように、恋愛の雰囲気を漂わせる文脈で用いられることがしばしばある。当該の歌も、同様に、恋愛の雰囲気を読み取ることが可能と思われる。

【歌意】

桜花よ。散るならば散っておくれ。散らなかつたとしても、かつてここにいた人が来て見

ることもないのだから。

72 女郎花おほかる野べにやどりせばあやなくあだの名をやたちなん

【校訂】底本結句「名をやなかさん」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】古今集 秋上 二二九

【注】

〔女郎花〕

「をみなへし」という花の名に「女（をみな）」をかけることは、この当時、常套的なものであったらしく、古今集二二六〜二三八に見られる一群のおみなえしの歌も同様の趣向を用いたものとみられる。そうした歌々の中で、この歌が新撰和歌に選ばれたのは、後述するように「あやなくあだの」という印象的な同音の繰り返しに着目し、71番の歌と対にしようとしたためと、考えたい。

〔名をやたちなん〕

この「名をたち」は、四段活用動詞「立つ」が他動詞として用いられたものか。この表現は、表向きには浮き名の立つことを恐れているものであるが、一首の趣旨としては、女郎花の咲き乱れる美しい野辺への賛辞となっている。

〔71番の歌との対応関係について〕

この二首を眺めて、まず目につくのは、71番の歌の「ちらばちらなんちらずとて」という同音の繰り返しである。そのようなリズムカルな口調の歌と対にされていることで、72番の歌の「あやなくあだの」という同音の繰り返しが浮かび上がってくる。また、桜に呼びかけたり、おみなえしを女性になぞらえたりという擬人的な用法も類似点として指摘できよう。

【歌意】

おみなえしが多くある野辺に宿りをしたならば、道理にあわぬことに、浮気者の評判を立ててしまうのだろうか。

73 春のきる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春上 二三

【注】



〔春の着る霞の衣〕

初二句は、古今集の諸注の指摘するように、漢語の「霞衣」に想を得て、山にかかった霞のことを「春の着る霞の衣」と表現したものであろう。

〔ぬきをうすみ〕

平安和歌の言葉として、「ぬき」⇨横糸が「うすい」というのは、他に例の見いだしがたいものである。ただ、「うすし」は、「畝傍山 木立薄けど（虚多智于須家苔） 頼みかも 毛津の若子の 籠らせりけむ」（舒明前紀）・「稀<sub>宇須志</sub> 又万礼良尔」（新撰字鏡）などのように、ものの密度が低い場合に言う例もあり、この歌では横糸の密度が低いことを表したものととも思われる。ただ、このように考えたのでは『古今和歌集打聴』が「経緯共に薄きはいよよ破れやすきに、詞あまれば緯ばかりを云う物也」と注するように、「たて」⇨縦糸について言及のないことが疑問として残る。ならばあるいは、当時の、織物に関する用語として「ぬき」が「薄」い、という言い方があったと考える方が妥当なのかも知れない。

〔みだる〕

衣が「乱る」事に関して、先にあげた「打聴」や、「みだるるはやぶれやすき心なり」と言う『古今栄雅抄』などのように、古注のうちには布が破れることに言及したものがあがるが、現行の注釈書でそのような説明をするものは無いようである。さて、「霞の衣」はそもそも山にかかった霞を喩えたものであるから、「乱る」は霞が風に吹かれて部分的に薄くなったり、あるいは途切れたりすることを表現しているものと思われる。ならば、この表現が描き出しているのは、単に衣の裾などが乱れているという程度の情景ではなく、衣全体がぐしゃぐしゃになり、破れるような乱れた様だと考えることは十分に可能である。また、そのように考えれば、紅葉の落葉を錦がばらばらにちぎれる様に喩えた74番の歌と対にされていることが、よりいっそう納得できる。

【歌意】

春が着る霞の衣は横糸が薄いので、山風のために（吹き千切られてぐしゃぐしゃに）乱れそうだ。

74しものたて露のぬきこそよはからし山の錦のおればかつちる

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋下 二九一

【注】

〔山の錦〕

周知のように、紅葉を織物である錦に喩えることは漢詩に由来する表現であり、

経もなく緯も定めず娘子をよめらが織るもみち葉に霜な降りそね

（万葉集 卷八 一五二二 大津皇子）

のように、ごく早くから和歌表現に利用されてきたものである。ただ、それらの歌は、通常、

竜田河錦おりかく神な月しぐれの雨をたてぬきにして （古今集 冬 三一四）

のように、美しい紅葉の景を織り上げられた錦に喩えるのに対して、この歌では、紅葉の落葉を、織るはしからばらばらになってしまふ錦で喩えている。そうした、漢詩の表現に「一ひねり」をくわえた新しさが評価されたのかも知れない。

〔73番の歌との対応関係について〕

いずれの歌も、霞や紅葉を織物に喩える漢詩由来の表現を用いたものである。さらに、霞が風に吹き乱されることを衣が乱れると言ひ、紅葉が落ちることを錦がばらばらになることで喩えたところも趣向として共通する。

【歌意】

霜の縦糸と露の横糸が弱いらしい。山の錦の織る端から散ってしまう（のを見ると）。

75おしと思ふ心は糸によられなんちる花ごとにぬきてとどめむ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春下 一一四

【注】

〔心は糸によられなん〕

心を糸に撚るといふ発想は、古今集諸注に早くから説かれるように、漢語「心緒」に由来するものであるう。

〔散る花ごとにぬきてとどめむ〕

糸でもって玉をつらぬきとめるという表現は、新撰和歌76番の歌もそうであるように、しばしば見られる、いわばありふれたものといえよう。ところが、当該の歌のように、花をつらぬきとめるという表現は、後の、

ちるはなをぬきもとめなむはるくればいとよりかくるあをやぎのえだ

など、例がないわけではないが、稀なものである。この稀な表現をどのようにして素性が歌い得たのかという事に関しては、あるいは、万葉集や漢詩に見られる、花を玉と喩える表現を参考にした(本論文第一部第二章第一節参照)かとも思われるが、よくはわからない。ただ、いずれにせよ、古今集の時代には、類例のない新鮮な印象の表現であったものと想像される。

「くなむ(希求) くむ(意志)」

「くなむくむ」という表現を用いた歌は

かきくらしことはふらなむ春雨にぬれぎぬきせて君をとどめむ

(古今集 離別 四〇二)

こむ世にもはや成りななむ目の前につれなき人を昔とおもはむ(同 恋一 五二〇)

たまぼこの道はつねにもまどはなむ人をとふとも我かとおもはむ

(同 恋四 七三八)

などのように、しばしば見られるものである。そしてその多くは、「くなむ」の部分で現実味の薄い、或いは通常は望まない類の事を述べ、以下でそのように望む理由が、いわば謎解きのような形で明かされる形式となっている。この歌でも、心が糸に撚られて欲しい、という願いの理由が、散る花を綴ってとどめたいから、というふうに分かされている。

【歌意】

惜しいと思う心は糸に撚られてほしいものだ。(そうしたら)散る花ごとに(一つずつその糸で)ぬいて(散るのを)とどめよう。

76 あきの野にをく白露は玉なれやつらぬきかくる蜘蛛のいとすぢ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋上 二二五

【注】

〔秋の野に置く白露は玉なれや〕

この歌のように、「A(は) BなれやC」という表現を用いた和歌が、万葉集の時代からしばしば見られる。それらのうち、AとBの関係が見立てや比喩である場合、

麻統王、伊勢国の伊良虞の島に流さるる時に、人の哀傷びて作る歌

打麻を麻統王海人なれや伊良虞の島の玉藻刈ります

(万葉集 卷一 二二三)

溺れ死にし出雲娘子を吉野に火葬る時に、柿本朝臣人麻呂の作る歌

山のまゆ出雲の児らは霧なれや吉野の山の嶺にたなびく（万葉集 卷三 四二九）  
などのように、「AはBだ」というのか。そうではないのにCという状態である」という程の意味と考えられよう。平安朝の歌でも同様で、たとえば、

わがこひはみ山がくれの草なれやしげさまされどしる人のなき

（古今集 恋二 五六〇 小野美材）

かみな月時雨の雨は灰なれや木々の木の葉を色に染ける（新撰和歌 一二六）

は、それぞれ「私の恋は深山に隠れた草だ」というのか。そうではないのに、どれだけ茂っても知る人がいないことよ。」「神無月の時雨の雨は染め物に使う「灰」だ」というのか。そうではないのに、木々の木の葉を美しい色に染めたことよ」と、解釈されるべきであろう。ただ、内容的に言えば、古今集の時代の歌になると、「AはBなれや」で提示された比喩・見立てについて、C部分で、そのように見える・言える理由を明かすものになっている。これも一種の謎解きの形式であるといえよう。その点で、万葉集以来の詠みぶりとは異なる、新しい表現たり得ているものと考えられよう。

〔貫きかくる〕

野に置いた露の玉を蜘蛛が糸で抜いて、枝か何かにかけてたのである。なお、露のを玉に見立てる技法は、周知のように漢詩文に学んだものである。

〔75番の歌との対応関係について〕

玉や花を糸で通して連ねるといふ共通のイメージを描いた二首の対となっている。また、両首ともに漢詩文に由来する表現を用いていることと、一種の謎解き形式になっていることも指摘できる。

【歌意】

秋野のに置く白露は玉だというのか。（そうではないのに、露を玉のように）つらぬいて掛けている蜘蛛の糸の筋よ。

77ちる花の鳴にしとまる物ならば我鶯におとらざらまし

【校訂】底本結句「おとらざらめ<sup>まし</sup>や」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】古今集 春下 一〇七

【注】

〔我鶯におとらざらまし〕

花のちることやわびしき春霞たつたの山のうぐひすのこゑ（古今集 春下 一〇八）  
こづたへばおのがはかぜにちる花をたれにおほせてこころなくらむ（同 一〇九）  
のように、鶯の鳴き声を、落花を惜しんでいるのだ、と考えたり、

なきとむる花しなければうぐひすもはては物うくなりぬべらなり

（古今集 春下 一二八）

なくとも花やはとまるはかもなくくれゆく春のうぐひすの声（躬恒集 四〇三）  
など、晩春に鳴く鶯の声を、落花をとどめようとして鳴いているものと見る発想の歌がこの時代にしばしば見られ、いわば流行の表現だったと思われる。当該の歌は、この発想に基づき、私だって鶯以上に花を留めたいと思っている、と述べる趣向の新しさを旨とするものである。

〔古今集との歌句の相違について〕

古今集の大方の伝本では結句「おとらましやは」とあるが、天理図書館蔵の清輔本等、いくつかの本では新撰和歌と同じく「おとらざらまし」という本文を伝える。新撰和歌はおおかたの古今集伝本が伝える「おとらましやは」を選択することもできたが、あえて「おとらざらまし」の方を選んだということだろう。その理由としては、対にされた78番の歌の結句が「時雨ふるらし」と、「らし」で終わっているのと語調の似通う方を選択した可能性を考えておきたい。

【歌意】

散る花がなくことでとどまるものであるならば、私は鶯におとらないでしょう。（いくら泣いても散ってしまいますから、鶯のようにには泣かないだけです）

78 立田河紅葉なながす神なびのみ室の山に時雨ふるらし

【校訂】底本二句「紅葉なながす」流る。新撰和歌諸本で「流す」と「流る」が混在するが、本稿の原則に従って、古今集とは異なる方の本文をとる。

【他出文献】古今集 秋下 二八四

【注】

〔竜田川・三室山〕

万葉集に

飛鳥川もみち葉流る葛城の山の木の葉は今し散るらし（万葉集 卷十 二二一〇）  
という、この歌のもととなったとも思われる歌があり、また、古今集にも

この河にもみぢば流るおく山の雪げの水ぞ今まさるらし (古今集 冬 三二〇)

のように、類似した歌が見られる。また、当該の歌は、拾遺和歌集に人麻呂の歌としておさめられてもいる。これらのことは、これらの歌々が、民謡的な広まりをもち、各地でそれぞれの地名と共に歌われ伝承されてきたことを意味する。ならば、そうした一連の歌の中から古今集および新撰和歌は竜田川と三室山が詠み込まれた、この歌を選び取ったということになる。竜田川や三室山は、紅葉の名所として屏風に描かれた例がしばしば見られることから、貫之がこのタイプの歌——川に流れる紅葉を見て、上流である山中の様子に思いを馳せる——の代表として当該の歌を選んだということであろうか。

#### 〔神なびの三室の山〕

「神なび」は、元来、神の居ます森、という意の普通名詞であつたらしいが、当該の歌については「神なび」を「神の居ます森」ととるべき理由が見いだしがたいので、「神なびの三室の山」で一つの固有名詞として扱われているものと考ええる。

#### 〔もみぢ葉流す〕

第二句は古今集では「もみぢ葉流る」とある。古今集のように「流る」の場合、この動詞は自動詞であり、主語は「もみぢ葉」であるが、「流す」の場合は他動詞で、主語は「竜田川」、目的語が「もみぢ葉」となり、河が紅葉を流す、という擬人的な表現となる。では、なぜ新撰和歌は「流る」を「流す」に改めたのか。一つの仮説として、77番の歌と対にするためであつたと考えてみたい。即ち、77番の歌は、鶯の鳴き声を、落花をとどめようという人間のような意志を持つものとして描いていた。それと対にするために、竜田川が意志を持って紅葉の葉を流している体の歌に改めたのではないだろうか。

#### 〔77番の歌との対応関係について〕

右に述べたように、擬人的な表現を用いている点で、二首が対にされているものと考えたい。さらに、77番の歌は、落花の中で鳴く鶯を見て、それが鳴く理由を想像する発想によるものであつたし、78番の歌は、眼前の紅葉を流す川の景から、目に見えぬ三室山の山中を想像するものであつた。そうした眼前の景から目に見えぬ背後のものを想像する発想の共通性も考えられるかも知れない。

#### 【歌意】

竜田川が紅葉の葉を流している。(それからすると) 神奈備の三室の山には時雨が降っているらしい。(そのために紅葉が色づき、また川の水も増したのだろう。)

79 駒なめていざ見にゆかむ故郷は雪とのみこそ花はちるらめ

【校訂】底本初句「駒なへて」。新撰和歌諸本により改める。ただし、「なべ」は「なめ」の子音が交替したかたちとして早くから「迦賀那倍弓（日々並べて）」（古事記歌謡二六）のような例もあるので、単純に底本の誤写とも言えない。

【他出文献】古今集 春下 一一一

【注】

〔駒なめて〕

万葉集には「馬<sup>うま</sup>なめて」という表現が多く見られるが、これは、

秋風は涼しくなりぬ馬並めていざ野に行かな萩の花見に（万葉集 卷十 二一〇三）

馬並めていざ打ち行かな淡溪の清き磯廻に寄する波見に

（万葉集 卷十七 三九五四）

などのように、行楽に連れ立って出かける様をいうときに用いるものと思われる。さらに、

日並し皇子の尊の馬並めてみ狩り立たしし時は来向かふ（万葉集 卷一 四九）

：朝狩りに 鹿猪踏み起こし 夕狩りに 鳥踏み立て 馬並めて み狩を立たす 春の茂野

に（万葉集 卷六 九二六）

などからすると、この表現には、相当程度大がかりなイメージが伴っていたかと思われる。

「いざ」という、他人に号令を掛ける言葉とともに使われることが多いのも、そのように考えて納得がいく。

〔ふるさと〕

「ふるさと」は、古くなった里、昔なじみの里、というほどの意。奈良や吉野を指す場合もしばしばあるが、当該の歌ではそのような特定の地を指しているとは考えにくい。

〔ふるさとは雪とのみこそ花はちるらめ〕

ふるさとに花を見に行く、という趣向の歌は、

ふりはへていざふるさとの花見むとこしをにほひぞうつろひにける

（古今集 物名 四四一）

齋院屏風に、山みちゆく人ある所

ちりちらずきかまほしきをふるさとの花見て帰る人もあはなん

（拾遺集 春 四九 伊勢）

など、同時代の歌に例を見ることができ、ふるさとの落花を見に行こう、という例は見いだしがたい。むろん、落花を雪に喩え、それを鑑賞する発想は、

桜ちる木のした風はさむからで空にしられぬ雪ぞふりける (貫之集 八一八)  
など、古今集の時代に好まれた趣向であるから、この発想をふるさとの花に当てはめた、新しい試みの歌として、当該の歌は位置づけられるのではなからうか。

【歌意】

馬を並べて、さあ(皆で)見に行こう。あのふるさとはまったく雪と見まごうばかりに花は散っているだろう。

80秋ならであふことかたき女郎花天河原におひぬ物ゆへ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋上 二二一

【注】

〔秋ならで逢ふことかたき女郎花〕

上の句の表現は、

織女ににたるものかな女郎花秋よりほかにあふ時もなし

(後撰集 秋中 三四四 躬恒)

と同じく、織女も女郎花も秋にしか会えぬ「女」という、言葉遊びをしたものである。

【ものゆゑ】

「ものゆゑ」は、「活用語の連体形をうけて二つの句を結び、より一般的な前提に対して、それに反する事実を展開する関係を示す。」(時代別国語大辞典上代編)。当該の歌もそうであるが、

恋すればわが身は影と成りにけりさりとて人にそはぬものゆゑ

(古今集 恋一 五二八)

あふことを松にて年のへぬるかな身は住の江におひぬものゆゑ

(拾遺集 恋一 六二六 拾遺抄は作者を貫之とする)

遥なる程にもかよふ心かなさりとて人のしらぬものゆゑ

(拾遺集 恋四 九〇八 伊勢)

などのように、結句を「ものゆゑ」で結び、一首を倒置表現にした場合、自嘲あるいは皮肉のニュアンスが込められるようである。

〔79番の歌との対応関係について〕

女郎花は、



秋ののにやどりはすべしをみなへし名をむつまじみたびならなくに

(古今集 秋上 二二八)

ひとりのみながむるよりは女郎花わがすむやどにうゑて見ましを (同 二二六)

寛平御時、藏人所のをのこどもさがのに花見むとてまかりたりける時、

かへるとてみな歌よみけるついでによめる 平さだふん

花にあかでなにかへるらむをみなへしおほかるのべにねなましものを

(古今集 秋上 二三八)

などからわかるように、秋の野に出かけていって愛でるものとして歌われる。ふるさとの花も、当然ながら、それを見るには遠出が必要である。そうした花の愛で方の共通性で、この二首は配置されているのではなからうか。

【歌意】

秋でなくては逢うことが難しい「女」という名を持つ女郎花よ。(年に一度、秋しかあえぬ女である織女のいる)天の川の河原に生えたわけでもないのに(なぜそんなに逢うことが難しいのか)。

81 桜ちる木の下風は寒からで空にしられぬ雪ぞふりける

【校訂】なし

【他出文献】亭子院歌合 一三一・拾遺集 春 六四

【注】

〔空に知られぬ雪〕

「空に知られぬ」という言い方は、もと、

河のせになびくたまものみがくれて人にしられぬこひもするかな

(古今集 恋二 五六五 友則)

はるのうたとてよめる つらゆき

三わ山をしかもかくすか春霞人にしられぬ花やさくらむ (同 春下 九四)

などのような、「人に知られぬ」という表現があったものを、「人」を無生物に置き換えて発想されたものとおぼしいが、

雪ふれば冬ごもりせる草も木も春にしられぬ花ぞさきける

(古今集 冬 三二三 貫之)

あひおもはでうつろふ色を見るものを花にしられぬながめするかな

(後撰集 春上 五九 躬恒)

わび人は年にしられぬ秋なれば我が袖にしも時雨ふるらん (貫之集 六三七)  
など、紀貫之と躬恒の作に集中することからすると、彼らの発想による新しい表現であつたかと思われる。

〔木の下風〕

この表現も、この時代の作で詠者のわかるものは、

白雪のふりしく時はみよしのの山した風に花ぞちりける

(拾遺集 冬 二五三 貫之)

夏衣うすきかひなし秋まではこのしたかぜもやまずふかなん (貫之集 一五〇)

など、貫之に限定される。さらに、古今和歌六帖でも、「木の下風」は、

つらゆき

夏衣うすきかひなく秋まではこの下風のやまずふかなん (古今和歌六帖 一〇八)

夏のかぜ

みつね

行く道はまだとほけれど夏山のこの下かぜはたちうかりけり (同 三九四)

おなじ人(貫之)

かげふかきこのした風のふきくれば夏のうちから秋にざりける (同 四〇〇)

と、貫之・躬恒の作であるか、あるいは彼らに擬せられたものに限られる。やはり、貫之と躬恒が創り出したものである可能性が高い。

【歌意】

桜が散る木の下の風は寒くなくて、空に知られない雪が降っているよ。

82 みる人もなくてちりぬる奥山の紅葉は夜の錦也けり

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋下 二九七

【注】

〔夜の錦〕

「夜の錦」は、古今集諸注の指摘するとおり、『史記』項羽本紀に載せる朱買臣の故事を利用して紀貫之が創作した表現であろう。人に見てもらえなくては、せっかくの豪華さが無駄になる、という程の意で用いられる。この表現は、以後、多くの歌人に利用されており、高く評価されたようである。

〔81番の歌との対応関係について〕

この二首には、空の知らぬところで降る雪と、人に知られないままに散ってしまう紅葉、という発想と、花を雪に、紅葉を錦にたとえる技法との類似が指摘できる。さらに加えるならば、いずれも貫之と躬恒の創り出した新しい趣向の歌である。この点も意識されていないかも知れない。

【歌意】

見る人も無くて散ってしまう奥山の紅葉は（まったく、史記に言う）「夜の錦」であったよ。

83行水にみだれてちれる桜花きえずながるゝ雪と見えつゝ

【校訂】なし

【他出文献】古今集元永本・六条家本等の春部八〇番の歌の次に見える。所謂定家本系の本文には見られない。それらの本では作者を紀貫之とする。

【注】

〔流るる雪〕

「流るる雪」は、水の流れに浮く桜の花びらを雪に喩えたものである。この表現は類例の少ないものであるが、もと漢語の「流雪」に由来するものとおぼしい。万葉集では、

巻向の檜原もいまだ雲居ねば小松が末ゆ沫雪流る （万葉集 卷十 二三四一）

我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも （同 卷五 八二二）

のように、雪の降る様にこの表現が用いられた例が見られるのであるが、その後——おそらくは雪の降る様を和語の「流る」で表すことが不自然であったためと思われるが——こうした表現は見られなくなる。その、一旦は忘れられた表現を、貫之が再発見し、実作に用いたものが当該の歌であると思われる（本論文第一部第二章第二節参照）。さて、漢籍の「流雪」は、「繁雲は重陰より起こり、廻颯は軽雪を流す」（謝惠連「詠冬」 芸文類聚歳事部 冬）「遠翔馳声響き、流雪自ら飄颻たり」（王融「遊仙詩」 古文苑卷九）など、強い風のために雪の乱れ舞う様を言うらしい。万葉歌の例も、それぞれ、小松の枝の先を舞い踊る雪片、あるいは、梅の落花と見まごう様に舞い落ちる雪を表したものと考えられ、漢語「流雪」と同様の情景を示していると思われる。当該の歌でも、川の早い流れの中に乱れ散り、踊るようにして下っていく桜の花びらの様を「流る」と表現したのであろう。なお、古今集の諸本のうち、この歌を伝えるものの本文の第二句は、皆「風の吹

きいるる」である。貫之の初案がこの形であり、それを、漢語「流雪」の用法を意識して改めたものが新撰和歌の本文であると、考えておきたい。

〔雪とみえつつ〕

「つつ」は動作の反復・継続。この歌は桜の花びらが空中を乱舞し水面に落ち流されていく様子の、風に舞う雪に見まごうがごとき光景をテーマとしたものであるが、そのように見える瞬間が何度も何度も繰り返されるといふ、幻想的な情景を描き出す効果を、この「つつ」が担っている。なお、元永本等の古今集に見られるこの歌の結句は「雪かとぞ見る」（新撰和歌では底本および元禄版本の傍記にも同様に記されるが、これは古今集の形の本文が紛れ込んだものであると考える）。この形の本文——他動詞「見る」——であると、舞い散る桜を雪と錯覚したのが、それを見た当人の責任に帰せられる。それに対して、新撰和歌の本文——自動詞「見ゆ」——では見る者の意識を介在させない。つまり、桜の落花だけに焦点を合わせた、より、美的・幻想的なイメージの歌になるものと思われる。そしてそうした効果を狙って貫之が改編したものであろう。

【歌意】

行く水に乱れて散っている桜花は、消えぬままに流れる雪と見え、また見えている。

84 浪わけてみるよしも哉わたつ海の沖の玉も紅葉散やと

【校訂】底本初句「浪かけて」。新撰和歌諸本で「わけて」と「かけて」が混在するが「浪かけて」では意が通じにくいので傍記の方をとる。底本四句「沖の玉そこもみるめ」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】後撰集 秋下 四一七

【注】

〔浪わけて〕

この語は、

玉だれのこがめやいづらこよろぎのいその浪わけおきにいでにけり

（古今集 雑上 八七四）

などのように、水上を舟などで進むことを示す場合と、

伊勢の海に遊ぶあまともなりにしか浪かきわけてみるめかづかむ

（後撰集 恋五 八九一）

などのように、水中に潜ることを示す場合とがあるが、ここでは後者の用法。

〔わたつみ〕

もとは「海の神」を意味し、この時代にもそうした用法はあったと思われるが、当該の歌では「海」だけを示す。

〔玉藻〕

「玉藻」は、水草一般の美称。特定の種類の藻を示す語ではない。なお、当該の歌の第四句は、後撰集では「底の海松布<sup>みろふ</sup>」である。こちらの本文であると、一首は、紅葉しないはずの「松」という文字を含む「海松布」が紅葉するのかどうか確かめてみたい、という言葉の遊戯を主眼とした、機知的な歌ということになる。古今集の時代の歌人である文屋朝康の歌としては、この、後撰集の本文の方がふさわしいというべきか。一方、新撰和歌の本文「玉藻」であると、そうした言語遊技の要素は減少し、その分、「玉」という美称を含んだ優雅な語のもたらす美しいイメージが前面に現れる。こうした、優美で幻想的な光景の歌にするために、新撰和歌に入れられる際、本文が改められたものではなからうか。

〔紅葉散る〕

平安期の和歌において藻が美しく紅葉するという例は見いだしがたい。当該の歌の、遙か沖合の海底でゆらゆらとなびいている藻が美しく色づいているという幻想的な光景を描き出していることは、斬新な試みだったかと思われる。

〔83番の歌との対応関係について〕

この二首は、いずれも水の関わる幻想的な虚構の光景を描いた斬新な表現の歌として対にされているものと思われる。

【歌意】

浪を分け、潜って見る方法があればなあ。海の沖の玉藻も紅葉が散っているかと（確かめたいのだが）。

85 桜花散ぬる風の名残には水なき空に浪ぞ立ける

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春下 八九

【注】

〔名残〕

「なごり」の語は、もともと

難波潟潮干のなごり飽くまでに人の見むこを我しともしも（万葉集 卷四 五三三）

：風しも吹けば なごりしも立てれば： (催馬楽「紀の国」)

などのように、潮の引いた後や風の吹いた後に残る波のことを意味したものが、

夕されば君来まさむと待ちし夜のなごりそ今も寝ねかてにする

(万葉集 卷十一 二五八八)

のように、抽象的な、物事の過ぎ去った後の余韻という程の意味でも用いられるようになったものであるらしい。当該の歌が詠まれたころには、どちらの意味で用いられた例も見られるが、前者の意味で用いられたものは、

いたづらに立帰りにし白浪のなごりに袖のひる時もなし (後撰集 恋四 八八四)

おきつ風ふけひのうらにたつなみのなごりにさへや我はしづまむ (伊勢集 三八四)

名残をば松にかけつつ百年の春のみなどにさける藤なみ (貫之集 三四一)

などのように、ほとんどが「波」という語と共に用いられている。さらに、

ありそ海の浦とたのめしなごり浪うちよせてけるわすれがひかな

(拾遺集 恋五 九七九)

と、「なごり波」という言い方が見られることからすれば、潮の引いた後や風の吹いた後に残る波という具体的なものを「なごり」の語は意味する、という意識が、この時点で薄くなっていたことが看取できる。

さて、当該の一首は、

見る人もなくてちりぬるおく山の紅葉はよるのにしきなりけり

(古今集 秋下 二九七)

などと同様、古今集の時代によく見られる、上の句で謎を含む主題を示し、下の句でその種明かしをするという体の歌である。この歌の場合、上の句が示された時点では、「なごり」の語は、より一般的であったろう、抽象的な意味で受け取られることが推測される。すなわち、桜の花が散った後に残るものは…、という謎を受け取る事になる。そして、下の句で、それは、水もない空に立った波だったのだ、と、「なごり」の語義がずらされる形で提示される。そのズレのおもしろさ、機知が、この一首の眼目であったと思われる。なお、この歌のすばらしさは、機知を眼目とした作りのものでありながら、一首全体としてじっくりと見た時、浮かび上がる幻想的な光景が、きわめて美しいという点にある。つまり、単なる機知の歌に終わっていないところが、この歌の勝れた点であるといえよう。

### 【歌意】

桜花が散った風の名残には…水のない空に余波が立ったよ。

86 我きつる方もしられず暗布山木々のこのはの散とまがふに

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋下 二九五

【注】

「我が来つる方もしられず」

「くも知られず」という言い方は、

今はこれよりかへりねとさねがいひけるをりによみける

藤原かねもち

したはれてきにし心の身にしあれば帰るさまには道もしられず

(古今集 離別 三八九)

女のもとよりかへりてあしたにつかはしける 源重光朝臣

かへりけんそもしられずをばすての山よりいでし月を見しまに

(後撰集 恋二 六七五)

思ひやる方もしられずくるしきは心まどひのつねにやあるらむ

(同 雑四 一二八六)

などのように、単に道が分からないということではなく、戸惑い、途方に暮れる心情を表現するものようである。

「くらぶ山」

「くらぶ山」は、鞍馬山の異称とも言われるが、この山の名は、

秋の夜の月のひかりしあかければくらぶの山もこえぬべらなり

(古今集 秋上 一九五)

などのように「暗」との掛詞や、

わがこひにくらぶの山のさくら花まなくちるともかずはまさらじ

(古今集 恋二 五九〇)

「比ぶ」との掛詞に用いられることがしばしばある。いずれにせよ、その実体よりも名称に関心がよせられることの多い山のようなのである。したがって、当該の歌でも、「我が来つる方」がわからないのは、一つには、くらぶ山が「暗」いため、という意味を読み取るべきであろう。

「木々の木の葉」

「木々の木の葉」という言い方は、

つねよりも木ぎのこの葉はおく霜にくれなみふかくみゆる比かな (千里集 四三)  
夜をかさねふきこん風をおもふかなきぎのこのはおちそむるより

(和泉式部統集 二九〇)

など、少数ながら他にも用例を見るものである。ところで「木の葉」は元来「木」の「葉」であったはずであり、「木々の木の葉」は冗長な表現と言わざるを得ないが、「8番の歌との対応関係について」の項で述べるように、これは、むしろ、その冗長な言い回しや語調のおもしろさの故に用いられたものと思われる。

〔散るとまがふに〕

この句は非常に難解であり、古今集の諸注釈書でもいまだ確たる解釈は提案されていないように思われる。

「くるとまがふ」という言い方は、同時代では新撰和歌の編者紀貫之に例が見られる。

源のとしのぶのあそんよびにおこせたるに、いままでこむとておそ

くきければ

はる日すら我がまつ人のこじとだにいはずはあすも猶たのままし

とある返し

こじとおもふ心はなきを桜花ちるとまがふにさはるなりけり

(貫之集 八三二・八三三)

この歌の解釈も当該歌と同様、非常に難しいが、日本古典集成『土佐日記 貫之集』の説の通り、業平の

さくら花ちりかひくもれおいらくのこむといふなる道まがふがに

(古今集 賀 三四九)

を踏まえて、およそ「あなたのところに行くまいと思う気持ちは無いが、桜の花が散ってそのために道が分からなくなるという差し障りがあったのです」というほどの内容かと思われる。当該の歌は、桜ではなく落葉を歌ったものであり、業平の歌をそのまま下敷きにしたものということはできない。しかし、貫之には

紅葉ばの散りしく時は行きかよふ跡だにみえぬ山路なりけり

(貫之集 八六)

という例もあり、落葉で道が失われるという発想が親しいものであったと想像される。したがって、今、当該の歌についても、この「こじとおもふ」の歌と同様に考え、仮に「落葉の散るのによって、わが来た方がまがふために。」という、日本古典全書『古今和歌



集』の説を支持したい。

〔85番の歌との対応関係について〕

落花と落葉というテーマの類似性の他に、85番の歌の、「余波」と「波」。そして86番の「木々の木の葉」という冗長な言葉を用いている点にも共通性が指摘できる。

【歌意】

私が来た方向もわからなくなってしまった。(ただでさえ暗く見通しのきかない)くらぶ山で、木々の木の葉が散ること道が分からないために。

87さくら花三笠の山の陰しあらば雪とふるともいかにぬれめや

【校訂】底本三句「あれば」新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】拾遺集 雑春 一〇五六

【注】

〔一首の構造について〕

一首の構造が、第二、三句を挿入と見て「三笠の山の陰しあらば、桜花雪とふるともいかにぬれめや」と取るべきものであるのか、あるいは、初句は桜を擬人化し、呼びかけたものと見て、「桜花(よ)。三笠の山の陰しあらば雪とふるともいかにぬれめや」と取るべきものであるのか、いずれとも判断し難い。ただ、当該の歌と対にされた88番の歌が、雁の涙という擬人的な表現を用いていることからすれば、新撰和歌としては、後者として取って良いものと思われる。

〔三笠の山〕

「三笠(の)山」は、

きみがさすみかさの山のみぢらばのいろ神な月しぐれのあめのそめるなりけり

(古今集 雑体 一〇一〇)

をとこのもとに、雨ふる夜かさをやりてよびけれど、こざりければ

さしてこと思ひしものをみかさ山かひなく雨のもりにけるかな

(後撰集 恋六 一〇二九 読人不知)

などのように、この山の名称が「笠」という言葉を含むことに着目して、歌に詠まれることが多い。当該の歌でも同様のことが言える。

〔拾遺和歌集歌との歌句の相違〕

当該の歌は、拾遺集にも見えるが、

さくら花みかさの山のかげしあれば雪とふれどもぬれじとぞ思ふ

(拾遺集 雑春 一〇五六)

と、第三句と結句とに本文の相違がある。拾遺和歌集の表現であれば、「笠という名を持つ三笠山の陰があるので：濡れないだろうと思う」というように、詠歌主体の論理的判断が強調されることになる。それに対して、新撰和歌の本文は、「三笠山の陰があったならば：どのように濡れるだろうか（いや濡れることはない）」と、詠歌主体は、仮定の形で前提を示し、また判断もはっきりとは言い切らない物言い以示している。その結果、一首の印象が優しく穏やかなものになっている。

いずれの本文が先行するもののかは分からないが、ともあれ、拾遺集は、落花を雪に見立てる技法と、三笠山の名から笠を連想する技法という、和歌的な技法を二つ組み合わせ提示している点で一首を評価したのであろうし、新撰和歌は、和歌的な技法の組み合わせを、優美な表現で言いおおせている点を重んじた、とすることができようか。

【歌意】

桜花よ。(笠という名を持つ)三笠の陰があるならば、(おまえが)雪のようにふつたとしても、どのように濡れるだろうか。(いやどれほど濡れはしない。)

88 なきわたる雁の泪や落つらん物思ふ宿の萩のうへの露

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋上 二二二

【注】

〔鳴き渡る雁の涙〕

雁を擬人化し、雁が泣いた涙が露になる、という発想で詠まれた歌は、

秋の夜のつゆをばつゆとおきながらかりの涙やのべをそむらむ

(古今集 秋下 二五八)

もみぢばにたまれるかりのなみだには月の影こそ移るべらなれ

(後撰集 秋下 四二二)

など、しばしば見られ、これが常套的な趣向であったらしいことがわかる。

〔もの思ふ：萩の上の露〕

「もの思ふ宿」は、古今集の諸注の言うように、「もの思ふ人」のいる宿というほどの意味であろう。ところで、「もの思ふ人」と言えば、

唐衣たつたの山のみちばは物思ふ人のたもとなりけり（後撰集 秋下 三八三）  
からころもたつたのやまのみちばはものおもふ人の涙なりけり（友則集 二九）  
などのように、涙を流す人であり、その涙が秋の葉に注がれる、という趣向の歌がしばしば見られる。したがって、当該の歌でも、萩の上に置いた露は、もの思ふ人が流した涙でもあると受け取られる。そうした涙を流す人物のイメージが浮かぶことで、一首は、雁の鳴くことを人の泣くことにかけて単なる言葉遊びの歌ではなく、艶めいた所のある、優美なものとなっている。

〔87番の歌との対応関係について〕

87番の歌では、桜の雪という見立てと三笠の笠という和歌的常套表現が組み合わされている。また、88番の歌でも、雁の涙と露という見立てと、物思う涙が葉の上に置くというこれも、和歌によくある表現が組み合わされている。そして、また、双方とも擬人的な表現を用いつつ、優美に一首をまとめたものとおぼしい。

【歌意】

（空を）ないて渡る雁の涙が落ちたのであろうか（涙にくれがちな）もの思いをする（人のいる）宿にある萩の上の露は。

89春ごとにながるゝ河を花とみて折られぬ水に袖やぬれなん

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春上 四三

【注】

〔流るる川を花と見て〕

古今集四三番の歌は「水のほとりに梅の花咲けりけるをよめる」という詞書を有するもので、二、三句の表現は、川の水面に花が映っているために、あたかも川面に花があるかのように見えることを言ったものということになる。ただし、詞書を記さない新撰和歌の歌として考えた場合、当該の歌は75番から続く桜の落花の歌の末尾を飾るものとして、花びらの浮かぶ川を見て詠んでいるものとすることになる。この場合、花びらを浮かべながら流れる川面を散り残りの桜の木であると見、その枝を折り取ろうとして川の水に袖を濡らすことを歌っている、ということになる。

当該の歌と対にされた90番の歌が、川面に浮かぶ紅葉を歌ったものであることから、このように理解すべきと思われる。

〔袖や濡れなむ〕

結句の表現は、桜の花を見たいと思うあまりに、散った花びらの浮かぶ川面が花を残した桜の木に見えて、思わずその枝を折り取りそうになり袖をぬらした。こんな錯覚をこれからも春になるたびにするのであるか。と、散る桜への愛着心を表現したものである。

【歌意】

これからも春ごとに流れる川の波を花と見て、折ることのできない水に袖が濡れてしまうのであろうか。

90 山河に風のかけたるしがらみはながれもあへぬ紅葉也けり

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋下 三〇三

【注】

〔流れもあへぬ〕

「くもあへぬ(ず)」は、

山たかみつねに嵐の吹くさとはにほひもあへず花ぞちりける

(古今集 物名 四四六)

の、本来句うはずの花が強い風のために句うことができないことや、

時雨ふりふりなば人に見せもあへずちりなばをしみをれる秋はぎ

(後撰集 秋中 二九七)

の、萩の紅葉を見せようとしても見せることができないことのように、何かをしようとしている、あるいは、ある状態であろうとするのに、それができない状況であることを表している。ここでは、水の流れに乗って紅葉が流れようとするのに、何かに引っかかって流れない様を言っている。

〔89番の歌との対応関係について〕

双方の歌ともに、川面に浮かぶ花びらや紅葉の落葉を何ものかに見立てて歌ったものである。

【歌意】

山中の川に風がかけたしがらみは、(それが何かといえば、何かに引っかかって)流れることができないでいる紅葉であったよ。

91年ふれば齢は老ぬしかはあれど花をしみれば物思ひもなし

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春上 五二

【注】

「もの思ひもなし」

「物思ひもなし」は、

ひかりなき谷には春もよそなればさきてとくちる物思ひもなし

(古今集 雑下 九六七)

まつと竹とうゑたるところに、女房みるゑに

ときはなるまつとたけとをやどにうゑてあきはくれどもものおもひもなし

(清正集 四一)

などのように、不安も心配もない安らかな心境を表す。古今集52番の歌では「そめどのきさきのおまへに花がめにさくらの花をささせ給へるを見てよめる」という詞書があるために、良房が中宮である娘を花にたとえて、その花を見ているので、何の憂いも無い、といったものとして受け取られる。一方、新撰和歌の場合は、美しい花を見ることができれば老いの憂いを忘れる、という一般的な感慨を表したものとして理解できる。

【歌意】

年を経たので我が身は老いた。そうではあるけれども、美しい花を見ているので何の不安も心配もない。

92おる人のこころのままにふぢばかまむべも色こくほころびにけり

【校訂】底本二句「こすのまにまふ」<sup>く</sup>。新撰和歌諸本で「こすのまにまに」(元禄版本

・群書類従本等)「こすのまにほふ」(岡山大学蔵池田文庫本・祐徳神社蔵中川文庫乙本等)「こすのまにまふ」(松平文庫本・内閣文庫本等)などがある。大和物語や古今和歌六帖などでは初句を「こころのままに」や「こころにかよふ」とする。新撰和歌諸伝本に見える本文ではいづれも解釈が困難であることと、対にされた歌との関係から、もとの本に「こころ」と書いてあった部分の「ころ」に「古呂」を崩した仮名が用いられ、その二文字が「春」<sup>+</sup>一字に読み誤られることで生じた誤写が、現存の新撰和歌諸伝本の共通の祖本にあったのではないかと考える。四句「む<sup>袖</sup>へも色こく」、結句「ほ<sup>にほひたりけり</sup>ころひにけり」。それぞれ、新撰和歌諸本により本文の方をとる。

【他出文献】大和物語 一五三段・古今和歌六帖 三七二四・続後拾遺集 秋上 二六八等

【注】

〔折る人の心のままに〕

初二句は、藤袴を折り取った人の心の深さと同じように、藤袴の色そのものも深く咲きにおっている、ということを表す。なお、【校訂】の項に記したように、「心のままに」という本文は、本稿が推定したものである。現存の新撰和歌諸伝本が伝える形であえて考えるならば、「こす」を

玉だれのこすのまとほりひとりみて見るしるしなき夕づくよかも

（古今和歌六帖 三五六）

たまだれのこすのすだれをゆきがてにはねられねど君はかよはず（同 一三八〇）などの「小簾」と見て、池田文庫本等の伝える「こすのまにほふ」を「小簾の間匂ふ」でも考え、「折り取った人の小簾の間を匂わせている藤袴は…」というほどの意味に、あるいはとれるであろうか。ただやはり相当の無理があるとしか言いようがない上に、91番の歌との対応上も、折り取る人の心を歌ったものである方がふさわしいと思われるので、本稿では、「心のままに」と考える。

〔ほころびにけり〕

「ほころぶ」は「藤袴」の「袴」と縁語。大和物語では結句「にほひたりけり」、古今和歌六帖では「咲きてみえけり」、続後拾遺集では「匂ひけるかな」となっている。当該の歌は、様々な形で伝承されていたことがうかがわれるのであるが、新撰和歌では、縁語を用いた形を選択したということであろうか。

〔91番の歌との対応関係について〕

91番の歌は、花を見ることで心が穏やかになる、ということを書いていた。つまり、花が人の心に影響を及ぼしているのである。一方92番の歌は、折り取った人の心のありようが、藤袴の色を深く染めるということを言っていた。つまり、人が花に影響を与えているのである。このような対照的な趣向に着目して、この二首は対にされたのではなからうか。

【歌意】

折り取る人の部屋の簾の美しくにおいやかなのにまかせて、藤袴は、なるほど色濃くほころんだことよ。

(折り取る人の心の深さのままに、藤袴はなるほど色濃くほころんだことよ。 とも)

93 蛙鳴かみなび河にかけ見えていまや咲らん山吹の花

【校訂】なし

【他出文献】万葉集 卷八 一四三五・和漢朗詠集 一四二・新古今集 春下 一六一

【注】

〔かはづ〕

「かはづ」は周知のように蛙、カジカの類を指す雅語。万葉集において「かはづ」は、かはづ鳴く清き川原を今日見てはいつか越え来て見つつ偲はむ

(万葉集 卷七 一一〇六)

み吉野の岩本去らず鳴くかはづうべも鳴きけり川をさやけみ

(同 卷十一 二二六一・古今和歌六帖 一五九六にも)

などからわかるように、清流で鳴くものという意識があつたらしいし、当該の歌でも、そうした清流が描かれているものと思われる。

平安時代に至ると、「かはづ」が和歌に詠まれた例は少なくなるが、古今集の仮名序に、「花になくうぐひす水にすむかはづのこゑをきけば、いきとしいけるものいづれかうたをよまざりける」とあることからすれば、新撰和歌集の編者である紀貫之にとって、「かはづ」を詠むことは、平安時代の歌として特別なことと意識されていなかったと想像される。

〔神なび川〕

現在の飛鳥川とも竜田川とも言われるが、不明。ただ、いずれにせよ、平安時代の人々にとって「ふるさと」である奈良の地を流れる川であつたと思われる。

〔万葉集歌との関係について〕

この歌は、万葉集に載せる厚見王の歌、

かはづ鳴く神奈備川に影見えて今か咲くらむ山吹の花 (万葉集 卷八 一四三五)

とほぼ同一のものであるが、

吉野河岸の山吹ふくかぜにそこの影さへうつろひにけり (古今集 春下 一二四)

かはづなくあでの山吹ちりにけり花のさかりにあはましものを (同 春下 一二五)

あきはぎの花さきにけり高砂のをへのしかは今やなくらむ (同 秋上 二一八)

春ふかみえださしひちてかみなみのかはべにたてるやまぶきの花 (躬恒集 三八〇)

あふさかの関のし水に影見えて今やひくらんもち月のこま (拾遺集 秋 一七〇)

など、この万葉歌の影響下にあると思われる歌が早くから、それも数多く見られること、また四句目「今か（原文 今香）」が「今や」へと、平安時代風に言葉が替わっていることからして、万葉集の歌としてではなく、平安期の歌として貫之の時代には認識されていたものと思われる。

【歌意】

かわずが鳴く神なび川にその姿を映して、今頃は咲いているだろうか。山吹の花は。

94ぬれてほす山路のきくの露のまにいかでか我は千代をへぬらん

【校訂】底本四、五句「いっか千歳を我はへにけむいかでか我は千代をへぬらん」。新撰和歌諸本では、群書類従本が底本と同じ本文を伝えるが、他諸本は底本傍記と同様の本文になっている。古今集では大多数の伝本が「いっか千歳を我はへにけむ」と、底本傍記と同じ。一方、和漢朗詠集（五五三）では「いかでか我は千代をへぬらん」と、底本本文と同じ本文を伝えるものがほとんどのようである。また、古今和歌六帖（三七三〇）では「いかで千歳を我はへにけむ」（内閣文庫蔵江雲渭樹印本・島原松平文庫本・榊原文庫旧蔵本・田林義信氏蔵本等は、結句「へぬらん」とある。新撰和歌本来のものが、底本本文の形と傍記の形と、いずれであるか、判断しがたい状況である。ただ、一般的に言って古今集と同本文であったものが、他の形に改変される可能性よりは、その逆の可能性よりも高いだろうことと、「らん」の語が用いられている新撰和歌93番の歌と対にされていることを勘案すれば、底本本文の形が新撰和歌伝本では少数派であるとはいえ、これを捨て去ってしまうことにはいささか躊躇が感じられる。ゆえに本稿では、さしあたり底本本文を採用する。

【他出文献】古今集 秋下 二七三

【注】

〔つゆの間〕

「つゆ」は水滴であるところの「露」と、ほんのわずかの意の「つゆ」との掛詞。また、「菊の露」に濡れることで長寿を保つことができるという重陽の節句に関わる発想との関連で「千代」という言葉も用いられたものであるう。

〔一首の趣向について〕

山道に迷い込んでいるほんのわずかの間に、千年が経ってしまったことをいぶかるこの歌の趣向については、

ふるさとはみしこともあらずをのえのくちし所ぞこひしかりける（友則集 五八）



をののえのくつばかりにはあらねどもかへりみだにもみる人のなさ

(伊勢集 一七四)

などの典拠ともなっている王質の故事を代表として、漢詩文にその源泉が考えられている。ただ、これも既に多くの指摘があるとおり、どれか特定の出典に拠るといえるものではなく、それら漢籍によって広く知られていたストーリーを元にして、この歌は詠まれた、と考えるべきであろう。

〔93番の歌との対応関係について〕

93番の歌は、万葉集歌の表現を踏まえて詠まれた歌であった。一方、94番の歌は、漢詩文に由来する、これも広く知られた説話に基づいたものであった。この点に着目して二首は対にされているのではなからうか。なお、93番の「やくらん」と94四番の「かくらん」の口調の類似も意識されていたものと思われる。

【歌意】

山道の菊の露に濡れて、それを干しているほんのつかの間に、いったいどうやって私は千年を過ごしたというのであろうか。

95春さめににほへる色もあかなくにかさへなつかし山吹の花

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春下 一二二

【注】

(遠鏡)

〔にほへる色〕

この歌の「春雨ににほへる」は、古今集の諸注の多くでは、下接する「色」の様のみを説明する辞句であると説明しているようである。しかし「にほふ」の語は、色彩に関して言うだけではなく、奈良時代からすでに、

橘の匂へる香かもほととぎす鳴く夜の雨にうつろひぬらむ

(万葉集 卷十七 三九一六)

のように、「香」についても言う語であった。また、花に関して「色」と「香」を一对のものとして把握する態度も、

君ならで誰にか見せむ梅花色をもかをもしる人ぞしる

(古今集 春上 三八)

いろもかもおなじむかしにさくらめど年ふる人ぞあらたまりける

(同 五七)

など、古今集の時代にごく一般的なものであった。ならば、当該の歌は、『遠鏡』が「春雨、香の方へもかかれり。物のにほひはしめればまさる物也」というように、春雨のために濃度を増した「色」と「香」をうたったものと考えられるのではないか。

〔香さへなつかし〕

当該の歌以外に、山吹の香りを歌った例は見いだしがたい。つまり山吹は、視覚的な印象でとらえることが主であり、その香りには関心の持たれない花だったわけである（実際のところ、山吹が香りの印象的な花とは思われない）。しかし、そうした山吹のかすかな香りに、春雨の中で気づいた、そのいかにも古今集的な着想の新しさが、この歌の眼目だったのではないだろうか。ただ、その趣向は、後の時代に引き継がれなかったということになるのではあるが。

【歌意】

春雨に（ぬれて）鮮やかさを増している色だけでもいつまでも賞翫したいくらいなのに、（春雨のために強くなり気づかされた）香までも心惹かれるよ。この山吹の花は。

96 露ながら折てかさぐむきくの花老せぬ秋の久しかるべく

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋下 二七〇

【注】

〔露と菊と不老〕

この歌で読み込まれている菊の花と露、そして不老長寿は、いうまでもなく、重陽の節会にかかせぬ情景である。

〔おいせぬ秋〕

「おいせぬ（ず）」の語は、平安時代にあまり例の見られないものであるが、当該の歌のように重陽の節会に関わるもののほかに、

かすが野におほくの年はつみつれどおいせぬ物はわかななりけり

（拾遺集 春 二〇）

のように、若菜摘みの場で読まれたとおぼしい例がある。あるいは、儀式の場にふさわしい、まさに和歌的で優雅なことばだったのかもしれない。（築島裕氏が、名詞＋「せず」の形の語について「『歌語』的な性格が強いと思われる」（『平安時代の漢文訓読語につきての研究』）と示唆されていることが参考になる。）

なお、「秋」は、古今集諸注の言うように、季節の秋だけではなく、年という意味でも用いられているものと思われる。

〔95番の歌との対応関係について〕

双方の歌ともに、水（雨と露との相違はあるが）にぬれた花のすばらしさを詠んだものである。さらに、95番の歌については、最近の古今集諸注がいうように、雨に濡れた花の美しさをうたうその発想は漢詩に由来するものと考えられるが、まさに中国に由来する重陽の菊花を歌った96番の歌と対にされることで、そうした95番の歌の発想のよって来たるところを、新撰和歌編者も意識していたことが推定される。

【歌意】

露のおいたまま折りとつて頭にかざそう。この菊の花を。年老いることのない秋（年）が長く続くように。

97おりてもみおらずでもみん水無瀬河水底かけて咲る山吹

【校訂】底本三句「水無瀬河」<sup>吉野川</sup>。四句「水底かけて」には「すみて」と「てりて」の二つの傍記がある。いずれも新撰和歌諸本により本文の方をとる。

【他出文献】古今和歌六帖3599（四句「みなそこてりて」）

【注】

〔折りても見折らずとも見〕

上二句は、川縁に咲いた山吹は手折って鑑賞し、水の底に映った山吹の姿は折らないままで鑑賞しよう、の意味。

〔水無瀬川〕

この時代の和歌の「みなせ川」の多くは一般名詞で、

事にいでていはぬばかりぞみなせ河したにかよひてこひしきものを

（古今集 恋二 六〇七）

あひ見ねばこひこそまされみなせ河なににふかめて思ひそめけむ

（同 恋五 七六〇）

みなせ河有りて行く水なくはこそつひにわが身をたえぬと思はめ

（同 恋五 七九三）

のように、水が少ない「水無」の川、として詠まれる。固有名詞としての「水無瀬川」が詠まれた例としては、各地の地名を詠み込んだ物名の歌である

をちこちにわたりかねてぞかへりつるみなせかはりてふちになれれば

(躬恒集 三七)

が見いだせるが、これは、

あまのがはいまはみなせになりななむ今日ひこぼしのふなぢこぐべく

(元真集 一四七)

と同じく、淵ではなく瀬が多い「皆瀬」の川として言葉のおもしろさに着目して詠まれたものでもある。

以上のように、古今集時代の「みなせ川」は、「水無」もしくは「皆瀬」という言葉の意味を利用して詠まれるものとして認識されていたらしいことがわかる。しかし、当該の歌ではどちらの意味も取りがたい。そのことから、固有名詞の「水無瀬川」を詠んだものかとも思われる。また、同音のリズミカルな繰り返し「おりてもみ、おらずでもみ、むみなせがわみな、そこかけて…」を意識して他でもない「みなせ川」を選んだものかとも思われるが、いずれにしても珍しい例と言えよう。

〔水底かけて〕

この言い方は若干わかりにくいが、

み山いでて夜はにやきつる郭公暁かけてこゑのきこゆる

(拾遺集 夏 一〇一 平兼盛)

の使い方と同じく、「ゝにかけてずっと」といったほどの意味と思われる。岸边に咲く山吹の姿と水面に映るその影とが切れ目なく連続して見える様を描写したものであろう。

【歌意】

手に折りとっても見て、折らないでも見よう。水無瀬川の(岸边から)水底にかけて(ずっと)咲いている山吹の花を

98 あき風の吹上にたてるしらぎくは花かあらぬか浪のよするか

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋下 二七二

【注】

〔秋風の吹上〕

「ふき」は、秋風が「吹く」ことと「吹上の浜」との掛詞となっている。「吹上」は紀伊の歌枕である「吹上の浜」。

〔花かあらぬか波のよするか〕

「花かあらぬか」という言い方は、この時代他に例が見いだしがたい表現である。

こぞの夏なきふるしてし郭公それかあらぬかこゑのかはらぬ（古今集 夏 一五九）  
かげろふのそれかあらぬか春雨のふる日となればそでぞぬれぬ

（同 恋四 七三一）

としふればかくもありけり墨染のこはおもふてふそれかあらぬか

（新古今集 哀傷 八五二 醍醐天皇）

などの、「それかあらぬか」という常套的表現を応用したものであるが、当該の歌では、そこにさらに「波のよするか」と同じ音の言葉を繰り返したところに注意したい。対にされた97番の歌も同音の繰り返しを意識したものであったからである。

〔97番の歌との対応関係について〕

それぞれに「水無瀬川」「吹上の浜」という歌枕を読み込み、水辺に咲く花を主題としたものであることが、まず類似点として指摘できる。また、両歌ともに、言葉（音）のリズムカルな繰り返しが印象的であるが、これも意図的に対にされたものと思われる。

【歌意】

秋風の吹く吹上の浜に立っている白菊は、花であるのか、そうでないのか。（あるいは）波が寄せているのか。

99かはづなく井手の山吹ちりにけりあはまし物を花の盛に

【校訂】底本四、五句「花の盛にあはまし物を」。新撰和歌諸本により改める。なお、古今集では比較的多数の本が「花の盛りにあはましものを」の本文を伝えるが、筋切、元永本等、「あはましものを花の盛りに」の形の本文を伝えるものも見られる。また底本本文左に書き込みらしきものがあるが、判読不能。なお、三句は群書類従本、松平文庫本等「咲きにけり」とするものが多いが、新撰和歌の配列から見て、底本の「散りにけり」でなければそぐわない。

【他出文献】古今集 春下 一二五

【注】

〔あはましものを花の盛りに〕

一首の語順は、「花の盛りに」「あはましものを」「かはづなく井手の山吹散りにけり」を倒置したもの。倒置が二カ所に及ぶわけである。

【歌意】

蛙の鳴く井手の山吹は散ってしまった。（できることなら）会いたかったのに。花の盛りに。

100 心あてに折ばや折らん初霜の置まどはせるしら菊の花

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋下 二七七

【注】

〔心あてに〕

諸説紛々とし、意味の定めにくい辞句であるが、ここでは、思いさだめて、というほどの意であると、仮に考えておく。なお、当該の歌に似た表現を用いた歌としては、

心あてに見ばこそわかめ白雪のいづれか花のちるにたがへる（後撰集 冬 四八七）  
が見いだせるが、この歌も、右のように解して不都合はない。

〔99番の歌との対応関係について〕

両歌ともに、倒置法を用いたものである。そのことを新撰和歌の編者が意識して、99番の歌の本文も、「あはましものを花の盛りに」と、倒置法を繰り返す形の方を採用したものと考えたい。

【歌意】

思いさだめて折るのなら折ろうかしら。初霜が白く置いて（どれが花だか）戸惑わせている白菊の花を。

101 吉野川岸の山吹風にそこの影さへうつろひにけり

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春下 一二四

【注】

〔吉野川くそこの影〕

吉野川はその実態を反映してのことと思われるが、万葉集で、

吉野川行く瀬の早みしましくも淀むことなくありこせぬかも

（万葉集 卷二 一一九）

のように、流れの速い川として歌に詠まれ、古今集の時代にも、

吉野河いは浪たかく行く水のはやくぞ人を思ひそめてし（古今集 恋一 四七一）  
吉野河水の心ははやくともたきのおとにはたてじとぞ思ふ（同 恋三 六五一）

と、その流れの激しさが心情の激しさの比喩に用いられることからうかがわれるように、一般に急流として認識されていたことがわかる。そのように認識されている川の水面に映るのであるから、この歌に詠まれた「影」とは、鏡に映し出されるそのような、岸辺の山吹の姿をそのまま映し出すものとは考えにくい。急流に乱れる水に、山吹の色が映り、時に波しぶきが散る、そうした様が想定されよう。

〔影さへうつろひにけり〕

岸辺の花がうつろえば、水に映る影もうつろうのが当然であると、現代的な常識では判断されるが、この歌では「影も」ではなく「影さへ」と言っている。このことに注意してみたい。こうした、現代人からすれば、やや違和感を覚えるであろう表現は、この時代では珍しいものではない。たとえば、

おなじ御時、大井河に行幸侍りける日 坂上是則

かげさへにいまはと菊のうつろふは浪のそこにも霜やおくらむ

（新古今集 冬 六二三）

と、菊の花がしおれば、水に映る影も当然しおれて見えるだろうに、それを「かげさへにうつろふは」と、新しい発見のごとく述べ立てたり、

えのまつおひたり

ふかみどりいりえの松もしふればかげさへともにおいにけるかな（躬恒集 二六）  
と、年経た松を映す入り江の影が老松の姿であるのは当たり前であろうに、ここでも「かげさへともにおいにけるかな」と驚きをもって提示する体の表現をしたりする例が、平安時代には見られるのである。このことからすれば、あるものの本体とそれが何かに映った影とは、必ずしも同一のものとは限らない、という認識あるいは文学的な表現が、この時代にあったと言わざるを得ない。たとえば、源氏物語須磨巻で、やつれた姿を鏡に映した光源氏が「こよなうこそ衰へにけれ。この影のやうにや痩せて侍る。」と、鏡に映る自らの姿を見た上で「この影のように、私はやせているのでしょうかね」と疑問を呈する表現をしているが、これも、鏡に映る影と光源氏自身が必ずしも同一のものではない、ということ的前提にすれば、理解が行き届きやすくなるのではなからうか。

さてここまでのことを踏まえて当該の歌の解釈に戻れば、この「さへ」は、吉野川を吹く風のために岸の山吹がうつろっているが、なんと、底に映った影までもうつろっている

よ、という驚きを表現したものと考えられるだろう。

次に、花に関して「うつろふ」という時には、菊花の場合のように、色が変わる・しおれる、というほどの意味で用いられることがあるが、当該の歌では、

春宮のたちはきのぢんにてさくらの花のちるをよめる

春風は花のあたりをよきてふけ心づからやうつろふと見む（古今集 春下 八五）

などと同じく、花びらの散ることを意味していると見たい。そうすれば、当該の歌で影が「うつろふ」といつているものが、山吹の花の色を映した水の流れに波しぶきが散る様を、落花にたとえているもの、と考えることができ、山吹の本体の姿と水に映る影が整合するからである。後の時代の例であるが、

ふく風にはなの白波立ちにけり淵瀬もみえぬ吉野河かな（壬二集 二一五七）

御吉野やたぎつ河うちの春のかぜ神世もきかぬ花ぞみなぎる（拾遺愚草 一九七一）

吉野川の急流に立つ波を花にたとえる例がある。そのような情景を、この歌では花が散っている様にたとえた、ということである。つまり、一首には、岸辺の山吹が風のために散ると思ったら、なんと水底の影までも流れの速さゆえにしぶきとなって散っているよ、という内容を読み取ることができるのではないだろうか。

なお、この「うつろふ」という語は、「影」と縁のある「映ろふ」という語と同音であり、そこを意識して、つまり縁語として、意識的に用いられたものでもあろう。

〔古今集との位置づけの違い〕

この歌は古今集にも収められ、「よしの河のほとりに山ぶきのさけりけるをよめる」という詞書を有する。その詞書のままに理解するならば、古今集の歌では、岸辺の山吹はまだ散ってはいないことになる。現実の花は散っていないのに、その花の色が映る水底では、波しぶきのためにあたかも花が散っているように見える。その対比のおもしろさを狙ったものと、古今集の歌は解釈できるのではないか。古今集の歌がこのように理解されたからこそ、

花ざかりまだもすぎぬに吉野河影にうつろふ岸の山吹

（後撰集 春下 一一二 読人知らず）

という歌も詠まれることになったのだと思われるが、いかがであろうか。

一方、新撰和歌では、配列からして当該の歌が散る山吹の花を詠んだものとして扱われていることがわかる。古今集歌を新撰和歌に再録する時に、詞書を捨象し、解釈を変更した例として考えることができるだろう。



【歌意】

吉野川の岸の山吹は吹風のために（花が散っている。それだけでなく）、水底みなそこの影までも（急流のために）散っているよ。

102 秋をよきて時こそ有れきくの花うつろふからに色のまされば

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋下 二七九

【注】

「うつろふからに」

「うつろふからに」の「からに」は、万葉集の歌では

ただ一夜隔てしからにあらたまの月か経ぬると心迷ひぬ（万葉集 卷四 六三八）

白たへの袖をはつはつ見しからにかかる恋をも我はするかも

（万葉集 卷十一 二四一一）

などに見て取れるように、「からに」の前項に比して、その結果である後項の重大である場合に用いられる。平安時代の用例の多くは、単に「くとともに」「くとすぐに」と解して意の通じないことはないが、しかしそうした例なども、たとえば、

吹くからに秋の草木のしをるればむべ山かぜをあらしといふらむ

（古今集 秋下 二四九）

では、「ちよつと吹いただけで」「草木がしおれてしまう」という大きな結果をもたらしているとするべきであろうし、

ちはやぶる神やきりけむつくからにちとせの坂もこえぬべらなり

（古今集 賀 三四八）

も、「ほんのひと突きしただけで」「千年の齢の坂も越える」という大きな成果が得られるという気持ちが入められたものと解すべきであろう。この歌でも、菊の花が少し「うつろふ」という些細な現象を示しただけで、色が美しくなる、という大きな結果を発見した喜びを読み取るべきものと考ええる。

〔101番の歌との対応関係について〕

102番の歌は、いうまでもなく「うつろふ」花の美しさを言ったものである。秋の花である菊について言えば、「うつろふ」美しさを取り上げるのは、和歌の常套的な表現であるが、春の花について「うつろふ」ことに美しさを見いだしているものは、通常見られ

ない。新撰和歌の編者はここに着目し、春の花の「うつろふ」美しさを歌った、まれな歌を、ここに配したものと思われる。

【歌意】

秋はそれとして、盛りのあるのだから。菊の花には。色が変わるといふほどのこと（こんなにも）美しくなるのだから。

103 我宿にさける藤浪立かへりすぎがてにのみ人のみるらん

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春下 一一〇

【注】

「たちかへり」

「立ち返り」は、藤波の「波」の縁語。私の家の庭に咲いている藤は、藤波というだけあって、波が立ち返るように人々が立ち返り見ている、と、言葉遊びをしたものである。

この「立ち返る」という動詞は、

いにしへに猶立ちかへる心かな恋しき事に物わすれせで（貫之集 五九一）

のように、元の状態に戻る、という意味で使われる場合と、

あきの海にうつれる月を立ちかへり浪はあらへど色もかはらず

（後撰集 秋中 三二二 深養父）

と同じく、何度も何度も繰り返す、という意味で使われる場合があるが、「波」との縁で用いられるときには、「風の吹くこと止まねば、岸の波立ち返る。」（土佐日記 承平五年二月三日条）のような波が繰り返す打ち寄せる様子にこと寄せて、

立帰りぬれてはひぬるしほなればいくたの浦のさがとこそ見れ

（後撰集 恋一 五三三 読人知らず）

などのように、「繰り返す」という意味で用いられることが多い。したがって、当該の歌では、通常、人が「引き返して」我が宿の藤の花を見る、とも理解されるが、藤の花を見る人々の様子が、まるで波の打ち寄せるかのごとく、振り返り振り返り見ている、ということを表している可能性も十分に考えられる。

「過ぎがてにのみ人のみるらん」

「過ぎがてに」は、過ぎることができずに、の意。我が宿の藤を見る人々は、寄せては返す波のように、「立ち返」っているので、行き過ぎることができない、としゃれている

のである。

「らむ」は眼前に見えない物を推量する語であるが、この歌の「らむ」については、「どうして人は（我が宿の藤を）見るのだろう」と、「どうして」の語を補って、人が藤を見る原因がわからず、そのことをいぶかる意味で解釈される場合が多い。しかし、わざわざ「どうして」と、記されていない語を補わずとも、「藤浪は波というだけあって、人々は波のように立ち返り行き過ぎることができずに花を見ているのだろう」と、藤の花を見る原因を、「波は立ち返るものだから、人も立ち返っているのだろう」と、推量していると解釈して無理はないように思われる。

【歌意】

我が家の庭に咲いている藤波を、（波というだけあって）立ち返っては、ひたすら行き過ぎがたそうにして、人々は見ているのだろう。

104 咲そめし宿しわかねば菊の花たびなからこそにほふべらなれ

【校訂】底本の本文二句以下「時より後はうちはへて世は春なれや色の常なる」。底本の傍記（宿しいはねは菊の花うつろふからに色のまされば）および、新撰和歌諸本により改める。なお、底本本文は、初句の一致にひかれて

屏風のゑなる花をよめる

つらゆき

さきそめし時よりのちはうちはへて世は春なれや色のつねなる

（古今集 雑上 九三一）

を誤記したのか。

【他出文献】

他の文献に当該の歌そのものを見いだすことはできないが、次の二首が関係のあるものと目される。

人の家なりける菊の花をうつしうゑたりけるをよめる つらゆき

さきそめしやどしかはれば菊の花色さへにこそうつろひにけれ

（古今集 秋下 二八〇）

ほかのきくをうつしうゑて

旧里をわかれてさける菊の花たびながらこそにほふべらなれ

（後撰集 秋下 三九九 読人知らず）

当該の歌は、あるいはこの二首をもとに貫之が詠んだものかもしれない。

【注】

〔宿しわかねば〕

「しわかねば」は、

日のひかりやぶしわかねばいそのかみふりにしさとに花もさきけり

（古今集 雑上 八七〇）

にあきらかなように、分け隔てしないので、の意。この歌の上の句に「花開くようになったもとの宿を他の宿と分け隔てしないので」というのは、下句の、苦しい旅先にあつて菊の花が美しく咲きにおう理由の説明になっている。

〔たびながらこそほふべらなれ〕

都なる荒れたる家にひとり寝ば旅にまさりて苦しかるべし（万葉集 卷三 四四〇）

あひみずて恋しき事をたとふればくるしき旅はことならなくに（貫之集 六七七）にも見られるように、万葉集以来、旅とは本来苦しい、望ましくないものとして歌われるものであつた。そのため、当時の貴族の屋敷では、四季折々の草花を移植して愛でていたようであるが、それらの草花にとつても、

あたらしくをみなへしをうゑて

ふるさとののべやこひしきをみなへししばしばかりぞたびはくるしき

（躬恒集 二七六）

と、もとの場所から移されることは、苦しい「旅」ということになる。そのような苦しい旅の宿でありながら、眼前の菊は、それを苦ともせず美しく咲きにおつている。その感興を、当該の歌はうたったものであろう。

〔103番の歌との対応関係について〕

双方ともに「宿」に咲く花の美しさをうたったものである。また、103番の歌では人々が藤の花を賞美する理由を、104番の歌では移植した菊が美しく咲きにおう理由を提示するという共通する趣向も指摘できよう。

【歌意】

美しく咲くようになった（もとの）宿を（他の宿と）分け隔てしないので、菊の花は（苦しいはずの）旅の宿であっても美しく咲いているようだ。

105よ所にみてかへらん人に藤の花はひまつはれよ枝は折とも

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春下 一一九

【注】

「よそに見て」

「よそに見る」とは、

人の木のもとに立ちてはるかなる桜の花をみたる

山ざくらよそにみるとすがのねのながき春日を立ちくらしつる（貫之集 六一）

のように、本来、遠目に見る、というほどの意であるが、心理的な距離の表現として、

をとこの心やうやうかれがたに見えゆきければ 土左

つらきをもうきをもよそに見しかどもわが身にちかき世にこそ有りけれ

（後撰集 恋三 七四九）

などのように、何かを他人事として見る、という程度の意味で理解するのがふさわしい場合もある。

当該の歌の場合、一首のみで判断すれば、「よそに見」るものが、単に物理的な距離を隔てていることを意味する、つまり藤の花を遠望しているのか、あるいは、心理的な距離を隔てていることを意味する、つまり藤の花の咲く宿の主人に対して他人行儀であるというのかはわからない。ただし、後で述べるように、対にされた106番の歌と併せて考えれば、後者の意味で理解する方がよろしいと思われる。

「はひまつはれよ」

「よそにみて帰らむ人に」蔓を伸ばしてまとわりつけ、との意。藤の花を擬人化した、同時代の和歌には他に例を見ない、宿の主人の心情を強烈に表した新奇な表現である。

【歌意】

（私のことを）他人事として帰ってしまうような人に、藤の花よ、蔓を伸ばし、まとわりつけ。たとえ枝が折れようとも。

106 来てもみむ人の為にとおもはずは誰かゝらまし我宿の草

【校訂】なし

【他出文献】これと類似する歌が、大和物語四十九段に見える。

又、おなじ帝、齋院のみこの御もとに、菊につけて、

ゆきてみぬ人のためにとおもはずは誰か折らまし我やどの菊

齋院の御かへし、

我やどにいろおりとむる君なくはよそにもきくの花をみましや

この歌をもとに、あるいは新撰和歌編者が改編したものか。なお、大和物語の歌は、同じ本文で続古今集（秋 四六九）にもおさめられている。

【注】

〔きてもみむ人〕

「来ても見む人」は、平安和歌では他に例を見いだしがたい言い方であるが、当該の歌の文脈からして、恋人の元をたまさか訪れる人を意味するかと思われる。

〔誰か刈らまし我が宿の草〕

平安和歌の世界において、草の生えた宿といえば、まず、

やへむぐらしげれるやどのさびしきに人こそ見えね秋はきにけり

（拾遺集 秋 一四〇）

など、恋人の訪れが途絶えた様を象徴する八重律の茂った宿が想起される（八重律のことを「草」と言いうることは、「八重律しげくのみこそ成りまされ人めぞ宿の草木ならまし」（貫之集 四五二）などからわかる）。生い茂った草で道も見えなくなった宿の、草を刈る、ということは、男の来訪の障害を少しでも取り除こうとしての行為ということになるうか。

〔105番の歌との対応関係について〕

106番の歌は、宿の主人に対して冷たい人のことを歌ったものであった。105番の歌もやはり、藤の花の咲く宿の主人を「よそに見て」つれなく去った人を歌っているものである。また、藤の花と草という植物を取り上げている点も対照的である。さらに、双方ともに類例を見ないような、珍しい表現を用いていることでも共通する。

【歌意】

（たまにでも）やってくるような人のために、と思わなければ、誰が刈るでしょうか。我が宿の草を。

107 緑なる松にかけたる藤なれどをのが心と花は咲ける

【校訂】底本二句「松にかゝれる」。新撰和歌諸本により改める。底本四句「をのか比（右傍記「為」左傍記「心と」とそ」。新撰和歌諸本により左傍記をとる。なお、貫之集および新古今集、また古今和歌六帖には「松にかかれる」・「おのがころとぞ」の形でこの歌を収める。もとは底本の形であったものを、新撰和歌に載せるに際して編者が改め

たものと考える。

【他出文献】貫之集 五〇・新古今集 春下 一六六

【注】

〔松にかけたる藤〕

松に藤がかかって咲いている景は、

松にかかれる藤

うつろはぬ色にるともなきものを松がえにのみかかる藤波 (貫之集 一一五)

藤の花松にかかれる

むかしかにたのめたればか藤なみの松にしも猶かかりそめけん(貫之集 四六〇)など、貫之集に繰り返し(他に一九一・三〇三・三二七・三四一など)詠まれるものである。ただ、いずれの例も藤が松に「かく」(四段・自動詞)と表現され、この歌のように藤を松に「かく」(下二段・他動詞)と言う例は見られない。これは、対にされた新撰和歌108番の歌で、水に映る花のことをいうのに、池の底に誰かが植えた、と表現していることと合わせるために、松にかかる藤のことを、誰かが松に懸けた、という趣向にあらためたものと思われる。また、後述のように、第四句の改変も、この第二句の改変を受けてのことであると考えられる。

「おのが心と」

「自らの意志である」というほどの意。後のものであるが、

水こほる冬だにくればうき草のおのが心とねざしがほなる (和泉式部集 七四)

新院御方にて、風なくして花ちるといふ事をよめる 大宰大貳長実

うつろへばおのがこころとちるはなをさのみは風におほせざらなん

(金葉集 初度本 春 五九)

など、そのように解釈してよいと思われる例がある。

前述のように、新撰和歌のこの歌では、藤は自らの意志ではなく、誰かの手によって松に懸けられたものであった。そのようないきさつであるのだけでも、美しく花を咲かせたのは自らの意志であったのだなあと、藤の花を擬人化し、その心中を思いやる趣向の歌に、編者が仕立てたものであるう。

【歌意】

常緑の松に(誰かが)懸けた藤だが、(それが)自分の意志であると、花は咲いたことよ。

108 ひともとゝおもひし物を広沢の池の底にも誰かうへけむ

【校訂】底本二、三句「おもひし物を広沢の」<sup>花大</sup>。新撰和歌の諸本は「おもひし花を大沢の」の形で伝えるもの（群書類従本・永青文庫本等）と、「おもひしものを広沢の」の形で伝えるもの（元禄版本・松平文庫本等）との二種に大別できる。一方、古今集では善海所伝本が「おもひしものを大沢の」という本文を伝えるが、他の諸本には「おもひし菊を大沢の」もしくは「おもひし花を大沢の」とある。そのことからすれば、古今集に見られない「おもひしものを広沢の」の形の方が新撰和歌本来の本文である可能性が、いくぶんか高いと思われる。また、語釈の項に述べるように、新撰和歌の歌として見た時、「おもひし物を広沢」の本文であったとして、不都合はない。そこで、さしあたり底本の本文を採用する。なお、この歌は寛平御時菊合に出詠された歌であるが、十巻本歌合巻には「…ものを」、二十巻本歌合巻には「…菊を」とある。いずれの本文が歌合時の本文を伝えるのかを判断することは難しいが、もともと「…ものを」であったものが、古今集に収載する時点で「…菊を」と改められ、それが再び新撰和歌でもとの形に戻された、という可能性もある。

【他出文献】古今集 秋下 二七五

【注】

「ひともととおもひしものを」

二句目末尾の「ものを」は接続助詞。当該の歌では逆接の意で三句以下につながる。

「菊の花は一本だけだと思っていた。それが思いがけぬことに…」とでも補って訳すべき、意外な感覚や驚きの気持ちを読み取るのがふさわしいものであることは、

家にあるける梅花のちりけるをよめる つらゆき

くるとあくどめかれぬものを梅花いつの人まにうつろひぬらむ

（古今集 春上 四五）

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

春ののにわかなつまむとこしものをちりかふ花にみちはまどひぬ

（同 春下 一一六 貫之）

などと同様である。

なお、一首は菊の花を歌ったものであるが、歌句中に「菊」とも「花」とも言わず、配列によってのみ、そのことが示される。すなわち、この歌だけを取り出して鑑賞したとき、何を歌ったものであるのか、理解することはきわめて難しい。このことは、新撰和歌の歌



が一首のみで完全に独立するものではなく、歌の配列や部立てに依存しつつ鑑賞されるものとして企図され、歌集に編纂されていたことを意味するだろう。

〔広沢の池〕

古今集の古注のいくつかが、広沢池の古名が大沢池であると言う。しかし、『九曆』承平六年十一月六日状に、藤原忠平が語り伝えた藤原時平の言葉を記録したものと、「昔承和帝王行幸嵯峨院之日於廣澤池畔停警蹕（昔、承和の帝王（仁明天皇）、嵯峨院に行幸せし日、広沢の池の畔に停まり、警蹕す）」と、広沢池の名が見え、また、『九曆』と同じころの人と推測されている監の命婦の作とされる歌に

（中務の宮より）「嵯峨の院に狩すとてなむひさしく消息などもものせざりける。いかにおぼつかなくおもひつらむ」などのたまへりける御返に、

おほさはのいけの水きたえぬともなにかうからむさがのつらさは

（大和物語 八段）

と、大沢池が詠み込まれている。これらの例は、いずれも嵯峨院に近い池の名を指し示している。同一の池に二つの名称があったのか、あるいは隣接して二つの池があったのかは不明であるが、新撰和歌の編纂された時代に、嵯峨にある池の名として「広沢池」と「大沢池」の双方が存していた可能性がうかがわれるのである。

さて、古今集の歌には、詞書に「おほさはの池のかたにきくうゑたるをよめる」とあるので、歌の本文も「大沢の池」に相違ない。これを紀貫之が新撰和歌に再録するにあたり「広沢の池」と改めたのであれば、それなりの理由があつたはずである。それがどのようなものであつたのか、この時代に大沢池・広沢池ともに和歌に詠まれた例も少なく、説明は難しいが、以下に一つの憶測を記す。

「大沢の池」には、後の時代の例であるが、

おほさはのおほくの人のなげきにていけらじとのみ思ふなるらん（朝光集 六〇）  
いく秋の月のかがみとなりぬらんかげみる人のおほさはの池

（正治初度百首 九三二 女房越前）

と、大沢の「大」に「多」の意が掛けられたものがある。古今集二七五番の歌の第三句に「多」の意を読み取る必然性の無いだろうことは、現行の古今集諸注の多くが示す通りである。しかし、右に示した類の歌があることは、「ひとともと」歌の「大沢」に「多」の意が掛けられている、と解釈される余地が少なからず存するということを示している。

さて、当該の歌は、池の畔にある一本の菊の花が水面に映っている様を詠んだものであ

るから、「池の底」の花も一本だと考えるのが自然であろう。ところが「大沢」に「多」の意を掛けて一首を受け取った場合、歌中に「ひともと」と、「多」という対義語が配されているおもしろさは感じられるものの、「多」という言葉のために、あたかも大沢池の水面にたくさん菊が見えているかのごとくとなり、池の畔の一本の菊と水に映るその影というイメージとはそぐわなくなる。そのような、いわば誤解の可能性をなくして、水面に映る一本の菊の姿をそのまま彷彿させるための手立てとして、貫之は「大沢」を別称あるいは隣接する池の名である「広沢」に改めた、という可能性を考えておきたい。

〔107番の歌との対応関係について〕

107番の歌は、何者かが松に掛けた藤を詠んだものであった。対にされた108番の歌は、池の底に見える花を「いったい誰が植えたのか」といぶかる体のものである。つまり双方ともに人造の景物を詠むという趣向である。

さて、今「人造の景物」という言い方をしたが、これについて、いささかの説明を加えたい。107番の歌の注に示した、貫之集中の松にかかった藤を詠んだ歌は、実は、すべて詞書に屏風の歌であることが示されている。すなわち、同歌の【校訂】の項に示した貫之集の「ときはなる」歌も、屏風に描かれた松と藤を、屏風中の人物の視点で、自然の景物を見るかのごとくに「松にかかれる藤」と言ったものであった。さて一方、新撰和歌に詞書は記されないから、107番の歌は、屏風の歌であるかどうかはわからないままに鑑賞しなければならぬ。もちろん、屏風の歌が、よくあるものとして認知されていたであろう当時にあつては、この歌も屏風に描かれた光景を詠んだものであると考え、絵師が松にかかる形で描いた藤の花を、屏風を鑑賞する人間の立場でもって「（絵師が）松にかける藤」と、しゃれて言ったものと受け取られた可能性はあるだろう。その場合は、対にされた108番の歌も同様に、菊の花の描かれた屏風を見て詠んだ歌として鑑賞することになるだろう（なお、古今集の「ひともと」歌は詞書に示されるとおり、州浜を見て詠んだものであった。このことを記憶している享受者が、新撰和歌108番の歌を州浜を見て詠んだものと受け取った場合も、107番の歌は屏風の歌と理解して、二首が対になっているものと見なされる。）。また、この両歌を屏風の歌として見ない場合は、貴族の邸宅の庭に、松の枝に掛ける形で植えられた藤と、広沢池の畔に植えられた菊とを詠んだものとして理解されるかと思う。

#### 【歌意】

一本だと思っていたのに。おやまあ広沢の池の底にも誰が植えたのだろうか。（池の水面

にも菊の花が見えるよ。)

109 花のちることやかなしき春霞たつたの山の鶯のこゑ

【校訂】底本二句「ことやかなしき」<sup>わひ</sup>。新撰和歌諸本では「わびしき」と「かなしき」が混在する。一方、古今集では雅俗山庄本・寸松庵色紙が「ことやかなしき」の本文であるが、他諸本は「ことやわびしき」である。和歌本文としてはどちらもありうるが、古今集の本文とは考えにくい。「ことやかなしき」が新撰和歌の本文と見て、底本の傍記はとらな  
い。

【他出文献】古今集 春下 一〇八

【注】

〔花の散ることやかなしき…鶯の声〕

早く万葉集に、

梅の花散らまく惜しみ我が園の竹の林にうぐひす鳴くも (万葉集 卷五 八二四)

我がやどの梅の下枝に遊びつつうぐひす鳴くも散らまく惜しみ (同 八四二)

と、花の散ることが惜しくて鶯が鳴く、という発想で詠まれた歌がみられる。この、鶯は散る花を惜しんで鳴いているのだ、という発想に基づいて、様々なバリエーションを詠むことが古今集以前からあったらしく、その一端が、次に示す如く、古今集春部にまとまって収められている。

題しらず

よみ人しらず

鶯のなくのべごとにきて見ればうつろふ花に風ぞふきける

吹く風をなきてうらみよ鶯は我や花に手だにふれたる

典侍治子朝臣

ちる花のなくにしとまる物ならば我鶯におとらましやは

仁和の中将のみやすん所の家<sup>に</sup>歌合せむとてしける時によみける

藤原のちかげ

花のちることやわびしき春霞たつたの山のうぐひすのこゑ

うぐひすのなくをよめる

そせい

こづたへばおのがはかせにちる花をたれにおほせてこころなくらむ

鶯の花の木にてなくをよめる

みつね

しるしなきねをもなくかなうぐひすのことしのみちる花ならなくに

(古今集 春下 一〇五〜一一〇)

さらに、当該の歌の元のものと考えた、古今集一〇八番の歌には『余材抄』などが指摘するのように、

うぐひすのすみかのはなやちりぬらむわびしきこゑにうちはへてなく

(新撰万葉 三九)

と、新撰万葉にほぼ同趣向の歌も見られ、古今集前夜の時代の歌としてよくある類のものであったことが推測される。

なお、新撰和歌では散る花が、71〜89と109〜117の二カ所に分けて収められているが、前者は咲く花の次に位置し、後者は春の終わりに位置する。このことは、前者が落花そのものを詠んだ歌群、後者が春の暮れを落花で表現した歌群であることを意味しよう。

「かなし」

【校訂】の項に記したように、当該の歌の二句は、もと古今集に「ことやわびしき」とあったものを、新撰和歌に再録する際に「ことやかなしき」に改めたものと考えた。一般に「わびし」は「失意のさま、気落ちする気持ち」（岩波古語辞典）、「かなし」は「自分の力ではとても及ばないと感じる切なさ」（同）という説明がなされる。新撰和歌編者である紀貫之の歌の用法でもおおよそこうした使い分けがなされているようで、たとえば、貫之集でも「かなし」の語は、人の死に対する気持ちを表現したもの（六〇五・七七五・七七九・七八三）と、夢でも愛しい人に逢えないどうしようもなさを言った例（六五七・六七一）に限られる。このことを踏まえれば、当該の歌は、花の散ることを鶯が、とどめようとしてもとどめることのできないものとして切なく思っている、という解釈になろう。古今集の歌にくらべて、意味的にはやや大仰な歌になっているようである。

また、古今集においては、周知の通り、漢籍の表現に由来して、秋を「かなし」とする表現が多く見られるのに対して、春の歌に「かなし」の語を用いた例は見当たらない。古今集以後もこの傾向は変わらないようである。このことから、新撰和歌の編纂された時代には、「かなし」という語は、季節で言えば秋に似つかわしいものとして一般に考えられていたと言つてよいかと思う。ただし、古今集以前には、

春の野に霞たなびきうら悲しこの夕影にうぐひす鳴くも

(万葉集 卷十九 四二九〇)

うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しもひとりし思へば

など、春の歌の中の「かなし」の語を確認できる。このことから、春の歌に「かなし」という語を用いた当該の歌は、古今集で、秋―かなし、という表現が定着する以前の、少々古めかしい趣向のものとして受け取られていたとも考えられる。

〔春霞竜田の山〕

竜田山は、古今集以後の和歌では、紅葉の名所として秋の歌に詠まれることが多くなる。当該の歌のように春霞とともに詠まれる例は、

朝霞止まずたなびく竜田山舟出しなむ日あれ恋ひむかも (万葉集 卷七 一一八一)

と、万葉集に確認できる。前の「かなし」の項で、当該の歌が、やや古めかしい趣向のものとして受け取られていた可能性を述べたが、これもその推測を裏付ける。

【歌意】

(春の暮れを告げる) 花の散ることが悲しいのであろうか。春霞が立つ、竜田山の鶯の声は。

110 色かはる秋のきくをばひとゝせにふたゝびにほふ花とこそみれ

【校訂】底本二句「秋のくるを<sup>きく</sup>は」。元禄版本・内閣文庫本が底本と同じく、右傍に「きく」と示しつつ、本文は「くる」としている。また彰考館蔵本は「くる」を消して「きく」と記す。ただし「秋のくるを<sup>は</sup>」では、一首の解釈が困難であるので、底本傍書の「きく」を採用する。なお、同じ歌が古今集の他に古今和歌六帖にもみられるが、いずれにも「秋のくるを<sup>は</sup>」とする伝本は見当たらないようである。

【他出文献】古今集 秋下 二七八

【注】

〔色変わる〕

菊の花は、

おく霜の染めまがはせる菊の花いづれをもとの色とかはみん (貫之集 二三六)

おく霜の心やわける菊花うつろふ色のおのがじしなる (貫之集 三〇八)

菊の花折りてはとらじはつしものおきながらこそ色まさる比 (兼輔集 五七)

などに見られるように、霜によって色が変化する、とされる。ただし、多くは

秋をおきて時こそ有りけれ菊の花うつろふからに色のまされば

(古今集 秋下 二七九)

のように、「うつろふ」「色まさる」と言い、「変はる」という語を用いることは少ない、「色変わる秋の菊」

周知のように、漢詩では奈良時代以前から素材とされてきた菊であるが、万葉集には見えない。菊を詠んだ和歌として認められる、おそらく最も早い例が、

このころの時雨の雨に菊の花散りそしぬべきあたらその香を

（類聚国史 七十五歳時六「曲宴」桓武天皇十六年十月の条。原文「己乃

己呂乃 志具礼乃阿米爾 菊乃波奈 知利曾之奴倍岐 阿多羅蘇乃香乎」）

である。この歌は、「巖前菊気芳」（懐風藻「五言 晚秋於長王宅宴」田中淨足）「菊為花芳衰又愛」（菅家文草「閏九月尽 燈下即事 応製」）など、漢詩にしばしば見られる、菊の花の芳香を歌ったものであり、古今集に多く見られる菊の詠みぶりとは様相を異にする。すなわち、平安時代初頭、古今集の前夜となる時代に、様々に菊の花の歌が模索され、その結果が古今集に収められたということである。当該の歌は、その模索の時代の作ということであろうか。

また、「秋の菊」という言い方は、秋の景物として菊が詠まれることが固定化した時代にあつては、当たり前すぎて冗長な表現ということになるのではないか。しかし、古今集にこの歌が収められているということは、撰者たちがこの一首を優れた作と見ていたということである。ならば、この歌の「秋の菊」は、冗長な表現としてではなく、漢語の「秋菊」を和語にうつした、新しい表現として受け取られていたと考えるべきだろう。言い換えれば、菊の花の読み方が固定化する以前の作として、この歌が認知されていたのではないか、ということである。

「ひととせにふたたびにほふ花」

「ひととせにふたたび」は、「常套的」（新日本古典文学大系『後撰和歌集』一〇九番歌注）な表現であり、当該の歌のほかにも

寛平御時歌合に

梅がえにふりつむ雪は一とせに二たびさける花かとぞみる

（公忠集 一九）

という例もあることから、この当時、通常ありえない「一年に二度咲く花」を、和歌的な表現のうちに見つける、という趣向のあったことが窺われる。すなわち当該の歌は、霜にあたって色が変わった菊をみて、「これこそは皆が探している、一年に二度咲く花だ」と発見した喜びを表現する趣向のものと考えられよう。

〔109番の歌との対応関係について〕

いずれも花が盛りを過ぎて衰えていく時点での歌であるが、双方とも古今集前夜の歌風を伝える歌として対にされたものか。

【歌意】

(霜にあたって) 色の変わる「秋の菊」を、(通常はありえない) 「一年のうちに二度咲きにおう花」だと思えます。

111 咲がうへに散もまがふか桜花かくてぞこども春はくれにし

【校訂】底本初句「咲<sup>ちる</sup>かうへに」、三句「散<sup>又もちるかな</sup>もまかふか」、五句「春<sup>も過にし</sup>はくれにし」。新撰和歌諸本により本文の方をとる。また底本四句は「かくてそこそは」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】貫之集 八一七・古今和歌六帖 四一八三

【注】

〔咲くがうへに散りもまがふか桜花〕

上句は言葉のままに、桜の花が咲いている上に、散り乱れた花びらが舞い、あたり一面が花の景色であることを言ったものと理解できる。「咲くが上に散る」は、類例の見出しがたい、やや難解な表現であるが、桜の美しさを絢爛に描き出すために貫之が創作したものではないかと思う。桜の美しさが強調されるほどに、下句に表現された、行く春を惜しむ気持ちがいよいよ際立つからである。

初句は、貫之集および古今和歌六帖に「ちるがうへに」とある。貫之集の歌の場合、「昔、人の家に酒のみあそびけるに、さくらの散るさかりにて、人人花をだいてうた読みしついでに」という詞書から、これが盛んに散る花を「題」にして詠んだものであり、その「題」の趣旨を「散るが上に散る」と表現したものであることがわかる。一方、新撰和歌の歌としては、109番の【注】に記したように、春の暮れを主題としたものと考えられる。その趣旨を強調するために、貫之自身が歌句を改変したのではないだろうか。なお、第二句に用いられた、花びらや紅葉が乱れ散るさまを表現する「散りまがふ」という表現は、

秋山に落つる黄葉しましくはな散りまがひそ妹があたり見む (万葉集 卷二 一三七)  
梅の花散り粉ひたる岡辺にはうぐひす鳴くも春かたまけて (同 卷五 八三八)  
など、万葉集に多く見られるものである。

〔かくてぞこども春はくれにし〕

下句は、上句に描かれた眼前の景を見ての感慨を述べたもの。桜の花の美しさに目を奪われつつも、それが同時に春の暮れゆくことを意味している、ということに気づいた体の表現である。

【歌意】

咲いている（花の）上に、さらに散り乱れることか。桜花よ。（ああ）このようにして去年も春は暮れたのだ。（今年の春も残り僅かであるよ。）

112 紅葉を袖にこき入てもていなん秋はかぎりとみんなのため

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋下 三〇九

【注】

「もみぢばを袖にこきいれて」

初二句は、紅葉した葉を枝からしごき落として袖に入れて、の意。

引き攀ちて折らば散るべみ梅の花袖に扱入れつ染まば染むとも

（万葉集 卷八 一六四四）

池水に影さへ見えて咲きにほふあしびの花を袖に扱入れな（同 卷二十 四五一二）  
など、万葉集に見られる表現である。

なお、古今集の三〇九番の歌は初句「もみぢ葉は」とある。これは、詞書に「北山に僧正へんぜうとたけがりにまかれりけるによめる」とあることをふまえるならば、茸の類はかごなどに入れておいて、紅葉の方は袖に入れる、というように理解してよいだろう。この古今集歌を、新撰和歌に収めるに際して詞書を取り去ると併せて、初句を「もみぢ葉を」とあらためたものと考えられよう。

「もていなん」

持つて行こう、の意。これも古今集の本文に「もていでなむ」とあったものを新撰和歌で改めたらしい。古今集の歌の場合、詞書に記された一首の背景を踏まえれば、茸狩りにやって来た北山から「持つて出よう」と言ったものと素直に理解できる。ところが新撰和歌の方は、詞書を有さないもので、山から「いづ」と言う意味が無くなる。そこで本文を「いぬ」と改めたのであろう。

〔111番の歌との対応関係について〕

双方共に字余りの歌であり、また「散りまがふ」「こきいれて」と万葉調の言葉を用い



ている。さらに、111番の歌は、上句で眼前の景を描写し、下句でそれに対する感慨を述べるのに対して、112番の歌は、上句で他に対する誘いかけの言葉を記し、下句でその理由を述べる、というように、言葉の切れ続きのありようも同じである。

#### 【歌意】

紅葉した葉を袖にしごき落とし入れて持って行こう。もう秋は終わりだ、と見るような人のために。

113 桜ちるはるの心は春ながら雪ぞふりつゝきえがてにする

【校訂】底本二句「はるの心<sup>な</sup>は<sup>所</sup>」。新撰和歌の諸本は「はなのところは」のもの（群書類従本・永青文庫本等）と「はるのころは」のもの（元禄版本・松平文庫本等）がある。「な」と「る」、「と」と「こ」は字形が似ており、もと「はなのところは」とあったものを「はるのころは」と誤写した可能性も否定できないが、これも古今集の本文が「はなのところは」であることをふまえ、本稿の原則に従って「はるのころは」が新撰和歌の本文であると考えておく。

なお、右に記したように、初句の本文が「花の所」である可能性は否定しきれないが、ただし、その場合には、いささかの問題が生じる。古今集の近年の注釈書の多くは、「花の所」を、詞書に記された「雲林院」を桜の名所として言った表現だとする。しかし、一首を詞書を持たない新撰和歌の歌として見た時、「花の所」は『古今集遠鏡』に横井千秋が書き加えたように、「初二句は。さくら花のちるところはといふことなるを。さは云がたき故に。はなとちるとを。下上にはいへるなり。」とでも考えるほかはなさそうである。しかしそう考えたところで、かなり不自然で、詞書なくしては、理解の行き届きにくい表現と言わざるを得ない。このことからすると、やはり新撰和歌は古今集の「花の所」を「春の心」と改めたのだと考えてよいかと思われる。

【他出文献】古今集 春下 七五

#### 【注】

〔春の心〕

この歌の「春の心」という語は、新撰和歌69番の業平の「世中に」歌の注に記したように、「春の風情」あるいは「春の気分」と取るべきで、一首の趣旨は、梅花が春の風情の中で咲くだけでは飽き足らず、冬の中でも咲いている、ということであろう。なお、この歌については、実際の花と、枝に積もった雪の花とをあわせて「二度匂ふ」というのだ、

とし、「春の心」を「春にのみ咲かそうとする心」だとする説（和歌文学大系『貫之集』）もあるが、雪の花を「匂ふ」と表現した例が見えないことから、従いがたい。

〔消えがてにする〕

当該の歌は、新撰和歌においては行く春を惜しむ心を詠んだものとして位置づけられていることが、前後の配列

咲かうへに散もまかふか桜花かくてそこそも春はくれにし（新撰和歌 一一一）

桜ちるはるの心は春なから雪そふりつゝきえかてにする（同 一一三）

花もみなちりぬる後は行春のふるさとゝこそ成ぬへらなれ（同 一一五）

からうかがわれる。そうすると、結句の「消えがてにする」は、直接には雪に見立てた桜の花びらが消えないことを意味するが、春の心（春の風情）が、晩春の今も「消えがて」にしている、というニュアンスを響かせているものとも考えられよう。

【歌意】

桜が散る春の風情は（まさに）春でありながら、（それなのに花びらの）雪が何度も降り、消えようもしない。

114 紅葉ゞのながれてとまる湊には紅深きなみやたつらむ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋下 二九三

【注】

〔もみぢ葉の流れととまるみなと〕

当該の歌の「みなと」は、河を流れ下った紅葉が行き着く河口のこと。同時にそれは、

秋のはつる心をたつた河に思ひやりてよめる づらゆき

年ごとにもみぢばながす竜田河みなとや秋のとまりなるらむ

（古今集 秋下 三一一）

川にもみぢながるるをみたる所

もみぢばのながるる時は立田河みなとよりこそ秋は行くらめ（貫之集 二三八）

などから分かるように、和歌表現においては、秋という季節が行き着く先でもあると認識されていた。貫之はこうした、季節がうつろい、行き着く先を「みなと」に喩える表現を好んでいたようで、秋のみならず、春についても、

今までのにこれる岸の藤波は春のみなとのとまりなりけり（貫之集 二八六）

名残をば松にかけつつ百年の春のみなとにさける藤なみ  
と同趣向の歌を残している。

(同 三四一)

〔紅深き波〕

波の色は通常白いものとして詠まれる。その白いはずの波が紅色に染まっているという幻想的な光景を表現したものの。この、白い波とあかい紅葉を対比させる趣向は、

紅葉ばのながるる時は白波の立ちにし名こそかはるべらなれ (貫之集 二六五)  
と、貫之自身に例が見られる。

〔113番の歌との対応関係について〕

花と紅葉という春秋を代表する植物が散っている様を幻想的な景物(消えない雪と深紅の波)に喩える趣向が共通する歌として対にされているものと思われる。

【歌意】

(川面に散った)紅葉が流れて行き止まる(そして秋という季節が行き着く先でもある)河口には、紅色の深い波が立っているだろうか。

115花もみなちりぬる後は行春のふるさとこそ成ぬべらなれ

【校訂】底本二句「ちりぬる後は<sup>やと</sup>」。新撰和歌諸本により本文の方をとる。

【他出文献】貫之集 八・拾遺集 春 七七

【注】

〔花もみな散りぬる後は〕

初二句は、花が全て散ってしまった後は、の意。なお、貫之集および拾遺和歌集の第二句の本文は「散りぬる宿は」。こちらの場合では、花の散ってしまった宿の庭を見て、「ああこの宿は春のふるさとになってしまったようですね」と洒落たところが一首の眼目であるのに対して、新撰和歌の本文では「花が皆散ってしまった後は、季節も移り、もはや春にとってはふるさとになったようですね」と、機知的な要素が減少し、行く春を惜しむ気持ちの方が強くなるものと思われる。

〔行く春のふるさと〕

この表現、やや意味がわかりにくいのが、

きつつのみなくうぐひすのふる里はちりにしむめの花にぞ有りける

(興風集 二二。躬恒集 四二九・是則集 七にもあり)

と類似の表現と考え、行く春にとってのふるさと、と理解しておきたい。なお、

あすよりはしがの花ぞのまれにだにたれかは問はむ春のふる里

(新古今集 春下 一七四 良経)

は、当該の歌(正確には拾遺集の歌)を本歌としたものであるが、良経も「春のふるさと」を春にとつてのふるさと、と取っていたと思われる。

【歌意】

花もみな散ってしまった後は、去りゆく春のふるさととなってしまいそうです。

116 道しらば尋もいなん紅葉をぬさと手向て秋はいにけり

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋下 三二三

【注】

〔たづねもいなん〕

古今集では、第二句「たづねも行かん」とある。古今集の「行く」に比して、新撰和歌の表現「去ぬ」は、示す動作内容は近いものの、

文屋のやすひでみかはのぞうになりて、あがた見にはえいでたたじや

といひやれりける返事によめる 小野小町

わびぬれば身をうき草のねをたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ

(古今集 雑下 九三八)

のように、思い切って行く、という気持ちが強く表現されるようである。秋の行方を尋ねて思い切って行ってしまおうという気持ちだが、新撰和歌の方では強く描かれているということになる。

〔もみぢ葉を幣と手向けて〕

紅葉を幣に喩えることは、道真の

このたびはぬさもとりあへずたむけ山紅葉の錦神のまにまに

(古今集 羈旅 四二〇 道真)

が先蹤になったものかと思われるが、

秋の山紅葉をぬさとたむくればすむ我さへぞたび心ちする

(同 秋下 二九九 貫之)

神なびの山をすぎ行く秋なればたつた河にぞぬさはたむくる

(同 秋下 三〇〇 深養父)

等々、古今集の時代に好んで詠まれた趣向であった。当該の歌もこの趣向による。

ところで「幣」は、周知のように、旅の安全を祈るために、道中の要所ごとに神へ捧げたものとされる。ならば、紅葉、すなわち秋の捧げた幣がある以上、そこには秋の去り行く道もあるはず、という順序で発想されたものか。

〔115番の歌との対応関係について〕

双方共に季節が過ぎ去った後に思いをいたす心情を擬人的な表現をもちいて表した歌として、対にされたのであろう。

【歌意】

道を知っているならば、思い切つてたずねても行こう。（しかし道を知らないのですそれできない。その、誰にも知られない道中で）紅葉した葉を幣として手向けて、秋は去ってしまった。

117年毎に鳴ても何ぞ呼子鳥よぶにとまれる花ならなくに

【校訂】なし

【他出文献】不明。あるいは

としごとになにのしるらむなきものをくれゆくはるをなによぶこどり

（躬恒集 二一九）

と関連するかと思われるが、躬恒集の歌も本文が乱れているようで、判断は難しい。

【注】

〔何ぞ〕

当該の歌の「何ぞ」は

夢かとも思ふべけれどねやはせしなにぞ心にわすれがたきは

（拾遺集 恋二 七〇八）

と同様、副詞として用いられたもので、どうして、の意。

〔呼子鳥〕

呼子鳥が何の鳥であるかは不明。万葉集から見られ、多くは、

大和には鳴きてか来らむ呼子鳥象の中山呼びそ越ゆなる （万葉集 卷一 七〇）

滝の上の三船の山ゆ秋津辺に来鳴き渡るは誰呼子鳥 （同 卷九 一七二三）

我が背子を莫越の山の呼子鳥君呼び返せ夜のふけぬとに （同 卷十 一八二二）

などのように「呼ぶ」という動詞と共に用いられる。また、山に鳴く鳥として詠まれてい

るが、このことは、平安時代でも、

をちこちのたつきもしらぬ山なかにおぼつかなくもよぶこどりかな

(古今集 春上 二九)

と、変わらない。この歌では、山という言葉は用いられていないが、呼子鳥が鳴いているのだから山中の花を詠んでいる、と認識されていた可能性があるだろう。

【歌意】

毎年毎年鳴いてまで、どうして呼ぶのか呼子鳥よ。呼んだとて(散るのが)とまる花ではないのに。

118 たつた河紅葉みだれてなぐるめりわたらば錦中やたへなん

【校訂】なし

【他出文献】古今集 秋下 二八三

【注】

〔渡らば錦中や絶えなむ〕

下二句は、川面に流れる紅葉を錦に喩え、その錦が、河を渡ったならば断ち切れてしまいうだろうか、と推測したもの。この一首だけでは錦が裁ちきれるところにどのような意味あいを持たされているのか判然としないが、新撰和歌でこの歌が春の終わりに配されていることを踏まえれば、せつかくの美しい錦を、断ち切ることなく秋の終わるまで賞美しよう、という心を読み取ってよいものと思われる。

〔117番の歌との対応関係について〕

117番の歌では、呼子鳥に対して、落花をとどめようとするのは無駄であるといい、118番の歌では、ともあれ最後まで秋の錦を楽しもうとする。いずれも季節の終わりを惜しみながらも、無理にとどめようとするのではなく、過ぎゆく季節をあるがままに賞美しようとする心情を詠んだものとして対にされたか。

【歌意】

竜田川に紅葉が乱れて流れているようだ。(河を)渡ったら、錦の中途が切れてしまうだろうか。

119 声たえずなけや鶯ひとゝせにふたゝびとだに来べき春かは

【校訂】なし

【他出文献】古今集 春下 一三一

【注】

〔声たえず〕

初句の「たゆ」は、自動詞。声が途絶えない状態で、の意。  
〔ひととせに再びとだに來べき春かは〕

この句、全体としては、春は二度とやってこない、というほどの意味を表しているものと思われるが、一々の言葉に即して考えてみると、「一年に再びとだに」の部分がいささかわかりにくい。あえて説明を試みるならば、「くとだに」は、

人しれずたえなましかばわびつつもなき名ぞとだにいはましものを

（古今集 恋五 八一〇）

うきながらけぬるあわともなりななむ流れてとだにたのまれぬ身は

（同 恋五 八二七）

のように、「（せめて）くとだけでも」「くとさえ」と、期待しうる最低限のものを示す言い方である。ならば、当該の歌の場合、「ひととせにふたたび」というのが期待しうる最低限のものということになろう。

さて、そのように見て、「ひととせにふたたび」は、春が一年の内に何度も繰り返されることは望み得ないにしても、せめてもう一度だけでも、という、最低限の期待を表した表現であると考ええる。

【歌意】

（春が暮れてしまうまで）途切れぬ声で鳴きなさい。ほととぎすよ。「（せめて）一年にもう一度」とだけでも、来るような春なのか。（いや、春は二度と来ないのだから。）

120 ゆふづくよをぐらの山に鳴鹿の声のうちにや秋はくるらん

【校訂】底本五句「秋は来るらん」。「来」を、かなの「く」として用いている可能性も否定はできないが、一応誤字とみて、表記を改めた。

【他出文献】古今集 秋下 三二二

【注】

〔夕月夜〕

古今集の詞書に「なが月のつごもりの日大井にてよめる」とあることから、三十日の月は見えないはず、として、この歌の「夕月夜」を、実景ではなく、「小倉」という言葉を

修飾する枕詞的なものとして理解しようとする考え方がある。その是非を判断する用意は本稿にはないが、古今集の歌の場合、少なくともそのように取り得る可能性があることは確かである。一方、新撰和歌のように詞書が記されていない場合、夕暮れの空に掛かる織月のイメージをそのまま受け取ってかまわない。

〔声のうちにや秋は暮るらん〕

この歌句に類似する表現を貫之自身が用いている。

くれぬとてなかなりぬる鶯の声の内にや春のへぬらん

（貫之集 三五二）

この歌は、「暮れてしまった、といって鳴かなくなった鶯の音がしているうちに春は過ぎ去ったのだろうか」と解することができよう。当該の歌でも同様に、鹿の音がしているうちに、と考えたい。なお、鹿の音がもの悲しいものであることは、いうまでもない。

〔119番の歌との対応関係について〕

双方の歌ともに、季節の終わりを詠んだ歌に動物（鳥）の鳴き声を取り合わせたものがある。

【歌意】

夕月の光がほの暗い小倉の山で鳴く鹿の（もの悲しい）声のしているうちに秋は暮れているのだろうか。

## 新撰和歌集巻第二

### 夏冬四十首

121我宿の池のふぢなみ咲にけり山ほととぎすいまやきなかむ

【校訂】底本五句「<sup>いまや</sup>いつかきなかむ」。新撰和歌諸本により、傍記の異文の方を採用する。

【他出文献】古今集 夏 一三五

【注】

〔我が宿の〕

「宿」の語は「万葉では前庭の意味で使われている例が多いが、ここでは植物のありさまを詠むのが中心である。中古では、花や草木、池水など庭の情景が述べられていても家全体を意識して使われており、そのような庭を有する家の意が中古のヤドの例では最も多い」（『古典基礎語辞典』）とされる。さて、当該歌の「宿」について言えば、古今集の諸注で、前庭と見るか家と見るか一定しない。当該の歌の場合、歌主の視点が庭にあるこ



とは「池」「藤」からして明らかであるが、同時にこの「宿」が家全体を意識して用いられたものなのかどうかを一首の文脈から判断することは難しいからである。この歌を中古の歌と見れば、「宿」の語は、おのずと家全体を意識したものと受け取るようになるうし、この歌が万葉にも通ずる古風な詠みぶりのものとして認識されていたとすれば、新撰和歌の選者である紀貫之が、この「宿」を「前庭」に限定して理解していた可能性も考えられる。

〔池の藤なみ〕

「藤波」は藤の花房を指す。万葉集から見られる言葉である。万葉集では、

恋しければ形見にせむと我がやどに植多し藤波今咲きにけり

（万葉集 卷八 一四七一 赤人）

のように、水にかかわらない文脈で用いられることもあるが、

明日の日の布勢の浦廻の藤波にけだし来鳴かず散らしてむかも

（万葉集 卷十八 四〇四三 家持）

藤波の影なす海の底清み沈く石をも玉とぞ我が見る（同 卷十九 四一九九 家持）等、家持の周辺で、水の波との縁で用いられた例が散見し、水面の「波」を意識させうる語であったことがわかる。古今以後は、

家にふちの花のさけりけるを、人のたちとまりて見けるをよめる

わがやどにさける藤波たちかへりすぎがてにのみ人の見るらむ

（古今集 春下 一一〇）

池のほとりに藤の花さきたる所

水にさへ春やくると立ちかへり池の藤なみ折りつつぞみる（貫之集 一〇六）

などのように、積極的に水と縁のある歌語として用いることが通例となっていた。

当該の歌の場合、「藤波を詠む時には、「波」にちなんで池・岸などの語とともに詠むべきだとの説が「天徳内裏歌合」でも問題になった。この歌にも池が詠まれているが、このような古歌でそこまで意識したとは思われない」（日本古典文学全集『古今和歌集』）との指摘もあるが、「池」の語がある以上、古歌であっても藤波の「波」との関連を意識しないとは考えにくい。

〔咲きにけり〕

当該の歌の「咲く」に関しては「藤を「藤なみ」と言ったのは、「波」をかけて、

「池」と「さき」とに縁を持たせたもの。波の立つのを「さく」というのである」（日本

古典文学大系『古今和歌集』)との解釈がある。その可能性を否定することはできないが、ただ、波が「さく」という例は、『古今和歌集全評釈』（竹岡正夫）の指摘する、

今替はる新防人が舟出する海原の上に波な咲きそね（万葉集 卷二十 四三三五）

波驚、水逆三流レ（西大寺本最勝王経古点）

などしか確認できず、いずれも波が激しく立つ様子を表したと思われる。波が「さく」という動詞がそうした、波が激しく立つことを意味するのであるならば、当該の歌の「我が宿の池」にはあまりふさわしくない。

〔山時鳥〕

古今集時代の和歌に、ほととぎすを、山から来て山に帰るものとして詠んだ例がいくつもあるが、新撰和歌の場合、夏部の巻頭に置かれた当該の歌から、五月初めの位置を占める

足引の山郭公けふとてやあやめの草のねにたててなく（新撰和歌 一三五）

の間にだけ「山ほととぎす」あるいは「山のほととぎす」という表現が用いられる。これ以降に配列された歌では「ほととぎす」とだけ呼ばれる。そして、ほととぎすの歌の掉尾を飾る

いまさらにみやまにかへる郭公こゑのかぎりはわがやどになけ（新撰和歌 一五五）

で、山に帰ることが歌われていることから、この歌集での「山（の）ほととぎす」は、五月になって都もしくは里に下りてくる以前のほととぎすを意味する語として、限定された用い方をされている可能性が高い。

これに対して、古今集の場合は、五月の訪れを歌う

いつのまにさつきぬらむあしひきの山郭公今ぞなくなる（古今集 夏 一四〇）

以降にも、

思ひいづるときはの山の郭公唐紅のふりいでてぞなく（古今集 夏 一四八）

あしひきの山郭公をりはへてたれかまさるとねのみぞなく（同 一五〇）

のように、「山（の）ほととぎす」という語が見られ、新撰和歌のような判然とした区別はなされていない。「山（の）ほととぎす」という語の意味範疇、ひいては夏の歌の素材としての「ほととぎす」の概念が、古今集の時点で曖昧だったものを、新撰和歌編纂時に、貫之がより整った形に整理したものと見たい。

〔今や来鳴かむ〕

「今やくむ」は、

秋はきぬいまやまがきのきりぎりすよなよなかむ風のさむさに

(古今集 物名 四三二)

を見てもわかるように、藤の開花、あるいは秋になるといった時節の推移を示す事態の発生を確認し、確認内容に基づいて、その事態に関連する事象、すなわち、山ほととぎすがやって来る、とか、きりぎりすが毎夜鳴く、という出来事が直ちに生じるであろう事を推測する表現である。

さて、古今集でも当該の歌は夏部の冒頭に配されるが、結句は「いつか来鳴かむ」となっている。ほととぎすの飛来を待ち望む心をうたうものとして、古くから、

神奈備の磐瀬の社のほととぎす毛無の岡にいつか来鳴かむ

(万葉集 卷八 一四六六)

朝霞たなびく野辺にあしひきの山ほととぎすいつか来鳴かむ

(万葉集 卷十 一九四〇)

など、「ほととぎすいつか来鳴かむ」という定型の表現があったことからして、古今集は、その左注に人麻呂の作とも伝える古歌を、伝わる形のままに収載したものと推測される。そして、そうであれば、新撰和歌では同じ歌を、結句をあらためて（あるいは、古今集の採用しなかった本文をあえて採用して）、収めたということになる。では、そこにはどのような意図があるのだろうか。古今集の本文であると、ほととぎすの飛来への「憧れ」（窪田空穂『古今和歌集評釈』）、言い換えると、夏になったからといって、ただちにほととぎすが飛来するとは期待しがたいことを前提とした心情を表す。それに対して新撰和歌の本文は、前述の通り立夏と共にほととぎすの飛来が予期される、という前提の表現である。ならば、新撰和歌は、ほととぎすを夏の到来を告げる歌にふさわしい鳥として定位しようと考えていたのではないかとの推定ができる。

むろん、

いつのまにさつきぬらむあしひきの山郭公今ぞなくなる (古今集 夏 一四〇)

のように、古今集には、ほととぎすを立夏ではなく、五月を告げる鳥として詠む歌も見られることから、貫之の当時、立夏とほととぎすの結びつきは、さほど強固なものではなかったとわかる。そうした時代背景の中で、新撰和歌は、「山ほととぎす」の項に述べたことと併せて、立夏には山ほととぎすが来鳴き、五月になれば、ほととぎすの声がまさに似つかわしいものとして賞美される、という、歌の詠み方のモデルを提示していると考えてみたい。なお、ほととぎすは立夏の日に来鳴くもの、という考えは、新撰和歌の独創ではな

く、「霍公鳥者立夏之日来鳴必定」（万葉集 卷十七 三九八四 家持歌左注）と、万葉集に確認できるものである。この、万葉以来の歌の伝統に依りながら、貫之は、歌語「ほととぎす」の意味範疇を整理したのではなからうか。なお、このことについては、本論文 第二部第二章第三節参照。

〔藤とほととぎす〕

古今集の諸注釈書が指摘するように、藤の花とほととぎすの取り合わせは、万葉集にしばしば例が見られ、中でも、

藤波の咲き行く見ればほととぎす鳴くべき時に近付きにけり

（万葉集 卷十八 四〇四二）

のように、きわめて表現の類似した歌のあること、またなにより、古今集の左注に人麻呂の歌とする伝承がみられることから、当該の歌は、万葉に通ずる古風な歌として受け取られていたとおぼしい。

ただし、注意したいのは、右の万葉集歌が、ほととぎすではなく、藤の花を主題にしていることである。万葉歌の発想によって詠まれたと思われる——貫之集三八〇番の歌は、まさに万葉集四〇四二番の歌を利用したとおぼしいが——古今撰者たちの歌、

藤花咲きぬるをみて郭公まだなかぬからまたるべらなり （貫之集 二七一）

郭公なくべき時は藤花さけるをみればちかづきにけり （貫之集 三八〇）

わがやどの池のふぢなみさきしよりやまほととぎすまたぬひぞなき（躬恒集 九二）も、家集の配列や詞書によれば、みな暮春の、藤を詠んだものである。こうした詠みぶり、まさに万葉的なものであるとしたら、夏の、ほととぎすを主題とした当該の歌は、全体として古風ではありながら、やはり、万葉集以後（新撰和歌序文に万葉編纂の弘仁以後の歌を収めたとあった）の作ならではの新しい発想が付加されたものとして受け止められていたのだと考えられよう。

【歌意】

我が家の庭の池の藤の花が咲いた。（ならば）山ほととぎすが、今にでもやって来て鳴くのじゃないか。

122 たつた山錦おりかく神無月しぐれの雨をたてぬきにして

【校訂】底本初句「たつた山<sup>川</sup>」。新撰和歌の諸本では、「山」とするものと「川」とするものが交錯している。また、古今集でも「山」と「川」二様の本文が伝えられ、いずれ本

来の形と判断することは難しい。ただ、当時の歌に「時雨」と共に詠まれた「川」が見いだしがたいのに比して、「山」であれば、その例は多いことから、底本文の「山」を採用しておく。その他の詳細は【注】に譲る。また、底本二句「紅葉おりかく」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】古今集 冬 三三四

【注】

〔龍田山〕

「龍田（の）山」は、万葉集では花や紅葉と共に詠まれることの多いものである。また、夕されば雁の越え行く龍田山しぐれに競ひ色付きにけり（万葉集 卷十 二二一四）と、時雨とともに紅葉をうたった例も見え、当該歌の、時雨に色づく龍田山を詠むという趣向は、古くから存したことが確認できる。ところで、古今集になると「龍田（の）山」は、当該の歌を除けば、

花のちることやわびしき春霞たつたの山のうぐひすのこゑ（古今集 春下 一〇八）のような、「たつ」を掛詞に用いた、紅葉とは関わらぬ例が三例と、「古歌たてまつりし時の目録のその長歌」という詞書を持つ紀貫之の歌の「からにしき たつたの山のもみぢばを 見てのみしのぶ」という句中に見られるのみである。すなわち、この時代に紅葉の龍田山は「ふるうた」的なものであると認識されていたようである。その一方で、紅葉には、万葉集には一例も見えぬ「龍田川」を取り合わせることが一般的になる。仮名序には、「秋のゆふべ竜田河にながるるもみぢをばみかどのおほむめににしきと見たまひ」と見えるのを始め、古今集中七例の「龍田川」のうち六例が紅葉を歌ったものなのである。

このように、古今集の時代までに、紅葉と取り合わせて詠むものが龍田山から龍田川に代わったため、もと「龍田山」とあった当該歌の古風な本文に、古今風の「龍田川」という異文が生じたという可能性がもつとも考えやすい。

なお、古今集では、秋部の終わりに紅葉の歌が配され、また、冬部第二首目以降に紅葉（紅葉を除く）の歌が見えないことから、「冬になっては山に紅葉はないのだから、「山」では理屈に合わない。」（日本古典集成『古今和歌集』）として、「龍田川」が本来の本文であろうとする見方が多い。古今集ではそのように考えられるが、新撰和歌の場合、この歌以降にも、

神な月時雨もいまだふらなくにまだきうつろふ神なみのもり（新撰和歌 一二四）

かみな月しぐれの雨ははひなれやきぎのこのはを色にそめたる（同 一二六）

みやまにはあられふるらしとやまなるまさきのかづら色付きにけり（同 一二八）と、紅葉の歌が配されており、当該歌初句の本文を「山」とみて問題はない。また、新撰和歌諸本のうちに「龍田川」とするものがあることは、古今集の歌に影響された誤写によるものと説明できる。

〔錦織りかく〕

錦を織って掛ける、の意。同時代に類例を見いだしたがたい表現。文脈からその主語は龍田山と考えられるが、あるいは龍田姫を意識した可能性もあるか。

〔神無月時雨〕

「時雨」の語誌は、「万葉集」では晩秋にも初冬にも詠まれ、季節は一定していなかった。「古今集」でも、秋部に三首、冬部に一首あり、このように二季にわたって詠まれる傾向は、「金葉集」の時代あたりまで続く。：中略：初冬の景物として固定されるのは、「古今六帖」「和漢朗詠集」で初冬に採られていることもあるが、「堀川百首」に冬題のひとつとして立てられてからと思われる（『日本国語大辞典第二版』）『万葉集』『古今集』共に、秋のものとも冬のものとも定まっていけないが、平安中期ころから、主に初冬十月の景物として定着した」（『古典基礎語辞典』）というように説明される。（勅撰和歌集を見る限り、拾遺集・金葉集を除き、二十一番目の新続古今集まで、秋の時雨は存在し続ける。このことからだけしても、辞書類の説明は訂正を要するように思われる。なお、拾遺集で時雨が冬のみに見えるのは、新撰和歌の影響をうけたとされる公任の所為かと思われ、ならば、金葉集が同様であるのも、公任を賛仰する俊頼の意図によるかと想像される。）

さて、新撰和歌の場合、「しぐれ」の語を含む歌は四首。いずれも冬部に配され、またすべて「神無月時雨」の形をとる。このことを、紀貫之が、一般には晩秋から初冬のものとして認識されていた「時雨」を、十月の歌語として意識し、それを新撰和歌の配列によって示そうとしていたものだと思いたいのだが、いかがであろうか。

貫之集（新編国歌大観第三巻におさめる、いわゆる「第一類本」の系統）で、詠まれた年代の示された時雨の歌十二首を確認するのには、延喜十三年（二七）と十五年（五四）の二首は秋であるが、延喜十九年（一三六）以後の十首では、いずれも冬のものとして時雨を詠んだものである。この現象も、延喜の末頃から、貫之が「しぐれ」を初冬の歌語として考えていたことを示すのではないか。

なお、貫之のこうした行為は、その後の「時雨」の意味範疇の変遷を方向付けることには

ならなかっただろう。新撰和歌に対する同時代の評価の問題もあるだろうし、ずっと後になつて現れる変化を、この歌集が導いたとも考えにくいからである。ただ、こうした変化をしていく「時雨」という語に内在するなんらかの要素を、いち早く貫之が嗅ぎ取って、新撰和歌の編纂に反映させたものと思う。

〔時雨の雨〕

「時雨の雨」は、時雨におなじ。ただし、万葉集に多く見られる、古風な歌語であつたとおぼしい。

〔たてぬきにして〕

紅葉を錦にたとえて、織物である錦を構成する「たてぬき」に思いを巡らす発想は、古く、大津皇子の

経たてぬきもなく緯ぬきも定めず娘子らが織るもみち葉に霜な降りそね

（万葉集 卷八 一五一二）

に見られる。類似の発想で詠まれた、

み吉野の青根が峰の苔むしろ席誰か織りけむ経緯たてぬきなしに

（万葉集 卷七 一一二〇）

なども万葉に存することから、織物でないものを織物にたとえる場合に、「たてぬき」を持ち出すことは、早くから用いられてきた和歌表現であつたと思われる。

当該の歌も、これらの発想に依つたものであることは言うまでもないが、先蹤となる万葉時代の歌々が、紅葉や苔といった、織物にたとえられる景物が、実際の織物でないゆえに「たてぬき」を有さないことに着目するのに対して、雨脚を「たてぬき」に見立てている点で新しい。九世紀半ばの歌である、

霜のたてつゆのぬきこそよわからし山の錦のおればかつちる

（古今集 秋下 二一九一 藤原関雄）

と同じく、古風ではありながら、万葉風とは異なる趣向を加えた歌と受け取られていたものとおぼしい。

〔121番の歌との対応関係について〕

それぞれの歌の注でも述べたように、いずれも古風な歌であるが、万葉調そのままではない、（新撰和歌序に言う）「弘仁」以後ならではの新趣向を持つ歌とおぼしい。また、それぞれ「藤波」「紅葉」という、春夏・秋冬の二季をまたぐ景物と、（新撰和歌の配列では）季節を截然と分ける「ほととぎす」「時雨」が描かれることも偶然とは思われない。ちなみに、貫之集に天慶二年四月右大将殿御屏風の歌として四季の歌二十首が見える。

これらのうち十六首は、それぞれに詞書が付されるが、晩春と初冬の二首ずつは、

藤の花

郭公なくべき時は藤花さけるをみればちかづきにけり (貫之集 三八〇)

くれぬとは思ふものから藤花さける宿には春ぞ久しき (同 三八一)

やまのほとりにしてしぐれす

雨なれどしぐれといへば紅にこのはのしみてちらぬ日はなし (同 三九二)

ふる時は猶雨なれど神無月時雨ぞ山の色は染めける (同 三九三)

と、一つの詞書のもとに二首が配置されている。

先に述べたように、新撰和歌の夏冬部の冒頭で、貫之は、古今集では季節の位置づけが曖昧だったほととぎすと時雨を、それぞれ初夏と初冬の景物として定位したとおぼしい。しかし、それは当時にあつては新しい考え方であり、そのままただちに受け入れられるものではなかったらう。なお、貫之集で詠歌年がわかる歌を見る限り、ほととぎすが立夏と結びつくようになるのは、延長末ころから天慶ころのことである。また、これも先に述べた通り、時雨が冬の景物として固定されるのも延喜の末以降である。つまり、貫之自身にとって、これは新しいところみであったと思われる。そうした、あらたなところみをあえてした貫之の思いが、この天慶二年の詠に込められていると見るのは、うがち過ぎであるうか。そのように思えば、貫之集三九三番の歌の、「降るときはやはり雨であるが、神無月の時雨こそが山の色を染めたのだ」という、同じ雨でも、神無月の時雨と言ったときにはそれが山を染めるのだという、くどいほどの主張も、紅葉を染める時雨は神無月が似つかわしい、という新撰和歌での考えが反映されているものとも感じられる。

さて、この二首の対は、新撰和歌夏冬部の冒頭を飾るものでもある。以前に春秋部冒頭の二首は、礼記月令を想起させることを指摘した。この春秋部の冒頭二首が礼記月令を踏まえることは、はじめ勅撰和歌集として企画されたこの歌集の「勅撰性」を宣言したものと考えられる。ならば、夏冬部の冒頭から何らかの意図を読み取る試みも、新撰和歌の編纂意図を探る上で意味あることと思われる。今のところは憶測を述べるにとどまらざるをえないが、次のような可能性はないだろうか。

春秋部の冒頭は、礼記月令の表現を踏まえ、季節の順行を歌い上げたものであった。それに対して、夏冬部の冒頭二首は、「ほととぎす」「時雨」の季節を限定することで、季節の移ろいをはっきりとさせた、古風な詠みぶりの歌であった。仮に春秋冒頭が、貫之や敏行が古今集の時代になって詠んだ「今」風の歌だと考えられるのであれば、この古風



な夏冬部の冒頭と併せて、「古今」の歌で四季の順行、すなわち天皇の平安な治世を言祝ぐという意図があつたのではないか。

新撰和歌の序に、この集におさめられた歌は、みな「動天地感神祇、厚人倫成孝敬、上以風化下、下以諷刺上、雖誠仮名於綺靡之下、然復取義於教誡之中」と言う。この言葉を集中すべての歌に当てはめることは無理かもしれないが、巻の冒頭を飾るべく据えられた歌には、こうした政治的意図を読み取って良いのではないか。

【歌意】

龍田山は（紅葉の）錦を織って掛けている。神無月の時雨の雨を縦糸と横糸にして。

123 ほととぎす花橘に香をとめて鳴はむかしの人や恋しき

【校訂】底本は一本として「五月まつ山時鳥打はふき今もなかなん去年のふる声」を記す。新撰和歌の諸本には、この「五月まつ」という古今集歌とおなじものを本文とするものも相当数見られ、いずれが新撰和歌本来の本文であるか判断が難しい。ただ、121番歌の注釈で示したように、新撰和歌では、ほととぎすは立夏から鳴くものとされていたとおぼしい。その推定が当たっているのであれば、それと祖語しかねない「五月待つ」の歌が新撰和歌に入っているのは不自然ということになるだろう。そこで今は、古今集本文に影響されて、「五月待つ」が混入したものと考えておく。

【他出文献】新古今集 夏 二四四・和漢朗詠 一七四

【注】

〔ほととぎすとちばな〕

ほととぎすとちばなの結びつきは、万葉集にその例が多く見られ、古今集にも、

けさきなきいまだたびなる郭公花たちばなにやどはからなむ（古今集 夏 一四一）

やどりせし花橘もかれなくななどほととぎすこゑたえぬらむ（同 一五五）

とある。貫之自身も、

人の家にはなたちばなある所

年ごとにきつつ声するほととぎす花橘やつまにはあるらん（貫之集 三四四）

と詠むことから、両者の結びつきの連想は、きわめて強固なものであったことがわかる。

〔はなたちばな・香・昔の人〕

この歌の「香」は、

さつきまつ花橘のかをかげば昔の人の袖のかぞする（古今集 夏 一三九）

を意識したものとおぼしい。そうであるならば、この歌の「昔の人」も、かつて愛した人というイメージを含んだものと考えられる。

なお、時鳥が昔を偲んで鳴く、という発想は、早く万葉集の弓削皇子と額田王の贈答（巻二 一一一・一一二）に見られ、また古今集の時代にも、

はやくすみける所にてほととぎすのなきけるをききてよめる

ただみね

むかしべや今もこひしき郭公ふるさとにしもなきてきつらむ（古今集 夏 一六三）  
のように、引き継がれていることがわかる。

【歌意】

ほととぎすよ。（おまえが）はなたちばなに香を求めて鳴くのは、昔の人が恋しいのであろうか。

124 神な月時雨はいまだふらなくにまだきうつろふ神なみのもり

【校訂】底本二句「時雨もいまた」。新撰和歌諸本で、「時雨も」と「時雨は」が混在するが、本稿の原則に従って、古今集とは異なる方の本文を取る。底本四句「かねてうまたきイつろふ」。新撰和歌諸本により傍書に異文として示されたものを採用する。

【他出文献】古今集 秋下 二五三

【注】

「まだきうつろふ」

「まだき」は「神無月になったら、まだ時雨も降らないのに、こんなにも早く木の葉が色づいた」という驚きを表現する。なお、この部分、古今集には「かねてうつろふ」とある。古今集は秋部にこの歌を収めるので、秋部の歌としてふさわしく「神無月の時雨もまだ降らない、長月なのに、前もって木の葉が色づく」という意味の本文だったと理解して納得がいく。それを、新撰和歌が、122番の歌の注で述べた理由で、冬部に位置づけ直す際に、冬の歌としてふさわしい歌句に改変したものであろう。

「かみなびの森」

「かみなびの森」は、もと神の近くの森、という普通名詞だったのが、いくつかの場所に特定された固有名詞になったと言われる。この歌の場合、いずれの場所を指すのか断定はできないが、古今集中の五例が、みな紅葉とともに詠まれていることから、紅葉の名所として認識される竜田川の近くの森を指すものかと思われる。

〔123番の歌との対応関係について〕

123番の歌は、ほととぎすと花橘、ほととぎすと懐旧、という強固なイメージで結びつけられた素材を一首のうちに複数詠み込んだものである。124番の歌も、そのように見れば、時雨と紅葉、紅葉と神なびの森、というこれも結びつきの強い景物を合わせた歌であったことに気づく。

【歌意】

神無月になったら、時雨もまだ降らないのに、早くも色づいた神なびの森であるよ。

125 五月には鳴もふりなん時鳥まだしきほどのこゑをきかばや

【校訂】なし

【他出文献】古今集 夏 一三八

【注】

〔五月には鳴きもふりなん〕

121番の歌の注にも述べたように、新撰和歌では四月からほととぎすが鳴き始める。そして鳴き声が本格化する五月までには、一月近く鳴き続けることになるので、そのときにはすでに新鮮な感じがしないだろう、と言っているのである。

【歌意】

五月には、（その声も）鳴き古してしまうでしょう。ほととぎすよ。まだそのときになる前の（初々しい）声を聞きたいことよ。

126 かみな月時雨の雨は灰なれや木々の木の葉を色に染ける

【校訂】底本結句「色に染<sup>なす</sup>ける」。新撰和歌諸本では「染めたる」の本文を有するものが多いが、「染めける」（池田家文庫本）「染めなす」（群書類従本）も見られ、意味的にも、いずれと決することは難しいので、今は、仮に底本の本文を採用しておく。

【他出文献】不明

【注】

〔灰〕

他に例証が見つけれられないので断言は難しいが、染色の補助剤に用いる灰のことを、ここでは言っているか。

〔木々の木の葉〕

86番の歌の注に記したとおり、例の少ない言い方。冗長な言い方であるが、第二句の「時雨の雨」という、これも冗長な表現と併せて、語調を整える意図的な用法かと思われる。

〔色に染めける〕

「色に染む」という表現も他例を見出しがたいが、当該の歌では紅葉のことをうたっているのであるから、赤や黄色の美しい色に染め出す、という程度の意味で用いられているものと思われる。

〔125番の歌との対応関係について〕

一般に五月は、ほととぎすの鳴き声をもっとも楽しめる月とされる。それに対して、五月ではもう古びている、という新しい発想を持ち込んだのが125番の歌である。対になる126番の歌は、時雨が紅葉を染める、という常套的な表現に、染色工程で用いる「灰」を持ち出すという新しい発想を加えたもの。いずれも新奇な発想に基づく斬新な歌であった可能性が高い。また、初句に「五月」「神無月」という月の名をあげている点でも共通する。

【歌意】

神無月の時雨の雨は（染色に用いる）灰なのであろうか。木々の木の葉を（美しい）色に染めたことよ。

127五月まつ花たち花のかをかげばむかしの人の袖のかぞする

【校訂】なし

【他出文献】古今集 夏 一三九

【注】

〔五月待つ花たちばな〕

この句の意味するところを「五月を待つて咲く花たちばな」とみる説もあるが、その説に対しては「その場合、「香をかげばく香ぞする」がおちつかない。花橘の香は、やはり既に咲いていないといけないと思うからである」（片桐洋一『古今和歌集全評釈』）という批判が当たっていると思われる。やはり、この句は、四月のうちに咲き始めて、盛りするときである五月を待っている、開き初めの花たちばなを表現したものと考える方が妥当であろう。そのことで、一首全体に匂わされている恋のムードが、開き初めの初恋のそれとして描き出されることになる。

なお、花たちばなの実体については諸説あるが、よくわからない。

〔昔の人の袖の香〕

「昔」は「自分とのつながりのある過去」（『古典基礎語辞典』）。自分と関係したことのある人の袖の香、という文脈から、その人が恋人であったことを思わせる。

【歌意】

（盛りの時期である）五月を待って（咲き始めた）花たちばなの香をかぐと、昔の人の袖の香がする。

128 み山には霰ふるらし外山なるまさきのかづら色づきにけり

【校訂】底本結句「色つまにけり」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】古今集 神遊歌 一〇七七

【注】

〔みやま〕

「みやま」の「み」は、もとは美称であったのだろうが、

吹く風と谷の水としなかりせばみ山がくれの花を見ましや（古今集 春下 一一八）

わがこひはみ山がくれの草なれやしげさまされどしる人のなき（同 恋二 五六〇）

かたちこそみ山がくれのくち木なれ心は花になさばなりなむ（同 雑上 八七五）

などをみると、この時代の「み山」は、「深い山」という意味で考えられていたと思われる。当該の歌でも、「と山」（里に近い山）と対にされていることからして、「深山」の意で考えるべきであろう。

〔霰と紅葉〕

当該の歌は、「と山」の葛が色づいていることを根拠に「深山」に霰が降っていることを推測するものである。では、なぜそのような推測が成り立つのか。

冬のながうた

凡河内躬恒

ちはやぶる 神な月とや けさよりは くもりもあへず はつ時雨 紅葉とともに

ふるさとの よしのの山の 山あらしも さむく日ごとに なりゆけば たまのをと

けて こきちらし あられみだれて しもこほり いやかたまれる にはのおもに

むらむら見ゆる 冬草の うへにふりしく 白雪の つもりつもりて あらたまの

としをあまたも すぐしつるかな

（古今集 雑体 一〇〇五）

などによれば、時雨が木の葉を色づかせた後で、寒さが厳しくなってから降るのが霰であ

る。ならば「と山」で紅葉が色づいていれば、「深山」は、すでに霰の降る寒さであることが予想される。このことから、この歌では、紅葉の「と山」に居る歌主が、雲に覆われた「深山」を見て、「ああ、もう深山では時雨ではなく、霰がふっているらしい」と推測している体の歌であると考えられる。

〔まさきのかづら〕

まさきのかづらは、古今集諸注のいうように、神事に用いられたものであるらしい。もとの古今集歌が「神遊」の歌とされる所以である。新撰和歌の場合、冬の歌として配列され、詞書も有さないのであるが、古風な詠みぶりも相俟って、神事に関わる歌として享受された可能性が高いのではないか。

〔127番の歌との対応関係について〕

128番の歌は、藤原公任の著した『新撰髓脳』で、「むねと去るべきことは、二所におなじことのあるなり。」として示された四首のうちの一首である（ただし、この歌については、「優れたる事のある時には惣じて去るべらかず」とも記され、また同じ公任の『九品和歌』で「上品中」「程うるわしくて、余りの心あるなり」とされることから、高く評価されていたことがわかる。）。つまり、「み山」と「と山」の重複が意識された歌であることがわかる。127番の歌も、「香をかげば」「香ぞする」と、「香」の語が重複している。この点に着目して対にされたものではなからうか。さらに、127番の歌は、古今集に読人知らずの歌として見え、いわゆる古歌として愛唱されていたものようであるが、128番の歌も、古今集神遊の歌に収められる神楽歌、という古風なものである。こうした点も二首が対にされることで際立つのではないか。

【歌意】

（あの雲のかかった）深山では霰が降っているらしい。（だって）外山のまさきの葛が色づいたもの。

129うのはなもいまだちらぬに時鳥さほの河原にきなきとよます

【校訂】底本二句「いまたちらぬに」さかねは。四句「さほの河原に」山へを。結句「きなきとよます」むる。

新撰和歌諸本により本文をとる。

【他出文献】万葉集 卷八 一四七七

【注】

〔卯の花もいまだ散らぬに〕

万葉集において卯の花は、

ほととぎす来鳴きとよもす卯の花の共にや来しと問はましものを

(万葉集 卷八 一四七二)

卯の花の咲く月立ちぬほととぎす来鳴きとよめよ含みたりとも

(同 卷十八 四〇六六)

などのように、ほととぎすと取り合わせて詠まれることが多い。ところが、古今集の時代頃に卯の花が詠まれることは少なくなり、そのためであろうが、ほととぎすと卯の花を詠んだ歌もほとんど見られなくなる。

さて、新撰和歌でほととぎすは、立夏に鳴き始め、五月には盛んに鳴き、鳴きふるす(125番)ほどになる、とされていた。であれば、この歌は、卯の花がまだ散らない、すなわちほととぎすの声本格化する五月にならない、まだ四月中なのに、「とよむ」ほどに鳴くほととぎすの声を、驚きをもって描いていることになるだろう。

先に記したように、卯の花とほととぎすという素材は、この時代にはいささか古いものであった。そういした古めかしい素材を、ほととぎすの声の盛りを五月とする、古今集以降のあたらしい発想で一首に仕立てたのが、この歌だということである。

〔佐保の河原〕

佐保川のほととぎすを歌う例はほかに見出せない。後で述べるように、この歌はもとは家持の詠んだもので、四句は「佐保の山辺に」とあった。佐保山のほととぎすを詠んだ例も他に見られないことから、家持は、歌の伝統的な表現を用いたのではなく、目の前の風景をそのまま歌にしたものとおぼしい。それをそのまま、新撰和歌が「河原」に変えたというわけであろう。

〔万葉集歌からの歌句の改変〕

この歌のもととなったのは、万葉集卷八に収める大伴家持の、

卯の花もいまだ咲かねばほととぎす佐保の山辺に来鳴きとよもす

(万葉集 卷八 一四七七)

と思われるが、新撰和歌の編纂方針として、万葉の歌はとらないのであるから、貫之は、うのはなもまださかなくほととぎすさほのやまべをきなきとよむる

(家持集 七一)

のような形で、平安期に伝承されたものを選んだのであろう。その際に、二句の「まだ咲かなくに」を「いまだ散らぬに」へと、四句の「佐保の山辺に」を「佐保の河原に」へと

改めた可能性が高い。では、なぜこのように改変したのか。

「(四月の花である卯の花が)まだ咲かなくに」という本文であると、一首は三月暮春の歌になる。貫之は、四月に鳴くほととぎすの歌を、新撰和歌のこの位置に配するために、二句を「いまだ散らぬに」と改めたのであろう。

次に、「佐保の山辺」を「河原」に変更した理由はいかなるものであったのか。古今集中の「佐保山」の例をすべてあげると、

やまとの国にまかりける時、さほ山に霧のたてりけるを見てよめる

きのともり

たがための錦なればか秋ぎりのさほの山辺をたちかくすらむ

(古今集 秋下 二六五)

是貞のみこの家の歌合のうた よみ人しらず

秋ぎりはけさはなたちそさほ山のははそのもみぢよそにても見む (同 二六六)

秋のうたとてよめる 坂上是則

佐保山のははその色はうすけれど秋は深くもなりにけるかな (同 二六七)

佐保山のははそのもみぢちりぬべみよるさへ見よとてらす月影 (同 二八一)

千鳥なくさほの河ぎりたちぬらし山のこのはも色まさりゆく(古今集 賀 三六一)

と、みな秋の紅葉を詠んだものである。このことから、この時期には、「佐保山」は、秋の紅葉の山というイメージができあがっていて、それが、夏の歌にはふさわしくない、という判断で、貫之が「河原」に改めた、という可能性が浮かび上がる。

### 【歌意】

卯の花もまだ散らない(四月のうち)なのに、ほととぎすが佐保川の河原に来て、うるさいほどに鳴いている。

130 神無月時雨とともに神なびの森のこのはふりにこそふれ

### 【校訂】なし

【他出文献】後撰集 冬 四五一・和漢朗詠集 三一五

### 【注】

〔神なびの森〕

当該の歌の「神なびの森」は新撰和歌の124番の歌と同じく、紅葉と共に詠まれることから、龍田のあたりの森のことであろうと思われる。



〔森の木の葉は降りにこそ降り〕

この歌は、新撰和歌の配列では、最後に位置する紅葉の歌であり、かつ、十月の終わりの歌である。類似の発想の歌を同時代以前に見出すことは難しく、一方で、

神無月はては紅葉もいかなれや時雨とともにふりに降るらん

（順集 一一七 天暦五年）

神な月限とや思ふもみぢばのやむ時もなくよるさへにふる

（後撰集 冬 四五六 読人不知）

など、後撰集のころにいくつかの例を確認することができる。このことから、神無月の終わりに時雨と共に紅葉が「降る」という趣向の歌は、天慶く天暦のころに盛んに詠まれたものかと思われる。

〔129番の歌との対応関係について〕

それぞれの歌に「佐保」「神なびの森」という、大和の地名が詠み込まれていることが目につく。また、鳴きとよむほととぎす<sup>とぎす</sup>と降り<sup>とぎす</sup>に降る木の葉、という、ある景物の量が多いというイメージも似通う。さらには、129番の歌は、古めかしい素材を新しい発想で詠んだものであったが、130番の歌も、「神なび」というふるさとの地名を新しい詠みぶりで歌い込んだものとして意識されていた可能性があるだろう。

【歌意】

神無月の時雨とともに、神なびの森の木の葉はどンドン降り落ちる。

131いそのかみふるき都のほととぎす声ばかりこそむかし也けれ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 夏 一四四

【注】

〔いそのかみ古きみやこ〕

「いそのかみ」は、「古」<sup>ふる</sup>の枕詞として、

石上降るとも雨につつまめや妹に逢はむと言ひてしものを（万葉集 卷四 六六四）

のように、早くから「石上」という地名を意味しない用いられ方もされてきたが、平安和歌で用いられたものいくつかは、

いそのかみのなむまつが宮づかへもせでいそのかみといふ所にこもり  
侍りけるを、にはかにかうぶりたまはれりければ、よろこびいひつか

はすとてよみてつかはしける

ふるのいまみち

日のひかりやぶしわかねばいそのかみふりにしさとに花もさきけり

(古今集 雑上 八七〇)

そせいせぬとききてみつねがもとおくる

いそのかみふるくすみこし君なくて山の霞は立ちあわぶらむ (貫之集 七七二)

のように、今の奈良県天理市にある「石上」という、具体的な地名としての意味を有している。ならば、当該の歌の「いそのかみ古き都」も、奈良の都を指すのではなく、石上の布留あたりの都——顕昭の説によれば、安康天皇の石上穴穂宮と仁賢天応の石上広高宮あたり——、という意味で理解されていた可能性が十分に考えられる。

〔古き都のほととぎす〕

ほととぎすの声に昔日のふるさとをしのぶ、という発想は、

郭公なくこゑきけばわかれにしふるさとさへぞこひしかりける

(古今集 夏 一四六)

はやくすみける所にてほととぎすのなきけるをききてよめる

ただみね

むかしべや今もこひしき郭公ふるさとにしもなきてきつらむ (古今集 夏 一六三)  
など、この時代に見られるものである。

〔声ばかりこそ昔なりけれ〕

結句はやや舌足らずな表現であるが、

ふる郷の花をみる

ふる郷をけふきてみればあだなれど花の色のみむかしなりけり (貫之集 二二二)  
と同じく、すっかり変わってしまったふるさとの姿とは対照的に、ほととぎすの声は昔のまま変わらないことを言っているものと思われる。

【歌意】

石上の布留あたりにあった古い(すっかり変わってしまった)都のほととぎすの声だけが昔のままであるよ。

132 ふるさとは吉野の山し近ければひと日もみゆきふらぬひぞなき

【校訂】底本二句「奈良の都の」。このままでは一首として意味をなさないようであるから、群書類従本等により改める。おそらくは、筆写の過程で「ふるさと」という語に引か

れて「奈良の都」という誤記をしてしまったのであろう。また底本結句は「ふらぬひはな<sup>そ</sup>き」。どちらとも決しがたいが、新撰和歌諸本の多くが「降らぬ日ぞなき」という本文であることと、古今集の本文が「降らぬ日はなし」であることから、本稿の原則に従って、古今集とは異なる方の本文をとる。

【他出文献】古今集 冬 三二一

【注】

「ふるさと」

古今集の注釈のうちには、当該の歌の「ふるさと」を吉野と見る説も多い。しかし、そのように断定する理由はないし、またそのように取った場合、ふるさとである吉野の里は、吉野の山に近いので、という意味になり、一首としておもしろみにかけるように思われる。また、「ふるさと」を奈良とする説もあるが、

ならの京にまかれりける時にやどれりける所にてよめる

坂上これのり

みよしの山の白雪つもるらしふるさとさむくなりまさるなり

(古今集 冬 三二五)

は、どうであろうか。この歌の表現は、奈良の寒さが厳しくなったという程度の天候で、吉野山では積雪になるほどに両者の気象条件が異なることが前提となっている。これも断定はできないが、こうした認識が一般的であったとすれば、吉野山に近い奈良だから吉野と同じく毎日雪が降る、という、吉野と奈良の気象の類似を前提とする歌としてみることも難があるように思われる。

以上のことから、当該の歌の「ふるさと」は、どことも指定しない「昔なじみの、吉野に近い里」という意味でとっておきたい。

「一日もみ雪降らぬ日ぞなき」

古今集に、次のような二首がある。

ふるさとはよしのの山しちかければひと日もみ雪ふらぬ日はなし

(古今集 冬 三二一)

ちはやぶるかもの社のゆふだすきひと日も君をかけぬ日はなし

(同 恋一 四八七)

このことからすると、当時、「一日もく日はなし」という類型の表現があって、これをうまく歌に詠み込むことが一つの趣向となっていた可能性がある。

さて、右の二首は、ともに新撰和歌にも収められている。前者は当該の132番、後者は352番の歌であるが、いずれも結句は「〜日ぞなき」である。（352番の歌についても新撰和歌諸本のうちに「日はなし」とするものがあるが、古今集歌に引かれた誤写と考える。）今述べたように、古今集の時点では、「一日も日はなし」という定型の表現を詠み込むこと自体が、一首の趣向たりえたのであろう。けれども、そのことなしに一首を味読するとき、「ふるさとは（雪の多い）吉野山が近いので、雪の降らない日は一日もない」と、平叙文で述べただけで、歌としての感興が足りないように思われる。それを、新撰和歌に収める際に「ふるさとは（雪の多い）吉野山が近いので、雪の降らない日は一日もないことよ」と、係助詞「ぞ」を用いて、詠嘆のニュアンスを加えることで、一首としての完成度を高めようとした。そのように見ることはできないだろうか。

〔131番の歌との対応関係について〕

131番の歌の石上と132番の歌の「吉野」の双方が奈良周辺の地名である。またいずれの歌にも「古」という言葉が詠み込まれていることも共通する。なお、129・130番の歌は、「佐保川」「神なびの森」と、こちらも大和の地名を詠み込んでいた。配列の際にそのことが意識されていなかったとは考えにくい。

【歌意】

昔なじみのこの里は、吉野の山が近いだけあって、一日も雪が降らない日はないことだ。

133 おもひいづるときはの山の時鳥から紅のふり出てぞなく

【校訂】なし

【他出文献】古今集 夏 一四八

【注】

〔思ひいづる〕

「思ひいづる」という初句が、何を思い出す、と言っているのか、歌だけでは判断が難しいが、これが夏の部に納められた歌であることと、新撰和歌の夏の歌として直前に置かれた131番の歌が「古き都」のほととぎすの、「昔」の声を詠んだものであったことからすれば、やはり昔のことを思い出す、という意味でとるべきと考えられる。ただし、古今集のいくつかの注釈書が言うように、思い出す対象が、昔の恋である、ということも考えられないわけではない。ほととぎすの声を振り絞るようにして鳴くさまに、

紅のふりいでつつなく涙にはたもとのみこそ色まさりけれ（古今集 恋二 五九八）

のような、紅涙を絞って泣くという辛い恋のイメージを彷彿とさせる、恋のムードをまとった夏の歌と考えても良いのだろう。

「ときはの山」

「ときはの山」は、常緑の山。ときは山とほととぎすとを取り合わせた例が他に見出しがたいことから、当該の歌の「ときは山」は、その緑のイメージと、第四句の「から紅」との対比のおもしろさゆえに持ち出されたものと思われる。

「唐紅のふり出てぞなく」

「ふり出て」という言葉は、布を紅に染めることと、声を振り絞るということを掛けたもの。

【歌意】

昔時を思い出す時は、常緑の山のほととぎすが、緑ならぬ紅に染まった涙を流すような声を振り絞って鳴く。

134 冬さむみ氷らぬ夜半はなけれども吉野の瀧はたゆるよぞなき

【校訂】なし

なお、拾遺和歌集では二句「氷らぬ水は」。こちらの方が平易な表現であるが、後述の理由で、新撰和歌の本文としては「氷らぬ夜半」がふさわしいものと考ええる。

【他出文献】拾遺集 冬 二三五

【注】

「氷らぬ夜半」

「水の氷ることのない夜半」の意。ややぎこちない表現であるが、結句の「たゆるよぞなき」と同音であることのおもしろさのために、あえて用いたものと考ええる。

「吉野の瀧」

氷こそ今はすらしもみよしの山のたきつせこゑもきこえず（後撰集 冬 四七七）

は、通常は氷りにくい瀧でさえ氷ってしまう吉野の寒さを前提とした歌である。この歌の表現が成り立つことからわかるように、吉野の瀧は通常氷らないものとして考えられていた。

「たゆるよぞなき」

寒くて水の氷らない夜半はないが、瀧の流れが絶える夜はないのだ、の意。またここには、絶える「世」もない、すなわち、いつの世までも流れ続けるという「賀の意識」（新

日本古典文学大系『拾遺和歌集』( )が掛けられていると見られる。

〔133番の歌との対応関係について〕

133番の歌は「思ひ出づるときはの山」という印象的な掛詞がある。それと対比することで、134番の歌の結句「たゆるよ」も「夜」と「世」の掛詞と気づくことになる。また、前者の常緑の「ときはの山」はめでたいものであるが、後者の「絶えることの無い世」もめでたい景物である。さらに133番の歌の「いづる時はくふりいでて」という「出づ」という言葉の反復と、134番の「なけれどもくなき」という「なし」の反復とも意識されているのではないか。

【歌意】

(寒さの厳しい吉野では)冬が寒くて水の氷らない夜半はないけれども、吉野の滝は絶える夜もなく、いつの世までも流れ続けている。

135足引の山時鳥けふとてやあやめの草のねにたてゝ鳴

【校訂】底本結句「ねをたてゝ鳴」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】拾遺集 夏 一一一・古今和歌六帖 九四

【注】

〔山ほととぎす〕

新撰和歌において、ほととぎすは立夏から鳴き始めるが、四月の間は山辺に居て里でなくことはあまりない。

〔けふとてや〕

当該の歌の「けふ」は、菖蒲の根を引く五月五日。ほととぎすも、山から里にやって来て、盛んに鳴く日なのである。

〔ねにたてて鳴く〕

「ね」は菖蒲の「根」と鳴き声の「音」の掛詞。

【歌意】

アシヒキノ山ほととぎすは、今日が五月五日だとてか、菖蒲の根ならぬ、<sup>ね</sup>声をあげて鳴くことだ。

136梅のはな雪にまじりてみえず共かをだにゝほへ人のしるべく

【校訂】底本初句「梅<sup>はなのいろは</sup>の花」。新撰和歌諸本により本文の方をとる。

【他出文献】古今集 冬 三三五

【注】

〔梅の花〕

当該の歌が、古今集には、

梅花にゆきのふれるをよめる

小野たかむらの朝臣

花の色は雪にまじりて見えずともかをだににほへ人のしるべく

(古今集 冬 三三五)

とある。古今集歌の初句は「花の色」であるが、新撰和歌で詞書を排除した際に、詞書の内容を歌に取り込むために、貫之が「梅の花」へと改変したのである。ただ、そのために、古今集の歌の「色」―「香」という言葉の対応のおもしろさは失われている。

また、もう一つ古今集との相違がある。古今集では冬部の後半になって梅花が配されるが、新撰和歌では、二十首中の八首めと九首目に置かれている。古今集では、冬も終わりに近づいた、いわば一足早い春の景物として梅が考えられていたものが、新撰和歌では冬の中のものとして位置づけなおされているのである。

〔香をだににほへ〕

当該の歌の「にほふ」については、「にほふ」は自動詞であるが、今は他動詞的に用いた。」(日本古典文学大系『古今和歌集』)とするのが通説である。ただ、

大伴の遠つ神祖の奥つ城は著く標立て|人の知るべく (万葉集卷十八 4096)

牽御馬、三匝後、上卿仰云、騎(乃礼)、乗廻七八廻、上卿仰云、下(於利)：

(西宮記 卷五 駒牽事 へ内は割り注)

などのように、二段動詞の命令形に「よ」のつかない例も少数ながら見られる。このことからすれば、下二段活用の他動詞「にほふ」の命令形の、「よ」がつかない形、との可能性も検討に値するかと思われる。

〔人の知るべく〕

結句は、前項で引用した万葉集卷十八の歌と同様、自分以外の他の人間によくわかるように、の意。

〔135番の歌との対応関係について〕

135番の歌は、ほととぎすの鳴く声、136番の歌は、梅の香と、それぞれのもつとも顕著な属性を正面切って取り上げた点で共通するのではないか。

【歌意】

梅の花よ。その姿は雪に交じって見えなくても、香だけでも放て、他の人がよくわかるように。

137 夏の夜はふすかとすればほととぎすなく一こゑにあくるしのゝめ

【校訂】底本初句「夏の夜の」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】古今集 夏 一五六

【注】

〔夏の夜は〕

初句は、古今集では「夏の夜の」とある。こちらの本文であれば、「夏の夜の明けくるしのめ」は、「ふすかとすれば明けくるしのめ」「ほととぎす鳴く一声に明けくるしのめ」という三つのことがらを同時に表現した、緊密な構成が一首の眼目となる。それに対して、新撰和歌のように「夏の夜は」であると、初句で「夏の夜とは」という主題を提示した後、それはどんなものであるかと云えば、床に伏したかと思うと明けくものであり、ほととぎすの一声のうちに明けて、しのめをむかえるほどに短いものだ、と、説明を加える趣であり、夏の夜の短さをどのようにたとえるか、という機知が眼目となる。

【歌意】

夏の夜はどのようなものかと言えば、床に伏せたかと思うまもなく、ほととぎすが鳴く一声のうちに夜が明けてしのめになってしまうほどの短いものである。

138 雪ふれば木ごとに花ぞ咲にけるいづれを梅とわきておらまし

【校訂】なし

【他出文献】古今集 冬 三三七

【注】

〔木ごとに花ぞさきにける〕

この句は、通説の通り、中国の離合詩に学んだ機知的な表現。

〔わきておらまし〕

末尾の「まし」は、

かりのこゑをききてこしへまかりにける人を思ひてよめる

凡河内みつね

春くればかりかへるなり白雲のみちゆきぶりにことやつてまし



(古今集 春上 三〇)

秋ののに道もまどひぬ松虫のこゑする方にやどやからまし (同 秋上 二〇一)

ぬしなくてさらせるぬのをたなばたにわが心とやけふはかさまし

(同 雑上 九二七)

などと同じく、雁に手紙を託す・松虫の声のする方(Ⅱ秋の野で私を待っていてくれる人)の所)で宿る・七夕に布を託す、等の、現実的ではないことをしようとするに際して、そのようにしてみようかしら、と戸惑ったりためらったりする気持ちを表現するものである。当該の歌の場合、その戸惑いの気持ちは、もちろん芝居がかつたポーズであると考えられる。

〔137番の歌との対応関係について〕

138番の歌は、枝に降り積もった雪の美しさを、どのように機知的な表現でうたいあげるか、を眼目としたもの。それと対にされた137番の歌も、夜の短さを表す機知的な表現をこらしたものであった。

【歌意】

雪が降ると木ごとに花が咲いたよ。いったいどれを梅だと区別して折ろうかしら。

139めづらしき声ならなくにほととぎすこゝらの年をあかずもある哉

【校訂】底本結句「あかすもみる哉」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】古今集 賀 三五九

【注】

〔めづらしき声ならなくに〕

皆がこぞって聞きたがるほととぎすの声を「めづらしき声」ではない、とするところがおもしろい。もちろん、一首の主旨としては「飽かず」というのだから、「めづらし」と感じているのである。

【歌意】

めづらしい声でもないのに、ほととぎす(の声は)何年もの間、飽きないでいることよ。

140夕されば佐保の河瀬の川ぎりに友まどわせる千どり鳴也

【校訂】底本二句「佐保の河瀬<sup>原</sup>」。新撰和歌諸本の多くが「河瀬」であるので、さしあたり本文の方をとる。なお、拾遺集および友則集には「河原」とある。

【他出文献】拾遺集 冬 二三八・友則集 二一

【注】

〔佐保の河瀬…川霧…千鳥…友〕

佐保川と千鳥の取り合わせ、また友を呼んで鳴く千鳥、という趣向は、万葉集以来の常套的な表現である。その二つを合わせて、佐保川で千鳥が鳴く理由を、友を見失ったからと理屈つけるところが一首の眼目であろう。なお、「川霧に」の「に」は、千鳥の鳴いている場所もしくは友を見失った場所を示すとも、また、友を見失った原因を示すとも考えられようが、今は、この歌を詠んだ紀友則の作とされる

声たててなきぞしぬべき秋ぎりに友まどはせるしかにはあらねど

（後撰集 秋下 三七二）

と同じく、友を見失った原因を示すと考えておく。

〔139番の歌との対応関係について〕

いずれも鳥の鳴き声を詠んだ歌である。加えて、前者の「あかずもあるかな」、後者の「川瀬の川霧」という同音のおもしろさも、二首が対にされることでいっそう引き立つ。

【歌意】

夕方になると、佐保の河瀬の川霧のために友を見失った千鳥が鳴いている。

141夏衣たちきるものを逢坂の関の清水の寒くもある哉

【校訂】なし

【他出文献】古今和歌六帖 七二

【注】

〔夏衣たちきる〕

「たちきる」は、

神なびのみむろの山を秋ゆけば錦たちきる心地こそすれ（古今集 秋下 二九六）

のように、布を裁断して衣服に仕立て、身に着けることを意味する。

〔逢坂の関の清水〕

「逢坂の関の清水」は、

相坂の関にながるるいはし水いはで心に思ひこそすれ（古今集 恋一 五三七）

あふさかの関のし水に影見えて今やひくらんもち月のこま（拾遺集 秋 一七〇）

のような例があることから、この当時、すでに歌枕的な地名であったと思われる。

【歌意】

夏衣を仕立てて着る暑い季節なのに、逢坂の関の清水の冷たくもあることよ。

142うら近くふりしく雪を白浪の末のまつ山こすかとぞみる

【校訂】底本二句「ふりくる雪は<sup>しく</sup>を」。新撰和歌諸本で「ふりしく雪を」「ふりしく雪は」

「ふりくる雪は」が混在するが、本稿の原則に従って、古今集とは異なる本文をとる。

【他出文献】古今集 冬 三二六

【注】

〔ふりしく雪〕

白雪のふりしく時はみよしのの山した風に花ぞちりける (古今集 賀 三六三)

松がえにふりしく雪を蘆たづのちよのゆかりにふるかとぞみる (貫之集 二七八)

などで明らかのように、「ふりしく雪」は、降りしきる雪。さて、この部分、古今集では「ふりくる雪」とある。古今集の本文の場合、雪の降る方向は示すものの雪の量についてはわからない。一方、新撰和歌の「ふりしく」であると、すゑの松原を越える激しい波と見まがうほどの、盛んに降りしきる降雪の情景を描き出すことになる。

〔すゑの松山〕

下の句は、

君をおきてあだし心をわがもたばすゑの松山浪もこえなむ

(古今集 東歌 一〇九三)

を踏まえた表現である。すゑの松山の実体は不明だが、波の越えるはずも無い場所であればこの古今集歌が成り立たなくなる。そして、そうした場所を越える波であるから、本来に激しい、降りしきる雪のような波が、情景としてはふさわしい。そのように考えて貫之は古今集の歌の第二句を改変したもののか。

〔141番の歌との対応関係について〕

141番の歌の「逢坂の関の清水」と142番の歌の「末の松山」とともに、古くから歌に詠まれる歌枕的な地名を詠み込んだものである。

なお、142番の歌の第二句、「ふりしく雪を」の「を」は、格助詞とも接続助詞ともとることが可能であるが、141番の歌の第二句に接続助詞の「くを」が置かれていることを意識するならば、新撰和歌では、この142番の歌の「を」も、接続助詞と受け取るよう指示しているように思われる。

【歌意】

これは浦近くに降りしきる雪なのに、白波が末の松山を越したかと錯覚することよ。

143 郭公まつに夜ふけぬこのくれのしづくをおほみ道やよくらん

【校訂】底本二、三句「まつに夜ふけぬこのくれの<sup>ときなかす</sup>」。新撰和歌諸本により改める。底本四句は「しづくにおほみ<sup>を</sup>」。「おほみ」とミ語法に上接続する助詞は「を」が一般的であるから、右傍書をとる。また、夏歌に「しぐれ」がよまれることは考えにくいので、左傍書はとらない。

【他出文献】家持集 七三・古今和歌六帖 五九四

【注】

「ほととぎす…このくれ」

「このくれ」は、木が生い茂って下が暗くなったところ。または、そのような時期である初夏のことをいう。万葉集に多く見られる言葉。

ほととぎす思はずありき木の暗のかくなるまでになにか来鳴かぬ

(万葉集 卷八 一四八七)

のように、ほととぎすは、夏になり、木の葉が茂り「このくれ」が著しくなったころにやってくる鳴く、とされ、時には、

木の暗の茂き峰<sup>を</sup>の上<sup>を</sup>をほととぎす鳴きて越ゆなり今し来らしも

(万葉集 卷二十 四三〇五)

と、「このくれ」のあたりを飛び渡り、そして、

多祜の崎木の暗茂にほととぎす来鳴きとよめばはだ恋ひめやも

(万葉集 卷十八 四〇五一)

のように、「このくれ」にやって来て鳴くとされていた。

こうした和歌的常識を踏まえて、当該の歌では、ほととぎすを誘うはずの「このくれ」に、しづくが多いため、ほととぎすがそれをよけながらやって来るので、なかなかここまですで到着しないのか、と機知的な発想をしているのであろう。

【歌意】

ほととぎすを待つうちに夜が更けた。(ほととぎすがなかなか来ないのは)木の生い茂った(ところの)滴が多くて、道を避けているのだろうか。

144 冬くればあやしとのみぞまよはるゝかれたる枝に花のさければ

【校訂】なし

【他出文献】不明

【注】

「枯れたる枝に花のさければ」

「枯れたる枝」の花とは、

雪ふれば木ごとに花ぞさきにけるいづれを梅とわきてをらまし

(古今集 冬 三三七)

と同じく、枝に降り積もった雪を花に見立てたものである。古今集の時代の歌にこの見立てはしばしば見られるものであるが、

しもがれのえだとなわびそしらゆきをはなとやとしてみれどあかれぬ

(新撰万葉 一六三)

のように、それは、歓迎すべきものとして受け取られるのが通例である。それを当該の歌では「あやしとのみまよはるる」と、戸惑いをもたらすものとして表現する。そこが新しい発想であると思われる。

「143番の歌との対応関係について」

枝についた雫を歌う143番の歌に、枝に積もった雪を歌う144番の歌をつがえたのである。また、双方ともに、和歌によく扱われる素材に対して、別の見方を提示するよな歌いぶりが共通点として意識されていたかも知れない。

【歌意】

冬が来ると、不思議だとばかり迷われる。枯れている枝に花が咲いているので。

145 つれもなき夏の草ばにをく露を命とたのむ蟬のはかなさ

【校訂】底本は、「くれかたき夏の日くらしなむれはそのことゝなく物そかなしき」を本文に記し、「つれもなき」の歌を頭書する。「くれがたき」を本文として記すのは、新撰和歌諸本のうち元禄版本の系統のみであるので、「つれもなき」の方を新撰和歌の本文と、一応考えておく。なお、底本に書き加えられた「つれもなき」の歌の結句は「はかなさ」。これも新撰和歌諸本により改めた。

【他出文献】新撰万葉 七七・寛平御時后宮歌合 四八・後撰集 夏 一九三

【注】

「つれもなき夏の草葉」

夏草の葉のどのようなことをとらえて「つれもなし」と言っているのかわかりにくいだが、

世中いとさわがしきとし、とほき人のもとに、はぎのあをきしたばの

きばみたるにかきつけて、六月ばかりに

これをみようへはつれなき夏草もしたばかくこそおもひみだるれ

（清少納言集 一九）

から類推するならば、緑のまま変化のないことを言うか。さらに、

六月に木の紅葉ぢたるをとりてうたよみて、まさただのあそんのもと

よりおくれる

秋こそあれ夏の野べなるこのには露の心のあさくも有るかな（貫之集 八七八）

のように、草木を色づかせる露が置いても変化しない夏の草の様子を「つれもなし」と表現した可能性も考えられる。

これらのことから、当該の歌の「つれもなき夏の草葉」は、蟬の命がどうなろうと頓着せず、色も変えない、素っ気ない夏草の葉と今は見ておく。

「露を命とたのむ」

露は、古今集仮名序に「草のつゆ水のあわを見てわが身をおどろき」とあるように、はかなく消えてしまうものとして捉えられるものであり、

きみこひてきえかへる身とくさのはにおくしらつゆといづれまされり

（忠岑集 九八 作者は躬恒とする）

など、その文脈で詠まれた和歌も多い。

また、蟬と露との関係については、「初学記三十・蟬に「飲露」の事項あり、用例も多い。」（和泉古典叢書『後撰和歌集』）という指摘のとおり、漢籍の世界で、蟬は露を飲むものとされていた。この漢籍の常識に、和歌の、はかなく消える露というイメージを組み合わせ、はかない蟬の命を表現したものである。

「蟬のはかなさ」

蟬の命のはかなさを歌った例は、なかなか見出しがたく、これは、当時、和歌の素材になっただけでなかったものとおぼしい。もちろんこの歌が、蟬の命の短さを歌った珍しい例、ということもできるが、そこに別の意が込められている可能性も考慮しておきたい。すなわち、初句の「つれもなき」が、

つれもなき人をやねたくしらつゆのおくとはなげきぬとはしのばむ

(古今集 恋一 四八六)

などのように、恋の歌で、冷たい人を表現するのによく用いられる定型的な表現であることや、

いのちやはなにぞはつゆのあだ物をあふにしかへばをしからなくに

(古今集 恋二 六一五)

のように、露のようにはかない命が恋の歌でしばしば詠まれることから、当該の歌は、恋のために死んでしまいそうな人物の姿を彷彿させるものであった可能性があるのではないか。そのような、せつない恋のイメージを匂わせる、夏の蝉の歌であると、考えたい。

【歌意】

そつけない夏の草葉に置く露、あつという間にはかなく消えてしまう露を、命の綱として頼りにする蝉のはかなさよ。

146 ふる雪は枝にもしばしとまらなん花も紅葉も絶てなきまは

【校訂】底本二、三句「枝にもしばしとまらなん」。新撰和歌諸本により本文の方をとる。

また結句底本「絶えてなきよに」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】寛平御時后宮歌合 一三六・後撰集 冬 四九三・古今和歌六帖 六八五

【注】

〔降る雪は枝にもしばしとまらなん〕

当該の歌も144番の歌と同じく、枝につもった雪を花に見立てる表現を応用したもの。

「しばしもとまらなん」という表現の背景には、

消えやすき雪はしばしもとまらなんうき事なげく我にかはりて (貫之集 六一八)

などに見える、雪は消えやすいもの、という考えがある。簡単に消えてしまうだろう枝の上の雪に対して、しばし留まって欲しい、と言っているのである。

〔花も紅葉も〕

春秋をいろどる代表的な風物として花と紅葉をとりあげるとは、額田王(万葉集 巻

一 一六) 以来のことであるけれども、この時代に「花も紅葉も」という表現は、

ことしより かへるみとせの ふゆのきにはなもみぢも ちりはてて 心すごか

る ころほひに：

(忠岑集 八七)

春秋はすぐすものから心には花も紅葉もなくこそ有りけれ

(貫之集 八九一)

くらいしか見出せず、「まず貫之が和歌的表現として注目したものか」(日本古典集成

『土佐日記 貫之集』)と考えられる。

〔145番の歌との対応関係について〕

145番の歌に描かれた草葉の上の露と、この歌の枝の上の雪が、景として類似する。またあるいは、「花も紅葉も」「蟬のはかなさ」という同時代に見出しがたい、新しい美意識を提示する、という共通項も指摘できようか。

【歌意】

降る雪は、枝にしばらくでもとどまってほしい。花も紅葉もまったく無い間は。(枝の雪を花と思っ見ていたから。)

147つれくとながめせしまに夏草はあれたる宿にしげく生にけり

【校訂】底本初句「つれく」に。新撰和歌諸本により改める。底本三句「夏草は」これも新撰和歌諸本により本文の方をとる。底本下句「あはれやとにしけりあひにけりあれたる宿にしげく生ひにけり」。傍部は古今和歌六帖の本文を記したものと見て、新撰和歌諸本により本文の方をとる。なお、結句は新撰和歌諸本で「生ひにけり」(群書本等)と「生ひにける」(松平文庫本等)が対立するが、積極的に連体形とする理由が考えにくいので、底本文のままにする。

【他出文献】古今和歌六帖 三五五八

【注】

〔つれづれとながめせしまに〕

初二句は、所在なく物思いにふけている間に、というほどの内容であろうが、花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに

(古今集 春下 一一三)

五月なが雨のころ、ひさしくたえ侍りにける女のもとにまかりたりければ、女

つれづれとながむる空の郭公とふにつけてぞねはなかれける (後撰集 夏 一八五)

をとこなど侍らずして、としごろ山里にこもり侍りける女を、むかし

あひしりて侍りける人、みちまかりけるついでに、ひさしうきこえざ

りつるを、ここになりけりといひいれて侍りければ 土左

あさなけに世のうきことをしのびつつながめせしまに年はへにけり

(後撰集 雑二 一一七四)

など、この表現には、恋の歌でない場合にも、男に忘れられてひとり過ぐす女のイメージ



が重ねられる事が多い。

〔夏草：しげく生ひにけり〕

この時代、夏の歌数やバリエーションが少ないためであるが、「夏草」が詠まれることは、さほど多くない。そうした状況の中で、古今集の仮名序が「秋はぎ夏草を見てつまをこひ」と、夏草に妻を思う例を示し、

かれはてむのちをばしらで夏草の深くも人のおもほゆるかな

（古今集 恋四 六八六）

足曳の山下しげき夏草のふかくも君をおもふ比かな

（貫之集 二七二）

など、その茂みの深さを恋の思いの深さにたとえる歌が見出せることから、当該の歌も恋の思いがはなはだしく募る、というイメージを重ね合わせて享受すべきものと思われる。

なお、「荒れたる宿」も

ものへまかりけるに、人の家をみなへしうゑたりけるを見てよめる

兼覧王

をみなへしうしろめたくも見ゆるかなあれたるやどにひとりたてれば

（古今集 秋上 二三七）

などからわかるように、恋人の訪れが途絶えた女の家をイメージさせることがある。

【歌意】

所在なく物思いにふけっている間に、夏草は、（人の訪れが途絶え）荒れた我が家の庭にびっしりと生えてしまった。

148 くらぶ山梢も見えでふる雪によはにこえくる人や誰ぞも

【校訂】なし

【他出文献】不明

【注】

〔くらぶ山〕

「くらぶ山」は、9番の歌の注にも記したように、「暗い」という意味を込めて歌うことが多く、当該の歌でも「夜半」の暗さを強調していると考えらるべきであろう。

〔梢も見えでふる雪〕

この表現は類例の多いものではないが、

梅花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれば

（古今集 冬 三三四）

のような、視界を遮るほどに降りしきる雪のことを言うのであろう。あるいは、万葉集巻三に収める「柿本朝臣人麻呂獻新田部皇子歌」の反歌である、

矢釣山木立も見えずふりまがひ雪のさわける朝樂しも (万葉集 卷三 二六二)

(この万葉歌の訓には諸説あるが『万葉集注釋』のものに従う。なお、西本願寺本の訓は、「やつりやまこだちもみえずちりまがふゆきもはだらにまゐでくらくも」。のうさぎまあしたたのしも)  
と何らかの関係があるかとも思われる。

〔夜半に越え来る人〕

この表現は、伊勢物語にも見える、

風ふけばおきつ白浪たつた山よはにや君がひとりこゆらむ (古今集 雑下 九九四)

の影響下にあると考えざるを得ない。仮に当該の歌が伊勢物語の「風吹けば」歌に先行するとしても、新撰和歌編纂の時点では、「風吹けば」の歌を想起せず受け取ることは難しくからである。したがって、この歌の「越え来る人」には恋人のもとに急ぐ人物のイメージが重ねられることになる。

〔人や誰ども〕

結句の表現も、同時代には類例が見出しがたいが、

清涼殿御前のすすきをむすびたるを、たれならんといひて、ないしの

命婦のむすびつけさせける

ふくかぜのころもしらではなすすきそらにむすべる人やたれども (実方集 一七)

女房に藤雑色保男がかたらひたえて、またあらためて、うちはしから

しのびてかよふをみて

かづらきのたえとたえにしいはばしをしのびにわたる人はたれそも (輔親集 六二)

を参考にすれば、「いったいその人は誰なんだい」と、呼びかける体の表現であると思われる。

〔147番の歌との対応関係について〕

この二首は、恋のイメージが濃厚に感じられる、季節の歌という趣向が共通する。

【歌意】

くらぶ山を、梢も見えないほどに降りしきる雪の中、夜半に越えてくる人はいったい誰なんだい。

149 夏のひをあまぐもしばしかくさなんみるほどもなくあくる夜にせん

【校訂】底本初句「夏のよを」。このままでは意味が通じないので、松平文庫本や内閣文庫本の右傍に記された、寛平御時后宮歌合や新撰万葉集の本文により改める。また底本三句「かくさなん」・結句「あくるしのゝめ」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】寛平御時后宮歌合 六八・新撰万葉 三一五

【注】

「見るほどもなくあくる夜」

この表現は同時代の類例が見いだしがたいので意味が取りにくいが、およそ

夏のよのわびしきことは夢にだにみるほどもなくあくるなりけり（小町集 五三）

くるるかと思見るほどもなくあけにけりをしみもあへぬ夏の夜の月

（続後撰集 夏 二一五）

さらぬだにみる程もなきなつのよをまたれていづる月のかげかな

（続古今集 夏 二六二）

などと同じく、夏の夜の短さを表現したものであろう。

「あくる夜にせむ」

この句は、舌足らずでわかりにくい。新撰万葉の本文、

なつのひをあまくもしばしかくさなむぬるほどもなくあくるあしたを

（新撰万葉 三一五）

であれば、夏の太陽を雲が隠すことで、寝るまもなく明けてしまう朝の訪れを遅らせてほしい、ということになるが、新撰和歌の歌でも同じ事を言っているとすれば、あつという間に明けてしまう夜を延長するために、夏の日を隠してほしい、と雲に欲しているということになるか。いずれにしても、

あかなくにまだきも月のかくるるか山のはにげていれずもあらなむ

（古今集 雑上 八八四）

などを想起させるような、大胆な発想の歌である。

【歌意】

夏の日を空の雲よしばし隠してくれないか。（そうすれば日が隠れている間の時間を見るほどもなく明けてしまう夏の短夜（の足し）にしよう。）

150 白雪のふりてつもれるふるさとに住人さへやおもひきゆらん

【校訂】底本三句「山里は」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】古今集 冬 三二八

【注】

〔白雪の降りて積もれるふるさと〕

第三句は、古今集には「山里は」とある。新撰和歌では、「降り」「積もれ」「ふる」という雪に関わる言葉が連続することのおもしろさに着目し、そのおもしろさを強めるために「ふるさと」と歌句を改変したか。

〔思ひきゆらん〕

「消ゆ」について古今集の諸注釈では、「雪」の縁語として持ち出した、という説と、

雪のふれるを見てよめる

凡河内みつね

ゆきふりて人もかよはぬみちなれやあとはかもなく思ひきゆらむ

(古今集 冬 三二九)

のように、雪が降り積もって見えなくなってしまうように消える、という意味で用いたとする説とがある。前者は、「降りて積も」った雪、すなわち真っ白な雪景色を描いておいて、「消ゆ」という言葉を持ち出すのは、いくら縁語とは言え、いささか無理があるように思われるので、消去法で後者と考える。ただ、こちらの説で解釈する場合、「雪が降って積もった里は、雪のために道も消えてしまったように」と相当の言葉を補わなくてはならない。そのように舌足らずな表現とせざるを得ない。

〔149番の歌との対応関係について〕

双方友に舌足らずな表現の目立つ歌である。そうした点に着目して対にされたか。

【歌意】

白雪が降って積もったふるさとでは、そこに住む人までも（降り積もる雪に道が消えるように）消え入る思いをしているだろう。

151 夏のように霜やふれるとみるまでにあれたる宿をてらす月かげ

【校訂】底本初二句、「夏のように霜やふれると」。新撰和歌諸本により本文の方をとる。

【他出文献】寛平御時后宮歌合 五〇・新撰万葉 四五・古今和歌六帖 二八六

【注】

〔月光と霜〕

白く冷たい月の光を霜に見立てることは、「葉聲落如雨，月色白似霜。」（白居易「秋夕」）など、漢詩に由来する表現のようである。後のものであるが、

月照平砂夏夜霜

月影になべてまさごの照りぬればなつの夜ふれる霜かとぞみる (千里集 三三)  
夏の夜もすずしかりけり月かげにははしろたへのしもとみえつつ

(後拾遺集 夏 二二四)

など、夏の月光を霜に見立てることで、暑い季節と冷たい霜のコントラストを楽しむ趣向の歌も詠まれている。

【歌意】

夏の夜に霜が降ったのだろうかと思えるほどに、荒れた宿を照らす(真っ白な)月の光よ。

152 雪のうちにみゆるときは、みわの山道のしるべの杉にやあるらん

【校訂】底本四、五句「道のしるべのまつにやあるらん」やまのしるしの松にそありける。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】躬恒集 一五六

【注】

〔三輪の山道のしるべの杉〕

三輪山の杉といえは、まずは、

わがいははみわの山もとこひしくはとぶらひきませすぎたてるかど

(古今集 雑下 九八二)

が想起されるし、当該の歌も、当然ながらこの「わがいはは」の歌を踏まえて理解すべきものである。したがって、この歌の「道のしるべ」とは、誰かの住んでいる「庵」に続く道と受け取ることになる。さて、三輪山の杉は、普通、

四月おほみわの祭のつかひ

いづれをかしるしと思はんみわの山みえとみゆるは杉にざりける (貫之集 一四五)

大神のまつりにまうでたる

いにしへのことならずしてみわの山こゆるしは杉にぞ有りける

(貫之集 二二六)

はつせのみちにてみわの山を見侍りて

もとすけ

みわの山しるしのすぎは有りながらをしへし人はなくていくよぞ

(拾遺集 雑上 四八八)

のように「しるし」と呼ばれる。それが、当該の歌で「しるべ」とあるのは、「道」という言葉に合わせたものである。

〔151番の歌との対応関係について〕

双方共に、色彩の鮮やかなイメージが描き出されている歌となっている。

【歌意】

雪の中に見える常緑は、三輪山の道のしるべの杉の木であるのだろうか。

153せみの声きけばかなしな夏衣うすくや人のならんと思へは

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋四 七一五

【注】

〔蝉の声聞けば悲しな…薄く〕

蝉の声を聞くと悲しくなるのは、古今集諸注の指摘するとおり、

蝉のはよるの衣はうすけれどどうつりがこくもにほひぬるかな

（古今集 雑上 八七六）

蝉の羽のひとへにうすき夏衣なればよりなむ物にやはあらぬ

（古今集 誹諧歌 一〇三五）

のように、「蝉」は「薄し」という言葉と結びつきやすく、そこから、人の心の薄さが連想されるためであろう。さらに、

季夏中気候，煩暑自此收。蕭颯風雨天，蝉声暮啾啾。（白居易「永崇裡觀居」）

など、夏の暑さも収まった頃の蝉の声は悲しい、という漢詩の表現がある。こうしたものをも踏まえているのではないか。当該の歌は、夏部の後半に置かれており、暑さも収まる頃の蝉の声であるから、それが悲しげに聞こえる、というわけである。

〔夏衣薄く〕

「夏衣」が薄いものと表現されることは、

かけてのみみつぞしのぶなつごろもうすむらさきにさけるふちなみ

（躬恒集 四四一）

夏衣うすきかひなし秋まではこのしたかぜもやまずふかなん（貫之集 一五〇）

など、例が多い。前項で述べたように、当該の歌は、夏も後半の、暑さが収まった時期の歌として配されている。暑さが収まった頃の薄い夏衣であるから、あの人の心のように冷たく「薄く」感じられる、と言っているのである。

【歌意】

(夏も終わりに近づいてきた頃の) 蝉の声を聞くと悲しい事よ。(蝉の羽のように薄い)  
夏衣のように、薄くあの人(の気持ち)なるだろうと思うと。

154 けぬがうへにまたもふりしけ春霞たちなばみ雪まれにこそみめ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 冬 三三三

【注】

〔けぬが上にまた降りしけ〕

初二句は、雪が消えない上にさらに降りつもれ、というほどの意味である。これは、

今よりはつぎてふらなむわがやどのすすきおしなみふれるしら雪

(古今集 冬 三一八)

と同じく、雪の降り積もることを喜ぶ表現であろう。

〔春霞立ちなばみ雪まれにこそみめ〕

下の句は、春霞が立ち、春になれば、雪は滅多に見られないのだから、今のうちに降り積もっておくれ、という、終わりに近づく冬を惜しむ気持ちを表すものと思われる。

〔153番の歌との対応関係について〕

153番の歌は、夏も終わりに近づいたことを、悲しげな蝉の声を借りて惜しむ歌であった。154番の歌も同様に、過ぎ去ろうとする冬を惜しむ気持ちを表している。

【歌意】

消えない雪の上にまたも降り敷け。春霞がたったら、雪はまれにみるだろうが、(これほどの雪は見られないから)。

155 今更にみ山にかへるほととぎす声のかぎりは我宿になけ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 夏 一五一

【注】

〔今更にみやまに帰るほととぎす〕

この部分、古今集には「今更に山に帰るなほととぎす」とある。古今集の歌句の場合、ほととぎすはまだ里で鳴いており、もうじき山に帰る時期が来るので、「今更に帰るな」と呼びかけていることになる。一方、新撰和歌では、もうすでにその時期になって、ほと

とぎすは山に帰ろうとしている。そのほととぎすに対して、「今更山に帰るのか」と責めている風情の歌ということになる。

さて、ほととぎすの鳴き声が盛んに聞こえる時期のものとして、この歌を配した古今集に対して、新撰和歌では、これが最後のほととぎすの歌である。最後のほととぎすの歌としてふさわしい歌句に、新撰和歌撰者が改めたものであろう。

【歌意】

今になって、山に帰るほととぎすよ。（山に帰るのはやめて）声が出る限りは私の家の庭で鳴け。

156 冬ごもり春まだとをき鶯のすのうちの音のきかまほしきを

【校訂】底本二句、「その春またとおき」。結句は「きかまほしきを」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】不明

【注】

〔冬ごもり春〕

万葉集において「冬ごもり」は「春」にかかる枕詞であった。それが古今集では、

ふゆごもり思ひかけぬをこのまより花と見るまで雪ぞふりける

（古今集 冬 三三二）

雪ふれば冬ごもりせる草も木も春にしられぬ花ぞさきける

（同 三二三）

のように、現代語の「冬ごもり」と同義の言葉として用いられている。ただ、古今集中の二例が、いずれも紀貫之の歌であり、同時代の例を求めても、

梅花おほかる里に鶯の冬ごもりして春を待つらん

（貫之集 一七一）

と、彼の歌以外に見出すことが難しい。そうすると、現代語と同じ意の「冬ごもり」を用いたのは、貫之に始まる、ということかもしれない。なお、古今集仮名序で「そへ歌」の例としてあげられた

なにはづにさくやこの花ふゆこもりいまははるべとさくやこのはな

の「ふゆこもり」も、「春」にかかる枕詞と見て不都合はない。

さて、当該の歌では、第二句の「春」に接続することから、一見、枕詞であるようにも思われるが、先にあげた貫之集（一七一）の例や、

鶯の冬ごもりしてむめる子は春のむつきの中にこそなけ

（古今和歌六帖 一一二）



のように、鶯が冬ごもりしていて、春がまだ遠い時期、という意味で取ることはいける。今見てきたように、貫之の作歌では枕詞ではない「冬ごもり」という語が用いられることから、彼の編んだ歌集である新撰和歌の歌としては、「冬ごもり」を動詞と取るほうがよいのではないか。

〔きかまほしきを〕

「きかまほしきを」は、

齋院屏風に、山みちゆく人ある所 伊勢

ちりちらずきかまほしきをふるさとの花見て帰る人もあはなん（拾遺集 春 四九）

はつこゑはきかまほしきをほととぎす春にわかれんことぞかなしき

（重之集 一一二）

のように、「聞きたいのに・聞きたいが」というほどの意で用いられる表現である。

〔155番の歌との対応関係について〕

双方の歌共に、ほととぎすとうぐいすという季節を代表する鳥の名が上の句の末尾におかれている。さらに、いずれもそれぞれの鳥のさかりの季節ではないことも共通点としてあげられよう。

【歌意】

冬ごもりしていて、春がまだ遠い鶯の巢の中の鳴き声が聞きたいのに。

157床夏の花をしみれば打はへて過す月日のかずもしられず

【校訂】底本結句「時かすもしられず」。「月日の時」では意味が通じないので、永青文庫本等により改める。

【他出文献】貫之集 二七三・拾遺集 雑春 一〇七九・古今和歌六帖 三六二一

【注】

〔常夏の花をし見れば〕

「常夏の花」は、

とこ夏に鳴きてもへなんほととぎすしげきみ山になに帰るらむ

（後撰集 夏 一八〇）

かはる時なき宿なれば花といへどとこなつをのみ植ゑてこそみれ（貫之集 三八二）  
などのように、「とこなつ」の「とこ」という音から、永遠に夏が続く、変わらない、という意味を掛けて用いられることがある。当該の歌でも「とこ」という名を持つ常夏の花

を見るので、長い年月の数もわからない、という意味で取らねばならないだろう。

「うちはへて」

「うちはへて」は、

織女にかしつる糸の打ちはへて年のをながくこひやわたらむ

(古今集 秋上 一八〇)

屏風の多なる花をよめる

つらゆき

さきそめし時よりのちはうちはへて世は春なれや色のつねなる (同 雑上 九三一)

のように、変わらない状態のまま永く続くこと。「うちはへて過ごす」で長寿を保つ意味ともなる。四、五句の「月日の数も知られず」と合わせて、算賀の歌としてもふさわしい表現である。

【歌意】

常夏の花を見ると、(と、夏というだけあって) これからさき変わらないままで過ごす年月の数もわからない。

158きのふといひけふとくらして飛鳥河ながれて早き月日也けり

【校訂】なし

【他出文献】古今集 冬 三四一

【注】

〔昨日といひ今日とくらして〕

この表現は、類例が見つけないので断定的なことは言いがたいが、およそ、『古今和歌集正義』の説のように、「昨日今日と言ひ暮らす」という内容であると思われる。

さて、そうであるとして、「昨日今日」と言つて暮らすとはどのような意味であるのか。つひにゆくみちとはかねてききしかどきのふけふとはおもはざりしを

(古今集 哀傷 八六一)

の「昨日今日」は、遠い未来ではなく、差し迫った時間を示すだろうし、

世中はなにかつねなるあすがはきのふのふちぞけふはせになる

(古今集 雑下 九三三)

は、ついこの間、というほどの意味で「昨日」の語が用いられ、「今日」と併せて、今自分の置かれている時間を言う。

きのふまであひみし人のけふなきは山の雲とぞたなびきにける (貫之集 七七六)

の「昨日」「今日も」同様。

これらの例を踏まえるならば、「昨日今日」と言い暮らす、とは、今自分の目の前にある、差し迫った日々のことだけを考えながら生活する、というほどの意味になるうか。

なお、昨日・今日・明日、という言葉続きを一首に詠む、この歌の趣向と関係あるだろうものとして指摘されている白居易の「浩歌行」（金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集』）の、老いを嘆く趣旨を、この歌に読み取ることも可能である。

〔明日香川〕

当該の歌では、「昨日今日」という言葉の縁で「明日」という名を持つ「明日香川」にかかる。明日香川といえは、

明日香川行く瀬を速み早けむと待つらむ妹をこの日暮らしつ

（万葉集 卷十一 二七一三）

と、流れの速さが取り上げられることがないわけではないが、もっぱら、

世中はなにかつねなるあすかがはきのふのふちぞけふはせになる

（古今集 雑下 九三三）

で歌われるように、無常の世を象徴するものとして歌に詠まれる。当該の歌でも、日々の暮らしをしているうちに、あつという間に年月が過ぎ、留まるものはない、という世の無常を読み取ることができであろう。

〔流れて早き月日〕

この表現は、古今集諸注の言うように、もとは「流年」等の漢語の表現によるものが

世の中のすべなきものは年月は流るるごとし…

（万葉集 卷五 八〇四）

のように、早くから和歌に定着していた類のものを利用したのではあろう。ただ、言葉として「流れて…年」ではなく、「流れて…月日」であることに注意するならば、

あまの河雲のみをにてはやければひかりとどめず月ぞながるる

（古今集 雑上 八八二）

土左より任はててのぼり侍りけるに、舟のうちにて月を見て

つらゆき

てる月のながるる見ればあまのはいづるみなと海にぞ有りける

（後撰集 羈旅 一三六三）

などの、「流る」―「月」という表現（これも漢籍由来で和歌に定着したものと思われるが）をも、当該の歌では、意識したものと思われる。なお、「流年」「流月」という二つ

の表現をこの歌に読み取る、ということは、この当該の歌を意識して貫之が詠んだものとおぼしい、

行く月日川の水にもあらなくなることともいぬる年かな（貫之集 四九七）  
で、「月日」と「年」の双方を「流る」と言っていることからもうかがえよう。

〔157番の歌との対応関係について〕

双方共に、行き過ぎる月日を詠み込んでいる。157番の歌が算賀にも通ずる、明るくめでたい表現をしているのに対して、158番の方は、沈鬱なムードの歌、ということだろうか。であれば、やはり「昨日といひ…」の項であげた白居易の「浩歌行」の老いを嘆く趣旨を重ねて享受されていた、とも思われる。

【歌意】

昨日と言ひ、今日と言ひながら、日々を暮らしているうちに明日になる。（その「明日」という名を持つ）明日香川の流れが速いように、早く流れる月日であるよ。

159夏のはまだ宵ながら明ぬるを雲のいづこに月やどるらん

【校訂】なし

【他出文献】古今集 夏 一六六

【注】

〔夏の夜は〕

新撰和歌137番の歌にもあったように、夏の夜は、瞬間に明けてしまうものとして和歌に詠まれるが、そのような和歌を詠む際には、夏の夜の短さをどのように表現するかというところに興味の中心があったとおぼしい。今あげた新撰和歌の歌、

夏の夜はふすかとすればほととぎすなく一こゑにあくるしのめ

（新撰和歌 一三七）

の他に、

なつのよはあふなのみしてしてきたへのちりはらふまにとりぞなきぬる

（忠岑集 一九）

もその一例。後代にもこの趣向は楽しまれたようで、

夏の夜はあふ名のみして敷妙のちりはらふまにあけぞしにける

（後撰集 夏 一六九）

なつのよは浦島のこがはこなれやはかなくあけてくやしかるらん

という歌が見られる。

〔雲のいづこに月やどるらん〕

新撰和歌では、この歌が夏の末尾に位置する。そのことからして、「意味上からも、「夏歌」の終わりに近い配列からも、「月」は下弦の月と見られる。太陰暦では十五日(満月)、月は日没とともに東に出、日の出とともに西に没する。十五日以後が下弦の月で、月の出は次第に遅くなり、日の出の時はまだ中天にあつてやがて朝の陽光の中に姿を消してゆく。その情景を実写した。」(日本古典集成『古今和歌集』)という指摘が当たっているように。

【歌意】

夏の夜は、まだ宵(といった気分そのまま)明けてしまったが、雲のどちらに、(遅く出てきた)月は宿っているのだろうか。

160行としのおしくも有哉ます鏡みるかげさへにくれぬと思へば

【校訂】なし

【他出文献】古今集 冬 三四二

【注】

〔惜しくもあるかな〕

季節が過ぎ去ることを惜しむのに、「惜しくもあるかな」という表現を用いて、

三月ふたつあるとし

つねよりもどけかりつるはるなれどけふのくるはをしくもあるかな

(躬恒集 二七一)

春尽日おほせ事ありてつかまつる

こむとしのためにはいのる春なれどけふのくるはをしくもあるかな

(貫之集 六五)

のように、貫之と躬恒が競うようにして詠んでいたらしい。当該の歌もその一つ。

〔ます鏡見る影さへに暮れぬ〕

鏡に映る自分の姿を見て老いを感じるといふ歌が、

うばたまのわがくろかみやかはるらむ鏡の影にふれるしらゆき

(古今集 物名 四六〇)

鏡山いざ立ちよりて見てゆかむ年へぬる身はおいやしぬると（同 雑上 八九九）  
のように、古今集にしばしば見られる。当該の歌でも年が暮れる事と同時に、自らが年老  
いることを「暮れぬ」と言っているであろう。

〔159番の歌との対応関係について〕

159番の歌では「明く」ことが詠まれており、160番の歌の「暮る」と対義語をな  
す。また、「月」は「鏡」にたとえることもあり、ともに密接な関係を持つ語が詠まれた  
歌が対にされているのである。

【歌意】

行く年が惜しい事であるよ。鏡に見る私の姿までが暮れてしまおうと思うので。

### 新撰和歌集卷第三

賀 哀傷 二十首

161我君は千世にましませさざれ石の岩ほと成て苔のむすまで

【校訂】なし

【他出文献】古今集 賀 三四三

【注】

〔千代にましませ〕

「ましませ」は、通常和歌に用いない語のようである。日本古典文学大系『古代歌謡  
集』に収める伊勢神宮神事歌謡である「六月十五日興玉社御占神事歌」に、

あはりや 弓筈と申さぬ 朝座に 天つ神国つ神 降りましませ

あはりや 弓筈と申さぬ 朝座に 鳴る雷も 降りましませ（皇太神宮年中行事）

とあるだけが、管見に入る例である。

〔さざれ石〕

「さざれ石」も、同時代、そして以後も、当該の歌の影響下にあるものを除けば、例を  
見ない。万葉集には

信濃なる千曲の川の左射礼思も君し踏みてば玉とひろはむ

（万葉集 卷十四 三四〇〇）

佐射礼伊思に駒を馳させて心痛み我が思ふ妹が家のあたりかも（同 三五四二）

の二例が存する。古今集の時代には、古い言葉であった可能性もあるだろう。

〔岩ほとなりて〕

この表現のもととなったものとして、古今集の諸注が、『余材抄』の指摘する『西陽雜俎』の説話をあげるが、それを直接踏まえているかどうか断定はできない。しかし、何らかの典拠があつて用いられた表現であろうことは想像に難くない。

〔苔のむすまで〕

苔むした岩については、

奥山の岩に苔生しかしこ恐れど思ふ心をかにかもせむ (万葉集 卷七 一三三四)

と、畏敬の念を抱かせる存在として詠まれた例がある。これが初二句の「我が君」「ましませ」という重々しい言葉と相俟つて、一首全体を、重々しい、格調あるものに仕立てているかと思われる。

なお、万葉集に、

妹が名は千代に流れむ姫島の小松がうれに苔生すまでに (万葉集 卷二 二二八)

何時の間も神さびけるか香具山の梓杉が末に苔生すまでに (同 卷三 二五九)

我妹子に逢はず久しもうましもの阿部橋の苔生すまでに (同 卷十一 二七五〇)

神奈備の三諸の山に斎ふ杉思ひ過ぎめや苔生すまでに (同 卷十三 三二二八)

という例がある。当該の和歌の結句も、これらに由来する、古めかしい表現だったと思われる。

【歌意】

あなたさまは、千年の寿命をお保ちください。小石が大きな岩に育つて苔が生すまで。

162 なくなみだ雨とふらなんわたり川水まさりなばかへりくるがに

【校訂】底本三句「なみだわたり川」。新撰和歌諸本により傍記の方をとる。

【他出文献】古今集 哀傷 八二九

【注】

〔泣く涙〕

「泣く涙」という語は、当該の歌のように哀傷の歌にも用いられるが、

紅のふりいでつつなく涙にはたものみこそ色まさりけれ (古今集 恋二 五九八)

のように、恋の歌にも用いられるものである。

〔わたり川〕

「わたり川」については、「現世と冥界を隔てている三途の川のことと見るのが一般的

だが、それは結果であって、語の本意は「渡るべき河」の意である。」という『古今和歌集全評釈』（片桐洋一）の説明が妥当であると思われる。また、同書に「渡り川」について、

おもひいでのうきせはいつかわたりがはこころやすくはわたりはつべき

（忠岑集 八六）

又、大夫に

いにしへはおもひいでずやわたりがはわたるといふなはながれずや君

かへし

ながれてのなにもひとをばわたりがはあふせやあるとたのみけるかな

（朝忠集 六・七）

などをあげ、「男女が一線を越えるために渡るべき河の意と見るべきものばかりである」と指摘されていることも、この歌の表現を理解するために重要であると思われる。

〔161番の歌との対応関係について〕

161番の歌は、いかにも重々しい格調高い言葉と素材を用いて、長寿を予祝する歌に仕立てていた。それに対して、162番の歌は、恋の歌にもちいることの多い言葉を用いて、亡き人を悼む歌に仕立てている。こうした言葉遣いの妙を浮かび上がらせる対になっていると見ておきたい。

【歌意】

泣く涙よ。雨となって降って欲しい。あの人を渡っていく川の水が増えたなら（渡ることができなくて、この世に）帰ってくるように。

163わたつ海の浜の真砂をかぞへつゝ君がいのちのありかずにせん

【校訂】底本四句「君が 齢いのちの」。「君が齢」とする本は、新撰和歌の他本に見られないので底本の誤りと見、元禄版本・松平文庫本・内閣文庫本等のかたちに改める。なお、「君がちとせの」とする群書類従本・永青文庫本等は、古今集の本文に影響されたものであろう。

【他出文献】古今集 賀 三四四

【注】

〔浜の真砂を数へつゝ〕

「浜の真砂」は、



有そ海の浜のまさごとたのめしは忘るる事のかずにぞ有りける

(古今集 恋五 八二八)

きみが世は限もあらじながはまのまさごのかずはよみつくすとも

(同 神遊歌 一〇八五)

のように、膨大な数のたとえに用いられるものである。

〔君が命のありかずにせん〕

第四句は、古今集では「君がちとせ」とある。新撰和歌の本文は浜の真砂という膨大な数に見合う表現とするために一千年と限定する「ちとせ」を改めたものか。

【歌意】

大海原の浜の真砂を何度も数えて、(膨大なその数を) あなたの命の年数にしましょう。

164 ちのなみだおちてぞたぎつしら川は君が代までの名にこそありけれ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 哀傷 八三〇

【注】

〔血の涙〕

「血の涙」は、既に言われるように、漢語「血涙」を和語化したものであろう。ただ、通常、和歌では「紅」の涙という表現を用いるのであって、「血の涙」がこの歌以外に用いられた例はほとんどない。

〔名にこそありけれ〕

「く名にこそありけれ」は、

かへる山なにぞはありてあるかひはきてもとまらぬ名にこそありけれ

(古今集 離別 三八二)

かつこえてわかれもゆくかあふさかは人だのめなる名にこそありけれ

(同 離別 三九〇)

あきといへばよそにぞききしあだ人の我をふるせる名にこそ有りけれ

(同 恋五 八二四)

などのように、あるものの名称が、単なる名称ではなく、実質的な意味をもつものであったことに気づいたときの表現として、定型的なものであった。その表現を当該の歌でも用いたのであろう。

〔163番の歌との対応関係について〕

163番の歌には「わたつ海」が、164番の歌には「白川」と、水に関わる言葉が詠み込まれていることと、「君が命」と「君が代」という類似した言葉があることに着目して対にされているのだろう。

なお、次の165・166番の歌には、いずれも山が詠み込まれている。水に関わる言葉の次に意識的に配されたものではなからうか。

【歌意】

血の涙が落ちて滾る。（そのために川が赤く染まる）ああ、「白川」というのは、あなたの在世中の名であったのだ。

165しほの山さしでの磯にすむ千どり君か御代をば八千代とぞなく

【校訂】なし

【他出文献】古今集 賀 三四五

【注】

〔しほの山さしでの磯〕

「しほの山」は甲斐国の山とも言われるが、不詳。「さしでの磯」もわからない。

〔君が御代〕

「君が御代」という言葉続きは、和歌にあまり例のないものである。たとえば、勅撰集の場合、古今集では当該の歌のみ。後撰集には確認できない。拾遺集には三例見られるが、

仁和の御時大嘗会の歌

よみ人しらず

がまふののたまのを山にすむつるの千とせは君がみよのかずなり

（拾遺集 賀 二六五）

安和元年大嘗会風俗、ながらの山

大中臣能宣

さざなみのながらの山のながらへてたのしかるべき君がみよかな

（同 神楽歌 五九九）

天禄元年大嘗会風俗、千世能山

よしのぶ

ことしよりちとせの山はこゑたえず君がみよをぞいのるべらなる

（同 神楽歌 六〇九）

のように、みな、大嘗祭の折の和歌であることが気になる。むろん、

大後の宮の人人、子日しにのべにまかりたるに、大盤所よりとて、歌

よみてたまはせたりし

君がみよはるはるごとくのべにいではけふの小松にひきおとらめや

(能宣集 二八三)

よろづよをけふよとせとかぞふればのこりはるけきみがみよかな

(古今和歌六帖 二二六九「いはひ」)

のように、大嘗祭の和歌ではないものも存しないわけではないが、時代を下つても、

さざ浪のながらの山のながらへばひさしかるべき君が御代かな

(兼盛集 一〇八 大嘗祭歌)

冷泉院の御時、大嘗会の悠記の歌

ながらの山

きみがみよながらのやまのかひありとのどけきくものあるときぞみる

(能宣集 一四五)

あさ日のさと

てりのぼるあさひのさとをみわたせばつくべくもあらぬ君がみよかな(同 一五四)

のように、「君が御代」という言葉が大嘗祭の和歌に集中することに変わりはない。

〔八千代とぞ鳴く〕

「ちよ」にせよ「やちよ」にせよ、千鳥の鳴き声を詠み込んだ和歌も非常に例が少ない。

管見に入る限りでは、時代の下つた

かはあひのいはせにあそぶむら千鳥こゑこゑちよのきこゆなるかな

(大嘗会悠紀主基和歌 八〇〇)

いはるがはみぎはにあそぶむらちどりやちよてふなりきみがちよかも

(同 一〇二五)

程度である。これも大嘗祭の折の和歌である。このことと、「君が御代」の項で述べたこ

とと合わせて、当該の歌が大嘗祭で披露された風俗歌の類ではなかったかと推測される。

当該の歌の上の句には「しほの山さしでの磯」という、甲斐国かとも言われる地名が詠み

込まれる。悠紀主基和歌では、悠紀の国、主基の国それぞれの国内のめでたい地名が詠み

込まれるのが決まりであるから、当該の歌に都でもなく、有名な歌枕でもない地名が詠ま

れていることも、この推測を支持するのではないか。また、この歌が大嘗祭の歌、あるい

はそれに類する歌として認知されていたからこそ、この歌の表現をそのまま利用して、

「ちよ」「やちよ」と鳴く千鳥が大嘗祭の歌で描かれるようになったとも考えられないだ

ろうか。

【歌意】

しほの山のさしでの磯にすむ千鳥は、あなたの寿命のことを「八千年」と鳴いていますよ。

166 うつせみはからをみつゝもなぐさめつ深草の山けぶりだにたて

【校訂】なし

【他出文献】古今集 哀傷 八三一

【注】

〔うつせみは〕

当該の歌の「うつせみ」をどのように解釈するかについては、古今集諸注で、およそ「蟬」という方向で考えるものと、「現世」という方向で考えるものがある。古今集ころの「うつせみ」の用例の多くは、「蟬」という意味で用いられたものが多いことから、当該の歌の「うつせみ」もまずはそのように考えてみたいが、しかし、人の死を悼む歌において「蟬ならば抜け殻を見てでも心慰めた」ということが、どのような意味を持つのかわかりにくい。やはり、

うつせみのわびしきものはなつぐさのつゆにかかれるみにこそありけれ

（新撰万葉 六七）

のように、「はかない現世」という方向で考えるべきかと思われる。

〔からを見つつも〕

哀傷の歌で「から」といえば、

かけりてもなにをかたまのきても見むからはほのほとなりにしものを

（古今集 墨滅歌 一一〇二）

や、亡き桐壺更衣の葬送に際しての更衣の母の言葉

むなしき御骸を見る見る、なほおはするものと思ふが、いとかひなければ、灰になり

たまはむを見たてまつりて、今は亡き人と、ひたぶるに思ひなりなむ。

（源氏物語 桐壺）

のように、人の亡骸を意味する。

また「見つつも」は、おそらくは当該の歌を踏まえたものであろうが、

ものへいく人に

ある程はうきをみつつもなぐさめつかけはなれなばいかにしのばん

や、亡き紫上の手紙を見て涙ぐむ源氏の歌、

いとどかきくらし、それとも見分かれぬまで降りおつる御涙の、水茎に流れ添ふを、人もあまり心弱しと、見みたてまつるべきが、かたはらいたう、はしたなければ、押しやりて、

死出の山越えにし人をしたふとて跡を見つつもなほまどふかな(源氏物語 幻)の例を参考にすれば、何度も繰り返し見るにもかかわらずそれでも、という程の意味であると考えられよう。

「なぐさめつ」

当該の歌と同様、上の句の末に「なぐさめつ」を置いた和歌がいくつか見出せる。

近くあれば名のみも聞きて慰めつ今夜ゆ恋のいや増さりなむ

(万葉集 卷十二 三三三五)

おもひつつひるはかくてもなぐさめつよるぞわびしきひとりぬるみは

(新撰万葉 二〇一)

うらみてもしほのひるまになぐさめつ袂に波のよるいかにせん(深養父集 二九) これらを見ると、いずれも上の句で言われているのは、「なかなか心穏やかになれない状況の中で、ここまではどうかこうにか心を静めてきた。」ということである。

これらと同様に考えて、当該の歌の上の句の意を、「はかない現世では亡骸を何度も繰り返し見てもそれでも、どうかここまでは心を静めてきた。」と見ておきたい。

〔深草の山煙だに立て〕

哀傷の歌において「煙」といえば、

故女四のみこのちのわざせむとて、ぼだいのずずをなん右大臣も

とめ侍るとききて、このずずをおくるとてくはへ侍りける 真延法師

思いでの煙やまさんなき人のほとけになれるこのみみば君

(後撰集 雑三 一一二二六)

だいしらず

よみ人しらず

とりべ山たににけぶりのもえたたばはかなく見えし我としらなん

(拾遺集 哀傷 一三二四)

などのように、火葬の煙を意味し、亡き人を思い出すがとして用いられる。なお、当該の歌の結句の「立て」は自動詞「立つ」の命令形。「深草の山に煙だけでも立っておく

れ」の意味。

〔165番の歌との対応関係について〕

165番の歌の「しほの山・千鳥」と166番の歌の「深草の山・うつせみ」という言葉の対応が目につく。また、165番の歌で「千鳥」「八千代」という千音の繰り返しがあるのだが、166番の歌でも「みつ、つもなぐさめつ」とツ音が繰り返されている。この点も意識されているのではいか。

【歌意】

はかない現世では亡骸を何度も繰り返し見ても、それでもどうにかここまでは心を静めてきた。しかし、もうこれ以上心静めることは無理である。どうか、深草の山に（せめてあの人を思うよすがとして）煙だけでも立っておくれ。

167 亀の尾の山の岩ねをとめて落る瀧の白玉世世の数かも

【校訂】底本結句「千代の数かも」。新撰和歌諸本で「千代」と「世世」が混在するが、本稿の原則に従って、古今集とは異なる方の本文をとる。

【他出文献】古今集 賀 三五〇

【注】

〔亀の尾の山の岩ねをとめて落つる〕

古今集では、詞書に基づいて「亀の尾の山」は大井川の河岸にある小倉山の尾根かと言われるが、詞書を有しない新撰和歌では、どの山と特定する必要はないと思われる。ただ、長寿の象徴である「亀」という、めでたい名を持つ山であることだけを読み取ればよいだろう。

また「岩ね」も、どっしりとした岩のことを意味し、

天暦のみかど四十になりおはしましける時、山しなでらに金泥寿命経

四十巻をかき供養したてまつりて、御巻数つるにくはせてすはまにた

てたりけり、そのすはまのしき物にあまたのうたあしでにかける中に

かねもり

山しなの山のいはねに松をうゑるときはかきはにいのりつるかな

（拾遺集 賀 二七三）

のように、賀の歌にふさわしい素材である。

「とめて落つる」は古今集諸注のいうように、岩を伝って水が落ちる様を、「求めて」

という意味の「とむ」という動詞を用いて表しているものと思われる。

〔滝の白玉〕

「滝の白玉」は、

ぬのびきのたきにてよめる

在原行平朝臣

こきちらす滝の白玉ひろひおきて世のうき時の涙にぞかる（古今集 雑上 九二二）

布引の滝の本にて人人あつまりて歌よみける時によめる

なりひらの朝臣

ぬきみだる人こそあるらし白玉のまなくもちるか袖のせばきに（同 雑上 九二三）

人の家にまかりたりけるに、やり水にたきとおもしろかりければ、

かへりてつかはしける

たきつせに誰白玉をみだりけんひろふとせしに袖はひちにき

（後撰集 雑三 一二三五）

など、激しい水の流れに水滴が散らばる様子を喩えたものである。なお、当該の歌のように、水滴の数の多さに着目した例として見いだせるのは、

いかにしてかずをしらましおちたぎつ滝のみをよりぬくる白玉（貫之集 三三）

の貫之の作程度である。やや珍しい表現と言うべきか。

〔世世の数かも〕

「世世」は

白河のしらずともいはじそきよみ流れて世世にすまむと思へば

（古今集 恋三 六六六）

ふるうたたてまつりし時の目録のそのながうた つらゆき

ちはやぶる 神のみよより くれ竹の 世世にもたえず…

（古今集 雑体 一〇〇二）

などのように、何年もの長い年月を意味する。当該の歌では、水滴の多さが、寿命を保つ年の数を象徴している、というのである。なお、当該の歌と同じ歌である古今集350番の結句は「千代の数かも」。新撰和歌の本文は、次の168番の歌の「空蟬の世」と対にするために改変されたものである可能性がある。ただし、次の例が気になるところである。

村上の御時、れいももじのおほせごとありて、きよたきといふもじ

ありやといふこと、いれさせたまふ

よよをへておちくるたきのしらいとにぬけるたまとはあはやみるらん

この中務の歌は、当該の歌を踏まえて詠んだものかと思われるが、そうであるならば、中務が見ていた歌の本文は「世世の数かも」であったものと想像される。ならば、もと「世世の数かも」とあつた紀惟岳の作を、古今集が撰集の際に改変して収めた可能性もある。

【歌意】

長寿を保つ亀という名を持つ亀の尾の山の、いつまでも揺るぎなくどっしりとした岩をつたって落ちてくる早瀬の水しぶきの無数の白玉は、これから先、あなたが齢を保たれる歳の数なのですね。

168 ねてもみゆねでもみえけり大方は空蟬の世ぞ夢にはありける

【校訂】底本三句「みてけり」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】古今集 哀傷 八三三

【注】

〔見えけり〕

「見えけり」という言葉は、ある対象が「見えた」という事に対して心動かされたことを表現するのだろうが、古典和歌では、案外用例が少ない。万葉集には三例見えるが、

朝柏潤八川辺の篠の目の偲ひて寝れば夢に見えけり (万葉集 卷十一 二七五四)

あらたまの年月かねてぬばたまの夢に見えけり君が姿は (同 卷十二 二九五六)

あしひきの山きへなりて遠けども心しゆけば夢に見えけり (同 卷十七 三九八一)

のように、そのいずれもが恋しい人の姿について「夢に見えけり」と言っていることは、示唆的である。つまり、会いたくても会えぬ、恋しい人のような、切望しながらどうしても見ることでできないものが、夢で見えた、というほどの驚きがなくては、「見えけり」という表現に釣り合わないであろうか。そうであれば、当該の歌で「寝でも見えけり」というものは亡き人の姿であると思われるが、寝てもいないのにその人の姿が見えたことよ、という驚きを表す表現として「見えけり」が用いられているといつてよからう。

〔大方は〕

「大方は」は、「通常は」「総じて」の意。

人やりの道ならなくにおほかたはいきうしといひていざ帰りなむ

(古今集 離別 三八八)

おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの



などと同じ。

〔空蟬の世ぞ夢にはありける〕

現世が夢にすぎない、という考えは、古今集諸注のいくつかが指摘するように、仏教的な思想に基づくものであろう。そうした考えは、しかし、日常実感することはない。ところがある日、亡き人の姿が、眠っていないのにもかかわらず、夢幻のように見えたのである。そのとき「現世は夢に過ぎない」ということが実感された。そうした感動・悲しみの大きさを「にぞありける」は表しているのだろう。

〔167番の歌との対応関係について〕

対にされた二首に共通して「世」という言葉が用いられている。

【歌意】

寝ても亡くなったあの人が夢に見える。なんと、寝なくてもあの人の幻が見えた。ああ、そうか。そもそも総じて空蟬のはかない世の中というものは、仏に教えられるとおり、夢なのであったなあ。

169 いにしへにありきあらずはしらねども千とせのためし君にはじめむ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 賀 三五三

【注】

〔いにしへにありきあらずは知らねども〕

「ありき」も「あらず」も終止形であることを重視すれば、この句の意味は「(千歳の例が)はるか昔にあった。ない。ということとは知らないけれど」となる。「いにしへ」は通説の通り「自分では確かめることのできない過去」(『古典基礎語辞典』)。一首は、現実にはありえない「千年のためし」として、「君」の将来を予祝するものであるうから、上の句「神代のような昔に、千年の寿命を保った人がいた。とか、いや居なかった。ということは知らない、わからないけれども」というほどの意味になろうかと思う。

〔ちとせのためし〕

「千歳のためし」という言葉は、同時代になかなか例を見出せないが、貫之の延長五年の作に、

ねがふ事心にあれば植ゑてみる松を千とせのためしとぞみる (貫之集 七〇九)

がある。松であれば、いずれも千年の齢を保ちそうなるものであるが、「願うこと」が心にある状態で植えた松でなければ、「千歳のためし」とはならないことが、この歌からうかがえる。ならば、「千歳のためし」は単なる「千年の寿命を保つ例」ではなく、「模範」「お手本」というような、重たい意味がこめられた表現ということになるだろうか。

【歌意】

神代のような昔に、千年の寿命を保った人がいた。とか、いや居なかった。ということはわからないけれども、千年の寿命を保つ模範的なお手本は、あなたから始まることでしよう。

170 あすしらぬ我身なれどもくれぬまのけふは人こそ恋しかりけれ

【校訂】底本二句および結句は「我身と思へど」「悲しかりけれ」。新撰和歌諸本で「我が身と思へど」と「我が身なれども」、「悲しかりけれ」と「恋しかりけれ」が混在するが、本稿の原則に従って、古今集とは異なる方の本文をとる。

【他出文献】古今集 哀 八三八

【注】

〔古今集歌との歌句の相違について〕

当該の歌は、古今集では、

きのともりが身まかりにける時よめる 　つらゆき

あすしらぬわが身とおもへどくれぬまのけふは人こそかなしかりけれ

（古今集 哀 八三八）

という本文であり、二句と結句が新撰和歌とは異なる。古今集の歌の結句の「悲し」は、

源のさねがつくしへゆあみむとてまかりけるに、山ざきにてわかれを

しみける所にてよめる 　しろめ

いのちだに心にかなふ物ならばなにか別のかなしからまし（古今集 離別 三八七）

あふからもものはなほこそかなしけれわかれむ事をかねて思へば

（同 物名 四二九）

蟬のこゑきけばかなしな夏衣うすくや人のならむと思へば （同 恋四 七一五）

からわかるように、人と別れるときに「何の有効な働きかけもしえないときの無力の自覚に発する感情」（『古典基礎語辞典』）と考えられる。一方、新撰和歌の歌の結句の「恋し」は、思う人と身近に居たいと希い、今一緒に居られないことを辛く感じる気持ちであ

る。

古今集の歌では、いとこであり、共に古今集を編纂した友でもある人が亡くなった、まさにその時の歌として、無力感を表現しているものであろう。それに対して、詞書を有しない新撰和歌では、亡くなった人のことを恋しく思う一般的な歌として通用するよう、言葉を変えたかと思われる。なお、貫之集には、

きのともりのりうせたる時によめる

あすしらぬ命なれども暮れぬまのけふは人こそ哀なりけれ (貫之集 七六八)

とあり、貫之がこの歌をことあるごとに思い起こし、手を入れて、友則を失った悲しみをあれこれとかみしめていたことを想像させる。

〔169番の歌との対応関係について〕

169番の歌の「しらねども」、170番の歌の「知らぬ(我が身)なれども」という類似する言葉を用いていることで対にされたものか。

【歌意】

(無常の世では)何時死ぬかもわからない我が身なのだけでも、暮れない間の今日は、亡き人に会いたくてたまらない。

171ふして思ひおきてかぞふる万代を神ぞしるらむ我君の為

【校訂】なし

【他出文献】古今集 賀 三五四

【注】

〔よろづ世を神ぞ知るらん〕

この部分については、神が何を知なのか、という点で解釈の可能性がいくつかあるようだが、同時代の類例を見ると、

かすがのにわかなつみつつよろづ世をいはふ心は神ぞしるらむ

(古今集 賀 三五七)

うちむれて心ざしつち行く道のおもふおもひを神やしるらん (貫之集 三二八)

いがきにもいたらぬとりのいなり山こゆる思ひは神ぞしるらむ (同 三九八)

うちむれてこえ行く人のおもひをば神にしまさば知りもしぬらん (同 三九九)

百とせのうづきをいのる心をばかみながらみなしりませるらん (同 五三七)

もみぢばも花をもをれる心をばたむけの山の神ぞしるらん (同 七三二)

そめたちていのれるぬさのおもひをばたむけのみちの神やしるらむ（同 七五二）と、何かをする人の「心」や「思ひ」を、神が理解する、というものばかりである。当該の歌も、よろづ世のことを伏しては思い、起きては数える私の思いを、神はご存じだろう、という意味で理解できる。実は、今あげたように、同時代の用例といっても、ほとんどが貫之の作であり、他の人の歌にはほとんど例を見つけることができない。であれば、少なくとも新撰和歌の歌として当該の歌を理解する場合、このように取って良いと思われる。

また、「神ぞ知るらん」と、「神」のことをとりたてて強調していることについては、右にあげた貫之集七三二番の「もみちばも」歌が参考になる。この貫之集の歌は、「あひ知りたる人のものへ行くにぬさやあるとて」という詞書を有する。この詞書に従えば、一首は、幣の代わりに紅葉も花も、とにかく折り取った心を、たむけの神だけはわかってくれるだろうという意味にとれよう。なお、「ぬさやある」は、貫之集陽明文庫本等が伝える本文。この形では文意が通じにくいとして、貫之集西本願寺本の「ぬさやる」に改める説（日本古典集成『土佐日記・貫之集』）もある。この場合は、幣に添えて紅葉も花までも折る心、ということになる。いずれにしても、神への供え物として、通常ではないものを供える意図を、他ならぬ、旅人の安全を守るたむけの神はわかってくれるだろう、という気持ちを「ぞ」が担っていると考えられる。当該の歌でも、私が日常起き伏しに「我が君」の「よろづよ」を思い、数えていることは誰も知らない。しかし、神だけはご存じだろう、という意味に取ることができる。

〔我が君のため〕

古今集の諸注でも解釈が揺れているところである。いずれと見極めがたいが、「わが君のためなることを、神ぞしるらむ」と補い、倒置して解釈すべきであろう」（松田武夫『新釈古今和歌集』）等の説がさしあたり穏当かと思われる。

〔伏して思ひ起きてかぞふるく我が君のため〕

この歌の表現に関しては、「この歌が、具象性を帯びて感じ取られるのは、「伏して思ひ起きてかぞふる」という常套句の持つ日常性である。余材が、伊勢物語の地の文に用例を求めているように、これは歌語というよりは、むしろ、日常、口をついて出る、極く経験的な修辞である」（松田武夫『新釈古今和歌集』）という指摘がある。また、結句の「我が君のため」も、この歌をひいたもの以外には、平安和歌に、ほぼ見出しがたいものである。

この歌だけでなく、新撰和歌の賀の歌には、同様に、あまり歌語としての実績のない表

現を用いたものが目立つ。賀の歌の性格、あるいは古今集時代までの賀の歌の表現の蓄積ということを考える上で興味深いところである。

〔古今集との歌句の相違について〕

第三句「よろづよを」が、古今集では「よろづよは」とある。「よろづよは」と、主題を提示する形であれば、一首の文意は上の句で一旦とどめられ、さて、そのことについては、他ならぬ神がご存じだ、と打ち明ける趣である。それに対して、「よろづよを」であれば、上の句と下の句の間に切れ目は生じず、文意はなだらかに続いていく。

さて、古今集の歌は「もとやすのみこの七十の賀のうしろの屏風によみてかきける」という詞書で示された状況の下に詠まれたものであった。どのような絵柄であったのかはわからないが、画中の人物の心情の吐露という体で詠まれた古今集の歌を、新撰和歌では詞書を削除するのとあわせて、ニュートラルな表現に改めたものと見たい。

【歌意】

よろづよのことを床に伏しては思い、起きては数える私の気持ちを他ならぬ神はご存じであろう。我が君のためだと。

172 花よりも人こそあだになりにつれいづれを先にこひんとかみし

【校訂】なし

【他出文献】古今集 哀傷 八五〇

【注】

〔花よりも人こそあだになりにつれ〕

花が、一般的に「あだ」に散るものとされることは、

さく花は千くさながらにあだなれどたれかははるをうらみはてたる

（古今集 春下 一〇一）

我はけさうひにぞ見つる花の色をあだなる物といふべかりけり（同 物名 四三六）

などから見て取れる。また、人が「あだ」になるということは、

身まかりなむとてよめる 藤原これもと

つゆをなどあだなる物と思ひけむわが身も草におかぬばかりを

（古今集 哀傷 八六〇）

のように、亡くなってしまふことの表現として、類例がある。

〔恋ひんとか見し〕

結句の「〜とか見し」については、

うゑし時花まちどほにありしきくうつろふ秋にあはむとや見し

(古今集 秋下 二七一)

ふん月の七日に、ゆふがたまでこむといひて侍りけるに、あめふり侍

りければまでこで

源中正

雨ふりて水まさりけり天河こよひはよそにこひむとやみし(後撰集 秋上 二二七)

など、類似の表現を見出すことができ、当時、和歌の定型の表現であったかと思われる。ただし、右に示したように、それらには「とや見し」とあり、当該の歌の「か」とは異なる。「や」と「か」の違いについては、「やはカのように、上にある事態や物事が自分の胸の中でまったくわからないという疑問の意を示しては居ない。上の事柄をすでに確定的なもの、確信あることとして扱い、それを相手につきつけて問いただすという、いわば質問の意を示している。」(『古典基礎語辞典』「や」の項)という説明が要を得ていると思われるが、当該の歌の場合、花と人とどちらを先に恋しく思うようになる、すなわち失ってしまふかなんて、思いもしなかった、という困惑を表すために、「とや見し」ではなく「とか見し」としたものと考えられよう。

〔171番の歌との対応関係について〕

172番の歌を、「どちらを先に恋しく思うだろうなんて思いもしなかった」のに「花よりも人の方が先にむなしくなってしまう」という倒置と見られるならば、その点で171番の歌と同じ表現法を使っていると言える。

【歌意】

あだに散りゆきやすい花よりも人の方があだにむなしくなってしまったよ。どちらを先に失って、恋しく思うだろうなんていったいぜんたい思ったことか。いや思いもしなかった。

173 わすれがたきよはひをのぶときくの花けさこそ露のおきて折つれ

【校訂】なし

【他出文献】不明

【注】

〔わすれがたきよはひを延ぶと〕

初、二句を「忘れがたい年齢をのばす」と訳したところで、これだけでは何を言いたいか解せない。第三句に「と聞く」とあることから、これは何らかの典拠に基づいた表

現であると考えるのが自然であろう。

露ながらをりてかざさむきくの花おいせぬ秋のひさしかるべく

(古今集 秋下 二七〇)

秋ごとに露はおけども菊の花人のよはひは暮れずぞ有りける (貫之集 一三五)

など、菊の上に置いた露が寿命を延ばす、ということに関しては、漢籍に様々な出典がある(小島憲之『上代日本文学と中国文学』など)が、そうしたもののうちの一つに、この歌の元となる説話があったのではないか。

〔菊の花今朝こそ露のおきて折つれ〕

「今朝こそ」と「今朝」を取り立てていることに留意するならば、これまでは由来を知らないでみすみす見逃してきた菊の花の上の露を、「忘れがたきよはひを延ぶ」と聞いた、その今朝こそは、早起きして折り取ったのだ、と理解して、一応の合点が行く。

なお、「きく」は「菊」と「聞く」の、「おきて」は「起きて」と「置きて」の掛詞である。

#### 【歌意】

「忘れがたい年齢を延ばす」と話に聞く菊の花であるから、今朝こそは花の上に露が置いているのを、早起きして折り取った事よ。

174 なき人の宿にかよはゞ時鳥かけてねにのみ鳴とつげなん

【校訂】なし

【他出文献】古今集 哀傷 八五五

【注】

〔なき人の宿〕

この句の解釈については、現行の古今集諸注には、亡き人のかつて住んでいた家、とするものと、亡き人がいるあの世、とするものがある。後者は、金子元臣『古今和歌集評釈』が紹介する十王経の記事に依って、ほととぎすがあの世とこの世を往還する鳥である、という考え方があった、というみちすじを考える。ただ、この説を採る場合、あの世のことを「宿」と言えるのかどうかの問題となる。一方、前者の場合、亡き人が住んでいた家に向けて私の気持ちを告げることにはどんな意味があるのかが不審である。このように、どちらの説にも難がある。

稿者としては、頭註に定家が付した密勘の「無人の宿とは、我身はあたれど、うせにし

人の後家なれば、なき人のやどにかよひありかば、といひて、しでの山鳥なれば彼山にゆきて、ねにのみなくとつげよとよみたるとならひて侍なり」という説。すなわち、ほととぎすは亡き人が住んでいた家とあの世とを往還するものとして詠まれているという説を見直してはどうかと思う。この説は、『余材抄』が「すこしむつかしくや」と難じたものであるが、現行の両説では免れ得ない問題を抱えない点で、やはり優れた見解だと考える。つまり、歌主は今、亡き人のかつての宿に来て、悲しみに暮れている。そこへ飛来してきたほととぎすに対して、おまえがもしもこの宿と、今あの人が居るあの世とを行き来するのであれば、告げておくれ…。と歌っている。そのように一首を理解すれば、あまり「むつかしく」はないと思われる。

なお、

小一条の太政大臣なくなり侍りて後、桜の花おもしろきもてあそび侍る日、かへる雁といふ事を

帰る雁きみもしあはばふるさとに桜をしむと鳴きてつげなん (元輔集 一〇五)

は、当該の歌を踏まえた作と思われるが、ここでは、雁があのだの世とこの世とを往還する鳥として描かれている。この例は、当該の歌が、ほととぎすがあの世に通うと歌ったものとして受け取られていたことを示唆するだろう。

「かけてねにのみ鳴く」

この句は、ほととぎすが鳴くことに掛けて、私がひたすら声を上げて泣く、という事を言っている。

〔173番の歌との対応関係について〕

両歌とも、中国に由来するらしい、ある故事に基づいたものであったらしい。そこに注目して対にされたのであろう。

【歌意】

あの世から、この亡き人の住んでいた宿に通っているのならば、ほととぎすよ。おまえが鳴くように、わたしもあの人のことを思って声を上げて泣いてばかりいると告げて欲しい。

175 春日野に若菜つみつゝ万代を祝ふ心を神ぞしるらむ

【校訂】底本四句「祝ふ心は」。新撰和歌諸本で「心は」と「心を」が混在するが、本稿の原則に従って、古今集とは異なる方の本文をとる。

【他出文献】古今集 賀 三五七



【注】

〔春日野に若菜つみつ〕

古今集ではこの歌に「内侍のかみの右大将ふちはらの朝臣の四十賀しける時に、四季のゑかけけるうしろの屏風にかきたりけるうた」という詞書が付され、藤原定国の四十賀に際して彼の長寿を予祝するための屏風の詠であり、若菜を摘む画中の人物を見て歌われたものであることがわかる。一方、詞書を持たない新撰和歌の歌としては、実際に春日野に出て若菜を摘んでいる人物の詠ということになるだろう。

〔祝ふ心を神ぞ知るらん〕

古今集歌では、この歌の四句は「祝ふ心は」とある。これを新撰和歌に収める際に「祝ふ心」と改めたものである。右に述べたように、古今集の場合、画中の人物を見て詠んだものであるから、「春日野で若菜を摘んでいるこの人たちの心は神が知っているだろう」という、第三者からの言葉であることをこの「祝ふ心は」は示している。それに対して、新撰和歌では自ら若菜摘みをしている人物の詠であるから「若菜を摘んでいる私の心を神は知っているだろう」と一人称的な視点にふさわしい表現にしたのである。

【歌意】

春日野で若菜を摘み摘みして、君の万代に続く長寿を祝う私の心を、他ならぬ神はご存じであるだろう。

176 数くゝに我をわすれぬ物ならば山の霞をあはれとはみよ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 哀傷 八五七

【注】

〔山の霞を〕

既に指摘されるように、山の霞を見て亡き人のことを偲ぶ、という先例は、早く家持の亡妻挽歌、

佐保山にたなびく霞見るとに妹を思ひ出で泣かぬ日はなし

(万葉集 卷三 四七三)

に見える。さて、現行の万葉集の注釈書では、この歌の霞は、火葬の煙を想起したものであろうと説かれる。なかなかそのことを証する材料は少ないのであるが、

あはれなり我が身のはてやあさみどりつひには野辺の霞とおもへば

の、「野辺の霞」は、「我が身の果て」という言葉から、死後に火葬に付される時の煙をイメージしていることがわかる。また、次の歌、

はかなくて雲と成りぬる物ならばかすまん空をあはれとはみよ (小町集 九一)

は、当該の歌の影響下に作られた歌が小町の作に擬せられた可能性もあるが、人の死後、雲や霞となる、という表現が、成り立ち得たことを示している。

「あはれとは見よ」

「〜とは見よ」という表現は、「本来の気持ちではなかるうが、せめてこのように見て欲しい」という、控えめな要求を表すのに用いられるようである。同時代の例を見出しがたいのであるが、たとえば、

公実卿かくれ侍りてのちかのいへにまかりけるに、むめのはなさかり

にさけるを見て枝にむすびはべりける 藤原基俊

むかし見しあるじがほにてむめがえのはなだにわれにものがたりせよ

返し

中納言実行

ねにかへるはなのすがたの恋しくはただこのもとかたみとは見よ

(金葉集 一度本 雑下 六〇四・六〇五)

は、亡き人を偲ぶよすがが梅の花でしかない、ということ踏まえて、その梅の木の下、すなわち亡き人の息子である私だけでも形見として見てください、ということをおっしゃるのであるうし、また、

花のさかりに法成寺にまゐりて、金堂のまへの花のちりけるをみてよ

める

皇太后宮大夫俊成

ふりにけりむかしをしらばさくら花ちりのすゑをもあはれとはみよ

(千載集 雑中 一〇七一)

は、昔の先祖の栄華を知っているのであれば、すっかり落ちぶれた末裔である自分のことも、少しは「あはれ」かわいそうだ、と見てほしい、と解せる。

これらを参考にすれば、当該の歌でも、私のことを忘れないでいてくださるなら、せめて山の霞なりと「あはれ」とみてほしい、というふう解釈できる。辞世の言葉である。

「175番の歌との対応関係について」

175番の歌は春日の「野」を舞台とし、176番の歌は「山」の霞がイメージされる。

この「野」と「山」の対応、という程度でこの二首は対にされたか。

【歌意】

さまざまに私のことを忘れないでいてくれるのなら、せめて山の霞なりと、かわいそうだと  
思っていて見て欲しい。

177 君が為思ふ心の色にいでゝ松のみどりを折てける哉

【校訂】なし

【他出文献】不明

【注】

〔色に出でて〕

「色に出でて」は、隠していた内面が表面に出してしまうことを意味する。

人しれずおもへばくるし紅のすゑつむ花のいろにいでなむ（古今集 恋一 四九六）  
わがこひをしのびかねてはあしひきの山橘の色にいでぬべし（同 恋三 六六八）  
のように、通常は表面にでないように堪えていたものが、とうとう出てしまった、もしくは  
は出してしまふ、という文脈で用いられる。

〔松の緑〕

「松の緑」が、松のみずみずしい緑色の若々しい枝の意であることは、11番の歌の注  
で述べたとおり。この歌の場合、動詞「折る」の目的語であることから、いつそうそれが  
明確である。

〔折りてけるかな〕

「くてけるかな」は、いつのまにかそうなっていた、我知らずそうしていた、という事  
態に気づいた驚きを表す。

まつ人もこぬものゆゑにうぐひすのなきつる花ををりてけるかな

（古今集 春下 一〇〇）

は、待ち人がやってこない苛立ちのために、我知らず、花を折ってしまったことをいうの  
だろうし、

白雲のかかるそら事する人を山のふもとによせてけるかな

（拾遺集 雑恋 一一一八）

も、嘘をつく人にいつのまにか恋心をよせるようになってしまったことを、我ながら驚い  
ているのである。

当該の歌では、「君がため」と思う心があふれ出てしまったために、思わず知らず松の

枝を折り取ってしまった驚きを表している。

なお、松の枝を折ることは、

なみたてる松の緑の枝わかずをりつつちよを誰とかは見む（後撰集 賀 一三八四）  
のように、長寿を祈ったことである。

【歌意】

あなたのためと、胸中密かに思う心が、色のにじみ出すように表面に現れて、そのため、われしらず、美しい色をした、みずみずしい緑の松の枝を折り、あなたの長寿を祈ったことですよ。

178 露をなどはかなき物と思ひけん我身もくさにおかぬ斗そ

【校訂】底本三句「思ふらん」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】古今集 哀傷 八六〇

【注】

〔露をなどはかなき物と思ひけん〕

この歌の上の句は、「どうして露のことをはかない物だと思ったのだろうか」と、かつての自分の思いを後悔するものである。いったい、露のことをはかないと思えるのは、自分にはかなくない、という無意識の思い込みがあるからである。その無意識、あるいは思い込みをしていた自分の浅はかさを、ここでは後悔しているのである。

なお、第二句、古今集では、「あだなる物と」とある。「あだ」という言葉には、「今の世中いろにつき人の心花になりけるより、あだなるうた、はかなきことのみいでくれば…」（古今仮名序）のように、不実な・浮薄な、という意味があり、この時代の和歌でも、

さくらの花のさかりに、ひさしくとはざりける人のきたりける時によ

みける

よみ人しらず

あだなりとなにこそたてれ桜花年にまれなる人もまちけり（古今集 春上 六二）

をみなへしおほかるのべにやどりせばあやなくあだの名をやたちなむ

（同 秋上 二二九）

など、不実・浮薄、という意味を最大限に活かしたものが見られる。

古今集860番の歌の場合、一首全体の趣旨からすれば、第二句の「あだなり」は、露が短時間で消えてしまうことを表現する言葉である。ただ、「あだなり」という言葉が有

する、不実・浮薄という意味を、どうしても読み取ろうとしてしまうことになる。それでは、辞世の歌として、おもしろみがある一方で、いささか軽い印象を与えるのではなからうか。新撰和歌は、それを「はかなし」という言葉に代えることで、シンプルな表現にしたのではなからうか。

〔177番の歌との対応関係について〕

177番の歌の「松」と178番の歌の「草」という素材に着目した対か。「思ふ」という語が双方に見られることも意識されていたかも知れない。

【歌意】

露をどうしてはかないものと思ったのだろうか。我が身も草の上に置かないだけで、はかないことは露と変わらないのに。

179 見えわたる浜の真砂やあしたづの千とせをのぶる数となるらん

【校訂】なし

【他出文献】古今和歌六帖 二二七一・新続後撰集 賀 一三五〇

【注】

〔見え渡る〕

「見え渡る」は、端から端まで途切れることなく見通すこと。

君まさで煙たえにししほがまの浦さびしくも見え渡るかな（古今集 哀傷 八五二）  
などに例がある。

〔浜の真砂〕

「浜の真砂」は、浜に堆積した美しい砂。163番の歌の注に記したように、その数が膨大なことをもって、数限りないことを表現するのに用いる。当該の歌では、目の届く範囲の浜辺すべての真砂の数が、あなたの寿命の数となるでしょう、と言祝ぐのに用いている。

〔あしたづの千とせをのぶる〕

「あしたづ」が千年の寿命を言祝ぐときに持ち出されるものであることは、あらはなるかたにしもすむあしたづは千よみむことの心なるべし（伊勢集 八四）  
松がえにふりしく雪を蘆たづのちよのゆかりにふるかとぞみる（貫之集 二七八）  
などのとおり。

【歌意】

見晴るかす限りの浜にある真砂の数が、鶴のように千年まで齢が延びる、あなたの寿命の数になることでしょう。

180さきだゝぬくゐの八千たびかなしきはながるゝ水のかへりこぬ也

【校訂】なし

【他出文献】古今集 哀傷 八三七

【注】

〔一首の趣旨に関して〕

当該の歌は、古今集では「藤原忠房がむかしあひしりて侍りける人の身まかりにける時に、とぶらひにつかはすとてよめる」という詞書を持ち、忠房と亡くなった人、作者の閑院との人物関係にかかわって、解釈にも諸説がある。しかし、詞書を持たない新撰和歌の歌として見る場合は、その配列だけを読解の手がかりとすることになる。

さて、新撰和歌の哀傷の歌は、162番から180番までであるが、そのうち、174番以前の歌は、他人の死を悼むものであった。その次に、

数かずにて我をわすれぬ物ならば山の霞をあはれとはみよ

（新撰和歌 一七六）

露をなとはかなき物と思ひけん我身もくさにおかぬ斗そ

（同 一七八）

と辞世の歌が並べられる。そして、それに次ぐ、哀傷の歌の最後が当該の歌である。ここでもた再び他人の死を悲しむ歌に戻るのとは不自然であろうから、当該の歌も辞世の歌と見たのでよいだろう。なお、古今集哀傷部の配列を見ると、巻頭から他人の死を悼む歌が続き、最後の五首が辞世の歌である。新撰和歌での哀傷の歌の配列も、この古今集に倣っていると見られる。

〔先立たぬ〕

古今集歌の場合、この句は「後悔先に立たず」の意だとする説と、亡き人より先に死ぬ、という意だとする説とが対立する。ただ、新撰和歌の場合には、これが辞世の歌と思われるので、後者の説は成り立たない。

〔かなしきは〕

第三句目に「かなしきは」という語を置き、上の句で、どうしたことか、ある物が悲しい、と説き、下の句で悲しい理由を述べる形式の和歌は、

わびはつる時さへ物の悲しきはいづこをしのぶ涙なるらむ（古今集 恋五 八一三）

大納言国経朝臣の家に侍りける女に、平定文いとしのびてかたらひ侍

りて、ゆくすゑまでちぎり侍りけるころ、この女にはかに贈太政大臣  
にむかへられてわたり侍りにければ、ふみだにもかよはすかたなくな  
りにければ、かの女の子のいつつばかりなるが、本院のにしのたいに  
あそびありきけるをよびよせて、ははに見せたてまつれとてかひなに  
かきつけ侍りける  
平定文

昔せしわがかね事の悲しきは如何ちぎりしなごりなるらん（後撰集 恋三 七一〇）  
出羽よりのぼりけるに、これかれむまのはなむけしけるに、かはらけ  
とりて  
源のわたる

ゆくさきをしらぬ涙の悲しきはただめのまへにおつるなりけり

（後撰集 羈旅 一三三三）

はやうなくなりける人ともろともにせうえうせしところをひさしく  
なりてみて

うたたねのうつつにもものかなしきは昔のかべをみればなりけり（兼輔集 六一）

けさの床の露おきながらかなしきはあかぬ夢路をこゆるなりけり（貫之集 六七二）  
などのように、多数見られる。当該の歌も、したがって、先立たない後悔が、なぜか八千  
回も繰り返しくおもわれる、と上の句で述べ、その理由を、流れる水が帰ってこない、  
すなわち人の命は必ず死ぬ定めであることに気づいたから、と述べるものであるう。  
〔流るる水のかへりこぬなり〕

この表現は、新日本古典文学大系『古今和歌集』の指摘する「逝者不復見。悲者長已矣。  
存者今如何：浮世如流水」（白居易「感逝寄遠」）や、古今集の古注が引用する出処不明  
の句「後悔不立前、流水不還源」というような漢籍類の表現に根ざしたものとおぼしく、  
早くから、

見れど飽かずいましし君が黄葉の移りい行けば悲しくもあるか

右一首勅内礼正具犬養宿祢人上使檢護卿病 而医薬無驗逝水不留 因

斯悲慟即作此歌

（万葉集 卷三 四五九）

のように用いられるなど、一般的のものであったらしい。こうした、人口に膾炙していた  
表現であれば、特定の典拠は意識されなくなるのが通例である。その一方で、儒教の基本  
的教養のある律令官人であれば、この表現のおおもとにあるものとして「子在川上曰、逝  
者如斯夫、不舍晝夜。」という論語（子罕第九）を意識しうることも、容易に想像される。

さて、当該の歌は、古今集では他人の死を悼む歌として、三十三首中の九番目に置かれ

ている。それを、新撰和歌では辞世の歌と読み替えて巻の末尾に配した。律令的な性格の強い新撰和歌であれば、巻三の巻軸に、このような、論語を意識させる和歌を、あえて配したのでと見ることに、さほどの無理はないと思われる。

〔179番の歌との対応関係について〕

「千とせ」と「八千たび」という類似した言葉を用いた歌として対にされているものと思われる。

〔賀哀の部としての構成に関して〕

新撰和歌賀哀部の巻頭巻末の二首ずつをここに再提示する。

我君は千世にましませさゝれ石の岩ほと成て苔のむすまて (一六一)

なくなみた雨とふらなんわたり川水まさりなはかへりくるかに (一六二)

見えわたる浜の真砂やあしたつの千とせをのふる数となるらん (一七九)

さきたゝぬくみの八千たひかなしきはなかるゝ水のかへりこぬ也 (一八〇)

傍線を引いたように、賀哀それぞれの首尾の歌に、同種の言葉が用いられていることに気づく。これはやはり意図的な編纂であると思われる。

【歌意】

先立たない後悔をしては、幾たびも悲しく思われるのは、今、自分の死を目前にして、流れる水が帰ってこないように人の命も必ず死に向かうのだということを思い知ったからです。

#### 新撰和歌集巻第四

#### 別 旅 二十首

181 立わかれないなばの山のみねにおふる松としきかば今かへりこん

【校訂】なし

【他出文献】古今集 離別 三六五

【注】

〔たちわかれ〕

「たち」は接頭語。動詞「発つ」とは見ない。たとえば、

とものおづまへまかりける時によめる よしみねのひでをか



白雲のこなたかなたに立ちわかれ心をぬさとくだくたびかな

(古今集 離別 三七九)

では、東国へ行く人と都に残る人とは「こなたかなた」に「たち別れ」るのであるから、この「たつ」は「出發する」という意味ではなからう。当該の歌も、同様に、あえて「出發する」と取る必要はないものと思われる。

〔いなばの山〕

第二句は、立ち別れて「去なば」と「因幡」の掛詞。「去なば」という仮定条件を受ける部分は述べられていないが、文脈から、「そこは因幡の国である」という内容が想定できる。

〔まつ〕

第四句の「まつ」は「松」と「待つ」の掛詞になっているが、「待つ」の主語は見送る人と考えられよう。

【歌意】

あなたと別れて行ったならば、そこは因幡の国。因幡の山の峰に生える「松」と同じ音の「待つ」ということを聞いたならば、すぐに帰ってきましよう。

182 天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出し月かも

【校訂】なし

【他出文献】古今集 羈旅 四〇六

【注】

〔天の原ふりさけ見れば〕

「天の原」という語は、この時代、

あまのはらふみとどろかしなる神も思ふなかをばさくるものかは

(古今集 恋四 七〇一)

わが恋のかずをかぞへばあまの原くもりふたがりふる雨のごと

(後撰集 恋四 七九五 藤原敏行)

のように、大空、というほどの意味で受け取られていたらしい。

また、「天の原ふりさけみれば」という表現は、

天の原振り放け見れば大君の御寿は長く天足らしたり (万葉集 卷二 一四七)

天地の分れし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 富士の高嶺を 天の原 振り放け見

れば渡る日の影も隠らひ照る月の光も見えず…

(同 卷三 三一七 「山部宿祢赤人望不尽山歌」)

…天の原振り放け見れば照る月も満ち欠けしけり…

(同 卷十九 四一六〇 「悲世間無常歌」)

に見られるように、古くから見られる慣用的なものである。

〔春日なる三笠の山〕

当該の歌を、遣唐使である阿倍仲麻呂が中国で詠んだとする古今集の歌として見た場合、「春日なる三笠の山」は「遣唐使は、渡海の前に春日山の麓で天神地祇に無事を祈るならいであつた」(日本古典集成『古今和歌集』)ことを重ね合わせて理解すべきだと思われる。一方、詞書を持たない新撰和歌としては、単に、ふるさと奈良にある春日の三笠山、という言葉のままに受け取ることになるだろう。もちろん、この歌が仲麻呂の逸話と強く結びついており、詞書はなくとも、新撰和歌の享受者に、仲麻呂が中国で詠んだ歌として理解された可能性は否定できないが、新撰和歌の解釈としては、仲麻呂の逸話と切り離して見るべきであると考ええる。

〔出でし月かも〕

月を見て、時間や空間を遠く隔てた土地や人のことを思うのは、漢詩文の表現に由来するものであろう。

結句の「かも」は万葉集の時代に多く用いられ、古今集の時代にはほとんど用いられることになくなった、古風な助詞である。初、二句の表現と合わせて、当該の歌は、一首全体が万葉時代風の古い言葉遣いの歌なのである。

〔181番の歌との対応関係について〕

181番は、別れに際して行く先の土地に思いを馳せる歌であり、182番は、旅先にあつて故郷を思う歌である。双方に山の名詠み込まれている点で共通する。また、前者は、掛詞を多用する古今風の歌で、後者は万葉風の歌である。この、今古の歌風の対立も意識されていたかもしれない。

【歌意】

大空を振り仰いでみると、ふるさと奈良の春日にある三笠山に出ていた月であるよ。

183 音羽山木高く鳴て霍公君が別をおしむべら也

【校訂】なし

【注】

〔音羽山木高く鳴きてほととぎす〕

音羽山の時鳥は、当該の歌に加え、

おとは山をこえける時に郭公のなくをききてよめる きのものり

おとは山けさこえくれば郭公こず多はるかに今ぞなくなる (古今集 夏 一四二)

など、この時代、古今集撰者が詠んだ数例の他には見出せない、後撰集の時代以後は、貫之や友則の歌をひいたらしい例がしばしば見られるようになる。このことからすると、はじめ、実景として音羽山のほととぎすを詠んだそれらの歌が名高くなり、そのために音羽山とほととぎすの関係が定着していったものと思われる。

さて、当該の歌の場合、「おとはの山のほとりにて人をわかとてよめる」という詞書を有する古今集においては、「音羽山」はまず、実景としての意味を持つ。別の説明をすれば、今述べたように、音羽山でほととぎすが鳴くことは、まだ歌の世界での約束にはなっていないのだから、この古今集歌は、実際に音羽山でほととぎすの鳴き声を聞いた、その体験を詠んだものとして受け取られただろう。

しかし、この歌の眼目は、そうした実体験を詠むことにあるのではなかった。実体験に基づく内容を表現に技法をこらして歌に仕立てた、その技法のおもしろさが、一首の眼目と思われるのである。では、どのような技法がこらされているのか。

「音羽山」という地名は、

おとは山おとにききつつ相坂の関のこなたに年をふるかな (古今集 恋一 四七三)

などから、「音」という言葉を含んでいることにも興味を覚えられていたらしいことがわかる。また、ほととぎすは、その習性を観察したためと思われるが、

時鳥きつつこだかく鳴く声は千世のさ月のしるべなりけり (貫之集 三二〇)

はるかにも声のするかな時鳥このくれたかくなければなりけり (同 五〇八)

と、梢の高いところで鳴くと詠まれることがある。この二つのことと、大きな音が聞こえる様を表現するのに、

さ夜ふけて堀江漕ぐなる松浦舟梶の音高し水脈速みかも (万葉集 卷七 一一四三)

荻のはのそよがす風の音たかみ末こすかたはすこしまされり (順集 一四九)

などに見られる「音高し」という言葉を用いることを組み合わせ、貫之は、ほととぎすが音高く、そして木高く鳴く、という文脈を「音羽山木高く鳴きて」という十二音で構成

したのであろう。当該の歌は、このような、手の込んだ技巧をこらしたものであった。

詞書を持たない新撰和歌の歌としてこの歌を受け取る時には、歌の詠まれた現場に思いをいたすことは少ない。さらに、新撰和歌が編まれた時代までには、音羽山とほととぎすの関係もかなり定着していたとおぼしい。であれば、新撰和歌のこの歌を享受する人がまず関心を抱くのは、音羽山という具体的な山と、そこで鳴くほととぎすの声そのものに對してではなく、音羽山とほととぎすというよくある取り合わせを、どのような技法で読みこなしているのか、というところになるのではないか。

〔君が別れを惜しむべらなり〕

ほととぎすの鳴き声が離別の悲しみに通ずるといふ、漢籍に由来する考えがこの時代に存していたらしいことは、古今集の諸注の指摘の通りである。この指摘は、先の〔音羽山…〕の項で述べたことと合わせて、この歌がごく技巧的な歌であることを再確認させるものである。

【歌意】

音羽山で音高く、そして梢高く鳴いて、時鳥はあなたの別れを惜しんでいるようです。

184 夕づくよおぼつかなきを玉くしげふたみのうらはあけてこそみめ

【校訂】底本四句「ふたみかうら」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】古今集 羈旅 四一七

【注】

〔夕月夜〕

「夕月夜」は、「夕暮れに出ている月。陰暦一〇日頃までの夕方の時刻に、空に出ている上弦の月。また、その月の出ている夜。」（日本国語大辞典第二版）をいう。この歌の場合、「夕月夜」が「おぼつかなき」というのであるから、

春くればこがくれおほきゆふづくよおぼつかなしも花かげにして

（後撰集 春中 六一 万葉集 卷十 一八七五が同歌）

春がすみたなびく今日のゆふづくよおぼつかなくもこひわたるかな

（古今和歌六帖 二五二九）

などと同じく、上弦の月の出ている薄暗い夕暮れのことを表していると見られる。

〔たまくしげふたみの浦は明けてこそ見め〕

「たまくしげ」は、早くから、

紀伊道にこそ妹山ありといへ玉くしげ<sup>二</sup>上山も妹こそありけれ

(万葉集 卷七 一〇九八)

玉くしげ<sup>三</sup>諸戸山を行きしかばおもしろくして古思ほゆ<sup>いにしへ</sup> (同 卷七 一二四〇)

玉くしげ明けまく惜しきあたら夜を衣手離れてひとりかも寝む

(同 卷九 一六九三)

のように、箱の「蓋」「身」、そして「開ける」という語などに掛かる枕詞として用いられてきた。さて、当該の歌は、「ふた<sup>み</sup>の浦はあけて…」と、「たまくしげ」のかかる言葉を三つ同時に用いるという、かなり技巧的な作りになっている。

なお、「ふたみの浦」は、「たじまのくにのゆへまかりける時に、ふたみのうらといふ所にとまりて…」という詞書を有する古今集の歌として見たときは、実景として受け取られるが、新撰和歌の場合、実景としての意味は薄れ、ほぼ枕詞として受け取ることになるだろう。そうして、二見浦という場所で詠んだのだ、というおもしろさではなく、枕詞を技巧的に使いこなしたというおもしろさが、一首の鑑賞の中心となる。

〔183番の歌との対応関係について〕

ともに、もとは具体的な意味を持つ地名を詠み込んだ歌であったものを、技巧中心の歌として捉えなおしたらしい。その点で共通すると思われる。

#### 【歌意】

上弦の月の出ている薄暗い夕暮れ、薄暗がりではつきりしないものだから、たまくしげの蓋<sup>ふた</sup>と身<sup>み</sup>という名を持つふたみの浦は、たまくしげを開けて見るように、夜が明けてから見ようよ。

185人やりの道ならなくに大かたはいきうしといひていぎ帰りなん

【校訂】なし

【他出文献】古今集 離別 三八八

【注】

〔人やりの〕

「人やり」という言葉は、

つくしに侍りける時、秋野を見てよみ侍りける 大納言経信

花みにと人やりならぬ野べにきて心のかぎりつくしつるかな

(新古今集 秋上 三四二)

むかしよりにかに契りて七夕のひとやりならぬ物おもふらん（散木奇歌集 三八六）  
などのように、人にやらされる、という程の意味である。なおこの言葉は、平安時代中頃まで、散文の文献にはしばしば見出せるが、和歌に用いられることはほとんど見られない。和歌的ではない言葉だったのであろうか。

〔道ならなくに〕

「くならなくに」は、

しるしなきねをもなくなうぐひすのことしのみちる花ならなくに

（古今集 春下 一一〇）

のように、「くではないのに」という逆接の意。当該の歌では、「人に指図されて行く道ではないのに」に続く部分、すなわち「行きたくない」といった内容を表す文は省略されている。

〔おほかたは〕

「おほかたは」という語は、「通常は」「総じて」の意であるが、推量の助動詞とともに用いられる場合、

おほかたはわが名もみなとこぎいでなむ世をうみべたに見るめすくなし

（古今集 恋三 六六九）

について言われた日本古典集成『古今和歌集』の「断案を下すときに言う。」とする説が当たっているように思われる。

おほつぶねに物のたうびつかはしけるを、さらにききいれざりければ

つかはしける

貞元のみこ

おほかたはなぞやわがなのをしからん昔のつまと人にかたらむ

（後撰集 恋二 六三三）

かぎりあればいとふままにもきえぬ身をいざ大方は思ひすててん

（和泉式部集 三〇六）

おほかたは思ひたえなんいせのあまのつりのうけ引くことしなれば

（散木奇歌集 一〇六四）

など、その他の例でも、細かいことには目をつぶり大勢を考えて決心する、という文脈でとらえて大過はなさそうである。そして当該の歌でも、「ええい、もう」と断案を下す際の言葉として理解できる。

〔いざ帰りなむ〕

古今集では、当該の歌に「山ざきより神なびのもりまでおくりに人人まかりて、かへりがてにしてわかれをしみけるによめる」という詞書がある。この詞書に示された状況からは、結句の「さあ帰ろう」というのはポーズに過ぎないことが推測される。その場合、「おほかたはくいざ帰りなむ」は、「通常ならく帰ろう、と、い、う、と、こ、ろ、で、す、が」と補って解釈することになるだろうし、実際それが、古今集の歌としての通説である。しかし、新撰和歌で詞書なしにこの歌を見たとき、結句の「いざ帰りなむ」という表現そのものは、「さあ帰ろう」としか言っていないことに気づく。つまり、詞書をなくすことで、一首の表現そのものに気づかされるのである。

【歌意】

人に指図されて行く道ではないのに……。ええい、もう、「行きたくない」と言って、さあ帰ってしまおう。

186 和田の原八十嶋かけてこき出ぬと人にはつげよ天のつり舟

【校訂】なし

【他出文献】古今集 羈旅 四〇七

【注】

「あまの釣り船」

「あまの釣り船」は、人麻呂の時代以来、

餉飯けひの海の庭良くあらし刈薦けりの乱れて出づ見ゆ海人の釣舟つりふね（万葉集 卷三 二五六）

風をいたみ沖つ白波高からし海人の釣舟つりふねに帰りぬ（同 二九四）

のように、海辺での旅情を彩る景物として描かれてきたものである。当該の歌も、篁が流罪になったときのもの、という条件なしで見れば、都の人との永遠の別れとなるかもしれない決別の切迫した心情ではなく、通常の旅情を詠んだ歌として理解できる。もちろん、この歌は当時から人口に膾炙していたのだろうから、詞書はなくとも、流罪の際の歌として受け取られた可能性は高いかもしれない。しかし、新撰和歌で、詞書なしにこの歌を味わうとき、一首の表現そのものは、むしろ淡々と旅情を述べたものであると気づかされる。そして、二度と都の地を踏むことができないかもしれないという、きわめて深刻な状況の中で、穏やかな表現の歌を詠んでいることに、享受者は一層の悲しみを感じうるのではないか。

〔185番の歌との対応関係について〕

双方に「人」という言葉が用いられていることが、共通点としてあげられる。そして、それぞれの歌の注に記したように、いずれも元は、それが詠まれた状況を内包する形で理解されるのが通常であるだろう歌を、一旦詞書から引き離すことで、表現そのものに着目させるものであったと思われる。そのような対として、この二首を考えたい。

【歌意】

大海原を、たくさん島々めざしてこぎ出したと、人には伝えておくれ。海人の釣り船よ。

187 かつこえて別も行か逢坂は人だのめなる名にこそ有けれ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 離別 三九〇

【注】

〔人だのめなる〕

「人だのめ」とは、「当てにさせる」という意味であるが、和歌においては、もっぱら人に期待だけさせて、実際のところは報われないという文脈で用いられる。

わびぬればしひてわすれむと思へども夢といふ物ぞ人だのめなる

（古今集 恋二 五六九）

では、愛しい人の夢を見た人物が、あの人も自分のことをかすかにでも思ってくれているのかもしれないと思った。夢はそんな期待だけ抱かせておいて、実際には会えることはない、ということを行っている。また、

月あかき夜、人をまち侍りて

（人まろ）

ことならばやみにぞあらし秋のよなぞ月かげの人だのめなる

（拾遺集 恋三 七九六）

も、月光のせいで、来るはずのない人まで、もしや、と期待をしてしまう、という心持ちを歌ったもの。また後のものではあるが、

こむとたのめてはべりけるともだちのまうでござりければ秋風のすず

しかりけるよひとりごちみてはべりける 僧都実誓

をぎのはに人だのめなるかぜのおとをわがみにしめてあかしつるかな

（後拾遺集 秋上 三二二）

修行にいでたち侍りける時、いつほどにかかへりまうでくべきと人の

いひ侍りければよめる

大僧正行尊



かへりこむほどをばいつといひおかし定なき身は人だのめなり

(千載集 離別 四八二)

などでも、「人だのめ」という言葉は、期待させておいて、実現することはない状況下に於いて用いられている。

〔名にこそありけれ〕

「名にこそありけれ」については、164番の歌の注で述べたとおり。当該の歌では、逢坂といえ、人に逢う、という名のはずなのに、実際は、人に逢える期待だけさせる名だったのですね。と常識とは異なる一面に気づいたことを表す。

【歌意】

(逢坂という名の通り、ここで会う人もいれば) その一方で、こうして別れて行く事よ。逢坂は、人と逢う、という期待だけを持たせる地名だったのですね。

188 都いでゝけふ三日の原いづみ川がは風寒し衣かせやま

【校訂】 底本第四句、「川風□寒し」(□部分判読不能)。新撰和歌諸本により判読不能部分は、「川」もしくは「河」あるいは繰り返して記号の書き損じと見る。

【他出文献】 古今集 羈旅 四〇八

【注】

〔今日みかの原〕

古今集の諸注では「みかの原」に「三日」をかけるのか「見」をかけるのかで説が分かれる。「三日」ととらない説の根拠としては、現在の相楽郡にある瓶原まで、行程は三日もかからないということがあげられる。ただ『古今和歌集正義』が「旅する人は都出て今日幾日とかぞふるが常なる其詞をかりて壘を三日四日の三日にかけたる也」というように、現実の旅程とは関係なく、旅の心を表す表現として用いたのだと考えることは可能であるし、「今日」という言葉に続いて「みか」という音を耳にしたとき、「三日」という言葉を思い浮かべるのは、自然なことであると思われるから、今は「三日」が掛けられていると考えておく。

〔いづみ川〕

この地名についても、「出づ」が掛けてある、という説と「いつ見」が掛けてあるという説がある。判断は難しいが、どちらかといえば「出づ」と取ったのでは、「出づ」につながる文脈が考えにくい、という批判が当たっていると思われる。

〔ころもかせ山〕

これも「衣貸せ」と「鹿背山」の掛詞である。このように、当該の歌は一首の中に三カ所、地名を掛詞として提示したところがある。それがこの歌の見せ所ということになるのだろうか。

〔187番の歌との対応関係について〕

都の東側にある逢坂と、南側にある瓶原を詠んだ歌として、対にされたのであろう。双方共に、地名を掛詞として用いている、そしてそこが表現の眼目であるところも共通しよう。

【歌意】

都を出発して今日は三日。瓶原の、いつ見るかとおもっていた泉川である。その川風が寒い。衣を貸しておくれ、鹿背山よ。

189 夕ぐれのまがきは山と見えなくむよるはこえじとやどりとるへく

【校訂】なし

【他出文献】古今集 離別 392

【注】

〔まがき〕

「まがき」は、「竹や柴などで目をあらく編んだ垣。」（日本国語大辞典第二版）であるが、この時代の和歌では、

仁和のみかどみこにおはしましける時、ふるのたき御覽ぜむとておは  
しましけるみちに遍昭がははの家にやどりたまへりける時に、庭を秋  
ののにつくりておほむ物がたりのついでによみてたてまつりける

僧正遍昭

さとはあれて人はふりにしやどなれや庭もまがきも秋ののらなる

（古今集 秋上 二四八）

やまのひとりたづぬるみちにそうのいへあり、もみぢちりみちてのこ  
りの花まがきにあり、はなすすき風にしたがひてなびく、人をまねく  
ににたり、源少将むまよりおりて

ひとしれぬやどになうゑそ花すすきまねけばとまる我にやはあらぬ

（躬恒集 一八八）

に見えるように、うらぶれた、物寂しい家に似つかわしいものとして用いられるようである。

〔見えななむ〕

「くすななむ」は「くしてほしい」。この表現は、

こむ世にもはや成りななむ目の前につれなき人を昔とおもはむ

(古今集 恋一 五二〇)

と、早く来世になって欲しい、とか、

うきながらけぬるあわともなりななむ流れてとだにたのまれぬ身は

(古今集 恋五 八二七)

と、我が身が泡になってほしい、という類の、叶うことのない、あるいは実現が極めて難しい願いをいう場合に用いられる。当該の歌でも、籬が山に見えることはないから、宿ってくれることは無理に等しい、という前提がある。

【歌意】

叶うならば、夕暮れの籬は山と見えて欲しい。(危険だから)夜は越えまいと(この人が、この粗末な家に)宿りをするように。

190 かりくらし七夕つめに宿からん天の河原に我はきにけり

【校訂】なし

【他出文献】古今集 羈旅 四一八

【注】

〔かりくらし〕

初句については、古今集の諸注で二つの見解がある。一つは、一日「かりくらし」で、今はもう日暮れである、とする説。もう一つは、これから一日日暮れまで「かりくらし」という説である。前者の説の場合、第二、三句を挿入句と見て、「かりくらし天の河原に我はきにけり。(だから)七夕つめに宿からん。」と文の構造を考えることになる。後者は、「かりくらし七夕つめに宿からん。(だって)天の河原に我はきにけり(なのだから)。」と見ることになる。いずれも解釈としては可能である。ただ、前者は挿入句といふ少し無理な文章構造を想定しなくてはならないこと。それから、古今集の時代の歌に、上の句で疑問を提示して下の句でその謎解きをするかたちのものが、特徴的なものとして多く見られることからすれば、後者の受け取られ方をする可能性の方が高いように思われ

る。

なお、古今集の詞書や伊勢物語では、この歌は、天の川に到着し酒を飲んでる場面で詠まれたものとされる。酒を酌み交わすのは、一日の行動の締めくくりであるだろう。だから、この歌も日暮れの後の心情を詠んだものと見る説が出てくることは、自然なことである。あるいは、当時からそのような理解もあったかもしれない。

しかし、今述べたように、歌の表現からすれば、これから一日狩り暮らすのだ、と考える方に分があるように思われる。惟喬親王一行の桜狩りの旅で詠まれたこの歌は、親王から示された「狩して天の河原に至るといふ心を」詠め、という課題に応じたものであるが、親王は時間の指定はしていない。「狩りをしていて、天の河原に至った」という事だけが課題なのである。それに応えて、業平が、「狩りをしていていつの間にか天の川の河原にやって来た。家も遠くなつたが、もういつそこのまま一日狩り暮らして七夕に宿を借りよう」という趣向で詠んだのだと見て、齟齬は生じない。

新撰和歌では、詞書なしに歌一首のみを提示している。もちろん、この歌が業平が交野で詠んだものだという前提で受け取られる可能性を否定することはできない。ただその場合でも、詞書なしで歌の表現そのものを読み取らせようとする、そのような意図で新撰和歌は編纂されているのではないか。

〔189番の歌との対応関係について〕

双方の歌に仮の宿りのことが詠み込まれている。また、籬が山に見えるとか、七夕に宿を借りるとかいう、非現実的な想像を述べる点でも共通する。

### 【歌意】

狩りをしていていつの間にか天の川の河原にやって来た。家も遠くなつたが、もういつそこのまま一日狩り暮らして七夕に宿を借りよう。

191 わかれをば山の桜にまかせてんとめむとめじは花のまにく

【校訂】底本四句「とめしとめむ」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】古今集 離別 三九三

### 【注】

〔別れをば山の桜にまかせてん〕

当該の歌は、古今集では、詞書によって、山へ向けて帰ろうとしている人々に対して幽仙法師が詠んだものであることがわかる。さて、別れを山の桜に任せる、ということは、

言い換えれば、去ろうとしている人々が山の桜を見たいと思っているかどうかを試す、ということである。試された者が、もしも歌を詠んだ人に別れを告げて山へ帰ったとしたら、それは、山の桜を愛でようとする気持ち強いから、という事になり、もしも幽仙法師の所に留まったとしたら、それは、去る者の桜への愛着が薄いから、ということになる。

もちろん、幽仙法師は、去る者のことを、桜を愛でることをしらない無粋な人、と言いたい訳ではなからう。そうではなくて、去る者に対して、あなた方は桜を愛でる風流人でしょうから、私の所を後にして山桜のところに行くのも、仕方ありませんよね、と辞去する口実を与えているのである。古今集の歌として見た場合の理解は以上のようなことになるだろう。

では、新撰和歌の歌として一首を見た場合はどうなるか。詞書がないのであるから、下山しようとしている人に対して詠んだ歌と見ることもありえないわけではない。その場合、一首は、この山で咲いている美しい桜を愛でる気持ちがあるならば、別れることはできないでしょう、という、去る人を強く引き留める趣旨の歌になる。ただ、「山の桜」という言い方は、

たれしかもとめてをりつる春霞たちかくすらむ山のさくらを（古今集 春上 五八）

春霞たなびく山のさくら花うつろはむとや色かはりゆく（同 六九）

いつしかと山の桜もわがごとく年のこなたにはるをまつらん（後撰集 冬 四九八）

春霞立ちなへだてそ花ざかりみてだにあかぬ山のさくらを（拾遺集 春 四二）

などのように、山を遠望して詠む場合に用いられるのが普通であるようだから、古今集の場合と同じく、山に帰っていく人を送る歌として受け取られた可能性の方が高いのではないだろうか。

〔花のまにまに〕

「くのままにまに」は、「くのままに従って」の意。現行の古今集諸注では、花を意思のあるものの如く表現していると見て、「花の意思に従って」と理解する説が多い。しかし、古今集の時代には、

花ちれる水のまにまにとめくれば山には春もなくなりけり

（古今集 春下 一二九）

人を思ふ心のこのはにあらばこそ風のまにまにちりもみだれめ（同 恋五 七八三）

葦引の山のまにまにかくれなむうき世中はあるかひもなし（同 雑下 九五三）

等、風、水、山などの自然のもの「まにまに」と表現する例が少なからずある。こうし

た歌の場合は、風が吹くまま、水が流れるまま、山がそびえるまま、自然のあるがままに任せて逆らわないという意味で「まにまに」が用いられているようである。ならば、当該の歌も、山の桜がどのように咲いているかに任せる、つまり、山の桜が、去ろうとする人の足を速めるほどに美しく咲いているのなら急いで帰ればよからうし、さほど咲いていないのであれば、今しばらくゆっくりしてから帰ればよい、というほどの意味で用いられていると考えてはどうだろうか。

【歌意】

別れについては、山の桜に任せてしましましょう。（私があなたを）引き留めようとするかしないかは、花の美しさ次第です。

192 このたびはぬきもとりあへず手向山紅葉の錦神のまに／＼

【校訂】なし

【他出文献】古今集 羈旅 四二〇

【注】

〔このたびは〕

初句「このたびは」は、「この度は」と「この旅は」の掛詞となっている。

〔紅葉の錦〕

幣には布帛を用いることが多い。その布帛を意識した表現として、「紅葉の錦」と言われているのであろう。

〔神のまにまに〕

当該の歌の「神のまにまに」は、「神の御心のまに」の意。幣の代わりに美しい紅葉を捧げますので、御心のまにに、心ゆくまで充分にお納めください、という主旨となる。

満山美しい紅葉があることを前提とした表現。

〔191番の歌との対応関係について〕

山の桜を詠んだ191番の歌に、山の紅葉を詠んだ192番の歌をつがえた。また、この時代、「まにまに」は、散文では用いられることの少ない、古めかしい表現だったようである。この二首は、そうした印象的な表現を用いた歌の対でもあるだろう。

【歌意】

この度の旅では、幣を用意できません。手向山の満山を美しく彩る紅葉の錦を幣の代わりとして捧げます。神の御心のまにに、心ゆくまでお納めください。

193 あかずしてわかるゝ泪瀧にそふ水まさるとやしもはみゆらん

【校訂】なし

【他出文献】古今集 離別 三九六

【注】

〔わかるる涙瀧にそふ〕

涙が「瀧にそふ」は、涙が落ちて急流の水といっしょになることを言う。

おろかなる涙ぞそでに玉はなす我はせきあへずたきつせなれば

（古今集 恋二 五五七）

露ばかりおくらむ袖はたのまれず涙の川のたきつせなれば

（新古今集 恋五 一三五〇 光孝天皇歌への返歌）

わび人の袖をやかれる山川は涙のごとくおつるたきかな

（貫之集 六六〇）

などのように、滂沱たる涙の筋を川や瀧にたとえる表現は多いが、当該の歌のように、瀧に涙が加わってその水かさが増すという例は、同時代以前の作にあまり見出せない。

〔水まさる〕

川の水が増さるのは、通常、

この河にもみぢば流るおく山の雪げの水ぞ今まさるらし （古今集 冬 三二〇）

をやみせず雨さへふれば沢水のまさるらんともおもほゆるかな

（後撰集 恋一 五三七）

のように、降雨のためである。当該の歌でも、私の涙で増水した川だが、下流では降雨のために水かさが増したと見えているのだろうか、という趣旨だと考えられよう。

〔しもは見ゆらん〕

結句は、古今集では「しもは見るらん」とある。古今集の歌の場合、「下流にいる人は見ているだろうか」と、下流で川の流れを見ている人物を意識し、その人物に自分の悲しみが伝わらない嘆きを表すことになる。それに対して、新撰和歌の「見ゆらん」という形であれば、「下流では見えているだろうか」と、川が単に増水した状態としか見えていないだろうことを表し、別れの悲しみを他へは伝えてくれない川の無情さを怨んでいる体の歌となる。なお、194番の歌の注に述べるが、「見ゆらん」の方が、194番と同種の趣を含む歌になる。194番の歌と対するために、新撰和歌が歌句を改変したものではなかるうか。

【歌意】

まだまだ一緒に居たい気持ちのままに別れた悲しみの涙が早瀬に流れ込み水かさが増している。そうなのに、単に雨か何かで川が増水したものと、下流では見えているのだろうか。

194名にしおはゞいざことゝはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

【校訂】底本四句「わか思ぬ人は」ウツアユマリ。単純な誤写とみる。

【他出文献】古今集 羈旅 四一一

【注】

〔名にしおはば〕

「名にしおはば」は、そのような名を持っているのならば、の意。

名にしおはば相坂山のさねかづら人にしられでくるよしもがな

(後撰集 恋三 七〇〇)

では、恋人に逢うすべのない者が、「逢ふ」という名を持つ「逢坂山」のさねかづらに嘆き、

なにしおはばしひてたのまむをみなへしひとのころにあきはくるとも

(新撰万葉 一四三)

では、恋人に飽きられた人物が、「をみな」という名を持つ女郎花に託して恨み言を述べている。このように、「名にしおはば」と言うのは、その名が効力を發揮しないだろうことがわかってしている場合なのである。

〔ありやなしやと〕

この句がどのようなことを意味するか、古今集の諸注で必ずしも一致しているわけではないが、

年月をへてけさうし侍りける人のつれなくのみ侍りければ、今はさら

に世にもあらしといひ侍りてのち、ひさしくおとづれず侍りければ、

かのをとこのいもうとにさきざきもかたらひてふみなどつかはしけれ

ば、いひつかはしける よみ人しらず

心ありてとふにはあらず世の中にありやなしやのきかまほしきぞ

(拾遺集 雑賀 一一九三)

よの中つねなくはべりけるころひさしうおとせぬ人のもとにつかはし

ける

赤染衛門



きえもあへずはかなきころのつゆばかりありやなしやと人のとへかし

(後拾遺集 雑三 一〇一二)

なが月のつごもりがた、わづらふことありてたのもしげなくおぼえけ

れば、久しくとはぬ人につかはしける 藤原基俊

秋はつるかれののむしのこゑたえばありやなしやを人のとへかし

(千載集 雑下 一一九三)

などの例を見る限り、「生きていくかいないか」とする説が当たっているかと思われる。

〔193番の歌との対応関係について〕

193番の歌には、川が自分の悲しみを伝えてくれないことを嘆く気持ちが読み取れることを述べた。一方194番の歌も都鳥に都のことを尋ねても、所詮安否のわかるはずもない絶望感を背景にしたものである。このことから、二首はいずれも自然物の無情さを嘆く心を詠み込んだ歌として対にされたものと考ええる。

【歌意】

「都」という名を持っているのであれば、さあ、尋ねよう。都鳥よ。私の思う都のあの人は健在なのか、どうなのか。

195 別るれどうれしくも有か今宵より逢みぬ先に何をこひまし

【校訂】底本結句「何をこはまし」。新撰和歌諸本の多くは「恋まし」。動詞「恋ふ」は上二段活用であるので、底本の誤写とみる。

【他出文献】古今集 離別 三九九

【注】

「わかるれどうれしくもあるか」

「くくもあるか」は、ある心情を吐露する表現として、万葉集以来多く見られるものである。古くは、

見れど飽かずいましし君が黄葉の移りい行けば悲しくもあるか

(万葉集 卷三 四五九)

つれもなくあるらむ人を片思ひに我は思へば苦しくもあるか (同 卷四 七一一)

のように、もっぱら結句におかれて、一首の中心をなす心情を感動をもって述べる表現として用いられたが、古今集の時代に限れば、

河風のすずしくもあるかうちよする浪とともにや秋は立つらむ

(古今集 秋上 一七〇 貫之)

ゆく年のをしくもあるかなますかがみ見るかげさへにくれぬと思へば

(古今集冬342 貫之)

うちつけにさびしくもあるかもみぢばもぬしなきやどは色なかりけり

(同 哀傷 八四八 躬恒)

かつ見れどうとくもあるかな月影のいたらぬさとあらじと思へば

(同 雑上 八八〇 近院右のおほいまうちぎみ)

吹く風のしるくもあるかな萩のはのそよぐなかにぞ秋はきにける (貫之集 五一一)

立ちかへりかなしくもあるかな別れては知るもしらぬも煙なりけり (同 七七九)

かつみれどうとくもあるかな月影のいたらぬ里はあらじと思へば (同 796)

と、第二句で「くもあるか」と、ある感動を提示し、三句以下でそのように感じる理由を述べる形式ばかりである。撰者たちを中心に、こうした用法が流行していたとおぼしい。ならば、躬恒の詠んだ当該の歌も、同じ形式の歌であると考えるのが自然である。すなわち、初二句で、わかるるにもかかわらず嬉しい、という普通ではあり得ないような気持ちを提示し、そのように感じる理由を三句以下で種明かしの述べているのだと考えられよう。

〔あひ見ぬ先に〕

「くぬ先に」は、

今はとてわかるる時は天河わたらぬさきにそぞひちぬる (古今集 秋上 一八二)

秋はきぬ竜田の山も見てしかなしぐれぬさきに色やかはると (拾遺集 秋 一三八)

山路にも人やまどはん川霧の立ちこぬさきにいざわたりなん (貫之集 一五七)

のように、まだ物事が実現しない、その以前に、という意味である。当該の歌では、今別れる人と次に会う以前に、ということになる。

〔何を恋ひまし〕

「何くまし」という例を見ると、

まてといふにちらでしとまる物ならばなにを桜に思ひまさまし

(古今集 春下 七〇)

は、何を桜以上に思ったらよいのかしら、という戸惑いの気持ちを表す。そしてその表現の背後には、桜以上に思うものはないという本音がある。

兼忠朝臣母身まかりにければ、兼忠をば故枇杷左大臣の家に、むすめ

をばきさいの宮にさぶらはせむとあひさだめて、ふたりながらまづ枇  
杷の家にわたしおくとてくはへて侍りける 兼忠朝臣母のめのと  
結びおきしかたみのこだになかりせば何に忍の草をつままし

(後撰集 雑二 一一八七)

子の日するのべにこ松のなかりせば千世のためしになにをひかまし

(拾遺集 春 二二三 忠岑)

なども、同様に、どうしたら、何をしたらよいかしら、というためらいや戸惑いの気持ちを表現することで、その背後にある、それ以外のことはありえない、という本音を示すものである。

当該の歌の「何を恋ひまし」は、今別れる人と次に会う以前に、いったい何を恋しく思いましよう、という戸惑いを表し、その背後にある、あなた以外は何も恋しくない、という感情を示していると考えられる。

【歌意】

今あなたと別れるけれども、嬉しいことです。なぜならば、今宵以後、あなたに次に逢う前にいったい何を恋しく思いましようか。あなた以外の何も恋しくありません。そのようにあなただけを恋しく思うのですから。(こんなにも恋しく思えるあなたに出会えてうれしく思います。)

196 夜をさむみをく初霜をはらひつゝ草の枕にあまたたびねぬ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 羈旅 四一六

【注】

〔置く初霜を払ひつつ〕

「初霜」は、その年初めて置いた霜ではなく、古今集の諸注が、和名抄の記述を参考にして説くように、早い時期の霜と考えるほかはない。さて霜を何度も払っては寝る、ということは、厳しい冷え込みの中、輾転反側しながら眠れない夜を過ごした、ということの意味するだろう。旅寝の辛さを示す表現でもある。

〔195 番の歌との対応関係について〕

この二首については、関連が見出しにくい。強いて言えば、どちらも夜の歌であること。また、195 番の歌には「別る」と「逢ひ見る」、196 番の歌には、「置く」と「払

う」という対義語的な言葉が用いられていることも指摘できようか。

【歌意】

夜が寒くて置く霜を何度も払っては、辛い旅寝をいくたびもしてきました。

197 結ぶ手の雫にゝこる山の井のあかでも人に別れぬる哉

【校訂】なし

【他出文献】古今集 離別 四〇四

【注】

〔結ぶ手の雫に濁る山の井の〕

「山の井」は、

山の井の浅き心もおもはぬに影ばかりのみ人の見ゆらむ（古今集 恋五 七六四）

あひまちける人の、ひさしうせうそこなかりければつかはしける

きのめのと

影だにも見えずなりゆく山の井はあさきより又水やたえにし

返し

平定文

浅してふ事をゆゆしみ山の井はほりし濁に影は見えぬぞ

（後撰集 恋一 五三〇・五三一）

などに見えるように、浅いものとして和歌に詠まれるものである。「山の井」というだけでそのようなイメージがあるが、当該の歌の「山の井」は、水を掬った手からしたたる雫が落ちただけで濁ってしまうという。きわめて浅い、ささやかな井である。つまり、水の上で結ばれた手と、そこから落ちる水滴。そしてささやかな水面に落ちた水滴が広げる波紋と共に水底が揺れ、ふっと濁る山の井の美しいイメージが上の句には描き出されているのである。

さて、当該の歌の上の句は、第四句の「飽かでも」を引き起こす序詞として機能していると思われる。では、どのようにして上の句は「飽かでも」につながるのか。

古今集の注釈書のいくつかは、ここに「閼伽＝水」を持ち出し、「山の井の水である」「閼伽」と同じ音の「飽かで」…と掛詞を考えるが、この歌が仏教用語の「閼伽」を使用する必然性は考えにくい。またいくつかの注釈書は、水が濁って飲めなくなるので満足できない、という理屈で「飽かで」に続く、と考える。しかし、山の井を詠んだ歌で「飲む」ということを表現にした例は見出しがたい。現実には山の井が、水を飲むものであつ

たとしても、和歌的なイメージの中では、飲むものとしては意識されていないのではないか。だとすれば、上の句と下の句のつながりは、右にあげたような、論理的に説明しきれない類のものではなく、上の句で描き出される、一掬いで濁ってしまうほどにささやかな山の井のイメージに対して、飽き足らない、という感情がふと浮かぶ。そのちょっとした感情をそのまま「飽かで」という言葉で受け取った感性に基づくものだと考えられないだろうか。

俊成がこの歌を「此歌むすぶ手のおけるより、しづくににごる山の井のといひて、あかでもなどいへる、大方すべて言葉ことのつづき、すがた心かぎりなく侍るなるべし。歌の本体はただ此歌なるべし。」（古来風体抄）と評している。俊成の真意を十全に読み解くだけの用意はないが、おおよそ、「結ぶ手の」という言葉を初句に置いてから「しづくに濁る山の井」と続けたことと、「しづくに濁る山の井」という言葉を「飽かでも」に続けたこと、という言葉の「続き」具合のすばらしさを評価していることは間違いないであろう。もしもこれが単に論理的説明になっているだけの言葉続き、たとえば、「結んだ手から漏れて落ちる雫」というものであれば、平凡なだけである。そうではなくて、「結ぶ手」の「雫」という、論理だけでは十分に説明できない、イメージや語調の美しい言葉続きを俊成は評価したのではないか。

上の句と下の句の続き具合についても同じように考えられる。

吉野河いは浪たかく行く水のはやくぞ人を思ひそめてし（古今集 恋一 四七一）  
かすがののゆきまをわけておひいでくる草のはつかに見えしきみはも（同 四七八）  
などのような、序詞とそれによって引き起こされる言葉との関連が論理的に導き出されるものであったなら、それは通常の和歌技法であり、それを特別に賞賛することはない。

論理だけではない、イメージや感情、語調など論理を越えたところで言葉が緊密な関係と美しい調和を保っている、そうした序詞と序詞以下の歌句の関係を作り上げているところがすばらしい、と俊成は言っているのではなからうか。

#### 【歌意】

結んだ手の雫で濁るささやかな山の井。とても満足はできない。そう、満足できないままにあの人と別れたことだ。

198 から衣きつゝなれにしつましあればはるくきぬる旅をしそ思ふ

【校訂】底本四句「はるくきぬ<sup>の説</sup>」。誤写とみる。

【他出文献】古今集 羈旅 四一〇

【注】

〔一首の構成について〕

古今集の諸注が指摘するように、一首には様々な和歌的技法がちりばめられている。まず、「かきつばた」をそれぞれの句頭においた折句であること。初二句が「つま」を起こす序詞になっていること。また「つま」が「妻」と「棲」の掛詞であること。さらに、複数の縁語を詠み込んでいること。

当該の歌が、このように多くの技法をちりばめ、しかも破綻のない、緊密な構成をとるきわめて技巧的な完成度の高い歌であることを確認しておきたい。

〔197番の歌との対応関係について〕

二首共に序詞を用いた歌である。197番の歌は、イメージや語調が、198番の歌は、多種多様な技法が、と趣は異なるが、いずれも一首全体が高度に緊密な関係を持つ言葉で織りなされている点も指摘したい。

憶測に過ぎないが、198番の、高度に技法的な歌に、自作の197番の歌をつがえた貫之の、自負を示す対なのかもしれない。

【歌意】

からごろもを繰り返し着てすっかりなじんだ棲、という同じ言葉の「妻」が都にいるので、ここまでではるばるやって来た旅のことを思うよ。

199 命だに心にかなふ物ならば何か別の悲しからまし

【校訂】底本結句「悲しかるべき」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】古今集 離別 三八七

【注】

〔命だに心にかなふものならば〕

「命」は、歌を詠んだ人物の命。それが「心にかなふ」とは、命が思い通りになる、という事を表す。すなわち、あなたが帰ってくるまで生きていられるとわかっているなら、別れも悲しくない、と言っているのである。

なお、当該の歌と同じく第三句に「くものならば」と置いて上の句に仮定の内容を示し、下の句で、命令、あるいは意思、もしくは推量の語を用い、仮定した内容が実際のことになるならば、「くせよ」、あるいは「くしたい」、もしくは「くだらうに」と述べる形式

の和歌が、古今集には

までといふにちらでしとまる物ならばなにを桜に思ひましまし（古今集春下70）を始め八首みられる。後撰集にも十首、同型式の和歌がある。ただし一方で、貫之、躬恒らの作に、この形式の和歌は一首も見られない。このことからこれは、当時、ありふれた、平凡な形式であったかと思われる。

【歌意】

私の命さえ思い通りになって、あなたのお帰りを待つことができるのであれば、どうして別れが悲しいでしょうか。

200 したの帯の道はかた／＼別るともゆきめぐりてもあはむとぞおもふ

【校訂】群書類従本岩瀬本等にこの歌なし。

【他出文献】古今集 離別 四〇五

【注】

〔下の帯の〕

古今集の諸注が説くように、「下の帯」は下着をしめる帯。帯が一旦別々の方向に巻かれて、再び正面で逢うことを、別々の道を行っても、再び逢えるだろうことにたとえたもの。

〔新撰和歌の本文に関して〕

199 番の歌と200 番の歌はいずれも離別を歌ったものである。新撰和歌の配列では、一九九首目には離別の歌が位置すべきであるから、どちらか一首のみが、新撰和歌の本来の離別の歌だということになる。

さて、200 番の歌の方は、新撰和歌諸本のうちに、これを記さないものがあることからすると、199 番の歌の方が本来のものである可能性が、少しは高いと思われる。それに加えて201 番の歌が、仲間を失った雁を詠んでいることからすれば、これと対になるべきは、命を歌った199 番の方であると、やはり思われる。

右の推定が当たっていると、なぜ200 番の歌が記されることになったのか。書写の過程で、何らかの事情によりこの歌が紛れ込んだ可能性は、もちろんありうる。しかし、他の可能性は考えられないだろうか。

この歌は古今集では離別の部の末尾に置かれているものである。離別の巻軸に置かれたのには、それなりの理由があるからであろう。ならば、貫之自身が、古今集編纂時と同じ

理由で、この歌を新撰和歌の離別の最後に据えることも考慮していたかもしれない。201番との対ということからは、やはり、199番の歌が新撰和歌の決定稿かと思われるが、貫之が最後まで迷っていた、その迷いの過程が何らかのメモのような形で彼の手稿に記されていたのが、今に伝えられた可能性も考えられないだろうか。

【歌意】

下の帯のように道はあちらとこちらに別れるけれども、ぐるっとめぐって、再び逢おうと思えます。

201 北へ行かりぞ鳴なるつれてこし数はたらでぞ帰るべらなる

【校訂】なし

【他出文献】古今集 羈旅 四一二

【注】

〔雁ぞ鳴くなる〕

「なり」は、いわゆる伝聞の助動詞。雲に隠れて雁の姿は見えないが、その声が聞こえているのである。その声を耳にして、「故郷へ帰るのは嬉しいことであるはずなのに、北へ帰る雁は鳴いているのは何故か」という疑問から始まって、「きつとこちらへやって来た時より数が減っているのだろう、連れてきた誰がこちらで死んだのだろう」とその理由を考えている」（片桐洋一『古今和歌集全評釈』）というのが、一首の主旨と思われる。なお、「なく」には鳥が「鳴く」だけではなく、悲しくて「泣く」という意味が重ねられているだろう。

〔199番の歌との対応関係について〕

いずれの歌も、旅先、あるいは旅人を待ちながら命を落とすことを考えた歌である。

〔別旅の部としての構成に関して〕

賀哀部と同じく、別旅部も首尾に配された歌は、意図的な構成を有していると思われる。

立わかれないなばの山のみねにおふる松としきかば今かへりこん（新撰和歌 一八一）

天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出し月かも（同 一八二）

命だに心になふ物ならば何か別の悲しからまし（同 一九九）

北へ行かりぞ鳴なるつれてこし数はたらでぞ帰るべらなる（同 二〇一）

離別の歌は、いずれも待つ人に焦点があてられたものである。羈旅の歌は、遠く異国への旅を詠んだものである。



また、別旅部の巻頭巻末双方の歌に「帰る」という語が見えるのも、偶然ではないかもしれない。

【歌意】

北へ行く雁が鳴いているよ。ああ、連れてきた数が足りなくて帰っているのだろう。だからあのように泣いているのだろう。

新撰和歌集巻第六

恋 雑 百六十首

202 忍ふればくるしきものを人しれず思ふてふことたれにかたらん

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋一 五一九

【注】

〔人知れず〕

現行の古今集諸注では、「人知れず」の「人」は、恋する相手、と考えるものが比較的多い。けれども、同時代の「人知れず」の例を見ると、

人しれずたえなましかばわびつつもなき名ぞとだにいほましものを

（古今集 恋五 八一〇）

は、恋の終わり近くに位置する歌で、既に恋の相手は自分の思いを知っている段階である。したがって、相手に知られず関係が絶える、ということはあり得ないので、この歌の「人」は他の人々という意味としか考えられない。

（寛平御時歌たてまつりけるついでにたてまつりける）

ふちはらのかちおむ

ひとしれず思ふ心は春霞たちいでてきみがめにも見えなむ（古今集 雑下 九九九）

も、歌を奉る相手のことを「人」と言っているとは考えにくい。やはり人々一般をさすものであろう。これらのように、第三者のことを「人」と表現して「人知れず」という例が見られるのに対して、自分の思う相手のことを「人」と言っていると考えなければならぬ例はないように思われる。ならば、当該の歌の「人知れず」も「誰にも知られずに」の意であると考えてよいのではないか。

〔誰に語らむ〕

ここは、秘めた恋心を語る、すなわち一部始終を打ち明ける相手を探しているのではなく、誰に言うこともできない、という、いわゆる反語の表現であろう。

〔歌集における位置について〕

新撰和歌の恋の歌は、古歌集と同じく、およそ時間の推移の順に配列されている。したがって、この歌は、新撰和歌においては、まさに恋のはじめをあらわすと考えられる。

さて、この、忍ぶ恋の苦しみを歌った当該の歌は、古今集においては、恋部の五十番目に配されているものである。古今集では、

郭公なくやさ月のあやめぐさあやめもしらぬこひもするかな

（古今集 恋一 四六九）

おとにのみきくの白露よるはおきてひるは思ひにあへずけぬべし

（同 四七〇）

吉野河いは浪たかく行く水のはやくぞ人を思ひそめてし

（同 四七一）

と、人を思いそめることが恋のはじまりとなっているのに対して、新撰和歌の恋は忍ぶ苦しきから始まっているのである。編者貫之の「恋」についての考えの変化をうかがわせるものとして興味深い。

【歌意】

恋心を押さえていると苦しい。けれども、私があの人のことを誰にも知られず思っているということをお願いしたい誰に語ることができようか。

203 人しれず思ふ心は春がすみたちいでゝ君がめにも見えなん

【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑下 九九九

【注】

〔人知れず〕

202番の歌の注に同じ。

〔春霞たち出でて〕

当該の歌の「春霞」は、第一には「たち」にかかる枕詞として働いているが、

をれるさくらをよめる

つらゆき

たれしかもとめてをりつる春霞たちかくすらむ山のさくらを（古今集 春 五八）

のように、枕詞でありながら、実景でもある、という可能性がある。同時代において純粹に枕詞としてだけ機能している「春霞」の例がほかに見いだしがたく、

こしへまかりける人によみてつかはしける

かへる山ありとはきけど春霞立別れなほこひしかるべし（古今集 離別 三七〇）  
などにしても、実際に別れの季節が春であったことをにおわせる表現と見ることができ  
るので、当該の歌も、詠まれた時が春であり、その時節にふさわしい表現として「春霞―  
立」を用いたものと考えたい。

〔202番の歌との対応関係について〕

「人知れず」思っていることを、一方ではひたすら隠し通そうとし、一方では、人に知  
ってもらいたいと思う。そのコントラストのおもしろさ故に対にされたものであろうか。

【歌意】

誰にも知られず思っている心は、いま春霞が立っているように表に立ち現れて、あなたの  
目にも見えてほしい。

204 久かたのあまつ空にもあらなくに人はよそにぞ思ふべらなる

【校訂】底本三句「すまなくに」。新撰和歌諸本で「あらなくに」と「すまなくに」が混  
在するが、本稿の原則に従って、古今集とは異なる方の本文をとる。

【他出文献】古今集 恋五 七五一

【注】

〔久方の天つ空〕

「久方の」は「天」にかかる枕詞。「天つ空」は「空」に同じ。

風の音秋にもあるか久方の天つ空こそかはるべらなれ

（貫之集 三八）

久方の天つ空より影みればよく所なき秋のよの月

（同 五三一）

久方のあまつそらなる月なれどいづれの水に影やどるらん

（拾遺集 雑上 四四〇 躬恒）

などを見ると、「久方の天つ空」は、月や天象のことを言うときに用いる、雄大な、そし  
て格式張った表現であると思われる。その格調高い表現と、思いの通じない人、という卑  
近な内容とのギャップのおもしろさを狙ったものではないか。

〔古今集との歌句の相違について〕

第三句、古今集では「すまなくに」とある。これを新撰和歌が「あらなくに」と改めた  
と考えるが、その理由はよくわからない。あるいは「すむ」という言葉が、男が女の家に  
通うことを意味しうることから、まだ逢う前の段階である新撰和歌の歌の表現としてはふ

さわしくないと考えたものか。

〔歌集における位置について〕

当該の歌は、古今集では恋五に配され、冷たくなってしまった恋人のことを歌ったものとして位置づけられている。新撰和歌では、未だ思いの届かない人のことを歌ったものとして、解釈が変更されている。

【歌意】

「久方の天つ空」でもないのに、あの人は私のことを他人事に思っているようです。

205 たれをかもしる人にせむ高砂の松もむかしの友ならなくに

【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑上 九〇九

【注】

〔誰をかもしる人にせむ〕

初二句は、いわゆる反語の表現で、誰も私を知る人と考えることはできない、という意味である。

〔高砂の松も昔の友ならなくに〕

高砂の松は、長寿を保つものとして歌に詠まれる。そのため、

いたづらに老いにけるかな高砂の松やわが世のはてをかたらむ（貫之集 一九九）

いたづらに世にふるものとたかさごの松も我をやとともみるらん（同 八九七）

などのように、年老いて知己のいなくなった者が、語り合い、友と考える存在となることもある。しかし、その友は、所詮人間ならぬ松であり、寂しさをどうすることもできない。そのため、

ひとりしてよをしつくせば高砂の松のときはもかひなかりけり（貫之集 六六四）

と、高砂の松が、長生きしたことを悲しむ気持ちをもたらすこともある。

このような理解に基づけば、当該の歌は、年老いて、知人の一人も居なくなった寂しさを、高砂の松も慰めてくれることはない、という、孤独を悲しむ心情を表現したものと読み取れるだろう。

〔204番の歌との対応関係について〕

204番の歌は、自分の気持ちにまったく無頓着な人を歌ったものであった。それに対して、205番の歌は、自らの気持ちを伝えたくてもその相手が誰も居ない老いの悲しみ

の歌である。気持ちの通じる人が居ないことを嘆く点で共通している。

【歌意】

いったい誰を私の知人だと考えられようか。私と同じように年老いた高砂の松も昔なじみの友人ではないのに。

206をとにのみきくのしら露よるはをきて昼は思ひにけぬべきものを

【校訂】底本結句「あへすけぬへし」<sup>けぬへきものをイ</sup>。新撰和歌諸本により傍書の方をとる。

【他出文献】古今集 恋一 四七〇

【注】

〔菊の白露〕

「露」は、万葉集以来、はかないものとして歌に詠まれ、当該の歌でも、はかなく消えてしまう我が身を象徴するものとして用いられている。ただ、気になるのは、「菊の露」という言葉続きになっていることである。単なる「露」ではなく、「菊の露」と言ったときには、

露ながらをりてかざさむきくの花おいせぬ秋のひさしかるべく

（古今集 秋下 270）

のように、長寿をもたらすものとして詠まれる。この「菊の露」という表現は、芸文類從に引用する風俗通の「其山上有大菊」。水從山上流下、得其滋液」などに基づき、重陽の行事にちなんで和歌に詠まれるようになったものとされている。なお、中国の詩文には「水」というように表現されたものがほとんどで、「露」そのものが、長寿と関係するといった例は、現在の所管見に入らない。ただ、菅原道真の詩序に

臣聞、…露液流甘…九日優遊…露酌數行、仙窟掌中之飲…

（菅家文章「九日侍宴 同賦天錫難老 應製」の序）

と、風俗通の「滋液」に相当する語として「露液」と言い、また、長命を願って飲む菊酒のことを「露酌」と言う。この語が、道真の発想になるものか、本来漢籍に存していたのかは断じがたいが、こうした表現から、歌語の「菊の露」が生まれたものと考ええる。

当該の歌について、古今集諸注において、この重陽「菊の露」との関連を指摘したものは見出せない。一首全体の趣旨が、恋の苦しみのために死んでしまいそうな思いをしていることを言ったものであるから、なるほど、長寿をもたらす「菊の露」の意をここに読み取ることは、古今和歌集の理解としてはありにくいと思われる。

しかし、新撰和歌の歌としてこの歌を見ると、対にされた207番の歌が七月七日を素材としたものであることから、九月九日の重陽が強く意識されることになる。その結果、一首の趣旨は、長寿をもたらすはずの菊の露なのに、はかなく消えてしまいそうである、という皮肉な状況を表現したものととして受け取ることになる。

「けぬべきものを」

結句の「べきものを」は、

春霞なにかくすらむ桜花ちるまをだにも見るべきものを（古今集 春下 七九）

あかからば見るべきものをかりがねのいづこばかりになきてゆくらん

（後撰集 秋下 四三〇）

のように、「きつとく」になってしまいうものなのに」の意で、それなのに思いを反して物事がうまく運ばない、という文脈で用いられる。

なお、古今集ではこの部分「あへずけぬべし」とある。古今集の本文に比較して新撰和歌では、自分が消え入りそうな思いをしているのに、それなのにあの人に思いを伝えるすべもなく、こうして噂を聞いているばかりである、という気持ちが付加される。

「一首の技法に関して」

通説の通り、この一首は「菊」と「聞く」・「置き」と「起き」・「陽」と「思ひ」のように、掛詞を多用し、忍ぶ恋の苦しさ、自然の景物とを一体化させて詠んだ歌である。古今集の仮名序に「心におもふことを見るものきくものにつけていひいだせる」と言うのは、こうした歌を意識してのことかと思われる。そして、古今和歌集の歌として見たときは、そこでとどまるけれども、新撰和歌の歌としては、前述の通り、万葉集以来の、「露」をはかないものとして詠む伝統的な表現と、漢詩文に由来する、長寿をもたらす「菊の露」との双方を、印象的に組み合わせるものとして理解できる。

【歌意】

あの人のことを音々噂にだけ聞く私は、菊の白露が夜の間にくくように、長い夜は悶々として起き明かしています。そして、その露が菊の露であるならば長寿をもたらすはずなのに、はかないさだめの露が昼は陽光にあらがえず消えるように、昼には苦しい思いに耐えられず、皮肉なことに、この世からあつげなく消えてしまうことでしょう。

207 我うへに露ぞ置なる天の河とわたる舟のかいの雫か

【校訂】なし

【注】

「わがうへに」

「我が上」は、ややわかりにくい表現であるが、

人言の繁き間守りてあふともやなほ我が上に言の繁けむ

(万葉集 卷十一 二五六一)

では、人の噂が立たないように注意している自分に、それなのに我が身の上に噂話がひどくまつわる、ということであろうし、

かぜはやみつまこふなりししかのねをなどわがうへとおもはざりけん

(好忠集 二七八)

は、妻を恋しく思つてなく鹿の悲しさを他人事だと思つていたのに、まさか自分も同じ境遇に置かれるとは思ひもしなかった、という意味であろう。このように、「我が上」は、「ほかでもない、私自身の身の上」というほどの意を表すようである。

「天の川とわたる舟の櫂のしづくか」

下の句の表現は、いつの間にかおいていた露を、彦星が天の川を渡るために舟をこぐ櫂から落ちてきたしづくにたとえたもの。「と渡る」の「と」は、通説の通り、船の通る道筋と思われる。こうした天の川から櫂のしづくが落ちてくるという発想は、新日本古典文学大系『古今和歌集』の指摘する、

この夕降り来る雨は彦星のはや漕ぐ舟の櫂の散りかも (万葉集 卷十 二〇五二) などの古歌に依つたものであろう。

当該の歌はこのような古い表現を利用しながら、上の句で、ほかでもない私の身の上に露が置いたと提示し、その理由を、彦星が天の川を渡っているからだと説明する、上の句で提示した謎を下の句で解くという古今集的な新しい趣向で詠まれたものである。

なお、彦星が川を渡るのは、織り姫に会うためである。ならば、彦星の櫂のしづくが身に添う、ということは、今から恋人に会う彦星の幸せににあやかれる、喜ばしいことであろう。そうした喜ばしいことが、他でもない我が身の上にふりかかってきたと、おどけたような気分をあらわした歌であると考えることができるのではないだろうか。

〔206番の歌との対応関係について〕

双方ともに、露に焦点をあてたものである。206番の露が悲しい露であったのに対して、207番の露が喜ばしい露であるらしいことも好対照で、対にするにふさわしいもの

と思われる。

【歌意】

あれ、ほかでもない私の身の上に露が置いているようだ。ああ、これは、織り姫の元に向けて天の川の通り路を急ぐ彦星がこぐ櫂から落ちてきた雫ではなかるうか。

208 吉野河岩浪たかく行水のはやくぞ人を思ひそめてし

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋一 四七一

【注】

〔吉野川岩波高く行く水のはやく〕

当該の歌の上の句が序詞として、第四句の「はやく」にかかっていることは明らかであるが、下の句の文意が、「(時間的に)早く」人を思ったのか、「速く(激しく)」人と思ったのか、という点で、古今集諸注の見解が一致しない。

前者であれば、上の句はいわゆる無心の序となり、古今集の注釈書のいくつかが述べるとおり、貫之の歌として似つかわしくないように思われる。その意味では、吉野川を激しく流れる水のように、「速く」、すなわち、激しく恋をしてしまった、という有心の序として上の句を考える説の方が魅力的であるように思われる。そしてまた、恋の歌として当該の歌の次に配される

足引の山下水のうつもれて瀧つ心をせきそかねつる

(新撰和歌 二二〇)

が激しい恋心を流れる水にたとえてうたったものであることから、当該の歌の「はやく」は「速く」であると理解すべきと思われる。ただ、この歌と対にされている209番の歌が、「世の中にふりぬるものは」と、時間的な経過を問題にしたものであることからすれば、当該の歌にも、「早く」、ずいぶん以前から、あの人を思っている、という意味をも読み取りたいところでもある。

以上のことから、語法的には「速く人を思ひそめてし」と考えるが、「こんなにも早くから」という気持ちも一首に匂わされているものと見たい。

〔思ひそめてし〕

「思ひそむ」は、単に思い始める、という意ではなく、

あひ見ねばこひこそまされみなせ河なににふかめて思ひそめけむ

(古今集 恋五 七六〇)



のように、いつの間にか深く心に思うようになったことに、今あらためて気づいたという意味を表す。

【歌意】

吉野川の岩打つ波も高くなるほどに激しく流れる水が速いように、ずいぶんと（早い時期から）激しくあの人を深く思うようになったことよ。

209 世中にふりぬるものは津の国のながらの橋と我と也けり

【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑上 八九〇

【注】

〔世の中に古りぬるものは〕

「この世の中で古くなったものと言えは」の意。初二句に「世の中にくものは」と謎かけのような言葉を置き、三句以下で意外な答えを出す趣向の歌が、

よのなかにひさしきものはゆきのうちにもと色かへぬ松にざりける

（貫之集 二七九）

雨ふる日おほはら河をまかりわたりけるに、ひるのつきたりければ

恵慶法師

世の中にあやしき物は雨ふれど大原河のひるにぞありける（拾遺集 雑下 五五〇）

円融院御時三尺御屏風に、花の木のもとに人人あつまりるたる所

かねもり

世の中にうれしき物は思ふどち花見てすぐす心なりけり（同 雑春 一〇四七）

世中にひさしき物は雪のうちにもとのいろかへぬまつにぞ有りける

（古今和歌六帖 四一〇六）

などのように、一つの形式としてあったらしい。当該の歌もそれを踏まえたものだろう。

〔長柄の橋〕

長柄の橋は、

ふるる身は涙の中にみゆればやながらのはしにあやまたるらん

（後撰集 雑一 一一一八 伊勢）

からは、この当時、古びた物として認知されていたらしいことがわかる。そうであるからこそ、

なにはなるながらのはしもつくるなり今はわが身をなにとへむ

(古今集 誹諧歌 一〇五一)

という、長柄の橋が新造されてしまえば、古くなった我が身を喩える物がなくなる、という歌も成り立つのである。

〔208番の歌との対応関係について〕

208番の歌の「はやく」を、注で述べたように、「早く」と解釈すれば、209番の歌の、古くなってしまった、という言葉と内容的に対応する。また、川と橋という景も対にするにふさわしいものである。

【歌意】

世の中で古くなった物と言えど何があるだろう。それは津の国の長柄の橋と私なのでした。

210足引の山下水のうづもれて瀧つ心をせきぞかねつる

【校訂】底本三句「うづもれて」<sup>こかく</sup>。新撰和歌諸本により本文を改める。また底本結句「せきぞかねつる」<sup>ぬイ</sup>。新撰和歌諸本のうち元禄版本系統以外の本には「せきぞかねぬる」とある。ただ、「うかねぬる」という言い方は、どうやら中世以後に定着したものらしく、新撰和歌の本文として認定するには疑問が残るので、底本の傍記はとらない。

【他出文献】古今集 恋一 四九一

【注】

〔あしひきの山下水のうづもれて〕

山下水は、山の麓の川とも、谷間の川とも言われ、実態はよくわからないが、

おとにのみ声をきくかなあしひきの山した水にあらぬものから

(後撰集 恋四 八二三)

からすれば、簡単には川面を見ることのできないものとして理解されていたと思われる。ただその一方で、

人しれずこゆとおもひし足曳の山下水に影はみえつつ(貫之集 一七 拾遺集にも)からは、たとえば落ち葉に覆われて全く隠れてしまったようなものではなく、近寄れば水面のはつきりと見えるものとも意識されていたことがわかる。これらのことと、

君が世にあふさか山のいはし水こがくれたりと思ひけるかな

(古今集 雑体 一〇〇四)

を考え合わせれば、およそ、木の茂みの中を流れる山中の川を指しているものと考えられ

ようか。

さて、そのような川が「うづもれる」とはどのような様子を表しているのか。後のものではあるが、次の例を見てみよう。

俊綱朝臣のいへにて、春やまざとに人をたづぬといふころをよめる

藤原範永朝臣

たづねつるやはかすみにうづもれてたにの鶯一声ぞする（後拾遺集 春上 二三）  
この歌では、深い霞の中の宿のことを「うづもれる」と表現したものである。「うづもれる」は、本来、何か土中などに埋没してしまう様子を表現する言葉であろう。しかし、実際に埋没してしまわなくても、この歌のように、あたかも埋没してしまっているかのごとく感じられる場合に、比喩的に用いるものでもあった。ならば、当該の歌でも、山中の川が、まるで埋もれたかと思うまでに木々が茂っている様子を表していると考えられることができるかもしれない。（ただし、こうした用例が今のところ右に示した後拾遺集以前にさかのぼれないので、あるいは新撰和歌の本文が「こがくれて」であった可能性を全く否定し去ることも難しい。）なお、上の句だけであれば、落ち葉が降り積もって、川が実際に埋もれている様子を表しているとも考えられるが、そうすると、第四句の「たぎつ」とはそぐわなくなる。

「うづもれてたぎつ心をせきぞかねつる」

下の句は「激しいところを押さえることができない」という内容を、川の流れに喩えて表現したものである。

「うづもれて」までが序詞。山中の川が生い茂った木々に埋もれているように、心中深くに埋もれている恋心を…、と続く。なお、第四句は、古今集では「木隠れて」となっている。先に述べたように、「山水」は山中で「木隠れ」た川であるらしいから、古今集の表現は、そのことをそのまま素直に言葉にしたものと考えられる。また、人目につかぬところで恋心を抱くことを、

山かげにつくる山田のこがくれてほに出でぬ恋ぞわびしかりける（貫之集566）  
と、「木隠れて」という言葉で表した例もあるので、言葉続きとしても問題は無い。

それに対して、「うづもれて」では、恋心を心中深くに埋めて、決して人に気づかれないうようにしていると歌う。そのことで、恋心を人に悟られぬようにする辛抱の程度の強さが強調されることになる。

「たぎつ心をせきぞかねつる」は、激しい恋心を押さえることができない、の意。心を

抑えることのできない様を表現するのにこの言葉を用いることは、

なみだ川いづるみなかみはやければせきぞかねつる袖のしがらみ（貫之集 五六二）  
と、貫之自身にも例がある。なお、「たぎつ」は、

いはしみづいはぬものからこがくれてたぎつころをひとはしらなむ

（伊勢集396）

のように、石清水のようなささやかな水量のものでもこの語を用いることから、水量に就いては関知しない表現であることがわかる。当該の歌の場合も、「うづもれてたぎつ」のであるから、表には現れないほどのささやかな量の、しかし、強く沸き返る水を表現している。

#### 【歌意】

山下水が生い茂った木々の葉に埋もれて人知れず湧き出すように、私の胸中に埋もれて人知れず沸き返る恋の心をせき止めることができないことだ。

211ぬきみだす人こそあるらし白玉のまなくもちるか袖のせばきに

【校訂】底本初句「ぬきみだる」。元禄版本の系統以外の新撰和歌諸本により改めた。なお「乱す」という他動詞は、確認できるもつとも早い例が貞観十二（870）年と言われる（時代別国語大辞典上代編）。ならば、業平の歌としては古今集諸本の伝える「みだる（四段活用）」であった可能性が高い。ただ、新撰和歌の歌としてみた場合、新しい言葉「乱す」に、貫之が改めた可能性も考えられる。さしあたりそれ以上の判断の材料を持たないので、本稿の原則に従い、古今集とは異なる方の本文を採用した。

【他出文献】古今集 雑上 九二三

#### 【注】

〔白玉の間なくも散るか袖のせばきに〕

当該の歌のように、白玉は袖で包むものである、という考え方があったらしいことが、あかずしてわかるそでのしらたまを君がかたみとつつみてぞ行く

（古今集 離別 四〇〇）

つつめども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬめの涙なりけり （同 恋二 五五六）

などからわかる。

さて、当該の歌の「白玉」は、古今集の詞書「布引の滝の本にて人人あつまりて歌よみける時によめる」を踏まえるならば、急流の水しぶきを真珠に喩えたものであることがわ

かるが、詞書なしの一首だけでそのように理解するのはいささか無理がある。ただ、当該の歌と対にされた210番の歌が激しく流れる谷川のイメージを描き出したものであることを踏まえるならば、この「白玉」を水しぶきと考えることができる。新撰和歌の歌としては、そのように判断して良いだろう。

なお、この歌は、伊勢物語にも収められ、この当時の人には周知のものだったと思われるから、詞書なしでも滝を詠んだものとして受け取られていた可能性は高かったものと思われる。もちろん、それが新撰和歌の意図とは考えないが。

〔210番の歌との対応関係について〕

双方とも、激しく流れる水の映像を浮かび上がらせる歌である。右に述べたように、そうした理解はこの二首を対にすることで可能になるものである。そのような不即不離の関係が、210番と211番の歌には認められる。

#### 【歌意】

どうやらここには玉の緒を抜いて乱す人がいるらしい。おかげで滝のほとりに白玉が間断なく散ることよ。白玉を拾って包む袖が狭いのに。

212時鳥なくや五月のあやめぐさあやめもしらぬ恋もする哉

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋一 四六九

【注】

〔ほととぎす鳴くや五月のあやめ草〕

上の句は「あやめ草」と同音の第四句「文目<sup>あやめ</sup>」を起こす序詞である。なお、初二句の構造は、「「さ月」にかかる連体修飾語の終わりに詠嘆の「や」を添えた言い方」（日本古典文学大系『古今和歌集』）という説明が当たっているように思われる。

この歌の序は、もとは、「五月五日におくる歌に用いなければ役に立たないであろう」（日本古典文学大系『古今和歌集』）もので、実際その日に送られた歌であったに相違ない。序詞に描かれた情景も、当日の属目の景であり、恋の心情に重ねられるイメージをするものではなかったと考えられる。

〔あやめも知らぬ恋もするかな〕

すでに指摘されるとおり、

高座の三笠の山に鳴く鳥のやめば継がるる恋もするかも（万葉集 卷三 三七三）

をみなへし佐紀沢に生ふる花かつみかつても知らぬ恋もするかも

(同 卷四 六七五)

かほ鳥の間なくしば鳴く春の野の草根の繁き恋もするかも (同 卷十 一八九八)  
言に出でて言はばゆゆしみ朝顔のほには咲き出ぬ恋もするかも

(同 卷十 二二七五)

ゆふづく夜さすやをかべの松のはのいともわかぬこひもするかな

(古今集 恋一 四九〇)

わがそのの梅のほつえに鶯のねになきぬべきこひもするかな (同 恋一 四九八)

よひのまもはかなく見ゆる夏虫に迷ひまされるこひもするかな (同 恋二 五六一)

河のせになびくたまものみがくれて人にしられぬこひもするかな

(同 恋二 五六五)

等々、「トイウ恋もするかも(な)」という定形のパターンの歌が、奈良時代以来多く詠まれている。ことに、右にあげた万葉集卷四の歌などのように、花の名前を掛詞にして構成している、当該の歌ときわめて類似する例も見られる。このことからすれば当該の歌は、古くからある発想でよまれた、古風な歌いぶりのものとして受け取られていた可能性が高いだろう。

〔歌集における位置について〕

当該の歌は、古今集では恋部の巻頭に配されている。古今集では「あやめも知らぬ」道理に合わない感情を抱くことが、恋のはじめとされるわけであるが、新撰和歌では、すっかり思いを染めてしまうことが「あやめも知らぬ恋」とされるのである。

【歌意】

ほととぎすが鳴く五月に咲くアヤメ。そのアヤメと同じ音の「文目」<sup>あやめ</sup>もわからない、道理に合わない恋をすることよ。

213 たがみそぎゆふつけ鳥かから衣立田の山にをりはへて鳴

【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑下 九九五

【注】

〔ゆふつけ鳥〕

「ゆふつけ鳥」がどんな鳥であるのかは不明。「木綿をつける鳥」というのが通説とさ

れるが、これも確認のしようはない。ただ、そのように考えられるならば、この歌の初二句は「誰のみそぎの木綿をつけた鳥か」と、文意が理解しやすい。

〔唐衣たつたの山に〕

「唐衣」は、「たつ（裁つ）」にかかる枕詞。当該の歌では「たつ」という音を含む「竜田山」にかかっている。

〔をりはへて〕

これも難解としか言いようがない。今は通説にしがたい、「続けて」の意としておく。

〔2 1 2 番の歌との対応関係について〕

2 1 2 番の歌は、ほととぎす。2 1 3 番の歌は、ゆふつけ鳥と、共に鳥の名称を含んだものである。また、2 1 2 番の歌の上の句が「あやめ」という同音を利用して第四句の「文目」をおこす序詞になっていることと、2 1 3 番の歌の初句「みそぎ」が「木綿」につながり、そして「ゆふつけ鳥」を掛詞的（この歌の初句を「ゆふ」にかかる枕詞と見る説もある。今は序詞とも掛詞とも判断はしかねるが、どちらと見ても「ゆふ」という同音をもちいた技法である点は変わりない。）に引き出す序詞であることも共通している。

【歌意】

誰のみそぎのための木綿をつけたゆふつけ鳥なのか。竜田山でずっと鳴いているよ。

214 津の国のむろの早わせひでず共つなをはやはへもるとするべく

【校訂】底本三句「ひてす共」。新撰和歌諸本により改める。また底本四句しめをははへよ「つなをはやはへ」。【注】の項で述べるように、もとの本文は「つなをはやはへ」であ

ったと考えられる。新撰和歌諸本では、「つなをははやく」（群書類従本・松平文庫本等）、「つなをはやはゝ」（祐徳神社蔵中川文庫甲本、乙本・天理図書館蔵本等）などとするものもあるが、いずれも「つなをははやへ」の「へ」を「く」と誤写したものとみて説明が可能であるように思う。

【他出文献】古今和歌六帖 二六〇八・夫木和歌集 一五四九一・歌枕名寄 四五二九

【注】

〔津の国のむろの早わせ〕

「早稲」は早く実る稲のこと。十卷本和名抄に「稲 唐韻云稲（徒皓反 以称早稲 和世 晚稲 比禰）」とあるのが意味の確認できる早い例とされる。その「早稲」を「はや」という言葉で修飾する「はや早稲」という語は、早稲の中でもことに早く実るものを

意味するか、としか、現段階では考え得ない。

では、「むろの」は何を意味するであろうか。日本国語大辞典(第二版)では、「むろのはやわせ」の説明として、「室の中で苗を育てたため収穫の早い稲」とする。確かに、

三番 左勝 藏人修理亮藤惟綱(隆資歌敷)

早苗

五月雨に日は暮れぬめり里遠み山田の早苗取りも果てぬに

右 少納言源信房

早乙女の山田の代に下り立ちて急げや早苗室のはや早稲 (栄華物語 根あはせ)

は、「むろのはや早稲」はあつという間に実るのだから急いで早苗を植えよ、と早乙女に言っていると理解できるので、日本国語大辞典の説明で矛盾はしない。他にも、藤原定家の、

種まきし室のはやわせおいにけりおりたつ田ごの雨もしみみに

(拾遺愚草 五二六「夏」)

も、種籾をまいた「むろのはや早稲」が「おいにけり」と驚きの気持ちを含みつつ述べているが、きわめて早く成長する稲だから、その成長具合に驚く、という表現が成り立つのだろう。同じ定家の

をやま田のむろのはやわせとりあへずそよぐいなばの比やまつらん

(拾遺愚草 二〇九九)

は、月次の屏風の四月の「早苗」の歌として詠まれたものであるが、田植えの時期としては早い、四月に早苗を植えて、植えるやいなやもう「そよぐ稲葉のころ」を待つ、ということであるから、やはり「むろのはや早稲」が特別に早く実る稲を指すと考えられていたと見て差し支えなからう。

しかし、当該の歌ではいかがであろうか。「むろのはやわせ」を一つの言葉とみては、どうにも違和感が残るのであるが、それは、初句が「津の国の」とあることによる。

つのくにのなにはのあしのめもはるにしげきわがこひ人しるらめや

(古今集 恋二 六〇四)

世中にふりぬる物はつのくにのながらのはしと我となりけり (同 雑上 八九〇)

君を思ふふかさくらべにつのくにのほり江見にゆく我にやはあらぬ

(後撰集 恋一 五五四)

ここには新撰和歌前後の時代の「津の国の」と詠まれた和歌の例を挙げたが、「津の国



の」に下接するのは、みな、その土地の地名である。もちろん、津の国以外であっても、国名を和歌に詠むときは、基本的に

きのくにのなぐさのはまは君なれや事のいふかひ有るとききつる

(後撰集 雑三 一一二二三)

やましろのいはたのもりのははそはらみつつやいもがいへぢゆくらん

(伊勢集 四〇〇)

のように、下にその国内の地名が詠まれる。こうした詠み方が通常であるから、「津の国のむろのはやわせ」という言葉続きは、「ムロ」が津の国の地名であってはじめて落ち着くのである。

また、後述するように、当該の歌は若い娘を稲に喩え、稲田に縄を張って守ることを、娘に他の男を近寄らせないことに喩えた歌であるが、「むろのはやわせ」という言葉全体で、娘のことを喩えるとしたら、「津の国のむろのはやわせ」は、「津の国の娘」ということになり、これも、他の男が近寄らないように守ろうとしている娘にしては、範囲が漠然としすぎていて違和感が残る。やはり「津の国のムロ」という土地に住む、ある一人の娘の比喩として「津の国のむろのはやわせ」と表現しているのだと考えた方が、無理が少ないのではないか。

ところで、当該の歌は、古今和歌六帖と夫木和歌集にも収められているのだが、それらの伝本のうちに初句を「紀の国の」とするものがある。

紀伊の国の「牟呂」は、

おなじ男紀の国にくだるに、「寒し」とて、衣をとりにおせたりければ、女、

紀の国のむろの郡にゆく人は風の寒さもおもひしられじ

かへし、男、

きのくにのむろの郡にゆきながら君とふすまのなきぞわびしき

(大和物語 八十八段)

にも見られるように、早くから和歌にも詠まれる地名であった。したがって、古今和歌六帖や夫木和歌集の当該の歌の初句を「きのくに」とする伝本は、もともと「津の国のむろ」とあったものを、有名な紀伊の国の「牟呂」に惹かれて誤写あるいは改変したものであると考えられる。その逆の可能性は、「津の国のむろ」が知られていないのだから、ほぼ考えられない。

さて、この現象は、「ムロ」を地名とみたからこそ、地名「むろ」にふさわしい国名を

「紀の国」に求めて生じたものである。言い換えると、「津の国のむろ」の「ムロ」を地名だと考えた人が、実際に居たということである。

ここまで、新撰和歌の当該の歌に関しては、「むろのはや早稲」が、特別な早稲という意味を持つ、一つの歌語として機能しているのではなく、「津の国のムロ」という土地の田に植えられた「はやわせ」という意味で用いられているのではないかということ述べてきた。ただし、「津の国のムロ」という地名が一般的なものではなかったために、それが理解されなくなり、後の時代になると「むろのはや早稲」で一つの名詞として認知されるようになった。そのようにして定着した言葉を定家たちが歌に詠んだ、ということではないだろうか。

〔ひでずとも縄を早延へ〕

この表現は、

石上布留の早稲田を秀でずとも縄だに延へよ守りつつ居らむ

(万葉集 卷七 一三五三)

あしひきの山田作る児秀でずとも縄だに延へよ守ると知るがね

(同 卷十 二二一九)

あしひきのやまだのいねはひでずともつなをばやらへもるとしらなん

(家持集 一二三七)

などの、若い娘をまだ実らぬ稲に、娘と結ばれることを望む男を田を守る人物に喩える、古くからのパターンによるものである。右にあげた万葉集卷七の歌の上の句と卷十の歌の下の句を組み合わせれば、当該の歌がほぼできあがることからしても、一首は古風な、昔ながらの発想に基づいた歌であったことがわかる。

【歌意】

津の国のむろにある田に植えられたはや早稲は、あつという間に実るのであるから、今穂が出ていなくても、綱を早く張りなさい。この田はあなたが守っているとわかるように。この娘は、すぐに大人になるのですから、はやく約束してしまいなさい、あなたがいいなづけであるとわかるように。

215 難波がたしほみちくればあま衣たみのゝしまに田鶴鳴わたる

【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑上 九一三

【注】

〔あまごろも田蓑〕

「あまごろも」は、通説では「雨具としての衣」の意味で「田蓑」にかかる枕詞とされる。「田蓑」の実態はわからないが、

なにはへまかりける時、たみのしまにて雨にあひてよめる

つらゆき

あめによりたみのの島をけふゆけど名にはかくれぬ物にぞ有りける

（古今集 雑上 九一八）

つのくにのたみののしま、すはまにうゑたるきくのしたに、をむなそ

でをかさにきて、かひひろふかたしたり

たみのともいまはもとめじたちかへりはなのしづくにぬれむとおもへば

（寛平御時菊合 五）

などの例から、「たみの」が雨具の名として貴族たちに認知されていたことは確認できる。

〔潮満ちくれば〕

第二句は、古今集では「潮満ちくらし」。新撰和歌の本文は、

本

奈仁波加太 志保見知久礼波 阿万古呂毛

末

安万古呂毛 多見乃々志万尔 多津多地和太留 （神楽歌 大前張）

という神楽歌によったものかと思われる。さて、新撰和歌のよった本文が神楽歌であるならば、新撰和歌が、古今集の歌よりも古い形の本文を選択したのだと思われるのであるが、

桜田へ鶴鳴き渡る年魚市潟潮干にけらし鶴鳴き渡る （万葉集 卷三 二七一）

若の浦に潮満ち来れば潟をなみ葦辺をさして鶴鳴き渡る （同 卷六 九一九）

のように、万葉集の類想の歌に「満ち来らし」「満ち来れば」ともに確認できることから、この鶴の歌に関しては、いずれが古体とも判断のつかないものであった可能性も高い。またそれとは別に、古今の仮名序でも賞賛する赤人の「わかか浦に」の歌の本文に近い方を、新撰和歌は選択した、ということも考えてよいように思われる。

〔214番の歌との対応関係について〕

214番の「津の国」の歌に、やはり津の国の田蓑の島の歌をつがえたものと思われる。また、双方の歌共に、万葉風の発想による古風な歌であることも指摘できる。

【歌意】

難波潟に潮が満ちてくると、田蓑の島に鶴が鳴いて渡っていくよ。

216 夕されば雲のはたてに物ぞ思ふ天津空なる人をこふとて

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋一 四八四

【注】

〔夕されば〕

初句は古今集では「夕暮れは」とある。「夕されば」の古今集での用例は、

ゆふされば衣手さむしみよしののよしのの山にみ雪ふるらし（古今集 冬 三一七）

ゆふさればいとどひがたきわがそでに秋のつゆさへおきそはりつつ

（同 恋一 五四五）

ゆふされば螢よりけにもゆれどもひかり見ねばや人のつれなき（同 恋二 五六二）

夕されば人なきとこを打ちはらひなげかむためとなれるわがみか

（同 恋五 八一五）

と、皆初句にこの言葉が置かれている。それに対して、「夕暮れは」は、

ひぐらしのなく山里のゆふぐれは風よりほかにとふ人もなし

（古今集 秋上 二〇五）

唐衣ひもゆふぐれになる時は返す返すぞ人はこひしき（同 恋一 五一五）

こめやとは思ふものからひぐらしのなくゆふぐれはたちまたれつつ

（同 恋五 七七二）

のように、初句に置かれることはない。古今集以外に搜索の範囲を広げても、「夕暮れは」で始まる歌は少ない。実は、当該の歌は古今和歌六帖にも収められており、初句は「夕されば」である。どうやらこの時代には、「夕暮れは」で始まる和歌は、例の少ない、新しいものであり、古今集は積極的にその新しい表現を採用した、ということであったかと思われる。それに対して、新撰和歌は、古くからの耳慣れた表現である「夕されば」の本文を採用した、もしくはそうした本文に改めたのである。

〔雲のはたてに物ぞ思ふ〕

「はたて」の意味は、万葉集卷八（一四二九）の長歌に見られる「国のはたて」を根拠に「果て・周縁」とみる通説の通りと思われる。そして「雲のはたてに物ぞ思ふ」という

表現で言い表そうとしているのは、

逢ふ事はくもゐはるかになる神のおとにききつつこひ渡るかな

(古今集 恋一 四八二)

業平朝臣きのありつねがむすめにすみけるを、うらむることありてし  
ばしのあひだひるはきてゆふさはかへりのみしければよみてつかは  
しける

あま雲のよそにも人のなりゆくかさすがにめには見ゆるものから

返し

なりひらの朝臣

ゆきかへりそらにのみしてふる事はわがゐる山の風はやみなり

(同 恋五 七八四・七八五)

葦辺より雲をさして行く雁のいやとほざかるわが身かなしも(同 恋五 八一九)  
など、思いの通じない距離の遠さを表すのに、「雲」を持ち出す発想の歌があることから  
して、どうにも思いの届かない状態で物思いをする、ということかと思われる。

〔あまつ空なる人〕

「天つ空なる人」は、自分に手の届かない人の意。古今集の諸注のうちには、身分が高  
くて手の届かない人、と見る説もある。

新撰和歌では、対にされた217番の歌が、五節の舞姫を天女に喩えたものであること  
から、この歌の「天つ空なる人」も、字義通り、天上に住んでいる人の意であり、天人の  
ような、とても手の届かぬ人を思っている、ということの喩えとして用いられていると考  
えられよう。

【歌意】

夕暮れになると、雲の果てに向けて物思いをする。天上世界に住む人のように、はるか手  
の届かない人に恋するとして。

217 天津かぜ雲の通路吹とちよをとめのすがたしばしとゞめむ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑上 八七二

【注】

〔雲の通ひ路〕

「雲の通ひ路」は、古くは「雲の中を通りて天へいぬる道」(『古今和歌集遠鏡』)と

考えられることが多かったが、近年は雲の往来する道、とする注釈書が多い。

ただ、当該の歌の第三句に「吹き閉じよ」とあることから、その「通ひ路」が、隧道か谷間の隘路のような、細い、簡単に閉じてしまえるような通路であることを思わせるが、その点から言えば、「雲の通ひ路」を、雲の中の一本の道とみる、旧来の説も捨てがたい。よってしばらく判断を保留する。

〔しばしとどめむ〕

結句の「留めむ」の主語は詠歌主体で、「（自分が乙女を）留めよう。だから、天つ風よ、雲の通い路を吹き閉じろ」と天つ風よりも上位の立場で風に命令している体の歌と見る。なお、古今集の詞書に依れば、これは豊明節会での詠作であるから、天つ風に命令するというのも、天皇のもと、宮中に集う貴族たちの、誇らかな雰囲気を反映した表現かと思われる。

〔216番の歌との対応関係について〕

216番の歌の「あまつ空」と、この歌の「あまつ風」が対にされている。また前者の、天上世界の手の届かぬ存在に対して絶望と悲しみの気持ちを抱いている様子に対して、後者が尊大ともうけとれる態度で天上の風に命じている様子のコントラストもおもしろい。

【歌意】

天の風よ、乙女たちの通う「雲の通い路」を吹き閉じよ。乙女の姿をいましばしここに留めようぞ。

218 立かへりあはれとぞ思ふよそにても人に心をきつ白波

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋一 四七四

【注】

〔立ち返り〕

「立ち返る」という言葉については、103番の歌の【注】参照。当該の歌の場合、「波」の縁で用いられていることと、そもそも一首の趣旨として「元に戻る」とは考えにくいことから、「何度も何度も繰り返し」と理解される。

〔よそにても〕

秋ぎりはけさはなたちそさほ山のははそのもみぢよそにても見む

（古今集 秋下 二六六）

と同じく「遠くに居て」「遠くから」の意。

〔人におきつ白波〕

「おき」は「心を置き」と「沖つ白波」の掛詞。「心を置く」は、ある人や物が心から離れなくなった状態をいうが、自分の心が自分の意のままにならず、思う人や物に依存し任せる場合に用いられるようである。

やよひばかりに物のたうびける人のもとに又人まかりつつせうそそす  
とききてつかはしける

露ならぬ心をおきおきそめて風吹くごとに物思ひぞつく（古今集 恋二 五八九）  
は、浮気をした相手のことを「花」と喩え、自分の心は自分ではどうしようもなく、ただあなたが揺れるごとに、あなたの振る舞いに支配されて悩むばかりだ、と言っている。

本院のひむがしのたいの君にまかりかよひて、あしたに

大納言源きよかげ

ふたつなき心は君におきつるを又ほどもなくこひしきやなぞ

（拾遺集 恋二 七二二）

は、私の心はあなたに置いて任せてきたから、何の不安もないはずなのに、すぐに恋しくつらくなるのはなぜでしょう、と言う。このように、心を置いた相手に、自分の気持ちが支配されるのである。

そして、このように「心を置く」が理解できるならば、そうした状況に陥った人物が抱く「あはれ」という感情は、相手に対する愛おしさよりも、心奪われたつらさや切なさ、不安に由来する心情であろうと考えられるだろう。

〔沖つ白波〕

「沖つ白波」は、

海のほとりにて、これかれせうえうし侍りけるついでに こまち

花さきてみならぬ物はわたつうみのかざしにさせるおきつ白浪

（後撰集 羈旅 一三六〇）

のように、沖合で白く砕ける波であり、

住の江の松を秋風吹くからにこゑうちそふるおきつ白浪（古今集 賀 三六〇）  
のように、遠くからでも波音の聞こえるものとして和歌に詠まれる。当該の歌の場合、遠くにいて、音ばかりを聞く、というイメージが重ねられていると見たい。

【歌意】

難度も何度も「ああ切ない」と思います。遠くに居てもあの人に心奪われたので。沖の白波を遠くから眺めるように。

219 こきちらす瀧のしら玉ひろひをきてよのうき時の泪にぞかる

【校訂】底本初句「こきちらし」。このままでは意味が通じにくいので、群書類従本、天理図書館本等により改める。

【他出文献】古今集 雑上 九二二

【注】

〔世のうき時の涙にぞ借る〕

白玉のような滝の水しぶきをためておいて、涙の代用とする、という当該の歌の表現は、水滴を白玉に、白玉を涙に、という二つの見立てを同時に用いた、ごく機知的なものである。

当該の歌に類似する例が後撰集に見える。

あさごとにおくつゆそでにうけためて世のうき時の涙にぞかる

（後撰集 秋中 三二五 読人知らず）

当該の歌といずれが先行するかはわからないが、こちらの歌の表現や、また、

みよしのの山のあなたにやどもがな世のうき時のかくれがにせむ

（古今集 雑下 九五〇）

と比較すれば、激しく流れる滝の鮮烈なイメージと世の憂き時の涙という陰鬱な気分とのコントラストを際立たせた、当該の歌の発想のおもしろさがよくわかる。

〔218番の歌との対応関係について〕

218番の歌の「沖つ白波」と219番の歌の「瀧の白玉」が対照的な表現と思われる。さらに、二首共に初句が動詞で始まっており、また、字余りの句を含む。このため読み上げたときの語調も似通っていると感じられる。

【歌意】

しごき落として散らす滝の水しぶきの白玉を拾っておいて、世の中がづらいときの涙に借ります。

220 河の瀬になびく玉ものみかくれて人に知られぬ恋もする哉

【校訂】なし



【他出文献】古今集 恋二 五六五

【注】

〔川の瀬になびく玉藻の水隠れて〕

上二句は「隠る」を起こす序詞。序の部分に用いられた「なびく」という語は、恋の文脈で用いられる場合、

波のむたなびく玉藻の片思ひに我が思ふ人の言の繁けく

(万葉集 卷十二 三〇七八)

おもふよりいかにせよとか秋風になびくあさぢの色ことになる

(古今集 恋四 七二五)

女に物いふをとこふたりありけり、ひとりが返事すとききて、いまひ

とりがつかはしける

なびく方有りけるものをなよ竹の世にへぬ物と思ひけるかな

(後撰集 恋五 九〇六)

ともすればあだなるかぜにさぎ波のなびくてふごとわれなびけとや (小町集 七四)

などのように、誰かに対して心寄せていることを表している場合がほとんどである。当該の歌でも、「人」に心を寄せている、つまり、片思いをしていることを象徴していると見られる。

【歌意】

川の瀬でなびく玉藻が水に隠れているように、隠れて思いを寄せるあの人に知られない恋をすることだ。

221 いくばくもあらじうき身をなぞもかく海士のかるもに思ひみだるゝ

【校訂】底本初句「いくはくも」。新撰和歌諸本により本文の方をとる。底本二句「あらじうき身<sup>わか</sup>を」。新撰和歌諸本で「うきみを」と「わがみを」が混在するが、本稿の原則に従って、古今集とは異なる方の本文をとる。底本四句「海士のかるもの<sup>に</sup>」。新撰和歌諸本

により傍記をとる。

【他出文献】古今集 雑下 九三四

【注】

〔いくばくもあらじ憂き身を〕

初句は古今集では「いく世しも」となっている。新撰和歌の「いくばくも」は、万葉集

に、

いくばくも生けらし命を恋ひつつぞ我は息づく人に知らえず

(万葉集 卷十二 二九〇五)

と、表現の類似する歌がある。あるいは、新撰和歌は、そのような古風な詠みぶりの歌として当該の歌を収めたものか。

また、二句も古今集の「あらじ我が身を」から改変したものと見ておきたい。さて、「憂き身」は、

水のあわのきえてうき身といひながら流れて猶もたのまるるかな

(古今集 恋五 七九二)

流れての世をもたのまず水のうへのあわにきえぬるうき身とおもへば

(後撰集 雑一 一一一五)

のように、「憂き」が「浮き」と同音であることから、水の泡と関連して詠まれることがある。当該の歌では、下の句が海辺の景であるので、それ響き合うものとして「憂き身」を選んだ可能性もあるだろう。

〔海人の刈る藻に思ひ乱るる〕

「海人の刈る藻」は、「乱る」を起こす序。

今日もかも沖つ玉藻は白波の八重折るが上に乱れてあるらむ

(万葉集 卷七 一一六八)

おきへにもよらぬたまもの浪のうへにみだれてのみやこひ渡りなむ

(古今集 恋一 五三二)

のように、「藻」がそもそも乱れるものとして詠まれることに依る。

〔220番の歌との対応関係について〕

220番の歌の「なびく玉藻」と221番の歌の「海人の刈る藻」が対になっている。

【歌意】

どれほども生きてはいないだろうこの憂き身なのに、どうしてこのように、海人の刈る藻のように思い乱れるのか。

222 住江の浪にはあらねどよとゝもに心を君によせわたる哉

【校訂】底本四句「心を君か」。このままでは意味が通じにくいので、群書類従本、天理図書館本等により改める。

【他出文献】貫之集 六二四・後撰集 恋二 六三八

【注】

〔住之江の〕

「すみのえ」という地名には、

ひさしくもなりにけるかなすみのえの松はくるしき物にぞありける

（古今集 恋五 七七八）

住吉の岸のひめ松人ならばいく世かへしとはましものを（同 雑上 九〇六）

のように、「久し」「幾代」などの、長い時間を表す言葉が取り合わされることがしばしばあり、悠久というイメージを伴うものであったことが推測される。当該の歌でもそうしたイメージを持つ土地としてすみのえが提示され、したがって「世とともに…よせわたる」ということばと「あらねども」で結びつけられているのである。

〔よとともに〕

世が移りゆくのと共に、の意。

世とともに流れてぞ行く涙河冬もこほらぬみなわなりけり（古今集 恋二 五七三）

松をのみときはとおもへばよとともになるる水も緑なりけり（貫之集 一一八）

よとともに行きかふ舟をみるごにほに出でて君を千とせとぞおもふ（同 一六六）

のように、いつまでも、という気持ちを込めて用いる。特に右にあげた貫之集の二例では、「ときは」や「千歳」という言葉とともに用いられ、「よとともに」に、永遠に変わらぬ、という文脈で用いられることがわかる。そのくらい、長い間ずっと、という気持ちである。

【歌意】

いつまでも寄せては返す住の江の波ではないが、いつまでもずっと心を君に寄せ続けることよ。

223 和田の原よせくる浪の立かへりみまくのほしき玉津島かな

【校訂】底本三句「立しはくもかへり」。新撰和歌諸本により本文の方をとる。底本結句「玉津島かも」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】古今集 雑上 九一二

【注】

〔立ち返り〕

第三句は、古今集では「しばしばも」とある。新撰和歌103番の歌の【注】で述べた

ように、「立ち返り」は、「しばしば」と意味が近いので、歌意を変えないようにして「波」と縁の深い言葉に改めたものと見る。なお、「しばしばも」は、

つばらにも 見つつ行かむを しばしばも 見放けむ山を… (万葉集 卷一 一七)

しばしばも相見ぬ君を天の川舟出はやせよ夜のふけぬ間に (同 卷十 二〇四二)と、万葉集には見られるが、平安時代の使用例は少ない。和歌表現としては古めかしいものかと思われる。当該の歌の結句が古今集では「玉津島かも」となっているが、これを新撰和歌では「かな」としている。古風な終助詞「かも」を当世風に改めたのであるが、「しばしば」から「立ち返り」への改変も同じ趣旨によるものと思われる。

〔玉津島かな〕

「玉津島」は、万葉集で、

玉津島よく見ていませあをによし奈良なる人の待ち問はばいかに

(万葉集 卷七 一二一五)

玉津島見てし良けくも我はなし都に行きて恋ひまく思へば (同 一二一七)

と、玉津島見れども飽かずいかにして包み持ち行かむ見ぬ人のため (同 一二二二)

と、見たいものとして詠まれる。それがそのまま、当該の歌でも用いられている。

〔222番の歌との対応関係について〕

「波」と「寄す」の結びつきの強さを利用した表現を用いて詠まれた222番の歌に、

「寄せ来る波」を詠んだ223番の歌を対にしたものと思われる。また難波の「住の江」

・紀の国の「玉津島」という大阪湾岸の土地の名を読み込んでいる点も共通している。

【歌意】

大海原を寄せてくる波が立つ、ではないが立ち返り幾たびも目にしたい玉津島であるよ。

224 あさき瀬ぞ浪は立らんよしの河深き心を君はしらずや

【校訂】底本初句「あさき瀬<sup>や</sup>」。新撰和歌諸本により本文の方をとる。

【他出文献】新拾遺集 恋一 九三七

【注】

〔浅き瀬ぞ波はたつらん〕

浅い瀬に立つ波は、恋の歌においては、

そこひなきふちやはさわぐ山河のあさきせにこそあだなみはたて

(古今集 恋四 七二二)

のように、心の浅さと、その浅さゆえの浮気心等を暗示するものとして用いられる。

〔吉野川深き心〕

吉野川は、通常、

吉野河いは浪たかく行く水のはやくぞ人を思ひそめてし（古今集 恋一 四七一）

吉野河いはきりとほし行く水のおとにはたてじこひはしぬとも（同 四九二）

に見えるように、水の流れが早いものとして詠まれ、深い、ということには関わらない。当該の歌では、そうした吉野川のイメージを逆手にとって、吉野川の浅い瀬ではなるほど波が立っているだろうよ。しかし、その実、内に秘めた深い心を、あなたは知らないのですか。と言ったものと思われる。なお躬恒に、吉野川の深い心を歌った例がある。

延喜三年十月十九日、おほせによりてうたみつたてまつる、女一のみ

この裳きたまふときに、うちよりさうぞくたまふ、そのもにみづぐき

かたきにすれるうた

ながれいづるやまをしおもへばよしのがはふかきこころもたえむものかは

（躬恒集 一）

これも、深いと思われぬ吉野川も深い山から流れているのだから、実は深い心を持つのだ、と吉野川の通常のイメージを逆手にとったものである。

〔深き心を君はしらずや〕

古今集に、

うき草のうへはしげれるふちなれや深き心をしる人のなき（古今集 恋一 五三八）

よど河のよどむと人は見るらめど流れてふかき心あるものを（同 恋四 七二一）

のように、深い恋心があってもなかなかそれが相手に伝わらないことを詠む歌がある。これらの歌は、水面に浮き草が茂っているために淵の水の深さがわからない、あるいは、川がよどんでいるように見えるため流れがわからない、と、物事の正体・本質が伝わりにくい理由を述べることで、一首の趣向の中心である。当該の歌も同様の発想で、吉野川の深い心が人にわかってもらえない理由として、浅い瀬に波が立っていることを述べたものである。

【歌意】

吉野川の浅い瀬では波が立っているでしょう。そのように、私のことをあだ人だと思っ  
ているでしょう。しかし、その実、内に秘めた深い心を、あなたは知らないのですか。

225 わたつ海のかざしにさせる白妙の浪もてゆへる淡路しまかな

【校訂】底本結句「淡路しま山」。新撰和歌諸本で「島山」と「島かな」が混在するが、本稿の原則に従って、古今集とは異なる方の本文をとる。

【他出文献】古今集 雑上 九一一

【注】

〔わたつ海のかざしにさせる白妙の波〕

当該の歌との前後関係は不明であるが、後撰和歌集に、

海のほとりにて、これかれせうえうし侍りけるついでに こまち

花さきてみならぬ物はわたつうみのかざしにさせるおきつ白浪

（後撰集 羈旅 一三六〇）

という歌が見られることからすると、この当時、白波のことを「わたつ海のかざし」と表現することがあったかと推測される。

〔波もてゆへる〕

肥人の額髪結へる染木綿の染みにし心我忘れめや （万葉集 卷十一 二九四六）

の「額髪結へる染木綿」は、鉢巻きのことを指すという。当該の歌でも、淡路島の周りを鉢巻きのように白波がぐるりと取り巻いていることを表すと考えられよう。

〔淡路島かな〕

結句は、古今集では「淡路島山」とある。「島山」という表現は、この古今集歌を踏まえた歌以外に見いだしがたい。そのような特殊な言葉を、新撰和歌が一般的な表現に言い換えたものか。

〔224番の歌との対応関係について〕

224番の歌で詠まれた吉野川と波に対して、淡路島と波を歌う225番の歌をつがえた。た。

【歌意】

海神がかざしにして頭に刺している真っ白な波でもってぐるり周りを結び上げる淡路島よ。

226 心がへするものもがかた恋はくるしきものと人にしらせん

【校訂】底本二句「するものにかも」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】古今集 恋一 五四〇

【注】

「心がへするものにもが」

心を通わせるのではなく、心を取り替える、という他に例の見られない発想が一首の趣向の中心である。こうした発想の背景には、心は本来人それぞれのもので、通じ合うものではない、という考えがあるろう。

【歌意】

心の取り替えができるものであってほしい。そうして、片恋は苦しいものだとの人に知らせましょう。

227 みな人は心かくにあるものををしひたすらにぬるゝ袖哉

【校訂】なし

【他出文献】不明

【注】

〔皆人は〕

「みなひと」は、すべての人、の意であるが、

深草のみかどの御時に蔵人頭にて夜昼なれつかうまつりけるを、諒闇  
になりになれば、さらに世にもまじらずしてひえの山にのぼりてかし

らおろしてけり、その又の年みなひと御ぶくぬぎて、あるはかうぶり

たまはりなどよろこびけるをききてよめる 僧正遍昭

みな人は花の衣になりぬなりこけのたもとよかわきだにせよ（古今集 哀傷 八四七）  
のように、自分以外の人たちすべて、という意味で用いられることがほとんどである。

〔心ごころに〕

「心ごころ」は、

あるは花をそふとてたよりなき所にまどひあるは月をおもふとてしるべなきやみにた  
どれる心心を見給ひて、さかしおろかなりとしろしめしけむ、（古今集 仮名序）  
からわかるように、それぞれの人の心、の意。

なくむしのひとつこゑにもきこえぬはこころごころにもはやかなしき

（詞花集 秋 一一〇 和泉式部）

よの人のこころごころにありければおもふはつらしうきはたのまる

（古今和歌六帖 二六二二「あひおもはぬ」）

おなじごころにとあるかへりごと

きみはきみわれはわれとも隔てねばころごころにあらんものは

(和泉式部集 四一〇)

などのように、人それぞれが無関係に、それぞれの思いでいる状態を表すのに用いられることが多い。

「おしひたすらに」

「おしひたすらに」は、非常に珍しい表現らしく、当該の歌を利用したと思われる、

さまざまにおもふ心はあるものをおしひたすらにぬるるそでかな

(後拾遺集 恋四 八一七 題知らず 和泉式部)

と、

あひがたくてあひたりける女に

つらさにもおちし涙の今はただおしひたすらに恋しかるらん (長秋詠草 三二二)

くらいしか見いだせない。この三例から推定するに、「おしひたすら」は、「ただひたすら」というほどの意味かと思われる。なお、「押し浸す」という状態を暗示する(新日本古典文学大系『後拾遺和歌集』)という説もあるが、当該の歌に当てはめる必要はないように思われる。

〔226番の歌との対応関係について〕

いずれの歌も、それぞれならばらで、通じ合っていない「心」を詠んでいる。

【歌意】

私以外の人は皆、それぞれの気持ちでいるのに、ただひたすらにぬれる私の袖であるよ。どうして私だけがこんなに悲しいのか。

228 みちのくの浅香の沼の花かつみかつみる人を恋やわたらん

【校訂】底本四句「かつみる人に」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】古今集 恋四 六七七

【注】

〔みちのくの浅香の沼の花かつみ〕

花かつみの実態に関しては、古来議論があるが、わからないとしか言えない。ただ、第四句の「かつ見る」を導く序であることを指摘するにとどまる。

〔かつ見る人〕

当該の歌の「かつ」を「一方では」と解して、一首を、一方では逢いながら、一方では



恋しく思う、という恋の矛盾を歌ったものとして読み取るものが、最近の古今集の注釈書では多いようである。こうした解釈は、

こひのごとわりなきものはなかりけりかつみる人のかつはこひしき

(古今和歌六帖 二七一六)

という例のあることから、当時の発想のうちにありうるものであることが認められる。さらに古今集においては、卷十三恋三の六三四番の歌、

こひこひてまれにこよひぞ相坂のゆふつけ鳥はなかずもあらなむ

(古今集 恋三 六三四)

の時点で既に愛しい人に逢っている。したがって、卷十四 恋四の冒頭におかれた当該の六七七番の歌までには何度か逢瀬も重ねられていると考えられるので、幾度かの逢瀬を重ねつつ、いつそう恋しさが募る気持ちを歌ったものとして、右のような解釈が妥当なものと考えられる。

一方、当該の歌を新撰和歌の歌として見た場合、まだ二人は逢っていない段階の歌である。そうした段階の歌として、古今集歌のような解釈はそぐわない。ならば、男女の恋の文脈では、逢瀬を意味することの多い「見る」という言葉が、ここでは、文字通り、目にするという意味で用いられていると考えざるを得ない。そうすると、伊勢物語の例を引き、「同じ所に宮仕えしているというケースが最も可能性が高い。顔を見る機会はあるのだが、いつになったらその次の段階になるのだろうかとやきもきしている状態なのである。」とする『古今和歌集全評釈』（片桐洋一）の解説が、新撰和歌の歌としての当該の歌には当てはまるのではないか。

〔恋ひやわたらん〕

当該の歌と同じく、結句に「恋ひやわたらん」という表現をおいた歌が、

織女にかしつる糸の打ちはへて年のをながくこひやわたらむ

(古今集 秋上 一八〇)

あふことは雲あはるかになる神の音にききつつ恋ひやわたらん（貫之集 五五一）などのように、同時代の作に、複数見いだすことができる。このことからこれが、恋しく思い続けるような状況を様々に詠み出すことを興味を中心とした一つの定型的な表現だったことが推測される。

【歌意】

みちのくの浅香の沼の花かつみ、の「<sup>一方</sup>かつ」という言葉通りに、一方では日常目にする人

を、これからは恋しく思い続けるのだろうか。

229 かつみれどうとましきかな月かげのいたらぬ里もあらじと思へば

【校訂】底本二句「うとくもある哉」。群書類従本、松平文庫本等によって改めた。また四句、元禄版本以外の諸本に「いたらぬ里の」とあるが、「の」に下接する語は体言もしくは用言の連体形であるのが基本。後世になると「とふ人をえやは待ちみん三輪の山雪には道のあらじと思へば」（秋風抄 一六七）というような例も見られないではないが、平安時代の歌としては不自然だと思われるので、「里も」が本来のものであると判断する。

【他出文献】古今集 雑上 八八〇

【注】

「うとましきかな」

第二句は、古今集には「うとくもあるかな」とある。古今集の歌で用いられた「うとし」という語が、ある対象との縁の浅さを客観的に表現するのに比して、新撰和歌の「うとまし」という語は、ある対象と関わりたくない、という主観的な積極的な気持ちを表す。つまり、古今集の歌では「よそよそしい」という程度だった感情が、新撰和歌では「いやだ」というほどに強められているわけである。嫌悪とも受け取れるほどの強い感情を表す言葉を用いることで、その背後にある月を愛でる気持ちをいっそう強調したのであろう。

なお、古今集では作者は貫之で、「月おもしろしとて凡河内躬恒がまうできたりけるによめる」という詠歌事情がわかり、貫之の躬恒に対する親愛の情を、逆説的で皮肉っぽく表現したものと理解できる。この文脈では嫌悪の感情に近い「うとまし」は用いにくいだろうが、詞書のない新撰和歌では、思い切った強い表現を使い得たのではないだろうか。

〔228番の歌との対応関係について〕

228番の歌の「かつみる」と同じ言葉を用いた歌として、229番の歌をつがえたのであろう。

【歌意】

一方では、こうして月をめでのだけれども、その一方で月が嫌になることよ。月光がささない里などはないだろうと思うと。月の光が他の場所にもさしていて、私一人のものはないと思うと。

230 我恋は空しき床にみちぬらし思ひやれども行かたもなし

【校訂】底本二句「空しき床」<sup>空</sup>。新撰和歌諸本で「床」と「空」が混在するが、本稿の原則に従って、古今集とは異なる本文の方をとる。

【他出文献】古今集 恋一 四八八

【注】

〔むなしき床〕

「むなしき床」は独り寝の寢床のこと。

女をなくなして家にかへりて、かのすみしところをみて

立ちよらむきもしられずうつせがひむなしき床の浪のさわぎに（兼輔集 一〇五）

のように、亡き人を思つて歌う場合もあれば、

和歌所にて歌合侍りしに、あひてあはぬ恋の心を 寂蓮法師

さとはあれぬむなしきとこのあたりまで身はならはしの秋かぜぞふく

（新古今集 恋三 一一一三）

のように、思う人と会えずに一人虚しく寝ている寢床をいう場合もある。当該の歌の場合には後者である。

〔みちぬらし〕

「むなしき床にみちぬらし」は自分のあふれる思いが相手に通じないことを、どこにも行きようがなくて自分の思いが寢床に満ちた、と表現したもの。「らし」は推定の助動詞。

桜花さきにけらしなあしひきの山のかひより見ゆる白雲 （古今集 春上 五九）

霜のたてつゆのぬきこそわからし山の錦のおればかつちる（同 秋下 二九一）

などと同じく、上の句に述べた推定の根拠を下の句で示す、理知的な、古今風の詠みぶりである。

〔思ひやる〕

「思ひやる」は、

こしなりける人につかはしける      きのつらゆき

思ひやるこしの白山しらねどもひと夜も夢にこえぬよぞなき

（古今集 雑下 九八〇）

のように、思いをある方向に向けて送る、という意味である。

【歌意】

私の恋の思いは、独り寝の虚しい寢床いっぱいになったらしい。いくら思いをあの人のもとへ送っても、行くことができないので。

231 ふたつなき物と思ひしを水底に山のはならで出る月かけ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑上 八八一

【注】

〔230番の歌との対応関係について〕

230番の歌は、自分の思いがどこにも通じないことを、独り寝の寢床に満ちてしまった、と判断した、理屈で作らあげたものであった。その歌に、一つだけのはずの月が、水面に映ったものと合わせて二つあるなんて、と、同じく理屈で詠んだ歌をつがえた。なお、231番の歌は、古今集では、229番の歌の次に配される。これも、231番の歌がここに置かれている理由の一つかと思われる。

【歌意】

二つとない、一つきりのものと思っていたのに。水底に、山の端でないのに、出ている月よ。

232 なぬかゆく浜の真砂と我恋といづれまされり沖つ白波

【校訂】底本初句「なぬかゆく」<sup>八百日</sup>。新撰和歌諸本により本文の方をとる。底本四句「いつ

れまされる」。 「どちらが」という意味の副詞「いづれ」をうける文末は終止形であるようになので、群書類従本、松平文庫本等の「まされり」をとる。底本結句「沖つ島守」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】万葉集 卷四 五九六・拾遺集 恋四 八八九・古今和歌六帖 一九八八

【注】

〔七日行く浜の真砂と我が恋と〕

「七日行く浜の真砂」は、七日行っても果てまで行き着かないほど長く続く浜の砂、の意で膨大な数を示す。なお、この歌のもととなったらしい万葉集歌には「八百日行く」とある。八百日から七日へと数を減らした理由はわからないが、あるいは、あまりに非現実的な数字を、具体的に想像可能な、現実的な喩えに改めたか。

なお、浜の砂の数と、恋の数を比較する発想は、

わが恋のかずにしとらば白妙のはまのまさこもつきぬべらなり

（後撰集 恋二 六四三 作者「在原棟梁」とするが、宗于集の五番の歌が同じ。）

のように、他にも見られ、万葉集以来の、よく知られた趣向であったと思われる。

「いづれまされり」

結句に「いづれまされり」と置き、誰かに答えを要求する体の歌は、「みつね、ただみねが、かたみにおもひけることを、とひこたへける」という躬恒と忠岑のやりとり（忠岑集九六く一一九）など、数が多い。当該の歌のもととなったらしい万葉集歌の第四句には「あにまさらじか」とあるが、それが伝来の過程で、よくある形に変えられたということであろう。

〔沖つ白波〕

当該の歌と同歌とみられる拾遺集八八九番の歌では、結句が万葉集歌のままに「沖つ島守」となっており、「島守」に対して「いづれまされり」の答えを要求している趣向である。それに対して、新撰和歌では、人間ならぬ「白波」に答えを要求している。

白波に対して、浜の真砂の数と我が恋の数とどちらが多いかということを尋ねる理由は、

女のもとより心ざしのほどをなむしらぬといへりければ

わがこひをしらんとならばたこのうらにたつしらなみのかずをかぞへよ

（興風集 七三）

ふくかぜもあかずおもひてしらなみのかずにぞきみがとしをよせつる

（古今和歌六帖 二二八〇）

しら波のたちかへりくる数よりもわが身をなげくことはまされり（千里集 一一〇〇）

などに見える、白波も数が膨大だという考え方があったことに求められるのではないか。本人自身数が膨大な白波ならば、我が恋と浜の真砂という数しれぬものでも多寡が判断できるだろう、という機知的な発想による表現かと思われるからである。

【歌意】

七日行ってようやく果てに行き着くほど長く続く浜の砂の数と、私の恋の数と、どちらが勝っているか。沖の白波よ。数多いおまえたちならば判断がつくだろう。

233 我みても久しくなりぬ住吉のきしのひめ松いく世へぬらん

【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑上 九〇五

【注】

〔232番の歌との対応関係について〕

浜の真砂や恋の数え切れぬ多さを白波に尋ねた232番の歌に、数え切れぬ年月を過ごした松を詠んだ233番の歌をつがえた。また、232番の歌は人ならぬ白波に答えを尋ねていることからすると、233番の歌も「いくよへぬらん」という疑問を松に向けて発しているとも受け取られるだろう。

なお、真砂と姫松の歌を対にした例は、新撰和歌296/7番にも見られる。

【歌意】

私が見てからでもずいぶんと久しくなった。住吉の岸の姫松よ。おまえはいったいどれほどの年月を過ごしているのか。

234 わたつうみの底の心はしらねども人をみるめはからんとぞ思ふ

【校訂】底本、上の句に「しらなみは立さはくともこりすまのうらの」を傍記する。この本文を伝えるのは、元禄版本のみであり、おそらくは、下の句の一致から「しらなみはたちさわぐともこりすまのうらのみるめはからんとぞ思ふ」（古今和歌六帖 一八七〇／新古今集 恋五 一四三四）を注記したものと思われる。

【他出文献】不明

【注】

〔わたつうみの底の心〕

「底の心」は、

侍従に侍りける時、村上の先帝の御めのとに、しのびて物ののたうび

けるにつきなき事なりとて、さらにあはず侍りければ 一条撰政

かくれぬのその心ぞうらめしきいかにせよとてつれなかるらん

（拾遺集 恋二 七五八）

女のもとにおはしてとまりたまへとのたまへば、女

わたつみのそののころもしらなみのしらではいかかがよるとぞやきみ

（元良親王集 一一九）

のように、内に秘めた本心のことを言う。

〔人をみるめはからんとぞ思ふ〕

「みるめ」を「荳る」という表現を、恋の歌で用いた場合は、

みるめかるなぎさやいづこあふこなみ立ちよる方もしらぬわが身は

（後撰集 恋二 六五〇 在原元方）

心ざしはありながらえあはざりける人につかはしける  
みるめかる方ぞあふみになしときく玉もをさへやあまはかづかぬ

(後撰集 恋三 七七二)

などのように、愛しい人に会うことを意味する。

【歌意】

海の底に秘めたような、あなたの本心は知りませんが、海人が海松を刈り取るように、私もあなたを見るのがしたい、と思います。あなたの心がどうであれ、私はあなたに会いたいです。

235 おもひきやひなの別におとろへてあまのなはたきいさりせんとは

【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑下 九六一

【注】

〔思ひきやくとは〕

当該の歌の、初句に「思ひきや」と置き、結句の末尾に「くとは」とする倒置表現は、よほど印象的なものだったと見え、その後、

久しうあはざりける女につかはしける 源さねあきら

思ひきやあひ見ぬことをいつよりとかぞふばかりになさん物とは

(後撰集 恋二 六六八)

庶明朝臣中納言になり侍りける時、うへのきぬつかはすとて 右大臣

思ひきや君が衣をぬぎかへてこき紫の色をきむとは (後撰集 雑一 一一一一)

をはじめ、非常に多くの歌で用いられた。

〔234番の歌との対応関係について〕

海人が海松を刈ることを恋人と会うことに喩えた234番の歌に、うらぶれた姿を漁をする海人に喩えた235番の歌をつがえた。

【歌意】

思ったであろうか。田舎への別れで落ちぶれて、海人のように縄をたぐって漁をしようとは。

236 つれなきを今は恋じとおもへども心よはくもおつる泪か

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋五 八〇九

【注】

「つれなきを今は恋じと思へども」

当該の歌は、古今集では恋五の終わり近くに配され、かつてつきあっていた人が今は冷たくなってしまった時の歌として位置づけられているが、新撰和歌では、まだ逢っていない段階の歌として位置づけ直されている。したがって、「つれなき」は、古今集においては、「冷たくなってしまった人」という意味であろうし、新撰和歌においては、「私の気持ちをわかってくれない人」というほどの意味で理解することになる。

【歌意】

振り向いてもくれない人を、もう恋するまいと思うけれども、心弱くも落ちる涙よ。

237 世中のうきもつらきもつげなくにまづしるものは泪也けり

【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑下 九四一

【注】

「236番の歌との対応関係について」

もう恋することはやめようと思うのに、どうしてもやめられず、知らず知らずのうちに流れる涙を詠んだ236番の歌に対して、つらさをこらえかねて、意識もしないのに流れる涙を詠んだ237番の歌をつがえたのである。

【歌意】

世の中の嫌なこともつらいことも誰にも告げていないのに、真っ先にそれを知るのは涙だったのだ。

238 わが恋を忍びかねては足曳の山橋の色にいでぬべし

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋三 六六八

【注】

〔我が恋を〕

単に「恋」といわず、「我が恋」という時には、自分の恋心の深さに対して、相手の気



持ちの程度が浅い、もしくは無いことに不満を感じるニュアンスがあるように思われる。

我が恋を夫は知れるを行く舟の過ぎて来べしや言も告げなむ

(万葉集 卷十 一九九八 七夕)

は、七夕が目の前を行き過ぎようとする彦星の舟に対して、私の気持ちは知っているのに、あなたはどうかですか。となじる風の歌であるし、

わがこひを人しるらめや敷妙の枕のみこそしらばしるらめ (古今集恋一504)

は、相手が自分のことを全く思ってくれないのに対して、自分だけ一方的に恋しているつらさを訴える。また、

女のもとより、心ざしのほどをなんえしらぬといへりければ

藤原興風

わがこひをしらんと思はばたこの浦に立つらん浪のかずをかぞへよ

(後撰集 恋二 六三〇)

も、あなたは私の恋をたいしたことはないのでは、と疑っていますが、「我が恋」は田子の浦に立つ波よりも多いのですよ、と相手に理解してもらえていない自分の気持ちの深さを訴えるものである。

当該の歌でも、自分のことを気づいてくれない相手へのいらだちに、もうこれ以上恋心を押さえきれそうもない、この気持ちを相手に訴えたい、というニュアンスを読み取ってよいのではないか。

#### 【歌意】

私の恋心を我慢できなくて、山橋の鮮やかな色のようにはつきりと表に出して、あの人に打ち明けてしまいそうです。

239 色なしと人やみるらん昔より深き心にそめてしものを

#### 【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑上 八六九

#### 【注】

〔古今集との解釈の相違について〕

当該の歌には、古今集では「大納言ふぢはらのくにつねの朝臣の宰相より中納言になりける時、そめぬうへのきぬあやをおくるとてよめる」という詞書が付されている。それによれば、一首は染めていない布を主題としたものであることがわかるのだが、新撰和歌で

は、その情報なしに読解することになる。さて読解の際の手がかりとしては、対にされた238番の歌が、まずは考えられる。そうすると、一首は布のことを言っているのではなく、相手に対する思いの深さを述べたものとして受け取ることになるだろう。

そのような前提で、「深き心に染めてし」を見れば、古今集の歌では、

色にいでて恋すてふ名ぞたちぬべき涙にそむる袖のこければ

（後撰集 恋一 五八〇）

白露にそめはじめたる秋山にしぐれなふりそありわたるがね

（古今和歌六帖 五〇三）

などと同じく、「深い心でもって染めた」という意味になるうが、新撰和歌の場合は、

託馬野に生ふる紫衣に染めいまだ着ずして色に出でにけり（万葉集 卷三 三九五）

くれなるの花にしあらばころもでにそめつきもちてゆくべきものを

（古今和歌六帖 三四〇〇）

と同様に考えられ、「心の奥深くに染め付けた」という意味になるだろう。

〔238番の歌との対応関係について〕

心中の思いを表面に出すことを「色に出」す、と表現した238番の歌に、思いを心の奥底に秘めて表面に出さないことを「色なし」と言った239番の歌をつがえた。また、自分の心中を相手が気づいてくれないことに対する不満の気持ちが読み込まれている点でも、両歌は共通する。

#### 【歌意】

色がない、態度に現れていない、とあなたは見ているのでしょうか。昔から心の奥深くに染め付けて、あなたの事を思っているのに。

240おきもせずねもせでよるをあかしては春の物とてながめくらしつ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋三 六一六

【注】

〔古今集との解釈の相違について〕

古今集では当該の歌に、「やよひのついたりしに人にものらいひてのちに、雨のそほふりけるによみてつかはしける」という、伊勢物語二段とおよそ同じ内容の詞書を持ち、その内容をふまえて解釈されることになる。一方新撰和歌では、詞書がないので、

つれなきを今は恋じとおもへども心よはくもおつる泪か (新撰和歌 一二三六)

わが恋を忍びかねては足曳の山橘の色にいでぬべし (同 一二三八)

◇おきもせずねもせでよるをあかしては春の物とてながめくらしつ (同 一二四〇)

あはれてふことだになくは何をかも恋のみだれのつかねをにせむ (同 一二四二)

わが恋は人しるらめや敷妙の枕ばかりそしらばしるらめ (同 一二四四)

という順で配列された恋の歌、ということだけを前提に、つまり、つれない人に恋い焦がれる気持ちを必死で押さえている、という内容を詠んだ歌として当該の歌を解釈することになるだろう。そのような文脈で解釈するならば、当該の歌は、冷たい人への思いのために一晩中眠れず、昼間も物思いに耽っているばかりだ、ということとを、春の「長雨」と「眺め」の掛詞を利用して機知的に作り上げた歌、ということになるだろう。古今集の歌の場合は、「しのびに」逢った女に送るメッセージの歌であったものが、新撰和歌では、恋の思いに沈む人物の独白的な歌として理解できる、ということである。

#### 【歌意】

あなたを恋しく思う気持ちをこらえながら、起きもしないで、かといって寝もしないで夜を明かしては、春につきものの長雨に降り籠められて、一日中物思いに耽ってながめて過ぎました。

241 なよ竹のよのうきうへに初霜のおきめて物を思ふ比哉

【校訂】なし なお、二句は新撰和歌諸本で「よのうきうへに」と「よながきうへに」が混在するが、本稿の原則に従って、古今集とは異なる、底本の本文をとる。

【他出文献】古今集 雑下 九九三

#### 【注】

「よのうき上に」

第二句は、古今集では「よながき上に」とある。古今集の本文であれば、「よ」は、竹の節と節の間である「よ」と「夜」の掛詞と理解できる。一方新撰和歌の本文の場合は「よの憂き」と続くのだから、まずは、「よ」は「世」と竹の節の間の「よ」との掛詞として受け取らなくてはならない。ただ、第四句に「起き居て」という言葉があることからすると「夜」という意味も同時に掛けられているものということになる。

「ものを思ふ頃かな」

当該の歌のように、結句を「ものを思ふ頃かな」として、今日この頃の物思いの種を様

々に描き出す形式の歌は、

秋ののにみだれてさける花の色のちくさに物を思ふころかな

(古今集 恋二 五八三 貫之)

ひぐらしのこゑきくからに松虫の名にのみ人を思ふころかな

(後撰集 秋上 二五五 貫之)

あさなあさなげればつもるおちかみのみだれて物を思ふころかな

(拾遺集 恋一 六六九 貫之)

など、貫之にも多く見られ、彼が好む一つの趣向であったことがうかがわれる。

〔240番の歌との対応関係について〕

一晚中眠ることもできず、昼も物思いに耽ることを歌う240番の歌に、同じく夜の間を座り込んだまま物思いをして過ごす241番の歌をつがえたのであろう。また、春の長雨と秋の初霜を詠み込んだ点も対照的だし、掛詞を用いている点も共通している。

【歌意】

なよ竹の「よ」の上に初霜が置き、世が嫌になって、夜の間も起きてじっとしたまま物思いをする今日この頃です。

242 あはれてふことだになくは何をかも恋のみだれのつかねをにせむ

【校訂】底本三句「何をか<sup>も</sup>は」。新撰和歌諸本により傍記の方をとる。

【他出文献】古今集 恋一 五〇二

【注】

〔何をかも〕

第三句は、古今集では「何をかは」とある。「かは」であると、一首の文意はいわゆる反語となり、「あはれ」という言葉以外に、恋の乱れをとりまとめるものなどない、と強い気持ちを表すことになるが、新撰和歌の「かも」の場合、

春日野の藤は散りにて何をかもみ狩りの人の折りてかざさむ

(万葉集 卷十 一九七四)

心さへ奉れる君に何をかも言はずて言ひしと我がぬすまはむ

(同 卷十一 二五七三)

のように、「いったい何を」と、戸惑う気持ちを表す。

〔つかねを〕

「つかねを」の同時代の例を探すことは難しいが、後世の、  
のべごとにしどろにふしてみだるるはたが刈る萱ぞつかねをもなき

(堀川百首 六四三 源国信)

などの例から、通説の通り、「束ねるもの」と見る。

【歌意】

「あはれ」という言葉すらなかったとしたら、いったい何でもって恋で乱れた心を束ねましようか。「あはれ」とため息をつくことだけで、かろうじて思い乱れた心を落ち着かせているのです。

243 世中はむかしよりやはうかりけむ我身ひとつの為になれるか

【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑下 九四八

【注】

「昔よりやはうかりけむ」

「やは」を反語と見るか疑問と見るかで、古今集諸注に意見の相違があるが、判断の根拠は文脈以外には示されない。

確かに「やは」は、「や」と異なり、「反語の気持ちが醸成」(竹岡正夫『古今和歌集全評釈』)されるものではある。しかし、昔は世の中が「憂」くはなかった、と言い切ってしまうとも、和歌的な常識に反してしまう。そこで、折衷案ということではあるが、「昔から世の中は憂きものだというのが、本当にそうだったのか、その「憂し」というのは、大したものではなかったのではないか、と疑いを抱くほどに、今の私にとっては世の中はきわめて憂きものと感じられる。」という気持ちを表現している、と考えておく。

「我が身一つのためにされるか」

「ゝために」は、

わがためにくる秋にしもあらなくにむしのねきけばまづぞかなしき

(古今集 秋上 一八六)

のように、「ゝ」を目的として」というほどの意。当該の歌では、「我が身一つ」だけに對して、世の中が嫌なものになっているのか、と自分の心に問いかけているのだと思われる。  
〔242番の歌との対応関係について〕

242番の歌は、「あはれ」ということばだけにすがって、戸惑いながらもかろうじて

平静を保っている心境を詠んだものであった。それに対して、243番の歌は、昔から言われる「世は憂きもの」というような言葉では、心が慰められないほどのつらさを歌っている。その発想の類似に着目して対にされたか。

【歌意】

世の中は、昔からそんなに憂きものだったのだろうか。そうは思えぬほどに、今の私には世間が厭われて仕方ない。では、私だけのために憂きものになったのか。そのように尋ねたいほど、つらい気持ちが出たらまらない。

244 わが恋は人しるらめや敷妙の枕ばかりぞしらばしるらめ

【校訂】底本四句「枕のみこそ」。新撰和歌諸本によりあらためる。

【他出文献】古今集 恋一 五〇四

【注】

〔我が恋は〕

初句は、古今集では「我が恋を」とある。古今集の形であれば、「我が恋」は、「知る」の目的語となる。新撰和歌の「我が恋は」であれば、「我が恋」というものは、という主題の提示となり、私の恋は、枕だけが知っているような、そんな恋なのです。という趣旨となる。

〔枕ばかりぞ〕

四句は、古今集では「枕のみこそ」。限定の意味で「のみ」を用いるのは、古い言い方とされるが、それを新撰和歌では、当世風の表現「ばかり」に改めたのであろうか。

【歌意】

私の恋というものは、あの人は知っているでしょうか。いや、そうではなく、枕だけが知るならば知っているような、人知れず涙を流す、そんな恋なのです。

245 玉ほこの道にはつねにまどはなん人とふとも我と思はん

【校訂】底本二句「道はつねにも」。新撰和歌諸本により改める。また、結句底本「我かと思はん」。新撰和歌諸本で「我と思ふ」「我かと思はむ」「我とこたへむ」が混在するが、「こたへむ」では意味が取りがたいので、残り二つの形から、本稿の原則に従って、古今集とは異なる方の本文をとる。

【他出文献】古今集 恋四 七三八

【注】

〔道には常にまどはなむ〕

「道にまどふ」とは、

ゆきやらぬ夢ぢにまどふたもとはあまつそらなき露ぞおきける

（後撰集 恋一 五五九）

人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな

（同 雑一 一一〇二）

をしかふす夏ののくさのみちをなみしげきこひぢにまどふ比かな

（新古今集 恋一 一〇六九 坂上是則）

などのように、道を間違えて違う方向に行くことではなく、道がわからなくてあてどもなくさまようことを言う。当該の歌では、いつも道を見失ってさまよってほしい、というほどの意味になるだろう。道というものがいつもわからなくなるものであれば、自分以外の所へ向かっている人物であっても、自分の所を訪れようとしてさ迷っているのだと思えるから、というのである。

〔人をとふとも我と思はむ…古今集との解釈の相違について〕

下二句は、「他の人を訪ねているとしても、私を訪ねているのだと思ひましよう」という意味である。当該の歌は、古今集では恋の部に配される。そのことで、道に惑うのが訪れの遠ざかった恋人で「人をとふとも」の「人」は他の女であることがわかる。一方、新撰和歌では、雑の歌として配されている。前後の歌の配列

なよ竹のよのうきうへに初霜のおきみて物を思ふ比哉 （新撰和歌 二四一）

世中はむかしよりやはうかりけむ我身ひとつの為になれるか （同 二四三）

◇玉ほこの道にはつねにまどはなん人をとふとも我と思はん （同 二四五）

侘ぬれば身をうき草のねをたえてさそふ水あらばいなんとそ思ふ （同 二四七）

しかりとてそむかれなくにことしあれはまづなげかるあはれよの中 （同 二四九）

わたつうみのおきつ汐あひにかぶあわのきえぬ物からよる方もなし （同 二五一）

を見れば、当該の歌は、世の中の辛さに倦み果てて、誰かに救ってもらいたい、ということと言っているものと考えられる。そのことを踏まえれば、「人をとふとも」の「人」は、自分以外の、世の中一般の人のことを指し、一首は、世の憂さに沈む私を、だれも訪ねてはくれないという状況を嘆くものだと考えられよう。

〔244番の歌との対応関係について〕

244 4番の歌は、独り嘆く恋の辛さを、もしも枕が人の心を知ることができれば知ってくれているだろう、と表現したものであった。245番の歌も、独り嘆く世の憂さを、もしも道というものが常に惑うものであれば他の人の所へ行っている人が自分を訪れようとしているのだと思いたい、というもので、独りぼっちで嘆く辛さを、非現実的な空想でもって表現する点が共通する。

【歌意】

道はいつも見失ってほしい。そうであれば、実際には他の人を訪ねているにしても、私を訪ねている道がわからなくてさまよっているのだと思ひましょう。私ひとりだけが世を辛く思っているのではないのだと思ひましょう。

246 恋しきに命をかふる物ならばしにはやすくぞあるべかりける

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋一 五一七

【注】

〔あるべかりける〕

結句に用いられた「くべかりける(り)」という表現は、

月夜に梅花ををりてと人のいひければ、をるとてよめる みつね

月夜にはそれとも見えす梅花かをたづねてぞしるべかりける(古今集 春上 四〇)

あひ見ずはこひしきこともなからましおとにぞ人をきくべかりける

(同 恋四 六七八)

今ぞしるくるしき物と人またむさとをばかれずとふべかりけり(同 雑下 九六九)

などからわかるように、何かについてそうあるべきだと今更ながら気づいたことを表すものである。当該の歌では、恋の苦しさに比べれば死ぬことは簡単であるにちがいないと気づいたことを表す。そう表すことで、恋のために死ぬほど苦しい思いをしているのだと言っているのである。

【歌意】

恋しいことに命を代えられるものであれば、死ぬことは簡単であるにちがいない。(恋の苦しみに耐える日々を過ごして、そんなことに今気がつきました。)

247 侘ぬれば身をうき草のねをたえてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ



【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑下 九三八

【注】

〔246番の歌との対応関係について〕

当該の歌は、古今集では、「文屋のやすひでみかはのぞうになりて、あがた見にはえいでたたじやといひやれりける返事によめる」という詞書を持つ。この詞書に従って一首を理解する場合、康秀の気軽な雰囲気の誘いかけに答える歌としては、いささか深刻すぎる表現を用いていることに気づく。それゆえに、小町のこの歌は、「戯れ」（松田武夫『新釈古今和歌集』）であるとか「同情」（片桐洋一『古今和歌集全評釈』）であるというよ  
うな、真実の心情を詠んだものではないと考えられている。

さて、新撰和歌の場合、詞書を持たないのであるから、歌に用いられた言葉だけ解釈することになる。そうすると、一首はまさに侘び果ててしまい、「さそふ水」があれば「去なん」と思うほどに辛い心情を歌ったものということになる。

以上のように考えられるならば、死ぬよりも辛い程の恋の思いとを歌った246番の歌と、どこへでも行ってしまいたいと思うほどの苦しさを歌った247番が対にされているということになり、納得がいく。

【歌意】

私はもう弱り果てていますので、我が身が嫌になりました。根のない浮き草が水に誘われて流れ去るように、私も係累を断ち切って、誘ってくれる人があれば、そちらに行ってしまうと思います。

248こむよにもはや成なゝむめのまへにつれなき人を昔と思はむ

【校訂】底本三句「成なゝむ<sup>ぬらむ</sup>」。松平文庫本、内閣文庫本、彰考館蔵本等「なりぬらん」とする伝本はいくつかあるが、それでは意味が取りにくいので、本文の方をとる。

【他出文献】古今集 恋一 五二〇

【注】

〔目の前につれなき人〕

第三四句の「目の前につれなき人」は、かつては、「目の前にいる人」と考えられていたが、近年は名義抄の「生前 メノマヘ イケルトキ」という記載を参考にして、「現世」と考える説が増えている。当該の歌と対にされている249番の歌が、出家という仏

教的な素材を詠み込んだものであることから、この説は支持されるだろう。

【歌意】

来世にも早くなつてほしい。そうならば、現世で目の前に居る冷たい人を「昔の、前世の人」と思いましょう。

249しかりとてそむかれなくにことしあればまづなげかるゝあはれよの中

【校訂】底本四句「まづなげかるゝ<sup>れぬ</sup>」。新撰和歌諸本により改める。結句「あはれ<sup>あはれイ</sup>世の中」。新撰和歌諸本で「あはれ」と「あなう」が混在するが、本稿の原則に従つて、古今集とは異なる方をとる。

【他出文献】古今集 雑下 九三六

【注】

「そむかれなくに」

世を「そむく」という表現は、具体的には、

世をそむく苔の衣はただひとへかさねばうとしいぎふたりねん

(古今集 雑二 一一九六 遍昭)

服に侍りけるころ、あひしりて侍りける女の、あまになりぬとききて、

つかはしける

よしのぶ

すみぞめの色は我のみと思ひしをうき世をそむく人もあるとか

(拾遺集 哀傷 一三三三)

などのように、出家のことをさす場合が多い。当該の歌も248番の歌との関係から、出家のことを言っていると見られる。

「まづ嘆かるるあはれ世の中」

結句の「あはれ世の中」は、

かき霧らし雨の降る夜をほととぎす鳴きて行くなりあはれその鳥

(万葉集 卷九 一七五六)

行かぬ我を来むとか夜も門ささずあはれ我妹が待ちつつあるらむ

(同 卷十一 二五九四)

ふる歌にくはへてたてまつれるながうた 壬生忠岑

くれ竹の 世世のふること なかりせば いかほのぬまの いかにして 思ふ心を  
のばへまし あはれむかしべ ありきてふ 人まろこそは うれしけれ…

などと同じく、「ああ世の中よ」の意。

第四、五句、古今集では「まずなげかれぬあなう世の中」とある。新撰和歌が歌句を変更したとして、その理由はよくわからない。ただ、

あるはなくなきはかずそふ世中にあはれいづれの日までなげかん

(新古今集 哀傷 八五〇 小野小町)

恋ひわびてあはれとばかりうちなげくことよりほかのなぐさめぞなき

(千載集 恋四 八五一)

などを参考にすると、「なげく」という言葉には、「あな憂」よりも「あはれ」の方が似つかわしい、という意識があったのかもしれない。そうした意識のために新撰和歌が下の句を改変したという可能性を、一応考えてみたい。

〔248番の歌との対応関係について〕

248番の歌の【注】に記したように、前世・現世・来世という仏教的な思想に基づいた歌に、「世を背く」出家に言及した249番の歌を配したかと思われる。

【歌意】

そうであるからといって世を背き出家することはできないのに、何かあるとまず嘆いてしまふ。ああ、この世の中よ。

250 あし鴨のさはぐ入江の白浪のしらずや人をかく恋むとは

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋一 五三三

【注】

〔あし鴨のさはく入り江〕

当該の歌では、「入り江」の「白波」が歌われている。しかし、「白波」は通常「入り江」に立つものではない。万葉から平安時代の和歌においても「沖つ白波」の他に、

天河あさせしら浪たどりつつわたりはてねばあけぞしにける

(古今集 秋上 一七七)

住吉の岸の白浪よるよるはあまのよそめに見るぞ悲しき (後撰集 恋一 五六一)

白浪のよするいそまをこぐ舟のかちとりあへぬ恋もするかな (同 恋二 六七〇)

こりずまの浦の白浪立ちいでてよるほどもなくかへるばかりか (同 恋四 八〇〇)

白浪の打ちいづるはまのはまちどり跡やたづぬるしるべなるらん

(同 恋四 八二八)

など、瀬や岸、磯や浦・浜などに立つ白波の例を見つけることができるが、「入り江」の「白波」を歌った例は他に見いだしがたい。では、なぜ当該の歌では「入り江」の「白波」を歌ったのか。

あちの住む渚沙の入り江の荒磯松我を待つ児らはただひとりのみ

(万葉集 卷十一 二七五二)

葦鶴の騒く入り江の白菅の知らせむためと言痛かるかも (同 卷十一 二七六八) など、上の句に鳥の居る入り江の風景を、同音で下の句の言葉をおこす序としておいた形式の歌があった。憶測ではあるが、当該の歌を詠んだ者は、こうしたパターンに則って一首を作ろうとして、「知らず」を言わんが為に「白波」という言葉を用いたのではなからうか。

【歌意】

葦鴨が鳴き騒ぐ入り江に立つ白波ではないが、しらないのだろうか。私があの人をこんな恋しく思っているとは。

251 わたつうみのおきつ汐あひにうかぶあわのきえぬ物からよる方もなし

【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑上 九一〇

【注】

〔250番の歌との対応関係について〕

250番の歌は、「入り江」の景を詠んだ上三句が序詞となっていた。251番の歌もそれと同様に、上三句は海の景を詠んだ序詞である。また、「入り江の白波」も、「沖つ潮合に浮かぶ泡」も、現実にはありにくい、観念的な、言葉で作り上げた景物である。こうした点に着目して対にされたのであろう。

【歌意】

大海の沖で潮と潮がであうところに浮かぶ泡のように、消えはしなくても、寄る辺もない(私です)。

252 そこひなき渕やはさわぐ山河の浅き瀬にこそうは波はたて

【校訂】底本結句「あた波はたて」。<sup>うは</sup>新撰和歌諸本により傍記をとる。

【他出文献】古今集 恋四 七二二

【注】

〔山川の〕

「山川」は、古今集の諸注で「山中から流れ来る川」とするものと、「山中の川」とするものがある。両者の区分は難しいが、

やよひのつごもりがたに山をこえけるに、山河より花のながれけるを

よめる

ふかやぶ

花ちれる水のまにまにとめくれば山には春もなくなりけり

（古今集 春下 一二九）

では、山を越えているときに「山川」を見ていると思われるし、

山川をとめきてみれば落ちつもる紅葉のためにあじろなりけり（貫之集 四〇七）

では、「山川」は、わざわざ「とめきて」見るものとされる。さらに後の作ではあるが、

さをしかのつめだにひちぬ山河のあさましきまでとはぬ君かな

（拾遺集 恋四 八八〇）

「山川」は鹿が住むところを流れているので、やはり山中の流れの速い川と見てよいのではないか。

〔うは波は立て〕

結句は、古今集では「あだなみは立て」とある。当該の歌は、「淵」と「瀬」という言葉の対応が一首の趣向の根幹をなしているので、「あだ波」の「あだ」を「底」の対義語である「上」と改めて、上の句の「底・淵」と下の句の「瀬・上」との対比をいっそう鮮やかにしようとしたものか。なお、「うは波」という言葉の例は少ないが、

うはなみはすゑのまつやまこえにけりたらひのみづのかげはかはらで

（江帥集 三八八）

のように、浮気心を喩えるものとして使用可能な語であり、当該の歌の文脈にも合致する。また、「そこひなき淵」は、

限なき名におふふぢの花なればそこひもしらぬ色のふかさか

（後撰集 春下 一二五 三条右大臣）

さをさせどそこひもしらぬわたつみのふかきころをきみにみるかな

（土佐日記 承平四年十二月二十七日条）

などを参考にすれば、「深」いものとして考えられていたようである。そうであれば「浅き瀬」と「そこひなき淵」もまた対立する言葉ということになり、一首の対義概念づくしのおもしろさがいつそう際立つ。

【歌意】

底しれぬ深さの淵は音を立てて波立ったりするでしょうか。山中の川の浅い瀬に、上波は立つのでしょうか、そのように、あなたの心が浅いので浮気心を起こすのでしょうか。

253 山里は物さびしかることこそあれよのうきよりは住よかりけり

【校訂】底本二句「物のさびしき」かる。新撰和歌諸本によりあらためる。

【他出文献】古今集 雑下 九四四

【注】

〔古今集との歌句の相違について〕

第二句は、古今集のおよその伝本には「ものわびしき」とある。仮に「わびしき」を新撰和歌が「さびしかる」に改めたとして、その理由はよくわからない。ただ、古今集の伝本の中に「さびしかる」とするものもいくつか見られ（基俊本等）、またたとえば、

さびしさをきてとふばかり山ざとはよのうきよりもすみよしといへ

（教長集 八九四）

は、当該の歌を踏まえた作とおぼしいが、「わびし」ではなく「さびし」という言葉を用いている。このことからすると、古今集のものと本文が「さびしかる」であった可能性も考えてよいのかもしれない。

〔252番の歌との対応関係について〕

253番の歌は、上の句の「山里（の住まい）」が「さびし」いことが、下の句の「世（で暮らすことが）」「憂き」ことと対応をなす、そのおもしろさが核になっている。その点に着目して、（深く）底ひなき淵と、浅瀬の上波を対応させた252番の歌に配されたものであろう。なお、252番の歌の「山川」に253番の「山里」が対応することもいうまでもない。さらに、両歌とも、「こそ」を、いわゆる逆接用法で用いている点でも対応する。

【歌意】

山里の住まいは物寂しいことはあるが、世間での憂きことよりは、住みよいのであるなあ。

254 このまより影のみみゆる月草のうつし心は染てしものを

【校訂】なし

【他出文献】新拾遺集 恋一 九三一

【注】

〔木の間より影のみ見ゆる月草の〕

上二句は月を起こす序であるが、

このまよりもりくる月の影見れば心づくしの秋はきにけり（古今集 秋上 一八四）  
の上の句の発想・表現を利用したものと思われる。

〔月草のうつし心〕

「月草」は、

うちひさす宮にはあれど月草のうつろふ心我が思はなくに

（万葉集 卷十二 三〇五八）

百に千に人は言ふとも月草のうつろふ心我持ためやも （同 卷十二 三〇五九）

など、それでもって色を染めた布の色が変わりやすいために、早くから「うつろふ」という言葉と共に用いられてきた。これが、平安時代になると、

月草に衣はすらむあさつゆにぬれてのちはうつろひぬとも

（古今集 秋上 二四七）

のように、古くからのパターンである「うつろふ」という言葉と共に用いられた歌が詠まれる一方で、

いで人は事のみぞよき月草のうつし心はいろくことにして （古今集 恋四 七一）

のように、「月草のうつし心」というものがあらわれるようになる。

ところで、「うつし心」は、

ますらをの現し心も我はなし夜昼といはず恋ひし渡れば

（万葉集 卷十一 二三七六）

うつせみの現し心も我はなし妹を相見ずて年の経ぬれば （同 卷十二 二九六〇）

中納言定頼がもとにつかはしける 大和宣旨

こひしさをしのびもあへぬうつせみのうつし心もなくなりけり

（後拾遺集 恋四 八〇九）

などからわかるように、しっかりとした心、という程度の意味であり、恋の歌で用いられた場合は、恋のために乱れ苦しむ心とは反対の落ち着いて安定した心、と理解したのでよ

いと思われる。「月草」は本来色が変わりやすかったために、「うつろふ」という言葉と共に和歌に用いられるようになったものであった。それなのに、「うつろふ」と相反する意味を持つ「うつし心」と結びついたのはなぜか。断定的なことは言えないが、「月草」―「うつろふ」という結びつきがパターンとして定着した後に、「うつろふ」の「うつ」に注目し、同じ発音を持つ「うつし」にも応用されたために生じた表現ということであろうか。

「染めてしものを」

結句の「染めてしものを」は、

大納言ふぢはらのくにつねの朝臣の宰相より中納言になりける時、そ

めぬうへのきぬあやをおくるとてよめる

近院右のおほいまうちぎみ

色なしと人や見るらむ昔よりふかき心にそめてしものを（古今集 雑上 八六九）

と同じく、しっかりとそのようにしたのに、という意味。そして、しっかりとそのようにしたにもかかわらず不本意な状態になってしまった、という気持ちを含む。当該の歌では、我が心をしっかりと「うつし心」に染めたのに、それなのに今、恋に落ちて悩み苦しんでいるという戸惑いの心情を表す。

【歌意】

木々の葉の隙間から光だけが漏れてくる月影という名を持つ月草の「うつし心」：しっかりとした心を保っていたはずなのに。（どうしてあの人のために思い乱れているのでしょうか。）

255 雁の来るみねの朝ぎりはれずのみ思ひつきせぬ世中のうき

【校訂】なし なお、結句は新撰和歌諸本で「世の中のうさ」と「世の中のうき」とが混在するが、本稿の原則に従って古今集とは異なる「うき」の方をとる。

【他出文献】古今集 雑下 九三五

【注】

〔254 4 番の歌との対応関係について〕

双方の歌ともに「月」「霧」という天象にかかわるものを詠み込んだ序詞を用いていることに加えて、「のみ」という言葉があることが、おそらくは対にされた理由であると思われる。「のみ」という言葉があるということだけであれば、たまたまそうした歌が並ん



でいるのだと言えそうであるが、後で述べるように、256番からの四首が、一単語だけに着目した二対の歌であることを踏まえれば、これは十分にありうることである。また、「のみ」を用いた歌は、新撰和歌三百六十首中で十三首。割合は3・6パーセントである。これが二首連続して並ぶ確率は、ごくわずかと言わなくてはならない。また同様に「のみ」を用いた歌の割合を見ると、古今集が約6パーセント。後撰集が約7パーセント。貫之集が約7・2パーセントであり、新撰和歌の割合の低さが際立つ。このことは、撰者の意識にあった可能性、つまり「のみ」を用いる歌はごく厳選した、という可能性を考えさせる。

#### 【歌意】

雁がやってくる峯の朝霧が晴れないように、晴れないまままで思いがつかない世の中のいやなことよ。

256夕されば宿にふすぶる蚊遣火のいつまで我身下もえにせむ

【校訂】底本初句「夕夏なればされは」。新撰和歌諸本により本文の方をとる。

【他出文献】古今集 恋一 五〇〇

#### 【注】

〔夕されば〕

初句は、古今集では「夏なれば」とある。古今集の本文であれば、「夏なれば」は「やどにふすぶる蚊遣り火」を修飾するのみであるが、「夕されば」であれば、恋人が訪れるはずの時間帯である夕方になると切なさ募る、という文脈がとれる。つまり、上の句の内容が「有心の序」として密度が高くなるのだと言えよう。

〔下もえにせむ〕

結句は、古今集では「下もえをせむ」とある。この歌は、古今集では恋一に配され、まだ人に知られない恋の描写として「下もえ」が用いられていると解せるから、「いったいいつまで我が身は蚊遣火のような人に知られない燃え方をするのでしょうか」と理解できる。一方、新撰和歌では、その配列から、既に逢瀬を経た後の歌と思われる。そうした歌の表現として「下もえにせむ」を考える場合、いささか意味が取りにくいのはあるが、ちりぬともかをだにのこせ梅花こひしき時のおもひいでにせむ（古今集春上48）  
見てのみや人にかたらむさくら花てごにをりていへづとにせむ（古今集春上55）  
のように、「くにせむ」は、「くにしよう」あるいは「くといふことにしよう」という意

味で考えてみたいと思う。つまり、「いつまで我が身下もえにせむ」は、「もう知らない仲でもないのに、いったいいつまで我が身のことを下もえ、ということにしておこうか。それとも我慢をやめて、燃え上がらせてしまおうか。」というほどの内容を表しているかと思われる。

【歌意】

夕方になると宿でくすぶる蚊遣火のようにいつまで我が身を下燃えということにして我慢するのだろうか。

257 我心なぐさめかねつ更科やお捨山にてる月をみて

【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑上 八七八

【注】

〔256番の歌との対応関係について〕

256番の歌の第四句にある「我が身」と、257番の歌の初句「我が心」が対にされたもの。このことは、新撰和歌で次に配列された二首である258番の歌の初句と259番の歌の第四句に「君」という言葉が置かれており、四首がきれいなシンメトリ構造をしていると見たときに、意図的な配列であると気づく。

【歌意】

我が心を慰めようとして慰めることができない。さらしなの姨捨山に照る月を見ては。

258 君といへばみまれみずまれふじのねの珍らしげなくもゆる我恋

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋四 六八〇

【注】

「めづらしげなく」

「めづらしげなく」は、普通、

山ちかみめづらしげなくふる雪のしろくやならん年つもりなば

(後撰集 冬 四九一)

のように、いつもいつも変わらず、という程の意味で用いられるが、

天曆御時御屏風

ただ見

春くればまづぞうち見るいその神めづらしげなき山田なれども

(拾遺集 春 四五)

では、ありふれた、目を引くところもない、という気持ちが進められているし、

尾張になりて、めづらしげなうものうき心ちして、十月にくだりしに、

せき山のみぢの袖にちりかかりし

あぢきなくたもにかかる紅葉かなにしきをきてもゆかじと思ふに

(赤染衛門集 二三八)

でも、退屈でつまらない、というニュアンスが含まれる。当該の歌の「めづらしげなく」も同様に、自らの心がいつも燃えていることを、否定的なニュアンスを含んだ言葉で表現したものであり、そこに自虐的にならざるを得ない悲しさが読み取れると考えられるだろう。

【歌意】

あなたのこととなると、逢おうが逢うまいが、富士の嶺のように、あいもかわらず燃えている私の恋の火よ。

259 風ふけば沖つしら波たつた山夜半にや君がひとりゆくらん

【校訂】底本三句「立たかつた山」。新撰和歌諸本により傍記の方をとる。

【他出文献】古今集 雑下 九九四

【注】

「ひとりゆくらん」

結句、古今集は「ひとり越ゆるん」。新撰和歌がなぜこちらの本文を選んだのか、現時点では不明。

〔258番の歌との対応関係について〕

「君」の対応については、257番の歌の注で述べた通り。また、「富士の嶺」と「立田山」という山の対応も認められよう。

【歌意】

風が吹くと沖の白波が立つ、という名を持つ立田山を、夜半に君が一人で行っているのだろうか。

260 あやなくてまだきうき名の立田川わたらでやまむものならなくに

【校訂】底本二句「またなき波の」<sup>きうき名</sup>。新撰和歌諸本では、「またきうき名の」（元禄版本、群書類従本）・「またなきなみの」（松平文庫本、内閣文庫本等）「またきなきなの」（岩瀬本、天理図書館本等）の三種が混在する。このうち「またなきなみの」では、「ほかにないような波が立った」ととれないことはないが、文意が曖昧に過ぎるように思われる。「またき」を「またなき」と見誤ったための誤写かと考える。残り二種については、いずれとも判断しがたいので、古今集とは異なる「またきうき名の」の方を、本稿の原則に従って新撰和歌の本文とみておく。また底本三句「立田山<sup>川</sup>」。新撰和歌諸本により傍記をとる。

【他出文献】古今集 恋三 六二九

【注】

〔渡らでやまむものならなくに〕

下の句は、竜田川を渡らないでやむようなものではないのに、の意味。当該の歌において川を渡るとは、相手に逢うことを意味する。渡らないで止めば、つまり、相手に逢わないままで終わればもう憂き名が立つことはない。しかし、そのようなものではないから、この先憂き名が立つことも予想される。そうなたただけでつらいのに、どうして逢ってもない今の段階でこんなにも早く憂き名が立つなんて、わけがわからない、という心情が初句の「あやなくて」で表されている。

【歌意】

わけもわからないままに早くもいやな評判が立つ。竜田川を渡らないで、あなたのもとに行かないで終わるようなものではないのに。この先どんな憂きことがあるのか心配である。

261 天河雲のみをにてはやければ光とゞめず月ぞながるゝ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑上 八八二

【注】

〔天の川：月ぞ流るる〕

天の川が月を流す、という発想は、

あきかぜになみやたつらむあまのがはわたるまもなくつきのながるる

（新撰万葉 三八〇）

障ることありてなほ同じ所なり。今夜月は海にぞ入る。これを見て、業平の君の「山

の端逃げて入れずもあらなむ」といふ歌なむ思ほゆる。もし海辺にてよまましかば、「波立ち障へて入れずもあらなむ」ともよみてましや。今この歌を思ひ出でて、或人のよめりける、

照る月のながるる見れば天の川出づる水門は海にざりける

とや

(土佐日記 承平五年正月八日条)

あまの河しがらみかけてとどめなんあかずながるる月やよどむと

(後撰集 秋中 三二九)

など、例は少なくない。いずれも月が西に向かう速度の速いことを恨む心情を歌ったものである。

〔260番の歌との対応関係について〕

恋人に会うことを竜田川を渡ることに喩えた260番の歌に、月の運行を天の川の流に喩えた261番の歌をつがえたのであろう。

【歌意】

天の川は雲の流れの水脈であって流れが速いので、空に光をとどめずに月が流れる。もっとゆっくり見たいのに。

262つなでひくひびきのなだのなのりそのなのりそめてもあはでやまめや

【校訂】なし

【他出文献】不明

【注】

〔綱手引く〕

「綱手」は、

人言はしましぞ我妹綱手引く海ゆまさりて深くしぞ思ふ

(万葉集 卷十一 二四三八)

曳く船の綱手の長き春の日を四十日五十日までわれは経にけり

(土佐日記 承平五年二月一日条)

などに見える、舟を引くための綱。当該の歌では「舟を綱手で引いていくひびきの灘、その灘に生えているナノリソの」までが「名のりそめても」を起す序詞となっている。

〔ひびきの灘〕

「ひびきの灘」は、播磨国の灘の名称。後代の例しか確認できないが、波風の荒いところ

ろとして表現されることが多い。

早船といひて、さまことになむ構へたりければ、思ふかたの風さへ進みて、あやふきまで走り上りぬ。響きの灘もなだらかに過ぎぬ。「海賊の船にやあらむ、小さき船の、飛ぶやうにて来る」など言ふ者あり。海賊のひたぶるならむよりも、かの恐ろしき人の追ひ来るにやと思ふに、せむかたなし。

憂きことに胸のみさわぐ響きには響きの灘もさはらざりけり（源氏物語 玉鬘）  
のように、通常は「ひびき」という名称に着目されて用いられるが、次に示す例のように、「響き」に評判という意味がかけられることが多い。

いよにくだるに、よしあるうかれめに

おとにききめにはまだみぬはりまなるひびきのなだときくはまことか

（忠見集 一四八）

はりまよりのぼりたるに、ひびきのなだに、風ふきて、いとみじき

めみたりとききて、ある人の

よそ人もかかるひびきのなだゆゑにきくにたもとのただならぬかな

返し

かなしさはひびきのなだにみちにけり宮この人もききおつるまで

（恵慶法師集 一九〇・一九一）

これらのことを踏まえれば、当該の歌では、「綱手引くひびきの灘」に、恋の相手に「引く」、すなわち多くの人が言い寄っているという評判が聞こえる、という意味を込めているものと考えられよう。

〔名のりそめても〕

思う相手に対して自ら名のることは、

御食向かふ淡路の島に直向かふ敏馬の浦の沖辺には深海松採り浦廻にはなのりそ刈る深海松の 見まく欲しけど なのりその 己が名惜しみ 間使ひも遣らずて我は生けりともなし

（万葉集 卷六 九四六）

のように、なかなかできないことであり、であるからこそ、名乗ることによって、当然相手に会える、という前提で詠まれた歌が、

味鎌の塩津をさして漕ぐ舟の名は告りてしを逢はざらめやも

（万葉集 卷十一 二七四七）

住吉の敷津の浦のなのりその名は告りてしを逢はなくも怪し

志賀の海人の磯に刈り乾すなのりその名は告りてしをなにか逢ひ難き

(同 卷十二 三〇七六)  
(同 卷十二 三一七七)

のように、万葉集には見える。平安時代の歌では、

庭はらふに撫子の引ききられたるをみて、なかふむ

すき物を花のあたりによせざらば此床夏にねたえましやは

宮の女房すけの君といふ人

床夏も花のなたてに思ふらんなどすきもののねしりがほなる

といひて後、なかふが久しう見えざりければやりける

いかにぞや名のりし人もかれぬれば過ぎにし花の折ぞ恋しき

(公任集 三四九〜三五二)

などに、思いを実現させるためにあえて名のる、という考え方の痕跡が見られるが、おおかたは、

ひとのつばねをしのびてたきけるにたぞとひはべりければよみは

べりける

大式成章

いそなる人はあまたにきこゆるをたがなのりそをかりてこたへん

(後拾遺集 雑二 九六一)

や、

左衛門督の命婦のもとに、権中将となりて、宮のおはしたりときき

てやる

あやしくもわがぬれぎぬをきたるかなみかさのやまを人かられて(義孝集 一八)

十月ある女に、さねかたの兵衛のすけとなりて、こと人のきたりけ

るをききて、女に

たれならむいかでのもりにこととはむしめのほかにてわがなかりけむ

(実方集 七九)

のように、女房の局に忍び込む男が他人の名をかたる、という内容を詠んだものである。このことから、万葉集の歌に詠まれたような発想は、新撰和歌の当時、すでに相当古いものと思われ、意識されていた可能性も考えられる。

### 【歌意】

舟を綱手で引いていくひびきの灘、その灘に生えているナノリソのように、私の名前をし

つかりと名乗り、人に知られてでも、誘う人の多いと聞くあなたに逢わないでおこうものか。

263 都にてひびききこゆるからことは浪のをすげて風ぞひきける

【校訂】底本初句「都まで」。新撰和歌諸本で「都まで」と「都にて」が混在するが、本稿の原則に従って、古今集とは異なる方の本文をとる。結句底本「風そひきける<sup>くめる</sup>」。新撰和歌諸本により本文の方をとる。

【他出文献】古今集 雑上 九二一

【注】

〔都にて響き聞こゆる唐琴〕

上の句は、「都で評判が聞こえる唐琴の地」ということに、響きが聞こえる「琴」という意味を含ませる。なお、この部分は、古今集では「都まで響きかよへる」とある。ただ、古今集諸本のうちには「響ききこゆる」という本文を伝えるものもあり、新撰和歌が本文を改めたのかどうか、判断しがたい。

また、遙か彼方まで音が聞こえる琴の話としては、仁徳記や応神紀に伝える、枯野という船の焼け残りの材で作った琴の例がある。あるいは、当該の歌の表現も、この話を踏まえたものかもしれない。

〔262番の歌との対応関係について〕

双方とも第二句に「ひびき」という言葉がおかれる。また、「ひびきの灘」「唐琴」という、音に関わる地名を読み込んでいる点でも対応する。さらに、それぞれの地名が播磨と備前という近接した土地の名であることも意識されていたかもしれない。

【歌意】

都でその評判が聞こえる唐琴は、波の緒をすげて風が弾いているのだ。

264 あふことのなぎさにしよる浪なればうらみてのみぞ立かへりける

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋三 六二六

【注】

〔うらみてのみぞ立ち帰りける〕

この句は、波の文脈で「浦を見るだけで返った」ということと、恋の文脈で「ただ恨ん



で帰った」ということの掛詞になっている。なお、「うらみて」の「うら」には、秋風の吹きうらがへすくずのはのうらみても猶うらめしきかな（古今集恋五823）のように、「裏」という言葉が連想されやすい。

【歌意】

逢うことが無き、なぎさに寄る波なので、浦だけを見て帰るように、私もあなたに逢えないので、ただ恨んで帰ったのです。

265 あかずして月のかくるゝ山里はあなたおもてぞ恋しかりける

【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑上 八八三

【注】

〔山里は〕

第三句は、古今集では「山もと」となっている。「山もと」という言葉そのものは特別なものではないが、和歌における使用例を見ると、大部分が、

わがいほはみわの山もとこひしくはとぶらひきませすぎたてるかど

（古今集 雑下 九八二）

を踏まえたものであり、「山もと」の語だけで、「わがいほは」の歌を連想するような状態であったと思われる。それを嫌って新撰和歌では「山里」という言葉に替えたのではないか。

〔264番の歌との対応関係について〕

264番の歌の「うらみて」の「うら」と、265番の歌の「あなたおもて」の「おもて」が対応している。「恨みて」で「裏」を連想することは、264番の歌の注に述べたとおり。また、「あなたおもて」については、「あなたおもて」は珍しい語であるが、…後世、…おもしろい歌語として、おもしろく詠まれている（片桐洋一『古今和歌集全評釈』）という指摘がある。そうしたおもしろい語に着目させるために対にしたという可能性もあろう。なお、「恨む」と「表」の対応のおもしろさを詠んだ例として、後のものであるが、

とにかくに身にはうらみのみちみちておもてををがむ方ぞ覚えぬ

（長秋詠草 一八一）

などがある。

【歌意】

十分に満足しないうちに月が隠れてしまう山里では、山の向こう側が恋しいのであった。

266 人しれぬおもひのみこそ侘しけれ我歎をば我のみぞしる

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋二 六〇六

【注】

〔思ひく嘆き〕

古今集の現行の諸注釈では、「思ひ」に「火」を、「嘆き」に「投げ木」がかけられているかどうかで説が分かれている。たしかに掛詞を認定しなくては、あまりに平凡な歌のようでもあるし、一方、掛詞を認定するとして、「火」「投げ木」に縁のある言葉が一首に用いられていないのであるから、その必然性は乏しいと言わざるを得ない。

さて、この歌では、上の句と下の句で「人」―「我<sup>わ</sup>」、「のみ」―「のみ」、「知れぬ」―「知る」という言葉の対応が三組存する。これはなかなか類例の見られないものなので、掛詞を認定せずとも、十分に古今集、そして新撰和歌の歌として通用するおもしろさを有していると見たいのだが、いかがであろうか。

【歌意】

人知れぬ思いだけがまさに侘しいのだ。私の嘆きは私だけが知っているのだ。

267 あかなくにまだきにまだきに月のかくるゝか山のはにげていれずもあらなん

【校訂】底本二句「またきも月の」。新撰和歌諸本で「まだきも」と「まだきに」が混在するが、本稿の原則に従って、古今集とは異なる方の本文をとる。

【他出文献】古今集 雑上 八八四

【注】

〔266番の歌との対応関係について〕

266番の歌は、「人」―「我<sup>わ</sup>」、「のみ」―「のみ」、「知れぬ」―「知る」という上の句と下の句の言葉の対応のおもしろさが興味の中心にある歌と思われる。これと対にされた267番の歌も、上の句の月が「隠るる」と、下の句の月を「入れず」という言葉が対になっている。この二つの言葉は、古今集の詞書によれば「(惟喬親王が)十一日の月もかくれなむとしけるをりに、みこ多ひてうちへいりなむとしければよみ侍りける」と、

ほぼ同じ内容を言い換える形で用いていることがわかるし、そのことが、266番の歌と対にされることで、いつそう注意されることになるだろう。さらに、267番の歌の第二句は、古今集の「まだきも」が新撰和歌で「まだきに」と変えられているものと考えたが、これも、「あかなくに」「まだきに」という言葉の重複を狙った改変と言えるのではないだろうか。

なお267番の歌の、雑歌としては直前の265番の歌が、古今集でも267番の歌の直前に配されて、「飽か」ないうちに沈む月、という共通の素材を詠んだものであるが、そのことによって新撰和歌でもここに配された可能性も考えなくてはならないだろう。

#### 【歌意】

まだ十分に満足しないのに、その時にならないのに月が隠れることよ。山の端よ、月から逃げて入れないでほしい。

268 石上ふるともあめにさはらめやあはむといもにいひてしものを

#### 【校訂】なし

【他出文献】万葉集 卷四 六六四・拾遺集 恋二 七六五

但し、万葉集歌は「石上降るとも雨につつまめや妹に逢はむと言ひてしものを」であり、新撰和歌の歌とかなり本文が異なる。

雨ふりてさよはふくとも猶ゆかんあはんといもにいひてしものを

(古今和歌六帖 四四二)

と、他にも当該の歌の下の句と同一の下の句を持つ歌も見られることから、当該の歌は、万葉集の歌そのものではなく、万葉集六六四番の歌、あるいはその伝承歌を改作したものと考えられるだろう。

#### 【注】

〔石上ふる〕

「石上」は、

いそのかみふるき宮この郭公声ばかりこそむかしなりけれ (古今集 夏 一四四)

いそのかみふるのなか道なかなかに見ずはこひしと思はましやは

(同 恋四 六七九)

のように、「ふる」にかかる枕詞として、古今集の時代にも多く用いられたものである。

〔降るとも雨にさはらめや〕

雨に妨げられずに女の元に来ることは、

雨にもさはらずまできて、そら物がたりなどしけるをとこの、かどよ  
りわたるとて、雨のいたくふればなんまかりすぎぬるといひたれば  
ぬれつつもくると見えしは夏引のてびきにたえぬいとにや有りけん

(後撰集 恋五 九七九)

からわかるように、男の誠意の表れである。当該の歌も、そのような誠意を女に表したものであろう。

【歌意】

石上の布留<sup>ふりぞ</sup>ではないが、たとえ雨が降<sup>ふ</sup>にしても妨げられることがあろうか。「逢おう」と彼女に言ったのに。

269 おもふよりいかにせよとか秋風になびく浅茅の色ことになる

【校訂】底本四句「なびく尾花<sup>浅茅の</sup>の」。新撰和歌諸本により傍記の方をとる。

【他出文献】古今集 恋四 七二五

【注】

「いかにせよとか」

第二句の「いかにせよとか」の結びをどこに求めるかで、古今集の諸注に二説ある。

「とか」の下に省略された語があると見て、二句切れに見る説と、「か」の結びを「ことになる」であると解釈する説とである。

さて、「いかにせよとか」は、比較的頻繁に和歌に用いられる表現であるが、それらのうち、  
あしひきの山べにをれば白雲のいかにせよとかはるる時なき

(古今集 物名 四六一)

唐錦をしきわがなはたちはてて如何せよとか今はつれなき(後撰集 恋二 六八五)  
など、文末を連体形で結んでいることがわかる例があるのに対して、「いかにせよとか」で切れるとみなければならぬ例は見いだしがたい。そのことから、当該の歌でも「か」の結びを「ことになる」とみて解釈をしておく。

〔古今集との解釈の相違について〕

当該の歌は、古今集では恋の部におかれているものである。そのことから、秋になつて色を変えた浅茅は、「飽き」のために態度を変えた恋人を喩えていると理解される。

一方、新撰和歌では雑部に配されていることから、色づいた浅茅は、おほかたの秋くるからにわが身こそかなしき物と思ひしりぬれ

(古今集 秋上 一八五)

などに見える、一般的な秋の悲しさをかき立てる景物として描かれていると理解できよう。  
〔268番の歌との対応関係について〕

268番の歌は、雨が降ろうとも変わることはない強い思いを詠んだものであった。269番の歌は、秋風が吹いただけで簡単に色を変える浅茅を詠んだものである。そうした対照的な態度をうたっている点に注目して対にされたか。

【歌意】

秋の悲しみを思うこと以上にどうしろというので、秋風になびく浅茅の色が変わるのであるか。

270あなこひし今もみてしか山賤のかきほに生る大和なでしこ

【校訂】底本四句「かきほに<sup>生</sup>さける」。新撰和歌諸本で「さける」と「おふる」が混在するが、本稿の原則に従って、古今集とは異なる方の本文をとる。

【他出文献】古今集 恋四 六九五

【注】

〔かきほに生ふる〕

この句は、古今集では「かきほに咲ける」となっている。当該の歌と対にされた271番の歌の「住み」という言葉とは、「生ふる」、すなわち山中の家で成長した、という本文の方が照応しやすいように思われる。そのために「生ふる」の本文を選んだものか。

【歌意】

ああ恋しい。すぐにでも見たいことよ。山に住む人の家の垣根に生えている大和撫子を。あのかわいらしい娘を。

271あれにけりあはれいくよの宿なれやすみけん人の音信もせぬ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑下 九八四

【注】

〔あはれいくよの宿なれや〕

「くなれや」という表現は、

さとはあれて人はふりにしやどなれや庭もまがきも秋ののらなる

(古今集 秋上 二四八)

ゆきふりて人もかよはぬみちなれやあとはかもなく思ひきゆらむ(同 冬 三二九)のように、「(本当はそうではないのに)くだとでもいうのか」というほどの、現実とは異なるものを喩えにして、そうではない、ということを訴える文脈で用いられる。当該の歌でも、そんなに古くもないのに、あつという間にあれてしまった宿を目にして、「幾代」という大げさな表現でもって、「幾代も経た宿だとでもいうのか」と訴えているとされる。

〔270番の歌との対応関係について〕

270番の歌は、初句と二句の二カ所に句切れを持っていた。それと対にされたのが、初句と三句の同じく二カ所に区切れを持つ271番の歌である。また、270番の「山賤のかきほに生ふる大和撫子」と、「宿：住みけん人」という内容の類似も意識されているのではないか。

【歌意】

荒れ果ててしまったことよ。ああ、しかしいったい幾代を過ぎた住まいだというのか。そんなこともないのに、もう、住んでいただろう人の訪れもしないことよ。

272むら鳥の立にし我名今更に事なしづともしるしあらめや

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋三 六七四

【注】

〔群鳥の立ちにし我が名〕

「群鳥の」が枕詞的に「立つ」にかかっている。こうした例は万葉集には四例見られるが、平安時代の作には他に見いだしがたい。

〔くともしるしあらめや〕

この歌の結句に関しては、万葉集に

橘をやどに植ゑ生ほし立ちて居て後に悔ゆとも験あらめやも

(万葉集 卷三 四一〇)

ほととぎす今鳴かずして明日越えむ山に鳴くとも験あらめやも

など、ほぼ同じ表現が見られる。このことと、「群鳥の」という言葉を用いていることから、当該の歌が古風なものであることが推測される。

【歌意】

多くの鳥が一斉に飛び立つように、わっと広まってしまった私の噂は、今更何もなかったようにしても、何の甲斐もない。

273 芦田鶴のたてる川辺をふく風によせてかへらぬ波かとぞみる

【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑上 九一九

【注】

〔272番の歌との対応関係について〕

「群鳥の立ち」で始まる272番の歌に、「葦鶴の立てる」という、似通った言葉で始まる273番の歌をつがえた。なお、272番の歌が古風な、万葉調のものであったのに対して、273番のうたが、いかにも貫之の作らしい、古今集風の新しい、機知的な表現を用いた歌であることも意識されていたかもしれない。

【歌意】

白い鶴の立っている川辺を、吹く風に打ち寄せては、しかし、そのままとどまって返らない波かと見ます。

274 人しれずやみなましかば侘つゝもなき名ぞとだにいましものを

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋五 八一〇

【注】

〔人知れずやみなましかば〕

この歌は、古今集では恋五に置かれ、恋もほぼ終わりの段階の歌として位置づけられている。その場合「人知れず絶えなましかば」という仮想の表現は、もはや多くの人に知られているので、そんなことはできない、という現実の裏返しとして理解できよう。一方、新撰和歌では、まだ逢い始めて幾ばくも経たないころの歌として、当該の歌は位置づけられている。この場合、「人知れず止みなましかば」は、今すぐにやめてしまえば人には知

られないが、この恋をやめることはできないという現実を言わんがための表現と考えられよう。

「やみなましかば」

第二句、古今集は「絶えなましかば」。恋の歌において「絶ゆ」という語は、

風ふけば峰にわかるる白雲のたえてつれなき君が心か (古今集 恋二 六〇一)

玉かづら今はたゆとや吹く風のおとにも人のきこえざるらむ (同 恋五 七六二)

わすらるる身をうちばしの中たえて人もかよはぬ年ぞへにける (同 恋五 八二五)

のように、男の訪れが途絶える、という文脈で用いられることが多く、当該の歌の場合も訪れが絶えかけている男に対して、嫌みとして言いかけた歌として受け取られる蓋然性が高い。それに対して、「止む」であれば、二人の関係、あるいは恋の思いが終わる、というだけの意味で、嫌みにはならないだろう。なお、古今和歌六帖や古本説話集などに「やみなましかば」という本文を伝えるものがあり、新撰和歌が本文を改変したのか、別に存在した本文を採用したのか、判断しがたい。

【歌意】

二人の仲が人知れず終わるならば、つらい思いはしながらでも、「事実無根です」とだけでも言いましょう。(この恋が終わることはありそうにない。)

275 いにしへの野中の清水ぬるければもとの心をしる人ぞくむ

【校訂】底本初句「いにしへの」。

故郷イ

新撰和歌諸本により本文をとる。また三句底本「ぬるけれど」。新撰和歌諸本で「ぬるけれど」と「ぬるければ」が混在するが、本稿の原則に従って、古今集とは異なる方の本文をとる。

【他出文献】古今集 雑上 八八七

【注】

「もとの心」

「もとの心」は、当該の歌と、古今集の次の二首、

むかしあひしりて侍りける人の、秋ののにあひて物がたりしけるついでによめる

みつね

秋はぎのふるえにさける花見れば本の心はわすれざりけり (古今集 秋上 二一九)

いそのかみふるからをのものがしは本の心はわすられなくに (同 雑上 八八六)

以外に、この当時の用例を見いだすがたい表現である。さて、右の二例はともに、「萩の



古枝」や「古幹小野の本柏」という、古びたものの隠し持っている本性を、人がかつて抱いていた本心に喩えたものである。これと同様に、当該の歌も、人事を歌ったものとして受け取るべきであろう。

〔ぬるければ〕

第三句は、古今集には「ぬるけれど」とある。右に述べたように、当該の歌は、人事を詠んだものと考えられるから、「いにしへの野中の清水」は、年老いてしまった我が身を暗示し、「汲む」は、くみ取る、理解する、ということを表すだろう。さて、「ぬるけれど」の場合には、老いぼれてはいるけれどもわかってくれる人はわかってくれる、という自負心を表すことになるだろうし、「ぬるければ」であれば、老いぼれているのでわかってくれる人だけがわかってくれる、という諦念を表すことになるう。

〔274番の歌との対応関係について〕

「人知れず」という言葉で始まる274番の歌に、「知る人」という言葉を持つ275番の歌をつがえたのであろう。

【歌意】

古い野中の清水はぬるいので、本来のすがしさを知っている人だけが汲んでくれる。そのように、私も老いぼれましたので、かつてのことを知っている人だけが私を理解してくれるのです。

276ひとしれず物をおもへば秋の田のいなばのそよといふ人もなし

【校訂】底本初句「ひとりして」、結句「人のなき<sup>そ</sup>」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】古今集 恋二 五八四

【注】

〔人知れず物をおもへば〕

「人知れず思ふ」という表現は、古今集では、

人しれずおもへばくるし紅のすゑつむ花のいろにいでなむ（古今集 恋一 四九六）

忍ぶれば苦しきものを人しれず思ふてふ事誰にかたらむ（同 恋一 五一九）

ひとしれず思ふ心は春霞たちいでてきみがめにも見えなむ（同 雑下 九九九）

のように、人知れず思うことは苦しいので、表に出してしまおう、という文脈で用いられる。それが「人知れず思ふ」の、当時の歌語としての用法だったようである。そういう和歌的常識を踏まえて、「人知れず思ふ」のなら、だれも知らないし、だれも同情してくれ

ない、という、新しい、機知的な発想を試みたのが当該の歌だったのではないか。そして古今集以後は、

人しれず思ふ心はおほしまのなるとはなしになげくころかな

(後撰集 恋一 五九三)

人しれず物思ふころのわが袖は秋の草ばにおとらざりけり (同 恋五 九〇一)

いかでかはしらせそむべき人しれず思ふ心のいろにいでずは

(拾遺集 恋一 六三四)

のように、当該の歌の発想が定着したものと見え、「人知れず思ふ」は、表に現れないことを意識しながら歌に詠まれるようになる。なお、古今集では初句「ひとりして」となっている。古今集の躬恒の歌を、貫之が新しい発想の歌に作り直したものであろうか。

#### 【歌意】

人知れず物思いをしているので誰も私の思いを知らず、秋の田に風が吹いて葉擦れの音が「そよ」と聞こえるように、「そよよ」と言ってくれる人もいない。

277 難波がたおふる玉もをかりそめのあまとぞ我は成ぬべら也

【校訂】底本二句「おふる玉もををのかたもとを」。 「をのかたもとを」では、意味が通じないので、

傍記ををる。 あえて「おのかたもと」とみて解釈する場合は、「難波瀉で己が袂を（汐にぬらして藻を）刈るかりそめの海人」（増田繁夫氏直話）というほどにとらざるを得ないが、その場合、相当に舌足らずの歌ということになり、貫之が自作としてそのような歌を新撰和歌に選ぶのかどうか、疑問であると思う。なお、新撰和歌諸本のほとんどが、底本と同様に「をのかたもとを」の本文で「おふる玉藻」を注記する。現存諸本に共通する祖本の時点で誤写があったかとは今は考えておく。

【他出文献】古今集 雑上 九一六

#### 【注】

〔生ふる玉藻を刈りそめの〕

古今集の諸注では、「生ふる玉藻をかりそめの海人」の部分の解釈として、「玉藻を刈り初めた、仮そめの海人」と取る説と「玉藻を刈り」までが掛詞で「仮そめの海人」に続く、とみる説がある。類似の表現を用いた歌、

おもひに侍りけるとしの秋、山でらへまかりけるみちにてよめる

つらゆき

あさ露のおくての山田かりそめにうき世中を思ひぬるかな（古今集 哀傷 八四二）

人のもとにまかりて侍るに、よびいれねばすのこにふしあかして、つ

かはしける

藤原成国

秋の田のかりそめぶしもしてけるかいたづらいねをなにつままし

（後撰集 恋四 八四五）

で「かり」だけが掛詞になる形で用いられていることと、玉藻を「刈り初めた」海人、と取ったところで、海藻を初めて刈る海人、ということと、仮りそめの海人、ということが意味的に重ならないので、後者の説が適当かと思われる。

〔海人とぞ我はなりぬべらなる〕

早く万葉集の

麻統王、伊勢国の伊良虞の島に流さるる時に、人の哀傷びて作る歌

打麻を麻統王海人なれや伊良虞の島の玉藻刈ります （万葉集 卷一 二二三）

という歌以来、貴族の落魄した姿を海人に喩える表現が広まり、

荒たへの藤江の浦にすずき釣る海人とか見らむ旅行く我を（万葉集 卷三 二五二）

網引する海人とか見らむ飽の浦の清き荒磯を見に來し我を（同 卷七 一一八七）

という類の歌が詠まれることになった。これらは、いずれも海辺にいる自分の姿が、落ちぶれたように見えるのではないか、海人と間違えられるのではないかと案ずるものである。そして、この発想は、

おきのくにながされて侍りける時によめる たかむらの朝臣

思ひきやひなのわかれにおとろへてあまのなはたきいさりせむとは

（古今集 雑下 九六一）

と、有名な小野篁の歌にも受け継がれている。

一方、当該の歌には、落魄の気配も暗い気分も表現されていないと思われる。「海人とぞ我はなりぬべらなる」と言っているのだから、実際には海辺にいても、海人のように見えるほど落ちぶれ、うらぶれているわけではないし、「仮そめの海人」という言葉からは、むしろふざけた余裕さえ読み取れるからである。都人が海辺に遊び、うらぶれた海人のポーズをしてみてもは楽しむ、そうした歌であると思われるのである。当該の歌がこのように読めるならば、この歌は、都人が海辺に来て、海人に見まがえられることを思う、という和歌の趣向を、新しい発想で読んだものということになるう。

〔276番の歌との対応関係について〕

「人知れず思ふ」という古くからの和歌表現を、新しい発想で詠み直した2776番の歌に、海辺を訪れた都人が海人と見られる、という、これも古くからの表現を、新しい発想の歌に用いた2777番の歌をつがえたと思われる。また、「稲葉のそよと」「玉藻をかりそめのあま」という掛詞を用いている点も共通する。

【歌意】

ここ、難波に来て、難波潟に生える美しい藻を刈り、かりそめの海人と私はなってしまうそうです。

278 それをだに思ふことゝて我宿をみきとないひそ人のきかくに

【校訂】底本初句「それをたに<sup>こ</sup>」。新撰和歌諸本により本文の方をとる。

【他出文献】古今集 恋五 八一一

【注】

〔それをだに思ふこととて〕

上二句の解釈に関しては、古今集諸注の見解が一致しない。それは、一首の表現自体が曖昧であるので、やむを得ないことと思う。ただ、新撰和歌の歌として一首を解釈する場合には、対にされた2779番の歌と比べることによって、何らか手がかりが得られるのではないか。

では、新撰和歌では、2779番の歌と、どのような点に注目して対にされているのか。まず目につくことは語句の対応である。両歌とも「それ」「ここ」という指示代名詞で始まり、以降、「我が宿」と「我が世」、「聞かくに」と「あれまく」という、類似する言葉が連続する。

さて次に、2779の歌が、二句切れで倒置的な表現になっていることと、初句の指示代名詞「ここ」の示す内容が「菅原や伏見の里」という第三、四句であることにも注目したい。なぜならば、2778番の歌も、同じ構造を持っていると見ることが可能だからである。「それ」の示す内容を三、四句の「我が宿を見きとないひそ」とし、二句切れの倒置表現と考えれば、一首は、「我が宿を見たとは言わないでください。人が聞くことでしょうか。」「ということだけを思う事としています、と解釈できる。つまり、二人の仲を秘密にしておいてくださいという意味の表現として理解できよう。

新撰和歌の歌としては、このように考えておきたい。

【歌意】

私の宿を見たと言わないでください。人が聞くでしょうから。…そのことをだけ思うこととして願っています。

279こゝにして我世はへなむ菅原や伏見のさとのあれまくもおし

【校訂】底本初句「こゝにして」<sup>いさこゝに</sup>。新撰和歌諸本で「ここにきて」と「いざここに」が混在するが、本稿の原則に従って、古今集とは異なる方の本文をとる。

【他出文献】古今集 雑下 九八一

【注】

〔こゝにして〕

初句は、古今集では「いざここに」。「いざ」という呼びかけの言葉があることで、古今集の歌は、他人に対する宣言のようなニュアンスがあるのに対して、新撰和歌の本文では、穏やかな述懐の歌となっていると受け取られる。

〔荒れまくも惜し〕

「荒れまく」はいわゆるク語法。荒れること。伏見の里が荒れることが惜しい、というのが、上二句の「こゝにして我が世は経なむ」の理由説明になっている。

〔278番の歌との対応関係について〕

語句のレベルでは、初句が「それ」「こゝ」という指示語で始まること、また「我が宿」と「我が世」という類想の言葉があること、そして、「聞かくに」と「荒れまく」と、「ク語法」が用いられていること、の三点が双方に共通する。それに加えて、278番の歌の注で述べたように、双方共に二句切れで倒置表現になっていると見ておきたい。

【歌意】

ここで我が生涯は過ぎそう。菅原の伏見の里が荒れるのも惜しいから。

280しほみてばいりぬる磯の草なれやみらくすくなくこふらくの多き

【校訂】第三句以下、松平文庫本、岡山大学蔵池田家文庫本、書陵部蔵鷹司乙本、彰考館蔵本が、「みるひすくなくこふらくおほし」という本文を伝える（群書類従本は「みるめすくなくこふらく多し」）。拾遺集「異本第一系統」の諸本が、「みるひすくなく」という本文を伝え、また歌経標式に、二句以下「俱佐那羅旨 美留比須俱那俱古不留与於保美」としてこの歌を載せるので、万葉集時代のもとの歌が、様々な形で平安時代に読み継がれていたものと思われるが、対にされた281番の歌との関係を考えるな

らば、底本の形が新撰和歌本来としては本来のものかと思われる。

【他出文献】拾遺集 恋五 九六七・万葉集 卷七 一三九四

【注】

〔草なれや〕

「なれや」は「なればや」の略。「や」は係助詞で「多き」にかかる。

第三句を「くなれや」として、そのように感じる理由を下の句で述べる形式の歌は、万葉集の、

打麻を麻統王海人なれや伊良虞の島の玉藻刈ります (万葉集 卷一 二二三)

山のまゆ出雲の児らは霧なれや吉野の山の嶺にたなびく (同 卷三 四二九)

以来確認でき、古今集でも

わがこひはみ山がくれの草なれやしげさまされどしる人のなき

(古今集 恋二 五六〇)

冬河のうへはこほれる我なれやしたにながれてこひわたるらむ(同 恋二 五九一)など、多く詠まれているものである。本来そうではないのに、そのように思われるのはなぜなのか、という気持ちを表す。

【歌意】

あの人は潮が満ちると水に入ってしまう磯の草なのか、そうではないのに、見るのが少なく、恋しく思うことが多いよ。

281 思ふどちまどゐせる夜はからにしきたまくおしき物にぞありける

【校訂】底本二句「まどゐせる夜は<sup>のイ</sup>」。群書類従本、松平文庫本、内閣文庫本等が「夜の」という本文を伝える。古今集諸本は「まどゐせる夜は」。本稿では古今集と異なる本文が新撰和歌伝本中に見られる場合はそちらをとる、という原則を立てているが、「夜の」の本文では、人に知られないことを惜しむ「夜の(唐)錦」となり、「まどゐ」しているおりの歌としてはふさわしくない。よって、ここでは底本の傍記はとらない。

【他出文献】古今集 雑上 八六四

【注】

〔思ふどち〕

この表現に関しては、「俗なる世界から脱出して、「思ふどち」が野外に集い、心を遊ばせ、詩や歌を作り合つて風流に遊ぶという営みは、「思ふどち」という語を頻用する大

伴旅人・家持グループから、勅撰三詩集の時代を経て、『古今集』の時代まで連続と続いていたのである。」（片桐洋一『古今和歌集全評釈』一二六番歌【鑑賞と評論】の項）という指摘がある。

〔280番の歌との対応関係について〕

「見らく」「恋ふらく」とク語法の語を重ねて用いた280番の歌に、同じく「たたまく」という語を用いた281番の歌をつがえたのであろう。またどちらも万葉集の時代からの古風な発想で詠まれた歌であるという点でも共通する。

【歌意】

気の合う者同士が集う夜は、唐錦を裁つのが惜しいように、席を立つことが惜しいものであったよ。

282 人はいさ我はなき名のおしければ昔も今もしらずとをいはん

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋三 六三〇

【注】

〔人はいさ〕

当該の歌の「人」は、一首だけを見る場合には、世間一般の人とも、恋の相手とも解釈が可能であるが、対にされた283番の歌の「人」が相手であることを思えば、この歌の「人」も恋の相手と見るのが新撰和歌の理解としては妥当であろう。

〔昔も今も知らずとをいはん〕

当該の歌の前後の恋歌は、

しほみてはいりぬる磯の草なれやみらくすくなくこふらくの多き

（新撰和歌 二八〇）

◇人はいさ我はなき名のおしければ昔も今もしらずとをいはん （同 二八二）

あま雲のよそにも人のなり行かさすかに目にはみゆる物から （同 二八四）

と、思う人に逢えない、そして恋人が遠ざかっていくことを詠んだものである。新撰和歌としては、これらの歌に挟まれた位置に置かれたものとして、つまり、愛しい人が離れていく辛さを詠んだものとして当該の歌を理解するべきであろう。そうすると一首は、逢ってくれぬ冷たい人に対して、「冷たくなってしまったあなたとの関係を、今更どうこう噂されても、それは「なき名」のようなものですから、いっそ私は過去も未来もあなた

に逢ったことはありませんと言いましよう」と皮肉を言ったものとして理解することになるだろう。

【歌意】

人はさあ、どう思ふか知らないが、私は事実無根のごとき評判が立つのが惜しいので、昔も今も「あんな人のことなど知らない」と言いましよう。

283 わが身からうき名の河とながれつゝ人の為さへかなしかるらむ

【校訂】底本二、三句「うき名の河とながれつゝ」、また「名」の左に「世力」と記す。

新撰和歌諸本により、傍記はとらない。

【他出文献】古今集 雑下 九六〇

【注】

第二句は、古今集では「うき世の中となづけつつ」とある。282番の歌と対にするために、「憂き世」を「憂き名」に改変したものが当該の歌であろう。その結果、「憂き名」の「憂き」に「浮き」がかけられて、「河と流れつつ」につながる技巧的な表現となっている。

〔282番の歌との対応関係について〕

いずれも「名」、すなわち噂が人に知られることを素材にした歌であることに加えて、282番の歌の「人」「我」と、283番の歌の「我が身」「人」が対応する。

【歌意】

我が身が原因で憂き名が河のように幾たびも流れる。それだけでもつらいのに、どうしてあの人のためにまで悲しいのだろうか。

284 あま雲のよそにも人のなり行かさすがに目にはみゆる物から

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋五 七八四

【注】

〔天雲の〕

「天雲の」は、

天雲のよそに見しより我妹子に心も身さへ寄りにしものを

（万葉集 卷四 五四七 古今和歌六帖 三〇八〇も同じ）



あま雲のよそなる思ひつけしよりむなしき空になりわたるかな

(古今和歌六帖 二五九)

のように、「よそ」の枕詞。ただし、当該の歌の場合は、

天雲のよそに雁が音聞きしよりはだれ霜降り寒しこの夜は

(万葉集 卷十一 一一三二 古今和歌六帖 六七八も同じ)

天雲のよそにのみしてふることはわがゐる山の風はやみなり

(伊勢物語 十九段 当該の歌の返歌)

などと同じく、枕詞として用いられるのと同時に、空の上の雲、という実質的な意味を有していると考えられる。

「よそにも人のなりゆくか」

新撰和歌の配列上は、当該の歌は、恋人と逢うことが途絶えがちになった段階のものとされている。そのことから、第二句の「人」は、訪れが途絶えがちになった男のことを指していると理解できる。

「さすがに目にはみゆるものから」

当該の歌の上の句は、右に述べたように、訪れが途絶えがちになった男のことを表現したものであった。その文脈で考えれば、下の句は、「訪れが途絶えたと言っても、あの人のことは目には見える」と言っていることになる。さて、訪れが途絶えた男が目に見えるとは通常の言い方とは思われないが、「天雲」は、右にあげた万葉集五四七番の歌や伊勢物語十九段の歌のように、遠いけれども目に見えるものであることを踏まえた、機知的な表現だと考えることができる。つまり、「あの人は天雲のように遠ざかった。天雲に似ているだけあって、目には見えるのだけでも」ということである。恋人が目に見えるけれども逢うことができない、ということも、

人言を繁み言痛み我が背子を目には見れども逢ふよしもなし

(万葉集 卷十二 二九三八)

のように、早くから歌に詠まれるもので、特別とつびな発想というわけではない。

なお、このように解釈は可能であるけれども、やはり逢うことが途絶えがちになった人が「目に見」えるというのは、具体的にどのような状況を想定したらよいのか、わかりにくいことは否めない。気になる、と言っても良いかと思われる。そうした関心を膨らませて歌物語に仕立てたのが、伊勢物語十九段であり、古今集の784と785番の贈答ものではなからうか。

【歌意】

空の雲のように、あの人が遠く離れたものになってゆくことよ。そうはいつでも天雲というだけあって、遠くに目には見えるものの。

285 いくにか世をばいとむ心こそ野にも山にもまどふべらなれ

【校訂】底本三句以下「心こそ野にも山にもまどふべらなれ世中に老をいとぬ人しなけれは」。新撰和歌諸本により傍記をとる。

【他出文献】古今集 雑下 九四七

【注】

「いくにか世をば厭はむ」

初二句の「いくにか世をば厭はむ」は、第三句の「心こそ」に注目するならば、「いったいどこに世を厭って身を置こうか」と、「心」に対する「身」を意識した表現であると理解される。

「心こそにも山にもまどふ」

初二句「いくにか世をば厭はむ」が、どこに身を置いたら良いのかわからない、という嘆きを表すのに対して、三句以下の「心の方は野でも山でも惑いそうである」ということは、身を置くべき場所がわからぬ理由とみるべきであろう。そうでなければ、一首のつくりとして、おもしろくないからである。なお、「野」や「山」が隠棲の地としてふさわしい場所であることも、この推定を補強するだろう。

〔284番の歌との対応関係について〕

思う人の訪れが途絶えて逢うことが稀になったのに、目には見えている、という矛盾を詠んだ284番の歌に、身の方は隠棲できても心は隠棲できない、という矛盾を詠んだ285番の歌をつがえたのであろう。

【歌意】

いったいどこに世を厭って身を置こうか。身を置くのが野であろうと山であろうと心の方は惑ってしまいそうだから、どこに隠れ住むべきかわからないよ。

286 月夜にはこぬ人またるかきくもり雨もふらなんわびつゝもねむ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋五 七七五

【注】

〔月夜には来ぬ人待たる〕

初二句は、月夜には恋人の訪れが待たれる、というものが、

しのぶれどこひしき時はあしひきの山より月のいでてこそくれ

(古今集 恋三 六三三)

今こむといひしばかりに長月のありあけの月をまちいでつるかな

(同 恋四 六九一)

こぬ人をしたに待ちつつ久かたの月をあはれといはぬ夜ぞなき (貫之集 八〇)

こぬ人を月になさばや烏羽玉のよごとには影をだにみん (同 三〇五)

などの例から、当時、恋人のもとを訪れる男を月に喩える表現があったかと推定できる。

そうした和歌の常套的表現が、たとえば、『源氏物語』濔標巻で、花散里を訪れた源氏が

「西の妻戸に夜ふかして立ち寄りたまへり。月おぼろにさし入りていとど艶なる御ふるまひ、尽きもせず見えたまふ。」という様子だったのに対して、花散里が「水鶏のいと近う

鳴きたるを、水鶏だにおどろかさずはいかにして荒れたる宿に月をいれまし」という歌を

贈り、それに対して源氏が「おしなべてたたく水鶏におどろかばうはの空なる月もこそ入れ」と返すやりとりのもとなったのかもしれない。

【歌意】

月夜には来ぬあの人待たれてしまふ。かき曇って雨でも降ってほしい。そうしたら侘しく思いながらも寝てしましましょう。

287をそく出る月にも有哉足引の山のあなたもおしむべら也

【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑上 八七七

【注】

〔おそく出づる〕

「おそく」は、

天慶六年正月藤大納言殿の御せうそくにて、としごろありつる魚袋をつくるはせんとして細工にたまはせたりけるを、おそくもてくるあひだに日たかくなりにはしかば、いぬるついたちの日はつけずありしかば… (貫之集 七一八 詞書)

内にさぶらふ人をちぎりて侍りける夜、おそくまうできけるほどに、

うしみつと時申しけるをききて、女のいひつかはしける  
人心うしみついまはたのまじよ

良岑宗貞

夢に見ゆやとねぞすぎにける (拾遺集 雑賀 一一八四)

などにあきらかなように、「なかなかくしない」の意。

〔山のあなたも惜しむべらなり〕

下の句は、月の出を待ち切れぬ気持ちをも、山の「あなた」も惜しんでいるから、月がこちら側に出てこれられないのに違いない、と機知的に表現したもの。類似の発想で詠まれたものに新撰和歌265番の歌がある。

〔286番の歌との対応関係について〕

月の出を見ていと恋人の訪れが待ち遠しくなる、という考えを背景にした286番の歌に、月が「あなた」で惜しまれているから、こちらにはなかなかやってこない、という287番の歌を対にした。なお、この二首の歌を併置して享受する場合、287番の歌もなかなか訪れてこない男を「月」に喩え、こんなに遅くなってもやってこないのは別の女のところにいるのでしょうか、という意味も読み取れるようになる。

【歌意】

なかなか出てこない月であるよ。山のあちら側でも月を惜しんでいるに違いない。

288 露だにもなからましかば秋のよを誰とおきいて人をまたまし

【校訂】なし

【他出文献】拾遺集 恋二 七七四

【注】

〔秋の夜を〕

この時代の和歌における秋の夜とは、

ながしとも思ひぞはてぬ昔より逢ふ人からの秋のよなれば (古今集 恋三 六三六)

からわかるように、長いものであり、また

いつとは時はわかねど秋のよぞ物思ふ事のかぎりなりける

(古今集 秋上 一八九)

のように、物思いを尽くすものでもある。当該の歌も恋の歌であるから、来ぬ人を待つ秋の夜の長さ切なさが描かれていると見て良い。

〔誰とおきゐて〕

「おきゐる」は、露が「置き居」と私が「起き居」の掛詞。露を擬人化して、露だけが私と一緒に「おき」て待ってくれる、と言ったものである。なお、こうした表現の背後には、誰も私と一緒に居てはくれない、という心情が込められていることはいうまでもない。

〔おき居て〕

露に関して「置き居る」というのは、

白露のうへはつれなくおきゐつつ萩のしたばの色をこそ見れ

（後撰集 秋中 二八五）

九月九日、つるのなくなりになれば 伊勢

菊のうへにおきゐるべくもあらずとせの身をもつゆになすかな

（同 秋下 三九六）

などから、露がしっかりと置いて容易に消えない様子を表す表現と思われる。なお、当該の歌の「露」は涙を暗示することはいうまでもない。

【歌意】

秋の夜に置く、露だけでもなかったならば、このつらくて長い夜を誰と一緒に起きて座り込んであの人を待ちましようか。露以外に一緒に居てくれる人とていないこの秋の夜を。

289 ながれてもなを世中をみよしのゝ瀧のしら玉いかでひろはむ

【校訂】なし

【他出文献】不明

【注】

〔なかれても〕

初句は

山高みした行く水のしたにのみ流れてこひむこひはしぬとも

（古今集 恋一 四九四）

かがり火の影となる身のわびしきは流れてしたにもゆるなりけり

（同 恋一 五三〇）

などと同じく、「流れても」と「泣かれても」の掛詞になっている。またこの語は四句の

「滝」と縁語でもある。

〔なほ世の中をみよしのの〕

三句、「みよしの」の「み」は「見」との掛詞。初句からここまでの意味は「泣くよう  
なつらい状態であつてもなおお世の中を見る」。

〔滝の白玉いかで拾はん〕

滝の水しぶきを「白玉」に見立てる表現は、

布引の滝の本にて人人あつまりて歌よみける時によめる

なりひらの朝臣

ぬきみだる人こそあるらし白玉のまなくもちるか袖のせばきに

（古今集 雑上 九二二）

など、この時代に多くの例が見られるものであり、当該の歌もまさにそうした表現を用いたものである。

また、涙のことを袖の上の白玉に喩える例も、

あかずしてわかるるそでのしらたまを君がかたみとつみでぞ行く

（古今集 離別 四〇〇）

など、しばしば見られるが、当該の歌の「白玉」は滝の水しぶきだけではなく、涙をも喩えたものであると思われる。

こきちらす滝の白玉ひろひおきて世のうき時の涙にぞかる（古今集 雑上 九二二）

たきつせもうき事あれやわが袖の涙につつおつる白玉（貫之集 三〇九）

など、滝のしぶきの白玉を涙に喩える例もまた珍しくないことに加えて、第二句の「世の中」が、雑歌においては通常、はかなくつらく苦しい物として描かれることを考慮するならば、初句の「なかれても」は「泣かれても」の掛詞であり、「白玉」は涙の喩えでもあると考えた方が、一首の表現の整合性が高いからである。

かくして「滝の白玉いかで拾はん」は、「滝の白玉は私の涙でもあるが、それをどうやって拾おうか」という程の意味で理解できるだろう。

なお、滝の白玉は、

たきつせに誰白玉をみだりけんひろふとせしに袖はひちにき

（後撰集 雑三 一一三三五）

のように、拾おうとしてもそれがかなわないものである。従って、当該の歌の「どうやって拾おうか」という問いかけは、どうにも拾うことができない、という心情を背後に含んだ表現ということになる。

〔288番の歌との対応関係について〕

判断はいささか難しいが、露以外の誰と一緒に秋の夜を過ごしましょう、という疑問の表現で、その実、誰も一緒に居てくれない、という悲しさを表す288番の歌に、どうやって滝の白玉を拾うように涙を留めましょう、という疑問の表現で、その実、どうにも涙を留めることができない、悲しさを表す289番の歌をつがえたか。また、どちらの歌も中心には露や水しぶきという美しい水滴がおかれていることも共通する。

【歌意】

つらさのあまりに思わず泣くのだが、それでも世の中から目を背けない私の涙は、吉野の滝のしぶきの白玉のようである。いったいこれをどうやって拾おうか。どうにも拾うことができず、激しく流れるばかりなのを。

290 今はとてかれなん人をいかにせむあかず散ぬる花とこそみめ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋五 七九九

【注】

〔今はとて〕

初句は、古今集では「思ふとも」。新撰和歌でなぜこれを「今はとて」と改めたのかよくわからない。あえて説明すれば、「思ふとも」とある場合、未練の気持ちが強いことを表明しているが、「今はとて」であれば、言葉の表面に現れる情念の質は軽くなる。対にされた291番の歌は、表面に現れる気持ちが、ふざけているというほどではないもの、やや諧謔を交えた軽い口調であることとバランスを取ろうとしたかとも思われる。なお、古今集では当該の歌の次に配されているのが、

今はとて君がかれなばわがやどの花をばひとり見てやしのばむ

(古今集 恋五 八〇〇)

であり、この歌を参考にしつつ、貫之が歌句を改めたものかとも思われる。

〔かれなん人〕

「かれ」は「離れ」と「枯れ」の掛詞。

【歌意】

「じゃあ」と言って離れて行ってしまいそうな人をどうしようか。どうしようもないなら、満喫しないうちに枯れて散ってしまう花と思ひましょう。

291 光なき谷には春もよそなればさきてとくちる物思もなし

【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑下 九六七

【注】

〔光なき谷〕

古今集では、「時なりける人の中にはかに時なくなりてなげくを見て、みづからのなげきもなくよろこびもなきことを思ひてよめる」という詞書に基づいて、「光なき谷」が「時」を得てもはやされることのない自分の居るところを示しているとわかるが、「天皇などの恩恵を光にたとえるのは万葉集以来のこと」（新日本古典文学大系『古今和歌集』）であるから、古今集のような詞書なしでも、当該の歌の「光」は、高位の人物からの恩恵と理解されたと思われる。

〔290番の歌との対応関係について〕

自分から離れていこうとする恋人を、同じ「かれる」のだから、散る花と思おう、とあきらめの気持ちを諧謔の表現で表した290番の歌に、恩寵のない我が身へのあきらめの気持ちを、春の花の比喻で表した291番の歌を対にした。

【歌意】

光のない谷には春もよそ事だから、花が咲いては早く散ることの心配もない。そのように、恩寵を得て栄えることのない私には浮き沈みの憂いありません。

292 色見えでうつろふものは世中の人の心の花にぞありける

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋五 七九七

【注】

〔世の中の人の心〕

第三、四句に、単に「人」と言わずに、「世の中の人」としていることには、やはり、「世の中」という言葉にそれなりの意味が込められているものと思われる。当該の歌は、恋の歌であるから、一般的な人の心ではなく、男女がともに過ごす「世の中」の人の心こそが、いつの間にか移ろうものであったのだ、と言っているのだとみたいが、いかがだろうか。なお、この歌の「世の中の人」という言い方は、やはり当時から特別な表現として意識されていたようで、



ちかどなりなる所に方たがへにわたりて、やどれりとききてあるほどに、事にふれて見きくに、歌よむべき人なりとききて、これがうたよまんさまいかでよく見むとおもへども、いとも心にしあらねばふかくもおもはず、すすみてもいはぬほどに、かれも又こころ見むと思ひければ、はぎのはのみぢたるにつけて、うたをなむおこせたる

女

秋はぎのしたばにつけてめにちかくよそなる人の心をぞみる

返し

つらゆき

世の中の人に心をそめしかば草葉にいろも見えじとぞ思ふ

(拾遺集 雑秋 一一一六・一一一七)

と、貫之が「現実の人」という意味で「世の中の人」という表現を用いているのも、当該の歌を踏まえてのことだろう。

【歌意】

色に現れないままでうつろい色あせるものは、世の中の人という花であったのだ。

293 あまのすむ里のしるべにあらなくにうらみんとのみ人のいふらむ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋四 七二七

【注】

〔古今集との解釈の相違について〕

当該の歌は、古今集では恋の部に配される。ただ、恋の部において、誰かを恨む、という歌は、

逢ふ事のなぎさにしよる浪なれば怨みてのみぞ立帰りける

(古今集 恋三 六一六 新撰和歌恋部にもあり)

あまのかるもにすむむしの我からとねをこそなかめ世をばうらみじ

(同 恋五 八〇七 新撰和歌恋部にもあり)

わたつみのわが身こす浪立返りあまのすむてふうらみつるかな (同 恋五 八一六)

秋風の吹きうらがへすくずのはのうらみても猶うらめしきかな (同 恋五 八二三)

のように、多く見られるが、誰かから恨まれるという例は見いだしたい。その点が恋の歌としては異例と見て、雑の歌に位置づけなおしたのではなからうか。

〔292番の歌との対応関係について〕

両歌とも、上の句で謎かけのような提示をしておいて、下の句で機知的な答えを述べる形式をとる点が共通している。また、292番の歌は、

色見えでうつろふものは世中の人の心の花にぞありける

のように、同音の繰り返しが印象的な歌でもある。そのことに留意するならば、293番の歌も、

あまのすむ里のしるべにあらなくにうらみんとのみ人のいふらむ

初句の三句の「あ」の繰り返しが印象的であることに気づく。

またさらに、293番の第四句の「うらみむ」は、「恨みむ」と同時に「浦見む」でもあることから292番の歌の「見えで」というのと、対照的な表現である。あるいは、「浦見む」という言葉だけ見た場合、「うら」に心という意味の「裏」を重ね合わせて、「裏見む」つまり「心を見よう」ととることができる。そうであれば、人の心は色が見えない、とうたう292番の歌と、いっそう対照的なものに見えてくる。

#### 【歌意】

私は海人の住む里の案内人でもないのに、どうして浦を見よう（恨もう）とばかりあの人  
は言っているのだろうか。

294 色もなき心を人にそめしかばうつろはんとはおもはざりしを

【校訂】底本三句「そめしより」。新撰和歌諸本で「そめしより」と「そめしかば」が混在するが、本稿の原則に従って、古今集とは異なる方の本文をとる。また結句底本「おもほえなくはざりしを」。新撰和歌諸本により本文の方をとる。

【他出文献】古今集 恋四 七二九

#### 【注】

〔色もなき心を人に染めしかば〕

心を恋で染めるといふ発想で詠まれた歌を見ると、

世中の人の心は花ぞめのうつろひやすき色にぞありける

心こそうたてにくけれそめざらばうつろふ事もしからましや

色見えでうつろふ物は世中の人の心の花にぞ有りける

（古今集 恋五 七九五く七九七）

のように、恋に染まった人の心はうつろいやすいものとして詠まれる例が多い。それに対

して、当該の歌では、心には色がないのだから、うつろうとは思ひもしなかった、と機知的な発想で、常套的な和歌の発想をひっくり返して見せたものである。

〔染めしかばくおもはざりしを〕

第三、五句は、古今集では「そめしより」「おもほえなくに」とある。新撰和歌に収める際に编者貫之が改変したものであろう。古今集の歌の表現は、「心を人に染めたときからうつろうとは思われないのに」と、今まさにうつろおうとしている心を目の当たりにして戸惑う気持ちを表すものとなっている。それに対して、新撰和歌の歌の方は、「心を人に染めたのだから、うつろうだろうと思わなかったのに」とし、すでにうつろってしまった心のことを惜しむ、あるいは非難する気持ちを表したものである。

この改変は、対にされた295番の歌が過ぎ去った時間のことを惜しむ歌であることと表現をそろえるための作為であったのではなからうか。

【歌意】

色もない心をあなたという色に染めたので、その色がうつろうだろうとは思ひもしなかったのに。それなのにあなたはすっかり変わってしまいました。

295 故郷はみしごとみあらずをのゝえの朽し所ぞ恋しかりける

【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑下 九九一

【注】

〔斧の柄の朽ちしところぞ恋しかりける〕

「斧の柄の朽ちしところ」は、古今集の諸注が指摘するように、晋の王質が、童子たちが碁を打っているのを見ている間に、斧の柄が朽ちてしまうほどの時間がたってしまったという、述異記の故事を踏まえた表現である。

ところで、

郭公なくこゑきけばわかれにしふるさとさへぞこひしかりける（古今集 夏 一四六）  
というような例を挙げるまでもなく、ふるさととは懐かしい、恋しいものとして考えられているが、当該の歌では、あまりにも長い時間がたち、ふるさとが変わり果ててしまったら、ふるさとよりも仮に滞在していた場所の方が恋しくなる、と別の視点を持ちだしたところが、新しい趣向といえよう。

〔294番の歌との対応関係について〕

すでに定着した常套的な和歌的発想——人の心の色はうつろいやすいものだ——を、別の視点から「色がないのならうつろうはずもない」と、ひねって見せた294番の歌に、漢籍の故事を踏まえて、しかし、ふるさとが恋しいとするのが通常の表現であるところを、ふるさとよりも一時的に迷い込んでいた仙境のような地の方が恋しいという、ひねった発想で詠んだ295番の歌をつがえた。また、両歌ともに、失った過去を哀惜する表現を用いている点でも共通する。

【歌意】

帰りたいと思っていたふるさととは、かつて見ていたものとはすっかり変わりました。もはや、ふるさとよりも一時的に過ぎたあの仙境の方が恋しいことです。

296 有磯海の浜の真砂とたのめしは忘るゝことの数にぞ有ける

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋五 八一八

【注】

〔有磯海の浜の真砂〕

初二句の表現は、古今集の諸注が指摘するように、仮名序に「たとへ歌」の証歌としてあげられた、

わがこひはよむともつきじありそうみのはまのまさごはよみつくすとも

(古今集 仮名序)

に基づくものである。「我が恋」の数がいくら数えても数え切れない、ということとは、何度でも、いつまでも逢いたいと思う、ということを意味する。

【歌意】

「私の思いを数えるならば有磯海の浜の真砂の数以上に多い」と、私に頼みにさせたあなたの言葉は、忘れることの数が多いという意味だったのですね。

297 住吉のきしのひめまつ人ならばいく世かへしとはまし物を

【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑上 九〇六

【注】

〔住吉の岸の姫松〕

古今集の諸注のうちに、この歌を二句切れとみて、「住吉の岸の姫松よ」と、松に呼びかけていると解しているものもあるが、そのように取るべき積極的な理由が見いだせないので、さしあたり、

をぐるさきみつのこじまの人ならば宮このつとにいざといはましを

(古今集 東歌 一〇九〇)

と同じく、「姫松」は、「人ならば」の主語とみておく。

〔296番の歌との対応関係について〕

296番の歌の「有磯海の浜」と「数」。297番の歌の「住吉の岸」と「幾代」がそれぞれ対になる。いずれも数え切れないほどの数が積み重なっていることをうたっている。

【歌意】

もしも住吉の岸の姫松が人であるならば、いったい何年を過ごしてきたのかと尋ねたいのに。

298行かへり千鳥鳴なる浜ゆふの心へだてゝおもふものかは

【校訂】底本三句「鳴くなり<sup>なる</sup>」。新撰和歌諸本では「鳴くなり」と「鳴くなる」が混在するが、上二句は「浜」を修飾する語と見られるので「鳴くなる」をとる。

【他出文献】延喜十三年三月十三日亭子院歌合 六一・新拾遺集 雑上 一七〇三

【注】

〔行きかへり千鳥鳴くなる浜木綿〕

当該の歌は、亭子院歌合の際に、主催者である宇多上皇が詠んだ歌である。いま、歌合の該当部分の本文を示せば、

左 持

伊勢

あふことのきみにたえにしわがみよりいくらのなみだながれいでぬらむ

右

貫之

きみこひのあまりにしかばしのぶれどひとのしるらんことのわびしさ

かくてひだりかたにうへの御こころよりたりとて、みぎかたのみこころ

らみきこえさせたまふときこしめして 院

ゆきかへりちどりなくなるはまゆふのこころへだてておもふものかは(五九く六一)

ひだりもみぎもこれはあはせずなりぬ

である。上皇が左の歌に心を寄せていると思っただ右方の女七宮が恨み申し上げたのに対し

て、上皇が、どちらの歌も同じようにすばらしいと知っている、と答えたものと見える。同歌合の日記に「一方の宮たちみな装束めでたうして州浜奉る」とあるが、その左右の州浜を行き来する千鳥に上皇自らの心を見立てて、私の心はどちらにも等しく行き来して、どちらに傾いているということはない、と述べたものと理解される。

この歌が、新撰和歌では恋の歌とされている。恋の文脈で理解する場合には、男が複数の女性に対して、分け隔て無くどちらのことも大切に思っている、というほどの意味になるだろう。

なお、紀貫之に、

右大臣源のひかるの家に、前裁あはせし侍りけるまけわざを、うどね

りたちばなのすけみがし侍りける、ちどりのかたつくりて侍りけるに、

よませ侍りける

つらゆき

たが年のかずとかは見むゆきかへり千鳥なくなるはまのまさこを

(拾遺集 賀 二九六)

という歌がある。これは、貫之集(79)によれば、延長五年の詠である。「行きかへり千鳥鳴くなる浜」という表現が、他に例を見いたしたがたいことから、貫之が亭子院歌合の席上の宇多上皇の歌を記憶していて、これを用いた可能性がある。

〔浜木綿の心へだてて〕

「浜木綿」は、葉が幾層にも重なったその形状に由来するのであるが、

み熊野の浦の浜木綿百重なす心は思へどただに逢はぬかも (万葉集 卷四 四九六)

をとこ

みくまのうらのはまゆふももかさね心はあれどあはぬ君かな

女かへし

御くまのうらのはまゆふたさればわれもひとへに思ひやはする

(兼輔集 六八・六九)

のように、「百重」「重ね」「一重」という言葉を引き出すように用いられる。当該の歌では、浜木綿の葉が幾層にも重なるように心隔てる、という文脈で「隔てて」につながる。

〔思ふものは〕

結句の表現は、

あさか山かげさへ見ゆる山の井のあさくは人をおもふものは (古今集仮名序)

などに見られる、自らの真心の深さを相手に伝えるための定型的な言葉である。

【歌意】

あちこちと往還しながら千鳥が鳴く浜の浜木綿のように、心を隔てて思ったりするでしょうか。いやいや分け隔て無くあなたのことも大切に思っているのですよ。

299 すみよしとあまはいふともながみすな人忘草おふといふ也

【校訂】

【他出文献】古今集 雑上 九一七

【注】

〔長居すな〕

当該の歌の第三句には地名の「長居」がかけられているという説がある。そのように理解できるならば、一首の機知的趣向が際立つのであるが、同時代に「長居」という地名が確認しがたいことと、

しなのの国にくだりける人のもとに、つかはしける づらゆき

月影はあかず見るともさらしなの山のふもとにながみすな君（拾遺集 別 三一九）

と、地名の「長居」を掛けないで「長居すな」という表現がなされている例のあることから、当該の歌に地名を読み取る必然性の少ないことがわかる。

〔298番の歌との対応関係について〕

千鳥が鳴く浜の浜木綿を詠んだ298番の歌に、住吉の人忘れ草を詠んだ299番の歌をつがえた。さらに穿って考えるならば、「今は他の女の所に行っているにしても、おまえのことも等しく思っているよ」と言う298番の歌に、「今あなたが訪れているところは居心地が良いのでしょうか、そのまま長居していると私を忘れるではありませんか」と299番の歌が応じている、とも受け取れる。

【歌意】

住吉の地は住み良し、と海人は言うとしても長居しないでください。そこには人忘れ草が生えるということですから。

300 思ひつゝぬればや人のみえつらんゆめとしりせばさめざらましを

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋二 五五二

【注】

当該の歌については、

思ひつつ寝ればかもとなぬばたまの一夜も落ちず夢にし見ゆる

(万葉集 卷十五 三七三八)

を、再構成して作り上げたものだという指摘がある。作者がこの万葉歌を直接知っていたか、伝承に寄ったのかは不明だが、偶然の一致というのには発想と言葉が似すぎていることと、他に同種の歌が見いだしがたいことから、その可能性が高いと思われる。

【歌意】

(あの人は私のことなど思っていないのだから、あの人が私の夢に現れるはずはない。それなのにあの人の姿が見えたのは) 思い思いついて寝たのであの人が夢に見えたのだろうか。(そんなめつたにない) 夢と知っていたら覚めないでいたのに。

301ものゝふの八十字治河のあじろ木にたゞよふ浪の行ゑしらずも

【校訂】底本初、二句「ものゝふうつせみの八十字治河の」。新撰和歌諸本により本文の方をとる。

【他出文献】万葉集 卷三 二六四・古今和歌六帖 三〇一・新古今集 雑中 一六五〇

【注】

「ただよふ波の」

当該の歌の第四句「ただよふ波の」は、万葉集では「不知代いさよふなみの経浪乃」とある。いずれもあるものがふらふらとして進んでいかない様を表現するが、「いさよふ」という言葉は、

山のはにいさよふ月を出でむかと待ちつつ居るに夜ぞふけにける

(万葉集 卷七 一〇七一)

と、なかなか上らない月に関して言うことがあることから、進むべき方向がありながらそちらになかなか向かわない、あるいは向かえないことを表しているのではないかと思われる。そのような見るならば、

土形娘子火葬泊瀬山時柿本朝臣人麻呂作歌一首

こもりくの泊瀬の山のまにいさよふ雲は妹にかもあらむ

(万葉集 卷三 四二八)

も、あの世という向かうべき方向がありながら、そちらに行きがたくとどまっている娘子の魂の様を「いさよふ」という語で表現したと理解できるし、

天地と別れし時ゆ ひさかたの 天つしるしと定めてし 天の川原に あらたまの月



重なりて妹に逢ふ 時さもらふと 立ち待つに 我が衣手に 秋風の 吹き反らへば 立ち居て たどきを知らに むら肝の 心いさよひ 解き衣の 思ひ乱れて いつしかと 我が待つ今宵 この川の 流れの長く ありこせぬかも (万葉集 卷十 二〇九二) も、織女の元へと心が向かいかねる様を表したものと考えられよう。平安時代の例でも、君やこむ我やゆかむのいさよひにまきのいたどもささずねにけり

(古今集 恋四 六九〇)

では、ゆくべき方向がわかっていながら躊躇している様を「いさよふ」で表現していることがわかる。かくして万葉集の「もののふの」の歌は、川の流れに従って一定の方向へ進むはずの波が網代木のところで進みかねている様を表していると了解できる。

一方、「ただよふ」は、後の例ではあるが、

きしとほみただよふなみはなぞらによるかたもなきなげきをぞせし

(後拾遺集 雜一 八七四)

心にもあらぬ事にて、ほかへいくとて

我ながら身のゆくかたをしらぬかなただよふくものいづちなるらん

(和泉式部後集 三〇九)

などから読み取れるように、進んでいく方向がわからないままにふらふらしている状態を言うようである。そのように見れば、当該の歌の「ただよふ波」は、どこに行くとも知れない状態で、網代木のところに行きつ戻りつしている波の様を表したものと了解できる。

〔行方しらずも〕

当該の歌のもととなった万葉集の歌は、かつての近江朝廷の繁栄のさまを偲び、そしてそこで輝いていた人々や時代が今はどこに過ぎ去ったのか、その行方もわからない、と歎く人麻呂の感慨を吐露したものとして考えられている。万葉集が一般には普及していなかったらしい新撰和歌の当時に、当該の歌がそのままそのように受け取られていたとは考えにくいが、「行方しらずも」という結句の表現からは、何らかの喪失の悲しみが当然読み取られたはずである。また、宇治川に限らず、川の流れというものは一般に、

昨日といひけふとくらしてあすかかは流れてはやき月日なりけり (古今集冬341)

と、時の流れに喩えられることが多いものである。ならば、その川の流れにも流されず、網代木のところで「ただよふ」波は、過去への思いにとらわれてどちらに向かえばよいのかもわからぬまま立ち止まる気持ちを象徴するものとして理解されたことであろう。そし

て「行方知らずも」はそうした過去の何者かを哀惜する気持ちの表現と受け取られたにちがいない。

〔300番の歌との対応関係について〕

300番の歌は、万葉集の中臣宅守の歌を換骨奪胎したものであった。そこに、人麻呂の歌を改作した301番を合わせ、万葉集歌を作り替えた歌をつがえたか。

また、301番の歌は、先に述べたように、過ぎ去った過去への哀惜の情を述べたものであった。300番の歌の、覚めてしまった夢を惜しむ気持ちに相通するものとしてここに配されたという事も考えられる。

【歌意】

宇治川の網代木のところで漂っている波の行方がわからないことよ。

302 わすらるゝ身をうち橋の中絶てこなたかなたに人もかよはず

【校訂】 底本二句以下「身をうち橋の中絶て人も通はぬ年そへにける」。新撰和歌諸本により改める。  
川の中たえてこなたかなたに人もかよはず

【他出文献】 古今集 恋五 八二五

【注】

〔こなたかなたに人も通はず〕

下二句は、古今集では「人も通はぬ年ぞへにける」とある。古今集の本文では、人の訪れがなくなつてから一年以上が経つたということになる。恋部末尾の歌から数えて四首目に位置する古今集の歌としてはそれでよいが、恋の終わりにはまだしばらく間のある位置に置かれた新撰和歌の歌としてはふさわしいとは思われない。新撰和歌で当該の歌をここに置いたのは、301番の歌の「宇治」との関連であろうが、ここに置くために貫之が下二句の歌句を改変したものであろうか。

【歌意】

あの人から忘れられた我が身を嫌に思います。宇治橋が途中で切れてあちらとこちらとに人が通わないように、二人の仲も絶えてあの人も通つてきませんし。

303 今ぞしる苦しきものと人またむ里をばかれずとふべかりける

【校訂】

【他出文献】 古今集 雑下 九六九

【注】

〔今ぞ知る苦しきものと〕

古今集では当該の歌に、「紀のとしさだが阿波のすけにまかりける時に、むまのはなむけせむとてけふといひおくれりける時に、ここかしこにまかりありきて夜ふくるまで見えざりければつかはしける」という詞書があることから、一首は作者業平を待たせた紀利貞に対する嫌みの歌として理解できるが、詞書を持たない新撰和歌の歌としては、何かの事情で人に待たされるつらさを経験をした男が、女を待たせたことを後悔する歌として理解できる。

〔302番の歌との対応関係について〕

人が通ってこなくなることで我が身さえ憂きものとなってしまふことを歌った302番の女の歌に対して、人を待つことがどんなに苦しいことか今更ながらわかった、という303番の男の歌を対にすることで、あたかも問答のような組み合わせにしているものと思われる。

【歌意】

今こそ思い知りました。人を待つことが苦しいものだ。こんなに苦しい思いをさせていたのなら、人が私を待っている里を、絶えることなく訪れるべきだったのですね。

304 忘草何をか種と思ひしをつれなき人の心なりけり

【校訂】底本三句「思ひしは」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】古今集 恋五 八〇二

【注】

〔忘れ草〕

「忘れ草」は、もとは身の憂さや辛さを忘れさせるものと考えられていたのであろうが、この時代には、

すみよしとあまはつぐともながあすな人忘草おふといふなり

（古今集 雑上 九一七）

のように、人を忘れる、という意味に変化しているようである。

〔思ひしを〕

第三句は、古今集では「思ひしは」とある。古今集歌の形であると、一首は二句の終わり一旦ポーズを取り、気を持たせた上で三句以下の謎解きをする、ということになる。

古今集の詞書によると、この歌は屏風の歌であることがわかるが、まさに、一座の期待を高めつつ披露するのにふさわしい作りとなっているわけである。それに対して、新撰和歌の「思ひしを」であると、「何が種なのかと思っていました。それは……」と比較的ならかにつながることになる。屏風の歌という古今集の条件を外した際に、改変したものであろうか。

〔心なりけり〕

人の心が種になるという発想は、古今集仮名序にも見られる。

【歌意】

忘れ草は、何が種なのだろうかと思っていましたけれども、それはつれない人の心だったのですね。

305 大あらしのもりの下草おいぬれば駒もすさめずかる人もなし

【校訂】底本三句「生ぬれと」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】古今集 雑上 八九二

【注】

〔304番の歌との対応関係について〕

人を忘れる草である「忘れ草」を詠んだ304番の歌に対して、人から忘れ去られたような、森の下草を詠む305番の歌を対にした。

【歌意】

大あらしの森の下草はとうが立ってしまったので、馬も賞美しないし、刈る人もいません。そのように、老いさらばえた私のことをもてはやしてくれる人はいないのです。

306 秋の田のいねてふこともかけなくにおらじとなどか人のいふらん

【校訂】底本二句「いねと<sup>てふこともイ</sup>いふ共」。 「いねといふ共」では意味が通じないので、徳神社蔵中川文庫甲本、乙本、西宮市立図書館蔵岩瀬文庫本によりつつ、異文注記の方をとる。また底本四、五句「何をうしと<sup>おらしとなどか人のいふらん</sup>か人のいふらん」。新撰和歌諸本では「おらしと

とか人のいふらん」とするものと「おおしとなどか人のいふらん」とするものが混在する。「おおし」では意味が取りがたいので、「おらじ」と見て底本の本文を採用する。

【他出文献】古今集 恋五 八〇三

【注】

〔古今集との歌句の相違について〕

四、五句は、古今集では「何をうしとか人のかるらむ」とある。対にされた307番の歌の「住まじ」とそろえるために「居らじ」という言葉を用いた本文に新撰和歌が改めたものか。

【歌意】

秋の田の実った稲ではないが、飽きてしまって「去ね」ということも、稲を稲木に掛けるように、口にかけてもいないのに、「もうここには居るまい」とどうしてあの人は言うのだろうか。

307 空蟬の世にしもすまじ霞たつみ山のかげに夜はつくしてん

【校訂】なし

【他出文献】不明

【注】

〔空蟬の世〕

「うつせみの世」とは、

空蟬の世にもにたるか花ざくらさくと見しまにかつちりにけり

（古今集 春下 七三）

のように、はかない、無常の世をいう。

〔霞立つみやまの陰〕

「霞立つ山」とは、

霞立つ春の山べはとほけれど吹きくる風は花のかぞする（古今集 春下 一〇三）

ある人のもとにつかはしける 御導師浄蔵

霞立つ山のあなたの桜花思ひやりてやはるをくらさむ（拾遺集 雑春 一〇四一）  
でわかるように、遠い山でもある。なお、「霞」が立っていることから、当該の歌の季節が春であることもいうまでもない。また、「山の陰」は、山中の奥まったところであるが、たとえば、源氏物語橋姫巻で、宇治の人の宮邸のことを「さるべき人の使だにまれなる山陰」という。そのように、隠棲の場所としてふさわしいところでもある。

〔世は尽くしてん〕

「世を尽くす」は、

かくしつ世をやつくさむ高砂のをへにたてる松ならなくに

(古今集 雑上 九〇八)

ひとりして世をしつくさば高砂の松のときはもかひなかりけり

(拾遺集 雑恋 一二七一 貫之)

などからわかるように、人生を終えるという意味。

〔306番の歌との対応関係について〕

306番の歌の「居らじ」という言葉に、307番の歌の「住まじ」が対応する。また、秋の田と、春の霞の山という季節の対応も意識されていていよう。

【歌意】

この無常の世間になど住むまい。霞が立つ高い山の陰に隠棲し、人生を終えることにしよう。

308いそのかみふるのゝ道も恋しきに清水汲にはまづも帰らん

【校訂】底本三句「恋しき草に」。元禄版本以外は「恋しきを」。ただし、「恋しきを」で

は意味が通じにくいので、底本の本文をとる。また結句底本「またも帰らん」。新撰和歌諸本により底本本文をとる。

【他出文献】貫之集 五九〇・古今和歌六帖 二九二二

【注】

〔石上ふるのの道〕

「古野の道」は、

久しう逢はぬ人をおもふとて、みちもおぼえず、などいふに

今よりはふるののみちに草しげみわすれ行くにはさぞまどふらん

(和泉式部集 六三二)

のように、かつてなじんでいて、いまは通わなくなってしまった道を言う。そのような「古野の道」を行くということは、

右 一条の院の御時弘徽殿女御の御方にて、嵯峨院の御世の事おぼし

めしいでて

あかざりしあとやかよふといそのかみふるののみちをたづねてぞとふ

(物語二百番歌合 七四番 一四八 狭衣物語)

三あうせて後、世のなかつれづれにおぼえしころ、あかぞめがもとに

あとくれてむかし恋しきしまのみちをとふとふたづねつるかな

かへし、あかぞめ

やへむぐらたえぬる道と見えつれどわすれぬ人はなほたづねけり

これをききて、さがみ

ふみかよふ人だになきはしきしまの道しらぬ身はうきにぞ有りける

かへし

いそのかみふるののみちのしるべにはいまゆくすゑも君をこそせめ

(伊勢大輔集 一二八〜一三二)

などからわかるように、昔年のことを懐かしく思つてのことである。なお、「石上ふる」は、大和国の石上の布留。「古野」を起こす序として用いられる。

当該の歌の「古野」の場合は、恋の歌であるので、古野の道の先にあるのは「かつての愛人の居所」(和歌文学大系『貫之集』)ということになる。また恋の部としての配列を見ると、八首ほど前の

今はとてかれなん人をいかゝせむあかす散ぬる花とこそみめ (新撰和歌 二九〇)

色見えてうつるふものは世中の人の心の花にそありける (同 二九二)

あたりで、相手が離れていったと考えられるので、そのつれない相手の言葉として、「昔なじみのおまえのところ」のように理解することができる。

〔清水汲みには〕

この表現の背後には、

いにしへの野中のし水ぬるけれど本の心をしる人ぞくむ (古今集 雑上 八八七)

が意識されているものとおぼしい。そうであるならば、当該の歌は、かつて愛したおまえの、もとの心を知る自分であるから、再び会える状況になった今、まっさきに会いに行くのだ、という意味ととれる。

〔まづも帰らん〕

「まづも〜」は、

ほととぎすこぞのひと声あかざりし人のきかくにまづもなかなん (元真集 三五)

みちのくににいでたつに、頼光の朝臣きてあふぎおとしたる、やると

て

めのまへにまづもわするるあふぎかなわかればえこそうしろめたけれ

(実方集 一九二)

のように、「まず真つ先に〜」の意。

【歌意】

石上の布留、という名を持つ古野の道、昔なじみの道も恋しいので、清水を汲みに、まず真つ先に帰りましょう。(かつて愛したおまえの元に、真つ先に帰りたいたいです。)

309 神無月しぐれふりをけるならのはの名におふ宮のふることぞこれ

【校訂】底本四句「名におふ宮の」。<sup>本あ</sup>新撰和歌諸本により本文の方をとる。

【他出文献】古今集 雑下 九九七

【注】

〔時雨降りおける〕

『古今集遠鏡』が指摘するように、「降り置く」は、通常、

埼玉の小崎の沼に鳴ぞ翼霧る己が尾に降り置ける霜を払ふとにあらし

(万葉集 卷九 一七四四)

立山に降り置ける雪の常夏に消ずて渡るは神ながらとぞ

(同 卷十七 四〇〇四)

梅のかのふりおける雪にまがひせばたれかことごとわきてをらまし

(古今集 冬 三三六)

などと、雪や霜に用いられる言葉であり、時雨が「降り置く」というのは、他に例を見ないものである。「降をけるとは、昔よりあつめ置ことばなど云なり」という両度聞書の説があるが、

いまはとてかへすことのはひろひおきてわがものからやかたみとおもはん

(古今和歌六帖 三一一三五)

たのめこしことのはいまはかへしてんわが身ふるればおき所なし

(同 三三六九)

など、言の葉を「置く」という表現が見られるので、当該の歌でも「古こと」、すなわち古い言の葉を置いている、という気持ちを含めて「降り置ける」と言ったものであろう。

なお、時雨が置いた葉が紅葉するということは言うまでもない。

〔308番の歌との対応関係について〕

古今集の詞書「貞観御時、万葉集はいつばかりつくれるぞとはせ給ひければよみてたてまつりける」を踏まえるならば、「ふること」は万葉集を指していることがわかる。貫之も当然そのことを強く意識していただろうが、やはり、新撰和歌の歌としては、そのよ



うな事情を考慮せずに一首を解釈しておきたい。その場合、当該の歌の結句の「これ」とは、万葉集ではなく、対にされた308番の歌のことを示すとしか解釈のしようがない。そうすると、この二首は、石上ふるの道、という大和国の地名を持ち出し、かつての恋人のことを歌う308番の歌のことを「そんな言葉は奈良の宮の時のような大昔のことですよ。そんな古いことを今更持ち出すなんて」といなした体に見える309番の歌をつがえたものとして読み取ることができよう。

【歌意】

神無月の時雨が降り、美しく色づいた檜の葉と同じ名を持つ平城なの宮の時の古い言葉です。これは。

310 またばなをよりつかねども玉の緒の絶てたえてはくるしかりけり

【校訂】 底本四句「絶てたえては<sup>ね</sup>」。新撰和歌諸本により本文の方をとる。

【他出文献】 貫之集 六九五

【注】

「待たば猶寄りつかねども」

上二句を言葉のままに取れば、「待っていたらこのまま寄り添うことはないけれども」という程の意味になろう。三句以下に続けるには「それでも絶え果ててしまうよりはましである」というほどの内容を補わなければうまくいかず、やや舌足らずの感がある。なお、貫之集では「よりつかめども」とある。こちらで考えても、言葉を補わなくてはならないことは同様である。

なお、「寄りつく」の「より」は、

をとこの女にふみつかはしけるを、返事もせでたえにければ、又つか  
はしける

ふしなくて君がたえにししらいとはよりつきがたき物にぞ有りける

(後撰集 恋二 六九一)

と同じく、糸や緒の縁語「撚り」の意をかけて用いられたものである。

〔玉の緒の絶えて〕

「玉の緒」は、

したにのみこふればくるし玉のをのたえてみだれむ人などがめそ

(古今集 恋三 六六七)

と同じく、「絶え」にかかる枕詞であるが、

年ひさしくかよはし侍りける人につかはしける　つらゆき

たまのをのたえてみじかきいのちもて年月ながきこひもするかな

（後撰集　恋二　六四六）

のように、「玉の緒」が絶える、で命が絶えることをも暗示する。

〔絶えて絶えては〕

「絶えて絶えては」は、他に例が見いだしがたい表現である。一つ目の「絶えて」は、

風ふけば峰にわかるる白雲のたえてつれなき君が心か　（古今集　恋二　六〇一）

と同じく、「まったく」というほどの意味で用いられた副詞とも考えられるし、「絶ゆ」

動詞を重ねて言ったとも考えられる。いずれにせよ、二人の仲が絶えてしまうことを強調した表現には違いない。

【歌意】

あなたのことを待っていたらこのまま二人は寄り添うことはありませんが、それでもまだ、絶え果てることよりはましなのです。玉の緒が絶えて命が終わるように、すっかり仲が絶えてしまうのは苦しいことでした。（実らないとはわかってはいますが、いつまでも待ち続けます。）

311 ながれくる瀧のいとこそよはからしぬけどみだれて落るしら玉

【校訂】底本二句「瀧のしら玉<sup>いとこそ</sup>」。新撰和歌諸本では「瀧の白糸」と「瀧の糸こそ」の

本文が混在する。「白玉」ではそもそも意味が通じないことと、「白糸」では、結句の

「白玉」と言葉が重なり過ぎるので貫之集や拾遺集の「糸こそ」が本来の形と見る。

【他出文献】拾遺集　雑上　四四八・貫之集　六三・古今和歌六帖　一六九二

【注】

〔瀧の糸〕

瀧の流れを糸に喩えるのは、この時代の常套的な表現であり、

春くれば瀧の白糸いかなればむすべども猶泡にとくらん　（貫之集　四四）

水とのみおもひしものをながれる瀧はおほくの糸にぞ有りける　（同　五二）

など、貫之自身も好んで用いたものである。

〔ぬけど乱れて落る白玉〕

四、五句は、瀧の水しづきが乱れ散っているのを、糸が切れて乱れ落ちる白玉に喩えた

ものである。

〔310番の歌との対応関係について〕

「絶ゆ」ということを強調した310番の歌に、同じく、糸が絶えることを歌った311番の歌をつがえた。また、「玉の緒」と「瀧の白玉」という言葉も対応する。

【歌意】

流れてくる瀧の糸こそが弱いらしい。いくら貫いても糸が切れてしまつて、乱れて落ちる白玉のような水しぶきであるよ。

312世の中にたえていつはりなかりせば頼ぬべくもみゆる玉章

【校訂】なし

【他出文献】古今和歌六帖 三三七二・新拾遺集 恋三 一一二八

【注】

〔一首の発想と表現について〕

当該の歌の発想は、

いつはりのなき世なりせばいかばかり人のことのはうれしからまし

(古今集 恋四 七一二)

とほぼ同発想であり、目新しいものとは言えないように思う。ただ、上の句に「くせば」という、いわゆる「反実仮想」の表現を用いながら、

世中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし (古今集 春上 五三)

のような、文末を「まし」で結ばない点が、この歌の工夫したところなのであるうか。

【歌意】

世の中にまったく偽りというものが無かったならば、頼りにしてしましうにも見えるお手紙よ。けれども、世の中には偽りも多いので、あなたのお手紙も信じることはできません。

313たが爲に引きてさらせる糸なればよをへてみれどとる人もなき

【校訂】底本三句「布なれや」。新撰和歌諸本で「糸なれや」と「糸なれば」が混在するが、本稿の原則に従つて、古今集とは異なる方の本文をとる。底本結句「しる人もなき」。

新撰和歌諸本に「しる」と「とる」が混在するが、「しる」では、見ているのに知る人がいないということになり、どうしても言葉に矛盾が生じるので、群書類従本、岩瀬本に従

い、「とる」を採用する。

【他出文献】古今集 雑上 九二四

【注】

〔一首の主題について〕

古今集の詞書によれば、当該の歌は吉野の滝を詠んだものであることがわかるが、詞書を持たない新撰和歌でも、雑の歌として直前に配された

ながれくる瀧のいとこそよはからしぬけどみたれて落るしら玉（新撰和歌 三一）  
が滝を詠んだものであることから、滝の流れを糸にたとえたものであるとわかる。

〔誰がために引きてさらせる糸〕

第三句は、古今集では「布なれや」とある。これを新撰和歌では「糸」に改めたものと思われるが、その理由はどのようなものであったのだろうか。

まず、水に晒すものとしては、

竜門にまうでてたきのもとにてよめる 伊勢

たちぬはぬきぬきし人もなきものをなに山姫のぬのさらすらむ

（古今集 雑上 九二六）

朱雀院のみかどぬのびきのたき御覽ぜむとてふん月のなぬかの日は

しましてありける時に、さぶらふ人人に歌よませたまひけるによめる

たちばなのなごもり

ぬしなくてさらせるぬのをたなばたにわが心とやけふはかさまし

（同 雑上 九二七）

のように、「布」が詠まれた例が確認できるが、「糸」を晒すとしたものは見いだしたがた  
い。その意味では、古今集の本文の方が、自然な表現ということになるだろう。ただその  
一方で、「引く」という語には、

夏びきのてびきのいとをくりかへし事しげくともたえむと思ふな

（古今集 恋四 七〇三）

法皇宮のたきといふ所御覽じける御ともにて 菅原右大臣

水ひきのしらいとはへておるはたは旅の衣にたちやかさねん

（後撰集 羈旅 一三五六）

七月七日、庭にいとひく女あり

ことのねのなぞやかひなき七夕のあかぬ別をひきとどめねば

（順集 二二二）

など、「糸」に関して言う例はあるが、「布」を「引く」例はあまり一般的とは言えないようである。

さて、当該の歌では、滝の白く見える水の流れを喩えるのに、「布」もしくは「糸」を用いようとしたわけであるが、その際、新撰和歌では、「晒す」という語との関係の薄さをはばかるよりも、

きよたきのせぜのしらいとくりためて山わけ衣おりてきましを

(古今集 雑上 九二五)

のように、滝の流れを喩えるものとして「布」よりも「糸」の方が一般的であることの方を重視して古今集の本文を改めたのだと、今は考えておく。なお、本文を「糸」として見るとき、第四句の「世をへて」は、縦糸を機織り機に掛ける意の「綜る」を、縁語として意識している可能性も考えられる。さしあたり

：打麻やし 麻続の子らあり衣の 宝の子らが うつたへは 綜て織る布 (経而織布)

日ざらしの 麻手作りを…

(万葉集 卷十六 三七九一)

しか「綜る」が和歌での用例を見いだせないので、あくまで可能性の提示にとどまるが。

〔なれば〕

三句は、古今集では「布なれや」とある。「なれば」にせよ「なれや」にせよ、舌足らずであり、文脈的には

たがための錦なればか秋ぎりのさほの山辺をたちかくすらむ

(古今集 秋下 二六五)

のように、「なればや」あるいは「なればか」として理解することになるだろう。なお、こうした文脈で「なれば」を用いた例は、時代が下るが、

賀茂重保社頭にて歌合し侍りけるに、こひの心をよめる 勝命法師

こひちにはたがすゑおきし関なればおもふ心をとほさざるらむ

(新勅撰集 恋二 七五七)

のように、見られないわけではない。

〔世を経て〕

「世を経て」は、

風ふけど所もさらぬ白雲はよをへておつる水にぞ有りける

(古今集雑上 929)

のように、長い時間をかけて、の意。

〔312番の歌との対応関係について〕

312番の歌は、第三句の「なかりせば」に呼応するはずの語「まし」を省略したものであった。一方、313番の歌も、第三句「糸なれば」に下接するはずの係助詞「や（か）」を省いていた。このような、上の句末尾の接続助詞「ば」を受けるはずの語を省略した表現が共通する歌として、貫之がここに並べたという可能性を考えたい。

【歌意】

いったい誰のために引いて晒している糸だというので、長い間見ていても、取る人がいないのだろうか。誰も取ることなく、いつまでも糸がさらされるように、滝の白い水の流れも変わらないことだ。

314いま更にとふべき人もおもほえず八重葎して門させりてへ

【校訂】結句、新撰和歌諸本のうちに「門させりいはん」（松平文庫本、内閣文庫本）、「門させりといはん」（書陵部蔵鷹司乙本）という本文を伝えるものがある。前者はあまりに舌足らずであるし、後者は二字の字余りとなる。「くといはん」は、字余りになりやすいが、それでも「みこも刈る信濃の真弓我が引かばうま人さびて否と言はむかも」（万葉集 巻二 九六）のように、一字のみの字余りが通常と思われる。さらに、315番の歌との対偶を考えると、結句は命令形であるべきものと思われるので、これらの本文は何らかの誤写によって生じたものとみて、採用しない。

【他出文献】古今集 雑下 九七五

【注】

〔八重葎〕

「八重葎」は、

とふ人もなきやどなれどくる春はやへむぐらにもさはらざりけり（貫之集 二〇七）

八重葎しげくのみこそ成りまされ人めぞ宿の草木ならまし（同 四五二）

に見られるように、人の訪れが途絶えた宿に生い茂るものとして歌に詠まれる。そしてこれは、訪れる人が恋人かどうかで、恋の歌にも雑の歌にもなりうる表現であるが、雑の歌とした古今集とは異なり、恋の歌とした新撰和歌の場合は、

ひさしうとはざりける人の、思ひいでて、こよひまうでこんかどささ

であひまでと申して、までござりければ よみ人しらず

やへむぐらさしてし門を今更に何にくやしくあけてまちけん

（後撰集 恋六 一〇五五）

のような事情を背景として、不実な男に対して贈った歌と理解できる。

【歌意】

今更私を訪ねるような人がいるとは思われません。生い茂った八重葎で門をとぎざしてあると言ってください。

315 わくらばにとふ人あらば須磨のうらにもしほたれつゝ侘とこたへよ

【校訂】底本初句「わくらわに」。仮名遣いの相違とみて、新撰和歌諸本に従って改める。

【他出文献】古今集 雑下 九六二

【注】

〔314番の歌との対応関係について〕

双方の歌ともに、「とふ人」に対して、「といへ」「とこたへよ」というように伝言を命ずる形で構成されている。

【歌意】

まれにでも尋ねる人があったなら、須磨の浦で藻塩がたれるように、しおたれて侘しく暮らしていると答えておくれ。

316 我やどは三輪の山もと恋しくはとぶらひきませ杉たてるかど

【校訂】底本初句「我や<sup>いほ</sup>とは」。新撰和歌諸本で「やど」と「いほ」が混在するが、本稿の原則に従って、古今集とは異なる方の本文をとる。

【他出文献】古今集 雑下 九八二

【注】

〔我が宿は〕

初句は、古今集では「我がいほは」とある。「庵」であると、そこに住んでいるのはわがいほは宮このたつみしかぞすむ世をうち山と人はいふなり

(古今集 雑下 九八三)

などのように、隠棲者のイメージが強く、新撰和歌が古今集の雑の歌を恋の歌として位置づけなおすためにはふさわしくないために改めたものであろう。

【歌意】

私の宿は三輪山の麓です。恋しければ尋ねておいってください。杉の立っている門を。

317 うれしさを何につまむから衣袂ゆたかにたゞましものを

【校訂】底本初句「うれしき<sup>さ</sup>を」。新撰和歌諸本のうちに「うれしさを」という本文を伝えるものが見られ、また古今集の伝本のうちにも「うれしさを」とするものもある。いずれが新撰和歌本来の形とも断じがたいが、仮に古今集の有力な本文とは異なる「うれしさを」の方をとる。また、結句底本「たて<sup>た</sup>といはましものを<sup>イ</sup>」。新撰和歌諸本により傍記の方をとる。

【他出文献】古今集 雑上 八六五

【注】

〔たたましものを〕

結句は、古今集では「たてといはましを」とある。古今集の本文であると「たて」という命令の言葉が、316番の歌の「とぶらひきませ」という命令形と重なる。そうすると、314・315番の歌の対と同じ理由で対になってしまふことになる。それを避けて、内容はほぼ同じながら命令形を使用しない形に新撰和歌撰者が改変したものと見たい。

〔316番の歌との対応関係について〕

317番の歌の下の句の意味は、着物の袖幅を広く作れば良かったのに、という程のものとして理解は可能である。ただし、袂を豊かに裁つ、という表現は他に例のないものであるし、着物の袂を大きく作るということも、普通にはありそうもないことである。このことから、当該の歌は、その背景に何らか典拠があることを感じさせると言って良さそうである。一方316番の歌は、早くから三輪明神に関わる伝承が付されるような、特殊な背景を思わせる表現の歌であった。こうした、歌の雰囲気、すなわち何らかの伝承を伴う歌という雰囲気<sup>の</sup>共通性に着目して、この二首は対にされているのではなからうか。

【歌意】

うれしさを何に包もうか。衣の袂を大きく裁っておけば良かったのに。

318 秋くれば野にも山にもひとへたつたつとあるとや人の恋しき

【校訂】底本三句「ひとへたつ<sup>むらたつ</sup>」。新撰和歌諸本では「ひとくたつ」と「ひとへたつ」が混在するが、「ひとくたつ」では意味がきわめて取りにくいので、「く」は「へ」の誤写とみて、底本の本文をとる。また四句底本「たつとぬるとや」。「ぬる」では意味が通じないので、松平文庫本、彰考館文庫本等の傍記により、これを「ある」の誤写と見る。

【他出文献】不明



【注】

〔野にも山にもひとへたつ〕

この表現は意味が非常にわかりにくい。仮に「ひとへ」を省いて「野にも山にも立つ」という言葉だけを見れば、

君によりわがなは花に春霞野にも山にもたちみちにけり（古今集 恋三 六七五）

のように、霞か霧かが立っていることを表しているかと思われる。そのように考えた上で、「ひとへ」に関しては、

うす霧のひとへたちでもみゆるかなもみぢがさねの衣でのもり（出観集 四八七）

つねならば今日までみまし春霞いまひとへさへ立ちやそふらん（為仲集 六九）

など、霞や霧が薄くかかることを「一重」と表現した例が見えるので、当該の歌の上の句は、「秋が来ると（霧が）野にも山にも（うつすらと）一重立つ」ということになるかと思われる。ただ、このような舌足らずの表現になっているのには、他の理由があると考えられる方が妥当かと思われる。ここで思い当たるのは、これも後代の例しか見いだせないが、にほどりのすだくみぬまのかきつばたひとへだつべきわが心かは

（散木奇歌集 一六一）

あすか川ふちせもしらぬ秋の霧なににふかめて人へだつらん（拾遺愚草 二〇三五）などの「人隔つ」という言葉である。この「人へだつ」が、「一重立つ」に掛けられているものと見ておきたい。かくして当該の歌の上の句は、秋が来て野山にうつすらと霞がかかっている景に、飽きが来て人が隔たってしまった悲しさを重ね合わせた表現として理解できるものと考ええる。

なお、上の句は全体として第四句の「たつ」を起こす序にもなっている。

〔立つとゐるとや人の恋しき〕

これもいささかわかりにくい表現であるが、

秋さればかりとびこゆるたつた山たててもゐてもものをこそおもへたつとゐるとにきみこそおもへ

（人麻呂集 一五一）

たなばたはあまのはごろもおりかけてたつとゐるとやくれをまつらむ

（相模集 五四六）

普賢十願 礼敬諸仏

普賢行願威神力、普現一切如来前、一身復現刹塵身、一一遍礼刹塵仏

きみだにもちりのなかにも顕ればたつとゐるとぞみやまはるべき（発心和歌集 六）

などの例を参考にすれば、「立つにしても座るにしても人が恋しいのだろうか」というほどの意味かと思われる。

【歌意】

秋が来ると野にも山にも霧がうつすらと「重立つ」ように、あなたの心に飽きが来て人をへだつ。その霧が立つ、ではないが、そのために私は立つても座ってもあなたが恋しいのであろうか。

319 わがせこがきませりけりなわがやどの草もなびけり露もおちけり

【校訂】底本初二句「わかせこかきませにけらし」。新撰和歌諸本により初句は本文の方を、二句は傍記の方をとる。

【他出文献】古今和歌六帖 一三一六

【注】

「我が背子がきませりけりな」

「我が背子」は、万葉集以来の古い言葉であるが、「我が背子が来ます」という表現は、万葉集には見えず、

わがせこをきませの山とひとはいへど君もきまさぬ山のなならし

(拾遺集 恋三 八一八)

わがせこがきまさぬよひの秋風はこぬ人よりもうらめしきかな(同 恋三 八三三)

わがせこがきませりつるか見ぬほどにはのこぐさもかたまよひせり

(好忠集 一四四)

わがせこがきまさぬよひのあきかぜはこぬひとよりもうらめしきかな(同 二三四)

など、古今集より後に多く詠まれるようになる、平安朝的な表現であるらしい。なお、当該の歌は雑の歌であるので、「我が背子」は、夫もしくは男性の恋人を意味するのではなく、単に親しい男性のことを言っている言葉ということになる。あるいは、万葉集にもしばしば見られる、男性から親しい男性のことを言った言葉と考えることもできよう。

「けりな」は、

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに

(古今集 春下 一一三)

と同じで、過去の助動詞に詠嘆の「な」が添えられたもの。

「草もなびけり露も落ちけり」

古今集の時代の和歌では、実景の描写として草の類が「靡く」と表現したものもあるが、をみなへし秋のの風にうちなびき心ひとつをたれによすらむ

(古今集 秋上 二二〇)

のように、心がそちらに惹かれる、という意味を籠めて用いられる場合もある。当該の歌の場合、こうした意味を取らなければ、「我が背子」がやってきたことと、草が靡くというこの関係性がわからなくなる。また、露が落ちる、とは、古くから

秋萩に置きたる露の風吹きて落つる涙は留めかねつも (万葉集 卷八 一六一七)  
しもがれのくさまくらははきみこふるなみだのつゆぞおちまさりける

(古今和歌六帖 二四一八)

のように、涙が流れることの喩えに用いられる表現であり、当該の歌でも「我が背子」の来訪に涙することを意味していると取ることができる。

〔318番の歌との対応関係について〕

「野にも山にも」、「ひとへたつ」と「人の恋しき」、そして「ひとへたつ」と「たつ」とある」というように同音を何度も繰り返す318番の歌に、同じく「我が背子」と「我が宿」「草もなびけり、露も落ちけり」と類似の表現を繰り返す319番の歌をつがえた。なお、319番の歌は「露」とあることから秋の歌であることがわかるが、318番の歌も秋の歌であり、その点でも一致している。

#### 【歌意】

わが背子がいらつしやつたことよ。わが宿の草も靡いて心から歓迎しているし、露も落ちて、喜びの涙を流しています。

320 おく霜にねさへかれにし玉かづらいつくらんとか我は頼まむ

【校訂】底本四句「いつくこんとか」。新撰和歌諸本では「いつくこんとか」と「いつくらんとか」が混在するが、「玉かづら」に縁のある「繰る」の方の本文が妥当とみて底本を改める。

#### 【他出文献】不明

#### 【注】

〔置く霜に根さへかれにし玉葛〕

霜のために草が枯れる、という表現は、

おく霜に草のかれゆく時よりぞむしの鳴くねもたかくきこゆる

(千里集 三九)

など、新撰和歌とわりあい近い時代から確認できるし、また「根さへ枯れ」という言い方も、

人のせんざいにきくにむすびつけてうゑけるうた

在原なりひらの朝臣

うゑしうゑば秋なき時やさかざらむ花こそちらめねさへかれめや

(古今集 秋下 二六八)

のように、古今集のころから見いだすことができる。しかし、霜のために葛の根さえ枯れる、という表現は、ほかに見いだしがたい。そうした、通常は詠まれない物の取り合わせを当該の歌であえて用いたからには、それなりの表現意図があったと見て良いだろう。では、それはどのようなものなのか。一首全体は、下の句の、いったいあの人がいつやつてくるかと、私は頼みにしたりするだろうか。いや、頼みにはしない。という、訪れの途絶えた男に対する恨みの気持ちを歌ったものと思われる。ならば、上の句の表現は「枯れ」に「離れ」を掛けたものであるだろう。また、「根」には、共寝の「寝」を掛けてある可能性も考えられる。「根」に「寝」を掛ける表現が、

川上の根白高萱あやにあやにさ寝さ寝てこそ言に出にしか

(万葉集 卷十四 三四七九)

など、まったく例のないものでもないことに加えて、「さね葛」を歌う場合に、

玉くしげみもろの山のさな葛さ寝ずは遂にありかつましじ (万葉集 卷二 九四)

女につかはしける

三条右大臣

名にしおはば相坂山のさねかづら人にしられでくるよしもがな

(後撰集 恋三 七〇〇)

のように、早くから共寝の意味の「さ寝」を掛けた例がしばしば見られることから、同じ葛である「玉葛」を歌った当該の歌でも、これら「さね葛」の表現が意識される可能性もあるだろうからである。

「いつくらんとか我は頼まむ」

葛を詠む歌では、右にあげた後撰集の歌のように、葛の蔓を巻き取る意の「繰る」に、「来る」を掛けて用いることがしばしばある。当該の歌の場合も、第四句の「いつくらむ」は「いつ繰らむ」と「いつ来らむ」の掛詞と見たい。ただ、疑問詞の「いつ」を現在の推量の「らむ」でむすぶ例はほかに見いだしがたい——そもそも論理的になりたがいたいと思われる——ので、「いつ来む」と言うべきところを、掛詞に仕立てるために、やや

無理をした、と考えておきたい。

なお、「いつ」という疑問詞に係助詞「か」を添えることで、  
すがるなく秋のはぎはらあさたちて旅行く人をいつとかまたむ

(古今集 離別 三六六)

わかれてはいつあはむとかおもふらむかぎりあるよのいのちともなし

(伊勢集 二一七)

などのように、疑問の意を強める表現となるが、当該の歌の場合は、反語の意味で用いられている。

【歌意】

置く霜のために根、まですつきり枯れた玉葛ではありませんが、共に寝ることもなくなりすつきり離れてしまったあなたを、葛の蔓を繰る、というように、いつ来るだろうと頼みにしましうか。いやもう頼みにはしません。

321山のはにいさよふ月をとどめをきていくよみばかはあく時のあらむ

【校訂】なし

【他出文献】不明

【注】

〔山の端にいさよふ月〕

「いさよふ」という言葉は新撰和歌301番の歌の注に記したように、赴くべき方向が定まっていながら、立ち止まり行きなすんでいることを言う。当該の歌の場合、山の端で「いさよふ」というのだから、山稜の近くにある月の運行が遅いことを言っていることになる。論理的には上ったばかりの月でも沈もうとする月でも言いうるが、「とどめおきて」という表現によりふさわしいもの、と考えるならば、

あかなくにまだきも月のかくるるか山のはにげていれずもあらなむ

(古今集 雑上 八八四)

のような、沈もうとしている月を惜しむ表現であるとれよう。

なお、「山の端にいさよふ月」は、万葉集において、

見えずとも誰恋ひざらめ山のはにいさよふ月を外に見てしか

(万葉集 卷三 三九三)

山のはにいさよふ月の出でむかと我が待つ君が夜はふけにつつ

(同 卷六 一〇〇八)

山のはにいさよふ月を出でむかと待ちつつ居るに夜ぞふけにける

(同 卷七 一〇七一)

のように、なかなか上つてこない月のことを言う表現として定着していたもののようにある。この万葉集の表現を、別の内容を表すものに作り替えて利用したのが当該の歌ということなのであろう。また、『袖中抄』は当該の歌を引用して、「いでざらん月をば山のあなたにとどめてもいかがみるべき」と述べて、「いさよふ月はいでぬほどをもさしいでて後をもいさよふと云べし。」との説を示す。ただし、上つたばかりの月を「とどめおきて」というのは、やはり和歌的な発想としてはありにくいと思われる。

〔幾夜見ばかは〕

この表現は、

いかならむ巖の中にすまばかは世のうき事のきこえこざらむ

(古今集 雑下 九五二)

をとこのまかりたえたりける女のもとに、雨ふる日見なれて侍りける  
ずさのかげのむまもとめにとてなんまうできつるといひ侍りければ

よみ人しらず

雨ふりて庭にたまれるにぐり水たがすまばかはかげの見ゆべき

(拾遺集 雑恋 一二五三)

などと同じく、疑問詞に続く動詞に「かは」という係助詞を添えて疑問の意味を強めた、つまり反語的な表現にしたものである。

〔320番の歌との対応関係について〕

320番の歌の「いつくらんとか」と321番の歌の「幾夜見ばかは」は、ともに疑問詞に他の語を挟んだ上で係助詞を添えて疑問の意を強めた表現である。こうした類似する表現に着目して二首を対にしたのではないか。

【歌意】

山の端にたゆたう月をそこにそのまま留めておいて、いったい幾夜見たならば満足する時があるだろうか。いやいや、いくら見ても満足することはないだろう。

322 我やどの一むらすゝきかりかはむ君が手馴の駒もこぬかな

【校訂】なし

【注】

「一群すすき」

「一群すすき」は、意味としては、ひとかたまりの薄ということであるが、

藤原のとしもとの朝臣の右近中将にてすみ侍りけるさうしの身まかり  
てのち人もすまざるにけるを、秋の夜ふけてものよりまうでできる  
ついでに見いければ、もとありしせんざいもしげくあれたりけ  
るを見て、はやくそこに侍りければむかしを思ひやりてよみける

みはるのありすけ

きみがうゑしひとむらすき虫のねのしげきのべともなりにけるかな

（古今集 哀傷 八五三）

のように、ほんの「ひとむら」だった薄が、今は生い茂って野辺になってしまった、とい  
う例などがあることから、「ひとむら」という言葉には、ひとかたまりに過ぎないささや  
かなもの、というニュアンスがあることがわかる。

「刈り飼はむ」

「刈り飼はむ」は、薄を刈り取って馬に与えよう、の意。なお、和歌に詠まれた「か  
ふ」の例は、万葉に

さ檜隈檜隈川に馬留め馬に水かへ我よそに見む （万葉集 卷十二 三〇九七）

が見られるが、あまり例のあるものではない、歌に詠むにはあまりふさわしくない語だっ  
たのかも知れない。なお、源氏物語（紅葉賀）で源内侍が光源氏に誘いかけて詠んだ歌、  
君し来ば手なれの駒に刈り飼はむさかり過ぎたる下葉なりとも（源氏物語 紅葉賀）  
は、当該の歌を意識したものとおぼしいが、そうしたあまり歌語的ではない言葉を使った  
ところが、源内侍の人柄を示すものとして働いているのではないだろうか。

「駒もこぬかな」

「こぬかな」は、

山とほきやどならなくに秋萩をしがらむ鹿の鳴きもこぬかな （貫之集 二六三）

のように、「来ない事よ」という意味の場合もあれば、

さみだれのよはくらくともほととぎすさやかにだにもなきてこぬかな

（躬恒集 一四二）

のように、「こないかなあ」というほどの、来訪を希求する場合にも用いられる。当該の

歌では、男の訪れを待つ趣旨であろうから、後者の用法と考えられる。

【歌意】

私の家の庭のこのささやかな一群すすきを刈って飼い葉にしよう。あなたの飼い慣らした馬も来ないだろうかと待っています。

323 朝なけに世のうきことをしのぶとて詠しまゝに年ぞへにける

【校訂】なし

【他出文献】後撰集 雑二 一一七四・古今和歌六帖 二一〇一・新勅撰集雑二 一一二

五

【注】

「あさなけに」

「あさなけに」は、朝も昼も、の意。万葉集では「あさにけに」の形で見えるが、平安時代には、

あさなけに見べききみとしたのまねば思ひたちぬる草枕なり

(古今集 離別 三七六)

朝なけに見つつすめどもけふなれば山べのみこそ思ひやられる (貫之集 四二七)

など、「あさなけに」の形に変わったようである。「朝に<sup>け</sup>目に」という、もとの語義を示す形が失われた時点で、「あさなけに」は、語の成り立ちのわからない、古い言葉として認識されていたものと思われる。

「世の憂きことをしのぶとて」

「憂きことをしのぶ」は、

あだなる名たちていひさわがれけるころ、あるをとこほのかにききて、

あはれいかにぞとどひ侍りければ こまちがむまご

うき事をしのぶる雨のしたにしてわがぬれぎぬはほせどかわかず

(後撰集 雑四 一二六七)

うきことををりをりにしのぶればつらきも人のかたみなりけり

(古今和歌六帖 三一四三)

の様に、辛いことを我慢し、堪え忍ぶ、という意。

「322番の歌との対応関係について」

322番の歌は、男の訪れが途絶えて、切ない気持ちを抱いたまま時を過ごす女の立場



で歌われたものである。また323番の歌も、一人辛さを堪え忍びながら何年も過ごすものであり、描かれた情景に雰囲気の共通性が認められよう。また、「刈り飼はむ」や「あさなけに」という、独特の雰囲気を持つ言葉を用いた点でも共通するのではないか。

【歌意】

朝に昼に、世の辛いことを堪え忍ぼうと、ぼんやりと物思いにふけたままに、何年も経ってしまったことよ。

324 あはれてふことにしるしはなけれ共いはではえこそあらぬものなれ

【校訂】なし

【他出文献】貫之集 五九六・後撰集 雑四 一二七一

【注】

「あはれてふこと」

「あはれてふこと」とは抽象的な「あはれ」という概念ではなく、

あはれてふ事をあまたにやらじとや春におくれてひとりさくらむ

(古今集 夏 一三六)

あはれてふ事のはごとにおくつゆは昔をこふる涙なりけり (同 雑下 九四〇)

哀てふことにあかねば世間を涙にうかぶ我が身なりけり (貫之集 五九七)

などのように、「あはれ」という言葉のことを指している。

「しるしは無けれども」

「しるしなし」は、

ちりぬればこふれどしるしなきものをけふこそさくらをらばをりてめ

(古今集 春上 六四)

しるしなきねをもなくかなうぐひすのことしのみちる花ならなくに

(同 春下 一一〇)

のように、効果が無い、甲斐がない、という意味である。ところで、当該の歌の発想は、

うきことをいひてしるしなきよりはこころにこめてあるはまされり

(忠岑集 一一九)

という、「しるし」のない言葉を発するよりは、胸の内に秘めている方がまだ、という忠岑の歌と発想の根幹を同じくするものであり、こうした、日常、話題にする類の事柄を、特別な技法をこらすでもなく詠んだところが、この時代の和歌にしては珍しいものと思わ

れる。

【歌意】

「あはれ」という言葉には何の効果も無いけれども、言わずにはいられないものなのですよ。

325世中はうけくにあきぬ奥山の木葉にふれる雪やけなまし

【校訂】底本二句「うけくにあきの」。新撰和歌諸本に異文は見られないが、「あきの」という形ではどうしても「秋の奥山」という一続きの語を読み取ることになる。しかし、それでは下の句の「降れる雪」と季節があわないので、もとは古今集と同じく「あきぬ」であったのを現存の新撰和歌諸本に共通する祖本の時点で「ぬ」を「の」に誤写した可能性を考えざるを得ない。なお初句には新撰和歌諸本で「世の中は」と「世の中の」が混在するので、本注釈の原則に従い、古今集と異なる形である底本のままにする。

【他出文献】古今集 雑下 九五四

【注】

〔奥山の木の葉に降れる雪や消なまし〕

奥山の雪に関しては、

奥山の菅のねしのぎふる雪のけぬとかいはむこひのしげきに

（古今集 恋一 五五一）

のように、それが消えにくいものであることを前提として成り立つ歌がある。そもそも奥山でなくても里ならぬ山に降る雪は、

み山には松の雪だにきえなくに宮こはのべのわかなつみけり（古今集 春上 一九）

のように、最後まで残る物として歌に詠まれるのが通常と思われる。時代は下る可能性があるが、

おくやまのまきのこのはにふる雪のふりはますともつちにおちめや

（家持集 一五四）

も、そうした、奥山の雪は多くて消えにくい、という前提で詠まれたものであるう。

ところが、当該の歌は、奥山の木の葉に降る雪が消えるように、私も消えてしまおう、と述べたもので、通常の和歌表現とは異なる発想である。あるいは、実際に山中の木の葉に降る雪がはかなく消える光景を目の当たりにした経験があり、それをそのまま言葉にしたということなのかもしれないが、ともあれ、当該の歌は、和歌の常套的な表現を踏まえ

ない、珍しい歌であるといえるのではないか。

〔324番の歌との対応関係について〕

324番の歌は、日常の話題をそのまま言葉にした、歌らしからぬ歌であったとおぼしい。それと対にされたのが、通常の和歌表現を踏まえない、やはり歌らしからぬ歌である325番であったと見たい。

【歌意】

世の中は嫌なことに飽き飽きしてしまった。奥山の木の葉に降った雪が消えるように、私も奥山に行き、消えてしまおうかしら。

326 浅芽生のをのゝしのはら忍ぶとも人しるらめやいふ人なしに

【校訂】底本三句「忍ふれと」<sup>とも</sup>。新撰和歌諸本により傍記の方をとる。

【他出文献】古今集 恋一 五〇五

【注】

〔浅茅ふのおのの篠原〕

浅茅や浅茅の茂った野は、

おもふよりいかにせよとか秋風になびくあさぢの色ことになる

（古今集 恋四 七二五）

時すぎてかれゆくをのあさぢには今は思ひぞたえずもえける（同 恋五 七九〇）

などの例を見ると、秋のうらぶれた光景として、終わりにかけた恋のイメージを有するものであったようで、後には、

あさぢふの野べやかるらん山がつかきほの草は色もかはらず

（古今和歌六帖 一三二五）

いまはとて人のかれはてあさぢふにさればなつなのはなぞさきける（同 二二二七）

あさぢふのをのしるしのそらごとをいかなりといひて君をばまたん

（同 二八二一）

などのように、心変わりした相手を喩えることにも用いられるようになる。

当該の歌の上の句は、「篠原」の「しの」という音と同じ音の「しのぶ」を起こす序であるが、そこに寂しい秋の気分と、恋の終わりの雰囲気が付加しているものと思われる。

〔しのぶとも〕

第三句に関しては、古今集の諸注が指摘するように、「しのふ」が「偲ぶ」なのか「忍

ぶ」なのか、「とも」が格助詞「と」と係助詞「も」なのか接続助詞「とも」なのかという、組み合わせの数で言えば、四通りの解釈の可能性がある。いずれも文法的にはなりたつだろうから、その適否は文脈で判断するほかはない。さて、当該の歌は、古今集では恋一におかれるが、新撰和歌では恋の歌八十首中の六十二首目であり、前後に配された歌を見ても、恋の終盤にかかっていることがわかる。そうした段階において、私が「偲ぶ」とを人が知らない、ということとはそぐわない。また、「忍ぶ」「とも」で解釈した場合、「恋しくて辛い気持ちを忍んだとしても、人はそのことを知るだろうか」というほどの意味になるが、それでは「とも」の逆接の意味が有効に働いているとは考えにくい。そもそも、

おもふには忍ぶる事ぞまけにける色にはいでじとおもひしものを

(古今集 恋一 五〇三)

のように、「忍ぶ」とは、恋心を表に出さないための行為であり、忍べば忍ぶほど、当然相手は自分の恋心に気づかないことになる。したがって「(人に知られぬよう) 忍んだとしても、人は知らない」では、意味的に釣り合わないのである。

かくして、新撰和歌の当該の歌は、「忍ぶ」「と」「も」、つまり「忍んでいるとも人は知るだろうか」という意味であると考えられる。

#### 【歌意】

浅茅の茂る小野の篠原のようなさびしい気分で、私が恋の辛さを忍んでいるとも、あの人は知っているだろうか。いや、知りはしないだろう。そのことを言う人もいないのでは。

327 山彦のをとづれしとぞ今は思ふ我か人かとたどらるる世に

【校訂】底本結句「身をたどる世に」。新撰和歌諸本で「たどらるる世に」と「身をたどる世に」が混在するが、本稿の原則に従って、古今集とは異なる方の本文をとる。

【他出文献】古今集 雑下 九六三

#### 【注】

〔山彦のおとづれしとぞ〕

「おとづる」は、

物へまかりける人をまちてしはすのつごもりによめる みつね

わがまたぬ年はきぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず(古今集 冬 三三八)  
のように、人がやってくることを表す場合と、

みよしのの山の白雪ふみわけて入りにし人のおとづれもせぬ（古今集 冬 三二七）  
のように、手紙が送られてくることを表す場合があるが、いずれにせよ、通常は相手方から自分の所へやってくる時に用いる言葉であり、逆に自分から相手のところへ向かう場合は「たづぬ」という。

さて、当該の歌の初二句は「山彦のおとづれし」である。「山彦」は言うまでもなく、つれもなき人をこふとて山びこのこたへするまでなげきつるかな

（古今集 恋一 五二二）

打ちわびてよばはむ声に山びこのこたへぬ山はあらじとぞ思ふ

（同 五三九）

のように、こちらから発した声に対して先方が返答をするものである。従って、当該の歌の「山彦のおとづれ」も、「山彦のような、こちらからの言葉に対する先方からの返答」と考えて良いと思われる。

次に問題となるのは、「おとづれし」の「し」が過去の助動詞「き」の連体形なのか、打ち消し推量の「じ」の連体形なのか、ということである。語法的にはいずれも可能である。当該の歌の場合、下二句の内容、つまり、茫然自失の状態であるということが、「山彦のおとづれしとそ今は思う」ことの背景もしくは理由にならないければ、一首は意味をなさない。そのことを手がかりに考えてみよう。「おとづれし」の場合は、「茫然自失の状態だから（たとえそれがどんなものであっても）私の言葉あるいは気持ちに対する返答だと今は思います」と言葉を補う必要があるが、整合した説明ができる。一方「おとづれじ」の場合、「茫然自失の状態だから、先方からの返答はないだろう、と今は思います」という訳文を当てはめることはできる。しかし、自分の心理状態の如何に関わらず、返答のあるなしを決めるのは先方の考え次第なのだから、一首の論理的整合性は乏しいと言わざるを得なくなる。以上のように、やや理屈に偏ってはいるが、「おとづれし」の方が、幾分可能性が高いものと考ええる。

〔今は思ふ〕

「今は」は、

おもへどもおもはずとのみいふなればいまはおもはじおもふかひなし

（古今和歌六帖 二二三二）

のような「もはや」の意で用いられた可能性と、

やまがはのはやくもいまはおもへどもながれてうきはわが身なりけり

（仁和御集 九）

のような「今だけは」の意で用いられた可能性とがある。

当該の歌では、「茫然自失の状態である今に限って言えば、冷静な判断ができませんから、どんな手紙でも私の気持ちに対する返答だと思ひましょう」という、「今だけは」の意味で用いられていると見られる。

〔身をたどるよに〕

「たどる」は、「状況、事態、物の道筋などがわからなくなり、解決を求めてあれこれと考え迷う。」（日本国語大辞典第二版）の意。後の作ではあり、当該の歌を参考にして詠まれた可能性も否定できない例ではあるが、

我がたまはゆくへもしらずなりにけりわれか人とたどらるるまで

（成尋阿闍梨母集 五六）

では、自他の区別の付かぬほどに茫然自失の状態を「われか人とたどらるる」と表している。やはり当該の歌の「われか人と身をたどるよに」も、「茫然自失の思いで過ごすこの人生では」というほどの意味であるだろう。

〔326番の歌との対応関係について〕

自らの心情を告げてくれる人がいないために、相手に気持ちが伝わらないことを歎く326番の歌に、どんな言葉であっても今は自分に対するメッセージだと思いたいという気持ち、すなわち、だれも自分に対して誠実な言葉を掛けてくれる人はいないという悲しさを詠んだ327番の歌をつがえた。加えて、326番の歌には「人」という言葉が繰り返されているのに対して、327番の歌では「我」「人」という言葉が現れる。この点でも両歌は好対照をなす。

【歌意】

山彦が返事をするように、私の言葉に対して返答してくれたのだと、今は思ひましょう。自分なのか人なのかそれすらわからぬ茫然自失の状態です。世を暮らしていますから。

328 侘はつる時さへものゝかなしきはいづれをしのぶ心なるらん

【校訂】底本四句「いつこをしのふ」。新撰和歌諸本により改める。底本結句「泪なるらん」。新撰和歌諸本で「涙なるらむ」と「心なるらむ」が混在するが、本稿の原則に従って、古今集とは異なる方の本文をとる。

【他出文献】古今集 恋五 八一三

【注】

「わびはつる」

「わび果つ」は、「わぶ」ことが行き着くところまで行ったことを言うが、

つのかくにまかれりけるに、しりたる人にあひ侍りて

宮こにはすみわびはててつのかくの住吉ときくさとにこそゆけ

(拾遺集 雑下 五三九)

ゆくみちをうみちとのみはわびはてじかへるの山のまつをたのみて

(忠見集 一二八)

わびはてぬいまはかぎりのみなりけりいきてかへらむことぞゆゆしき

(元真集 二七七)

などからわかるように、わび果てたのちには、身をはふらかすほどの絶望感や虚無感に襲われる、という前提で、この表現は用いられる。したがって当該の歌は、わび果てて、もはや我が身に対する執着心もない状態なのに、他への執着の現れである「もののかなしき」心情が起ることへの不審を表現したものとして理解できよう。

「もののかなしきは」

「かなし」は、「愛着するものを、死や別れなどで喪失するときのなすべのない気持ち」(『古典基礎語辞典』)。前項でも述べたように、わび果てて我が身を喪失することさえ厭わない心情であるのに、それなのに何かに愛着し、それを失うことを辛く思う気持ちが残っていることを訝しんでいるのである。

「いづれをしのぶ心なるらん」

四、五句は、古今集では「いづこをしのぶ涙なるらん」とある。「いづこ」だと、自分の執着心が向いている方向、すなわち、恋の相手そのものを示すことになる。一方「いづれ」であると、恋の相手を示すのではなく、様々なものが胸中を去来するそれらすべてを漠然と示すことになる。また、「涙」ではなく「心」になっているのは、次の329番の歌と対応させるための作為と思われる。

【歌意】

辛さの限りを尽くして我が身への執着すらなくなったこの時でさえ、何かを悲しみ惜しむ気持ちがあるのは、いったい何を恋い慕う心なのでしょうか。

329 身はすてつ心をだにもはふらさじつみにはいかゞなるとしるべく

【校訂】なし

【他出文献】古今集 俳諧歌 一〇六四

【注】

〔328番の歌との対応関係について〕

328番の歌は、もはや辛さの限りを尽くして、我が身さえどうでも良くなったにもかかわらず、何かを感じている心のあることを訝しむものであった。つまり、気持ちと心の乖離を歌ったものである。そのことと、身と心を全くの別物として歌う329番の歌の発想との類似性が、この対偶では浮かび上がる。

【歌意】

身はすっかり捨ててしまった。けれども心だけでも放り捨てないでしよう。最後にはどのようなになるのかわかるように。

330伊せのうみのあまのたくなは打はへてくるしとのみや思わたらむ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋一 五一〇

【注】

〔海人の桹縄〕

「桹縄」は、万葉集（巻二 二二七）で「長き」にかかる枕詞として用いられ、平安朝でも、

心みじかきやうにきこゆる人なりといひければ　よみ人しらず

伊勢の海にはへてもあまるたくなはの長き心は我ぞまされる

（後撰集 恋一 五七九）

伊勢のうみの千ひろたくなはくりかへしみてこそやまめ人の心を

（古今和歌六帖 一七八〇）

と、その長いことを歌った例が見られる。当該の歌では、千尋にもなるような長い長い海人の桹縄を海人が海中に引き延ばすように、という意味で用いられる。なお、古事記歌謡に「桹縄の千尋縄打ち延へ釣せし海人」（古事記上卷大国主神の国譲条）という表現が見えることと、右に挙げた古今和歌六帖の歌の表現がそれに似通っていることからして、当該の歌の上句は、はやくから伝承されてきた古歌の表現をそのまま利用したものとおぼしい。

また、この句は、古今集の定家本の系統の伝本では「海人の釣り縄」とする。「釣り



繩」はこの歌以前には見いだせぬ新しい表現であるが、新撰和歌では、次の歌との対偶のために、古来の表現である「桕繩」の方を採用したものと思われる。

【歌意】

伊勢の海の海人の桕繩が海中に長く長く延びているように、これからもずっと苦しいとばかり思い続けるのであろうか。

331 かくしつゝよをやつくさむ高砂の尾上にたてる松ならなくに

【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑上 九〇八

【注】

「かくしつゝ世をや尽くさむ」

当該の歌は倒置表現となっており、自分は高砂の尾上に立っている松でもないのに、「かくしつゝ」人生を終えるのか、という内容になっている。さて、そうであるから「かく」の指すものは「高砂の尾上に立てる松」のありようでなくてはならない。では、「高砂の尾上に立てる松」のありようとはどのようなものか。

つかさたまはらでなげき侍りけるころ、人のさうしかかせ侍りけるお

くにかきつけ侍りける づらゆき

いたづらに世にふる物と高砂の松も我をや友と見るらん（拾遺集 雑上 四六三）

いたづらに老いにけるかな高砂の松やわが世のはてをかたらむ（貫之集 一九九）などの例を見ると、少なくとも新撰和歌撰者である貫之にとっては、「高砂の松」とは、「いたづらに」世を経て年老いたものでもあったらしい。また、当該の歌もそのように理解して一首の意は通ずる。

〔高砂の尾上に立てる松〕

「高砂」は、古来、固有名詞か普通名詞かという議論があるが、最近の古今集諸注の言うように、古今集仮名序で「住の江」と対にして用いられることから、播磨の地名と考えられていたと思われる。

〔330番の歌との対応関係について〕

両首それぞれ「伊勢の海の海人のたく綱」と「高砂の尾上に立てる松」と、鄙の景物を序詞的に用いた上で、いつまでも同じ状況のまま過ごすことを歌う点が共通する。また、「伊勢の海の…」という表現が、古くから伝承されたものであったことを述べたが、「高

砂の尾上」も、

これさだのみこの家の歌合によめる 藤原としゆきの朝臣  
あきはぎの花さきにけり高砂のをののしかは今やなくらむ

(古今集 秋上 二一八)

花山にて道俗酒らたうべけるをりに 素性法師

山守はいはばいはなん高砂のをのの桜折りてかざさむ (後撰集 春中 五〇)

のように、古今集の時代に常套的に用いられた表現であったことがわかる。その点でも対にされてしかるべきものであったと思われる。

【歌意】

このように、無為の日々を重ねて人生を終えるのだろうか。私は高砂の尾上に立っている老松ではないのに。

332 おもふともこふともあはむ物なれやゆふてもたゆくとくる下ひも

【校訂】底本二句「かふともあはむ」<sup>こカ</sup>。新撰和歌諸本により傍記の方をとる。

【他出文献】古今集 恋一 五〇七

【注】

「ものなれや」

当該の歌の「なれや」は、

春さればのべにまづさく見れどあかぬ花まひなしにただなるべき花のななれや

(古今集 雑体 一〇〇八)

と同じく、反語の意を表す。

「結ふ手もたゆく解くる下紐」

下紐が解けることは、

(女につかはしける)

在原元方

こひしとは更にもいはじしたひものとけむを人はそれとしらなん

返し

よみ人しらず

したひものしるしとするもとけなくにかたるがごとはあらずもあるかな

(後撰集 恋三 七〇一・七〇二)

したひものときしばかりをたのみつつたれもしらぬこひをするかな

(躬恒集 五一)

などのように、相手が自分を思ってくれているときに生じる現象であり、めづらしき人を見むとやさかもせぬわがしたひものとけわたるらむ

(古今集 恋四 七三〇)

と、恋人と逢えることを予告するものとしても詠まれる。このことを踏まえれば、当該の歌は、相手に会えないことがわかつている状況で下紐が解けるといふ皮肉な現象を詠んだものであることがわかる。

さて、当該の歌は古今集においては恋の初めに位置する。その場合は、あの人とは逢えないと思うけれども、しかし、下紐が解けると恋人に逢えるという伝えの通り、ひよつとしたら逢えないとも限らない、というかすかな期待を含んだ表現ということになるだろう。一方、新撰和歌の場合、当該の歌は恋の終わりに近いところに位置する。そのため一首は、いくらあの人のことを思っても逢えるはずはない。それなのに下紐が何度も解けてあの人のことを思い出させ、私を苦しめる、という悲痛な気持ちを詠んだ歌として理解されることになるだろう。

【歌意】

いくらあの人のことを思おうとも、いくらあの人のことが恋おうとも逢えるようなものではない。それなのに、皮肉にも、結ぶ手もだるいほどに何度も解けて、あの人に来てくれていた頃のことを思い出させる下紐であるよ。

333 あはれてふことの葉ごとにをく露はむかしをこふる泪也けり

【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑下 九四〇

【注】

〔むかしを恋ふる涙なりけり〕

当該の歌は、「あはれ」と口にするたびに涙を流すことを、木の葉一枚ずつに露が置いている情景で表現したもの。一首の趣向は、「あはれ」という「言葉」ごとに置く露とは(何でしょう)と問いかけておいて、それは昔を恋しく思う涙だったのですよ、と種明かしする体の古今集的なものである。ところで涙を流す原因は、なぜ「昔を恋ふる」ことであるのか。新撰和歌の雑の歌の配列から言えば、

かくしつよをやつくさむ高砂のをのへにたてるまつならなくに

(新撰和歌 三三二)

◇あはれてふことはごとにおく露はむかしをこふるなみだなりけり（同 三三三）  
ありはてぬいのちまつまのほどばかりうきことしげくおもはずもがな（同 三三五）  
のように、当該の歌の前後に人生を終えることを意識した歌が置かれ、したがって、当該の歌の涙も、年老いた者が再び帰ってくるのではない若き日のことを恋しく思っ流す涙であると理解できよう。

〔332番の歌との対応関係について〕

332番の歌は、恋人が自分の元に通ってきてくれたかつての日々のことを思い出して悲しむ心情を歌うものであり、333の歌は、かつての若い日々が再びは戻って来ないことを悲しむ心情を詠んだものであった。この主題の共通性によって対にされたものか。

【歌意】

「あはれ」という言葉、ことに置く露は、それは、昔を恋しく思う涙だったのですね。

334おもひやる心やゆきて人しれず君が下紐ときわたるらん

【校訂】底本結句「とけわたるらん」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】不明

【注】

〔思ひやる心〕

「思ひやる心」は、

ものへゆく人に

思ひやる心しさにたちぬればとまるわが身はあるかひもなし（兼輔集 九五）

おなじ人の馬のはなむけにやるとて、兵衛のかみのよませたるに

遠く行く君をおくるとおもひやる心も共に旅ねをやせん（貫之集 七四八）

などのように、自分の体から抜け出して、気持ちを寄せる相手の方へと向かう心のことを意味する場合がある。当該の歌も同様に考えられる。

〔君が下紐解きわたるらん〕

当該の歌を、あなたが逢いに来てくれるはずもないのに、どうして私の着物の下紐は解けるのでしょうかと歌った332番の歌に続くものとして受け取るとき、一首は332番の歌の詠歌主体に対して返答したものと理解されることになる。すなわち、「あなたの着物の下紐が解けるのは、私の心があなたの方へ向かっているからなのでしょう」と、不実な心をなじった332番の歌に対して反論していると受け取ることになるだろう。なお、

「心やゆきて」の「や」は、「上の事柄をすでに確定的なもの、確信あることとして扱い、それを相手につきつけて問いただすという、いわば質問の意を示している」（『古典基礎語辞典』）ものである。

【歌意】

（あなたはどのようにして下紐なんぞが解けるのかと言いますが、それは）あなたのことを私の思う心がそちらに行つて、人知れずあなたの下紐を解き続けているのでしよう。（そのこととはおわかりですか。）

335 ありはてぬ命まつまの程斗うきことしげくおもはずも哉

【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑下 九六五

【注】

〔有りはてぬ命〕

「くはてぬ（ず）」は、

いのちにもまさりてをしくある物は見はてぬゆめのさむるなりけり

（古今集 恋二 六〇九）

のように、最後までくしきれない、という意。「有りはてぬ命」は、天寿を全うできない命、ということになる。

〔命待つ間の程ばかり憂きことしげく思はずもがな〕

この時代の和歌においては、通常、

いかならむ巖の中にすまばかは世のうき事のきこえこざらむ

（古今集 雑下 九五二）

朝なけに世のうきことをしのぶとて詠しままに年ぞへにける（新撰和歌 三二二三）

世中のうきことを

をしからぬいのちなれども心にしまかせられねばうきよにぞすむ（伊勢集 二〇六）

などに見られるように、この世に生きながらえている間は憂きことが多い、という前提で「憂きこと」は詠まれる。それを、もう寿命もさほど長くはないのだから、せめてこの世にいる残りの時間は「憂きこと」が多いとは思いたくない、と常識的な発想を踏まえつつ、見方を変えて表現したものである。

〔334番の歌との対応関係について〕

両歌ともに、和歌によく見られる常套的な表現の背後にある考え方を、理屈でとらえ直して、異なる見地から詠んだものである。

【歌意】

いつまでも生きてはられない短い天命を待つ間の時ぐらひは、辛いことを多く思わないでいたいよ。

336 あひみぬもうきも我身のから衣おもひしらずもとくる紐哉

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋五 八〇八

【注】

「あひ見ぬも憂きも我が身のから」

この句は通説の通り、「あの人に逢えないのも、辛いのも自分の責任」というほどの意味。当該の歌は、334番の歌を受けて、「私の気持ちがあなたのところに行って下紐を解いているのですよ」と白々しい言葉を言う相手を好きになってしまった自分を責めているものと理解できる。

「思ひ知らずも」

「思ひ知る」は、

おほかたの秋くるからにわが身こそかなしき物と思ひしりぬれ

(古今集 秋上 一八五)

み山よりおちくる水の色見てぞ秋は限と思ひしりぬる

(同 秋下 三一〇)

のように、十分に理解する、の意。当該の歌の場合、

ちりぬればのちはあくたになる花を思ひしらずもまどふてふかな

(古今集 物名 四三五)

と同じく、唐衣の紐を擬人化し、その紐が、「あひ見ぬも憂きも」すべて自分の責任であると悲しんでいる自分の気持ちを十分に理解せずに、あたかもあの人がやってくるかのような期待をさせる、という辛い振る舞いをしている、ということを表す。

【歌意】

逢うことがないのも辛いのも（あんな人を好きになってしまった）我が身が原因（だとわかって）。（そんな私の悲しい気持ちも）こともよくわからないで、（無益に）解けてはむなししい期待をさせ）る下紐よ。

337 我しなばなげけ松虫うつせみの世にへし時の友と忍ばむ

【校訂】底本二句「なげく松虫」。「く」の横に本文とは別筆の朱書で「け」と記す。内閣文庫本、書陵部蔵鷹司乙本が「なげく松虫」とするが、意味的に「なげけ」でなくては通じがたいので、「く」は「なげく」の踊り字を誤写したものとみる。

【他出文献】不明

【注】

〔嘆け松虫〕

松虫に関して「鳴く」ではなく「嘆く」と言った例を見いだすことはできない。こうしたあまり例のない表現を用いたのは、今自分が「世に経」ることを嘆いていること、そして松虫が同じように嘆くならば、自分と同じ境遇の「友」と思うことができるということ、を言わんが為のものであるうか。

〔世に経し時〕

「世に経」は、世の中で過ごす、暮らす、の意。

世にふればうさこそまされみよしのいはのかけみちふみならしてむ

（古今集 雑下 九五二）

世にふれば事のはしげきくれ竹のうきふしごととに驚ぞなく

（同 九五八）

のように、「世に経」ることは、辛く憂きこととして詠まれることが多い。

〔友と偲ばむ〕

人間ならざる存在を友と思う、という発想の歌は、

つかさたまはらでなげき侍りけるころ、人のさうしかかせ侍りけるお

くにかきつけ侍りける

つらゆき

いたづらに世にふる物と高砂の松も我をや友と見るらん（拾遺集 雑上 四六三）

にも見られる。この貫之の歌も当該の歌も、ひとりぼっちで世を嘆いている自分の悲しみを慰めるために高砂の松や松虫を友と見なそうとするものである。

なお、古今集の仮名序の、様々な歌を紹介する部分に「松虫のねにともをしのび」という記述がある。現在は古今集200番の「君しのぶ草にやつるるふるさとは松虫のねぞかなしかりける」を示すかと言われているが、表現の相違から仮名序の記述がまさにこの歌を指しているとは思われない。やはり、松虫の鳴く声に友を偲ぶ、という発想をそのままに詠んだ歌がこの当時に存していたのだと考えるべきであるし、そうした歌の発想を踏ま

えて、逆の視点から詠んでみたのが当該の歌ということになるだろう。

〔336番の歌との対応関係について〕

唐衣の紐を擬人化して詠んだ336番の歌に、人間ならざる松虫を友人と思おうという337番の歌をつがえた。

【歌意】

私が死んだなら歎けよ松虫。そうしたら、うつせみのこの世で過ごしていたときの友だとおまえのことを偲ぼう。

338 おもひ出る常磐の山のいはつゝじいはねばこそあれ恋しきものを

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋一 四九五

【注】

〔言はねばこそあれ〕

この句については、日本古典文学大系『古今和歌集』が、「口に出して言わないから人にはわからないけれど、という意。」として以来、多くの注釈書でこの説が継承されているようである。ところで、日本古典文学大系がこのように解釈した根拠は、次のように説明されている。

今こそあれ 我も昔は男山さかゆく時もありこしものを（八八九）

この「今こそあれ」は、「今こそあれども」「今こそかくあれども」、もつとはつきり言えば「今こそさかゆく時もなくあれども」という心持ちであって、やはり同じわけである。

思ひいづるときは山の岩つつじ 言はねばこそあれ 恋しきものを（四九五）

この「言はねばこそあれ」は、前のおなじではない。けれども、

口へダシテイハヌデコソアレ思ヒダシタ時ニハソレハく恋シイ物ヲ（遠鏡）

いはぬでこそあれ恋しきものを 又いひこそせね恋しき物をなどいふがごとし

（正義）

口へ出していわずにこそ居れ、それはく恋しいものをサ（金子氏評釈）

全然云はずにはゐれど心では恋しがっているものを（窪田氏評釈）

というようにはならないであろう。「言はねば」というのに注意すれば、

口に出しては言わないから人には知られないでいるけれども



という意に、自然になつてくるはずだと思うが、どうであろうか。

(同書「解説」五二頁)

この古典文学大系の説の要所は、「言はねばこそあれ」を、「言はねばこそ(かく)あれ」と理解する、というところにあるように思われる(片桐洋一『古今和歌集全評釈』はこの説を踏襲せず、「口に出して言わないからこれですんでいるけれども」とするが、「かく」を補つて考える、という点では大系の説に等しいと思われる)。また、こうした理解は、

宝治元年五十首に

権僧正公朝

浪かくるいその浦わの岩つつじいはねばこそあれぬる袂を

(夫木和歌抄 二二〇一)

同四年毎日一首中

同(藤原為家)

夕日影をぐらの山のいはつつじいはねばこそあれ春やこひしき (同 二二三五) など、当該の歌を踏まえて詠まれた歌の「いはねばこそあれ」が、「口に出しては言わないからわからないが」というほどの意味で用いられているらしいことからみれば、中世の歌人たちにもあったものと思われる。しかし、こうした理解が古今集の時代にもなされていたと直ちには言えないだろう。また、この理解に文法な説明をつけようとする、いくぶんかの無理があるようにも思われる。

さて本稿では古典大系の説が不可である、とまで主張するのではないが、しかし、そのように理解する根拠が特に示されていないのだから、「かく」を補わずに理解するすべはないのか、今一度考えてみたいと思う。

ここで注目したいのは、

玉くしげ覆ふをやすみ明けていなば君が名はあれど我が名し惜しも

(万葉集 卷二 九三)

十一月八日在於左大臣橘朝臣宅肆宴歌

よそのみに見ればありしを今日見ては年に忘れず思ほえむかも

(万葉集 卷十九 四二六九 聖武天皇)

我をのみ思ふといはばあるべきをいでや心はおほぬさにして

(古今集 誹諧歌 一〇四〇)

など、「それでよい」「かまわない」という程の意味で用いられている「あり」である。当該の歌の「あり」もこのように解釈してはいかがだろうか。その場合、「あの人のこと

を思い出すときは、口にしなければそれでよいのですが、しかし恋しい事よ」というようにとることができる。このように理解した上で、新撰和歌で当該の歌の前後に配された恋の歌、

あひみぬもうきも我身のから衣おもひしらずもとくる紐哉 (新撰和歌 三三六)

◇おもひ出る常磐の山のいはつつじいはねばこそあれ恋しきものを (同 三三八)

道しらばつみにも行む住の江の岸に生てふ恋忘くさ (同 三四〇)

岩のうへにたてる小松の名をよしみことにはいはす恋こそわたれ (同 三四二)

を見ると、336番の歌で、逢えなくなったのは我が身のせいだと自分に言い聞かせ、338番では、逢えなくなったあの人のことを思い出すと、自分に責任があるのだから「恋しい」と口にしなければよいのですが、しかし恋しくてたまらない、と続き、340番が、このやり場のない恋しさ苦しさを忘れたいと述べた後に、342番で口にしないままこれからも恋しく思い続けるのでしょうかという諦念を吐露する、という風に、恋の終わりに近い時期を描き出す一連の歌としての有機的な構造を読み取ることができるのではないか。

以上のことから、当該の歌を新撰和歌の文脈においた場合は、「いわなければ良いのでしようが」の意で「言はねばこそあれ」と言っているものという案を提示したい。

#### 【歌意】

あなたのことを思い出すときは、常磐の山の岩つつじではないが、口にしなければそれで良いのですが、しかしなんとまあ恋しいことよ。

339 忘れむ時しのべとぞ浜千どり行多もしらぬあとをとゞむる

【校訂】底本二句「時しのへとそ<sup>て</sup>」。新撰和歌諸本により本文の方をとる。

【他出文献】古今集 雑下 九九六

#### 【注】

〔忘れむ時〕

「忘れむ時」は、将来自分のことが忘れられるだろうその時、の意。では、忘れられる理由として何が想定できるのか。一首そのものからはあきらかにこう、とは言えないが、新撰和歌の雑の歌として直前におかれた337番の歌が死後のことを詠んでいるものであった、その次に位置しているということからは、自らの亡き後、ということになる。

一方、直後に置かれた341番の歌が明石への旅を詠んだものであることから、都を離

れてさすらう、ということが人から忘れられる理由となる。このように、当該の歌は、37番と341番の歌との間にあって、両者をつなぐような役割を果たしているものと見たい。

〔行方も知らぬ跡〕

右に記したように、当該の歌は、死去にせよ流離にせよ、自らが姿を消したあとのことを歌ったものととれる。したがって、第四句の「行方も知らぬ跡」も、自分のいなくなつた後の形見、という意味で理解できる。なお、

霜のうへに跡ふみつくる浜千鳥行へもなしと鳴きのみぞふる

（寛平御時后宮歌合 一四一 興風）

女蔵人二条、かずならぬわが身をうみのはま千鳥あとはかなくもおも

ほゆるかな、とかきて御すずりに入れて侍りけるを御らんぜさせ給う

て  
延喜御製

浜千鳥行衛もしらぬ跡なれやふみつつけらんしるべだになき

（続後拾遺集 恋三 八八六）

など、浜千鳥行方も知らぬ（なし）という類似の表現がいくつか見られ、これらの作品間の前後関係はわからないが、この表現がこの時代の和歌に普及していたことをうかがわせる。いずれも、千鳥の飛び去る方向を「行方」と言ったものであり、当該の歌でも、千鳥がいかたへか飛び去つたその後足跡を残すように、自分もどこかへ行つてしまった名残として文を残すのだ、という意味にとれる。

〔338番の歌との対応関係について〕

両歌共に、忘れた人を思い出すことを詠む。そして、一方は口にする言葉を、もう一方は紙に記す文字を取りざたする。

【歌意】

あなたに忘れられたような時に偲んでほしいと思って、浜千鳥が行方も知らない足跡を残すように、私も手紙を残すのです。

340道しらばつみにも行む住の江の岸に生てふ恋忘くさ

【校訂】なし

【他出文献】古今集墨滅歌 一一一一

【注】

〔住の江の岸に生ふてふ恋忘れ草〕

当該の歌は、すでに多くの指摘があるように、

暇あらば拾ひに行かむ住吉の岸に寄るといふ恋忘れ貝（万葉集 卷七 一一四七）という万葉集歌を貫之が利用して詠んだものと思われる。万葉集の歌の「いとまあらば」では、「いとま」さえあれば「恋忘れ貝」が拾いに行けるわけであって、「恋忘れ貝」が実在するという前提で詠んでいることになる。一方、当該の歌の「道しらば」であると、道を知らないので「恋忘れ草」を摘みにいけない、ということであって、「恋忘れ草」は手に入れようとしても手に入れられない、幻のような存在ということになる。この改変によつて、当該の歌では、恋の苦しみを忘れようとしても忘れられない絶望感を、より切なく表現することに成功したのである。そのように貫之自身が評価して新撰和歌に載せたものと考えたい。なお、初句の「道しらば」は、あるいは柿本人麻呂の泣血哀慟歌の反歌第一首目、

秋山の黄葉をしげみ惑ひぬる妹を求めむ山道知らずも（万葉集 卷二 二〇八）を踏まえたものかと思われる（本論文第一部第一章第二節参照）。道を知らないことで、求めるものところにとどり着けない悲しみを表現したものと、貫之が利用したのではないだろうか。

【歌意】

道を知っていたなら摘みにも行こう。住の江の岸に生えているという恋忘れ草を。けれどもその道を知らないから、この恋の苦しみをどうすることもできない。

341 ほんのくと明石のうらの朝霧に嶋がくれ行舟をしぞ思ふ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 羈旅 四〇九

【注】

〔舟をしぞ思ふ〕

「しぞ思ふ」という表現は、万葉集に例が多いが、それらは、

大伴宿祢家持従久邇京贈留寧楽宅坂上大娘歌一首

あしひきの山辺に居りて秋風の日に異に吹けば妹をしぞ思ふ

（万葉集 卷八 一六三二）

春日山雲居隠りて遠けども家は思はず君をしぞ思ふ（同 卷十一 二四五四）

などのように、遠く離れた対象に思いをこらすことを言う。当該の歌でも遙か沖合の舟に對して、何らかの愛着を覚え、そこへ思いをこらしていることを表現しているものと見られる。

〔340番の歌との対応関係について〕

340番の歌は、万葉集歌を利用して詠まれた新しい趣の歌であった。それに配された341番の歌は、人麻呂の作に擬せられるような、万葉集を意識させる歌である。また「住の江の岸」と「明石の浦」という地名も対のものとして意識されただろう。

【歌意】

ほのぼのと夜が明ける明石の浦の朝霧の中、島影に隠れていく船のことを思うよ。

342岩のうへにたてる小松の名を、しみことにはいはず恋こそわたれ

【校訂】底本四句「ことにはいかす」。新撰和歌諸本により改める。

【他出文献】万葉集 卷十二 二八六一 或本歌・古今和歌六帖 三〇五六

【注】

〔岩の上に立てる小松の〕

万葉集の諸注で、初二句を「名」を起こす序とするが、掛かり方については未だ詳らかにされていないようである。

平安時代に「岩の上の（小）松」は、

冷泉院の五六のみこはかまぎ侍りけるころ、いひおこせて侍りける

左大臣

いはのうへの松にたとへむきみぎみは世にまれなるたねぞとおもへば

（拾遺集 雑賀 一一六五）

のように、堅い岩にがっしりと根を下ろし、いつまでも変わらないものとして歌に詠まれ、

しらかはどのにて、いはのうへの松を

いにしへのたねとしみればいはのうへの子日のまつもおいにけるかな（実方集 三）

と、小松でありながら、すでに長い年月を経たものと見なされることもある。

さて、当該の歌の「岩の上に立てる小松の」も、どのような掛かり方で「名」を起こすのかはわからないものの、結句の「恋こそわたれ」という、いつまでも恋しく思い続けるその時間の長さのニュアンスを加える、有心の序として機能していることは言えるのではないか。

【歌意】

岩の上に立っている小松のように、いつまでも変わらず、名前を惜しんで言葉には出さずに恋しく思い続けることよ。

343 あふ坂のあらしの風の寒ければ行多もしらず侘つゝぞ行

【校訂】底本三句「寒ければ」<sup>と</sup>。新撰和歌諸本で「寒ければ」と「寒けれど」が混在するが、本稿の原則に従って、古今集とは異なる方の本文をとる。

【他出文献】古今集 雑下 九八八

【注】

〔古今集との歌句の相違について〕

当該の歌は、逢坂を行く、という言葉から、旅のわびしさを詠んだものであると理解される。ところで当該の歌は、古今集には、

相坂の嵐のかぜはさむけれどゆくへしらねばわびつぞぬる

という本文で見える。古今集のように「わびつぞ寝る」としたのでは、

月よにはこぬ人またるかきくもり雨もふらなむわびつともねむ

（古今集 恋五 七七五）

のように、旅の歌であるのに恋の雰囲気が感じられる。そのことを嫌って、「行く」という本文に改めたか。

また、古今集では、「行方しらねばわびつぞ寝る」と言い、一方新撰和歌では、「嵐の風の寒ければ：わびつぞ行く」と言う。これは、「わぶ」原因を、行方を知らないという人事に求めるか、風が寒いという自然現象にもとめるのか、という相違だとも説明できるが、なぜ新撰和歌がこのような形にしたのかはわからない。

〔342番の歌との対応関係について〕

厳しい状況におかれたものが、ひたすらその辛さを堪え忍んでいることを詠んでいる二首が対にされたか。また、結句に「恋ひこそ渡れ」「わびつぞ行く」と、これからも同じ辛さが続く、というニュアンスが込められている点も共通している。

【歌意】

逢坂の嵐の風が寒いので、行方もしらないままに嘆き嘆きして行くのである。

344 あはれてふことこそうけれ世中におもひはなれぬほだし也けり

【校訂】底本三句「世中に」<sup>を</sup>。新撰和歌諸本により本文の方をとる。なお、二句、群書類従本、岩瀬文庫本、天理図書館本等には、「ことこそうたて」とあるが、底本の「ことこそうけれ」でも解釈可能なので、本稿の原則どおり、古今集と異なる底本の本文をとる。また結句底本「ほたし也ける」。群書類従本、松平文庫本等によつて改める。岩瀬文庫本、天理図書館本等は、古今集と同じく「ほだしなりけれ」とするが、二句を「うけれ」と考へる場合、一首は二句切れとなり、結句は「こそ」の結びとは考えられなくなるので「なりけれ」は不適切ということになる。

【他出文献】古今集 雑下 九三九

【注】

〔あはれてふことこそ憂けれ〕

「あはれてふ言<sup>こと</sup>」は、

あはれてふ事だになくはなにをかは恋のみだれのつかねをにせむ

(古今集 恋一 五〇二)

の歌では、恋に思い乱れた気持ちを落ち着かせることのできる、唯一の物として詠まれていた。このことを踏まえるならば、当該の歌は、「あはれ」という言葉の持つそうした働きのために、却っていつまでも気持ちを断ち切れず苦しい思いがつづくことになる皮肉を歌ったものとして理解できよう。

今、新撰和歌中の「あはれてふこと」で始まる歌を抜き出してみると、

あはれてふことだになくは何をかも恋のみだれのつかねをにせむ

(新撰和歌 二四二)

あはれてふことにしるしはなけれ共いではえこそあらぬものなれ (同 三二四)

あはれてふことの葉ごとにをく露はむかしをこふる泪也けり (同 三三三)

あはれてふことこそうけれ世中におもひはなれぬほだし也けり (同 三四四)

となる。242番の歌では「あはれてふ事」だけが心を落ち着かせることのできるものとして考えられていたが、324番の歌では、もはやそうした効果、「しるし」もなくなつた。しかし、それでも「あはれ」と言わずにはいられない気持ちを歌う。333番の歌では、そうした気持ちのままに「あはれ」という言葉を発することに涙がこぼれ落ちる悲しみや絶望が詠まれる。最後の当該の344番の歌では、このように「あはれ」という言葉に頼つて気持ちを落ち着かせようとする行為自体が未練であり、恋の相手へを思いを絶つためには「ほだし」になつていくことに気づき、そのことを憂く思うのである。このよう

に、新撰和歌の「あはれてふこと」の歌は、一連のものとして整然とした構成を有していることがわかる。

一方、古今集では、

あはれてふ事をあまたにやらじとや春におくれてひとりさくらむ

(古今集 夏 一三六)

あはれてふ事だになくはなにをかは恋のみだれのつかねをにせむ

(同 恋一 五〇二)

あはれてふ事こそうたて世中を思ひはなれぬほだしなりけれ (同 雑下 九三九)

あはれてふ事のはごとにおくつゆは昔をこふる涙なりけり (同 雑下 九四〇)

ふるうたたてまつりし時のもくろくのそのながうた つらゆき

：年ごとに 時につけつつ あはれてふ ことをいひつつ きみをのみ ちよにとい

はふ 世の人の： (同 雑体 一〇〇二)

となる。古今集に比較して、新撰和歌が、整然とした編纂を志したものであることがここにも見て取れよう。

なお初句は、古今集では「ことこそうたて」とある。新撰和歌に収める際に貫之が歌句を改変したかと思われるが、

題しらず

兼茂朝臣のむすめ

思ふてふ事こそうけれくれ竹のよにふる人のいはぬなれば

(後撰集 恋五 九二〇)

が、新撰和歌の本文の形の歌を踏まえたものと思われるので、あるいは、「ことこそうたて」という本文が、新撰和歌以前に存在していた可能性もある。

〔世の中に思ひはなれぬほだしなりける〕

当該の歌は、古今集の雑部に収められたものであるが、第三句は「世の中を」とある。こちらの形であると、「思ひ離れ」る対象として「世の中」が示されていることになり、出家などを意識させる、雑の歌としてふさわしい本文になっている。一方、新撰和歌の本文では、「世の中に」という表現が、

世中にふりぬる物はつのにのながらのはしと我となりけり

(古今集 雑上 八九〇)

世中にしのぶるこひのわびしきはあひてのちのあはぬなりけり

(後撰集 恋一 五六四)



ほととぎす我とはなしにうのはなのうきよの中に鳴きわたるらん

(古今和歌六帖 四四三六)

よのなかにひさしきものはゆきのうちにもと色かへぬ松にざりける

(貫之集 二七九)

などと同じく、「世の中で」、あるいは「世の中において」という意味で用いられることから、この苦しい恋をするあの人との関係である「世の中」において、それでもあの人を忘れることのできない原因、ほだし、に「あはれ」という言葉がなっているのだ、という意味となり、まさに恋の歌としてふさわしいものであることがわかる。

【歌意】

一時的に気持ちを落ち着かせてくれる「あはれ」という言葉がいやです。それは冷たいあの人との仲にあつて、あの人をわすれることのできない、妨げになるものだったのです。

345 足引の山のあなたに家もがな世のうき時の隠家にせむ

【校訂】底本初句「足引みよしのの」。新撰和歌諸本により本文の方をとる。

【他出文献】古今集 雑下 九五〇

【注】

〔古今集との歌句の相違について〕

初句は、古今集では「みよしのの」とある。これを新撰和歌が「あしひきの」に改めたのであろうか。そのように想定して、新撰和歌で当該の歌の前後に配された雑の歌を一覧すると、

ほのぼのと明石のうらの朝霧に鳴がくれ行舟をしぞ思ふ (新撰和歌 三四一)

あふ坂のあらしの風の寒ければ行多もしらず侘つつぞ行 (同 三四三)

◇足引の山のあなたに家もがな世のうき時の隠家にせむ (同 三四五)

都人いかにととはば山高みはれぬ思ひにわぶとこたへよ (同 三四七)

となる。341番の歌で「明石」という都の西の地名が持ち出されたのに対して、343番の歌では「逢坂」という東の地名が詠まれる。そして、逢坂から「行方も知らず」向かう先が「足引きの山のあなた」ということになる。また、345番の歌で、「山のあなた」の家を隠れ家に行っている人が、347番の歌で都人に返答しようとする。こうした一連の歌としてみると、仮に345番の歌が「み吉野の山のあなた」であると、「逢坂」という地名の続きとしては、いささか違和感を覚えることになるだろう。そのために新撰

和歌が「み吉野」という固有名詞を排除したものと考える。

〔344番の歌との対応関係について〕

男女の仲を意識したものか、一般的な世間を言うものかの別はあるが、両歌とも「世」を離れようとすることを歌ったものである。また、「あはれ」という言葉が「憂」いのだ、という344の歌に、「憂き」時には隠れ家がほしい、と応じる345番の歌を配したとも見える。

【歌意】

山の向こうに家があればいいのに。そうすれば世間がいやなときの隠れ家にしましょう。

346 恋くゝて枕さだめむかたもなしいかにねしよか夢にみえけむ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋一 五一六

【注】

〔恋ひ恋ひて〕

「恋ひ恋ひて」は、恋しく思うことを積み重ねて、の意であるが、

恋ひ恋ひて逢へる時だに愛しき言尽くしてよ長くと思はば（万葉集 卷四 六六一）

恋ひ恋ひて逢ひたるものを月しあれば夜はこもるらむしましはあり待て

（同 卷四 六六七）

恋ひ恋ひて後も逢はむと慰もる心しくは生きてあらめやも

（同 卷十二 二九〇四）

のように、万葉集以来、「逢う」にかかる形で用いられてきたものである。そのことは

こひこひてあふ夜はこよひあまの河きり立ちわたりあけずもあらなむ

（古今集 秋上 一七六）

こひこひてまれにこよひぞ相坂のゆふつけ鳥はなかずもあらなむ

（同 恋三 六三四）

と、古今集の時代の人にも引き継がれており、すでに恋人として逢ったことのある人を、しかし何らかの事情で逢えないままに恋い慕う日々が続くことを歌う文脈で用いられている。したがって、当該の歌の初句にも、「恋しく思う日々を積み重ねつつ、またの逢瀬を待っている」という気持ちを読み取ってよいと思われる。

なお、初句は古今集では「宵宵に」とある。同集でこの歌は恋一に収められているので、

まだ相手と逢っていない段階の、片思いの歌である。実際にはまだ二人が逢ってはいないのに、何かの具合で相手の夢を見た。だから、現実には思いが通じることがなくても、せめてもう一度夢を見たくて、恋人たちが逢うという宵になることに心砕いている、というのが古今集の歌としての解釈になる。一方、新撰和歌の初句「恋ひ恋ひて」は、前述の通り、恋人と何らかの事情で逢えなくなっており、そのことを辛く切なく思う日々が重なる状態を表現したものである。そうした苦しい日々がかさなる、恋も終わりに近づいた段階の歌としてふさわしい表現と言えよう。

〔枕定めむ方もなし〕

最近の古今集諸注では、ある方角に枕を向けて寝ることで思う人の夢を見ることができると、という俗信があったとし、「どちらに枕を向けて寝るのかその方向がわからない」というように理解するものが多い。しかし、たとえば

はかなくも枕さだめずあかすかな夢がたりせし人を待つとて (小町集 九三)

はどうだろうか。この歌の「枕さだめず」を、仮にそのように理解してみると、「甲斐のないことに枕の方向を定めずに夜を明かしてしまったことよ。夢の中で逢った人に現実でも逢いたいと待っていて。」とでも訳すことになる。そうすると、上の句は、あの人の夢を見るために必要なまじないをしなかった、という趣旨となるのだが、下の句の、あの人に現実でも逢いたいと思っただけで待っていて、ということと整合しない。

この「枕定めむ方もなし」については、『余材抄』が

しきたへの枕動まくらうごきて而寝ねまぐらうごきてえず物思ふ今夜はやも明けぬかも

(万葉集 卷十一 二五九三)

という万葉歌を参考として、「輾転反側して、ふしもさだめぬをいふ」とする。なお、万葉集の歌の第二句は、現行の万葉集注釈書では「まくらとよみて」と訓むものも多いが、西本願寺本の訓が「まくらうごきて」であること、また古今和歌六帖でも

しきたへの枕うまくらうごきていねられずものおもふこよひはやあけんかも

(古今和歌六帖 三三三八)

となっていること、また、後のものではあるが、

夢にだにみえもやするとしきたへの枕うまくらうごきていだにねられず (和泉式部集 八七)

と、万葉集の歌の表現を「枕動きて」と受け取って用いた例も見られることから、平安時代にはこの歌が「枕動きて」という形で伝わっていたことがわかる。さて、万葉集の歌は、恋の思いに苦しみがらひとり寝をしていると、「輾転反側」して枕も動いてしまう、と

いうことを言う。当該の歌の「枕さだめむ方もなし」の示す内容がこの万葉歌と同じであつて、「どうしても眠ることができず、枕も一カ所に定まらない」と理解できる、というのが契沖の説明であろう。

ここで先ほどの小町集の歌を、『余材抄』の説に従って読み解いてみると、「甲斐のないことに、眠ることもできないままに夜を明かしてしまった事よ。夢の中で逢った人に現実でも逢いたいと待っていて。」となる。現実にも逢いたいと思う気持ちが高まるままに、輾転反側して枕も定まらない状態で夜を明かしたのに、結局それは甲斐のないことであつた、という趣旨の歌として、素直に理解ができるのではないだろうか。当該の歌でも、

「恋しく思う日々は、輾転反側して安眠もできない。」と理解が可能であるから、やはり、『余材抄』の説で考えておきたい。

〔いかに寝し夜か夢に見えけむ〕

周知のように、この時代の和歌的表現においては、思う人の姿が思われる人の夢に現れるとされる。当該の歌で、どのように寝た夜にあの人のことが夢に見えたのだろう、というのは、相手が自分を思っていないから普通では夢にみることもない、ということが前提でなくてはならない。もしも相手が自分を思ってくれているのなら、いつでも夢は見られるはずのものだからである。

さて、恋の終わりに近い歌で、相手が自分のことを思っていない、ということは、相手から既に忘れられているということである。「いかに寝し夜か夢に見えけむ」というのは、とりもなおさず、あの人の夢を見たい、ということであろうが、忘れられていることを知りながら夢で逢いたい、という気持ちは、深い悲しみの中での、せめてものささやかな願望ということになるだろう。

【歌意】

あの人のことを恋しく思い、またの逢瀬を待ち焦がれる日々は、枕を定めて安眠するすべもない。（眠れないので夢も見られないのだが）どのように寝た夜にあの人が夢に見えたのだろうか。

347 都人いかにととはゞ山高みはれぬ思ひにわぶとこたへよ

【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑下 九三七

【注】

「いかにと問はば」

当該の歌は、

わくらばにとふ人あらばすまの浦にもしほたれつつわぶとこたへよ

(古今集 雑下 九六二)

と、発想も表現もきわめて類似している。前後関係はわからないが、この二首があることで、この当時、都から離れ、うら寂しい生活を送っているわびしさをできることならば都の人にもわかってもらいたい、という心情を表現する歌の一つの定形として、これらが受け取られていた可能性が高かろう。ならば、当該の歌の「いかにと問はば」という仮定条件も、行平の歌の「わくらばに問ふ人あらば」と同程度に、実際にはありにくい仮定を言っていると受け取られていたことであろう。つまり、「もしも、ひよつとして、都人が「いかに」と尋ねたならば」という頼りない気持ちを表したものとして理解されたのではないか、ということである。

「晴れぬ思ひに」

第四句は、古今集では「晴れぬ雲居に」とある。古今集では甲斐国にいる小野貞樹が詠んだ歌であることが詞書からわかり、この場合の雲居は、甲斐国という雲居遙かな辺境の地ということを示す。一方、詞書をもたない新撰和歌では、雲居と表現されるような辺境の地だけではなく、都以外の土地全般に通ずる一般的な歌にしたものかと、今は考えておく。

「346番の歌との対応関係について」

346番の歌は、恋人から忘れられた人の、せめてもの願望を表したものであった。347番も、鄙にいて都人から忘れられと思っている人物の、せめて自分の気持ちだけでも伝えておくれ、という願望を述べた歌と読める。そうした情趣の類似に基づき、対にされたものか。また「いかに」という副詞が双方の歌に見えることも注意されよう。

【歌意】

都の人がもしも「どうしているのか」と尋ねたならば、山が高く雲が晴れないように、晴れない思いのためにうち沈んでいる、と答えよ。

348 つゝめども袖にたまらぬしら玉は人をみぬめの泪也けり

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋二 五五六

【注】

「つつめども袖にたまらぬ白玉」

当該の歌は、古今集においては、「しもついでもでらに人のわざしける日、真せい法しのだうしにていへりける事を歌によりてをのこまちがもとにつかはしける」という詞書を持ち、第三句の「白玉」は、法華経五百弟子受記品の説話を踏まえた表現であるとされる。法華経の内容を踏まえて一首を解釈した場合は「今日のお説教とはちがつて、私の袖には包んでも包み隠せない白玉があります…」(日本古典集成『古今和歌集』)というほどの内容となり、導師の説教を聞いた清行が小町に贈った歌として、現場の状況に応じたおもしろさが付加される。さて、当該の歌を新撰和歌のように、詞書なしで受け取る場合は、「今日のお説教とはちがつて」という要素は失われるもの、一首として成り立たなくなる訳ではない。涙のことを袖の白玉と表現することは、

あかずしてわかるるそでのしらたまを君がかたみとつつみてぞ行く

(古今集 離別 四〇〇)

たきつせもうき事あれやわが袖の涙ににつつおつる白玉

(貫之集 三〇九)

のように、この時代、ありふれた比喻であるから、当該の歌の上の句も、人に見られまいとかくしている涙の比喻として「つつめども袖にたまらぬ白玉」と言ったものと受け取ることができるからである。

かくして、恋の終わり近くに配された当該の歌は、逢うことの途絶えた人を恋しく思い、止めどなく涙を流す様を、袖の上からこぼれ落ちる白玉に喩えてうたったものとして理解される。

【歌意】

いくら包んでも袖にたまらず外にこぼれ出る真珠の玉は、あの人に逢えない悲しみの涙だったのですね。

349 ぬしやたれとへどしら玉いはなくにさらばなべてや哀と思わん

【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑上 八七三

【注】

〔ぬしや誰〕

当該の歌は、古今集では「五せちのあしたにかむざしのたまのおちたりけるを見て、た

がならむととぶらひてよめる」という詞書を持ち、初句はかんざしの玉に対して「おまえの持ち主は誰なんだい」と尋ねたものであり、また四句以下の表現も五節の舞姫たちすべてを愛おしいと思おうか、と言ったものであることがわかる。さて、当該の歌を、詞書なしで受け取る時、この一首だけを見たのでは十分に解釈のできない、表現に不足する点のある歌であると言わざるをえない。しかし、直前の348番の歌で、「白玉」が涙の喩えであったことを踏まえ、これと贈答の歌のごとくに解するならば、一首は、こぼれ落ちる涙に対して、いったいおまえは誰が流した涙なんだい、と尋ねたものとして受け取るこゝとが可能と思われる。

〔さらばなべてやあはれと思はむ〕

当該の歌の下の句を直訳すれば、「そうであるなら、すべてを「あはれ」と思おうか」となる。ここで問題となるのは、四句の「なべて」は、何のすべてを意味しているのか、ということである。普通に考えれば、上の句で取りざたされている「主」すなわち涙を流す人すべてか、「白玉」すなわち涙すべてかのいずれか、ということになるだろうが、当該の歌の趣向の中心は、涙を白玉と喩えたことであろうから、「主」ではなく「白玉」のすべて、と考えておきたい。つまり、「そうであるなら、すべての涙を「あはれ」と思おうか」と理解しておきたい。なお、

あはれてふ事のはごとにおくつゆは昔をこふる涙なりけり（古今集 雑下 九四〇）

哀てふことをにしてぬく玉はあはで年ふる涙なりけり（貫之集 恋 六二九）

のように、あはれ、と口にしたときには涙が流れるもの、という発想があつたようである。こうした発想を逆転させて、では、涙はすべて哀れなのか、と言ってみたのが当該の歌の下の句ではないか、ということである。

〔348番の歌との対応関係について〕

前項に記したように、349番の歌の「白玉」は、348番の「白玉」を踏まえて理解されるものと思われる。こうした不即不離のものとしてこの二首は対にされているのではないだろうか。

#### 【歌意】

おまえを流した主人は誰なのかと尋ねても、何も知らないとばかりに白玉の涙は答ええないのに……。ええい、それならば、誰が流した涙であろうともすべてひとしなみにかわいそうだと思おうか。

350 恋しきも心よりあることなれば我より外につらき人なし

【校訂】なし

【他出文献】不明

【注】

〔恋しきも心よりあることなれば〕

「心より」は、

みつねがもとより

草も木もふけばかれぬる秋風に咲きのみまさるもの思ひの花

返し

ことしげき心よりさくものおもひの花の枝をばつらづ忽につく

（貫之集 八四七・八四八）

のように、自分の心が原因で、の意。このことを踏まえれば、当該の歌の上の句は、

恋しきもこころづからのわざなればおきどころなくもてぞわづらふ

（中務集 二四九）

の上の句とほぼ同内容で、「恋しい、辛いことも、自分の心が原因で存在することなので」というほどの意味であると理解できる。

〔我より他につらき人なし〕

下の句は、恋しい、苦しい気持ちもすべて自分の心が原因である、という上の句を踏まえて、だから、自分につらいと思わせる「つらき人」とは、実は自分自身に他ならないのだ、という理屈を詠んだものである。

【歌意】

恋しいことも自分の心が原因で起こるのだから、自分より他に、自分を辛くさせる人はいないのだ。

351 あまのかるもにすむ虫の我からとねをこそなかめ世をばうらみじ

【校訂】底本初句「あまのすむ<sup>かる</sup>」。新撰和歌諸本により傍記の方をとる。

【他出文献】古今集 恋五 八〇七

【注】

〔世をば恨みじ〕

当該の歌は、古今集においては恋の部に収められる。その場合「世」は、男女の仲を暗



示するだろうが、雑の歌とする新撰和歌では、「世」は世間一般のことを指すと考えられる。

〔350番の歌との対応関係について〕

双方ともに、心痛める原因は自分にあると考えている趣旨の歌である。  
なお、

家に歌合し侍りけるに、あひてあはぬ恋といふことをよめる

中納言国信

あふこともわがころよりありしかばこひはしぬとも人はうらみじ

（詞花集 恋下 二六二）

は、この二首を踏まえた作かと思われる。もしそうであるならば、これは院政期における新撰和歌の享受のありかたの一端を示唆するものと言えるかも知れない。

【歌意】

海人が刈り取る藻に住む虫であるワレカラではないが、我から起こった、自分に責任のあることと、声を出して泣きはしようが、世を恨むことはすまい。

352 千早ぶるかもやしろの夕だすきひとひも君をかけぬ日ぞなき

【校訂】底本二句「かみのやしろもカの」。新撰和歌諸本により改める。底本結句「かけぬ日はなし」。新撰和歌諸本で「日はなし」と「日ぞなき」が混在するが、本稿の原則に従って、古今集とは異なる方の本文をとる。

【他出文献】古今集 恋一 四八七

【注】

〔ちはやぶる賀茂の社〕

古今集の第二句について言えば「俊成本の一部と定家本以外の諸本は「ちはやぶる賀茂の社」ではなく、「ちはやぶる神のやしろ」であり、枕詞「ちはやぶる」の使用例からして「ちはやぶる神の社」の方がおちつきがよい」（片桐洋一『古今和歌集全評釈』）とも言われる。ただし、新撰和歌に関しては、対にされた353番の歌の「男山」という地名と対応する「賀茂」という地名を含む歌である方がよいと思われる。

〔かけぬ日ぞなき〕

結句は、古今集では「かけぬ日はなし」とある。これも前項と同じく、「いまこそあれ」という係り結びを含む353番の歌と対にするために「日ぞなき」という形を、新撰

和歌が選んだものと考えたい。なお、当該の歌は古今集では恋一に配され、まだ逢わぬ人に対して、あなたのことを毎日思っていますよ、とかき口説く趣旨のものであると理解される。一方恋の終わりに位置する新撰和歌の歌では、「社」の語が

ちはやぶるかものやしろのひめこまつよろづ世ふともいろはかはらじ

(古今集 東歌 一一〇〇)

延喜御時、賀茂臨時祭の日、御前にてさかづきとりて 三条右大臣

かくてのみやむべきものかはやぶるかもの社のよろづ世を見む

(後撰集 雑二 一一三二)

などに見られるように、永遠に変わらぬというイメージを有していることから、もはや逢えなくなった人に対して、それでもいつまでも毎日思っています、と断ち切れぬことを伝える趣旨のものとなっているのではないか。

#### 【歌意】

賀茂神社の木綿襷が未来永劫毎日掛けられるように、私もこれから一日とてあなたを心に掛けない日はありません。

353 いまこそあれ我もむかしは男山さかゆく時もありこし物を

#### 【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑上 八八九

#### 【注】

〔352番の歌との対応関係について〕

「賀茂の社」と「男山」の社が対にされている。また、352番の歌の「君」と353番の「我」も対照的であるし、「ぞくなき」と「こそくあれ」も意図的な対であろうことは352番の歌の注に述べた。さらに、これからもあなたを思い続ける、と352番の歌が将来に目を向けていることと、353番の歌が過去を回想するものであることも対照的である。

#### 【歌意】

今でこそこんなざまだが、私も昔は男山の坂をぐんぐん上るように男として栄える時もあったのになあ。

354 久しくも成にける哉住の江の松は千とせの物にぞ有ける

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋五 七七八

【注】

〔松は千歳の〕

松が千歳のものである、というイメージは

よろづ世を松にぞ君をいはひつるちとせのかげにすまむと思へば

(古今集 賀 三五六)

という歌が成立することからして、古今集の当時、既に定着していたことがわかる。この松は千年、というイメージを利用した、「松」と同じ音を持つ「待つ」ことも、千年続くものだったのだ、という機知的な発想が、当該の歌の要点ということになるだろう。

かくして、当該の歌の下の句は、住の江の松が千年の寿命を保つように、「松」ならぬ「待つ」ことも、千年続く物だったのですね、といったものと理解できる。そして、待つことは千年続くものと気づいたことで、これからもずっと待ち続けなければならない、という諦念をも表現することになる。

なお、当該の歌の下の句は、古今集では「松は苦しきものにぞありける」となっている。こちらでは、今まで久しく待ってきたことだけに焦点が当たるが、新撰和歌の方では、まだまだ待つことが続く、ということの方に重心がおかれることになるだろう。これは、次の歌の注で述べるように、それを意図した改変かと思われる。

【歌意】

随分と長い間になったことです。年老いた住の江の松ではありませんが、なるほど人を待つことは「松」と同じく千年続くものだったのですね。

355 風のうへにありかさだめぬちりの身は行ゑもしらずなりぬべら也

【校訂】なし

【他出文献】古今集 雑下 九八九

【注】

〔354番の歌との対応関係について〕

これから先も思う人と逢えないまま長い期間を待ち続けることを歌った354番の歌に、行く末の不安定さを詠んだ355番の歌を対にしたのであろう。

【歌意】

風の上でありどころも定まらない塵のような我が身は、行方知れずになってしまいうそである。

356 恋せじと御手洗河にせし御祓神はうけずも成にける哉

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋一 五〇一

【注】

〔恋せじと〕

「恋せじと」は、恋などするまいと、の意。当該の歌は、古今集では恋一に配されることから、未だ逢わない段階でこんな苦しい片思いはするまい、という内容の歌として理解されていたと思われる。一方新撰和歌では、長い年月の間来ぬ人を待ってきたという354番の歌の次に配されていることから、もはや自分のことを忘れたような人を思つて、これ以上苦しみを味わいたくない、というほどの内容になるう。

【歌意】

もうこれ以上冷たくなつた人を恋い慕つて苦しい思いはするまいと御手洗川でした禊ぎを、神は引き受けてくれないことになつたらしい事よ。いつまでも苦しくて仕方がない。

357 わかなつむ春日の野べは何なれやよしのゝ山にまだ雪のふる

【校訂】底本二句「春日の野へは」<sup>原</sup>。新撰和歌諸本により本文の方をとる。

【他出文献】躬恒集 三六二

【注】

〔春日の野辺は何なれや〕

「くは何なれや」は、あるものの存在や振る舞いとは裏腹の、皮肉な現象が生じた際に、「くは」で提示されたものの存在や振る舞いの意義に疑問を投げかける表現である。たとえば、

（京に思ふ人侍りて、とほき所よりかへりまうできけるみちにとどま

りて、九月ばかりに  
よみ人しらず：一三六五詞書）

草枕ゆふてばかりはなになれやつゆもなみだもおきかへりつつ

（後撰集 羈旅 一三六六）

は、草枕を結ぶ手の上に露も涙も置き「かへる」のに、自分はふるさとに「かへる」こと

ができないことをとりあげ、手の上に露や涙が無益にも置き「かへる」ことへの皮肉を表現したものである。また、

をんなにあひてまたのひつかはしける 祭主輔親

ほどもなくこふる心はなになれやしらでだにこそとしはへにしか

(後拾遺集 恋二 六六四)

は、ある女を知らない、つまり逢うことがなかった間は恋しい気持ちもなかったのに、一旦逢ってしまうと、とたんに恋しさがつのるといふ皮肉な現象を前にして、自分の心のある若菜摘みをしている春日の野辺の景色とは裏腹に、吉野山ではまだ冬のものである雪が降っていることを取り上げ、春の行事である若菜摘みや、「春日」という地名にふくまれる「春」という言葉、あるいは春そのものの存在に対する疑義を呈したものであることになる。

なお、「春日<sup>かすが</sup>」という地名に季節の「春」を意識することについては、

いづれをかはなとはわかむふるさのかすがのさとのまだきえぬゆき

(躬恒集 三八九)

のように、「春日」という地名に季節の「春」という意味を重ねた例が、当該の歌の作者である躬恒などにも見られるように、この時代、珍しくはないものであったらしい。

〔春日と吉野について〕

吉野山と春日野は地理的に言って、いづれかの場所から一望できるものではない。したがって、作者の事実誤認や特殊な状況——たとえばこれが若菜摘みをする春日野と吉野山が同時に描かれている屏風の歌であった——でも想定しない限り、この歌を、双方の景を眼前にして詠んだ体の歌として解釈することはできない。ただし、事実誤認の歌や、特殊な状況の下でのみ成立する歌が、「玄のまた玄」である歌を集め、詞書なしで編纂した新撰和歌に入集するとは考えにくい。ならば当該の歌は、詠歌主体の視点が春日野にあつてそこから吉野山の降雪を思いやっているか、あるいは詠歌主体が吉野山の雪を眼前にしなから春日野の若菜摘みを想像しているか、のいずれかで解釈すべきということになる。さて、いずれが適切か、ということになると、語法的には双方共に優劣がつけがたいと思われる。ただ、

み山には松の雪だにきえなくに宮こはのべのわかなくつみけり(古今集 春上 一九)

と、山に雪の残る中で野辺にはいち早い春が訪れ、春一番の若菜を摘むことを言祝ぐ歌が

古今集に見られ、また、

よしのやまゆきはふりつつはるがすみたつはかすがのべにざりける

(躬恒集 二五五)

のように、春日野には、吉野山にまだ雪が降っているうちに春が訪れるものだ、という歌も見られる。こうした考えが和歌的常識になっていたとすれば、春日野の若菜摘みを見ながら吉野山の雪に思いを馳せ、眼前の景、つまり春日野への春の到来を疑う、という前者の発想は成り立ちがたいことになる。一方、後者の場合は、雪深い吉野山にあつて暦の上で若菜摘みの時期を知り、春日野の光景を想像する。そして、そんなものは、雪深い地にいる自分には無意味なものである、ということを表示したものととして理解が可能である。また、そうした我が身の不遇を嘆く歌として見れば、当該の歌が雑の部に置かれている意味も了解できるだろう。

なお、新撰和歌で雑の歌として当該の歌の前後に配列された歌と合わせてみるならば、風のうへにありかさだめぬちりの身は行ゑもしらずなりぬへら也

(新撰和歌 三五五)

◇わかなつむ春日の野べは何なれやよしのの山にまだ雪のふる

(同 三五七)

いく代へしいそべの松ははむかしより立よる浪や数を知るらん

(同 三五九)

357番の歌は、世間が長寿を祈る若菜摘みをする春と、自分が無縁であることを嘆くものであり、355番の歌の、将来への不安を述べた歌を引き継ぐ形でここに配されたと理解できる。また、357番の歌で持ち出された長寿という事柄は、359番の松の長寿の歌に引き継がれることにもなる。このように考えられるならば、やはり当該の歌は、雪深い吉野山にいる人物の嘆きを詠んだものとして新撰和歌のこの位置に収められたのだと言えるのではないか。

〔356番の歌との対応関係について〕

若菜摘みとは、

内侍のかみの右大将ふぢはらの朝臣の四十賀しける時に、四季のゑか

けるうしろの屏風にかきたりけるうた

かすがのにわかなつみつつよろづ世をいはふ心は神ぞしるらむ

(古今集 賀 三五七)

のように、長寿を神に願う行事でもあった。その若菜摘みのことを「何なれや」と言い、その意義を疑う体の357番の歌が、もう恋などしたくないという神への祈りが結局届か

ないことになってしまったと嘆く356番の歌と対にされたのだろう。

【歌意】

若菜を摘む春日の野辺はいつたい何だというのか。そんなこととは関わりなしに、ここ吉野の山ではまだ雪が降っているよ。

358 三輪の山いかにまぢみむ年ふ共尋る人もあらじと思へば

【校訂】なし

【他出文献】古今集 恋五 七八〇

【注】

〔三輪の山いかに待ち見む〕

初二句は、三輪山に隠遁した人物が詠んだ体の歌

わがいほはみわの山もとこひしくはとぶらひきませすぎたてるかど

(古今集 雑下 九八二)

を踏まえて、三輪山の麓に隠れ住む人が尋ねてくるはずの誰かを待っていることを言ったものである。なお、古今集諸注のうちには、「わがいほは」の歌を三輪明神の詠とする伝承があることに基づいて、当該の歌の初二句も三輪明神が人を待つことを言っているとするものがある。このことの当否を明確に判断することは難しいが、新撰和歌においては、当該の歌の直前に配列された雑の歌が、

千早ふるかもやしろの夕たすきひとひも君をかけぬ日ぞなき(新撰和歌 三五二)

久しくも成にける哉住の江の松は千とせの物にそ有ける (同 三五四)

恋せしと御手洗河にせし御祓神はうけすも成にける哉 (同 三五六)

のように、神社にかかわる言葉の詠み込まれたものであることからして、当該の歌に三輪明神の伝承が重ね合わせられていることを否定はできない。

【歌意】

三輪山の麓に隠れ住んでいる人はいつたいどうやって待つのでしょうか。年月を経ても尋ねてくれる人もあるまいと思うので。(私はどうやってあなたを待ったらよいのかわかりません。)

359 いく代へしいそべの松はむかしより立よる浪や数を知るらん

【校訂】底本二句「いそへの松は<sup>そ</sup>」、結句「数<sup>は</sup>を知るらん」。いずれも新撰和歌諸本によ

り本文の方をとる。なお、二句は拾遺集および貫之集の本文が「松ぞ」であるが、新撰和歌諸本では、新編国歌大観の底本である松平文庫本が「松ぞ」とするだけであり、何より注に述べたように、雑の歌としては「松は」の方がふさわしいだろうことから、新撰和歌の本来の形は「松は」であったものと見る。

【他出文献】拾遺集 雑賀 一一六九・貫之集 六四

【注】

〔幾代経し磯辺の松は〕

「幾代」の「いく」は、拾遺集や貫之集のように二句の本文が「松ぞ」である場合は、疑問詞と理解でき、「いったいどれほどの年月を過ごしてきた松なのか」ということになるが、当該の歌の場合、

いく世へてのちかわすれんちりぬべきのべの秋はぎみがく月よを

（後撰集 秋中 三一七 深養父）

と同じく、年月を多く重ねてきたことを表し、初二句は「何年もの年月を過ごしてきた松は」というほどの意味に理解できる。

なお、貫之集および拾遺集では、当該の歌は賀の屏風の歌として提示されている。それであれば、松の古木を目にし、その長寿を畏敬の念をもって賛嘆する「幾代経し磯辺の松ぞ」という本文がふさわしいと思われる。これに対して、雑の歌とする新撰和歌では、「幾代経し磯辺の松は」と、磯辺の老松を主題として提示した後、その寿命を知ることができるのは波だけであって、自分はそれを知ることができない、という老いの嘆きを述べる歌として理解するのがふさわしいだろう。

〔358番の歌との対応関係について〕

358番の歌の「年経」と、当該の歌の「幾夜経し」の類似がまずは指摘できる。さらに、358番の歌には、本歌である「わがいはは」の歌に詠み込まれた「杉」のイメージが伴うと思われるが、そのことが、359番の歌に詠まれた磯辺の松によって暗示されるとも考えられる。

【歌意】

幾代も経てきた磯辺の松は、昔から立っては寄せる波がその年月の数を知っているのだからか。

360 白玉か何ぞと人の問ひし時露とこたへてきえなまし物を



【校訂】なし

【他出文献】新古今集 哀傷 八五一・伊勢物語 六段

【注】

〔白玉か何かと人の問ひし時〕

当該の歌は、伊勢物語六段に見えるものであり、一般にはその内容を踏まえて理解される。しかし、詞書のない新撰和歌では、そうした前提なしに一首を味わうことが求められる。さて、恋の歌において「白玉」といえば、

つつめども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬめの涙なりけり（古今集 恋二 五五六）

白玉と見えし涙も年ふればから紅にうつろひにけり（同 五九九）

のように、涙の比喩に用いられるものである。そのように考えるならば、当該の歌の上の句は、恋の苦しみのために流した涙を見て「それは白玉なのか。何なのか」と人が訪ねた時、というほどの内容を示していると考えることができよう。

〔恋部の末尾に置かれたことの意味〕

当該の歌は、新撰和歌の恋歌の末尾に位置する。今、新撰和歌の恋の歌を末尾から五首示すと、

千早ふるかもものやしろの夕だすきひとひも君をかけぬ日ぞなき（新撰和歌 三五二）

久しくも成にける哉住の江の松は千とせの物にぞ有ける（同 三五四）

恋せじと御手洗河にせし御祓神はうけずも成にける哉（同 三五六）

三輪の山いかにまちみむ年ふ共尋る人もあらじと思へは（同 三五八）

◇白玉か何ぞと人の問ひし時露とこたへてきえなまし物を（同 三六〇）

となる。352番の歌で、いつも相手のことを思うことを歌い、354番の歌では、思いながら待ち続ける年月が虚しく過ぎたことを言う。そして356番では、もうそのような苦しい思いはしたくないと願うのにそれがかなわぬことを嘆き、358番の歌ではどのようなにしていけばよいのかわからぬ、とする。それを受ける当該の歌は、「白玉か何かと人の問ひし時」、すなわち、恋の相手がまだ自分のもとに来てくれていたところに死んでしまっていたらこんな苦しみを味わうことなく済んだのに、と、来ぬ人を待ち続ける苦しさに倦み、人生に絶望した心を詠んだものとして理解できよう。

【歌意】

それは白玉ですか。何なのですか、と愛しいあの人が私の涙を見て尋ねたときに、露ですと答えて私も露のように消えれば良かったのに。

361ながれてはいもせの山の中におつる吉野の瀧のよしや世間

【校訂】第四句、新撰和歌諸本には、「吉野の瀧」とするものと「吉野の川」とするものがある。本稿の原則に従い、古今集とは異なる底本の本文をとる。

【他出文献】古今集 恋五 八二八

【注】

〔ながれては〕

当該の歌を、老いの嘆きを述べた359番の歌の次に据えられた雑の歌として見る場合、初句の「流れては」は、流れ流れて人生を過ごしてきて、という意味でとることがふさわしいものと思われる。

〔妹背の山〕

この時代の「妹背の山」は、

はらからどちいかなることか侍りけん よみ人しらず

君と我いもせの山も秋くれば色かはりぬる物にぞありける（後撰集 秋下 三八〇）

はらからのなかにいかなる事かありけん、つねならぬさまに見え侍り

ければ よみ人しらず

むつまじきいもせの山の中にさへへだつる雲のはれずもあるかな

（同 雑三 一二二四）

おやのいとよくかしづきける人のむすめありけり、女のするさいのかぎりしつくして、いまはふみよませんとて、はかせにはむつまじからむ人をせんとて、ことはらのこのかみ、だいがくのしゆうにてありけり、ことはらなればうとくてあひみずなどありけれど、しらぬ人よりはとて、すだれごしに木丁たててぞよませける、このをとこいとをかしきさまをみて、すこしなれゆくままに、かほをみえ、ものがたりなどもして、ふみのてといふ物をとらせたりけるをみれば、かくひちしで、歌をなんかきたりける

中にゆくよしのの河はあせなんいもせの山をこえてみるべく

とありければ、かかりけると心づかひしけれど、なさけなくやはとて

いもせ山かげだにみえでやみぬべしよし野のかははにこれとぞおもふ

（篁集 一・二二）

などのように、兄妹もしくは姉弟の関係を表すこともある。当該の歌は、新撰和歌においては恋ではなく雑の部におかれているから、「妹背の山」も恋人の仲ではなく、右の例のような仲の好い「はらから」の関係を示していると見てはいかがであろうか。

ただし、当該の歌が恋雑部の末尾に置かれていることからすれば、恋と雑の両方の内容を締めくくる歌として理解してみたこともある。その場合「妹背の山」は、はらからであれ恋仲の男女であれ、なべて男女の間は、というようなことになるうか。

〔妹背の山の中に落つる吉野の滝〕

「吉野の滝」は、古今集の時代に

吉野河水の心ははやくともたきのおとにはたてじとぞ思ふ（古今集 恋三 六五一）

逢ふ事は玉の緒ばかり名のたつは吉野の河のたきつせのごと（同 六七三）

などから、大きな音を立てて流れるものとして考えられていたことがわかる。これを右の仲の好い「はらから」の文脈で考えるならば、大きな問題が起ることを暗示しているとも考えられようか。

〔よしや世の中〕

当該の歌は雑の歌であるから、結句の「世の中」は「男女の仲」ではなく「世間一般」の意として考えるべきであろう。

〔360番の歌との対応関係について〕

恋の苦しみのために、もっと早くに死んでしまえばよかつたと言う360番の歌を受けるような形で、361番の歌は、どんな仲良い関係でも壊れることがある。世の中とは所詮このようなものであると諦観を述べていると見てみたい。

【歌意】

流れ流れて人生を過ごしていると、仲むつまじい兄弟姉妹であれ恋仲であれ、妹背の山の中に流れ落ちる吉野の滝が大きな音を立てるように、その間に大きな問題が生じることもある。ええい、仕方が無い。これが世の中というものであるよ。

新撰和歌集終

〔初出および原題一覧〕

以下に各節の論考の初出と原題を示す。本論文としてまとめるにあたり、必要な内容の補訂と体裁の統一のための修正を行ったが、そのいちいちを注記することはしていない。

## 第一部 紀貫之の和歌創作の態度

### 第一章 万葉集の利用の方法

第一節 自作の歌に用いうる古風な表現の素材集として万葉歌の表現を求める方法

〔紀貫之に見られる万葉集の利用について〕

和歌文学研究 五十六号(和歌文学会 一九八八年)

第二節 万葉歌の表現を自らの表現として使いこなし、様々な歌を生み出す方法

〔紀貫之の和歌の表現と人麻呂の泣血哀慟歌をめぐって―紀貫之の作歌の一方法―〕

文学史研究 三十号(大阪市立大学国語国文学研究室 一九八九年)

### 第二章 漢詩文表現利用の態度

第一節 実験的な漢詩文表現の摂取―「浮き沈む玉」を例に

〔紀貫之の漢詩表現の受容の一方法〕

中古文学 五十一号(中古文学会 一九九三年)

第二節 万葉集との態度の違い―「流るる雪」を例に

〔「ながるる雪」考〕

文学史研究 三十四号(大阪市立大学国語国文学研究室 一九九三年)

## 第二部 新撰和歌に関する研究

### 第一章 新撰和歌の性格

第一節 一首のみで鑑賞に堪える、完結した歌の集成

〔紀貫之の新撰和歌編纂の意図 ―古今集からの歌句の改変―〕

国語国文 第六十四卷第十号(京都大学文学部国語国文学研究室 一九九五年)

第二節 集の構成、歌の配列による鑑賞の指示

〔新撰和歌が詞書きを持たぬことについて〕

大阪女子短期大学紀要 三十九号(大阪女子短期大学 二〇一五年) 掲載予定

第三節 「相闘」・「対偶」という配列方法の意味するもの

「新撰和歌の配列に関する一考察 ―相闘・対偶を中心に―」

文学史研究 三十六号(大阪市立大学国語国文学研究室 一九九五年)

第二章 新撰和歌の編纂の意図

第一節 天皇の徳をたたえる意識 ―春秋部冒頭の歌について

「新撰和歌における歌の解釈 ―「袖ひちて」歌の場合―」

韓国日本文化学会二〇〇一年度春期学術研究発表大会における口頭発表

第二節 規範性を重んじる姿勢 ―夏冬部冒頭の歌について

「新撰和歌夏冬部冒頭の歌について ―しぐれ詠の定位と貫之の意図―」

日本文化学報第六十二輯(韓国日本文化学会 二〇一四年)

第三節 歌集としての完成度のこと ―恋の歌の配列について

「新撰和歌巻四 恋の歌の配列について」

日語日文学研究 九十一集(韓国日語日文学会 二〇一四年) 掲載予定

第三部 土佐日記と新撰和歌からみる紀貫之の文芸観

第一章 律令官人としての歌 ―人麻呂・虫麻呂から古今集へ

「万葉から古今へ ―人麻呂・虫麻呂の流れ―」

日本文化学報第七輯(韓国日本文化学会一九九九年)

第二章 〈宮廷歌人〉の継承 ―土佐日記の態度と新撰和歌

「おさな子の死 ―土佐日記の幼児を悼む記述に関する考察―」

『大阪市立大学文学部創立五十周年記念国語国文学論集』(和泉書院 一九九九年)

第四部 新撰和歌注釈稿

序および一四四番の歌までを、「新撰和歌注釈稿(一)」(大阪女子短期大学紀要第

二十三号(大阪女子短期大学 一九九八年)と「新撰和歌注釈稿(十四)」(大阪女

子短期大学紀要第三十九号(大阪女子短期大学 二〇一五年予定)として分載した。